# 武器ノ物語

## SINoALICE
## Weapon Story

原案
ヨコオタロウ
Yoko Taro

SQUARE ENIX

# 武器ノ物語

SINoALICE

Weapon Story

# 武器ノ物語

## SINoALICE
## Weapon Story

原案
ヨコオタロウ
Yoko Taro

# 戦歌の残響

【楽器】せんかのざんきょう

戦場にて数多の兵を指揮する者。
それは振る舞い次第で、救世主とも悪魔とも成りうる者なり。

戦場にて死を恐れず、勇猛果敢に突き進む者。
其れすなわち。命の尊さを知らぬ愚か者なり。

戦場にて卑怯を賛辞と捉える者。其れすなわち。
生の重みを知る聡き者なり。

叫び。求め。欲せ。
なりふり構わず、貪欲に。
生への執着を晒け出せ。
生き残りし者こそ、真の勝者なり。

# 後悔の書



P.1
本当は怖い。
でもちゃんと受けいれます。

P.2
やり残した事は沢山あるけど、
それはこのノートに書くことで我慢します。

P.14
・あの人にきちんと想いを伝えたい
・両親が自慢できるような大人になりたい
・沢山の人を笑顔にできるような、仕事に就きたい

P.101
イ　タ　イ　イタイ　痛イ痛イ苦シイ痛イ痛イ痛イ　怖イ
　ナンデ私ガ……　代ワリニ、アイツヲ殺ス
　　　　皆殺シ　　アハハッ　　　　　命ガ欲シイ
　　　　　全テ殺ス　　シシッ。死死死　　時間ガ欲シイ

# 服従の杖

【祈祷】ふくじゅうのつえ

一人殺せば殺人鬼。万人殺せば英雄。
その摂理に異を唱える者がいた。

その男は不殺を誓い、英雄にならんとした。
だが戦場で彼の言葉に耳を傾ける者など居なかった。

男は主張し続けた。
たとえ、その身に幾億の矢が降り注ごうとも、厭わずに。

男の願いは天に届く。
空が割れ、光輝く杖が両軍の中心に降り立った。
その威光に触れた者は皆、武器を捨て頭を垂れた。

# 一　縷の願い



その魔術師の行動理念は単純明快。
ただ愛する人との再会を求め、全てを犠牲にする覚悟でいた。

その魔術師は自身の目的のため、国民全ての命を妻の亡骸へと捧げた。親友兄弟、もろともだ。

男の願いは成就する。
最後に自身の魂を妻の亡骸に注ぐと、妻は世界の理に反し復活を遂げた。

再び生を受けた女は、その身に数多の魂が宿ることに気づいた。
そして誰のおこないであるかも……
直ぐさま彼女はその魂を解き放ち、あるべき場所へと還した。
結局、男が全てを投げ出し得られたものは、
自身の死のみであった。

# 剣豪の太刀



その男は最も大切だったものを差し出した。
そうするより他に、手立てを持ち合わせていなかった。

刺し、穿ち、貫いた。
姫を脅かす存在を駆逐し尽くさんと、力を求めた。
その代償に、彼女が綺麗だと褒めてくれた声を
愛刀に捧げることすら、厭わずに。

舞い散る桜の下。血飛沫が降り注ぐ戦場。
男はあの日言えなかった言葉を反芻していた。
自らの持つ、全ての語彙を剣に捧げた男は
「愛慕を寄せておりました。」
そのたった一言さえも、口にすることはできなかった。

男の声無き叫びが戦場に轟く。
その腕には姫の亡骸が優しく抱かれていた。
「無口の剣豪が愛した者、ここに眠る。」
男は墓標に己の気持ちを綴ることで、想いを伝えた。

# 肉砕く槌



生きるため、沢山の命を口にしてきた。
誰もが疑問を抱く事なく、繰り返す摂食行動。
だが僕にとっては、特別な行為だ……

今日も食事をする。
だが、いつまで経っても先ほどまで命あった者の
口当たりに違和感を感じてしまう。
思わず吐き出してしまった食料を、無理やり口に押し込める。

僕たちが、迷い込んだ秘境。
それは動物はおろか、植物も根を張らない不毛な土地。

そんな場所にある食料など、共に遭難した家族しかいない。
「母さん。いただきます。」
僕は残された最後の食料に優しく口づけをした。

# 奪姫の代償



近隣の国々で随一の兵力を誇る王国の親衛隊。
それが男の生業だった。どれだけ多くの仲間に囲まれようと、彼の孤独がなくなることはなかった。
仲間同士で欺き合い、我先に出世しようと競い合う奴らと馴れ合うくらいならば、孤独でよいと思っていた。

やがて、自分と同じく祖国に嫌気のさした女と結ばれ、
男は孤独から解放された。
その日から男は孤独を恐れるようになった。
「たとえ追われる身になろうとも、この平穏を守りぬく」
そう決心した男は妻を連れ、祖国を出た。

家族が三人に増え、男が孤独を思い出す事は無くなっていた。
記念日に渡す贈り物は、いつも手作り。
華やかな生活をしてきたはずなのに「あなたさえいれば…」
そう言ってのけ、貧しい生活を支える妻に男は救われていた。

それは妻が身籠り、四人目の家族ができたと知った日だった。
突如開かれるドア。立ちふさがる衛兵。姫を連れ去った反逆者として射殺された男は、冷たい血溜まりに伏す。
……男は呪った。
孤独の恐怖を妻に背負わせる、自分という存在を。

# 幻覚の鎌

【長柄】げんかくのかま

少年は荒み。憤り。力を振るい続けた。
最早、誰もそれを咎めることはできなかった。
少年は略奪を繰り返し、ある日幻覚を見せると噂される鎌を手に入れていた。

その鎌を使い続けるうち、自分を力で打ち負かす存在に少年は出会った。その男は歴史に名を残す英雄であった。

「いつも思い浮かべろ。最強の男の太刀筋を。俺はお前の想像する、その遥か先にいる。」呼吸一つ乱さずに、見下す男。
少年は敗北の悔しさから、周囲に力を振るうのではなく、
武術の道に力を注ぐようになっていた。

やがて少年はその英雄に一矢報いるまでに成長する。
少年の鎌が英雄に触れた瞬間。英雄の姿が霧散した。
自分が見た英雄の姿は幻覚だったと悟る少年。
そして英雄に身も心も鍛えられた、少年はその男の系譜を受け継ぐ英雄となった。

# 拷問書誌



探究心の強い少女は魔書を読み耽り、自殺の手法を思案する。
最も美しい死に方はどのようなものだろう？
最も醜い死に方はどのようなものだろう？

最も幸せな死に際はどのようなものだろう？
最も残酷な死に際はどのようなものだろう？

最愛の人の臓物で首を絞められ、窒息死。
象に頭蓋を踏み割られ、圧死。
全ての指と瞼を切り落とされ、衰弱死。
蚊で満たされた部屋に幽閉され、失血死。

この魔書には全ての者の死に様が記録されている。
探究心の強い少女は魔書を読み耽り、
今日も自殺の手法を思案する。

# 僧侶の錫杖



◆私の幸福追求譚◆
祈るだけでいいなんて、お手軽。
今夜も祈り明かしちゃお！

◆私の幸福追求譚◆
この壺を置くだけで幸せになれるんだって。
不思議～。なんて便利！

◆私の幸福追求譚◆
神って万能！
この勢いで、全部の神を崇めちゃえ！
いろんな戒律があって面白い！

◆私の幸福追求譚◆
我、長き時を経て、真の幸福を悟りし者なり。
幸福とは即ち、この身を縛る戒律。
更なる幸福を求め、入信を続行する……

# 闇へ導く傀儡



おなかすいたな。
おかしたべたい。あめをなめたい。
すきなだけたべれる「お金の自由」がほしい。

おままごとしたい。
でも、ぱぱにいわれるおしごとはしたくない。
すきなだけあそべる「時間の自由」がほしい。

だれにもあいたくない。
ぱぱにも、おしごとのひとにもあいたくない。
いつでもひとりでいられる「人の自由」がほしい。

永遠に続く闇。無限に広がる真っ暗な世界。
お腹も空かない。無限の余暇。誰にも邪魔されない場所。
ココハ闇。何処マデモ続ク、自由ナ世界。

# 純愛の塊

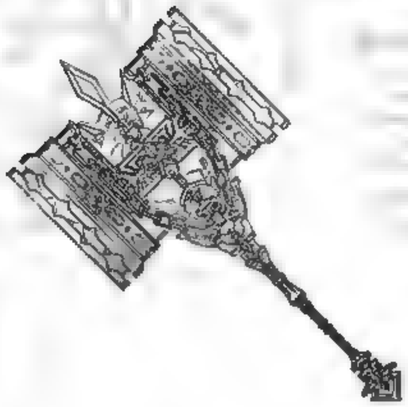


ドクドク。ドクドク。脈打つ鼓動。
私が一番欲しいもの。
あなたの一番大切な場所。

彼は何度も拒んだけれど、数々の苦難を乗り越え
最後には手にする事ができた。
彼の全てを手にする事ができた。

手にした彼の心は暖かく、私の心は満たされた。
しかし無理矢理に手にしたのが悪かったのだろうか？
すぐに彼は冷めきってしまった。

私は手を尽くした。
冷めきった彼の暖かさを取り戻そうと、毎夜、愛を注ぎ続けた
私の愛が足りなかったのだろうか？
いつしか彼の心は腐臭を放ち、溶け崩れてしまった。



# 怨念の大槌

【打撃】おんねんのおおつち

ある日、男は古戦場で
朽ちてなお異彩を放つ大槌を手に入れた。
その大槌を振るうと、非力な男であろうと大地を揺がす程の力を手にすることができた。

男はその大槌と共に武功を挙げ続け、いつしかその技量は敵国で恐れられるようになった。
だがその頃から、殺した者の怨嗟が夢に現れるようになり、
やがてその声は日常でも聞こえるようになってきた。

心を蝕まれた男は怨嗟が耳に届かぬよう、耳を切り落とした。
しかし、その怨嗟は脳内に響き続け、
逃れることはできなかった。
ついに男は業苦から解放されるため、
弟子に大槌を譲り渡すと、頭蓋を砕くよう命じた。

しかし、男のように心が強くない弟子は、怨嗟に一瞬のうちに飲み込まれ、往生した。周囲の者は恐れ慄き、誰も大槌を手にしようとしなかった。そして死ぬことができなかった男は、いつまでも怨嗟に苦しみ、のたうち回ったという。

# エルフの古弓



あるところに、大層話し好きなエルフの男がいた。
しかし、彼は話を誇張するため、そのエルフの話を聞く者は居なくなっていた。

ある日、その男はどれだけ喋ろうと、楽しそうに話を聞く人間の女と出会った。その人間は、時々妙な間で相槌をするが、
それでもいいと思った。

二人は結ばれ、やがてエルフは気づく。
妻がいつも下らぬ話を聞いてくれるのは、耳が聞こえなかったためだと。それから百年の時が過ぎたが、相も変わらず妻に下らぬ話を聞かせ続けた。

エルフは知っていた。とっくに妻が事切れていることに。
だが話しかけることをやめなかった。そうでもしないと気を保てなかったのだ。それから更に時が経ち妻が朽ち果てると、
話し相手のいなくなった男は狂い、妻の後を追った。

# 闘争の渇望



躰を揺さぶる地響きが好きだ。
怒号が賞賛に変わるその渦が好きだ。

怒声と剣戟のざわめきにかき消されないよう
正義を叫ぶ咆哮が、この身を揺さぶるとき。
あぁ、このために生きているのだと思い知る。

この躰を濡らす血潮が好きだった。
仇の正義を力で払う主人が好きだった。

戦のない今、槍は正義の対峙を待っている。

# 怪鳥の竪琴



その日。美しい声で囀る怪鳥に、王は心を奪われました。
そして王は「怪鳥で竪琴を創らせよう」そう思い立ちました。
翌朝、腕の立つ鍛冶屋の兄弟に多額の報奨金を約束し、
提琴を創るよう命じました。

怠惰な兄と、勤勉な弟。
性根は異なれど、彼らは仲睦まじく暮らしていました。
しかし、多額の報奨金が、容易く二人の仲を引き裂きました。
兄が寝ているうちに、弟が王の命を遂行してしまったのです。

嬉々として、怪鳥の亡骸を見せつける弟。
兄は思わず、手に持つ包丁で弟を一突きにしました。
兄は欲に目がくらんでしまったのです。
そして兄は、弟の死を怪鳥に擦りつけ、怪鳥の亡骸を王の元へ持って行きました。

やがて、竪琴が創られました。
そして王が竪琴を奏でようとした時です。
竪琴は歌い出しました。
「その兄はー、悪しき心に囚われー、弟を殺したー」
王は全てを理解し、兄を打ち首にしました。

# 万戒の魔書

窮地に立たされた魔法使いは禁書へと手を伸ばす……
とにかく時間が惜しかった。
だからその少年は魔書が掲示する、契約条項を
皆まで聞かず、契約を交わしてしまった。

掟一．決して躊躇うべからず。
掟二．決して諦める事なかれ。
掟三．決して休む事なかれ。

掟。掟。掟…………
掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。
掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。
掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟……

続いて第千項……
掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟。掟……
以上が我の力を求めし者が背負う掟。
背きし者に訪れるは〝死〟。あるのみ。

# 決起の杖



ガフィア(f.1087)『決起の演説Ⅰ』
どれだけ正論をかざそうとも、相手に届かない。
どれだけ強く鼓膜を揺さぶろうとも、互いの正義は届かない。
それが見てきた景色の違いだ。

ガフィア(f.1087)『決起の演説Ⅰ』
ならば、暴力という共通言語で語り合おう。
正しきは勝どきを挙げし者だ！

ガフィア(f.1087)『決起の演説Ⅱ』
民の命を守るが王だというのであれば、
余は王ではないのであろうな。
しかし、余は王である以前に余であるのだ。
貴様らは余に忠義を誓ったのであろう？

ガフィア(f.1087)『決起の演説Ⅱ』
勇ましき、ゴルワールの民よ！
いざ！　命散らせど、語り継がれる無謀な戦とするのだ！
余に勝利の美酒とやらを味合わせてみよ！

# 占 星の魔石



「あなたは知っている。初めてだけど知っている」
脳裏に響く嫋やかな声。
あぁ。この声すらも私は知っている。

初めての任務。
いつしか私は禁忌とされる遺跡の最深部に来ていた。
触れてはならぬと知りながら、
自然と私の手はその石碑に伸びていた。

伸ばした指先……
触れた石碑が映し出したのは思いもよらぬ光景だった。
それは、どこか懐かしく、だが記憶にない風景であった。

宿敵と手を取り合う私。
きっとこれは未来の姿。抗いようのない未来の予知夢。
これから私に訪れる未来に、身の毛もよだつ思いがした。

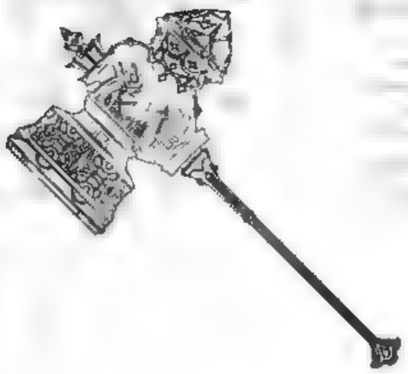
# 卑劣の刃

残念。人質も返さないし、お前も殺す。
よかったなぁ。あの世で永遠に仲良くできるぞ。

誰がいつ、お前の決めたルールに従うと言った。
馬鹿正直に生きるんじゃなく、もう少し賢くなれよ。
まぁ。そんな機会なんて無いけどな。

嘘。裏切り。変装。腹黒。捏造。姑息。
欺瞞。欺き。虚飾。ウソ。八百長。卑劣。
なんと言われようが構わない。

卑劣。それは、私の心の闇。
卑劣。それは、闇で生きるための剣。



# 眷属の大槌



私は眷属。
ただ貴方の命に従う凶器なり。

私は眷属。
主人の命とあらば、
寝息を立てる者であろうと躊躇はしません。

私は眷属。
主人の命とあらば、老いも若きも平等に屠りましょう。

「……承知いたしました。」
脳裏に響く大鎚の命に了承の意を示し、
男は主人を返り血で染めた。

# 追跡者の弓



「君がどこにいても、必ず見つけ出すから」
職を転々とする女の身を案じ、探し出しては手を差し伸べた。

「君がどんな窮地に立たされたって、必ず守り抜くから」
卑しい目をした男から守る為、彼女に近づく者を払い続けた。

「君が望むなら、この命だって差し出そう」
自身の想いの深さを伝える為、彼女へ贈り物を送り続けた。

その男は自身の献身に陶酔していた。
そして、女が自身に向ける感情を理解できていなかった。
だから衛兵に連行される際も「この弓に誓う。必ずまた会いに行くと！」と叫び、愛する女を震え上がらせた。

# 儀式の槍

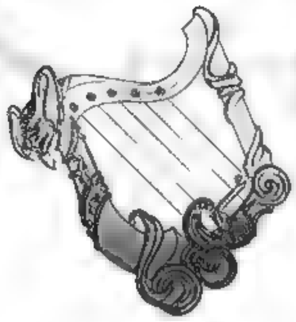
【長柄】ぎしきのやり

ある村に有名な女がいた。
村のしきたりに対し、一人異を唱え、
独自の価値観で生きる女を村人たちは差別し続けた。
女は気づいていた。狂っているのは自分だと。
だが、生き方を変えることはできなかった。

いつか自分を取り巻く世界は変わってくれるはずだ。
そんな淡い期待を胸に女は、儀式を邪魔し続けた。
だが、唯一の肉親である祖父にも差別の目が向くようになると
「これ以上迷惑を掛けられない」と自らの行いを改めることにした。

自らの正義を貫くことができぬ苦痛に、彼女は苛まれ続けた。
やがて彼女は気づく。
「世界は変えられぬが、己のあり方は変えることができる。」
ということを。

その村では、成人を迎えた者は老いた同胞を手にかけ、
その骸を食らうしきたりがあった。
彼女は、吐瀉物を撒き散らしながら、儀式を成し遂げた。
女は自身の倫理観が崩れ落ちる音を聞きながら、
ようやく村に打ち解けられた安堵感に酔いしれた。



# 詩人の竪琴



その男の言霊にはいつしか魔力が宿るようになっていた。

その男は詩人であった。
そして、卑劣な趣向の持ち主でもあった。

男が一言吟じると、どれだけ抵抗しようと、
たった一言で大人しくなる。
それがたまらぬ快感であった。
そして、自由を奪ったその耳元で、これから行うことを囁き、
啜り泣く姿を見ることが至上の愉悦であった。

その男は白状させた痴態を詩に起こし、
町中に響くよう、歌に乗せ広め続けた。
その男の趣味は他者の秘密を広めることだったのだ。

# 権力の王笏

【祈祷】けんりょくのおうしゃく

その国にとって、王とは唯一の存在だった。
民にとって、崇めるに足りうる存在は始祖王のみであった。

始祖王亡き今、民が指示を仰ぐは彼の象徴。
すなわち彼の杖だった。

その杖を掲げる者がいた。
それを持つ者の思想など、誰も意に返さない。

たとえ私利私欲に塗れた、独裁者であろうと。
民は従順に付き従った。

# 必要悪の剣



それは、英雄にも大罪人にも持ち主がいた。
その剣にとって善も悪も関係のないこと。
ただ、持ち主の感情に共鳴し、力を与えていた。

だから、平和を願う少年がその剣を手にしたとき、
世界に平穏が訪れることは決まっていたはずであった。
しかしその剣が二振りあり、もう一方が悪の元へと渡っていたとしたら、世界はどうなるのだろうか。

衝突し続ける正義と悪。
物語は予期せぬ形で終焉を迎える。
戦いの中、少年は理解してしまったのだ。
この世に悪が無くては、成り立たぬものもあるのだと。

少年は悪を打ち倒した後、二振りの剣を一つに打ち直させる。
そして世界の均衡を守る為、全ての罪を背負う優しき悪として
その生涯を捧げたのだった。

# 強者の大槌

【打撃】きょうしゃのおおつち

あるところに世界から祝福される老人がいました。
世界は、あの手この手で老人の人生に彩りを添えようとしていましたが、一向にそれらが実る様子はありませんでした。

世界は鬼を創造し、
それを打ち倒す者を老人へ授けようとしました。
しかし、世界の理に背くように、
老人の生活に変化は訪れませんでした。

数日後、鬼退治を済ませた老人は、山へ芝刈りに行きました。
風の悪戯で握り飯が転げ落ちた時も、老人は冷静でした。
すぐに力比べが好きな熊を殺し、代わりの昼食としました。
そして夕暮れ時、畑にやけに大きな蕪がありましたが、
片手で引き抜きました。

そんな生活が何年か続き、
いつしか世界は老人の人生に介入することを諦めました。
その頃には老人にまつわる
幾つもの武勇譚が作られていましたとさ。

# 農民の弓



俺は農民になるんだ。父さんが必死に守った小さな農園。
場所も悪く、大した作物も実らないけど。
小さな頃から遊び場だったそこには愛着があるんだ。
それに、兄さんが街に出るなら、俺が守ってやらないとな。

悪いな。任せたぞ。
いずれ立派な医師となって、この村の医師不足を解決してやる。
しかし、あと十日も無いんだな……
何年も前から覚悟はしていたのだが、
やはり長年生まれ育った故郷を離れることは寂しいものだ。

二人は肩を並べ、ゆっくりと村はずれの平原へと向かう。
「まぁ叶えるなら、来世だな。」そう呟くと、
まるで今生の別れでも交わすように兄弟は抱き合う。
揺れる大地。響く怒号。
二人が見据える先には夥しい数の兵が押し寄せていた。

兄弟は精一杯の強がりを叫ぶと、
一人でも多くの村人を守るため死地へと向かう。
敵の戦力はこちらの千倍。
兄弟はその戦の結末を知りながら、
波濤の如く押し寄せる軍勢に立ちはだかった。

# 偽善者の施し

【長柄】ぎぜんしゃのほどこし

どうしたんだい？　そんなに泣いて。
おじさんに話してごらん。おじさんは弱い者の味方だ。
どんな願いだって叶えてあげる。

なになに？　それは酷い親だなぁ。
それならおじさんが、プレゼントしてあげよう。
その代わり、おじさんの言うことをちゃんと聞くんだぞ。

それじゃあ約束だ。君が寝る前に、窓の鍵を開けておくこと。
でないとプレゼントしてあげられないからね。

どうしたんだい？　そんなに泣いて？
なに？　頼んだことと違うって？
だって君は言ったじゃないか。パパなんか死んじゃえって。

# 割実の提琴



ある日の選択を後悔する男がいた。
その男の元に、翼を持つ者が現れた。
「汝選びたまえ。再選択したい、後悔の記憶を。」
その問いかけに男は淀み無く答えた。
それは、あの日女から投げかけられた質問の返答だと。

男は妻を得たが、その代償に、生涯を捧げると誓った
音楽の道を諦めることになった。
それが妻との約束だったからだ。
しかし、生きがいを失った人生に味気はなく、男は後悔の念に駆られ続けることとなった。

男は何度も何度も翼人に願い、自分の選択を変え続けた。
しかし、男の望む生活を送ることは叶わず、
男は自然とある境地へとたどり着く。
それは全ての始まり、この世に生を受けた時点で間違っていた
ということであった。

「愚かなり。努力せず、己の人生を後悔するとは……
そんな者が最後に望むことなど皆同じだ。」
悪魔は幾度となく繰り返されてきた、懇願を受け入れると、
男の魂をその提琴の贄とした。

# 混沌たる欲望

溶ける。溶ける。夜の闇。
落ちる。落ちる。心の深淵へ……

この身に巣食う、邪な想い全てを
この本へ吐き出そう。
そうすれば、アナタの目に映る私はきっと清らかなまま。

反吐が出そうなほど甘い言葉。
背筋が凍りつくほど悍ましい願望。
背反する想いだろうと、構わず全て。
アナタに抱く感情を吐き出そう。

幾重にも書き綴られたアナタへの想いで
全てのページは真っ黒に。
その本に込められたのは狂気。
欲望に欲望を混ぜ、混沌と化した狂気。

# 見習いの杖



○ギルドの集会所・酒場(夜)
見習い
「薬草採りなんて簡単な依頼ですう、皆んなの手を煩わせてしまって……ごめんなさい。」

○ギルドの集会所・酒場(夜)
ギルドマスター
「馬鹿。俺たちもそうやって周りに迷惑をかけて今があるんだ。誰だって最初っからなんでも出来るわけないだろ。」

○ギルドの集会所・酒場(夜)
ギルドマスター
「お前をこのギルドに置いているのは戦力としてじゃない。勘違いするな。」

○森・自宅への帰路(夜)
ギルドマスター
「皆楽しみにしてるんだ。お前が一人前の魔術師となり、共に背中を預け合い、戦う日をな。」

# 坑道の宝箱

【魔具】こうどうのたからばこ

その昔、他国にまで名を轟かせる腕自慢の兄弟がいた。
彼らは、病気の母親を救うために、村の酒場で聞いた冒険者の噂を頼りに、友を引き連れ洞窟へ宝探しに赴いた。

彼らを待ち受けていたのは、数々の試練。
次々に友を亡くすが、兄弟だけは最深部に辿り着く。
喜び勇み宝箱を開ける兄弟。彼らは腕は確かであったが、冒険者としては未熟であった。それゆえ、なんの警戒もなく、宝箱を開けてしまった……

突然高笑いを始める兄。
弟が異変に気づいた時には、時すでに遅かった。
肩を揺さぶるも、壊れたように、笑い続ける兄。
宝箱から立ち込める臭気は彼を包み込み、肝を冷やした弟は急いで、元いた道を駆け出していた……

足をぬかるみに取られ転倒する弟。
気づけば、その手を血に染め、自身の生も終えていた。
それからというもの、その遺跡の入り口には冒険者に
「不用心に宝箱を開けるな」そう忠告する亡霊が現れるようになったという。

# 誓約の短剣



求められ、欲され、強いられて。
ボロキレのように扱われる。

温かみもなく。されど、冷たさもなく。
ただ無感情に。何度も何度も……

ただ都合よくあらんことを強いられて。
そぐわなければ、力ずく。

だから私は心を閉ざし、
主の道具として生きる事を誓ったのだ。
暴力に屈し、誓わされたのだ……

# 殺傷器具



その肉塊はあまりに完成されていた。
自分と同じ嗜好を持つ者が創り出したであろう作品。
同業者だからこそ分かる鮮やかな切り口。
脳に電流が走るより速く、嫉妬の念に囚われた。

悔しい。悔しい。悔しい……
ただひたすらに悔しかった。
だから私はそれを模すことができる凶器を求めた。
技量を求めた。

どれだけ優れた凶器を用いても、
どれだけ腕を磨こうと追いつけない。
幾度人を殺め続けようとも、あの日見た肉塊に及ばぬことは
他でもない、自分が一番理解していた。

一合で理解できた。目の前に立つ男はあの肉塊の作者だと。
ぐしゃり。ぐしゃり……グシャッ。グシャ。グシャ。グシャ。
「あぁ。なんて美しい……」
気づけば女は追い求め続けた肉塊へと姿を変えていた。

# 災いの弓



その弓に込められた願いを、知る者は最早いない。
その弓が生む憎悪の連鎖は、どこまでも争いを肥大化させるため、いつの頃からか災いの弓と呼ばれるようになった。

その弓は停戦を告げるため、どこまでも遠く矢を飛ばせるよう造られたモノだった。「下らぬ戦を終わらせよう。この戦はたった一つの思い違いが生んだ、必要の無い争いなのだから」
そんな平和の願いに応えるため、造られたモノだった。

その弓にとって初陣の日。
集まった群衆が見守る中。
放たれた矢は想像を遥かに超え、疾く、高く、戦場を駆けた。

「そろそろ和平の文が届く頃ね。
兵は納得しないでしょうけど平和なセカ……」
誰よりも平和を願うもとに突如舞い降りた死神の矢。
敵国の宰相は妻の頭蓋に突き刺さる矢を引き抜くと、憎悪に震える身を制し、非道な手口を許すな。と皆殺しを命じた。

# 竜化の鎌

【長柄】りゅうかのかま

その顎は決して獲物を逃さぬ刃となる。

その鱗は決して砕けぬ堅牢な盾となる。

その瞳には決して折れぬ信念を宿す。

一度握れば、人に戻れぬ呪いを付与する鎌。
それは全てを投げ打つ決意に呼応し、竜の力を授ける。

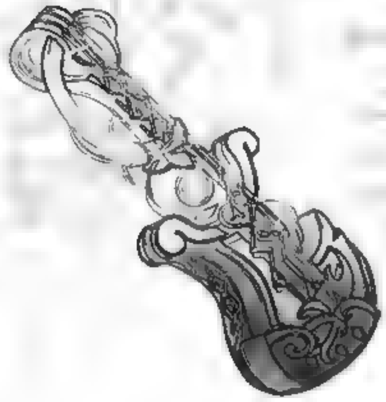
# 運気の天秤

その女は幸運だった。望めば全てが叶う満ち足りた生活。
彼女は己が人生の勝者だと疑わなかった。
ひょんなことから手にした魔道具。
それに願えば叶わぬことはなかった。

その天秤は対価も無く、彼女の望みに応える。
願う度、ひとりでに傾く天秤を始めは不思議に思っていたが、
何度か望みを叶えるうち、やがて彼女はそれを気にする事は無くなっていた。

やがて彼女は気まぐれに、全てを己が物にしたいと願う。
呼応するように、大きく傾く天秤。
転げ落ちたそれを追いかけ、路地裏から出た時。
不運にも横切った馬車に彼女は轢かれ、命を落とした。

彼女はついに知る事はなかった。
手にした天秤は所持者の生涯の運気を前借りし、
願いを叶えるものだったのだと。
だから運気を使い果すその時も、
己の幸運を疑う事は無かった。





# 封戒の水音

彼　を　愛し、愛され、一つになりたい。

彼　と　即刻、生涯、添い遂げたい。

彼　に　溺れ、貪られて、混じり合いたい。

彼　の　喜び、苦しみに、飲み込まれてしまいたい。

# 魔族の腕



「おい、ちょっと今日付き合えよ。イイ話があるんだ。」
悪友のにやけた顔を見てわかった。ロクな話じゃない。
「丘の上の金持ちの家があるだろう？　あの一家、爺さん一人を残して蒸発しちまったらしいぜ」裕福に見えてその実借金を抱えた一家が夜逃げでもしたのだろう。よくある話だ。

友人の計画はこうだ。
今晩、件の家に忍び込んで残された金品を盗み取る。年寄り一人が住む家で、今ならやりたい放題ってわけだ。やれやれ。と思いつつも結局付き合わされることとなった。実際こんなしょぼい窃盗を繰り返して僕らは小銭を稼いでいた。
僕も友人も逃げ足の速さには自信があった。

夜になり、僕らは窓から家に忍び込んだ。
鍵を壊すつもりでいたが、窓の鍵は空いたままだった。
年寄りの注意力などこんなものだろうと思う反面、ほんの少しだけ嫌な予感もした。
家の中を散策すると、荒れた様子もなく、まるで昨日まで一家全員で普通に暮らしてたかのように綺麗なままだった。

そして僕らは図書館のように大きな書庫に辿りつき、別々に本棚を漁り始めた。その時だった。「ドーン」というものすごい地鳴りが起こった。そして僕はすぐさま友人のいた本棚に駆けつけると、そこにあったのは一冊の本だけだった。
僕も怖くなり何も盗らずにその家を後にした。
あれから二週間、まだあいつとは会っていない。

# 不倶戴天

【祈祷】ふぐたいてん

不倶戴天と言える存在がいた。
家柄。地位。そして、好きな男も奪われた。
女は決意する。憎き仇から、全てを奪うと。
そして執念深い女は、ただ殺すのではなく、
最も苦痛を与える殺し方で仇を討つ事にしたのであった。

やがて女は、仇を杖に閉じ込めることで復讐を果たす。
ただ暴力で命を奪わなかった事には理由があった。
魔術師である彼女は、全ての魔力を失う苦痛が、
想像を絶することを理解していた為だ。

女は魔術を使うため何度も戦場へ向かった。
出し惜しみなく魔力を使い、敵を打ち滅ぼし続けた。
いつしか、彼女と共にいつも傍にある杖は有名になっていた。
ところが、志半ばで女は討ち死にしてしまうのであった。

「私の勝ちです」死に際にそう杖から声が聞こえたような気がしたが、それは
空耳だったのかもしれない。
葬式の日。
親族は女が片時も離さなかった杖を大切な物だと勘違いし、
棺に納めた。不倶戴天の敵と共に、
死後を過ごす苦痛は想像を絶するものだろう……

# 輪廻の宝珠

【魔具】りんねのほうじゅ

ここには最早、何も無い。
暗く閉ざされつつある私たちの暮らした世界。
最後の瞬間。私の心を埋め尽くしたのは。あの人の顔。
困ったようで。泣きそうな。私にだけ見せる笑顔。

私は良かったのに。
あなたと一緒に永遠に広がる闇の中に飲まれていく。
それも幸せだったのに……

どれだけ手を伸ばそうとも
あの日には戻れない。それならば……

結局、どれだけ抗おうが世界は私を受け入れた。
あの人が創ったのは偽りの世界。歪な場所。
だから私は。あの人にもう一度文句を言うため。
再び生へと手を伸ばした……

# 管理者の大槌

【打撃】かんりしゃのおおつち

<報告 5月7日15時33分>
闘技場にて、無名の挑戦者が優勝した模様です。
また王者をわずか12秒で倒したとのことで、何者なのか調査を実施します。

<報告 5月7日18時08分>
出場者名簿から挑戦者は昨日まで一般兵士であると判明しました。ただ見慣れない武器を使用していたようです。
引き続き調査を実施します。

<報告 5月8日11時47分>
使用した武器は登録に該当しないものでした。
対応方法はどうすればよいでしょうか？

<回答 5月9日09時32分>
こちらでフローに従い処理します。

<報告 5月9日10時15分>
該当の武器の削除を確認し、
また挑戦者の王座剥奪と3ヶ月の出場停止処分も実施しました。
以上にて本件は完了とします。
対応ありがとうございました。

# 恨みの呪銃



この世に生を受けた時からずっと、奴隷として生きてきた。
その生涯に自由などなく、許可がなければ、息を吸うことさえできなかった。

何も考えないように生きてきた。
ただ命じられるがまま、課せられた役務をこなし続けた。
その人生は息がつまったが、生きるとはこういうものだ。と、どこかで納得していた。

だから自分の飼い主を正義感から打ち取り、私に自由を与える男を許せなかった。「これから自分の生き方は自分で決めろ」と唐突に突き放す、その行為が、今までの人生を愚弄するようにしか思えなかったのだ。

だから自由を手にし、初めて行った行為は殺害だった。
沸き起こる憎悪の感情。激しい衝動に突き動かされる体。
気がつけば、横たわる飼い主の懐から銃を抜き取り、解放者を撃ち抜いていた。

# 追及者の魂

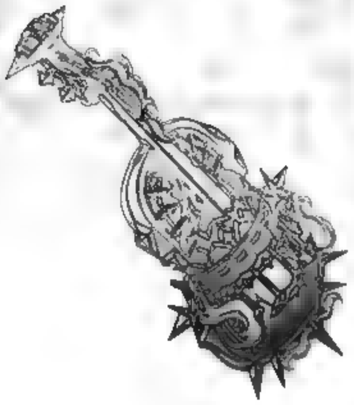
【長柄】ついきゅうしゃのたましい

あるところに妥協を許さぬ男がいた。その男は隊長の地位にありながら、自身の理想と程遠い部隊を見捨てていた。
彼は理想を部下に押し付けることは無駄な事だと考えていたのだ。

彼はよく理解していた。
ほとんどの人間は、彼のように真剣に修練に打ち込むことができず、楽な道に逃げるものだということを。
だから彼にとって己の槍術を突き詰めること。
その個人で完結することができる物事に熱を注ぐことは
当然至極のことだった。

やがて男の暮らす国は、鉱物資源をめぐり隣国と戦争状態となった。はじめは拙いながらも、男を中心に連携を見せる部隊。
しかし、修練不足の部隊は前へ突き進む男に着いていく事ができず、いつしか男は部隊から孤立していた。

孤独な戦いの中、己の槍術が理想に近づくのを感じながら、
男は死を恐れず槍を振り続ける。それはまさに一騎当千と言える活躍だった。
しかし、練度で勝る敵国の弓兵の連携に為す術無く、男は倒れる。死してもなお槍を握り続けるその姿に、心を打たれた戦神は、彼の魂を愛槍に封じ込めると、彼に理想を追い続けることを許した。



# 虚妄の提琴

♪～
Ein Männlein steht im Walde ganz still und stumm,
es hat von lauter Purpur ein Mäntlein um.

Sagt, wer mag das Männlein sein, das da steht im Wald
allein mit dem purpurroten Mäntelein?

Das Männlein steht im Walde auf einem Bein und
hat auf seinem Kopfe schwarz Käpplein klein

～♪

……次は兄様の番ですよ？
ねぇ。兄様。にいさま、ニイサマ。
早く兄様の歌声を聴かせてくださいな。

# 全知の書



搾取されるだけの人生を嘆く少年がいた。
彼の両親は真面目であったが、
領主の気まぐれで命を落とした。
だから彼は、世を正し平等な世界をつくろうとした。

そんなある日。
彼の元に全知が記されているという魔書を
譲り渡す者が現れた。
読めない文字ばかりであったが、少年は懸命に学び続け、
やがて全ての文字を読むことができるようになった。

だが、まだ全知を手にしたわけではなかった。
少年は文字を読むことができたのだが、その意味までは理解することができなかった。そして時は流れ、少年は大人になり、やがて恋をし、家族を手にした。

その頃になると、彼は全知を理解することができた。
全知を手にした少年は絶望する。そう。少年は理解したのだ。
この人間が溢れる世界など、いくら努力したところで平等になるはずがないということを。

# 束縛の杖

【祈祷】そくばくのつえ

笑顔は万病の薬。というらしい。
面倒な手段を使わずに、様々な病を癒せるのであれば
是非習得したいものだ。

早口言葉というものを習得してみた。
さっそく被験体に試したところ、
怯えているように見えた。なぜだ。

喜劇というものを暗記してみた。
今日始めて暗唱して見せたが
被験体は安らかな寝息を立てていた。なぜだ。

「人を笑わせるには、ちゃんと気持ちを込めなさい。」
彼の助言を踏まえ再検証をしたが、結果は同じであった。
気持ちなら込めている。
「一刻も早く笑え。」と……

# 異世界へ続く鏡

【魔具】いせかいへつづくかがみ

無限に続く合わせ鏡。
彼は夢ミル。遠いどこかの異世界ヲ。

此処ではない場所ならば。
きっと自分が輝く場所が在るハズだと。

彼は鏡の中へと歩みだす。
その先ガ何処かも知らぬママ。

彼は自身の無能を否定する。
きっとソレは死ぬまでズット。
認めてしまっては、コワレテしまうカラ……

# 偽りの勝者



瓜二つの顔を持つ双子の兄弟がいた。
その兄弟は剣技に優れ、名だたる剣豪を打ち負かしました。
しかし、その兄弟が成人する頃、彼らの父は剣技で敗れ、地位を追われてしまいました。

兄は父の教えを忠実に守り、国を支える剣士を目指しました。
しかし、弟は父の死で気づきました。
どれだけ正しさを求めようと、圧倒的な暴力の前では、屈するしかないのだと。だから弟は、非道な暴力の道へ進むことにしました。

その後、兄弟はそれぞれの道で、その名を轟かせました。
二人の生活は相反するものでした。
兄は国を支える仕事に就き、地位も富も手にしました。
しかし、汚れ仕事に手を染めた弟には、安心して眠れる場所さえありませんでした。

やがて、「王国一の剣技を持つ者はどちらなのだ？」という答えを出すため、決闘となりました。勝者は兄でした。
「勝者は兄の私だ」そう名乗ったのですから、間違いないでしょう。
兄は築き上げた全てを金へ替え、暗い闇へと消えていきました。

# 抜け殻に注ぐ魂

【打撃】ぬけがらにそそぐたましい

『経緯』
　せめてもの償いとして、唯一生き残った少女を
　この手で育て、感情を取り戻すことにした。
　始めは無謀な挑戦に思えたが、少しづつ効果は出ている。
　連日娯楽に興じ、少しだが笑うようになってきた。

『経過』
　彼女との約束を反古にしたが、全く気にする様子がない。
　彼女は約束は破られるものだ。と思っているらしい。
　今日は趣向を変え、始めて買い与えた髪飾りを壊した。
　ようやく不思議そうな表情と共に、怒りを見せた。

『経過』
　彼女と暮らすようになり長い月日が過ぎた。
　彼女を迎え入れてから１０年を迎える日。
　国中を探し回り、ようやくあの髪飾りと同じ物を見つけた。
　彼女は受け入れてくれるだろうか？　こんな俺を……

『結末』
　この記録を読んでる君を見られなくて、本当に残念だ。
　会えなくて寂しいという感情を抱いてくれているかな？
　もしそうならば、それが恋だ。そして、僕の死を見て、
　胸が張り裂けそうならば、それが悲しいという感情だ。
　君が人間らしい感情を取り戻している事を、心より願う。

# 抜け殻の持つ長槍



人を傷つけても痛まぬ心。
その特性を生かし、彼女は汚れ仕事を生活の糧としていた。
一人。二人。三人……両の指でも足りなくなった頃。
彼女は出会う。自身と同じ特性を持つ者に。
その男は痛みを感じる日を夢見み、命を奪い続けていた。

男の生き様に感化された彼女は、同じ道を辿るようになった。
いつか人を殺すことに苦痛を感じる事ができる、
そんな常人のような感情が手に入ると信じ。
しかし、彼女を嘲笑うかのように、痛みは感じなかった。

彼女が再び同類に出会った時、
「引導を渡してくれないか。」と提案してきた。
幾度他人の命を奪おうと、罪悪感を抱かぬことに
絶望したその男は、人生を終えることを望んだのだ。

同類に引導を渡した彼女の頬を、涙が伝う。
「これが痛みというものか……
苦しく、そして胸が引き裂かれるような感覚だ……」
ようやく人間になれた彼女に、未練などない。
彼女は晴れやかな気持ちで同類の後を追った……

# 焦がれの飽和

【楽器】こがれのほうわ

美しい旋律が水面に溶ける。流麗な歌声が空に響く。
美麗で悲しい響き。それは、悲恋の歌……

その人魚は心より歌を愛していた。
だから、心揺さぶられる時はいつも
言葉を発するよりも先に歌を口ずさんだ。

その人魚は恋をしていた。
だがその恋が叶わぬことは分かっていた。
彼女の歌は人間にとって害あるものだと理解していたからだ。

抑え切れぬ感情が口から溢れた。
彼女の歌声は人を狂乱させるものだった。
彼女の歌に惑わされた想い人の手によって、
彼女は命を落とした。
最後の瞬間。ようやく触れた男の温もりに人魚はまた歌った。

# 大洪水の記録



人は自分よりも優れた存在を越えようと努力をし、崇めます。
神様は向上心のある人のことが好きでした。

人は暑い時には海に潜り、寒い時は火を焚べて暖を取る
知性を持ち合わせていました。
神様はどんな逆境も知恵で乗り越える人のことが好きでした。

しかし次第に人の持つ欠陥も見つかり始めます。
神様はその悪しき感情に七つの大罪と名付け、
人から遠ざけようとしました。

しかし、それがよくありませんでした。
人は禁止されれば、より一層禁忌を求め、多くの者が禁忌を
犯すと、それを模倣する性質があったのです。
神様は止まらぬ悪行の連鎖を憂い、大洪水による再構築を決意しました。

# 刻の蒼杖

【祈祷】ときのそうじょう

時の流れに抗おうとする男がいた。
時の流れを戻し、若くして亡くした妻を取り戻すため、
世界のどこかにあると言われる
"時を統べる場"を探し続けていた。
世界中を旅し、数十年が経った。
求めた場は見つからず、男は老いた。

そんな中、男の心に、ある変化が起きた。
妻を亡くした苦しみではなく、彼女と過ごした時間と、
彼女の短かった生に対する尊厳に
心を向けるようになったのだ。

時の流れに抗う事は叶わなかったが、
同時に、その悠久の流れは、男の心を癒し、慈しんだ。
男は、数十年ぶりに、空を仰いだ。
青く蒼い世界が、どこまでも広がっていた。

「君に会えて本当に良かった」
心の中で妻にそう囁くと、男は、やはり数十年ぶりに、
安堵と喜びの涙を流した。

# 愚者の願い



こんなはずじゃなかった……
そう自分の人生を振り返り、思わず零れた泣き言。
それに答えるように、暗い部屋に灯る一筋の明かり。
それは次第に実体を持つ。気づけば、幼い頃絵本で見た、
妖精の姿を象っていた。

その妖精は、彼に一つの問を投げかけてきた。
「貴方が大切に思う事はなんですか？
いくつでもお聞かせください」
その時、男は歩んできた道のりを振り返っていた。

そして数分の沈黙のあと、男はポツリ。ポツリ。
と自身の幸福の源泉について語り始めた。
「食事の時間。定職があること。健康な肉体。
そして、妻と我が子と過ごす時間……」

だが、妖精はにこやかな表情で全てを聞くと
男の幸せを全て奪い、彼の絶望を己の糧とした。
男が最後に聞いたのは「それではいただきますね。
貴方の大切なものを」という言葉だった。

# 最高の食事



あるところに大層有名な食通がいた。
その老人は理想の味を追い求め、巷で話題となった様々な料理を食べ漁った。
だがその老人を満足させる一皿に出会うことはなく、やがて偏った食生活が祟り、老人は失明してしまった。

とうとう自身の行いを反省した老人は、
理想の料理を探すことを諦め、医師の指導の下、妻が作る料理しか口にしなくなった。そんな生活が長く続き、老人は一日中眠り続けることが多くなっていた。

残された時間が残り少ないことを悟りながら、最後に至高の
料理を口にしたい。という願望は捨て切れなかった。
しかし、追い打ちをかけるかのように、ある日から突然。
どれだけ催促しようと、食卓に料理が並べられることは
無くなった。

数日が経ち、久しぶりにでてきた料理は饐えた香りがした。
だが、空腹に耐えられなかった老人は、料理を切り分け口へ運ぶ。老人は長年追い求めた理想を味わい、歓喜に打ち震えた。

# 革命の大槌



目の見えぬ物乞いが、施しを求めて道端に立っていました。
いつもならば見捨てるところでした。ただ、その男の纏うただならぬ空気に
男は足を止め、わずかな金銭を譲り渡しました。
物乞いは感謝すると男に一目で業物とわかる槌を差し出しました。

「こんなもの受け取れません」と男は断りました。
しかし、その物乞いは「これは、どこの馬の骨かわからぬものには譲れんよ」
と言い、槌を譲り渡しました。
そして明くる日もまた、男は同じ場所で
物乞いに出会いました。

槌の価値を思い出し、手持ちを物乞いに譲り渡しました。
すると物乞いは「今度はワシの魂。革命の闘士をやろう」そう言って、目深に
かぶった帽子を脱ぎました。そこには、王殺しの罪を背負い、多額の懸賞金
が賭けられた騎士の姿がありました。

その物乞いは「先の反乱でワシはもう目をやられた。
だが、健やかなる心を持ったお主には果たせなかった
悲願を……」目の前の大金に目が眩んだ男はみなまで聞かず、
騎士を撲殺し大金を手にしました。

# 失命の美



終わりあればこそ美しい。
祭りの喧騒も、儚い恋も。

散り際こそ美しい。
夜闇に弾ける花火も、野に咲く花も。

終わりあればこそ美しい。
天上で暮すうちは理解できなかった、美しさの本質。
地に堕ち、ようやく私は理解した。

終わりあればこそ美しい。
特に、人と呼ばれる存在の散り際は、ただひたすらに美しい。
ならば、天使と呼ばれた私の最後はきっと至高の美となろう。
私はその引き金に手をかけた。

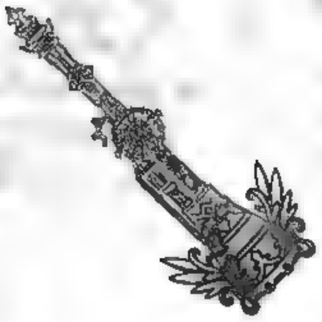
# 迷いの槍

少女の運命は生まれ落ちた時から決まっていた。
彼女に迷いはなかった。
長き間、そうあるべきと育てられてきたからだ。

その少女は強かった。
少女の強さとは即ち、迷いを知らぬ心であった。

だがその少女も迷いを知る事になる。
彼女の運命を嘆いた旅人が、自分を連れ出そうとした時。
少女は初めて迷いを抱いた。

少女から強さが失われた。
迷いという気持ちを知ったからだ。そのため、少女はその旅人が自身を捨てるのではないかと訝しみ、手にした槍で一突きにした。



# 根源の支配

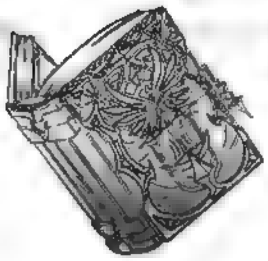


「この世には二種類の人間がいる。
利用する者と、利用される者だ。」
それが私の生まれ育った孤児院での唯一の教えであった。
その経営者はかつて、国政の中心を司る役目であったが、
利用され、築き上げた全てを失った過去を持っていた。

気づけば私は、利用する側としての道を進んでいた。
最早、他者を踏み台に己の地位を上げることに、
躊躇いを感じることもなくなっていた。
唯一の幼さといえば、孤児院に居た時にいつも聞いていた、
笛の音を忘れられぬことだけであった。

そんな生活を続けるうち、素性を隠し王宮で働くようになっていた。驚くことに同じ孤児院で過ごした者も多かった。
その出来事は、教えの正しさを確信へと変えた。
それからというもの、より一層他者を利用し続けた。

懐かしい笛の音が響く。遠のく意識。
最後の光景は、虚ろな瞳をした孤児院の出身者たちが、
王を殺さんと群れなす姿であった。
「そうか。私は初めから利用される側の人間だったのか。」
私は、復讐の駒であることを悟った。



# 裁きの書

その魔書は、悪しき者に対する処罰であれば、
どの様な事でも行使した。

この世に跋扈する悪を正すため、私は願いを綴り続けた。
その始めは、なんてことのない裁きから始まった。

次第に、私の裁きは加速の一途をたどる。
「嘘をつきし者に死を」
「弱者を助けぬ者に死を」
「悪事を見過ごした者に死を」

私は神となり、裁き続けた。常世全ての悪を排除するため。
そして国から悪が消え、ついに裁くことができる者は
己しか存在しなくなった。

# 入江の時砂

サラサラ。サラサラ。
落ちる砂が時を刻む。

ゴウゴウ。ゴウゴウ。
岩礁に打ち付ける浜風。

クルクル。クルクル。
脳裏に浮かぶ、友の顔。

ハラハラ。ハラハラ。
頬を伝う冷たい涙。
潮風の味に浮かぶのは、故郷の風景。

# 復活の花弁



誰もが振り返る程の美貌を持つが、
誰からも求婚されぬ風変わりな王女がいました。
その王女は夫となる者の身分は問いませんでした。
ただ、夫となる者には彼女が生涯を終える時、
たとえ息あろうと、共に埋葬される覚悟を求めました。

やがて、その王女に求婚する者が現れました。
その男は余命僅かと宣告されていたため、
王女の要求に恐れませんでした。
ところが、王女がすぐに流行病をこじらせ死んだとき、
王様は制約を思い出し、己の行く末を思い震え上がりました。

亡骸が安置された部屋。そこに現れた蛇のつがい。
「せめて俺の目が黒いうちは、妻を守り抜く」と蛇を
切り伏せる男。その時。男は目を疑う光景を目にしました。
一方の蛇が今しがた両断した蛇に花を乗せると、
分かれた部分が繋がり、動き出したのです。

直ぐにその花を、妻の亡骸に置きましたが、
妻に同じ効能はありませんでした。
男は妻と一緒に生きたまま埋められ、命を落としました。
最後の瞬間。「なんでこんな暗く狭い場所にいるのかしら？」
そんな言葉が聞こえた気がしましたが、気のせいでしょう。

# 夜想刀

【刀剣】やそうとう

乙女の想いは、刃に溶ける。
切なる願いを宿した鋼は、赤く染まった。

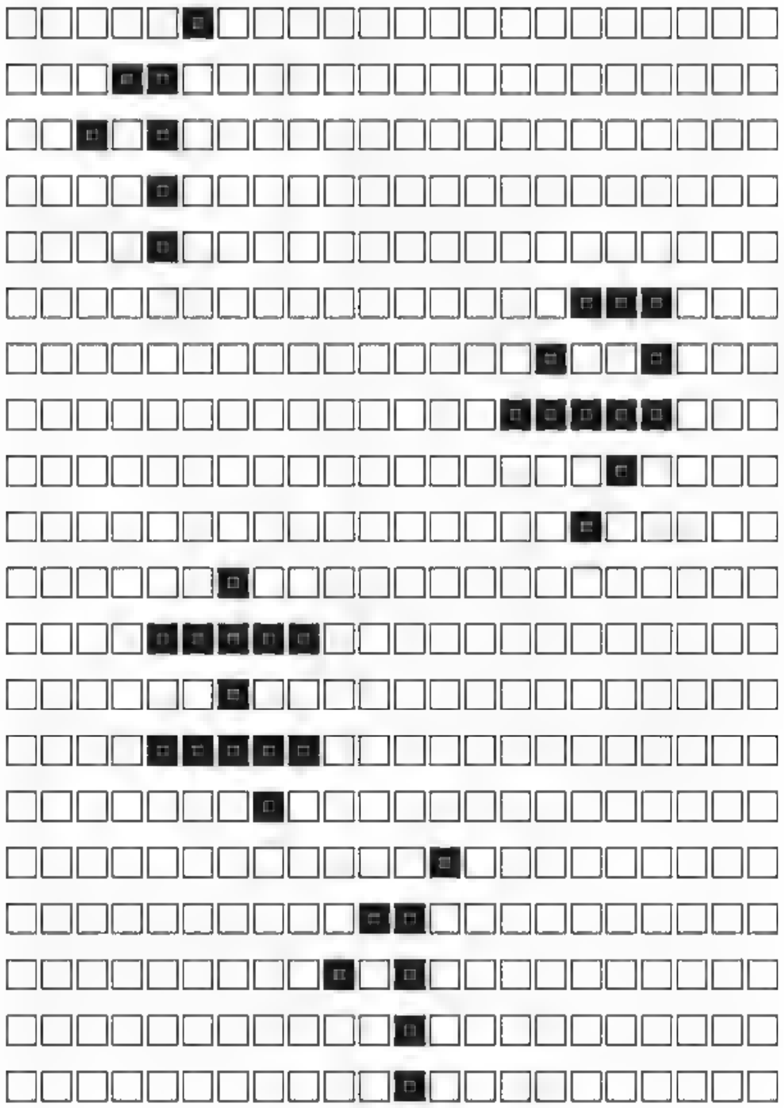
最愛を殺めし青年。涙を流す。
月に翳した刃は、歪んだ笑顔を映していた。

禁忌を破りし青年。涙を流す。
手にした刃は、逃げ惑う恐怖を映していた。

全てを失い、月日は流れた。
月にかざした刃が夜闇に煌めく。
乙女の願いは呪いに抗い、男を呪縛から解放した。

# 寄セ餌ノ断末魔

【打撃】よせえのだんまつま



# 大狼の弓

【射出】おおかみのゆみ

一人と一匹の出会いは、新芽が萌え出づる季節の事だった。
群れから見放された手負いの大狼。
その全てを失い、死を受け入れる姿に、
村の守護者でありながら魔物の侵入を許し、
信頼を失った自身の姿を重ねていた。

二人が共に歩み始め、半年が経った頃、
村に餓狼が現れるという噂が流れ始めた。
女はその噂を大狼に聴かせぬようにしてきたが、
隠し通すことはできなかった。
そしてある日突然、大狼は女の前から姿を消した。

その日からというもの月が沈むと、山奥から大狼の寂しそうな遠吠えが聞こえるようになった。女は大狼に伝えたかった。
あの噂がなくとも、村に自分の居場所などないという事を。
そして女は大狼に会うため、二人が出会った場所へ赴いた。

「我ノ骸ヲ持ッテ、村へ帰レ」大狼は瞳を閉じた。
それがお互いの為だと理解していた。
……だが、体は動かなかった。
女が殺せぬことを悟った大狼は、爪を突き立て自害した。
その日、村には遠吠えではなく女の慟哭が響き渡ったという。

# 代替の命



私の人生は、初めからデザインされていた。
私はなぜ生まれてきたのだろう？
その疑問は自ら解き明かす事なく、他者によって突きつけられた。それは、
九歳になった誕生日であった。

「お前はただのスペアである。」
事実を告げた父の目は冷たい。
誰のスペアであるかは明白であった。
もとより、姉に対する扱いとの格差に
嫉妬する日々を送っていたのだから。

私は父の正気を疑った。
真実を告げたところで「承知しました。」
と従順に、答えるとでも思ったのだろうか？
両親は幼い私からしてもわかるほど、
姉の病名を知ってから狂っていた。

私は、本物になりたかった。
生きる理由を、自らの手で掴みとりたかった。
どちらか一方しか本物になれないなら、殺すしかない。
ベッドで横たわる姉は、私の来訪の意図を理解し、
微笑みかけた……

# 終結の銃

【射出】しゅうけつのじゅう

「貧困に負けないよう、最後は自分達の手で終わらせよう。」
血は繋がっていないが、確かな絆で繋がれた兄妹は
そう約束していた。

その兄妹は、一丁の銃を持っていた。
たとえ飢えに苦しもうと、気高きその兄妹は、
唯一の形見を質に入れる事はなかった。

そして、とうとう二人は飢えに倒れた。
二人は最後の力を振り絞り、約束を果たそうとするが、
弾倉は空であった。

無駄だと知りつつも、兄を抱き寄せ、引き金を引く妹。
その銃は気高き魂に応えるかのように、光を放った。

# 竜騎兵の聖槍



その任務の討伐対象はドラゴンだった。
そういった難敵が割り振られるギルド。
それが"聖獣の牙"であり、それが俺たちの誇りだった。
だが、そのドラゴンは他のそれと何もが違っていた。
黒い体躯を持ち、その吐息は全てを燃やし尽くした。

倒れる仲間たち。脳裏に浮かぶ"撤退"の二文字。
初めてのことだった。故に判断が鈍った。
そんな俺にいつものように一喝したのはアイツだった。
「走って！！」今でもその時の脊髄反射に後悔している。

無我夢中で撤退し、アイツのもとに戻った時には、
一面の焼野原とアイツに渡した槍が……
荒れ果てた戦場に、真っ直ぐ突き立てられていた。
それはまるで戦闘に勝利した後、突き立てたかのようだった。

それから俺は、復讐心に取り憑かれたように、
槍を振り続けた。
もう二度と仲間を失わない為の力を手にするため。
そして、彼女が不意に戻ってきた時、笑われぬようにと……

# 幸福の提琴

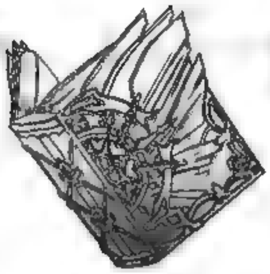


その夫婦は心温かだった。
たとえ困窮しようと、幸福の本質を見失う事はなかった。
その日は愛する妻の誕生日であった。
男は日頃の感謝を示そうと、大切にしていた提琴を質に入れ、
なんとか金を工面した。

男は妻と特別な時間を過ごすため、少し高級なワインと、
豪華な料理を用意した。彼の心に浮かぶのは妻の笑顔。
それしかなかった。子供をつくることは生活を考えると、
叶わない。だが、妻さえ居てくれればいい。そう思っていた。

男は妻の帰りを待ち続けた。
思い返せば、近頃妻の帰りはいつも遅かった。
昨夜も床に就く前、見せたのは明らかに疲弊した顔。
しかし「全く。貴方って人は」心配する自分に、
微笑む姿がいつも通りだったので、気に留めなかった。

何かあったのではないか？　居ても立っても居られず、
妻を探しに行こう。そう決意した瞬間だった。
「全く。貴方って人は」帰宅して早々、呆れ顔を見せる妻。
その手には彼の提琴が握られていた。
男は悟る。妻の帰りが遅かった理由を。



# 夢幻の魔書



狂った世界で夢を叶える方法。それは睡眠に他ならない。
甘い甘い夢の中ならば、叶わぬものなど何も無い。

だから夢を操ることができるその魔書は、
その世界で誰もが欲する本であった。
そして、その本を手にしたある魔術師は、
その本を複製し、世界を幸福で満たそうとした。

〝死ぬこと〟と〝眠り続けること〟
その二つに違いがあるとしたら、
他者が介入できるか否かに他ならない。

やがて魔術師の夢は叶い、国民すべてに魔書がゆき渡った。
正常な者も狂った者も、夢の国へと移住し、
夢の世界もまた狂った世界となった。
そして、その惨状を知らぬ者は死した魔術師のみであった……

# 悪魔の杖

【祈祷】あくまのつえ

その杖の持ち主は、傷ついた者を見ると、
癒せずにはいられぬ性格であった。
その僧侶は各地を旅し、困っている者を見つけては、治癒を施した。そんな僧侶が、ある時立ち寄った村は、鬱屈とした空気で澱んでいた。

僧侶は村の民に、その理由を問いただした。村人によると、
その村では不作が続き、領主の命により生贄を捧げたばかりだった。生贄が無駄であることを、僧侶は知っていた。
古い信仰に縛られた者達にその事を説明すると、
全ての生贄を掘り起こした。

僧侶は全ての者に治癒を施す。程なく目覚めた者達が僧侶に発した言葉は彼の期待していたものではなかった。
「悪魔めッ。貴様が儀式を邪魔したせいで、
残された家族が餓死してしまうではないか！」
罵声を浴びせられながら、心優しき僧侶は撲殺された。

それから長い時が流れ、生贄に効果がない事が知られるように
なった。かつて悪魔として恐れられた僧侶の扱いは一変し、
聖者として、彼の杖と共に崇め奉られるようになった。

# 妖精の歌

あるところに売れない歌人がいた。
その歌人の語彙は拙く、親しい者は皆、彼の無謀を止めようとした。しかし、そんな歌人にも世に知られていない最高傑作があった。

その歌は、ある妖精を助けた時に授けられたものだった。
「この歌の力は強力です。本当にどうしようもならない時だけ歌うのです」そんな助言と共に授けられた歌だった。

その歌人は歌を詠み続けた。しかし生活は貧しく。
何度も妖精に授けられた最高傑作を世に出そうと思った。
しかし、彼は妖精との約束を守り続けた。

やがて飢餓に苦しみ続けた歌人にも、命の灯火が瞬く瞬間が訪れる。歌人は最後の力を振り絞りその歌を詠んだ。
その時、全身を光が包み込んだ。
次の瞬間、飢えを知らぬ妖精となっていた。

# 生贄の抱く大剣



頬を伝う涙を、雨が拭いさる。
いっその事、このまま溶けて消えてしまいたい。
こんな事を考える愚かな私は、
神に捧げる贄としてふさわしいのだろうか？

こうなる事は知っていた。
雨が訪れなくなってすぐ、皆が私を見る事は分かっていた。
「お前はこの時のために生まれたのだろう？」
冷たい瞳がそう物語っていた。

皆がぶつける言の葉が、私を一歩、また一歩。崖へと誘う。
言葉の意味は優しいけれど、その一言一言は
他者の死を願う、鋭利な鋭さを帯びていた。

波のうねりが、冷たい海の底へと誘う。
私は代々奉られてきた剣を胸に、大海に飲まれて消えた。
その海の底には、数々の骸と共に
青き光を抱いた大剣が静かに揺蕩っている。

# 忘却の本意



彼女には想い人がいた。
それは彼女の町で悪政を敷く貴族を打ち倒し、
町に平穏をもたらした王だった。
「何を差し出そうとも、彼を支え続ける」
そう決心した彼女は町を出た。

自分を偽り続け、上司の求める部下となり。
幾度も他人を騙し続け、出世を重ねる。
長い年月をかけ、彼女がようやく、王に謁見できる地位まで上り詰めた時。
王は流行病に伏し、最早できることは無かった。

彼女は気づく。悲しくないことに。
目的のため本心を偽り続け、本心さえも失っていたのだ。
そして王が息を引き取る際。隣にいる彼女は笑顔だった。
心では泣いているのに、上司に媚び続け張り付いた笑顔が取れなかった。

どれだけ後悔しようとも、昔の自身は戻らない。
そう気づいた時には全てが遅かった。
変わらぬのは、彼女と共に戦い続けた大槌のみであった。

# 邂逅の逡巡

【楽器】かいこうのしゅんじゅん

その笛に込められた力を聞いた時、男は半信半疑であった。
ただ、街中で、その笛を弾くと通行人の動きは止まり、
喧噪であふれる街に静寂が訪れ、男は真実であると気づく。
この笛は時を止める力があるということを。

その笛はひとたび音を奏でれば、一刻の間時を止め、再び弾くと、止まっていた時が流れ出すようであった。男はそのような力を手に入れたのであれば、成し遂げたいことが山のようにあった。

それから男は何度も笛を弾き、数々の理想を叶えた。
誰もが羨むような美女と添い遂げることもできたし、
この世にまたと無い秘宝も手にすることもできた。
ただ、男はその力に頼り過ぎていたため、
自らの悪事を隠そうとはしなかった。

その日も男は、いつものように悪事を働いた。
すぐに警護兵が追いかけてきたが、男は冷静であった。
男が時を止めようと、笛を鳴らしたその時。
笛が折れ、男は時を止める事ができず捕縛された。

# 世界樹に関する考察

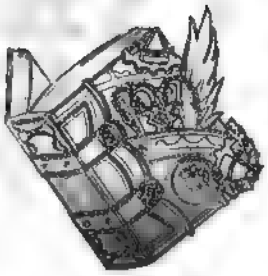


fo0005_1.10.1
世界樹がなくては、星の生命力は枯渇し、やがて滅びるだろう。
おれは自身の研究結果を息子に託し、この星の未来を託した。

fo0005_1.10.2
なんてことだ。この世界は自己修復するらしい。
どうも未来での世界樹の枯死は、約束された出来事のようだ。
度重なる歴史改変は徒労に終わったな。

fo0005_1.10.3
お前たちに朗報があるぞ。
どうやらこの星の寿命に影響のない改変であれば、
世界は見逃すようだ。

fo0005_1.10.4
この星の外から飛来した隕石。それによって齎された“魔法”。
これを使えば、人類を救えるかもしれない。
この星が死ぬ不可変の事実はそのままに……



# 帝国偵察手記



【歴史: history】
中世の戦争以降、反乱の可能性を危惧し魔法禁止令を施行。
リヒトガルド全土から魔法を奪い、その存在を圧殺した模様。

【技術: Technology】
勉学に対する対象者の厳選。
国民の多くは蒸気技術に関する知識を持たず。

【政治: administration】
一党独裁政権。その党首は内乱を恐れる傾向にあり。
外部からの敵を想定していない防衛体制。
内部からの反乱には強いが、外部からの襲撃に脆さあり。

【動向: Trend】
市民に武力を持たせず外部との武力衝突に対抗する力を模索。
オートマタというコントロールできる労働力に注目し、
近年研究を強化。

# 機械人形の時計

帝国製の人型アンドロイド。軍用と汎用があり、
汎用は主に人間の生活をサポートする目的でつくられている。

起動時にニヴェルノ研究所につながるネットワークを使用し、
帝国にコントロールされている。

持ち主の命に従い、生活が豊かになった反面、所有者は知らずの内に帝国の
監視下の元に置かれることとなる。

帝国の脅威となりうる命をされると、持ち主を処分すべく行動する。これが
謎の失踪事件の正体である。

# 葵の賢者
## （一弁）



＝＝＝街頭スピーカー＝＝＝
増えすぎた人口により、飢餓の危機に遭遇した人類。
それを人民選別令によって救済した英雄“■%■&■■”

＝＝＝街頭スピーカー＝＝＝
英雄の意思を継ぎ、再び世界に混沌を齎す悪しき民。
京華に制裁を加え、凱旋した信託騎士。
タギュルに敬意を賞し、駕礼の儀を！！

＝＝＝街頭スピーカー＝＝＝
……親愛なる同士諸君。
英雄の意思を継ぎここに生誕せし新たなる英雄！
タギュルの御声に耳を傾けよ！

同士諸君！　邪悪なる京華の思惑は潰えた！
だが、我らが平穏な時は約束されたものではない。
荒廃した土地に跋扈する大罪民族を全て滅ぼッ……

＃突然ですが予定を変更し、国家斉唱を行います＃

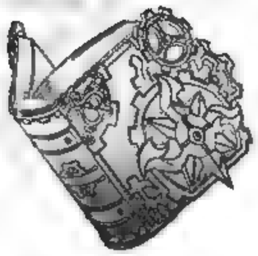
# 葵の賢者
## （二弁）

年譜の文殿①
ガマニア帝国の時代から進んでいたネットワークによって
全時代、全世界の歴史を集約させたデータベースの事。

年譜の文殿②
現代の時代にはその入力方法のほとんどが手動入力であった。
しかし、歴史改変は帝国の管理下にある神託騎士が起因であるため、問題が生じる事はなかった。

年譜の文殿③
現代の時代においては、歴史改変の影響を察知機能しかなく
システムの脆弱性もあった。
しかし、未来の時代では自動入力されるよう改良された。

年譜の文殿④
自動入力機能が万全を期すため、歴史改変を行う可能性がある者全てに、殻ノ匣が埋め込まれる事となった。



# 異世界鉱物記



Chapter 1_殻ノ匣
"時の欠片"を素材にし、"時を渡る力"を齎す物体。
これを脳内に埋め込まれた者を"時の民"と呼ぶ。

Chapter 2 _殻ノ匣
時の民となりし者は、"歴史の護り手"から
記憶に干渉される宿命を辿る。
脳内に埋め込まれた殻の匣を取外した場合、死に至る。

Chapter 3_殻ノ匣
黒の匣を介する事により
時の民を起因とする歴史改変は、"年譜の文殿"に
記録される事と成る。

Chapter 4_殻ノ匣
"歴史の護り手" 403エラー(Access forbidden!)

# 神託騎士の斧



蒸気充満する帝国に、誰よりも心の熱い男がいた。
敵将の首より仲間の命を大切にするため、
兵位はいつまでも最下層。それでも男は信念を曲げなかった。
その不器用な信念を愛した国民は、手紙を添えた礼品を送り続けた。

白き花の咲き誇る湖畔。いつものように同胞を弔う隣。
見知らぬ少女がじっと眺めていた。いつからいたのだろう。
そんな疑問をよそに少女はぽつりぽつりと語った。
任務を遂行する物として育てられ、感情を知らぬその人生を。

出会いから5度目の満月を迎えた夜。
少女は不器用ながらも笑顔をつくり、別れを告げた。
寂しくも充足感に包まれ眠った翌朝。
彼を埋め尽くしたのは喪失感。
援軍を信じ、死地へ向かった少女が見殺しにされると知った、喪失感。

屠り、屠り、また屠る。
上官の命に背き死地へ乗り込んだ男は、
禁忌の領域まで手を伸ばす。心が熱を失うことを感じながら、
なお力を使い続ける。力を使い果たし最後の敵を屠るその頃。
男は少女の愛した豊かな感情を失っていた。

# 八裂きの槍



私には家族も、友も、過去もない。
気づけばただ、空腹を持て余し、街を徘徊していた。
空っぽだった。そんな私を救ってくれた帝国軍。
そこに生きる意味を見い出すのは、ある意味必然だったのかもしれない。

気づけば私の周りには、同じ境遇を持つ者が集まっていた。
私たちはワンダラーと呼ばれ、顔も知らぬ恩人の庇護のもと、生活を保証されていた。

「一番を目指せ。さすれば更なる幸せを約束する。」
私はただ、その言葉のみを信じ剣を振り続けた。
いや。違う。その言葉しか、すがるものが無かった。

やがて、私の前に恩人が現れ手を差し出した。
「おめでとう。君はこれから信託騎士団の一員だ。
これからは自分のためではなく、帝国の為に力を使いなさい。」
その言葉と共に授かった槍は、私を支える信念の象徴となった。

# 修羅の大槌



ある栄えた帝国に冷徹な兵士がいた。
その男は一度も任務に失敗した事がなかった。
それが誇りであり、全てであった。

その男は政治と武力において、完全無欠であった。
彼の右に出る者はいなかった。

そんな男にもついに失敗を経験する日が訪れた。
部下が無実の民を殺めてしまったのだ。
大掛かりな任務となれば男の目の届かぬところも出る。
だが、男にとってそれは許し難い出来事であった。

しかし、聡明な男はすぐにその事実を隠匿すれば、
完全無欠のままでいられることに気づく。
そして男は葬り続けた。己の失策を知る全ての者を。
そして、その粛清を目撃した者も殺し。
更にそれを見た者も。それを見た者も。それを見た者も……

# 汚れ無き野望

【刀剣】けがれなきやぼう

蒸気充満する帝国に、機械の如く任務を遂行する男がいた。
唯一の反逆以降、上官の命を守り続けた男の位は、
神託騎士団長まで上り詰めていた。

その男には過去も感情も無かった。
男曰く、戦場に置いて来たらしい。
男を成す物は"国への忠義"のみ。
周囲からそう理解されていた男は、国の暗部を任させる程の
信頼が寄せられていた。

確かにその男には過去も感情も無かった。
ただ、夜毎訪れる悪夢が男に忘れさせなかった。
その男が守りたかった者は、国に抹消されたという事実を。

男は種を撒き、機を伺う。帝国に復讐するその時を。
王に頭を垂れる、その男の目には
闘士の炎が燃え盛っていた……

# 狂裁者の杖

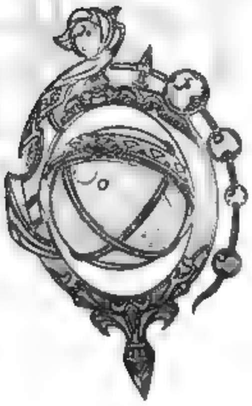


その裁判官には温情という概念がなかった。
ただ罪を犯した者に対し、罰を与えることに快感を得ていた。

その日、彼の裁きを受けることになった者は、貧しい兄弟の兄であった。その兄は盗みに入ったところを目撃され、
抵抗の際危害を加えてしまったとのことだった。
しかし、奮闘空しく末の弟は、兄の帰りを待つ間に餓死してしまった。

兄は涙ながらに「なんでもするので早く解放してください。
今こうしているうちにも十人の兄弟は飢えに苦しんでいるんです」と懇願した。
裁判官は「ならば、兄弟のうち一人の命を奪ってくるのだ。
皆死ぬよりはマシだろう」と温情のある判決を下した。

翌日、裁判官は九番目の弟の首を持ってきた兄を殺人の罪で裁いた。結局。
彼は少年を処刑することを最初から決めていたのだ。彼の判決に温情の気持ちなど欠片もなかったのだ。



# 占い水晶

私に特別な力などない。
だが、そんな私にも一攫千金のチャンスはある。

私の噂は広く知れ渡り、
私の占いは必ず当たるという評判で埋め尽くされた。
噂を広めるのに金はかかったが、すぐ回収できる。

王に謁見する日は近い。
計画は最終段階に突入し、同じ日付に結果が出ると
告げるようになった。

ついに王の前で占いを披露する日になった。
そして幾度となく練習した、占いの結果を告げる……
「今日一日待っていてください。
此処に怒れる暴徒が数多訪れるでしょう。」
予言の的中を確信する私の口角は、自然とつり上がった。

# 相思の双刀

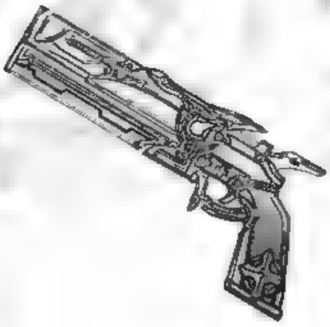


その男には言葉が通じなかった。

二人はただ剣を交え、互いの全てを語り合っていた。

想いは通じあっていた。
互いの国勢をみれば、共に暮らせぬことはわかっていた。

だから二人は互いの胸に刃を突き立て、
死後共に生きることを誓い合った……



# 妖銃黒白

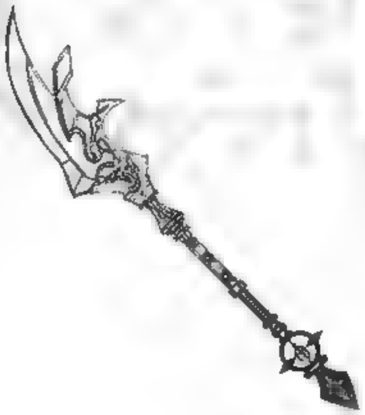


世に名高きは妖刀だが
銃にも呪われた逸話を持つ物が存在する。
これはその呪われた妖銃の話。

「決して触れてはならぬ」と封印された銃があった。
その町の農地は貧しく、決して他の町村に自慢できるような物はなかった。
強いて言うならば、貧しい者を助ける心温かな者が多い事が誇りだった。

町長の一人娘は正義感に溢れていた。
だから町に押し入った盗賊によって、人質に取られた子供を守るため、銃を手に取ってしまった。そして妖銃に魅入られた少女の放つ凶弾によって、一つの村は滅びた。

その銃は善良な気持ちを捻じ曲げる呪われし銃だった。
掟を守ればこんなことにはならなかったのに。
金品を差し出せば盗賊も、町人の命など奪わなかったのに。
正義感。そんな感情を持つからこそ。その村は滅びたのだ。



# 乙女の純真

酒場の喧騒が、心の叫びをかき消す。
頭を濡らすアルコールが鼻をつく。
「あぁ。また失敗した。」

いつもこうだ。気持ちを打ち明けると
いつも他者の気持ちを逆なでした。
歯の浮くような言葉。薄っぺらい嘘。
それに騙されるほど、私は無垢でいられなくなった。

酒を煽り、放つ男の言葉は偽りだと
理解出来るようになってしまった。
それでも私は、愛した男の真意が知りたくて
彼らを極限状態へ誘う。

今日も男は私を騙した事を謝罪する。
刃を突きつけてもなお、私への愛を叫ぶ男を求め
私は今日も、酒場で網をはる……

# 自警団の誇り



その男は、自らの仕事に誇りを持っていた。
寂れた街の自警団。押し寄せる魔物から村を守り、市民が安心して眠る事ができる環境をつくる為には、自分たちが居なくてはならない。そう考えていた。

しかし、勇者が平和にしてしまった。
あれだけ自警団に感謝をしていた市民は、手のひらを返すように、自警団への尊敬を失い、勇者を褒め称えるのであった。

男は納得がいかなかった。誰よりもこの村の平穏を願い、
身を粉にして尽くしてきた自分が賞賛されなかった事実を。
そして物のついでに村を救ってしまった勇者のことを憎んだ。
そうして彼は、闇夜に紛れ、悪役を演じることにした。

再び脅威が訪れれば、きっと村人も自警団を求めるだろう。
そんな魂胆であった。後ろめたさを感じつつも、村の食料庫を
目指す先。待っていたのは村に住まう全ての民であった。
彼の努力を村人は皆知っており、感謝の念を忘れていなかったのだ。

# 不協和音

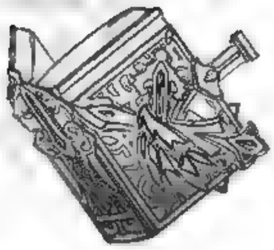


鉱山で、怪しげな光を放つ巨大な宝石が採掘されて以来
原因不明の奇病に苦しめられる人たちが出てきた。
その奇病の致死性はとても高く、感染したら助からない。

奇病は数か月の間に国中に蔓延し、多くの働き手のイノチを奪った。そして、
生き残った僅かな人々が、資源を奪い合う、惨劇が始まるのは当然の流れ。

争いの中、何処からともなくヴァイオリンの音色が聞こえた。
その音色を聞いた人々は、争うことをやめたという。

不協和音は、人の心を壊す。
静まり返った人々の死体を踏みつけ、演奏する音楽家。
巨大な宝石の付いたヴァイオリンが不協和音を響かせていた。



# 人間の観察記録

観察記録
対象：七歳／男性／無職
願望：玩具ノ獲得
結果：成就。然シ、其ノ数日後飽キル

観察記録
対象：三十二歳／男性／流通業
願望：大金ノ獲得
結果：一度ハ手ニスルモ、多額ノ負債ヲ抱エル

観察記録
対象：二十九歳／女性／家事手伝イ
願望：搾取対象ノ捕獲
結果：数多ノ立候補者ヲ拒絶

――――所感――――
全クモッテ、理解不能
引キ続キ、対象ヲ増加シ、観察ヲ継続

# 愚直な少年と奇跡の杖

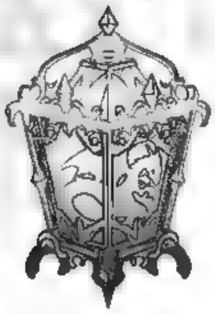


奇跡の杖を持つ老人は、ついに根負けした。
そして、百度断られてもなお「母を救いたい。」と叫び続ける
少年の愚直さに応えるため、杖の真実を語る決意をした。

「重篤な病に伏し、金を持て余した老人の遊びであった。」と
自らの吐いた嘘を後悔しながら、杖の真実を語った。
そして「杖の力は偽りだが、これで母の病を治してやれるかもしれん。」と財産を譲り渡した。

少年はその財を支払い、名医を呼び寄せた。
そして少年の想いは届き、母の病は完治した。
しかし名医の手腕を以てしても、原因不明な恩人の病は、
手の施しようがない状態であった。少年は恩義に報いる為、
杖の力を真実にする程の癒しの力を求め、旅に出た。

月日は流れ、力を手にした少年は再び恩人の元を訪ねた。
出迎えたのは「まさか杖の力を真実にするとは！」
と涙を流す老人。
その姿に少年は、老人が自分に資産を渡すため、
嘘をついていたことを悟った。



# 竜神への祈り



ようこそ旅のお方。貴方はとても運がよい。
今宵ばかりは心の悪しき者も日頃の行いを忘れ、踊り明かす。
この国の豊穣を司る神の威光が全てを照らす日。
国を挙げた祭りがおこなわれている最中なのです。

この灯篭は希望の灯りです。
我々は様々な形をした灯篭を携え、街中を神の陽光で満たしているのです。
さぁさぁ。貴方も灯篭を持ち、街を練り歩いてみなさい。お代はいりませんよ。今宵は全ての出店が無料で料理を振る舞っているのです。

ところで貴方には伴侶がおりますか？　おやおや。それは勿体無い。それでしたら国で青い灯篭を携えた女を見かけたら声を掛けてみなさい。きっと数刻もしないうちに、将来の伴侶を見つけることができますよ。

御祭り騒ぎは続き、男の腹は振る舞われた料理で満たされていた。いつしか、この国へ盗みに来たはずの旅人は、本来の目的を忘れていた。更には伴侶を見つけ、職まで見つけていた。
これはその日。男が携えためでたい灯篭。

# 愛憎の刀刃



こうなることは分っていた。
ただ……彼を遠ざけ、先延ばしにしていただけだ。
それももう終わり。和解を諦めた私は、真実を語り始めた……
「こうなることが何より怖かった。
そう。私はあなたの憎むべき相手。」

「お前が…お前が俺から大切な人を奪ったんだッ！！」
牙を剥く彼の剣。彼に殺されることは本望だ。
ただ、隠してきた気持ちを打ち明けるまでは、死ねない。
一度気を抜けば命を奪われる凶刃の応酬。
その間隙を縫い、言葉を紡ぐ。

「私が死ねばよかった。でも、どうしようもなかった……」
「なぜだッ！　なぜ真実を隠し、俺たちに近づいた！　俺たちは……仲間じゃなかったのかよッ！！」
その言葉を嬉しいと思ってしまった。
力任せで読みやすい太刀筋であったが、気の緩みが避ける身体を鈍らせた。

胸を貫く剣。溢れる血潮。噎せ返るような鉄の匂い。
私は死を悟る。
理想の場面ではなかったけれど、彼に抱き留められるのは
どんな状況でも嬉しかった。
このような感情を抱く資格はない。
そう知りながらも"心地良い"と感じてしまった。

# 凡夫の大槌



その男はあまりに平凡な男であった。
真面目に仕事をこなしていたが、仕事が生きがいであるようには見えなかった。

その男には趣味があるようにも見えなかった。
休日を失うような面倒ごとをよく押し付けられていたが、
その男はいつも引き受けていた。

その男には恋人がいるようには見えなかった。
恋をしているような目の輝きも無く、年の頃はもう四十近かった。

だから不思議に思った俺は、生きがいを知ろうと彼の家へ赴いた。暗い部屋で、彼は俺の質問に予想のつかぬ返答で答えた。
「こぉーやってぇぇえー。
　私を見下す人間を殺すことですよぉぉぉお！」

# 死神の弓



その少女の名付け親は死神であった。
少女の父は名高き弓使いであり、数々の死地を掻い潜る内、
死神と交流を持つようになったらしい。

そのため、彼女は他者の死期を予知することができた。
その力を使い、彼女は医者として生計を立てた。
だが、酒場で友に異能の力を打ち明けた時、
彼女はある商売を持ちかけられた。

その商売とは、死期を言い当てる預言者となることであった。
寸分違わず死期を言い当てる彼女の予言は、瞬く間に富裕層の間で広まり、
彼女は巨万の富を手にした。
だが死神は彼女の力の悪用を許さなかった。

深夜枕元に立つ死神。
それは彼女の命を奪おうと、鎌を振るう。
しかし彼女は動じなかった。壁にかけた弓を引き、撃ち抜く。
少女には見えていたのだ、その死神の死期が。
即ちそれは、己が死神を打ち倒すという結末を示していた。

# こびとの槍



ある日青年が森へ狩りへ赴くと、堅い岩すらも、
易々と貫く槍を持ったこびとと出会った。
「どこでそれを手に入れたのだ？」と問いかける青年にこびとは陽気に歌いながら、「七人兄弟の末子が造ったものだ。」と答えた。

青年はどうしてもこびとに、自分の獲物を鍛えて欲しかった。
そこで懇切丁寧に頼むと、存外あっさりとこびとは了承した。
ただ人間と彼らでは価値観が異なるため、造って欲しい物を事細かに教えること。と条件を出した。

男は可能な限り詳細に、槍の形状を伝えた。
「長さは俺の両手を広げた三倍。重さは二十キロ未満。
刃先に波打つ装飾を付け………」男の説明は数日の時を要したが、こびとはすぐにつくると了承し、出来次第、男のもとへ持っていくと約束した。

しかし、待てど暮らせど、男のもとに槍は届かなかった。
ようやく槍が届いた時、そこにあるのは廃屋だった。
そう、男の注文は細かすぎ、人間にとってあまりにも長すぎる年月が経過していたのだ。

ピノキオ/
ソーサラー

# 依存の魔書



僕の命令日記　10月4日(晴れ)
「それは流石に酷過ぎるんじゃないかな？　僕の杖。」
今日の命令は、おじいさんが必死に蓄えてきた貯金を
全て使って賭け事をしろ。というものだった。

「ここは子供の来るとこじゃない。帰んな。」
僕を威嚇するように見る、怖そうな大人。
しかし、しわくしゃになった札束を見せると、彼は満足そうに微笑み、僕に
命令をくれた。
「俺のオススメは一番だ。全額掛けちゃいな。」

ぞくりと背中が戦慄くのがわかった。
だって、この賭けに失敗したら、きっとお爺さんは今までに無い程、僕の事
を叱りつけるだろう。
そして、僕を縛る沢山の命令をくれるハズだ。
「あぁ。なんてヒドイ命令をしたんだ。僕の杖は……」

「はぁ……」思わず口から溢れるため息。
賭け事に勝利してしまった僕は、杖に話しかける。
ねぇ。早く次の命令をしてよ。早く。早く。早く……
命令してくれなきゃ、できないじゃないか。
こんなゾクゾクするような体験を……

# 被虐の杖



死者を蘇らせる魔術。
それを身につければ、きっと私にふさわしい殿方を見つける事ができる。そう思ったのです。
なぜなら、今地上に生きる殿方よりも、死した死者のほうが多い事は明らかでしたから。

手始めに、逸話を残し死した者を蘇生させました。
ですが、一向に私を傷つけ、苛む事ができる殿方と出会う事はできませんでした。

数撃てば当たる。その言葉を信じ、此度は墓場一帯の死者を蘇らせました。
ですが、やはり私に相応しい殿方を見つける事は叶いませんでした。
ならば、全員まとめてなら……そう思い立ちました。

まず結果をお伝えすると、失敗でした。骨の体躯では軽すぎたのです。今度は鎧を装着させました。ですが、練度が足りませんでした。私は殿方を鍛え上げることに、長い年月を費やしました。焦らされすぎた私の躰は火照り、眩暈がします……

# 呪言の連鎖



その牢獄の名を出すと、大悪党であろうと震え上がる。
その牢獄から生還した者は誰一人おらず、いつしかその牢獄の噂は背に尾ひれがついたものになっていた。

なんでもその牢獄では、首にも枷が嵌められるらしい。
そして、その枷の呪いによって、数々の咎人が命を落とすのだそうだ。その噂は悪党の間では有名だ。だから、その呪いを回避する方法も言い伝えられている。それでも生還できた者は居なかった。

その牢獄に収容される者は、なにも悪党だけではない。
罪を犯せば、市民だろうとその牢獄へ幽閉されることになる。
それが原因となり、回避方法が確立されていようと、
呪いから逃れることができないらしい。

その枷の呪いの力は、「枷を外せ」と懇願する囚人に応えるように、首を体から分かつ。その首は呪言を垂れ流し、その言葉を耳にした者は知らずのうちに、枷を外せと懇願してしまう。
刑期を全うするには全ての囚人が根を上げないことが必要なのだ。

# 静寂の願望者

【刀剣】せいじゃくのがんぼうしゃ

ここは鍵の部屋。
音もなく、欲もなく……ただ、草を喰む獣がいる。

ここは屍の部屋。
死を悟ることなく誘われた、贄の暮らす場所。

ここは担い手の部屋。
常世の凪を望み、誰よりも乱世を嫌う者の居た場所。

かつての主人は永遠の静寂を願い、全てを穿つ矛を求めた。
我を欲する覚悟はあるか？　全ての憎悪を担う覚悟はあるか？

# 悪夢の目醒



斧はいつも見ていた。
そして、その不憫な少年を助けてやりたいとも思っていた。
少年がいつものように折檻から戻り、泥のように眠る夢の中、
斧は「こんな日常抜け出したいんだろう」と問いかけた。

脳内に語りかける斧の言葉を、少年は必死に否定した。
現在どんな扱いをされていたとしても、
のたれ死ぬところ救われた恩を、忘れていなかった。

翌朝。耳をつん裂くような悲鳴で少年は目を覚ました。
重みを感じた右手を見ると、夢に見た斧が赤く染まっていた。

斧には、少年の真意がわかっていた。
だから、斧は少年の願望に応えたのだ。
夢に介入することができるのだから、
心を覗くなど造作もない事だ。

# 蛮勇の弩

【射出】ばんゆうのいしゆみ

その騎士は誰よりも強く、勇敢である。

その騎士は周囲の信頼も厚く、悪運も強い。

その騎士が仕える国は、戦火が絶えない。
だから、騎士は何度も死地を潜り抜ける。

だが、その騎士の立てる作戦は、
攻めに重きを置きすぎている。
そして今日もまた、引き連れた軍勢を壊滅させ、ただ一人凱旋する。

# 道化の鎌



彼は笑うように泣き。泣くように笑った。
周囲は彼のことを「気味が悪い」と拒絶したが
彼は人間を愛し、全ての人間を笑顔にすることを望んだ。

だから彼は厚化粧を施し、素性を隠した。
一度道化と化すと、そこはまさに独壇場。
観衆はショーにのめり込み、呼吸困難に陥る程笑い転げた。

彼のショーには準備が必要だった。
「アヒッ。嗚呼アアッアハハァッ」
今宵も響く、笑い声……
準備の際。彼はいつも泣くように笑った。

ショーの準備には、
切断した数だけ感情を操作する鎌が必要だった。
そして彼は一世一代の大舞台の為、
この世に生きる半数を殺した。
彼の夢は叶い、歪んだ笑顔の中心で笑うように泣いた……

# 悪魔ノ呼笛



その律儀な悪魔は、瀕死のところを救った修道女を忘れていなかった。傷が癒えると、様々な寄贈品を恩人の元へと届けるようになっていた。しかし、彼女の家を訪れる自分のために、あらぬ噂が広がりが始めると、ある決意をするのであった。

その噂は修道女の招いた事実であった。
しかし、自分は人間から厭われる存在である。
そんな固定概念を持つ悪魔には知る由もなかった。
当然、彼女の抱く恋心など彼に届くはずもなかった。

その噂とは、悪魔に恋い焦がれる修道女がいる。
そんな許されざる恋の噂であった。
事実、黒翼を持つ悪魔を一目見た時から、彼女は心奪われていた。やがて彼女の想いは一方通行でなくなるが、それは報われぬ悲恋であった。

「これを奏で、死の瞬間を知らせて欲しい」
それが、悪魔が残した最後の手紙であった。
それから時は流れ、修道女は死の瞬間。
天の使いが迎えに訪れるより先に、約束の時が来た事を知らせるため、地獄へ届くよう魔笛を奏でた。

# 賢老の手記



あるところに、年寄りのみが暮らす国がありました。
その国を最後に治めていた王も多分に漏れず、老婆でした。
その老婆が、まだ若く美しかった頃の事です。
彼女はとても頭がよく、年をとった国民から票を集め、
初めての国王になりました。

彼女の統治は長く続き、やがて彼女が老婆となる頃には、
全ての国事は老人に向けたものとなりました。
そのため、みるみるうちに国は衰退し。
若者は国を去りました。

国を衰退させた彼女は、全ての国民の反感を買いました。
「こんなはずじゃなかった」と彼女が醜く泣き乱すと、
国民は彼女を憐れみ、命までは取りませんでしたが、
その老いた女王は国を追われました。

しかし頭のいい老婆はそうなることは知っていました。
狂乱する姿。それすらも芝居だったのです。
この時のために、国民から搾取した金銭で、
彼女は美少年達と悠々自適に暮らしました。

# 未修熟の杖

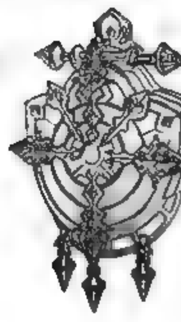
【祈祷】みしゅうじゅくのつえ

その杖は所有者の魔力を引き出すとともに、ある感情も増幅させた。また、その杖は見習いの杖と呼ばれており、その由縁は単純であった。歴代の所有者は、必ず見習いのうちに生涯を終えていたからだ。

その少女はその杖の曰くを知っていた。
だが力を欲せずに居られなかった。
彼女の両親は魔術比べに敗れ、悪魔に命を奪われていたのだ。
その悪魔に対する復讐が、彼女の原動力となっていた。

その杖が増幅させる感情は傲慢であった。
その感情に身を任せ、魔法をひけらかす少女。
同門に恨まれだすが、その妬みの噂をも利用し、名を広めた。
そしてついに彼女の元に、悪魔が現れる。
壮絶な魔術比べの末、彼女は復讐を遂げた。

弱り果てた彼女の前に同門が立ちはだかった。「気が済むようにするといい。」
両手を挙げた彼女に降り注ぐ回復魔法。傲慢な女は他者に興味が無かった。
其れ故知らなかった。
同門の者たちもまた、悪魔に大切な者を奪われていたことを。



# 無垢なる信徒

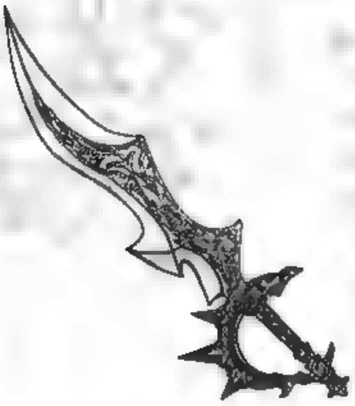


あるところに無垢な民のみが暮らす村があった。
その民は疑問を抱かず、全てを教祖に差し出し過ごしていた。
やがてその噂は遠く離れた聖王の元へも届く。
聖王は民を救済するという大義名分を掲げ立ち上がった。

激しい交戦状態は続き、聖都が勝利を収める頃には長い月日が経過していた。
聖王は誤った宗教観に縛られる民を救うため、
法を制定する。それは聖都の戒律に後ろめたい行いをした者は山頂に建てられた門にて懺悔せよ。というものであった。

村を平定すると聖王は聖都へと凱旋する。
獄中からそれを知った教祖は、再び村を支配するため、
民を引き連れ反乱を引き起こす。「異教徒を駆逐せよ」
その怒号に呼応するように反乱軍は急速に数を増やし、
一夜の内に聖都の支配から村を奪還した。

深夜。息を潜め、懺悔をするために門へと集まった民。
教祖が強固に閉ざした扉をこじ開けたその先。
そこにはいるはずもない聖王が笑っていた。
そして聖王は一言。教祖を殺せと命じる。
民は何も考えず、雄叫びを上げながら山道を駆け下りた。



# 英雄が使いし剣



その村には英雄を夢見る青年がいた。
彼は自らの才能と努力で、村を襲う凶悪な魔物を倒し、
英雄となった。

「村の英雄に敬礼を！」
「お前は村の誇りじゃ」
「いつでも村を守ってくれ！」

「また魔物が現れたけど英雄が倒してくれる」
「毎日魔物を倒してくれるよね？」
「母さんのためにもより強くなってくれ」
「………………」

やがて英雄は重圧に押し潰され、ついには魔物となっていた。
その魔物はあまりにも強大で誰も歯が立たなかった。
英雄を夢見る、一人の青年が現れるまでは。

# 極刑の残滓



さざめいて、ときめいて
脈打つ気持ちを見つけたよ。

ボクの気持ちは、さながら揺蕩う小舟ノヨウ。
行先あれど理性が阻み、決して辿り着く事はナイ。

気付けば体はビッショ ビショ。
ピチャピチャ。アフれた気持ちを踏みシメる。
ちゃぷちゃぷ。コボれた気持ちを踏みにじる。

体を濡らすこれは……
誰のなみだ？　ダレのヨダレ？
だれの体液？　誰の血液？　誰ノ脳ショウ？
雨に打たれれば、ぐちゃグシャ混じってみんな一つに。

# 人狼の偽り

その女が惚れた男はどこか影のある男であった。
深く素性を聞こうとするといつも煙に巻かれた。
だが、慈しむように頭を撫ぜる手の感触に、
大切にされていることだけは確信できた。

その男にならば、目の前で両親を人狼に貪られた、心の傷も打ち明けることができた。その女は「両親の仇を取るのが夢だ」と語ると「俺が必ず討取るから、女のお前は月夜を出歩くな」と厳しく咎められた。

だが、約束は破られた。
満月の夜、耳を裂くような遠吠えを聞いた女は、
我を忘れ外へ駆け出したのだ。
そして出会ってしまった。倒すべき仇に。
一目で太刀打ちできぬことは理解できた。
それより、その人狼が愛した男だと理解し、絶望した。

「愚カナ娘ダ。利用スルマデハ、生カシテヤッタノ二」
人狼は幾度も練習したセリフを吐き、悪役を演じる。
そして最愛の存在が引き金を引くと、安堵した。
これでもう彼女が人狼に怯えることは無くなるだろうと……

# 魔物の槍



その男はひどく醜くかった。
だが醜いのは容姿だけであり、気性は穏やかであった。
しかし、その男の気性を知らぬ村人たちは、村の平穏を乱す者と決めつけ、その男を排斥し続けた。

その少女との出会いは偶然であった。
母親が病に伏し、それを癒す野草を手に入れるため、
その男の暮らす山奥まで迷い込んできたのだ。

その男は少女のため、野山を駆け回り野草を見つけ出した。
少女はその男を神の御使いと崇め、感謝した。
それからというもの、二人は友人になった。
しかし、それから暫くすると「山に住まう悪魔に村の娘がかどわされている」という噂が広まり始めた。

ある日、少女が男に会いに行くと、
男は槍でその胸を突き絶命していた。
その毛むくじゃらの手には「トモダチになってくれてありがとう」と拙悪な文字で綴られた手紙が握られていた。
そう。心優しい悪魔は彼女に迷惑をかけたくなかったのだ。

# 人形使いの魔法

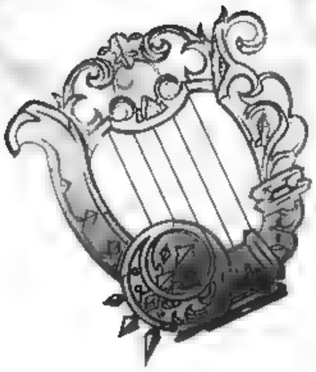


「おじいちゃん。ありがとう。わたししゅじゅつ頑張るね。」
そう言って少女は私の人形の頭を優しく撫ぜた。
それが少女と最後に交わした言葉だった。
「なんて無力なんだろう。」結局、私の拙い魔術では、
気休めとなる娯楽を提供することしかできないのだ。

私が生き残るくらいならば、彼女が生き残るべきだった。
頭に浮かぶのは、自分を庇い命を落とした楽師の姿であった。
その友の歌には人を癒す不思議な力があった。
彼女はその力を使い、音楽療法士となることを夢見てた。

本音を打ち明けるならば、赤の他人の生など興味がなかった。
ただ、友への償いのために、代わりに彼女の志を継いだ。
ただそれだけのことであった。
だが、出会った人達との交流が私を変えた。
病人を救えぬ未熟さに、苛立ちを覚えるようになっていた。

その老人の人形劇では人の病を癒すことは出来なかった。
だが、心は癒すことができていた。
彼の葬儀の日。彼の人形劇に救われた人が続々と集まった。
その想いの力は人形へと宿り、彼の亡き後、優秀な触媒として
広く知られるようになっていた。



# 蠢 蟲の竪琴



その男がとった行動は、常人と異なっていた。
常人ならば、死にゆく蟲を目にすれば、気にも止めず通りすぎるか。汚らわしいと殺すか。いずれかの行動をとるであろう。
だが、その男はそうはしなかった。
死にゆく蟲を優しく介抱したのだ。

快方に向かった蟲は、その男の恩義になんとか報いたいと、
男の望みを訪ねました。
それに男は「しがない俺の給金では手にすることのできぬ、
煌びやかな音を奏でる竪琴を手にしたい」と答えました。

男を導くかのように飛び去った蟲。
その先には男が思い浮かべた提琴がありました。
男は歓喜し、すぐさま音楽仲間の男に、その話をしました。
その仲間は同じことをして、竪琴を手にしようとしましたが、
一向に上手くいきませんでした。

そして浅ましい仲間は男を殺し、竪琴を手にすることを思いつき、それを実行に移しました。
その時です。夥しい蟲が蠢き、竪琴が霧散しました。
そして、体の穴という穴から、侵入した蟲に喰らい尽くされた男は、狂乱の叫びと共に絶命しました。

# 刀鍛冶の呪縛



あるところに"剣聖の鞘"と呼ばれる鍛冶師の一族がいた。
剣聖と寄り添うように隆盛した、一族の当主は代々女性。
その理由は一族の慣習にあった。当主を襲名した者は、
その生涯を剣聖に捧げ刀を鍛え続ける必要がある為だ。

当代の剣聖は自由奔放。剣聖の使命を尊び、剣の道に生きた。
それが鍛冶師の娘には許しがたかった。
彼の全てを注いで欲しい。刀では無く私を見て欲しい。
そして何より。鞘として一番近くに寄り添えることを願った。

その使命さえなければ。彼をきつく縛り全てを我が物にしたかった。だから
彼女は人であることを辞め、剣聖の刀になった。
「刀と成らば、彼の視線は私に向う。」
「刀と成らば、決して離れることは無い。」
そう確信した彼女は魂を刀へ捧げたのだ。

剣聖の死に場所は彼の望んだ戦場であった。
天が剣聖の魂を連れ去るより先。
まるで「永遠に貴方を離しません」と囁くかのように、刀から伸びた鎖が亡骸
を縛り、その刀身へと魂を閉じ込める。
その瞬間。刀は瞬き、桔梗色に染まったという。

# ＜食＞魔神の凶棒



かつて「食欲の神」が使いし凶棒。
睡眠欲を代償に使い手が望むあらゆる食欲を、30日間満たしてくれる。

それを手にしたあるものは、
国中の料理人を凶棒の力で従え、108種類の料理が並ぶ
「満漢全席」を昼夜問わず料理させ、
30日間、一睡もせずに食べ続けた。

それを手にしたあるものは、
世界中の珍味を求め、凶棒の力で財を成し
「白トリュフ」「ロバのチーズ」など買いあさり、
30日間、一睡もせずに食べ続けた。

30日後、その者は満たされる。
食欲が満たされ、睡眠欲を失った者が次に目指すのは、性欲。
神の力を求めまた旅に出る。

# ＜性＞光神の灯籠

【魔具】＜せい＞こうじんのとうろう

かつて「性欲の神」が使いし灯籠。
食欲を代償に使い手が望むあらゆる性欲を、30日間満たしてくれる。

それを手にしたあるものは、
国中の売春婦を呼んでは、その灯籠の力で自らの奴隷にし、
己に奉仕をさせた。
食事、掃除のことは一切にさせず。

それを手にしたあるものは、
その灯籠で国中の少女を集め、全員横に並べさせた。
そして目を見開いて吟味する。
30日間、食事もとらずに過ごす相手を。

30日後、その者は満たされる。
性欲が満たされ、食欲を失った者が目指すのは、睡眠。
神の力を求めまた旅に出る。

# ＜睡＞女神のハープ

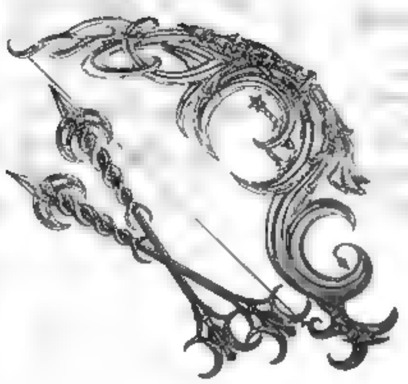


かつて「睡眠の神」が使いしハープ。
性欲を代償に使い手が望んだ
あらゆる睡眠に関する欲望を、30日間満たしてくれる。

それを手にしたあるものは、
寝たいときに、そのハープで周りの人間全てを眠らせ、
そして自らも寝た。
周りの美女が無防備に寝てるのにもかかわらず。

それを手にしたあるものは、
ハープの力で周りの人間を操り、自らの仕事をさせ、
自分は1日中寝続けた。
周りの美女を自由に扱えるにもかかわらず。

30日後、その者は満たされない。
だが、もうハープの力は無い。
彼は永遠の眠りを求め、横にいた美女に自らの首を絞めさせた。



# 入れ替えの弓

【射出】いれかえのゆみ

あるところに特別な力がある弓がありました。
その弓で人を穿てば、対象の部位と自身の部位を入れ替えることができました。此度その弓を手にした女には、欲するものがありました。それはみすぼらしい容姿をした自分に、
唯一優しい言葉をかけてくれる、男の心でした。

その男に「あなたの理想の女は？」と女が問いかけると男は
「青い目をした女性さ」と男は答えました。
女はすぐさま、村一番の青く澄んだ目の女性を弓で射ると、
それを手にしました。

あくる日。女はまた同じ質問をしました。
男は「長く柔らかな髪」そして「清らかな心を持った女性」と答えました。女はその日もまた男の理想に一歩近づきました。

次の日。女がまた、男の理想の女性について聞きに行こう。
そう思い立った時です。清らかな心を手にした女は、己の犯した過ちに気づいたのです。
そして女は「彼にふさわしくなれるはずがない」と絶望し、
自らの命を絶ちました。

# 名工の重槍



その兄弟は国一番と名高き名工であった。
その腕は「一度は彼らの作品を手に取ってみたい」と、
誰もに言わしめる程だ。
だが、彼らにはもう一つの評判がある。
それは腕が確かだが、類を見ないほど
頭が悪いというものであった。

その兄弟はとても仲が良かったが、こと武器の件に関しては、
意見が割れることが多かった。彼らの家から怒号が聞こえると
「また始まった」と村人たちは微笑ましく見守った。
当然頭の悪い兄弟は、そのように周囲から見守られていることに気づく事はなかった。

その日は槍について意見が分かれた。
兄は「優れた槍が持つべきもの。それは万物を穿つ鋭さだ」と主張した。弟はそれに対し「いざ戦場で折れては意味がない」と、堅さの重要性を説いた。ならば、二つを兼ね備えた槍を打とうと兄弟が思い立ったことは必然であった。

やがて彼らの理想は実現する。
そして、いざ店先に並べようとした時、兄弟は気づく。
その槍はあまりに重すぎ、持ち上げる事ができなかったのだ。そして全く使い物にならない鉄の塊は、彼らが死んだ後も静かに横たわり続けた。

# 撫子の竪琴



とある山村に見目麗しく、腕利きの狩人が居ました。
村中の娘は虜となり、誰もが彼の深いところを知り
彼の気を惹こうと躍起になっていました。

その村には探究心の強い男がいました。
その男が好いた女もまた、狩人に想いを寄せています。
男は嫉妬心から、狩人の弱みを握ろうと彼の後を追うと、
丁度庭先で花に囲まれ、竪琴を弾き始めたところでした。

次の瞬間起こった出来事に、男は目を疑いました。
琴の音に反応し、花達は美しい女人へと変貌したのです。
男は狩人の秘密を知った喜びを胸に、帰宅する事にしました。

しかし、次の瞬間。男は何者かに襟首を掴まれました。
そして、思わず転倒した男が最後に見た光景は、夥しい数の白い腕でした。
男は薄れ行く意識の中で、狩人の秘密を誰も知らない理由を悟りました……

# 亡国の古銃



「異教徒を滅ぼし尽くせ」脳裏に響く、不協和音
手にした銃は語りかける。自分の存在理由を……

振り払え。その卑しい雑念を。
道徳など関係ない。犠牲が必要なことは明白だ。

銃を手にした際、かせられた制約。
それは忌まわしく、私を締め付ける。
暴力を以って、異教徒に裁きを与え続けなくてはならない。

紅血に染まる手。断末魔が鮮明に蘇る。
鼻をつく硝煙の香り。今はただ「異教徒を駆逐した」
その事実が誇らしかった。

# 楽師と妖精



何はともあれ、私は無事だった。
あれだけ酷い傷を負ったのにもかかわらず、
命があるのは僥倖と言えるだろう。

正直に打ち明けるなら、初めは嫌だった。
でもいつの頃からか、その狭い場所は
私にとっても居心地のいい空間になっていた。

琴の音が響く。彼が帰ってきた証だ。
音色に合わせ歌を乗せる。狭い部屋に反響し、重なり合う音。
その時は、私たちを隔てる種族の違いを忘れさせてくれた。

いつしか私の傷は癒えていた。
二人で過ごす最後の日。彼の音色は悲哀を湛える青だった。
別れを惜しむよう、何度も何度も。
二人きりの演奏会は夜通し続いた。

# 異国の書



私にはこの本が読めない。何故読めないのかも分からない。
異国の言葉でもないのに読めない。ただ読めない。
幾つかの挿し絵はそれは見事な情景が描かれている。
魅力的な文章が綴られていることだけは、容易に想像できた。

日々この本を読むために私は学業に専念した。
1年、2年、3年……月日は非情に流れる。
10年経った今も読めない……
もうダメだと諦めかけた、ある日転機が訪れた。

なんと読めなかった本が読めるのである！
私は興奮した。遂に読めた。と、同時に絶望した。
魅力的な文章とは程遠く、突拍子もない理想が綴られていた。
そう、この本は何の益もない、ゴミであった。

「こんなものッ！」怒りに任せ、本を投げ捨てる。
すると、破れた背表紙から新たなページが見つかった。
ここまで、厳重に秘匿された文章。
魅力的な文章が綴られていることだけは、容易に想像できた。

# 白雷の杖

【祈祷】はくらいのつえ

心を静め、神に祈る。

周囲から音が消え、
頭を埋め尽くすのは、白き言の葉。

その身を委ね、
祝詞を捧げる。

神に祈りが届きし時、
悪払う白雷を呼び起こす。

# 無銘



ある国が危機に瀕した時、国中の巫女を封じ込め、
造られた赤く光る妖刀。その刀には数々の呪いが宿り、
「使い手の目に映る全てを切り伏せる。」と言われている。

そんな曰く付きの刀を手にした剣豪は、世話好きの男だった。
その剣豪は刀から聞こえる声に恐れず、対話を続けた。
その真摯な姿に巫女達は心を許し、それぞれが刀に命を捧げた理由を語り始めた。

剣豪は気付いた。巫女たちは皆、やり残したことがあると。
その日から男は、一人一人の願いを叶え未練を晴らし続けた。

やがて最後の一人の願いを叶えると刀から、呪われた力は消えた。そしてその刀に、苦しみを与えぬほどの切れ味が宿ったという。

# 滅鬼の鉄槌

【打撃】めっさのてっつい

その国はオニと呼ばれる悪魔に国を滅ぼされようとしていた。
それを憂いた国王は、オニを打ち滅ぼしたものに
「三代遊び尽くそうとも、失われる事の無い財宝を与える」と全土に勅命を出した。

その日から、ある噂が広まった。
その噂は、国王がオニを打倒するために造らせた鉄槌があるというものだった。その鉄槌は、人に変化したオニを嗅ぎ分け、触れるだけで滅するほどの力を有していると言われた。

オニの討伐が困難を極めていた理由の一つが、オニが人に化けるため、見つけ出すことさえ困難であることがあった。
国民は鉄槌を手にするため、様々な噂を集め始めた。
その最中、広場で鉄槌が目撃されたと噂が流れた。

そして広場は国中から押し寄せた者で混乱を極めた。
集まった者は皆、鉄槌を奪い合い、殺し合った。
その光景を、群衆に紛れたオニはあざ笑っていた。
それはオニが国民を殺し合わせるために置いた、
ただの鉄槌であったからだ。

# 必中の弩

【射出】ひっちゅうのいしゆみ

その男は途方に暮れていた。
借金が膨らみ、首が回らなくなったのだ。
男は一攫千金を狙い、傭兵となることで
敵将の首を打ちとろうと決意した。
そして努力することは嫌いであったが「死ぬよりはマシだ。」
と弩を練習するため、村はずれの森に向かった。

ちょうどその時、茂みから腹を空かせた獣が現れた。
「自分を喰らうのではないか」と恐れた男は獣にパンを差し出す。獣は大層感謝すると、牙を折り男に差し出した。それを弩に取り付ければ、必中の加護がもたらされるとの事だった。

男はこれで楽ができる。と小躍りし戦場へと向かっていった。
確かにその効果は絶大であった。素人同然であった男でも
難なく敵将を打ち取り、多大な報酬を手にする事ができた。
しかし、愚かな男は賭博に敗れ、報酬を失ってしまった。

だが、男は楽観視していた。
男には金を稼ぐ算段があったのだ。
森に向かった男は茂みに向かい何度も矢を放つ。
矢の飛んで行った方へ進むと、そこには血だまりに伏した獣がいた。男は獣の亡骸を持ち帰ると、弩を強化し、手柄を挙げ続けた。

# 愛憎の槍

【長柄】あいぞうのやり

その槍には意志があった。
だから狭く黴臭い蔵から連れ出してくれた男に感謝した。

その槍には感情があった。
だから自分を優しく撫でていたはずの男の心が、他者へ靡くことが許せなかった。自分へと向けられたはずの視線が、他者を慈しむことが耐えられなかった。

その槍は魔力さえあれば自由に動くことができた。
だから、最愛の存在に跨る女の背中を目掛け、一直線に滑翔した。その槍を恐れた主人は、再び槍を蔵へと封印した。

そしてまた、槍は永い眠りから目を覚ます。
いつだってその槍は惚れやすい。
だから此度の主が女性であろうと関係のないことだ。

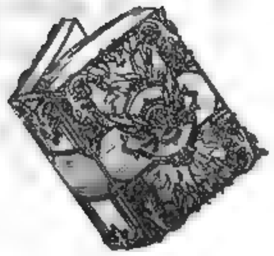
# 強欲の魔笛

その少年は川で笛を拾い、取り憑かれたように、夢中になっていた。毎晩遅くまで調子外れな演奏を続ける少年に、両親は頭を悩まされていた。

だが、ある日から少年の演奏は急速に上達し、
偉大な演奏家の寵愛を受けるようになった。
その頃になると両親は少年を褒めちぎるようになっていた。

その少年は無垢であった。
ただ純粋に褒めて欲しかった。
だから笛を吹き続け「ねぇもっと褒めて！　こんなに上手にできたよ」と甘え続けた。

しかし、その笛が音を奏でるには対価が必要であった。
それは人が絶命の時に叫ぶ慟哭だった。
だから少年は夥しい数の人を殺し続けた。
もっと。もっと。褒めて欲しくて。
褒めて、褒めて、褒めて欲しくて、殺戮の限りを尽くした……



# 白紙の魔書

【魔書】はくしのましょ

その少年に誇りはなく、支えてくれる友もなかった。
そんな少年を面白がったのか、金持ちの少年は、
書庫から使い物にならない魔書を持ち出すと彼に譲り渡した。
初めての出来事に少年は大層感謝すると、
持ち帰った魔書を大切に扱い続けた。

その魔書は白紙であった。
しかし、彼が何年もその本に語りかける内、白紙だったはずの本に物語が記されるようになり、少年はその物語に夢中になった。そして、主人公の人生をなぞるように、魔術の道へとのめり込んでいった。

やがて時は流れ、魔術は彼の誇りとなった。その頃には物語の主人公のように、周囲から必要とされる存在になっていた。
彼の夢はとうの昔に叶っていたが、それでも彼は魔書を大切にし続けていた。
彼は知りたかったのだ。その物語の結末を。

ある日、彼の元へ勅命が届く。
討伐へ向かう道すがら、久方ぶりに魔書を開く男。
「あぁ。この本とはそういう物であったのか。」
白紙だったはずの最後のページに物語が記されだし、
彼は己の死を悟った。

# 賢者の杖



その男は、次期賢者と噂されるほどの魔術師であった。
その国にとって賢者とは、国の象徴のような存在であり、
毎年賢者の地位を決める祭事を、国民は心待ちにしていた。

当然国を挙げての祭事とあらば、国民の財布の紐も緩む。
毎年の賢者を予想する賭け事が暗黙の了解で催され、
そこでは巨額の金が動いた。

今年の一番人気は、噂のその男であった。
彼が王の前で魔術を披露する時。
会場は異様な盛り上がりを見せた。
そして王の前で自慢の魔術を見せようとした、まさにその時。
杖は輝きを失い、彼は天を仰いだ。

降りしきる罵声の中。男は賢者として指名された女を見て驚愕する。その女は自分に杖を売りつけた怪しい行商だったのだ。
最も人気が無かった者が賢者となり、名声のみならず巨万の富さえも手にしたことを男は確信した。

# 盲信者の怨念

【魔具】もうしんしゃのおんねん

藁をもすがる思いで門を叩く。
痩せ細った私を迎え入れたのは名高き聖職者だった。

この人の為ならば何でも差し出そう。
この躰も。家族も。自らのイノチだって。
私にとって彼こそが"神"だった。

教祖様に人殺しを命じられるようになって。何度目だろう。
ワタシは初めて任務を失敗した……
でも大丈夫。きっと教祖様は私を赦してくれるはず。

その願いはあっさりと裏切られた。
吐き捨てるように「殺せ」と教祖様が命じたのは
昔の自分によく似た少女だった。

# 悪女の悲劇

少女が生まれた場所は暴力に支配されていた。
彼女が6つの時、騙され、借金にまみれた母は、彼女の人生と引き換えに金を得ようとした。醜い顔で言い訳を並べる母。
その表情が恐怖に支配された瞬間。
少女は返り血にまみれ、力こそ全てであると悟った。

やがて成長した女にはどこか希薄さが漂っていた。
その儚さが欲望を掻き立てたのか、よく男から言い寄られるようになった。
鬱陶しく思っていた女もやがてその有用性に気づくと、美しい躰を餌に男を利用し、暗い世界から抜け出した。

それからいくつの幸せな家庭を渡り歩いただろうか？
最後に女を射止めたのは商会の跡取りだった。
「今度の愛おしい存在は、どんな顔をして叫ぶのだろう？」
彼女は何度も何度もその瞬間を妄想した。

それは、夫に模造刀を贈られた時だった。
剣の由来を語る夫に「剣とはこうやって使うためのモノだわ」と女は愛刀を引き抜く。彼女が次に見たのは
「優位を疑わぬ者の絶望ッ！　それこそが我が愉悦！」と
両断された自分に口づけをする夫の姿だった。

# 愛緑者の聖槍

【長柄】あいりょくしゃのせいそう

深い深い森の中。
長き時を経てもなお、忘れ去られたように佇む槍がある。
その槍のかつての持ち主は、
誰よりも緑を愛する少女であった……

少女にとって、その森が全てであった。
だから愛する森が農耕地化されると聞くと、彼女は立ち上がった。そして、
森を焼き払おうとする者たちと、闘い続けた。
少女は一人であったが、孤独な戦いではなかった。

森に暮らす者達と協力し抵抗する少女に、侵略者たちは手を焼いた。だが本
腰を入れた組織的な侵略に為す術なく、
少女たちと森は焼き払われてしまった。

時は流れ、その土地は元の姿を取り戻した。
その森の中心に、まるで奉られるかのように座す、一本の槍。
少女の愛槍の周りには、今でも彼女を愛した小鳥が
優しくさえずっている。

# 古代王朝の提琴

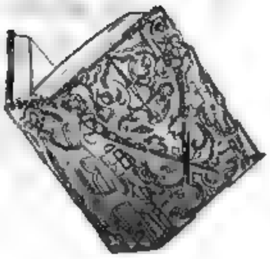
【楽器】こだいおうちょうのていきん

その呪われた竪琴を手にした時、彼女にはある役目が割り振られた。その役割に抵抗を覚えたが、最早、後の祭りであった。
ならば、病気の友と交わした約束を守る為、道化を演じ続けよう。そう決意した彼女は竪琴を奏で続けた。

「結末に疑問は持たない。
元より相応しくない称号を手にしようとするならば、
何かを失う覚悟を要求される事は、わかっていた。」
そう、自分に言い聞かせる日々を送った。

彼女は竪琴に促されるまま、観客を虜にし続けた。
それが彼女に与えられた演奏者としての役目だったからだ。
そして「必ず貴方の代わりに、有名な奏者となる。」
今は亡き友と交わした約束は成就した。

やがて結末は訪れる。
彼女の演奏は銃声に阻まれた。
彼女は民を誑かす悪魔として、衛兵に撃たれたのだ。
その彼女の骸の周りには、竪琴に生気を吸い取られた
夥しい観客が累々と横たわっていたという。



# 騎士の日記



12月8日　天候（快晴）
その瞳で私だけを射抜いて欲しい。
刃に誓った忠義は、残らず欲望に塗りつぶされた。
……あぁ。皇女様の特別な存在になりたい。

12月13日　天候（豪雨）
恵の雨だ。これで足跡は洗い流され、犯行の痕跡は露と消える。
あぁ。愛しき皇女様……すぐお迎えにあがります。
ついに計画を実行へ移す時が来たというのに、
手の震えが止まらない。

12月18日　天候（雪）
押し込めた狭い部屋。乱れた衣服。
白磁のような肌。怯えた瞳が映すのは、一振りの剣。
刃先でなく、刀身を肌に押し付ける。
鉄の塊がじんわりと皇女様の体温を奪う……

12月18日　天候（雪）
皇女様の瞳に映るのは私だけ。
皇女様の両手が熱を求め、私へ伸びる……
あぁ……皇女様。
これから　は　ずっと　いっ　しょ　で　す

# 残サレタ時間



最大の脅威を打ち倒した歓喜の宴。
その渦中にありながらも、物悲しい気持ちが心を縛る。
そう。私は蝕まれ始めたのだ……

――――リンク完了まであと1000時間。
リンク完了とは即ち自分の自我が消失するまでの時刻。
私が私で無くなるまでの刻限。

操られ、世界を滅ぼすくらいならば、
世界のために、死ぬべきだ。
そう思っていたはずなのに……

自分の失われる予定日。それはとうに過ぎていた。
自分の愛する存在が、自分を受け入れてくれた。
その仮初めの幸せを、捨てきれなかったのだ。
ゴメンナサイ。ゴメンナサイ。ゴメンナサイ……

# 不殺の刃



その刃は剣を扱うものならば、一目でわかるほどの切れ味を有している。だからその剣士は違和感を抱く。その剣が未だ、血に濡れていない事は明らかだったからだ。

不思議に思った剣士は商人を問いただす。
「この剣は本当に歴史ある剣なのか？」と。その問いに対し商人は、少なくとも曾祖父の時代からあったものだと答えた。

剣士は念入りに剣を調べた。そして気づく。
その剣は切れ味だけでなく、魔術触媒としても一流のものであると。そのハバキには優れた魔術が施されており、使用者の魔力を吸収し、増幅することもできるようであった。

「値打ち物を手にした」と剣士の足取りは軽い。
しかし、商人はその剣を一振りする毎に、長い口上が必要になることを剣士に伝えなかった。そしてようやく不良在庫を売り払う事ができた商人は、返品される前にその村を後にした。

# 終焉を刻む槌

【打撃】しゅうえんをきざむつち

一つの物語が終わろうとしていました。
その国では、朝日が昇る頃「滅亡まで残り十日です。
今日という一日を、素晴らしい日にできるよう努めましょう」と妃の澄んだ声が、国中に響き渡りました。

さらに心優しい妃は、国民が残された時間を無駄に過ごさぬように。万物が時を指し示すように、魔法をかけました。

不安な気持ちを連れてくる夜を無くす為、夜通し明かりを灯す者。「最後のその瞬間まで笑顔で充したい」と料理を提供する者。まるで妃の想いに応えるかのように、国中に美しい心が溢れました。

そしてついにその時は訪れました。
しかし、誰も絶望はしませんでした。
妃が告げていた終刻の時が偽りであり、
民は終焉に気付かぬ内に、消滅の光に飲み込まれたのです。

# 聖騎士の小銃

【射出】せいきしのしょうじゅう

その騎士団は清廉潔白を体現するような存在であった。
彼らは臣民から受けた多額の寄付を、自分達のためには使わず王家や巡礼者に対する貸し付けによって私財を成した。

やがて、国土の大半が彼らの所有物となった。
彼らの行いは、確かに正しいものであった。
ただ、それが鼻につく者達もいる。
そのような考えに至らなかった事が、彼らの過ちであった。

やがて、彼らの持つ私財は性根の腐った貴族に目をつけられる事になった。
そして、その騎士団は無実の罪に捉えられた。
私財を剥奪され、死罪となる事となった騎士団。
その公開処刑の日。正しき道を全うしながら銃殺された騎士団長は怨嗟の言葉を撒き散らし、絶命した。

それから暫くし、騎士団を貶めた者達の境遇を知る者達は口々に「騎士団の呪いだ」と恐れおののいた。
彼らは皆等しく、自らの頭蓋を打ち抜き、倒れることとなったのだ。

# 暴食の鎌

【長柄】ぼうしょくのかま

あるところに仲の良い双子の姉妹がいました。
何をやっても妹よりもできる姉。
姉に置いて行かれないようにと努力を重ねる妹。
姉は懸命に努力する妹がたまらなく愛おしい様子でした。

しかし、その幸福な生活は長く続きませんでした。
政敵の謀略で両親が毒殺され、姉妹は貧困街での生活を
余儀なくされたのです。泣いてばかりの妹。
私がしっかりしなくてはと、自分を犠牲に妹を支える姉。
やがてその姿は天使と称されるようになりました。

最後の食糧も妹に与えてから、十日が経ちました。
姉の頭は最後に分け与えたパン屑のことで一杯です。
極限の空腹。虚ろな思考。
とうとう、心の奥底で押込めていたはずの、
足手まといな妹に対する、憎悪が溢れ出しました。

姉はうわ言のように食料をせがむ妹を切り殺し
「せめて最後くらい役に立ってよね。」そう呟くと、
皮ばかりの死肉を貪りました。当然、空腹は満たされません。
彼女は衛兵に打ち殺されるその瞬間まで、
周囲の人を貪り続けました。

# 失意の横笛



昔、働き者の貧しい下女がいました。
主は暴力を振るう悪い男でしたが、彼女には心の拠り所があったため、悲嘆に暮れることはありませんでした。
少女は森で草笛を吹くことが
何よりの幸せだったのです。

或る朝、少女は妖精と出会いました。
その妖精は仲間の誕生日に、笛を吹いて欲しいと頼んできました。仕事を放り出して、折檻されることを考え、はじめは断りましたが、あまりに熱心に妖精が頼み込むので、最後には了承しました。

妖精たちは少女の奏でる優しい音色の虜になり
「もう一日だけ、留まって欲しい」と懇願してきました。
少女は断りましたが、最後には「もう一日だけですよ」と
留まることにしました。

彼らはお礼に、草笛を豪華な笛へ変化させました。
そして彼女はお仕置きを恐れながら、戸を叩きました。
すると、出迎えたのは見知らぬ女性でした。
話を聞くと、妖精たちと過ごす間に長い月日が流れており、
悪い主は死んでいたのでした。

# 鳥冠の竪琴



母親と死に別れた男が再婚して、娘に新しい母親が出来た。その母親は病気がちだった。
その継母はなにごとにも厳格な人間で、
継娘を厳しくしつけようと有害なものの多い世間に出すことなく、部屋に閉じ込めた。

娘はある日部屋の窓から外を見ていた時、
一人の男を目にした。男は娘の美しさに一目ぼれし、もっと彼女のそばにいきたいと懇願した。
ついに娘は根負けし、男を招き入れ、そして関係をもった。

それを知った継母は怒って、子供を毒で殺そうとした。継母の持っていた毒は彼女自身の薬だった。
その薬は少量では栄養剤的な効き目があっても、大量に飲むと死ぬとされていた。
継母は継子の食べ物にその薬を大量に入れて与えた。娘は知らずにそれを食べた。

だが子供はその毒で死ぬことはなかった。
娘は男との交わりのために、滋養を得ようと母親の薬を飲んでいたのだった。
少女は少量の薬の成分を取り入れ続けていたため、毒にも耐性が出来ていたのだった。
一方、何事にも厳格な継母は、具合が悪かったにも関わらず多く摂取すれば毒になると聞いて以来、決して薬を口にすることはなかった。
そして栄養不良で死んでしまった。
娘は男と結ばれ二人の間には子供が出来て、親子はそれから幸せに暮らした。

# 復讐鬼の剣



復讐の連鎖はとどまることを知らない。
それは復讐者であるその男自身がよく理解していた。
だから、その身を裂かれた時もその剣士は、
また新たな復讐者が生まれることを知っていた。

王国随一の腕を持つ剣士は貧しく家族想いだった。
幼い頃、父を竜に殺された男は女手一つで育てられた。
毎晩竜への恨み言を吐き、泣き続ける母の姿に、必ずや復讐を果たすと誓いを立てた。

腕を磨き続けた男は、やがて自分に比肩する者はないと確信するまでに至った。
そして、父の仇を討つため、竜が巣食う洞窟へ向かった。
妻子を残し竜へ挑むことは心残りであったが、憎悪の炎を鎮めることはできなかった。

「「お前たちの所為で父は……」」相対する両者。
勝者である竜が、剣士を紙切れのように引き裂く。
その竜もまた、憎悪に囚われた復讐者であった。

# 老兵の大筒

“老兵”
戦火渦巻く時世にて、
幾度も死地を潜り抜けた者のみが、
冠することを許された勲章。

“老兵”
その勲章は只の勲章に非ず。
幾多の戦友の骸。億万の敵兵の命。
それらの犠牲の上に成り立つ烙印なり。

“老兵”
その烙印は老兵と成りし者に、決して癒えぬ傷痕を残す。
残された余生は、贖罪以外の何物でもない。

老兵は数々の戦友の顔を思い出しながら
誇りを胸にその愛銃を置き、戦場を去った。
だが、老いを知らぬその銃には、これからも戦場が待ち受けている。

# 偶像の琴



歌に乗せ、この身を躍らせる時。
私の美しさは更なる高みへと昇華する。

私は歌姫。そう呼ばれている。
きっと観衆は「現実では触れることも叶わぬが、想像のなかでなら」と私を穢
しているでしょう。

権力を持つ者は、こぞって私に欲望を吐き出す。
金にいとめはつけず。毎夜。毎夜。情欲に囚われた獣と化す。

周囲は私を不憫に思うようだが、それは思い違いだ。
汚されることに、悦楽を感じぬ者には歌姫など務まるはずもない。

# 輪廻転生



昔、妻と共に暮らしていた魔術師がいました。
二人には土地があり、財産は毎年増えていきました。
しかし、不運は唐突に訪れるものです。彼らの住まう村に飢饉が訪れたのです。男は泉へと赴き、水の精へ祈りを捧げる事にしました。

祈りは通じ、現れた水の精は「安心しなさい」と答えました。
そして「これまでになかったほど作物が実るようにしてあげましょう。ただし、あなたが今、一番大切なものを譲り渡すのです」と条件をだしました。

男は蓄えを失う覚悟をしましたが、これで村も救われる。
と安堵し家へ戻りました。すると家から女中が出て来て
「奥様が男の子を生みましたよ」と呼び止めました。
水の精の思惑を理解した男は杖を手に泉へ向かいました。

「息子は渡さん」と男が魔術を放とうとした、その時です。
「それでは貴方が今一番大切なものをいただきます」と
水の精は言い、男は立ち向かう為の武器を奪われ、殺されました。そして水の精は"絶望"という甘美な贄を口にしました。

# 近代宮殿記録



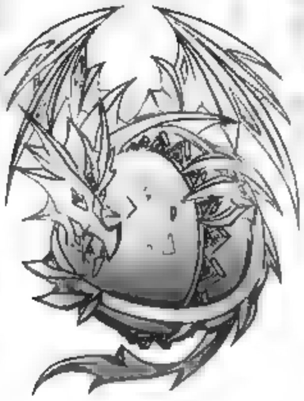
--はじめに--
この本を執筆するにあたり、
未来の映像を照射する魔術を編み出した。
偉大なる魔術師ウォルフに最大限の敬意と感謝をここに。

P1.ヴェルサイユ
・所在国：日本
・特色：室内に特殊な電飾が施されている

P2.愛玩賓館
・所在国：日本
・特色：室内に数々の拷問器具が設置されている

--あとがき。--
全くもって嘆かわしい。
王宮に蔓延る、性の自由化は間違いなく世界を腐敗させるであろう。このような未来になる事を回避するため、邁進する。

# 竜呼びの宝珠





その群れからはぐれた竜の境遇を知ってか知らずか
偶然通りかかった少年は、竜を罠から解き放つ。
その出会いに「孤独から救い出してくれる人はこの人しかいない」と確信した竜は少年の後をいつまでも追い続けた。

少年の両親は必ず言いつけを守る事。
そう約束を竜に課し、少年に幼竜を飼う事を許す。
孤独を恐れた竜はその約束を守り続けた。

少年が精悍な青年になる頃、戦が始まった。
そして青年の元に徴集状が届いた。
青年は竜を守るため「決して家から出るな。必ず戻ってくるから」と約束を交わし戦場へ向かった。

交わした約束は守れそうになかった。敵国に囚われた青年が
思い浮かべるのは、自分が居ないと失敗ばかりの竜のことだった。処刑の日。
「約束を守れずに申し訳ない。」と詫び続ける青年。その時。雲は裂け、竜が舞い降りた。
その竜もまた、約束を破ったことを詫びていた……

# 絆の短剣

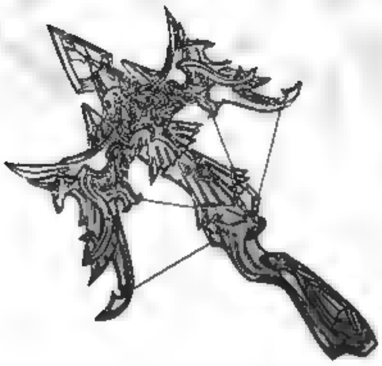


これはよくある話。
凋落した貴族の少年は盗みを働く。それが唯一の生きる手段だった。少年の姿と過去の己を重ねた店主は施しを与えると、微笑んだ。

それから時は流れ、新たな領主が土地を治めることとなった。
貧しさ恐れる領主は重税を課す。それが富を維持する唯一の手段だったから。
市民は抗う。戦で死ぬか、飢えで死ぬか。
選ぶ権利は残されていた。

これは稀有な話。
凶弾に倒れた老人の元へと駆け寄る領主。
かつての恩人の面影を残す老人を救うには血が必要だった。

時は流れる。
老人は救われ、少年時代の気持ちを取り戻した領主は
改心した。そして、2人を繋いだ短刀は領主と家臣を結ぶ絆として、奉られるようになった。



# 蒼翼の弩



気がついた時には、狭い部屋の中。
自由を奪われ、羽ばたくことも出来ぬ檻に幽閉されていた。
どこまでも続く青い空を求めて、私は日々囀った。

少年少女は、悍ましい笑顔で笑う。
鳥としての生きがいを奪われ、無様に泣き叫ぶ私を見て。
そして、私が慟哭すると、まるで自分達がその狭い世界の神だと示すかのように、水と餌を施した。

気づけば、空を羽ばたいていた。
あの暗がりに戻るくらいならば、いっそこの身を太陽に焼かれ
生を終わらせたかった。だが、夢の中でさえ自害出来ない私は
次第に弱り果て、失意の内にその命を散らした。

少年少女は、涙を流した。
きっと私を蔑むことが、叶わぬことに気づいたからだろう。
そして、死してなお苦しみを与えるため、この羽を毟り、
弩へ縛り付けたのだ。「ずっと一緒だよ」そう無邪気に微笑む
少年少女の姿は悪魔にしか見えなかった。

# 老兵の大槌

【打撃】ろうへいのおおつち

少年は口うるさく心配性な祖父を疎み、
叶うことならば「一刻も早く天寿を全うして欲しい」
と願っていた。その少年の望みに応えるように、
彼が成人する事を見届けると祖父は、少年を残し往生した。

自分でも驚いたが、その少年にとって祖父は
思ったよりも大きな存在であった。一人で生きる世界に意味は無い。自暴自棄になった少年は、戦場で命を散らす決意をした。

少年の手に握られるは、
祖父が「かつての相棒だ」と自慢した大槌。
彼は出鱈目に大槌を振り回し、敵陣目掛け猪突猛進した。

少年の眼前に敵軍の矢が迫る。
当然、実戦に慣れていない少年は目を瞑る。
「馬鹿者ッ！！　戦場では前を見んかい！」
脳内に懐かしい声が響く。槌から発せられた声に少年は悟る。
祖父の魂が大槌に宿っていたと。

# 回想の竪琴



体を蝕む光。いつかこの光の奔流に飲み込まれ、
私の人生は終わりを告げる。
そんな予感めいたものを感じていた。
抑えの効かない私の魔力は、常に私の周囲に漂い、
村中で気味悪がられていた。

だが、ついにそんな私にも心を許す存在ができた。
そのきっかけは、通りがかりの少年が放った
「綺麗だ。」という、不意打ちのような一言だった。

次第に私を蝕む光は、隠すことができない程強いものになっていた。そんな私が人でいられる唯一の場所は、彼の隣しかなくなっていた。そして私は、彼の奏でる音色に身を委ねる時間を何よりも大切にするようになっていた。

「早かったな。」死期を悟った私は最後の力を振り絞り、
彼の竪琴に魔力を捧げる。
「ずっと近くに居たい。」そんな願いを込めて。
でも、意地悪な私は、彼の琴に一つの細工を施した。
それは竪琴を弾く時に、私の姿が思い浮かぶという、
ささやかな呪いだった。

# 雪下の骸

【魔書】ゆきのしたのむくろ

　　　　　　　　　　　　｜　　　　　　　　　　虫
　　　　　　　　　　　　｜
　　　　　　　　　　　　雨
　　　　　　　｜　　　　　　　　　　　　　虫
　　　｜　　　｜
　　　｜　　　霙
　　　雪　　　　　　　｜　　　　　｜
　　　　　　　　　　　｜　　　　　｜　　　蟲
　　　　　　　　　蟲　｜　　　　　｜
蟲　　　　　｜　　　　｜　　　　　雪
　　　　　　｜　　　　雨　　　　　　　　　　　　｜
　｜　　　　｜　　　　　　　　　　　　　　蟲　　｜
　｜　　　　雪　　　　　　蟲蟲　　蟲　　　　　　霙
　雨　　　　　　　　　　蟲蟲蟲蟲蟲蟲
雪雪雪雪雪雪雪雪蟲血骸骸骸骸血蟲雪雪雪雪雪雪雪雪

# 忘却の杖



男はある日、不思議な空気を纏った女から、魔法の杖を譲渡された。

男はその杖を一度使った時点でその異変に気づく。
割った皿を魔術で繋ぎ合わせた時、妻の目に自分が映らなくなったのだ。

次に男が酒場で酔い、仲間の前で魔術を唱えると、
男は長年連れ添った仲間の目にさえも、映らなくなった。

杖を使う代償を知った男は自暴自棄になり、ついに大衆の行き交う広場で魔術を振るった。そして、次々と自分にぶつかり不思議そうな顔をする人を見て、男は気づく。
新たな杖の使い道を……

# 紅蓮の宝玉



彼の父は王宮直属の魔術師だった。
彼はその父に憧れ魔術を磨き、「父に認められたい」一心で突き進んでいた。
しかし、学院でその努力が認められ始める頃。
父は力を欲するあまり、心を闇へと飲まれ失踪してしまった。

目指すべき目標を失った彼の前に待つものは虚無。
ちょうどその頃、失踪した父の残した書斎で、
彼は怪しく輝く宝珠を手にする。
彼は自暴自棄になり、異端の魔術に手を出すも、
それを習得する才能を持ち合わせていなかった……

以来、彼は異端の力に頼らずとも紅蓮魔法の頂に立つため、
魔術を研究し続けた。そして自身の成長を見せることで、父に誤ちを認めさせようとした。だが、そのように光差す道で生きる決意をしたその時、宝珠が語りかけるようになってきた。

国を燃やし尽くす業火。その中心に立つのは、追い続けた父。
彼は天を仰ぎ、馬鹿な親子だと思った。彼は宝珠にその身を委ね、父を打ち倒した。降りしきる雨に打たれても衰えぬ炎。
それは術者さえをも飲み込み、国は業火に焼き尽くされた。

# 謙虚な魔剣

この魔剣はやけに慎ましい。
一殺ごとに対価を求めず、二殺ごとに対価を求めた。
それに加え、対価に二番目に大切なモノしか要求しなかった。

その男にとって自らの命以外の全てのモノは、等しく無価値であった。だから自分を育てた親ではなく、対価に顔見知り程度の隣人が選ばれたとしても、なんの感情も抱かなかった。

男にとって大切なものは、自分のイノチだけ。
自分を飾り付ける地位や名誉も、取るに足りないモノだった。

「この魔剣はやけに美しい」
四人目の命を奪い、男は魔剣の真意を悟る。
そして男は今では取るに足らないモノとなった、
自分の命を差し出した。

# 清狂の悪魔

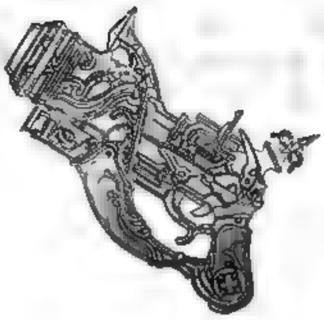


その男は潔癖症であった。
人と接触を避けるため、彼が行動する時間はいつも夜だった。
しかし、どれだけ深夜であろうと、大通りから人が絶えることはなかった。

それが男には耐えられなかった。
なぜならその男が最も不潔だと感じていたのは、
人間だったからだ。

いつしか「この世の醜い不純物を除いて、浄化しなければ。」
そう呟きながら、目の前に行き交う人間を砕くことが日課になっていた。

やがて夜に出歩く者はいなくなったが、男は満足することができなかった。
「そうか。まだ残っていたのだな。」そう呟くと彼はその瞳に映らぬ汚れた存在に手をかけ、絶命した。



# 焼却の銃



ある日、街から男が消えた。
今日で何人目だ？　最近俺の街では神隠しが相次いでいる。
ここ最近の消失率は異常だと思わないか？

消されるのは、黒い噂が絶えない消されてもしょうがない奴ばかりだが、消え方に不自然さがある。俺は人の手による殺人だと思っている。しかし証拠が無いから然るべき場所からの捜査は期待出来ないという話だ。

消されると何かしら痕跡が残るものだが、今回はそれが無い。
こつ然と姿を消したと言うのだから驚きだ。
それこそ神隠しのように…そんな『笛吹き男』のような所業が出来るのか？　謎は深まるばかりだ。

以上が今回の依頼の全容だ。
遺体の存在が確認されないとなると、既にこの世に無いと考えるのが自然だろう。人なんて溶かすか燃やすかしないと必ず証拠は残ってしまうからね。

# 雪花ノ槍

【長柄】せっかのやり

それは灼熱の日差しが照りつける日であった。
病に苦しめられた孫娘が最後に望んだ事は、
「綺麗な雪が見たい。」という小さな願いだった。
老人は真夏にも関わらず、雪を探し続けた。

そんなある日、老人に降雪を起こす魔槍を譲り渡す者がいた。
老人は感謝を述べ、急ぎ駆け戻ると空高く槍を掲げた。
氷雪の力を持つと呼ばれた魔槍も、魔力が無ければ只の槍。
魔力を持たぬ老人は願いを叶える事ができなかった。

閉じゆく孫娘の瞼。老人は何度も天に槍を翳し続けた。
すると槍は魔力ではなく、生命力を代償に魔術を履行する。
はらり、はらり、と舞い落ちる雪。
最早目を開く事はできなかったが、
頬で溶ける冷たさで、少女は何が起こったのか理解した。

「ありがとう」小さく呟く、少女。
握った手から力が抜けていくことを感じながら、
老人も安らかな眠りにつく。
真夏の日差しを浴びながら、雪はしんしんと降り積もる。
体は熱を失うも。二人の心はいつまでも温かかった。

# 再会の汽笛

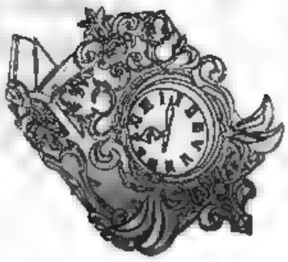


その男は、長い間どこか欠けたものを感じながら過ごしてきました。事故の後遺症で、記憶の一部を無くしていたのです。
ただ、いつの間にか手にしていた笛を吹くと、羊達が直ぐに集まるので、羊飼いとして生きる今に不満はありませんでした。

そんなある日、彼の群れに迷子の子羊が迷い込んできました。
男はどこか自分の姿と重なる子羊を丁重に扱いました。
しばらくして羊飼いの女が引き取りに現れました。
女は笛の音に導かれるように、この地へ来たようでした。

二人は互いを知りませんでした。
しかし不思議な縁を感じた二人はそれ以来、
同じ場所で羊を追うようになりました。
そんなある夜、男は美しいけれど悲しい曲を吹きました。
すると、その隣で女がさめざめと泣いていたのです。

「それは夫の為に作った曲なの。でも、事故で離れ離れになり
今は顔も思い出せない」と女は言いました。
男はその涙を拭いました。
そして、月光に照らされる二人に奇跡が起きたのです。
目があった二人は、欠けた存在に気づいたのです。



# 逆刻の呪術書



その狼はあまりにみすぼらしい姿であったため、周囲から疎まれ、敬遠されていました。それに加え運動神経も悪く、群れに置いて行かれぬようついていくのが精いっぱいであり、狩りに貢献できぬ狼は、次第に群れから距離を置かれるようになりました。

その狼が大人になった頃。群れは明らかに容姿の異なるその狼を群れから排斥しようと決意しました。ちょうどその時です。突如現れた人間が、狼たちの群れを襲ってきたのです。

決死に交戦する狼の群れ。そのなかで、みすぼらしい狼は悟ったのです。この群れはやがて死に至るということを。その狼は決意する。たとえ一人で狩りができなくとも、死ぬよりマシだと。その、気高さを忘れ生へしがみつく姿はまるで人間のようでした。

狼は必死に野山を駆け下りました。そして息も絶え絶えになり、村の畑で眠りについたころ。
ある人間と出会ったのです。そして、その人間の様子を見た狼は気づきました。自分は狼などではなく、人であったことに。

# 転生の約束



固い絆で結ばれた二人は、貧困区の出身であった。
二人はその暗く閉ざされた世界から抜け出すため、
共同体として生きることを誓い合った。
その構造は一方が罪を背負い続け、他方がそれを
利用する事により得た利益を、分け合うというものであった。

二人は手始めに貧困区を抜け出す計画を企てた。
それは簡単に達成することができた。
一方が貴族を急襲すると、他方がそこに偶然通りかかった者を装い、救い出したのだ。簡単に信じ込んだ貴族は褒美として
家臣として登用することを許可した。

次の計画は困難を極めた。だが最終的にその計画も成功した。
当然、政敵の手の内を知る者がいては、その暴動の鎮圧など造作も無いことだった。そしてその征圧戦を指揮した青年は貴族の跡取りとして、不動の地位を約束された。

それでも青年は約束を守り続けた。
だが、それが悪かった。政敵に関係を嗅ぎつけられていたのだ。
自身の不覚を何度も詫びる青年に「あの世でまた友人になればいい」と剣を差し出す男。固い絆で結ばれた二人に、
それから先の言葉は不要であった……

# 具現の杖

【祈祷】ぐげんのつえ

人々の願いを集め創られた杖があった。それを振るうと、込められた願望を一つ具現化した。

此度、その杖の持ち主は貧しい少年でした。
その少年がその杖を振るいました。
すると空から莫大な金貨が降り注ぎ、
人々は降りしきる金貨へと群がりました。

杖の虜となったその少年は、
願望を独占するため山奥へと赴き、杖を振いました。
すると、未だかつて出会ったこともないような、美女が空から降りてきました。その瞬間。その少年はこの感動を誰かと分かち合いたいという衝動を抱いたのです。

そこで少年は女に、この杖の能力をすっかり話しました。
その話に興味を持った女性が試しに杖を振るうと、
大地は引き裂け、国は飲み込まれました。
そして「誰だ！　こんな願いをしたやつは」
そんな叫び声が暗闇から響きました。

# 傀儡ノ封竜



ヨウコソ。最悪の世界へ。
まずは先立ツものが必要デスからネ。
この武器ヲ与えてヤルデス。

コノ武器に封じられた竜の名を知りたいデスカ？
「……」
「…………」
オォこれは凄イ。正解ナノです！
まさしくアナタ様が思い浮かべた竜なのデス！

しかし、モトの世界とは別の存在。
この世界では、コノ竜も私達も同ジ。
何者かによって、操うレル傀儡。
それはもしかシタラ、あなたも同じかもしれナイ。

ナニナニ？　私たちノ糸を引ク存在を、教えて欲しいトナ？
それハ、秘密。ひみつ。ヒミツなのデス！
それでは、最悪ノ世界をお楽しみクダサイ。

# 処女の髄液



いつからだろう。
自らの美しさに疑問を持つようになったのは。
いつからだろう。若さを妬み、求めるようになったのは。

いつからだろう。
うら若き娘の髄液を浴びれば、若さは失われる事はない。
そんな迷信を信じるようになり、実行に移す事に躊躇いを感じ無くなったのは。

いつからだろう。
止めどなく溢れる欲望が、身を焦がすようになったのは。
吐く息は白く、喉を伝う言葉はそれを黒く染める。
それを受け入れるようになった私に、恐れるものなど、無い。

この身を濡らす赤は、私の若さを保つ贄だ。
うら若き娘の断末魔が私を彩る。
イツマデモ。イツマデモ。イツマデモ。イツマデモ。
「この　響きに　溺れて　いたい……」

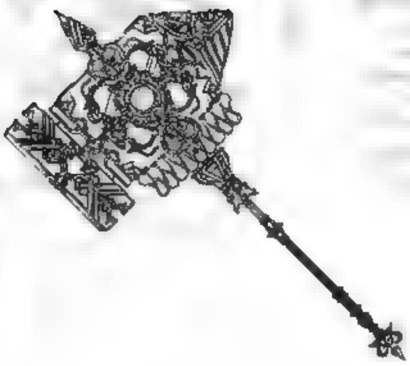
# 殻の翼

不意に聞こえた歌声。
それが自分から発せられたモノだと気づき、はっとする。
あぁ。この歌は……

私はその歌が好きだった。
誰にも聞かれぬよう密やかに。
押し込めた感情を吐き出すよう情熱的に。
誰もが寝静まった後、歌う主が好きだった。

秘密を共有する感覚。その優越感に、私は酔いしれていた。
しかし、すぐにそれでは飽き足りないようになった。
誰にも聞かれぬよう密やかに。
主が歌う歌を練習した。

彼の歌を聴き、思わず零れた歌。
ついに秘密は暴かれる。彼は初めて見せる形相で振り向くと
忠義に背いた私を折檻する。
そして私を汚く罵ったその口で、私の声が好きだと囁いた。
あぁ。そうだった。この言葉が聞きたくて。私は歌を覚えたのだ。



スノウホワイト/
クラッシャー

# 正義の鉄槌

【打撃】せいぎのてっつい

ドレスにこびり付いた返り血。
いつからそこにあったのだろう？
いつから気に止めなくなっただろう？

無垢であれと名付けられた、我が名はスノウホワイト。
その名の通り、私に穢れなどない。
たとえこの手を血に染めようとも、穢れなどない。

私が穢れる最後のその瞬間まで、
「正義」によってこの世を導き、正す。
私は間違ってなどいない。
私は正しい、正しい、正しい正しい正しい……

戒めとして、鉄槌に込めた母の形見に問いかける。
「鏡よ鏡、この世で一番正しいのは誰？」
答えが無くとも、わかっている。ワタシハタダシイ。

# 悲哀の剣



ナミダ。それは涙腺により分泌される、塩分を含んだ溶液。
どうしてナミダには沢山の種類があるのでしょう？
それはきっと、最も美しい感情の発露だから。
ナミダは、世界で一番綺麗な感情だから。

【泪】　この文字は
瞳から今にもこぼれ落ちそうな時に使うものかしら？

【涙】　この文字は
頬を伝っている際に使うのが正しいのでしょうか？

【嗚咽】
それはすすり泣く時のナミダ。

【慟哭】
それはきっと、絶叫を伴うナミダ。

貴女はどんなナミダを流すの？
さぁ。貴女のナミダを見せて。

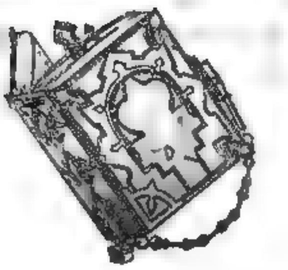
# 束縛の刀

もうこんな時間か。急がなくては。
思考と裏腹に、昼下がりの陽気は、私を微睡へと誘う。

薄夢の中、思いを巡らせる。
浮かぶのは、恋焦がれた作者の顔。
だがなぜだろう。彼の顔が思い出せない。
そして、私は思考の闇へと落ちていく……

顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔
いや違う。これはマッドハッターの顔。
これは時計ウサギの……これはギシンの……
アンキの……次々と浮かんでは消える顔。
顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔

額に滲む脂汗。結局彼の顔は思い出せなかった。
剣に取り付けられた、時計の針は、
先刻と変わらぬ時刻を指し示いていた。



# 暴力の書



遊んでも。遊んでも。遊びたり無い。
ほんとうはもっと遊んでほしいのに。
よういしてくれるオモチャは、いつもすぐに壊れてしまうのです。だったら自分でつくろうと。ボクは思い立ったのです。

作者はボクの望みを聞くと。手をたたいてよろこびました。
そしてすぐに丈夫なオモチャのつくりかたを教えてくれたのです。でも、それはとても難しいことでした。だってボクにはゾウオという気持ちが理解できなかったのです。

丈夫なオモチャをつくるにはゾウオの感情をもった材料が必要です。人間にゾウオを抱かせるには、いくつものやり方があるそうです。それには簡単なコツがあるらしく、
より大切な人を、よりざんこくに殺すのがいいようです。

仲のよさそうな夫婦を見つけたボクは、
大事そうにお腹をさする女の人を引き裂いて。
小さな命をプチっと握りつぶしてみました。
だけど、その男の人を素材にしても、
丈夫なオモチャはつくれませんでした。
そして大事なことに気づくのです。
ボクはやっぱり壊すことが好きなんだって。

# 灯り照らす小夜

【楽器】あかりてらすさよ

その音色は、疫病が蔓延する国において
唯一の癒しであった。
腐臭が蔓延し、どれだけ羽虫が蠢こうとも
彼が奏でる調べを求め、多くの聴衆が集まった。

かつては「騒音を撒き散らすな。」と
罵られていた青年も、今では人気者。
だが、彼の心は晴れない。
「ねぇ。これでよかったんでしょ？」
そう言いたげな妻の寝顔が、いつも彼を責め立てた。

事の始まりは、曰く付きの提琴を手にした時だった。
その提琴は呪われた手段で願いを叶える物らしい。
青年は願う事を躊躇った。
だが、唯一味方であった妻の
「私は好きだよ。貴方の演奏」という一言が決意させた。

彼は演奏が求められる世界を望んだ。
程なくして、青年の願望がもたらした疫病に
妻は倒れ、その短い生涯に幕を閉じた。
妻が焼かれる明かりを眺める青年。
そして彼は後悔の念を、音に乗せた……

# 狩人の魂

【射出】かりゅうどのたましい

ある山奥に飛ぶ鳥すら落とす腕前の師弟狩人がいた。
親子ほど年は離れているが阿吽の呼吸で、仕留めた獲物は数知れない。
欠点と言えば、師弟揃って人嫌いで不愛想なこと。

そんな師弟狩人にいつも通り、狩りの依頼がくる。
標的は人間の味を覚えてしまった人食い熊。
冬眠もせずに村人を襲っているという。

腕利きの狩人に来る依頼はどれも手強い獲物。
しかし、師弟狩人はこれまでも獲物を仕留めてきた。
これからも、自分達に失敗はないと思っていた。
だが狩りは失敗した、師匠は腹を食われて絶命した。

弟子は血涙を流し、師の亡骸を焼べて骨を元に弓を造る。
文字通り師匠の魂の弓で、獲物を仕留めた弟子。
しかし無傷とはいかず弟子は深い怪我で命を落とし、師弟の魂を宿した弓のみが村に残された。
その弓は狩人の魂の弓として、村に永く奉られたという。

# 善意の証



商人の手記　４月３日
神に仕える者は話が長い。そして商談がまとまらない。
でも善意を忘れず、明日も頑張ろう。
善意の心。それは他人への親切心。

商人の手記　４月５日
顧客が心を開き始めてきた。
どうも最近最愛の息子を亡くしたらしい。
心底どうでもよい話だが、
他人への親切心を忘れず、明日も頑張ろう。

商人の手記　４月６日
提案した杖に興味を示した。どうも息子が
大切にしていた石と似た装飾を気に入ったらしい。
この調子で明日も頑張ろう。
ある事情を知らないですることもきっと、善意の心。

商人の手記　４月７日
商談が成立した。
やはり商売の秘訣は善意を尽くすこと。
息子を素材にした杖を、父に売る。
この事実を、自分の胸の内にしまうことも善意だからね。

# 偽善の証

商人の手記　8月12日
商売敵には偽善者が多い。
自らを善人であると見せかける者が、なんと多いことか。

商人の手記　8月14日
今日は商人仲間との会合があった。
身内からも腹黒いと言われている彼奴が開いたものだ。
偽善者のゴマすり男め。

商人の手記　8月16日
会合の内容は彼奴の貧しい故郷への義援金話。
慈善活動は商売業の追い風になるという。
だが私は、彼奴の主張と実情に疑問があるので断った。

商人の手記　8月17日
例の義援金だが、裏の元締めが彼奴であることを私は知っているのだ。
そして、慈善の義援金を一部着服していることも。
これを偽善と言わずしてなんと言おうか。

# 岩漿の大斧

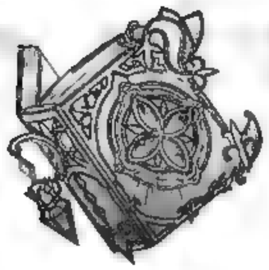
【打撃】がんしょうのおおおの

これはある村にまつわる伝説。
大昔は火山が噴火を繰り返し、この地はとても危険な場所だった。だが一人の旅人がそんな村人達を憂い、大斧を持って火口へ赴く。旅人は岩漿に大斧を突き立て、噴火を止めたと言う。

平時でも敬われるはずの伝説も、やがて風化する。
その地の人々でも、その伝説を知るものは極僅かとなった。

ある日、若い衆で度胸試しが行われることになった。
その内容は、伝説の大斧を持ち帰ること。
長老の目を盗み、実行されたその度胸試しの数日後。
今までの我慢を吐き出すように六日六晩、大噴火が続いた。

突然の大噴火に怯え、逃げ惑う村人達。
やがて責任を感じた村の若者一人が、命を賭して再び大斧を岩漿に突き立てる。噴火が止み、若者の葬儀は村を救った英雄として盛大に行われた。伝説は戒めとして上書きされ、二度と後世に伝え忘れぬようになった。



# 無の教え



ある魔術学園に、高名な魔法使いが一日講義に現れた。
大騒ぎとなった、魔法使いの卵である生徒達。
当日の講義室は学生で溢れ返り、大変な状況であった。

講義時間に現れた一人の老齢の魔法使い。
その姿を見た一部の教師や生徒が驚いた表情を見せる。
ざわつく講義室、なにが何だか解らないという者もいる。

講義室内の一部の人は、魔法使いの姿が学園長に見えているのだ。他の人には、教科書で出てくる伝説の魔法使いに見えている。見ている人間によって違う魔法使いの姿、これは一体どういうことか。

学園長は幻術の魔法をかけて、魔法使いに変化していた。
つまりこれは講師を含めた学園の抜き打ちテストだった。
見破った講師には昇給、生徒には追加単位が与えられた。
見破れなかった講師は減給、生徒は単位没収であった。

# 惑わしの目

あの目も、この目も、その目も……
僕を見つめる視線の全てが、ただ怖い。
みんな僕を見つめてくる。
どれだけ逃げても、逃げられない。

僕を見つめる視線から逃げられないなら……
いっそ、僕の目を潰してしまおう。
それならきっと、怖くない。

でも。やっぱりダメだった。
見えてなくても、気配でわかる。
ボ　ク　ハ　ミ　ラ　レ　テ　イ　ル。

ねぇ、なんで！　どうしてなの？
あの目も、この目も、その目も……
全部、全部、全部くり抜いたのに！！
誰が僕をミ　テ　イ　ル　ノ？

その狂乱する少年の周囲には
夥しい数の眼球が転がっていた……

# 厭忌の門鍵

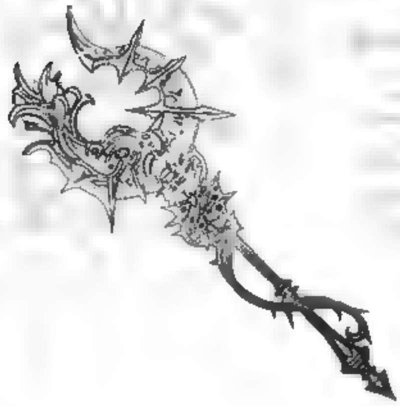


従う者には洗脳を。
抵抗するものは報復を。
教団の教えが王国全土に広がる事に、
そう時間はかからなかった。

洗脳には、反復行動による刷り込みが必要不可欠。
教祖は国家に集まる血税を以って、
天へ繋がる門を建築させる。
そして1日5回の礼拝を義務付け、信徒の生活を支配した。

厭忌の門は増加する信徒に比べ、圧倒的に不足していた。
当然、底をつく血税。意図せずとも戒律を破る苦しみから、続々と自害する信徒たち。その状況を打破するため、教祖はある免罪符を作り出した。

作られたのは門鍵サイズの厭忌の門。
何処でも祈りを捧げることができる免罪符。
虫のように群がり、それを求める信徒を眺め
教祖は満足そうに、笑った。



# 海底の杖

【祈祷】かいていのつえ

討伐隊ノ結成ト、時同じくシテ
科学的側面カラノ抗戦も始マル。
闇喰ライに取り込まれた自我ヲ
解放スル新薬ノ、開発ガ開始された。

私ハ、所長に任命サレ、王に尽シタ。
「大ヲ守ル為、小ノ犠牲ハ厭ワナイ」
其ノ信念ヲ利用し、私ハ望んだ環境ヲ手にシタ。

「ヨリ多くの民を救ウタメ」ト云う
大義名分ヲ掲ゲ、私ハ新薬ノ材料に人体ヲ使用した。
平時ナラバ、非人道と呼バレル行為であろうト
コノ状況ならバ、マカリ通ッタ。

ヨウヤク、費やシタ努力が報わレタ！
モット、世界に混乱ヲ！
モット、自由な世界ヲ！
バンザイ！　バンザイ！　バンザイ！

# 海底の弓



少女を守るため、生き長うえる罪を背負った。
交わす言葉はなくとも、確かに彼女は一番近くにいた。
握り返すその小さな力に、何度救われた事だろうか？

少女が一つ人間らしい感情を取り戻すたび、
私の背負った罪が軽くなる気がしていた。
「彼女の笑顔を見たい。」
いつしかそれが生きる理由となっていた。

しかし、幸福な生活にも終わりが来る。
夜毎、枕元に立つ同胞達。
うなされる私を心配し、眠れぬ夜を過ごす少女。
その呪縛から解放されるには、一つしかない。
私は立ち上がる事を決意した。

そして私は再び戦場へ舞い戻った。
隣には、一番大切な彼女。
今はただ、彼女を失う事の方が怖い。
「なぁ。復讐なんてもういいじゃないか。」
「いっそこのまま二人、闇の届かぬ遠い場所へ……」
思わず口をつく弱音は、虚空に溶けて消えた……

# 海底の大剣

【刀剣】かいていのたいけん

突き立てられた復讐の刃。
耳馴染みのある声で、命乞いをされた気がしたが、
それすらも厭わずに。
私はただ、吹き出し続ける闇を切り続けた。

私はなぜ、こんなところにいるのだろう？
何か強い衝動に、突き動かされていた気がするのだが……
闇喰ライが空に溶ける輝きに、
失われたはずの記憶が思い起こされる。

複雑そうな表情で、私に剣を譲り渡す人。
誇らしそうに、私の頭を撫でる人。
愛おしそうに、私の手を握り返した人。
……ねぇ。あなたは、誰なの？

どうして、涙が溢れるの？
私は殺したはずなのに。
私は、成し遂げたはずなのに。
……ねぇ。どうしてこんなに虚しいの？

# 悲哀の竪琴



わたしのこえをかえしてくださいはやくみつけてくださいはやくはやくはやくはやくあなたがとったんでしょうあなたのせいでしょう

わたしのこころをうばったのからだからこたえてこたえてわたしのこえをさしだしたのにどうしてあんなおんなに

あなたをたすけたのはわたしあのおんなじゃないあなたはまちがっているかえしてわたしのこえもこころもはやくはやくかえせかえせかえせかえせかえせ

もっとえぐるようなかなしみをあなただけでなくわたしにもあなたをころすのはかなしくないわたしがしんだほうがきっとかなしいかなしいかなしいかなしい
ねぇ。わたしがしんだらあなたもかなしいでしょう?

ピノキオ/
ミンストレル

# 依存の笛

【楽器】いぞんのふえ

どうしちゃったんだい？　僕の杖！？
これはもう、杖と呼べないよね。

わかったよ。
この服を着て、広場で演奏すればいいんだね。

だめだ。全然お金が集まらない。
早くお金を集めないと、質に入れたおじいさんの
宝物が流れちゃう……

そんな大金いいんですか？　ありがとうございます！
僕、おじさんの言うこと、なんでも聞きます！
……さぁ、命令してください。

# 絡繰の槍

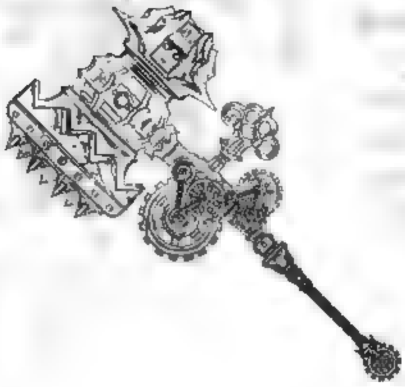


ブリキの塊が歩いたその跡には
たくさんのナイトメアたちが
ころがっていました。

ナイトメアたちは決意します。
自分たちの招いた厄災は、
自分たちで始末すると。

ブリキの扱いには慣れていました。
あれだけ長い時間、
ブリキを扱ってきたのですから、当然のことです。

彼らはブリキで強力な武器をつくりました。
ですが、何度も彼らは返り討ちにあいました。
そこで頭のいいオークは提案しました。
「体のないウィスプなら……」



# 絡繰の槌

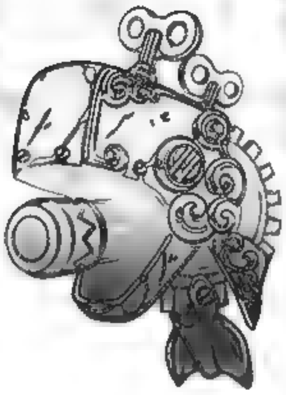


「あなたたちの息子をさらったのは、あのブリキです」
「わたしはみました。がぶっとウィスプを一飲みにするところを」

そのオークから聞いた一言に、
ウィスプの夫妻は激怒しました。

そして、オークからブリキでできた槌と槍を受けとると
彼らはブリキを探しに、森へ向かいました。

ブリキは夫妻を見つけると、駆け寄ってきました。
なにやら叫んでいるようでしたが、夫妻には届きません。
そして、勢いよく振り下ろした槌がブリキをくだきます。
ドロリと溢れたモノをみて、自分たちの行いを後悔しました。



# 絡繰の鯨

ウイーン…………

ガコッ。ガッガッガ……。……プスン。

ガッガガガガガ……

カチッ。カチカチッ。……プスン。

……………………………

……………………………ガシャン。

あっ。これは水に浮かびません。

そこのゼンマイを巻いても、泳ぎません。

ただ、大砲がでるだけです。

あたまのいいオークは得意げに、砲門をなでました。

# 暴力の戦輪

【刀剣】ぼうりょくのせんりん

赤ずきんちゃんは元気いっぱい♪
輪っかで遊ぶのが大好きで、
今日も輪投げをして遊びました！

狼さんが必死に逃げる姿を見ると
赤ずきんちゃんは大笑い♪

遊び終わると狼さんがやっていた
面白い顔を真似していましたよ！

今日も沢山遊んだね。
他にも輪っかを使った遊びを考えて遊ぼうね♪

# 森然の弓

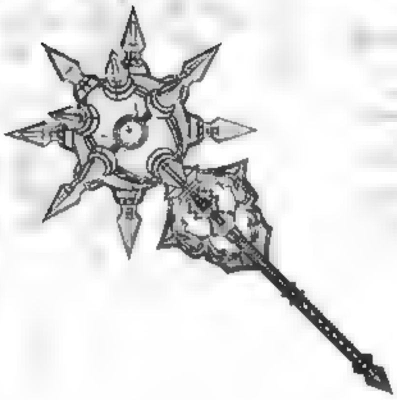
【射出】しんぜんのゆみ

森の妖精が住む、と言われる神聖な森。
この森の木を使用して作られる弓はとても高級である。
性能はもとより、耐久性、美術性も高いと評判である。

しかし、この弓は非常に流通数が少ない。
材料が少ない、腕の立つ職人が必要など、様々な理由がある。だが一番の理由はただ一つ。森の為を思ってか、地元の木こりがあまり伐採したがらないこと。

ある狩人がこの弓を欲した為、無断で森から木を切り倒した。素材を手に入れ、その日の内に職人に頼んで弓を作って貰うことにした狩人。しかし、完成品が狩人の手に渡ることはなかった。

狩人は、その晩にいきなり高熱を出して死んだのだ。
この弓の流通数が少ない理由、それは森の妖精との契約が要因。月に決められた数のみ木を倒す、その約束を破れば呪い殺す。それが、森の妖精と地元の木こりの契約だった。



# 鋼鉄の宵星

【打撃】こうてつのよいぼし

この王国は危機に瀕していた。
その年は稀にみる凶作で、国全体が飢えていたのだ。
何も手を打たぬ国政に国民の不満は高まり、国内は緊張していく。

高まる内乱の気運に対し、国王は討伐隊を編成する。
さらには一人の鍛冶屋に新型の武器の開発を命じた。
国民を恐怖で震えさせる強力な武器、という国王の注文。
それにより、大きな根棒を鍛冶屋は開発した。

各地で始まった内乱、王城から出撃する討伐隊。
その双方の兵には、同じ大きな根棒が握られていた。
鍛冶屋は最初から内乱軍に所属していたのだ。
戦いの結果は辛くも内乱軍が勝利した。

「なぜ裏切ったのだ！」
断頭台で国王は鍛冶屋に対して叫ぶ。
「王よ、この武器を作る金で何人分のパンが買えたか分かりますか？」感情の無い声で鍛冶屋は呟く。
そして、己が作った根棒を自らの頭へ振り下ろした。

# 黒翼の大鎌

あるところに、大事な恋人を殺された女がいた。
あんなに愛し合って幸せだったのに、現実は非情。
恋人を失った女は抜け殻のような日々を過ごす。
だがある日、女は復讐を決意する。

恋人の敵は剛腕自慢の領主。
か弱い女が普通に考えて、敵う人物ではない。
そこで、女は知り合いの魔術師に協力を依頼する。
事情を聞いた魔術師は一振りの大鎌を取り出した。

この鎌は一閃で相手を呪い殺せる代物。
しかしこれを使うと、呪いの代価にもう一人を必ず道づれにする。一度使えば必ず二人分の命を奪うものだ、と女に語った魔術師。受取るのを一瞬躊躇った女だが、その目は覚悟に満ちていた。

運命の日、領主の僅かな隙をついて鎌を振るう女。
しかし、腕の立つ領主には傷一つ付けられなかった。
領主に失笑された女は、呪いの鎌で自らの喉を刺す。
呆気にとられた瞬間、呪いの力で鎌が素早く領主を両断する。ごぼっ、と血を吐く女の死に顔は幸せに満ちていた。

# 幸福の破音

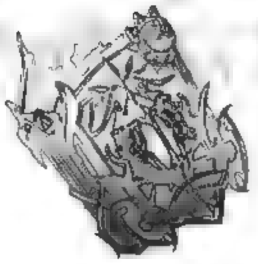
【楽器】こうふくのはおん

奏でれば奏でるほど幸福を呼ぶという楽器があった。
それを偶然手に入れた男がいた。
その男はそのバイオリンが福を呼ぶ物と知らなかった。

一つ奏でれば、大金を手に入れた。
二つ奏でれば、恋が成就した。
三つ奏でれば、母が病から回復した。

人生をバイオリンのお陰で謳歌する男。
しかし、彼は幸福がバイオリンのお陰と知らない。
彼は貧しい少女にバイオリンを譲り渡してしまった。

幸福の破局は、突然に訪れる。
地位も名誉も失い、男の人生はあっけなく幕を閉じた。
幸福とは何か？　全てを失うまでが幸福なのか？
このバイオリンの破音はその真実を教えてくれる。



# 蘇生の禁書



あるところに優秀な魔導士の夫婦がいた。
彼らはある魔術の完成を夢み、その副産物としても様々な魔法を開発してきた。

その夫婦が求めたのは禁忌の魔術。人命蘇生。
彼らは事故で失った息子を甦らせるため、倫理に反しようと力を求めた。

彼らはついに長年の悲願を成し遂げる。
だがその傍ら、助手である妻は始終笑顔は無かった。

蘇生した息子の第一声は悶え苦しむような絶叫。
ついで紡いだのは、自らの死を望む言葉だった。
魂は戻ったが激痛に苦しむ息子の姿に、妻は決意する。
暗い研究室に「ポキリっ」と乾いた音が響いた……

# 藁草ノ人形

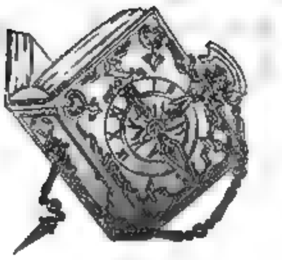


ヒトツ
フタツ
ミッツ

ウッテハ
ウッテハ
カゾエテ

愛ヲ込メ
願イヲ語ル
案ジマス
ドウカ
貴方ガ

誓ウ制約
永遠ノ愛ト
私ノ愛シ
私ダケヲ



# 束縛の魔書



彼は私に、様々な制約を課す。
まるで私が、大人になることを恐れるかのように。

私は彼と、様々な約束を結ぶ。
そうでもしないと、彼の心は私から離れる気がしていた。

……時々、遠ざけられた物達が、やけに眩しく映る。
その衝動を抱く時。
彼もまた、約束を破っている事を悟る。

もう私は、大人になってしまったのかもしれない。
制約を守る事も、彼を信じる事も、上手くできない。
だから、私は……

# 黒石の大剣



その男には言葉が通じなかった。
しかしいつの間にか、この集落に溶け込んでいた。
私たちは、変わった男だと思っていたが
彼には不思議と人を惹きつける魅力があった。

この村には自由が溢れていた。
だが、幸福な者は少なかった。
一方彼は、よく幸せそうに笑っていた。
厳しい制約を己に課し、暮らしていたにも関わらず。

次第に彼は、この村の言語を理解するようになっていった。
言葉を交わせるようになると私たちは、
彼に幸福の秘訣を尋ねるようになった。
彼は「初めから自由だと、その有り難みに気づかない。
だからまずは不自由を知るべきだ。」と彼は説いた。

そして私たちは様々な掟をつくり、たまに掟を破った。
不思議なことに、掟を破る時はいつも
他者の幸せを願う故のおこないだった。
いつしか、この村には彼の元いた国と同様に
沢山の掟と、沢山の幸せが溢れるようになっていた。

# 黒石の大鎌



打ち明けてしまえれば楽なのに。
「一緒にいて欲しい。」そう願えば、叶うのに。
共に過ごした時間がつくりあげた、
姉という立場がそれを阻んだ。

私に残された時間は少ない。
自分の体のことだ。それくらいはわかる。
限られた時間を幸福にするため、
私は何気ないひと時を大切にした。

だが、彼女は違った。
無理だと知りつつも、私を癒す希望を捨てなかった。
私を思っての行動だと、わかっている。
だが無駄な事は辞めて、傍に居て欲しい。
そう願う事は愚かだろうか？

今日も彼女は、病を癒す方法を探し続けている。
部屋を覗くと、読みかけの本が置き去りにされていた。
「まったく、心配ばかりかけて……」
彼女が何を考えどこに向かったのかを悟った私は
悲鳴をあげる体に鞭をうち、砂漠へ向かった。

# 黒石の杖

わたし知っているよ。
お姉ちゃんはこんな病気に負けないって。

わたし知っているよ。
わたしがお姉ちゃんの迷惑になってること。

わたし頑張るよ。
また、お姉ちゃんと遊ぶために。

わたしお姉ちゃんに沢山助けてもらった。
だから、今度はわたしがお姉ちゃんを助ける番だね。
大好きだよ。お姉ちゃん。

# 蒼き剣

勝算をかなぐり捨て、愚直に邁進する者がいた。
賞賛を受けずとも、悪しきを滅ぼす者がいた。

無辜の民を救うため、親族をも手にかける者がいた。
汚れた世界を救うため、その身を捧げる者がいた。

美しき理想を求め、呪われた手段に縋る者たち。
その魂を贄とした剣は、
どれだけ血を啜ろうと赤く染まることはない。

いつしかこの剣を掲げ、世界に反逆する者たちは
「蒼の剣士」と呼ばれるようになっていた。

# 導きの銃

【射出】みちびきのじゅう

この銃を使うには、一つの条件がある。
それは他者に向け、引き金を引くたび
己に向け、引き金を引く必要があるというものだ。

弾倉に込める銃弾の数に制限はない。
ならば、全弾込めれば必殺の凶器となる。

私には、刺し違えてでも殺さなくてはならない仇がいる。
妻を奪ったその男を、許してはならない。

だが、私は迷ってしまった。
間男と歩く妻の姿が、あまりに幸せそうだったからだ。
暫くの間、どちらを道連れにするべきか、頭を悩ませた後
私はゆっくりと引き金を引いた……

# 偏執者の斧



「見よ。この生まれたばかりの赤子の神々しさを。」
なぜそんな顔で私を見るんだ？
なぜだ？　君もきっと喜んでくれると思ったのに。

叶う事なら、両手をこの美しいもので充たしたい。
そう思い立った私は、道行く妊婦を見つけては
腹から赤子を取り出し続けた。

あぁ！　やはり、相も変わらず美しい。
今日で目にするのは3度目だが、全く色あせる事はない。
そして私は手にした者たちに、頬ずりをした。

集まった者たちが私を取り押える。
よせ！　それは私のものだ！　返せ！
この美しさが分からぬ者に触れさせるかァァアアア！

# 封魔の薙刀

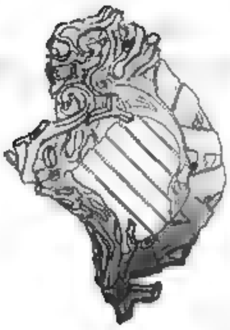
【長柄】ふうまのなぎなた

お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。
お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。
お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。

神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。
神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。
神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。神様。

誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。
誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。
誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。誰か。

誰デモイイデス。誰デモイイデス。誰デモイイデス。
誰デモイイデス。誰デモイイデス。誰デモイイデス。
……僕ヲ、ココカラ出シテ。



# ノ　バラの琴

ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。
おかおのまわりに、おはながさいたよ。
ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。

ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。
パパのまわりに、たまごをうんだよ。
ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。

ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。
わたしのからだも、おはながさいたよ。
ぶんーん、ぶーん。と、ハエがとぶ。

ぶんーん、ぶーん。と、ハチがとぶ。
見て。お池の周りに、花が咲いたよ。
ぶんーん、ぶーん。と、ハチがとぶ。

# 千里眼の杖

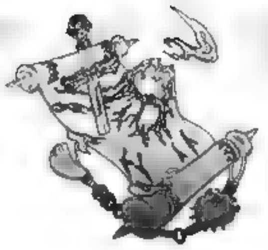


私を見つめる気配に、身体中を舐め回される。
「あなたは誰？　お話をしましょう。」
その杖は、私に呼びかける。

うるさい。気持ち悪い。
杖を捨てても、気がつけば私の手にはその杖がある。

きっとこの杖をつくった者は
私が嫌がる様子を見て楽しんでいるに違いない。
ならば対抗手段は一つだ。
……彼が私に対する興味を失うような返答をするしかない。

「あなたは誰？　お話をしましょう。」
「わたしをみたな。わたしも　おまえを　みている」
「みて　いるぞ　みて　いるぞ　みて　いるぞ　」
「わたしは　ずっと　わたしをみる　おまえをみている」
それから私はずっと、同じことを杖に語り続けた……



# 秘密ノ地図

アクセスを感知しました。
規約に従い、注意勧告をいたします。

ここより先は、自己責任の下で読んで下さい。
保証、引責は一切致しません。

あなたのヨクボウを承認いたしました。
御自身の責任において
ご希望の場所を思い浮かべて下さい。

カモフラージュの解除。
火山地帯に本来在るべき建造物を照射します。
それでは始マリの場所
「35.658581, 139.745433」でお待ちしております。

# 永劫の車輪

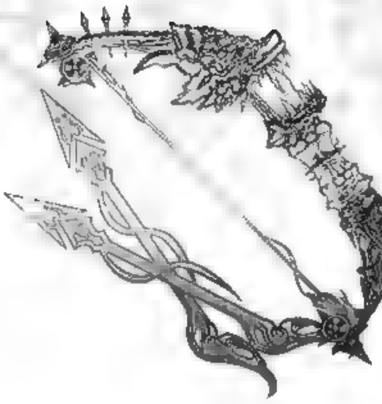


私はこの村のしきたりが嫌いだ……
この村では、娘の結婚が決まると
懐妊能力の有無を確かめる事が義務付けられていた。

その相手には、決まって村長が選ばれる。
この村に生まれた以上、私に拒否権はない。
たとえそれが、私の母を無実の罪で幽閉した
クソ野郎だとしても。

それから毎晩、腹の中で子種が泳ぎ回るようになった。
ぐるぐると、ぐるぐると、ぐるぐると
ぐるぐると、ぐるぐると、ぐるぐると……

儀式から解放された後も、その感覚は消えない。
ぐるぐると、ぐるぐると、ぐるぐると……
私の腹を泳ぎまわる子種の感覚は、生涯消える事はない。
この村にいる限り、ずっと……。



# 虚妄の狩猟弓



ねえ兄様。とっても怖い夢を見たのです。
そこで私は、少し大人になっていて。
暗く狭い場所にいたのです。

そこではなぜか、私の傍に兄様がいないのです。
私は一人、青白く光る板に向かって
話しかけているのです。

とっても怖いでしょう？
兄様のいない世界に意味などないのに。
……ああ、わかっています。
兄様は私を一人になどしないですね。

ねえ兄様。
私を優しく、抱きしめてくださいな。
二人っきりの森で、私を Ｋａｓろｋ した時のように。

# 黒鉄の書



被験者1号　呼称番号3072　経過日数10日
投与の経過は良好です。
彼女は今どのような夢を見ているのでしょうか？
私は少し気になります。

被験者12号　呼称番号3454　経過日数30日
彼女はいち早く、夢の世界から帰還を果たしました。
しかし、この世界の言語ではない言葉を話すようになり、
意思の疎通が出来ない状態となってしまいました。

被験者12号　呼称番号3454　経過日数50日
彼女が目覚めてから、日に日に凶暴性が増しています。
鎮静剤にも耐性が付き、手に負える状態ではありません。

被験者24号　呼称番号3902　経過日数100日
10日前を契機に、覚醒する被験者が急増しています。
最早、暴徒と化した被験者たちを制御することは困難と判断しました。処刑人の追加を要請します。

# 黒鉄の剣

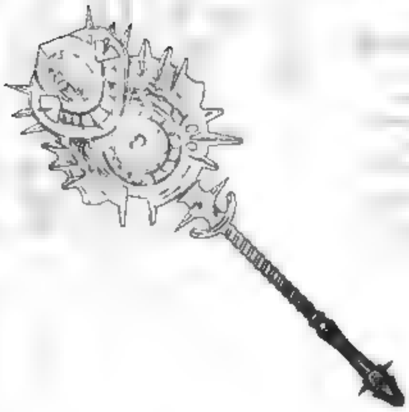


研究日誌：0504 マエダ
俺様が研究に加わってから、明らかに異常な進捗率を示している。この聡明な頭脳にかかれば向こう側を理解するのも時間の問題だ。

研究日誌：0604 マエダ
驚くべき研究結果が出た。
この情報を政府に高値で売り付けるか、
はたまた某国の研究機関と取引するか。
世界の命運は、この俺様に委ねられている。

研究日誌：0605 マエダ
頭がガンガンする。昨日は調子に乗って飲みすぎた。
一つ嘘みたいなことを、ここに記すぜ。
「泥酔した俺は、重要な研究結果を紛失した。」

研究日誌：0606 マエダ
まぁいいさ。重要な情報は全て『ここ』にある。
だが、今日はクラモチの様子がおかしい。
まぁそれも、誤差の範囲内だ。
『俺たち』のネットワークから逃れることなど不可能だ。



# 黒鉄の杖

【祈祷】くろがねのつえ

研究日誌：0605 クラモチ
すごい情報を手にしてしまった。
マエダの奴はこんな情報を秘匿していたなんて……

研究日誌：0806 クラモチ
あの日から、俺は組織に追われるようになった。
それに加え、不可解な事件が増加している。
間違いなくあの情報通り、この世界は狂い始めている。

研究日誌：0909 クラモチ
俺の前に、マエダと同じ顔をした男達が現れた。
今度同じ状況になったら、命はないだろう。
こんなことなら、真実など知りたくなどなかった。

「もう、長くないだろうな。」
逃げるようにして辿りついた暗い路地裏。
次の瞬間。クラモチはその目を疑うような光景を目にする。
怪しく蠢く闇が大地から染み出し、空を覆い尽くしていたのだ……

# 黒鉄の槍

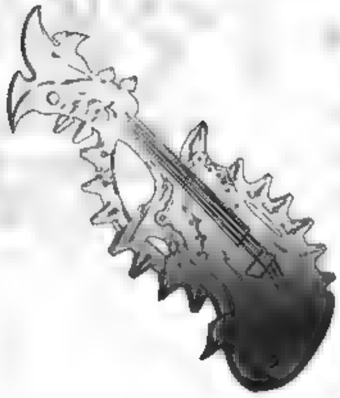


とある受刑者の日記①
この地獄から早く抜け出したい。
囚人達の話題は、この牢獄で行われているという
非人道的な研究の噂で持ちきりだ。

とある受刑者の日記②
看守から面白い情報を手に入れた。
マエダはあんな顔して、蝶が好きらしい。
明日の休憩時間に蝶を捕まえて、マエダに渡してやろう。
これで、俺の刑期が縮まること間違いなし！

とある受刑者の日記③
日に日に、ムショの様子が陰鬱になってきている。
新聞やTVはおろか、面会さえも禁止されるようになった。
俺たちは、外部から切り離され始めている……

とある受刑者の日記④
もうダメだ。この牢獄の中は、オカシクなっちまった囚人たちが、奇声をあげながら共食いを繰り返している。
それに加え、処刑人と呼ばれる物騒な連中までうろつき始めた。明日。明日の計画で、俺の人生が決まる。
脱獄に失敗すれば、俺はお終いだ……



# 黒鉄の提琴

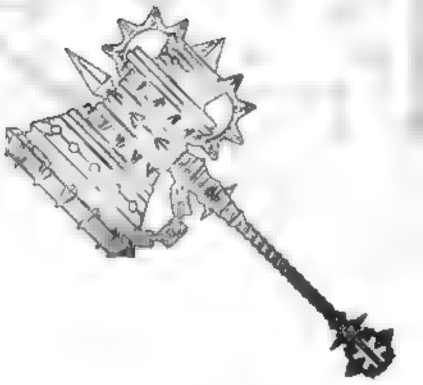
【楽器】くろがねのていきん

ハジマルヨ。ハジマルネ。
終ワリノ、始マリ。
狂人タチノ饗宴ガ。

普及するアプリケーション。
そのデータベースに隠された、新宿文書。
広がるネットワーク。
世界ニハ、夥シイ陰謀と欲望ガ渦巻イテイル。

最早、どの情報がただ正しいのかもワカラナイ。
どの勢力が勝利するのかもワカラナイ。
誰もが受け取った情報を信じるしかない。

この文章も一つの可能性。
正史となり得なかった1つの可能性。
夥しい嘘に塗れた虚構の1つ。



# 黒鉄の大槌



[q][rid=9a20u1 time:1510826343]
[To:e3839ee382a8e38380]
当該アプリケーションへの侵入を開始。
WebResourceの解析に成功いたしました。
かなり脆弱なつくりなので、
お探しのディレクトリもすぐに見つかるかと。
暫しお待ちください。
[/q]

[q][rid=k78a87 time:1510824440]
[To:e3839ee382a8e38380]
興味深い情報を入手しました。
彼らは英霊を呼び起こす計画を
画策しております。
といってもギャグのようなものなのですが。
[/q]

[q][rid=8978ji time:1990824440]
[To:e3839ee382a8e38380]
申し訳ありません。本日も進捗がありません。
本当に新宿文章なんてサーバーに隠されているのでしょうか？
情報の真偽を今一度確認していただきたいです。
もしかして我々は踊らされただけなのでは？
[/q]

[q][rid=io987y time:1990825680]
[To:e3839ee382a8e38380]
仰る通り、起動時に表示される
「LifeTimeController」が
この世界の寿命だと仮定すると、
辻褄があいます。
ですが表示される数値が
増加する日もあるということは
まだ希望があるのでしょうか？
[/q]

# 黒鉄の仕込杖

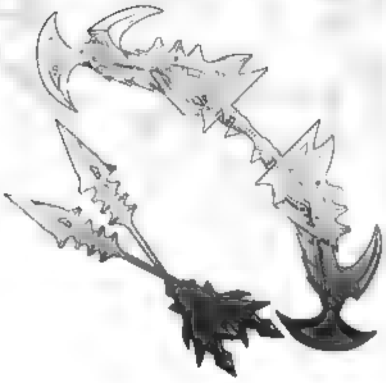


録音記録a
どうやらクライアント側からでないと
アクセスできないみたいですよ。
アプリケーション側の要求をクリアすることで
入り口が現れる仕組みです。

録音記録b
ええ、入り口は隠しボタンになっていて、
たとえ起動できてもデバックモードに
偽装されているので普通の人なら
スルーしてしまうらしいのですが……

録音記録c
めんどくさい事をしますよねー。
でも、そんな必死になって隠すってことは
よっぽど重要な文章なのかもしれませんね。

録音記録d
えっ？　そんな機能あるわけない？
ああ、彼らガチャの方が好きそうですもんね。
と、いうことはガチャにも秘密が……？



# 黒鉄の弓

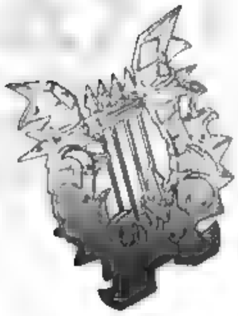
【射出】くろがねのゆみ

調査員オガタの報告①
ハメられた。
表に立っているマエダはお飾りだ。
結局ヤツを殺したところで
首が挿げ替わるだけだ。

調査員オガタの報告②
興味深い情報を手にした。
ヤツの上司にもマエダがいる。
オレはソイツをマエダ′と呼称することにした。

調査員オガタの報告③
マエダ′の表向きの職業は大手企業の役員だ。
その役員報酬は2000万を優に超える。
正直うらやましい。

調査員オガタの報告④
決死の覚悟で臨んだ掃討作戦は成功を収めた。
だが、何故またマエダが現れるんだ？
このオレの目の前で
マエダと名乗るコイツは何者だ？
マエダとは、ただのコードネームなのか……？
畜生！　一生残尿感に苛まれ続けやがれ！



# 黒鉄の竪琴

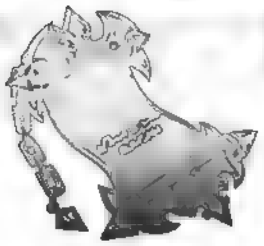


研究日誌：1005 クラモチ
融合が始まった世界は混沌を極める。
転送装置の生み出した歪は、
それまで人類が築き上げてきたものを
変質させた。

研究日誌：1006 クラモチ
研究結果は燃やした。
そしてマエダから逃げ延びるためだけに
余生の全てを使うつもりだった。
だが、こちらに笑顔を向ける娘の写真に
責められている気がした。

研究日誌：1206 クラモチ
あの日から俺は研究結果と
真剣に向き合うようになっていた。
長年のカンが告げている。
この資料にはまだ隠された情報がある。

研究日誌：0206 クラモチ
謎は増える一方だ……
上位ディレクトリが指す世界は何処にあるのだ？
三次元に生きる俺には
理解できない領域なのか？
そして、〝解除キー〟
お前たちの求める〝作者〟とは何者だ？



# 黒鉄の奇書



「犯人はお前だ。」

「犯人はオマエだ。」

「犯人はオマエだ。オマエダ。マエダ。」

「犯人はマエダ。」

# 黒鉄の戦輪

" Please reply "
もしあなたが悩みを抱えていたら、
ぜひ相談してください。

" Please reply "
もしあなたが不満を抱えているなら、
ぜひ相談してください。

" Please reply "
もしあなたが疑問を抱いているのなら、
ぜひ相談してください。

" Please reply "
もしあなたが内通者をご存知なら、
ぜひ報告してください。

# 黒鉄の車輪杖

ここの言論統制は異常だ。
マスメディアのみならず、
一個人の発言まで厳しく制限されている。

ここの民は異常だ。
束縛される閉塞感から解放されるために
命を捨ててしまう。

ここを統治するものは異常だ。
下部の存在の思考を奪い、
機械的に行動することを望んでいる。

ここを統治するものは異常だ。
自らがもっとも機械的な振る舞いを
していることに気づいていない。

# 黒鉄の棘銃



御
慧ma　簾　　か？

ミ　娃
　　　　　瘷　背
　　　　　　　　　　　ン　火？

つ
　　　那
　　　　　がっ手
　　　　　　　　　　　居ま諏か？

わ
　　　　　た
　しは
　　　　　　　　ここに
　もいます。

# 黒鉄の横笛

【楽器】くろがねのよこぶえ

－・－・－　・・・－　・－－－・　・－・－・

・・－・　・・－　－－・－・

・－・・　・－　・・－・・　・・　・・・－
－・－・－　－－－　－・

－・－・　－・－－　・・　・－・－

－－・－－　・・－－
－・・・　・・　－－・－・　・－・－－　・・

－・・－　・－－・

# 黒鉄の全集

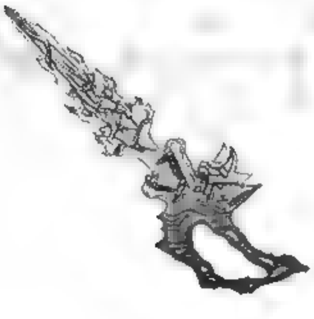


33 8 22 3
38 15 24 45
36 1 14 13 22 0″ 16″

45 42 33 26 16 15 9 14″
7 7″ 1 16 22
6 48 42 48 12 28 17

14 21 24 33 7 21 22
45 24 1 8 7″
36 26 37 28 22 12
21 14″ 40 16 1 45 26 16″ 21

36 1 42 35 16



# 邪神の剣



11/21　6:00
新宿アリア前に5万人の野次馬が押し寄せた。
脳をくり抜かれた悍ましい遺体の画像は、瞬く間にネット世界を駆け巡り、翌朝には全てのチャンネルが事件の特集に変更される事態にまで発展していた。

俺がそのテロップに釘付けになったのは、その異常さによってではない。昨夜残されたメールの受信履歴に同じ名前があったからだ。

5年ぶりに目にすることになったその名前は、
「岩間和弘」
俺がジャーナリストの道に進むきっかけになった人物であり、常に俺が望んでいるものを手にしてきた男だ。

なぜ、岩間が？
何かに巻き込まれたのか……？
様々な疑問が浮かんでは消えたが、メールを開き最初に飛び込んできた件名で、俺の疑念は確信にかわった。

# 邪神の鎌



11/21　6:10
岩間のメールには真っ黒な画像が添付されていた。慣れた手つきで画像に記録されたExifを確認すると、量子力学総合研究所と呼ばれる施設が、撮影時のGPS情報に残されていた。

11/22　10:00
科学誌のライターだと偽ってその施設に取材を申し込んだところ、先方は拍子抜けするくらい簡単に俺を迎え入れてくれた。戸口に入ると、白衣を着た男が俺を応接室に通し、
「広報担当の佐藤です」と名乗った。

11/22　13:00
佐藤の話を要約すると、この施設では『可能性の拡張』を研究しているらしい。例えばそれは、生きたまま脳を冷凍保存する研究であったり、サーバーに人間の人格を保存する研究だったりするようだ。

11/22　14:00
色々研究をしているが、結局のところ上手くいっていない事。「無限の時間」と「無限のエネルギー」があれば、上手くいくかもしれない事。
4時間に及ぶ佐藤の長話から得られた情報はそれだけだった。

# 邪神の杖



11/22　18:30
その後、俺は佐藤に連れられ研究室に向かった。そこは大学の講堂のような広い部屋だった。
白衣の科学者たちが巨大なモニターの前に佇み、部屋の奥では実験用らしき人型サイズのカプセルを制御していた。

モニターに良好な結果でも表示されているのだろうか？　佐藤の顔が途端に子どもっぽく緩んだ。秘密基地を友人に紹介するような調子で部屋にある機械を一つずつ丁寧に俺に説明してくれる。そして最後、奥のカプセルの一つを撫でると、「これは人間を仮想空間で生活させるための夢のマシンです」と熱っぽく語った。

11/22　19:30
まだ年若い科学者が佐藤に近づき、彼を「主任」と呼んだ。どういうことだと俺が尋ねると、
「まともな広報を雇う予算がないので私が広報を兼任しているんですよ。普段の肩書は一応、主任科学者でして」と佐藤は弁解するように答えた。

佐藤の肩書に驚いたが、続けて彼は自分がこの研究所の発起人であることを遠慮した様子で告げた。謙遜も過ぎれば嫌味だろうと俺は内心で文句をたれた。

# 邪神の書



11/22　20:00
佐藤は主任席に腰掛けた。
彼のデスクの上には『無限の猿』という文字が書かれたメモが置いてある。
佐藤はメモを凝視する俺に気づくと「長い時間をかけてタイプライターを叩き続ければ猿でもいずれはシェイクスピアが作れる、という定理ですよ」とその意味を教えてくれた。

「それで、どうですか？　良い記事は書けそうですか？」その問いを受けて俺は意識をメモから佐藤に移し、首肯する。
「それはよかった。この施設の魅力をあますことなく世間に伝えてくれると信じていますよ」

11/22　21:00
佐藤はここのクリーンさをアピールしたがっているように見える。確かに一見まともな研究所だ。が、岩間のメールの件もある。だから帰りの廊下を俺は注意して探った。
すると階段下のデッドスペースに違和感を見つける。そこは埃が溜まっていたが真四角に切り取られた一角だけ埃が綺麗に取り除かれていた。

俺はそこにしゃがみこみ、手を伸ばした。床に指が触れた瞬間「どうしました？」と背後から佐藤が声をかけてくる。
「隠し通路でもあるのかと思いましてね」と俺は冗談めかして答えた。
佐藤は「あなたはお茶目な人ですね」と笑った。

# 邪神の横笛

11/23　7:00
施設を訪れた翌日。
朝早くにアポなし訪問があった。
家の扉を開けると、外には若い男と淡い髪色によく似合う青い瞳の女が立っていた。
私服姿だったので最初はわからなかったが、すぐに気づいた。彼らはあの施設にいた科学者だ。

なぜ俺の家に？
頭に浮かんだ疑問に、女の方が答えた。
「私たちは、調査員(スパイ)よ」と
その目は嘘をついてるようには見えない。
詳しく尋ねると、あの施設のせいで友人を失った、と二人は言った。つまるところ、彼らの目的は俺と同じだった。

「ジャーナリストのあんたに、あそこの暴露記事を書いてほしいんだ」と調査員の若い男は言った。
内部調査は引き続き彼らが行い、見聞きしたことを俺に伝え、極秘資料を横流ししてくれるという。
「なぜ俺を指名した？」内心の疑問を口にすると「岩間という人間があんたに引き継いだ」と男は言った。俺は思わずつばを飲み込んだ。

岩間は亡くなる前、もし自分に何かあったらこいつを頼れ、と、彼らに俺の連絡先を教えていたそうだ。
彼らの言葉を信じるべきか、しばし考えた後、俺は彼らに「研究所に地下はあるか？」と問いかけた。
地獄がある、という答えが二人同時に返ってきた。
その解答が決め手となった。
俺は彼らを信じ、協力関係を結ぶことにした。

# 邪神の槌



11/25　10:00
その日、調査員の若い男が俺の家にやってきた。挨拶もそこそこに彼はバッグから黒いファイルを取り出す。中にはA4サイズのレポートが収められていた。
彼はそのレポートを俺に手渡した。

| <投与量> | <投与箇所> | <発現数> | <死亡数> |
|---|---|---|---|
| 1mg | 肩 | 0/30 | |
| 1mg | 耳 | 0/30 | |
| 5mg | 皮 | 1/10 | 10/10 |
| 100mg | 経口 | 1/2 | 2/2 |
| 250mg | 経口 | 30/30 | 29/30 |

※狂化後、処刑人により処分

死亡数、処刑人、レポートには物騒な単語が並ぶ。
彼はこれが人体実験の痕跡だという。
施設の地下には『被験者』と呼ばれる人間たちが捉えられ、
強制的に『夢』を見させられる。
その夢は、何度も見ていると理性を失い、凶暴化して人を襲う、と彼は語った。

俺の中で、今までおぼろげだった岩間の死の真相、それがようやく見えてくる。
岩間はたぶん、研究所の『人体実験』の真相を暴こうとしたから殺されたのだ。
その事実に気づいた瞬間、悪寒が襲った。

# 邪神の弓

11/27　14:30

「……そいつは被験者をまだ人間だと思おうとしていたんだ。私は馬鹿な同僚もいたものだと鼻で笑ってやったよ」

「しばらくすると奴は自分の立場を弁えず、一人の被験者に肩入れするようになった。相手は女でね。その時点で嫌な予感はしていたのだが……」

「奴は被験者を連れて逃げ出した。結果は言うまでもないだろ。誰も処刑人からは逃れない。あとに残るのは2つの死体とくだらん悲恋物語さ……」

そこで俺はレコーダーを止めた。
初老の男の額には、玉のような汗が吹き出ている。
調査員の伝手で会うことができたが、これ以上無理はさせられないと俺は判断した。
温くなったコーヒーを飲み干し、施設にいた元科学者は喫茶店から逃げるように出ていった。

# 邪神の戒杖

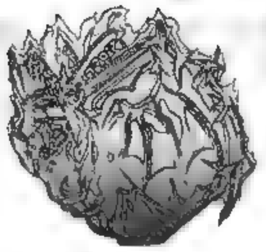


11/28　07:41
朝方にスマホが鳴った。
寝ぼけ眼で電話に出ると、相手はあの調査員の女だった。
彼女は焦った声で、テレビをつけて、と俺に促した。

【ニュース映像】
『本日未明、新宿セントラル前で男性の遺体が発見されました。遺体の身元は都内に住む52歳の無職、橘信彦さん。
遺体は頭部が破損しており、７日前のジャーナリスト惨殺事件との共通点から、警察は同一犯による犯行として捜査を進めていく方針です』

ニュース映像に映った被害者の生前の写真が、俺を凍りつかせる。
写真の人物は俺が昨日にインタビューした、あの元科学者だった。
ネットで『橘信彦』と検索をかけると、『脳をくり抜かれた遺体』がすぐにヒットした。何もかもが、岩間が死んだときと同じだった。

昨日のインタビューが直接の原因かはわからないが、いずれにせよ、このままでは俺や調査員の命も危ういだろう。俺の不安を察したのか「降りる？」と女は言った。
俺の脳裏に生前の岩間の顔が浮かぶ。
「ジャーナリストに危険はつきものだ」と俺は答え、内心の臆病風を吹き消した。



# 邪神の典籍

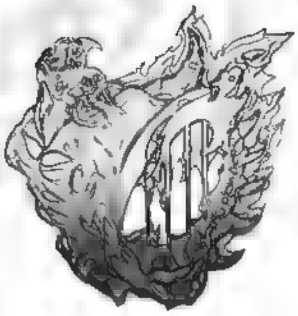


12/03　14:41
調査員の協力のもと、施設の暴露記事を書き上げた俺は、その原稿を懇意にしている出版社に持ち込んだ。原稿を読んだ担当は一度離席し、30分後に戻ってきた。
その顔は離席前に比して険しいものだった。彼は俺に原稿を突き返すと「許可が降りなかったので、掲載はできません」と冷たく吐き捨てた。

12/03　15:41
ここが駄目なら別の出版社に持ち込むまでだ。
そう考えた俺は、断られた出版社を出て駅に向かう。
その途中、背後から誰かの気配を感じた。
振り返るとマスクをつけた屈強な男が立っていた。そいつの右手には刃物のようなものが握られており、その先端は俺に向いていた。突き刺されそうになった俺はとっさにそれを避け、人混みにまぎれて逃げ出した。

12/03　23:01
俺は部屋に逃げ帰ると、調査員の女に電話をかけた。事情を聞いた彼女は「おそらく出版社に持ち込んだのが原因ね」と語った。
そして数時間が経ち、今現在、彼女は俺のベッドで横になっている。
誰が敵かもわからないこの状況に心身をすり減らした俺は、彼女を部屋に呼び出し安定剤として利用したのだ。その弱さを彼女は拒絶しなかった。

12/04　08:24
翌朝、彼女を送るために近所の遊歩道を歩いた。川沿いに咲いた桜の木々は淡紅色に彩られていた。枝から落ちた1枚の花びらが歩く彼女の肩に付着する。俺はその花びらを取り除くと、昨晩の感謝を伝えた。
別れ際、彼女は「不安な時はいつでも連絡して」と、出会った当初より柔らかい声で言った。





# 邪神の琴

12/11　18:00
その日、俺は手元に置かれた大量の資料に目を通していた。
それらは全て、国内にある大小様々な会社の従業員名簿であり、どの名簿にも“マエダ”の名が記載されていた。

ここ一週間、俺は複数の興信所を使って、
“マエダ”の存在を調べさせた。その結果判明したのは、マエダという人間が何十もの会社に在籍しているという事実だった。

マエダの職業は大企業の役員や警視庁部長、中小出版の編集長、零細企業の社長等、多岐に渡る。
興信所の調査によると、ある会社ではパワハラで部下を自殺にまで追い込み、別の会社では逆に上司に毎日難詰され続け、薬を飲みながら出社しているとのことだった。

つまり、名簿上に名が残っているだけではなく、奴はそれらの会社全てで、まともに働いていた。
同時にこなせるはずはない。
マエダ同士の関係性は今のところ不明だが、何かがあるはずだ。興信所の調査は奴という人間への謎をますます深めるばかりだった。

# 邪神の斧



12/11　21:00
その日、俺はテキストエディタで施設の暴露記事の改稿を行っていた。
別の出版社に持ち込むことも考えたが、前回の襲撃者の件もあり、断念した。
出版が駄目なら個人でやるしかないと考えた俺は、この記事をネットに公開することにした。

ネットの海で記事が目立つように、センセーショナルに、より目につく形にタイトルを書き換える。処刑人や被験者、人体実験の証拠が書かれたレポート類をPDF化して添付することも忘れない。そうやって改稿を重ねた結果、記事が完成したのは深夜の2時近くだった。

12/12　01:59
完成した記事を読み返した俺は自分の限界を感じた。これではネットに上げても、捏造だと思われる可能性が高い。紙のレポート類だけではなく、より証拠能力の高い資料が必要だった。

俺は調査員の二人に連絡を入れ、施設の地下で行われる人体実験の様子を動画にとってくれと頼んだ。紙の資料の横流しよりも危険な行為。だが、二人は二つ返事で了承してくれた。彼らには足を向けて寝られないなと俺は思った。

# 邪神の薙刀



12/16　20:30
調査員の女の訪問があった。
扉を開けた俺は驚愕する。玄関口に立つ彼女はその白衣を血で汚しており、金色の髪も今は赤く染色されていた。恐る恐る「医者を呼ぶか？」と尋ねると彼女は首を振り「見かけほど重傷じゃないわ。これ、ほとんど返り血だから」と答えた。

どうやら、彼女ともうひとりの若い男がスパイだと施設の人間にバレたらしい。二人は施設から命からがら逃げ出し、その過程で何人かの科学者を殺してしまったのだ。
調査員の若い男とは逃げる途中ではぐれてしまい、連絡がつかない状態だという。

「追っ手は撒いたわ。跡はつけられていないはずよ」と彼女は俺の不安に先んじて答える。だが彼女の緊張した面持ちを見るに、危機が去ったとは言い難い。いざという時の覚悟はしておいたほうがいいかもしれないなと、内心で俺は身を引き締めた。

「それと、あなたにお願いされた物を持ってきたわ」
そう言って彼女は血に濡れた白衣の内ポケットから、1枚のSDカードを取り出した。
そのSDには俺が欲してやまなかった人体実験の記録映像が、収まっていた。

# 邪神の棺杖



12/16　20:45
調査員の女から受け取ったSDカードをリーダーに通しPCで再生する。すると真っ白な壁に囲まれた部屋が映された。そこには白衣を着た科学者と被験者らしき女性がいた。
その科学者の顔には覚えがあった。
そいつは、あの日、施設で俺を案内してくれた男。主任科学者の佐藤だった。

部屋の中には純白のシーツが敷かれたベッドがあり、そこで被験者は眠っていた。
眠る被験者の頭にHMDのようなものが被せられた。それから伸びたケーブルは心電図のような機械に繋がれている。機械の画面に映った波形を前に佐藤はほくそ笑む。

シークバーを早送りすると、被験者は1時間後に起き上がった。
佐藤は覚醒した被験者に話しかけるが、彼女の目はうつろで、喋る内容も支離滅裂だった。
だが、佐藤は納得したようにうなずき、また、被験者をベッドに横たわらせた。

睡眠と覚醒を繰り返す内に被験者の目からは光が消え、ついには雄叫びをあげて暴れだした。
次の瞬間、画面端から巨大な影がやってくる。そして、被験者はそいつに頭を潰されて終わった。潰れた頭を見て俺は吐きそうになる。
だが、これで必要なアイテムは揃った。
あとは動画を記事に組み込んでネットに上げれば俺の仕事は完了だ。

12/16　21:00
調査員の女から、今後の連絡方法について提案があった。いわく、電話は盗聴されているかもしれないため、今後は彼女が指定したチャットアプリでのやりとりに切り替えたいとのこと。また、送るメッセージは平文ではなく暗号にしてほしいと頼まれた。
その後、1時間かけて彼女は暗号の解読方法を俺に説明し、我が家をあとにした。

12/17　22:00
調査員の女が出ていった後、俺は動画のバックアップを取ることにした。契約しているクラウドサービスに動画をアップロードする。この時ばかりは費用をケチり、マンション回線にした自分を憎んだ。
その時、マンションの自室を誰かがノックした。
彼女が忘れ物でもしたのかと思い扉を開けると、外には予想外の人物が立っていた。

「お久しぶりです、マエダです」
目の前の男の名乗りに俺は首をかしげる。
「あんたは佐藤だろ？」
「いえ、あなたが探っているマエダですよ」
俺の脳が警告を発する。なぜならば、眼前の『主任科学者』は動画内で被験者の心を壊した張本人でもあったからだ。
奴の右手が懐に向かう。その動作に身の危険を感じた俺は、とっさに、奴の顔面を右拳で殴りつけた。

マエダを殴り倒した俺は即座に部屋から逃げ出す。
階段を一段とばしで下り、大急ぎでマンションの外に出る。すると、直後、頭上で爆発音が聞こえた。
耳を押さえながら見上げれば俺の部屋から炎と煙が立ち上っている。
記事や動画のデータが収まったPCは中に置いたままだった。

# 邪神の提琴



12/20　23:35
携帯で確認したところ、クラウドサービスに動画データは上がっていなかった。
マエダに俺の家と人体実験の証拠を壊された。
帰る場所も切り札も失った俺は心を蝕まれ、マエダの影に怯えながら逃げ続けた。
今現在、俺は関東から遠く離れ、九州の港町にある安ホテルに隠れている。

12/20　23:40
薄暗い部屋で、岩間のメールを開く。そこに添付された真っ黒な画像が今の俺の状況を作り出した事を思い出していた。
俺は、あいつの意思を引き継いだことを後悔はしていない。ただ、もっとうまくやればよかったとは思う。
今の俺の状況はまさに敗残者と呼ぶにふさわしかった。

12/20　23:50
突如、携帯が震え、ヘッダーに通知が表示された。差出人名を見て俺の心臓が飛び跳ねた。
チャットアプリを開くと暗号化されたメッセージがあった。
『新宿アリア前に来て』
そのメッセージを読んだ俺は、この場所から動き出せずにいる事を心の中で詫びた。

12/21　00:00
メッセージと共にURLが貼られている事に気が付いた。それを押すと、ライブ映像が始まった。場所は新宿アリア前。そこには『調査員の女』が横たわっていた。彼女は脳をくり抜かれている最中だった。赤く染まった男が、彼女だったモノを貪り食いながら、哄笑した。

――そいつは、行方不明になっていたはずの男だった。

# 荊棘の剣

#1
ある日、携帯に一通のメッセージが届いた。
『世界初。五感で体験するVRデバイスのテスター募集』
そこに書かれていたのはテスターの求人情報で、
メッセージの下には住所が記載されていた。

僕は近いうちに自殺しようと思っていた。
死ぬ前に最新のVR機器に触れるのも悪くない。
そんな軽い気持ちでメッセージに書かれた住所へ赴いた。
そこは何かの研究施設らしく、
看板には『量子力学総合研究所』とあった。

中に入るとマエダとかいう男に案内されて、
病室のような部屋へ通される。
ベッドサイドテーブルには、
VRデバイスのHMDが置かれていた。
「これは異世界への切符です」
HMDを指してマエダは言った。

マエダとの軽い面接を終えると、
僕は早速HMDを装着させられた。
そこから先は正に未知の体験だった。
VRゲームはやったことはあったけど、
その機械は過去のどんなVRよりも
リアルな質感を伴って僕を現実から連れ出した。

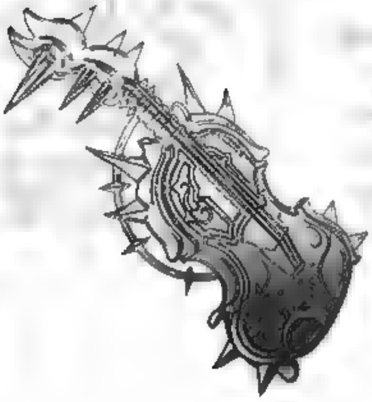
# 荊棘の鎌

#2
僕はファンタジーのような世界で、
翼の生えた生物になって空を飛んでいた。
全身に感じる浮遊感と肌を打つ風、空の匂い。
それらは紛うことなき本物だった。

その世界では翼の生えた生物はナイトメアと呼ばれていた。
こんな幸せな夢のような体験をしているのに、
悪夢(ナイトメア)なんて変だなぁと思った。
素敵なVR世界の中で僕は飛び続けた。

VRの世界から戻ると職員らしき人から、
VRでの体験や感じたことを色々と質問された。
テスターなのでバグの有無について聞かれるかと思ったけど、
職員の質問はまるで心理カウンセリングのようだった。

僕は泊まり込みでテスターを続けた。
それはとても楽しく、心地よいものだった。
仮想の空に抱かれて自由を感じていた。
死ぬのは延期してもいいかと思ったくらいだ。
でもある日、白い髪の女が現れて僕を殺した。



# 荊棘の提琴

【楽器】いばらのていきん

#3
施設の中で友達ができた。
体が陽の光を受け付けない体質の女の子。
だから、仮想とはいえ、自由に走り回れる
VRの世界が凄く楽しいと僕に語ってくれた。
体は弱いけど、とても明るい子だった。

僕は彼女に相談した。
最近VR空間に白い髪の女とか、
いばらに巻かれた女とか、
とにかく色んな敵が現れて
何度も自分を殺してくるのだ、と。

殺される度に目覚め、次にVR空間に行くと
別のナイトメアに変わっているんだ。
生まれ変わるように。
あの女達がゲームのエネミーだったなら、
難易度が高すぎるだろうと僕は愚痴った。

「私はまだ会ったことがないけど、
もしそのエネミーにエンカウントしたら
カタキ、取ってあげるね」
そう言って少女は僕を励ましてくれた。
仮想もいいけど、彼女とお話するのも悪くない。
そう思う自分がいた。

# 荊棘の魔術書

#4
日が経つ程にVRの中で殺される頻度が増えた。
殺される度に、リアルでも幻肢痛のような痛みを感じ、
脳みそに汚泥が詰まったような倦怠感を覚えることが増えた。
それは僕だけの現象じゃなかった。
彼女の顔からも次第に笑顔が消えていった。

ある日、僕は彼女に襲われた。
獣のように唸り出し、彼女は僕の腕に噛みついたのだ。
その姿はVR世界のハウンドを思い起こさせた。
従業員が少女を押さえつけ「発現した！」と叫ぶ。
首に注射を打つと彼女は沈黙した。

翌日、僕はマエダにテスターを降りたいと伝えた。
「被験者は許可なく辞めることはできません」
マエダが何を言っているのかわからなかった。
僕はテスターとして応募したのだ。
被験者って何だよ。

僕は彼女の部屋に訪れた。
ベッドの上に座る少女の目には光がなく、
溌剌とした笑みは虚無に変わっていた。
まだだ、まだ間に合う。
僕は彼女の手にそっと触れた。
「一緒に逃げよう」

# 荊棘の杖



#5
虚ろな彼女の手を取って、僕は走った。
だが施設の渡り廊下に出ようとしたところで、
マエダが僕達の前に現れた。
「異世界の魂は飽きましたか？」
マエダの隣には影のようなカタチをした人がいた。
「誰も処刑人からは逃れられません」

処刑人と呼ばれたそいつの手には、巨大な斧が握られている。
振り上げた凶器を前に、僕は動けなかった。
――直後、銃声が聞こえた。
現れたのはボロボロの服を着た髭面の男。
その手に持った銃が処刑人を沈黙させた。

いつの間にかマエダの手にも拳銃が握られ、
髭面の男と銃を突きつけ合っていた。
「お久しぶりです。今回も科学誌の取材ですか？」とマエダは言った。
男は僕を横目で見ると、自分の服のポケットを目で指した。
僕は男のポケットに手を入れる。
中に入っていたのはUSBメモリだった。

「そいつを持って逃げろ」と男は言う。
何が何だか分からないし、
こんなことならさっさと死んでおけば良かったと思わなくもないけど、
でも、握った少女の手は温かくて。
だから僕はまだ生きてやろうと思った。
この監獄から抜け出すために、僕達は走った。

# 荊棘の斧



#6
二人の足音が遠ざかるのを確認した後、
髭面の男――かつてジャーナリストだった彼は、
銃を突きつけたまま、
「〝解除キー〟は、あの子に渡した」
とマエダに伝えた。
「これでお前はおしまいだ」
男は憎悪とともに引き金を引いた。

その弾丸は〝影〟の斧によって弾き落とされた。
影――処刑人は、体躯に似合わぬ速さで男との間合いを詰め、
彼の体に斧を振り下ろす。
男はとっさに腕を出し、それを受け止めた。
腕が裂け、刃が骨にめり込んだ。
それでも男は戦意を失わず、処刑人とマエダを睨み付けた。

あなたはお茶目ですね、と言いながら、
マエダは男に近づき、その額に銃を突きつけた。
「岩間を知っているか？」
男の問いをマエダはあざ笑う。
その下卑た笑いを聞いた瞬間、男は着ていたボロボロのコートを広げた。
外衣に隠れた腹には、大量の爆弾が巻き付けてあった。

それは研究所の職員が密集するこのフロア一帯を吹き飛ばすには十分で、
別棟にいる被験者を傷つけるだけの威力はない。
殺すべき者だけを殺す――緻密に計算された被害範囲だった。
「誰も俺(処刑人)からは逃れられない」
爆弾が起爆し、周囲を炎と閃光と爆風が覆った。

# 荊棘の弓



#7
新宿アリア前で『彼女だったもの』を見たあの日から、
俺はジャーナリストであることを辞めた。
ジャーナリズムではなく、純然たる殺意と憎悪で以て、
俺はマエダと奴の背後にいる組織と向き合うことにしたのだ。
言い換えれば、それは奴らへの復讐だった。

俺はどうすれば奴らを殺せるかだけを考えた。
警察もマエダに汚染されている可能性がある。
あの暴露記事や動画だけでは、殺しきれない。
だから、より非合法な手段で、俺は奴らの弱点を探ることにした。

調査を通じて、奴らがとあるデータを握りつぶしていることがわかった。
それは、あの調査員の女が俺に渡すはずだった、HMDの内部データだった。
俺は彼女の忘れ形見を手に入れ、徹底的に調べ上げ——それが並行世界(別のモノガタリ)に飛ぶ機械だということを突き止めた。

俺は〝協力者〟の力を借りて、
『世界をリセットする鍵』を作った。
それを使えるのは、あの機械で一度でも並行世界に飛んだ者。
だから俺は、一人の少年に鍵を託した。
これで、俺の役目はおしまいだ。
「岩間…………——……」
目映い光の中、俺は友人と彼女の名を呼んだ。
モノガタリの終わりに、ふたりに会えると信じて。

# 荊棘の釜



#8
背後で大きな爆発音がした。
振り返ると上階が崩れて煙が上がっている。
建物内を警報音が駆け巡り、人々があっちこっちを走り回っていた。
そのドサクサに紛れて、僕は彼女の手を引いて、研究所を脱出した。

研究所から逃げた僕らは、今は使われていない廃工場に隠れた。
太陽の光を受け付けない彼女とともに、薄暗い工場の奥に腰掛ける。
これからどうしようかと話しかけても、少女からは反応がない。
まだ、その心は虚ろから戻ってきていなかった。

廃工場に人がやってきた。
訪問者は白衣を着た眼鏡の女性で、
外見から僕らを捕まえにきた研究所の職員かと疑った。
「心配ご無用。私は貴方たちの味方です」
その女性はあの髭面の男の協力者だと自己紹介した。

#9
僕らは小さな研究室(ラボ)に連れてこられた。
中には大きなPCとあのHMDが2つあった。
女性が僕から受け取ったUSBをそのPCに指す。
直後、ラボの窓ガラスが割れ、狩猟犬のような生き物達が飛び込んでくる。
それは、HMDの世界で見た、ナイトメアだった。

# 荊棘のハープ

【楽器】いばらのはーぷ

白衣の女性は懐から銃を取り出し、襲い来るナイトメアに応戦する。
でも、敵の一部は弾丸を避け、女性の頭上を飛び越え、僕らに向かってきた。
僕はとっさに少女を抱きしめて、床に伏せる。
頭上を狩猟犬(ハウンド)の爪が掠めた。

——直後、敵の体が分断された。
血の雨が降る中、剣を携えた白い髪の女性と、
いばらに巻かれた女性が目の前に立っていた。
「遅いですよ——[redacted]、[redacted]」
白衣の女性が彼女達の名を呼ぶ。
そのふたりは、あのVR空間で僕を何度も殺した人たちだった。

温かな感触が僕の頬に触れる。
「いたい？」
そう問いかける少女の指には、僕の血がついていた。
狼の爪が掠めた傷だ。
僕は首を振ると、少女の手を握った。
「痛くないよ。へっちゃらだ」
光を取り戻した彼女の目を見て、僕は答えた。

敵を殺し尽くすと、白衣の女性は僕たちに「HMDを被ってください」と言った。
この人も僕と少女を実験に使うのかと思い、後ずさる。
「信じてください。敵はもういません。
ここから先は、混沌を終わらせる最後のチャンスです」

# 荊棘の戒杖



#10
僕と少女は手を繋いだまま、HMDを被った。
あの白衣の女性の言葉を完全に信じたわけじゃない。
でも、このまま逃げ出してもどこにも行けないと思ったから。

――上位ディレクトリは空ではありません。
――上位ディレクトリは融合を果たしています。
――それでも、上位ディレクトリを削除しますか？

目の前に現れたその問いかけに、
僕は少女と共に「はい」と答えた。

$ rm -r alice B01
rmdir: remove `ALICE/ :

瞬間、ファンタジーと現実世界の風景が同時に立ち現れ、
ねじれた時空みたいに混ざり合って、
そして、割れた。

――当該アプリケーションの初期化に成功しました。

目を覚ますと家のベッドにいた。
繋いだ手の中のぬくもりは失われていた。
携帯を見ると、非合法な人体実験をしていた研究所が摘発されたというニュースが飛び込んでくる。
カメラに映る建物は僕がいた研究所よりも小さくてみすぼらしかった。

世界が不可逆的にリセットされたのだと、僕は気づいた。

直後、差出人不明の画像付きメールが届く。
そこには病院の中庭で眠る少女が映っていた。
晴れた日の午前11時。
添付画像に記憶されたExifを確認すると、僕は家を飛び出した。

新しい世界(モノガタリ)を走る。
彼女に会うために走る。

もう死にたいとは思わなかった。
死を願うより大事な友達ができたんだ。

【魔具】えにしたつはさみ

# 縁断ツ鋏

あの娘が欲しくて、欲しくて、
艶やかな黒髪をチョキンとな。

可愛いあの娘の顔が見たくて、
大きな帽子をチョキンとな。

だけどそのハサミは縁を絶つハサミ
可愛いあの娘との縁もバッサリと。

今世の縁が切れたなら、来世で縁を結びましょう。
チョッキン。チョッキン。離します。
チョッキン。チョッキン。今世の縁をチョッキンと。

# 睡眠の槍



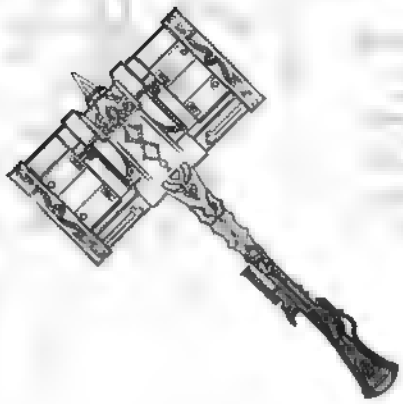
いえーい。
たぬきさんゲーム、はじめるよー。

た私はた寝るたこたとが好きた。

起こたさたれることたは嫌い。

た私はた寝るこたとが好きた。
起こしたた人たは死刑たね。

たたたたたでもね、夢の中で出会う、貴方のことは好き。
たたただって、お日様みたいで優しい匂いがするから。



シンデレラ/クラッシャー

# 卑劣の大槌

【打撃】ひれつのおおつち

～仔オークのカツレツ　灰かぶり風～
1.まず無力な少女を装い、森で眠ります。
2.甘い香りに引き寄せられた、頭の悪いオークを脅します。
3.一族郎等を人質に取り、群れまで案内をさせます。

4.人質を解放すると約束し、乳のみ子のいる家庭まで案内させます。
5.オークの母乳100mlを搾乳します。
6.そして材料となる子オークを大鎚でペシャンコにし、筋繊維を断ちましょう。
7.子オークを軒先に吊るし、血抜きをします。
※この工程では鮮度が肝心です。可能な限り速やかに行いましょう。

8.オークの母乳に仔オークを浸し、臭みを取ります。
9.それでもまだオークの臭みは酷いので、香草を混ぜた下味にしばらく漬け込みましょう。
10.よく水で洗い流した後、薄く小麦をまぶし、バードの卵液に浸します。
11.漬け込んでいる間に、工程3で約束を信じ込ませたオークの寝首をかき、殺害します。

12.前工程で入手した、平均的な成人オーク一頭分の油を160度に熱します。
13.キツネ色になるまで、じっくりと揚げたら出来上がりです。

感想：やっぱり臭みがひどかったので、一口食べて暖炉の灰にしてやった。

# 緋色の剣



取るか、取られるか。
それが、この街で生きる者の共通認識であった。

1日を生ききるために、命を奪う。
そんなことは日常茶飯事だ。
だから、目の前に立つ盗賊を恨みはしなかった。

せめて、あと1日。生きながらえたい。
そうすれば、明日はお給金が手に入る。
久しぶりに、温かなスープを……

「ポトリ」と音がする。
「コロリ」と首が転がる。
……あぁ。こんな小さな願いも叶わないのか。
転がる大地は冷たく、降りしきる赤いスープは温かかった。

# 淑女の竪琴

私を愛してくださいね。
さすれば、貴方に幸福が訪れますよ。

私を愛してくださいね。
さすれば、貴方に生涯を捧げます。

私を愛してくださいね。
私が愛したのですから、当然ですよね。

私を愛してくださいね。
さもなくば、貴方を殺しますよ。

# F8魔導小銃

基本的にはF7魔導小銃を元に、10x24mmジグラヌ弾仕様に再構築したモデルとなっている。DWk社が社運をかけたプロジェクトを結成し、開発に当たったとされる。

リュカイネ式半魔導小銃に採用されたものと同様のロッキング機構が採用されており、これは本銃でも踏襲された。
この方式を採用することにより、注入魔力の均一性が問われなくなったことにより、広く普及されることとなった。

この銃の特筆事項をもう一点あげるとすれば、それは反動の軽さにある。これにより当時一般的だった魔導銃と比して、格段に高い命中精度が約束され、出荷数の増大を大きく後押しした。

しかし一方で、この機構によって銃の構造が複雑になり、単価の上昇にも繋がった。メンテナンスにも高度な技術が要求されるこの銃は、世界的な恐慌の影響により次第に戦場からその姿を消した。現在はDWk社の倒産を契機に生産が停止されたことから、名実ともに伝説の銃となった。

# 戒律の提琴

【楽器】かいりつのていきん

歌が聞こえる。
それは奪われた幸福を嘆く、呪いの叫び。

歌が聞こえる。
それは愛を囁く、求愛の叫び。

歌が聞こえる。
それは我が子を叱る、警告の叫び。

歌が聞こえる。
それは、同じ歌詞。同じ旋律。
だが、込められた想いは千差万別であった。
この歌を歌うこと以外、全て禁じられた村。
そこでは今日も、同じ旋律が響き渡る……

# 禁言の杖



死の淵に立つ感覚。
それが生を感じる唯一の瞬間。

塔の縁に片手でぶら下がる時。
ゴロツキの根城に爆薬を放つ時。
「ああ。確かにここで生きている。」と強く感じた。

だから、この杖を手にした時に課せられた
「自らの名を発すると、死ぬ呪い」は
俺の人生に新たな潤いをもたらした。

何度も何度も、自らの名を途中まで発する遊びに興じた。
何度も何度も、危ない橋を渡った。
だが、それも唐突に終わりを迎える。
まさか、寝言でもその言葉を発することが禁じられているとは
夢にも思わなかったのだ。

# 円環の槍

【長柄】えんかんのやり

憎悪。希望。終焉。欲望。現実。
飽和。混沌。融解。衝動。慟哭。

乖離。蔓延。焦燥。怒声。憤怒。
冒涜。怠惰。放蕩。輪廻。再生。

虐殺。惰弱。隔絶。亀裂。軋轢。
闘争。勝者。大願。円環。物語。

成就。束縛。孵化。波濤。魔物。
作者。寄生。合一。分離。転生。

# 書架の巻物

〝欲望〟を受信しました
モノガタリ修復中

キャラクターズの共鳴開始
生体恒常性、異常なし

書架の修復開始
栞の取得完了

語句の形成完了
「ヨウこそ、最悪の世界へ」

# 聖騎士の弓

【射出】せいきしのゆみ

教主の座すその都は天国に最も近い聖地として知られ、多くの巡礼者が訪れる。
信心厚きワシは斧槍を手に聖都の門前に立ち、今日も怪しげな人物の出入りに目を光らせた。

異教の間諜も違法な品を扱う商人も、ワシの眼光は決して見逃さぬ。
これと見た輩に進んで声を掛け、今日も彼らの心胆を寒からしめた。

あまりに有能な大先輩であるワシを気遣い、門前に立つとすぐさま後輩たちが飛んできて、ワシの代わりに歩哨を務めてくれるようになった。
若い者にはまだまだ負けぬと言いたいが、そろそろ後進に道を譲るべきかのう。

家族から話を聞いてきました。
聖都防衛の任に当たっていた元教会騎士の彼は、腕の怪我により退役。
神の騎士たる事にしか自分を見いだせなかった彼は妄想に取り憑かれ、自分が現役で聖都を護っていると思い込んでいます。
まあ実害はありませんし、ポックリ逝くまで放置しましょう。

# 四〇式斬機刀



回収地点：「遊園地廃墟」
状況：大型の機械生命体との戦闘で大破したものと推測。敵は音波を使う特殊な攻撃である事が記録に残っている。α。

回収地点：「森林地帯」
状況：放置され、小動物の巣として活用されていた。周囲には獰猛な動物が多く、それらと戦闘した結果残されたのかもしれない。α。

回収地点：「水没都市」
バンカー陥落後、生き延びたヨルハ機体がここで武装を廃棄した記録が残っている。何故武装を放棄したのか詳細は不明だが、思考回路に不具合があった可能性が高い。α。

回収地点：「塔」崩落地点。
詳細不明。回収者不明。α。



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

9S/
パラディン

# 黒の倨傲

【長柄】くろのきょごう

その槍を持って一度舞えば、１００人を魅了し、１年の寿命を奪われる。そんな呪われた噂が立ったのは、舞踏家一門の頭領が若くして死んだ時だった。彼は普段から好んで、薄気味悪い槍を使って舞っていたのだ。

頭領の死後、彼が好んで使った槍は使用する事を禁じられ、蔵の奥へとしまわれた。もともとあの槍は南蛮から来た赤い目の商人が売っていた物だったが、頭領が値切りに値切って信じられない程の安値で手に入れた物だった。

南蛮から来た武器の割に、不思議と日本の文化を感じさせる顔の装飾が槍には施されていた。顔にはどこか血を拭ったような汚れがついており、掃除を任せられている小間使いも恐ろしがって近寄らなくなってしまう。

薄気味悪くて、捨てるにも捨てられず困っていたその時、あの南蛮の商人がフラリとやってきて引き取ると申し出たのだ。彼は売った値段と同じ小銭で槍を引き取ると、薄い笑みを浮かべ、妙な音でこう言った。「ごチソうさまでシタ」

ニーアオートマタ

©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

# 白の契約

戦闘中に不具合。プロセスを強制終了し、戦闘継続。
飛び散る血・血・血・油。
巨大な廃工場の内部で、機械生命体の叫びと絶叫が木霊する。
あれは敵だ。だから倒さなくてはならない。

機械達の中には親子のような姿をした者がいた。
彼等は泣き叫びながら、私に命乞いをする。
そんな敵を何十匹、何百匹と倒してゆく。
自分の心が凍っていくのを感じる。

機械達が踊るように周りを取り囲む。
許さない、許さない、許さない。彼等は口々にそう叫んでいる。
私は剣を抜き、戦いを挑む。

夢はいつもそこで覚めるのだ。

目が覚めると、虫の声が鳴っている。
最近、休眠時間が伸びている。不具合だろうか。
長い夢を見ていたような気がする。
彼の寝顔を見ながら、私は、唇を強く噛み締めた。



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

『エミール/』
『クレリック』

# 7号の杖

【祈祷】ななごうのつえ

美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい美味しい不味いよ美味しい美味しい

美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい苦しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美しい美し

大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き抱きたい大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大

コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワタスケテイコ

『ニーアオートマタ』

©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

# 鉄パイプ

2月4日
新宿区のスーパーマーケットで不具合報告。
検査したが不具合は見つからず。
ガス検知器にも反応なし。

2月6日
新宿区のスーパーマーケットで不具合報告。
二日前に連絡があった場所と同一。
検査したが不具合は見つからず。
ただし苦情対応の為、一部パイプを交換。

2月8日
新宿区のスーパーマーケットで不具合報告。
上長と相談し、一旦電話対応のみで納めてもらう。
今後の対応についてはまず総務の方で対応する事が決定。

3月14日
新宿区のスーパーマーケットで不具合報告。
ただし封鎖区域に指定された為、未対応。

【打撃】てつぱいぷ



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

# 三式戦術槍

【長柄】さんしきせんじゅつそう

どこか遠い国からやってきたと言われるその武器の最初の印象は「無骨」という一言だった。錆びた柄、意味不明の機械、こぼれた刃……槍と言われて売られていたが、その用途には重すぎるように見える。仕入れたは良いものの、こんなモノが売れるんだろうか……？

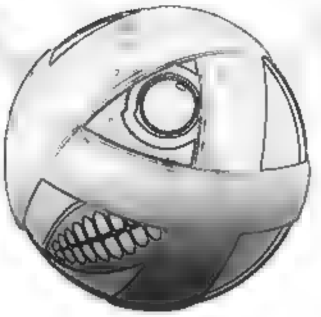
ウチの王様には困ったもんだ。「３日以内に一番重い武器を持ってきた者に褒美を与える」なんて急に言い出すんだから。なんでも勇者を選抜するのに使うらしいが、言われたこっちはたまったもんじゃない。だから、ガラクタ屋でこのクソ重い槍を見つけた時は、自分に女神さまが付いてるかと思ったね。

相手の国を滅ぼした時に武器を奪い、それを誇るのは武勇の証だ。ただ、奴らの国から奪ったこの武器はどうも使い勝手が悪い。小便を垂れ流しながら命乞いをしていた王が大事にしていたから、さぞや価値のあるものだと思ったんだが、鑑定士によると単なるガラクタらしい。ガッカリにも程がある。

機械生命体との戦いで発見されたその武器は、おそろしく経年劣化していたが、研究部によって未発見の回路が発見された事で一躍話題の武器となった。旧世界にそのようなテクノロジーがある事は考えづらい事から、研究者の間では偽装を疑う声も上がっているが、今後の戦闘に役立つ事は間違いないだろう。



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.



# エミールヘッド



【本日のお品書き】
鉄クズ：１０G
機械生命体頭部：１２０G
赤い色に塗られた機械生命体の爪：４５０G

【本日のお品書き】
高性能電磁バレル：１２００G
旧世界の電子レンジ：２５００G
旧世界のノートパソコン：６０００G
※中に秘密のフォルダがあります。

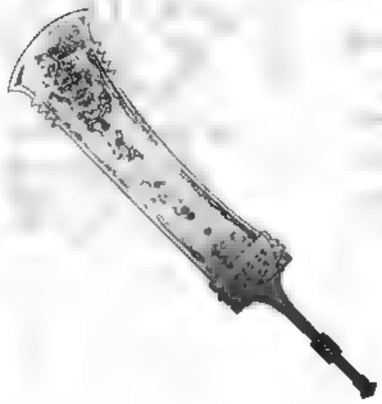
【本日のお品書き】
本日はめぼしい商品の入荷はありませんでした。
またのお越しをお待ちしております。

【本日のお品書き】
食べかけのアジ：３G
放熱スカート：３８００G
ヨルハ部隊スキャナーモデル用ポーチ：２５００G
ブラックボックス：１万G（動作保証外）



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

2B/
クラッシャー



# 百獣の剣王

【打撃】ひゃくじゅうのけんおう

【0806-0002】
報告：巨大工場の地下深くに新たに旧世界の生産施設の稼働が確認された。機械生命体の反応は確認されていない。
推測：自動化された人類遺跡が現在まで活動を継続していた。
推奨：司令部への報告と、さらなる調査。

【0806-0006】
報告：巨大工場の地下深くに存在する制御システムは、旧世界の人類が作り出した物である事が判明した。
推奨：調査の継続と、各種システムのデータバックアップ及び解析。

【0806-0018】
報告：調査対象である工場制御システムの調査が完了。内部のデータから人類情報が検出され、人類の人格データを利用した物である事が判明した。本件については慎重に調査を進める事に決定された。以上。

【0806-0021】
報告：調査対象である工場は旧世界の人類が作り出した兵器工場と判明。工場制御には当時の国家元首と国民の人格データが生きながらにしてシステムに組み込まれた事も確認されている。
疑問：人類の戦争に対する非合理的な生産活動。



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

# 探究の注射器

素晴らしいクスリが完成しました！
これさえあれば、三日三晩
なにも食べなくても、元気ビンビン！

さぁ。摂取限界量を測定しましょう！
まずは体重15kgの子ハウンドに、3ℓの
クスリを投与しまーす。

あっ一発で死んじゃいましたね。
まぁ。このステップはスキップして
次は人体で検証しましょう！
結局、人間に投与できなくては意味がないですからね。

ようやく完成しました！
くーーー。効きますね！
目の前がグラングランします。
……おっ新種の蝶々のようなものが目の前を旋回しています！
こうしていられません！
何としても捕獲して、解剖しなくては！

# 黄金の杖

【祈祷】おうごんのつえ

これから、私たちは
貴女を救うための戦いへ向かいます。
もし、失敗したら貴女に会える事は無いでしょう。

だから、私たちは信頼できるものたちに
貴女を託します。
そしてもし、私たちがいなくても
寂しく無いように、貴女の誕生日に
贈るプレゼントを全て用意しておきます。

もし、時代の流行が変わってしまっていたら
ごめんなさいね。
そうならないよう、考えて選んだつもりなのだけど。
貴女が誕生日を心待ちにできるような物を
選べていたとしたら、嬉しいです。

あと、私たちが貴女をいかに大切に思っているのかを
手紙に残します。
もし、貴女が頼れる人がいなかったとしても
けっして泣かないで。
貴女には私たちがいつまでも、そばにいますよ。
最愛の想いを込めて。母より。

# 黄金の剣

5歳のお誕生日おめでとう。
きっと貴女に
私たちの想いを伝えても届かないでしょうから
この手紙に記すことにしました。

いつか貴女がこれを見つけた時。
私たちが貴女のことを、
愛していたと気づいて欲しいのです。

5歳を迎えた貴女は幸せですか？
それとも、まだ暗い世界に囚われたままでしょうか？
もしそうであったなら、ごめんなさい。

貴女を殺せなくて、ごめんなさい。
貴女を生かしてしまってごめんなさい。
貴女は私たち夫婦にとって掛け替えのない宝物なのです。
災いをもたらす、呪い子だと予言されようと
殺すことなどできません。

# 黄金の竪琴



10歳のお誕生日おめでとう。
きっと貴女は美しい女性に成長していることでしょう。
貴女の母と同じように、歌と小鳥を愛する、
素敵な心を持ち合わせてくれたら、何よりも嬉しいです。

いつも遊んでやれず、申し訳ない。
だが、いつだって父さんの心は側にいると
この提琴を奏で思い出して欲しい。
こんなことを願うのは我が儘だろうか？

もし、一族の掟もなく
貴女が普通の子供に生まれてくれていたのなら
教えてあげたい事が沢山ある。
一緒にみたい景色が沢山あるんだ。

あぁ。どうか貴女が危険な存在でないと証明されますように。
そうしたら、貴女をゴーレムの肩に乗せ世界中を旅しよう。
貴女が失った10年間を埋め合わせる程
素敵なこれからを過ごそう。

# 束縛の提琴



「自分が正しくない事なんて、知ってる。」

「戦い続けるしかないんだ。」

「もし彼が復活しなかったら……私は……」

「感情を捨てるんだ……」

「この戦いは、私が存在する意味そのもの。」

「あの人がいるから、今の私が在るんだ。」

「何度倒れたって、立ち上がる。」

自らを奮い立たせるための歌は
いつしか、自身の境遇を呪う怨嗟となった。
……心に影が落ちる。
私の全てが闇に落ちる日は近い。

# 号鐘の杖

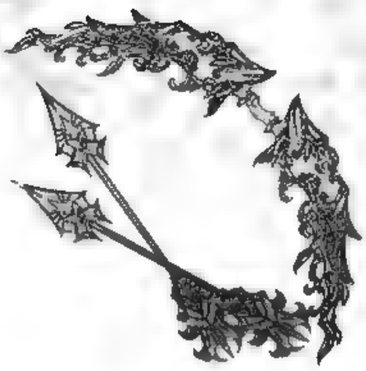
【祈祷】ごうしょうのつえ

「我が子よ、発て。荒ぶる魂を解放せよ」——その日のミサにて、拙僧は神のお告げを聞いた。
逡巡したかと？　とんでもない。
すぐさま拙僧は旅支度を済ませ、教会に伝わる杖を手に、旅に出たのだ。

亡霊を鎮めて回るうち、事態を把握した。復活を遂げた不死王が幽世の秩序を乱し、そのせいで怪奇現象が頻発していたのだ。
拙僧は不死王に戦いを挑み、激闘の末、その魂を浄化した。
彼に囚われていた亡霊たちは解放され、天国へと昇っていった。

聖皇聖下から呼び出しを受けた。聖下は「そなたを聖人に列する。今後は聖職者および信徒の模範となれ」と言った。
拙僧は「人と人の間に上下はありませぬ故、お受けできませぬ」と一笑に付し、御前を辞した。
拙僧には拙僧にしかできぬ役割を果たさねば。

黒ずくめの男数人が行く手を塞ぎ、拙僧は杖を奪われ、引きずり倒された。
「教会の権威を脅かす不心得者よ、死ね！」という怒号と、振り下ろされた杖が頭蓋骨を砕く音が、この世での聞き納めとなった。
拙僧は俗世のしがらみから永遠に解放されたのだ。



# 白波の弓



その女性は前途ある士官と数年の交際を経て、婚約する。周囲に祝福されるも、隣国との国際情勢が悪化し、彼女の婚約者は戦地へ赴く事になってしまう。「僕が帰ったらすぐ式を挙げよう」と言い残し、婚約者は出征する。

血で血を洗う戦いが繰り広げられ、両国は同時に兵を退き、勝者なき戦いは終わりを告げる。婚約者の帰りを待つ彼女だが、待てど暮らせど彼は帰ってこない。やがて婚約者の上官が現れ、彼が名誉の戦死を遂げた事を告げる。

彼女は恋人の死を悼み、日々を過ごす。恋人の上官だった高級士官が何度か見舞いに来て、求婚してくる。それと前後し、死んだ恋人の友人が彼女を訪ねてきて、とある事実を教える。あの高級上官は前から彼女に横恋慕しており、恋敵を危険な最前線へ送り出してわざと戦死させたのだと。

求婚が受け入れられた事に高級上官は狂喜する。挙式後、彼女は初夜の床に弓を持ち込み、品性下劣なるその男を射殺。恋人の仇を見事に取った後、彼女はその矢尻で己の喉を貫き、自害を遂げる。彼女が遺した弓は貞淑さと純潔の象徴として後世に伝わる事となる。

# 冷徹なる暴力



その豪邸には強面の主人と、妙齢の妻が住んでいた。
主人は無口で無愛想、妻はどこか影のある美女だった。

豪邸に奉公に上がった若い男が、高価な酒瓶を見て誘惑に負け、一口飲んでしまった。
その日の未明、彼は両手の小指を大剣の刀身で砕かれ、外へ放り出された。

その豪邸には、主人が使用人たちに固く出入りを禁じている「開かずの間」があった。
一人の使用人が好奇心に駆られ、そこに立ち入ってしまった。

その日の未明、その青年は両手両足の小指を大剣の刀身で砕かれ、外へ放り出された。

とある新聞記者が暴露記事を書こうともくろみ、
屋敷に使用人として潜入した。
主人が暴力で豪邸を牛耳っており、妻は粗暴な夫に怯える被害者——そんな構図を予測していた。
彼は夜半に妻の部屋を訪ね、真実を話すよう持ちかけた。
突然扉が開き、強面の主人が現れて……

美しい妻は記者を刀身で殴り、頭蓋骨ごと脳みそを陥没させた。主人は妻の足元に跪き、つま先に口づけた。「薄汚いハイエナを潰したわ」「はい女王様、ありがとうございます」そう、豪邸を冷徹なる暴力で従えているのは妻だったのだ。

# 受け継ぐ双斧



王から「武勇の双璧として国を護ってほしい」と、一挺ずつ戦斧を賜った騎士兄弟がいた。
後日、隣国が侵攻を仕掛けてきて、いち早く迎撃に出た兄は帰らぬ人となる。
弟は仇討ちを誓い、わずかな手勢を引き連れて敵陣へ殴り込みをかけた。

弟は信じられぬものを見て絶句する。
敵本陣前に立ちはだかったのは、なんと不帰の人になったはずの兄だった。
驚きに打たれる弟を前に、兄はニヤリと歪んだ笑みを見せる。「なぁに、出すものを多く出す側についただけだ」

「ひとりの騎士として、ひとりの裏切り者を討つ！」と言い、弟は戦斧を構える。
兄とていっぱしの騎士であり、もはや問答は無用と察した。
激しく斬り結んだ末、気迫で弟が勝り、兄の右腕の腱を断つ。
「成長したな」と微笑する兄の首を斬り落とし、弟は帰還するのだった。

隣国は侵攻を断念し、撤退する。
その夜、弟は兵舎で深酒し、泥酔。そこを襲われ、剣で頸動脈を断ち切られる。
血だまりに倒れ伏した弟を見下ろすのは、兄と男色の関係にあった従騎士だった。
従騎士は双斧を奪って逃亡するが、途中で山賊に殺され、身ぐるみ剥がされる。
次なる犠牲者を求め、双斧は受け継がれていくのだった……

# 黒ノ祭祀書



【第一回・黒ミサのお知らせ】
黒ミサを開催しまぁす。
興味のある方は、今夜十一時、町外れの墓地まで来てくださぁい。

【第二回・黒ミサのお知らせ】
前回の黒ミサですけどー、山羊の血を見て気絶する人が出ちゃってぇ、中止になっちゃいましたぁ。
というわけで、仕切り直しでぇす。
参加希望の方は前回と同じく、夜十一時に町外れの墓地に集合してくださいねぇ。

【第三回・黒ミサのお知らせ】
前回はぁ、ロウソクが倒れて小火騒ぎになっちゃってぇ、中途半端に終わっちゃいましたぁ。
でも大丈夫、今度こそ最後までやり遂げちゃいまーす！
というわけで、夜十一時に町外れ(ry

【世界終了のお知らせ】
我ら七十二柱、ここに再臨せり！
久しぶりの娑婆だ、肩慣らしに世界を滅ぼしてくるとしよう。
その前に、貴様らの血肉で軽く精をつけておくか……！

# 氷柱鎌

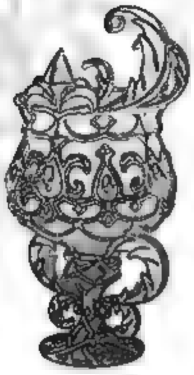
【長柄】つららがま

子供の頃、義母に虐待され、氷柱が垂れ込める暗室に閉じ込められては泣いていた。
そんな時、隣のキレイなお母さんが慰めてくれたもんだ。
で、気づいたら俺は、色が白くて幸薄そうな人妻しか愛せなくなってたわけ。

日中、目を付けた有閑マダムを口説いた。
誘いに乗ってくる尻軽が多くてな。
そいつらを雪山まで連れ出し、脅して雪の中に穴を掘らせた。そして鎌で首を斬り落とし、死体ごと穴に突き落としたんだ。
そんでもって穴に雪を埋め戻し、何食わぬ顔でその場を後にしたわけ。

そうそう、隣のキレイなお母さん、旦那に殺されたんだよ。
俺が死体の第一発見者だった。厨房を覗きこんだら、首と胴が分かれてて。
浮気を疑った旦那が、鎌でスパッとやったんだと。
あれのおかげで俺、困った性癖が芽生えちまってさ。
好きになった誰かを横取りされないよう、首をちょん切らないと気が済まなくなったんだ。

「さて、あんたの番だぜ」と彼は言い、鎌を振り上げた。
わたしが体当たりすると、彼は後ずさり、悪態をついた。
両手を突っ張り、突き飛ばすと、彼は穴に転落した。
穴を覗きこんだわたしの目に、ありえない方向に首を曲げて白目を剥く彼の姿が映り込んだ。
氷柱の垂れる暗室で生まれた狂気は、この穴で終焉を迎えたようだ。





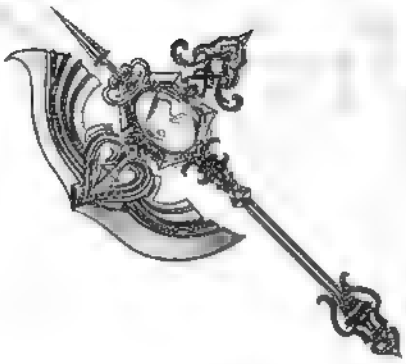
# 忠心の証

蛮族の侵攻に苦慮する善王の力になりたいと志し、農民出身の若者が王都へやってくる。王は彼のまっすぐな心根を愛し、自身の佩剣を授け、騎士に叙勲する。若者は感激し、命に替えても恩義に報いる事を誓う。

蛮族は何度も王都めがけて侵攻を重ねる。そのたびに恩賜の剣を振りかざす若者が陣頭に立ち、蛮族を撃退。少しずつ彼の名声が国内外に浸透しだす。

その若者は民衆に「救国の英雄」と呼ばれ、絶大な人気を博する。家臣たちの間にも少しずつ彼を認める者が増えていき、いつしか王に次ぐ要人とまで認定される。

ある日、王は若者を呼びつけ、毒杯を渡す。「国に二人の君主は要らぬ。後は分かるな？」と言われ、若者は悟る。自分の存在は王を猜疑心の虜にし、治世を妨げてしまう事に。「畏まりました、死して国の牙城となりましょう」と若者は言い、毒を呷って果てたという。



# 白銀の斧

【打撃】はくぎんのおの

披露宴での光景が焼き付いて消えない。
瞼を閉じ、長い吐息が零れる。
唇から零れるのは、重い息だけだ。

一人になりたくて逃げこんだ深い森。
疲れたように斧にもたれかかる。
だがその時、転げ出た影が静寂をかき消した。

振り向きざまの一閃で狼を両断する。
空を舞う狼の頭部。
その瞳に映りこんだ私の顔には、
凍てついた憤怒が浮かんでいた。

そこにいたのは
あの場所でのおこないを否定する自分。
鏡で見た姿のように反転した心の形。
……私に巣食う、お前は誰だ？

スノウホワイト/
パラディン

# 正義の大鎌

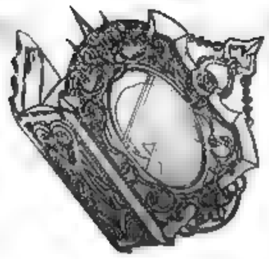
【長柄】せいぎのおおかま

正義に固執するようになったのは、
いつからだろう？
それは、生まれたその日からだろうか？
それとも、成長の過程で
獲得したものなのだろうか？

いや、わかっている。
きっとあの日が原因だ。
王子との披露宴の日、私は……

堂々巡りを繰り返すも答えは出ない。
ああ。きっと関係のないことだったのだ。
己の正義を貫き通す。
そこに明確な理由などない。
私は強く、己に言い聞かせた。

逃げるように、避けた答え。
私は気づいてしまったのだ。
きっと私の正義は……



# 白銀の魔書



私たちの関係に、愛はない。
国のため婚姻するという務めを果たしたまでだ。

でも、この子は特別だ。
きっと私に似て、きっと美しく育つだろう。
私の子なのだから間違いない。

子を愛さぬ親などいない。
そう思っていたはずなのに、
なぜだか彼女が憎くて仕方がない。
私はおかしくなってしまったのだろうか？

この鏡さえなければ、この鏡さえなければ
この鏡さえなければ、この鏡さえなければ
この鏡さえなければ、カガミサエナケレバ……
そういえば、この鏡はいつからあったのだろう？

# 白銀の手鏡



今日はお城にいる皆にとって大切な日。
お母さんのたんじょうびだ。
みんなはパーティーの準備で大忙し。
だからいつものように、
私をみはる大人たちはいない。

わたしはお城を抜け出し、
プレゼントを探しにきたんだ。
たくさん、たくさん歩いて見つけたよ。
お母さんにピッタリな素敵な手鏡を。

お母さんは大好きだもんね。
いつも鏡を見て、私を見てくれない。
でも、これさえあればきっとお母さんも喜ぶよね？

この鏡があれば、
お部屋から出てきてくれるかな？
昔みたいに絵本を読んでくれるかな？
わたし。なにも要らないよ。
お母さんが昔みたいに
遊んでくれるようになれば。

# 純潔の証



強くなくては生きられない。
私が剣を取ったのは、それだけの理由であった。

剣を振るうことしかできない。
私には学がないのだから仕方がない。

剣は私に、生きる力を授けてくれた。
だが、剣の道に進めば進むほど
常人の道には戻れなくなっていた。

剣を振るうと余計な雑念が振り払われる。
もう、私を受け入れてくれる場所は戦場しかない。
……味気のない人生だが、悪くないな。

# 氷滝の宝杖



大雨の影響で河川が氾濫し、田畑に大きな被害が出ました。
育てた作物がみんなダメになってしまい、村人たちは嘆きました。
雨は降り止む気配を見せず、住居の浸水まで危ぶまれ、村人たちは祈祷師を探すことにしたのです……

様々な祈祷師が祈りを捧げましたが、雨は止みませんでした。
途方に暮れる村人たちの前に一人のまじない師が現れ、「力になろう」と持ちかけてきました。
そのまじない師は腕の良さで知られていましたが、金に汚いことでも有名でした。
しかし村人たちは藁にもすがる思いで雇うことにしたのです。

まじない師が杖を天に翳すと、川は源流の滝ごと凍りつきました。
同時に雨足も弱まり、村は水没を免れたのです。
その直後、まじない師は後頭部を殴られ、死亡しました。
村人たちは気まずそうに顔を見合わせ、ため息をつきました。
高額の謝礼を払う蓄えなどあるわけがなかったのです……

四季がひと巡りしましたが、凍り付いた滝は溶けませんでした。
村人たちはまじない師の杖を祀り、その霊を慰めようとしましたが、何の効果もありませんでした。
村は以後、百年にわたり、冷害に悩まされることになります……

# 愚鈍な二人



私の村にはノロマと言われ、
虐められる存在が二人いる。
一人は男子、一人は女子だ。
男の方は愚鈍だが心は優しく、
音楽を愛していた。

だが、自分に音楽は似合わないと
人前で演奏することは一度もなかった。
「なんとかしてあげたい。」
そんな思いが私にはあった。

だから、大きな体の彼にしか扱えないような
提琴を職人につくらせ、彼に送った。
「ほら。貴方にしか奏でられない、
特別な音色が生まれたよ。
これでもう、人前で恥じることはないよ。」

嬉しそうに演奏する彼の姿は、輝いていた。
彼にも生きる価値があるのだから、
同じくノロマと蔑まれる私にも、
生きる価値はあるのだ。

# 捨て石の大砲

【射出】すていしのたいほう

たった一投に全てを懸けよ。
この大筒に、連射性はない。
すなわち、使用者に求められるのは玉砕の覚悟。

この大筒を扱いし者は
皆等しく最前線に配置された。
たった一度きりの砲撃で称賛を浴びた。
そして、激戦地の中心で丸腰となり
格好の標的となった。

失敗は許されない。
その重圧がその双肩に圧し掛かる。
だが国を、家族を、親友を
想う気持ちで自らの退路を断った。

この日のために生まれてきたんだ。
使用者は生きる意味を
その引き金を引くことに見出した。
そしてまた、戦場で勇敢な男が華々しく散った。

# 復讐の薙刀

今よたっなになとおーももしたわ
　。ぱぱ。ーね
日よたっなに人大うもも私。パパ。ぇね

復んねーゅじうかひたっなにうばうば
讐　がくぞか、てれさにうばうばがぱぱ
死年十うか日たっなに
煮ラバラバが族家てれさにラバラバがパパ

行たしまれなにせわあしくやーよわしたわ
苦たしまれなにせ幸くやうよは私

殺いさだくでいなわばうもにな
　うかしたわーも。まさみか
死いさだくでいなわ奪もにな
升　うか私うも。様神。すでい願　お

# 睡眠の大剣

【刀剣】すいみんのたいけん

るれくてせうむねも子が我
せう眠をちたいせうよはたうりもこ

うろだくおてしか生間い長
うたし渡にミカオオいろし

うろだくおてしか生は年一丸は彼
うたし渡にけばお
うろだくおてしか生は間週一は女彼
うたし渡に婆鬼

？いいうたし渡に誰を子のこ
なしねんね、りろこんねんね
。～よだみ読逆は回今

# 命乞イノ極意

【極意：其の一】
まずは、相手の動機を冷静に分析しましょう。
相手が経済的な理由や、やむを得ない理由で
貴方の命を狙う場合は「共感性」に
訴えかけることが効果的な武器となります。

【極意：其の二】
ここで一般的な共感性に訴えかけるフレーズを
いくつか伝授しましょう。
1.「病気の妹がいる」
2.「沢山の仲間の犠牲のもと、生き永らえた」
3.「姉が実験兵器に改造されてしまった」

【極意：其の三】
まずは、そのまま使用して慣れましょう。
命乞いに慣れてきたら、相手に合わせて
貴方なりにアレンジを加えてください。

【極意：其の四】
さて、アレンジまでマスターした貴方はきっと、
命乞いの楽しさについて理解しているはずです。
では、次巻では難易度の高い、
相手が貴方に復讐心を抱いている場合について
の極意をお教えしましょう。
これを学べば、貴方の手で何度でも
命乞いの機会を創出することが可能になります。

# 逆行の杖

【祈祷】ぎゃっこうのつえ

この杖はどうやら曰くつきの逸品らしい。
触媒は怪しく光り、その柄は吸い込まれそうな程に滑らかな光沢を湛えている。

だが、その杖の宿す特異な力については、
かいもく見当がつかなかった。

その杖をつかっても、特にいへんはおこうない。
この体にも、しゅういの人間にも変化がなかった。

おかしいな。さいきん。
あんまりむずかしいことをかんがえられない。
あっ！　あのくも、おさかなさんみたい！

# 蜘蛛の糸杖

くるり、くるり、と蜘蛛が舞う。
ひらり、ひらり、とその身をかわす。

躍起になって、蜘蛛を掴もうとするけれど
ひらり、ひらりと、またかわされる。

やっとのことで掴んだけれど、
大事な何かを失った。

ひらり、ひらりと男は踊る。
どこかの、誰かの手の上で。

# 巨人の右腕

【打撃】きょじんのみぎうで

その地方には邪悪な巨人族たちが住んでおり、人里をたびたび荒らしていた。巨人は力も体力も人間の比ではなく、彼ら一体に対し騎士たちが十人がかりで挑んでも太刀打ちできなかった。

無名の魔法戦士を騎士たちは侮り、うち一人が決闘を申し込んだ。
魔法戦士は「二十人ぐらい束になってかかってこい」と挑発し、その勝負を実現させた上、全員をあっという間に打ち負かしてしまう。

国王は魔法戦士の武勇伝を聞いて大いに期待を寄せ、巨人族の退治を正式に依頼する。
魔法戦士に「王家に伝わる巨人殺しのハンマーを貸してほしい」と持ちかけられた国王はすぐ許可し、その品を託した。

旅立っていった魔法戦士はその後、巨人族と共に人里に現れ、掠奪を働く。
何としたことであろう、魔法戦士は巨人の右腕として働く参謀だったのだ。
こうして国王は、唯一の切り札である巨人殺しの武器をみすみす喪ってしまったのである……

# 黄金の弓



王墓から出土したその品は、学術調査隊に資金援助をした名士に献上されることになった。
その弓は、黄金造り。
栄耀栄華を極めた古代の英雄王が、当代一の名工に造らせた逸品だった。

煌びやかな輝き。
洗練された造形美。
それは、見る者の魂をさらいこむ。

たった一瞥で充分。
たった一瞥で誰もが魔法にかけられる。
たった一瞥でその弓が欲しくて欲しくて仕方なくなる……

黄金の弓に手を触れようとした召使いめがけ、名士は奇声を上げて拳銃を発砲する。
数百年ぶりに人の文化と接することになった弓は、自分を巡って起こる乱痴気騒ぎをじっくり愉しむことにした。

# 邪気の呪歌



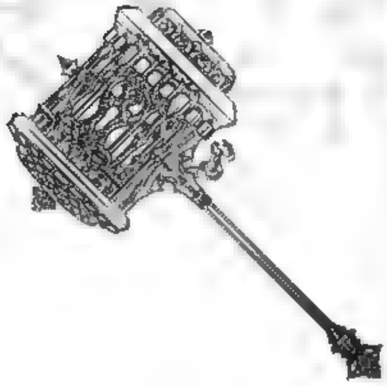
歌が絶望的に下手な男がいた。噴飯ものなことに、彼は吟遊詩人を気取っていた。
彼は頑なに自分の才能を信じ込んでおり、「みんな僕の才能に嫉妬し、僕をこき下ろそうとするんだ！」と考えていた。

へぼ詩人はある日、街角で花売りをしている女性を見かけた。
彼はすぐさま彼女の前へ飛んでいき、竪琴を奏でて恋唄を捧げた。
女性はにっこり笑い、「素敵な嫌がらせをありがとう！」と言うと、彼をぶん殴った。

近くの岬にセイレーンがいた。美しい歌声で人々を魅了し、海の中に引きずり込んで溺死させる魔物である。
さすがのへぼ詩人も、前の一件で自信が揺らいでいた。
「セイレーンなら僕の歌を認めてくれるはず！」と思った彼は、岬に向かった。

岬にはセイレーンがいて、へぼ詩人に歌いかけてきた。彼は竪琴を奏で、セイレーンに負けじと恋唄を歌った。
セイレーンは狂乱し、コロッと死んだ。
へぼ詩人はセイレーンを倒した勇者として街で讃えられたが、表彰されている間じゅう、怪訝な表情を浮かべていたという。

グレーテル/
クラッシャー



# 虚妄の大槌

【打撃】きょもうのおおつち

ずっと一緒にいるために
カレはカノジョを
大切にしまっておくことにした。

ずっと一緒にいるために
カノジョとカレは一つになった。

そこは完全に安全な場所。
絶対に無くさない。
ダレからも奪われない。
完全に安全な場所。

でも、一度しまい込んでしまったら。
自分自身でも取り出せない。
もう触れ合えないと気付いたときには
なにもかもが遅かった。
だから1つになった2人は壊れてしまった。

# 悲哀の大鎌

【長柄】ひあいのおおかま

物憂げな涙を湛えたその刃は
あらゆる感情を青に染める。

物憂げな涙を湛えた少女は
その大鎌で、あらゆる事柄を悲哀に染める。

少女にとって幸福とは涙、悲哀、
その他あらゆる悲しさを想起させるもの。

彼女の願いを叶えるため、
その刃はまた一つの命を悲哀に導く。
この世界が悲哀で満たされるまで、
その大鎌が乾くことはない。

# 魅惑ノ槌

【打撃】みわくのつち

店頭に飾られたその大槌を一目見たとき、
私はくぎ付けになった。
理由はわからないが、どうしても
手にしなくてはならないという感情を抱いた。

生活必需品以外の物に割り当てる金などない。
自然と大槌を眺めることが日課となっていた。
そんなある日、私の心を見透かすように
店主が臓器の売買を持ち掛けてきた。

腎臓、肝臓、肺、手首、眼球……
対で存在する部位は全て売り払ってしまった。
人間どこまで欠けても
生きることができるのだろうか？
私に残された部位は残り少ない。

脾臓、舌、胆嚢、膵臓……
もう生きる事に支障が出てきた。
こうなったらもう。
自分以外の人から集めてくるしかない。
これで、脳も脊髄も心臓も……

# 鱗片の杖

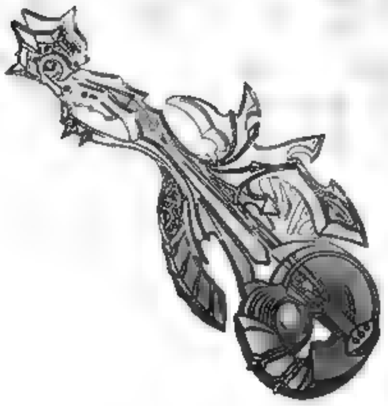


そのナイトメアは特殊な力を有していた。
その鰭を求め、さまざまな人間が
彼の元へと訪れた。

彼は人間の願いを叶え続けた。
その度に彼は自らの大切な部位を
人間に分け与えた。

その噂は広まり、あれだけ大きかった彼の体は
日に日に小さくなり、遂には泳ぐことさえ
困難になっていた。

彼は海の底でじっと横たわり続けていた。
そして虚ろな記憶をたどり、彼は自らの恩人と
過ごした幸福な日々を思い返していた。



# 鱗片の提琴

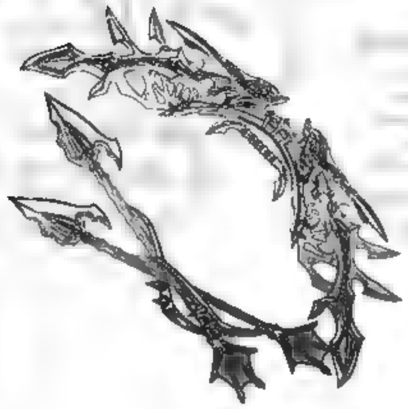


群れからはぐれた自分を救ってくれたのは
一人の吟遊詩人であった。

彼は歌を聴いてくれたお礼にと、
僕に自分のために用意したはずの
食糧を分け与えてくれた。

いつも同じ時刻、同じ場所で彼の歌を
聞くうち、いつしか僕たちは友達になっていた。
だが日に日に、彼の元気がなくなっていった。
理由が自分にあることは明白だった。

貧しい彼は自分のために稼いだ金を
全て使っていたのだから当然だ。
彼は愛した提琴も質にいれ、今はただ
弱弱しい声で歌うことしかできなくなっていた。



# 鱗片の弓

【射出】りんぺんのゆみ

彼らは自分たちの生に満足していた。
自分でない誰かのために、
自分を犠牲にすることは
素晴らしい事だと信じていた。

例えそれが報われることのない
行為であると知りつつも、
やめる事はできなかった。

彼らは死後の世界で再び巡り合う。
その時、彼らの幸福な気持ちが
あふれ出したかのように
人間に分け与えた彼の鰭が瞬いた。

国中を淡く暖かな光が満たしたとき
人間たちは気が付く、あのナイトメアが
息絶えた事に。
……やがてその日は国の祭日となり、他人を
労わる優しさがその国に溢れるようになった。

# 師の教え

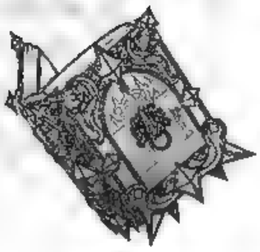


繋ぐその手はいつも血に濡れていた。
身寄りのない私を引き取ってくれたその人が
正常な人間でないことはすぐにわかった。
それでも繋ぐその手が暖かかったから、
逃げ出すことはしなかった。

彼に拾われてから数年後、
私は裏の仕事に手を染めていた。
相変わらず彼の口は悪かったが、
死と隣合わせのこの世界で生き抜くには
必要なことだと理解していた。

「囮にでも使えると思って拾ったのだが、
存外情を移してしまった……」
長かったようで短い時間も終わりを告げる。
足手まといな私のせいで彼は……
その胸を凶刃に貫かれながら、
彼は私に最後の教えを語り始めた。

「自分の命以外を優先する
人殺しなんて、長くは生きられない。
お前は俺みたいになるなよ……」
繋ぐその手から熱が失われていく。
彼の願いと反対の行為であると
知りつつも医師を探すため敵へ背を向けた。



# 城門の書



【今日の城門前】
番兵は二人。うち一人はこの間着任した新顔のようだ。
ようこそ、退屈な小城の警備へ。

【今日の城門前】
昼前、隣国からの大使が来訪。日没の少し前に帰っていった。
何となく物々しい気配を感じたが、大丈夫かねぇ？

【王室諜報局】
城門前で毎日メモを取っていた男を難癖つけて逮捕し、手帖を押収した。
簡にして要を得たこれらの記述に、我が国の機密を含んだ暗号文が隠されているはずだ。
スパイどもめ、私の目が黒いうちは城門を脅かせたりせんぞ！

【王室諜報局】
暗号文はどこにも見つからない。どこに手違いがあったのだ！？
なに？　隣国の大軍勢が城を包囲しただと？
そんなことはどうでもいい、何としても暗号文を発見するのだ！
おや、これは国王陛下。えっ、隣国の情報収集を怠った罪で私を処罰すると？
そのようなことより暗号解読を！　城門は私が守ってみせますとも！

# 叡智の宝玉

Q.生まれつき頭が悪い人にも効き目はあるのですか？
A.はい、もちろんです。学業成就のお守りを何十倍にも強力にしたもの、と考えるとわかりやすいと思います。

Q.他のお守りと同時に身につけても大丈夫でしょうか？
A.はい、問題ありません。

Q.就寝時や入浴時ははずした方がよいのでしょうか？
A.宝玉に気持ちをコネクトさせ、宝玉がそう望んでいるかどうかを考え、直感で判断して下さい。

Q.赤ん坊にこのお守りを与えたところ、十歳になる前にすべての学問を究め、「飽きた」と言って自殺してしまいました。どう責任を取ってくれますか？
A.効果には個人差があります。

アリス

# 束縛のカイナ

【刀剣】そくばくのかいな

幾万のシカバネの上で、キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界でキミは何を叫ぶのダロウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
全テ無駄なコトだったと嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ慟哭ヲ
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
波濤の如く押し寄せる人形が、一つに折り重なる。
黒と赤で埋め尽くされた書架には
魂のない死体が山のようにそびえ立っていた。
最早四肢に感覚はない。
この身を突き動かすのは、
あの人の復活を願う無垢な願いのみ。
この戦いの後に興味はない。
私を待ち構える運命を知らされた今では……

Case2
私はこの光景を幾度も見たのだろうか？
結局、本質を理解できていなかったようだ。
それ以前に、全てのイノチを
集めることは出来なかった。
先に、心が砕けてしまった。

不完全な形で顕界した最愛の人。
それが、今は……
自我は崩壊し、人の姿を保てなくなっている。

刃を握りしめる。
鋭い刺激と刃を伝う鮮血。
その痛みが、私の意識を繋ぎとめる。
「私が……終わらせる。」
——再会の果てに選ぶ結末は、
　　破滅を求める祈りとなった。

Case3
始めからソコにあった。
気づけばソレに頼っていた。
それこそがこの歪な聖戦を
生み出した者の狙いだった。

「束縛されていたのは私のほうだったのか。」

世界の真相に近づく度、
蜃気楼のように遠ざかる存在。

ようやく、答えに辿りついたというのに……
届きそうで届かない願いは、
諦めかけた想いを強く揺さぶる。
その悔しさという感情で、私は——

# 正義のゾウフ

幾億の犠牲の上に立ち、キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界で君は何を叫ぶのダロウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
正義の本質に気ヅキ、嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ慟哭ヲ、
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
主と同じ姿、同じ声で私の正義を糾弾する男は
私の絶望を餌に肥大化する。
土足で穢された、私の白い世界。
そこで正義の剣を振るう度、
鏡の破片が深く突き刺さる。
死に至る負傷でないことはわかっている。

ただ、揺らぎかけた正義が闇となり、私を覆いつくすまでそう時間がないことは
明白だった。

Case2
焦土と化した世界で白は赤に染まる。
自らの罪を振り返るその姿は、まるで……

無垢であろうと誓った、あの日。
正義に固執するようになった、あの日。
そして、自らの本質に触れた、今日。

「一番汚れていたのは、私だったのか。」
不思議と受け入れることができた現実は
最も簡単な結末へと、穢れた私を導いた。

Case3
こんな最後も悪くない。
後は、任せた……。

# 束縛の長槍



いつも聞こえていた子守唄。
優しい声で読み聞かせるのは、
醜く歪んだ世界の話。
そこには、あの人が求める理想があった。

その優しさは、偽りだとわかっていた。
あの人の望みを全て叶えれば、
捨てられることもわかっていた。
私に与えられた使命。
それは二人を繋ぐ"契約の鎖"。

あの人が望む通り、振る舞い続ければ、
いつか認められると思っていた。
しかし、その果てに得たものは、
それは"無駄"だ、という事実だけだった。

あぁ。だから私はこの槍を手に取ったのだ。
たとえ"契約の鎖"が解かれる日が来ようとも。
あの人を縛る事ができる、力を求めたのだ。

# 正義の白杖

【祈祷】せいぎのはくじょう

売り子A
「百一匹オークと白銀の戦姫」
ただいま入荷しました！

売り子B
「緊縛植物と白姫の泉」
好評につき増版決定！

売り子C
「スノウホワイト○○物語」
倫理規制を掻い潜る、新表現満載です！

再び迷い込んだ夢の中。
その異臭と喧騒が立ち込める世界では
私の伝記が並べられていた。
「しかし、私がナイトメアに蹂躙される
書物ばかりだな。なぜだ。なぜなんだ……」

# 暴力の凶器



〔赤ずきん〕
どうしておばあさんのお耳は
そんなに大きかったの？

〔オオカミ〕
……………………

〔赤ずきん〕
どうしておばあさんのおめめは
そんなに大きかったの？

〔オオカミ〕
………………

〔赤ずきん〕
どうしておばあさんのお口は
そんなに大きかったの？

〔オオカミ〕
ナゼ俺ガ、婆サンデナイトワカッタ……？

〔赤ずきん〕
だっていつもと同じように遊んだら、
壊れちゃったんだもん。
おばあさーん。そこにいるんでしょう？
はやく出てきてくださーい！

するとオオカミの腹部が勢いよく裂け
血飛沫が舞い散った……

# 卑劣の拳銃

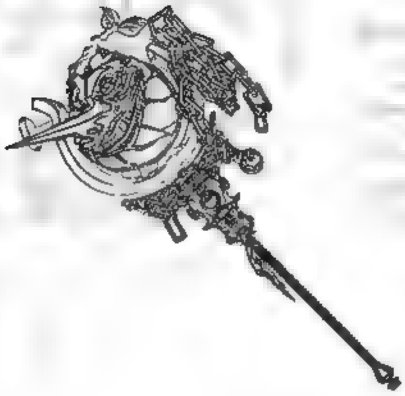


あァーー！！
いつまでついてくるんだ！
邪魔だって言ってるだろ。

いいか。アンタの両親は私が殺した。
わかってんだろ？
アンタはもう利用価値が無いから邪魔なだけ。
わかったか？

……苛立つ灰被りの後ろには、
健気に後をついて回る子ハウンドがいた。
それを巻こうと険しい山道を駆けるが、
傷だらけになりつつも必死に追いすがってくる。

子ハウンドが泥のように眠る早朝。
灰被りは、震える指先で引き金を引く。
……小さく呟いた言葉が銃声にかき消された。



ピノキオ/クラッシャー

# 依存の木槌

【打撃】いぞんのきづち

知恵を貸してよ僕の杖。
このままだとまたお爺さんに
叱られちゃうよ……

それは流石に酷すぎるよ……
スープキッチンの料理に
毒を混入しろだなんて。

でも、やるしかない。
大量の借金を抱えてしまった僕にはもう
手段を選んでいる時間はないんだ。

あの……薬はいりませんか？
今飲めば、命は助かりますよ。
そんな薬が今ならなんと
お好きな臓器１つと交換できますよ。

# 睡眠の銃

「ねぇ、おねーちゃん。」
「また夢で見たお話を聞かせてよー。」
うるさいな。と思いつつもこの子は
話を始めればすぐに寝てくれる。

話をすることで安眠できるなら
まーいっか、と眠り姫は
陽だまり色の声で語り始めました。
「パードリッチは言いました。
あなたが私の夢を踏んでいるので……」

案の定、話を始めると女の子は
眠り姫の体をベッドにして寝息を立てました。
私と似ているな。と思いながら眠り姫も
小さく欠伸をします。

少女の事は嫌いではありませんでした。
眠りにつく少女の暖かな体は湯たんぽに
最適だったからです。

……二人の眠り姫は
どんな夢を見ているのでしょうか？
それは二人にしかわからない秘密の物語です。

# 虚妄の剣



"暗い暗い森の中。"节节"も寝静まった後。
二人の"?括ä³綣"は静かに始まる。
"蓦ƒ"がたどたどしい手つきで、私の"$B!r"を
"肤霰i"づつ、取り去って……
二人は初めて出会った日と同じ姿になる。

"watasi"の躰を彩るのは虫たちの求婚の光。
初めて"?ｦ$"わけではないのに
「綺麗だ。」と"哥ƒ"は褒めてくれる。

「"kok0"で僕たちは繋がっていたんだよ。」
そんな胸がこそばゆくなるような事を言って
"慨� 氺"をまとった "6liM"で
私のお臍を優しく"値b�l"。

"远房哥哥ƒ"。"腴"。"ni玐留茓"。
私の心が沢山の愛で満たされる。
……決して帰ることはできない迷いの森に
私たちは迷い込み始めていた。

# 被虐の薙刀

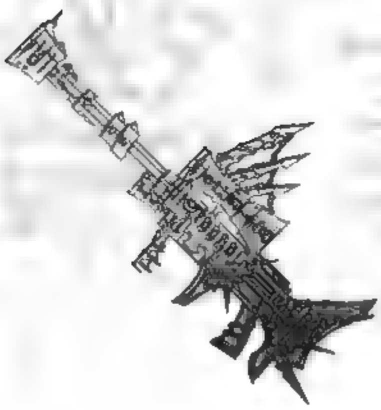


怪しげな研究少女から、いただいた媚薬。
これを投与すれば、どれだけおとなしい男性も
獣のように襲い掛かってくれるそうです。
なんだかぞくぞくしますね。

ただ、この薬は若い殿方にしか
効能が無いらしいのです。
弱い殿方には興味が無いのですが
獰猛な獣になれるのであれば
試してみる価値はありますね。

特別強いヨクボウを抱いたナイトメアの血から
精製された薬の効能は非常に効果的でした。
最初は怯えていた青年も薬を投与した瞬間に
私を求めて駆け寄ってきました。

………………
…………
……
その日。村の夢追い人達は残らず大人になった。



人魚姫/
ガンナー

# 悲哀の銃

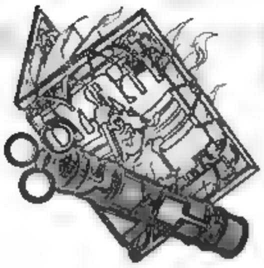
【射出】ひあいのじゅう

愛と哀が同じ音を奏でるのは
きっと人は誰しも悲しい愛の終わりを
経験した事があるからでしょう。

逢と哀が同じ音を奏でるのは
きっと人と人との出会いの最後には
悲しい結末が相応しいからでしょう。

哀愁、哀感、哀れ、哀傷、哀惜、哀切
哀憫、哀憐、哀悼、哀訴、哀咽……
哀が頭につくものでさえ、これだけの数がある。
きっと自分の悲しみを表すには
それだけ多くの種類が必要だったのでしょう。

私は悲しい感情が好き。
だから私は哀という文字でさえ
美しく感じるのです。



# 探究の学術書



Your Devotion
"S A V E"
T H E
WORLD

Your Filing Efficiency
Will Rise By No Less Then 120%
The Difference Of A 63%

Increase To Lenthall Proficiency Makes
The Master An Adversary Not To Be
Taken Lightly.

CLEAR THOUGHT !

# 束縛の黒槍

【長柄】そくばくのこくそう

安っぽいネオンが灯された、埃臭い一室。
そこには黒い髪を乾かす女と一人の男がいた。
男は見え透いた嘘を空気のように吐き、
女はそれを妄信的に信じた。
これはどこにでもある、クダラナイ話だ。

女は初めから男の嘘に気づいていた。
だが「嘘と気づかなければ、本物になる」
と言い聞かせて、自分を偽っていた。

豪華なディナーに三つ星ホテル。
女が躰を許すまでは、男は女を特別に扱った。
でも、二人の逢瀬が特別なものでなくなると
男は女に別の姿を重ねるようになっていた。

若さという武器も通じなくなった女が
再び特別な存在になる方法は一つしかない。
女は情事の最中、彼に褒められた大切な場所で
必死に男にしがみついた。
縋るように、しがみついた。

# 殻ノ杖



彼には大切なモノを特別なモノに
変える力があるの。
まるで自分のことのように母上は
父上の力を褒め称えました。
そんな父上は西国随一の鍛冶師とし
て崇められ
物心つく頃には私の自慢になってい
ました。

そんな父上は、ひとたび仕事を始め
ると
決して他人を工房に踏み入れません
でした。
それは私たち家族も例外ではありま
せん。
きっと力を扱うには集中力が必要な
のだろう。と、
幼いながらに理解した私は、父上が
仕事をする
姿を想像することで、甘えたい気持
ちを
抑えて過ごすようになりました。

父上のことをこの上なく尊敬する私が
父上と同じ職に就くことを志すことは
いわば当然の事でした。
だから名門と名高き工房に奉公が決
定すると
私はすぐに父上に報告するため
喜び勇んで家路につきました。
その日、私は舞い上がっていたのです。
ですから父上が仕事をしているのに
も関わらず、
工房に踏み入ってしまったのです。

ついに父上の仕事を目にする瞬間が
訪れました。
それは何度も思いを馳せた想像とは
明らかに異なるものでした。
だから私は言葉を失います。
「次はオマエの番だ。」
父上が久方ぶりに口を開きました。
その短い言葉を聞き、ようやく私は
父上の力の代償を理解したのでした。

# 殻ノ大剣



「イズレ強いヨクボウを持った解除鍵が現れマス。
その為、貴方様にはヒト仕事していただきたいのデス。」
不思議な力を手にしたその日から頭に響くような不快な声。
本当は従いたくなどはないのに
なぜかその命令には強制力があった。

ある日唐突に世界の秘密を語り始める怪しい声。
常人ならば信じる事はないであろう事象の羅列。
心の奥底では信用していないはずなのに
数刻もすると、授けられた命を遂行するため
工房を目指す自分がいた。

命じられた通りに優れた武具を作成する日々。
そして、武具を一つ作る度に
失われていく大切なモノたち。
幸福な世界を構成していたモノたちが
失われていく悲しみに心は摩耗する。
だが、それと比例するように腕は冴えわたる。
自分の心に歪な欲望が巣食い始めていた。

長年連れ添った妻。
私の事を敬愛して止まない息子。
唯一の好敵手だと認める友人。
かつて恋焦がれた高嶺の花。
……必要だとされる数には大切のモノが
どうしても一つ足りなかった。
最後の素材はわかっている。
素材となった大切なモノたちに感謝の言葉を捧げ
ると最後の一振りを完成させた……

# 殻ノ槍



形あるものいつかは崩れる。
それは人間関係も同じだ。
私も妻もそれはよくわかっていた。

妻は私の仕事をよく理解していた。
自分の命を私に捧げる覚悟をしていた。

その日が来た時の話をよく妻としていた。
妻は何度も「遠慮はしなくていい。
ただ、苦しまないようにお願いね。」
と条件を述べた。

長年連れ添えば表情だけで伝わることもある。
彼女はそっと目を瞑り、私に体を預けてくる。
……何度もイメージした通り、上手くできたと思う。
ただ、苦しまないという約束は果たせなかった。

# 殻ノ竪琴



誰もが一度は経験したであろう
届かなかったからこそ特別になった恋。
彼女が私にとってのそれだった。

心通じ合えたからこそ、
契りを結べない環境が恨めしかった。

時が流れて姿は衰えても
想いは褪せない。
叶わなかったからこそ、一層特別になった。

愛する妻を失って、再び巡りあった二人。
世界で一番特別な存在となった彼女は
素材にするのに最も適した人間であった。

# 殻ノ弓



製作者の心肺停止を確認。
非常用プログラム作動。
最重要機密のバックアップを開始いたします。

システムオールグリーン。
バックアップ完了まで、あと1000秒。

外部からのハッキングを検知しました。
強制シャットダウンプロセスに移行します。

－ Backup Error －
e78aafe4babae381af
434e514e534758

# 殻ノ書

指定通り全ての武器を作成した私は、自分が知った世界の秘密をこの書に記すことにした。自分に残された時間が少ないことは理解している。急がなくては。

ペンを手に取り、椅子に座り記憶を思い返そうとした。その時、部屋が散らかっていることに気がついた。自分の死体が見つかった時、こうも汚れた部屋に住んでいたと思われることはよろしくない。私は部屋を片付けることにした。

部屋を片付ける私の目はあるものにくぎ付けになっていた。それは家族との幸せだった日々が記された日記だ。家族を素材に武器をつくるようなダメな父親だったが、間もなく死ぬとなると、読まずにはいられなかった。

気づけば、日が暮れていた。もう瞼が重い。世界の秘密を記す時には万全な状態であるべきだ。そういう結論にたどり着いた私は寝ることにした。

# 殻ノ斧

【打撃】からのおの

父上は優秀な鍛冶師でした。
そして、特別な力がありました。
ですが、その力を使用するためには
愛する人を素材にする必要がありました。

父はその力に憑りつかれていました。
もう、父上の目に私は素材に映るようです。
だからあの日、私は家を出ることにしました。

必ず復讐する。父上を変えてしまった神を殺す。
殺す、殺す、殺す、殺す……

そんな私に、女性が話しかけてきました。
「神を殺す武器、つくってみたいと思いませんか？」
探究者だと名乗るその女性は
嬉々としてその理論を語り始めました……

# 殻ノ魔具



「先天的要因と後天的要因。どちらが強く人格形成に影響を及ぼすのか、興味が出てきました。」
彼女は私のことをしげしげと眺め、そう呟きました。

一度語り始めると、彼女の話は止まりません。
私が理解しているか、いないかはお構いなしに話続けます。

ようやく彼女の長い話が終わると、
腰に付けたポーチから一冊の本を取り出しました。
「こちらをご覧ください。
どうです？　なかなか興味深いでしょう？」

「これは、父上の筆跡です……」
彼女の話と同様に、記された内容はほとんど理解できませんでした。ですが、何か恐ろしい厄災が始まろうとしていることだけは、察することが出来ました——

# 暴力の刺又



長い木の枝を杖のようにして歩くお婆さん。
「長い棒」はそうやって使うんじゃないよ。
僕がちゃんと遊び方を教えてあげるね！

お婆さんと遊んだ後、脂ぎったおじさんが
僕と遊びたそうに声をかけてきた。
おじさんは「長い棒」が自慢らしいので
見せてもらったけれど、
そんなに長い背骨ではなかったです。がっかり。

またまた長い棒を持った人が
僕の前に立ちはだかりました。
その人はとっても荒い鼻息を立てながら
お婆さんの仇がどうとか叫んでいました。
なんだか今日は「長い棒」に縁がある？
まぁ、いっか。

やがて夜のとばりが落ち、
僕はまた一人になりました。
やっぱり「長い棒」ならこれが一番。
僕は一番近くにあって、決して離れることはない
「長い棒」をぎゅっと抱きしめました。

# 邪教の仮面

【魔具】じゃきょうのかめん

優しい王様はこの国みんなの自慢。
王妃様と王女様との仲睦まじく談笑する様子は、
見ている民の顔まで笑顔になっておりました。
王妃様は重い病気を患っていたけれど、
お転婆な王女様が王様に落ち込む暇を与えませんでした。

それから3回目の冬が訪れる頃、
悲しいことが起こりました。
王妃様が病気で死んでしまったのです。
王様は最初の日こそ泣いたらしいですが、
またいつもの王女様の悪戯で泣いている場合ではなくなりました。
王様は王女様がいれば笑顔になれます。
ですが、王女様まで死んでしまったら、誰が王様を笑顔にしてあげるのでしょう？

そんなみんなの不安は実現することになります。
ある日突然、王女様も王妃様と同じ病を患い
死んでしまいました。
王様は何日も泣き明かし、
ふと気づいてしまったのです。
自分にはもう、微笑みかけてくれる
優しい家族がいないということに。

だからもう、王様は怪しい儀式に
手を出すしかありませんでした。
王妃様と王女様に再び笑顔を取り戻すためなら、
全てを捧げる覚悟がありました。
そして、その日から監獄で怪しい儀式が
行われるようになったのです。

# 邪教の経典



ある教徒のメモ①
より強い願望を持つ者がこの世界では力を持つ。
それはナイトメアも例外でない。
ではナイトメア同士を戦わせ、共食いを
繰り返す事で生き残った唯一の者には
一体どれだけの欲望が蓄積するのだろう？

ある教徒のメモ②
もしかしたらあらゆる法則を超越するほどのエネルギーを生み出すのではないか？
事実ナイトメアを構成する物質は我々の想像の範疇から遥かに逸脱した、機能を備えている。

ある教徒のメモ③
研究は思うように進まない。
起こる現象のランダム性が原因だ。
研究結果の揺らぎがあまりにも大きすぎる。
だが、実際に期待している研究結果が
ごく僅かな確率で生じている。
実際に王女様は息を吹き返した。

ある教徒のメモ④
これが生きていると言っていいのかは
わかりませんが……
次は貴方の番です。お慕いしております。
王妃様、たとえ貴方に心と呼べるものがなくとも、
もう一度動く姿をお目にかかりたいです。

# 邪教の根棒

衛兵の証言①
王様の素晴らしい手腕によって、
国は繁栄し人口が増加しました。
しかし、それと同時に食糧不足という
危機的状況が生まれてしまいました。

衛兵の証言②
しかし、王女様が病に倒れた頃からでしょうか？
霧の濃い日に人が消えるようになったのです。
何を隠そう私の息子も霧にさらわれました。

衛兵の証言③
噂では王様が王女様を蘇生する儀式を
行われているのではないかと言われております。

衛兵の証言④
私も準備が整い次第、監獄へ向かいます。
そこでどのようなことが行われているのかを
突き止める義務が私にはあります。
父として、また王様にお仕えする兵士として。

# 咎人の心



彼らは気づいている。
世に溢れる悪の総量が変化していないことに。
それでも統治者は咎人を
監獄という暗室に隔離する。
本質から目を背け必死に。必死に。

だが、心に悪を飼う者は野放しにされる。
「悪事に手を染めるその直前まで
悪を嗅ぎ出す手立てはない。」と釈明し。

彼らは善人に擬態し増殖を続ける。
加速度的に闇は拡大し、
やがて世界は悪に覆いつくされるだろう。
誰もが平和と信じるその裏で。

悪の鎖が一斉に解き放たれる時。
彼らは過ちに気づくだろう。
……終焉の鐘が鳴り響く日は近い。

# 咎人の杖

【少女Aの罪状】
殺人罪、堕胎罪、遺棄罪。

【少女Bの罪状】
強要罪、凶器準備集合罪。

【少女Cの罪状】
監禁罪、誘拐罪、強姦罪。

【中年Dの罪状】
公然わいせつ罪。

# 咎人の槍

【長柄】とがびとのやり

The animated figures stand
——[redacted]を与えられた傀儡が立っている

Adorning every public street
——あらゆる片隅を飾って

And seem to breathe in stone, or
——石の中で息をするように

Move their marble feet.
——大理石の足を動かすように

# 両断の刀

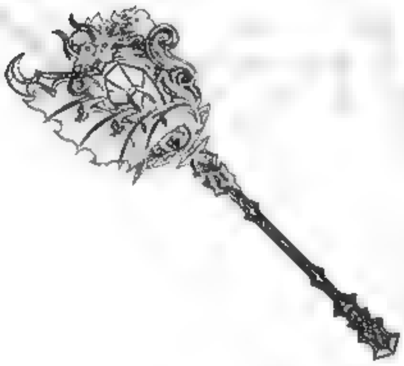


なんでも両断してしまう刀があった。
魔竜退治に手こずっていた冒険者一行がそれを手に入れ、力自慢の剣士がその刀で宿敵を見事に両断した。

冒険者たちは魔竜の巣で金銀財宝を発見する。
全部は持って帰れないため一度引き返すことになり、欲に目が眩んだ剣士は帰り道、吊り橋を両断。
仲間たちは谷底に落ち、墜死を遂げる。

剣士は宝を独り占めし、大富豪となった。
が、ある日を境に､｢お前の罪を知っているぞ｣という怪文書が彼の邸宅に投げ込まれるようになる。

剣士は疑心暗鬼に陥り、心を病んでしまう。
ある日彼は従僕たちに次々と喰ってかかり、その剣で彼らを両断していく。
やがて役人たちに取り押さえられ､みずからの剣で首を両断されることとなった。



# 森林の救済

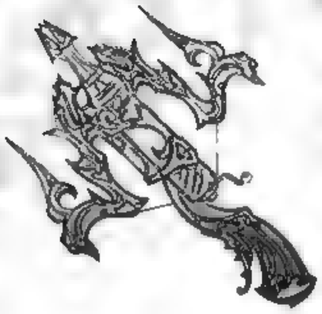


その地方に住む民は大自然そのものを神と崇め、大自然と同居していた。
集落そばの大森林には《神木》と呼ばれる樹齢千年の大木が聳え、人々の信仰を集めていた。

ある時、異民族が大森林を通り、侵攻してきた。
しかし森は邪悪な意志を持った侵入者の存在を感知し、異民族を道に迷わせた。
異民族は疲弊し、そのまま引き揚げた。

時が経ち、人々は大自然への感謝を忘れ、
《神木》を伐採してしまった。
前とは別方向から異民族が攻めてきて、人々は大森林へ逃げ込んだ。
異民族は捕虜の足の腱を切って逃げられないようにし、家畜同然に扱うことで悪名高かった。

どこからともなく火の手が上がり、大森林全体が燃えあがる。集落の人々はそのまま全員焼死。
奴隷を手に入れ損ね、異民族は地団駄を踏む。
大森林は信仰を忘れた人々を見捨てず、救済をさしのべたのである。



# 見せかけの弓銃

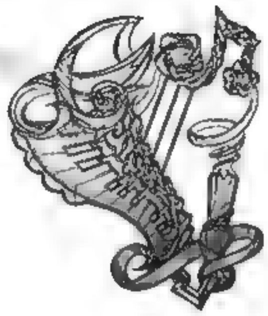


その街には腕利きの保安官がいて、自作の弓銃を腰に帯びていた。
「俺はこれを撃つことなく街を守り抜くぜ」と彼は公言していた。

白昼、銀行に強盗が押し入り、保安官は現場に駆けつける。
彼は弓銃をちらつかせ、強盗を威嚇。強盗は怯み、逃走したのだった。

強盗らは宝石商の屋敷に押し入り、立てこもる。
保安官は現場に急行し、強盗らの前に一人で出ていく。
「銃を撃たない」と宣言していることはもう広まっており、強盗らは侮蔑の態度を見せる。

弓銃を構える保安官を見て強盗らは「見せかけの弓銃じゃないのか！？」と怒鳴る。
その間に別働隊が裏手に回り込み、強盗を踏ん縛ってしまう。
保安官はニヤリと笑い、「おっしゃる通り、見せかけさ」



# 作曲家の一生



その作曲家は生まれながらの天才だったが、育ての親から虐待を受けたために極度な人見知りで、鳴かず飛ばずの日々を送っていた。
とある興行師が彼の才能を見出し、破格の条件で契約する。
無名の自分と契約してくれた興行師に恩を感じた作曲家は、「あなたのために成功してみせます」と誓う。

興行師のおかげで曲が売れはじめ、不遇続きだった作曲家はようやく日の目を見た。
その彼に金目当ての美女が言い寄り、愛人兼マネージャーの座を勝ち取る。
作曲家は愛人の勧めに従い、大恩あるはずの興行師との契約をあっさり切ってしまう。

作曲家は愛人にさんざん才能を食い物にされたあと、投機に失敗して破産。
愛人は別の男と夜逃げしてしまう。
作曲家は自分の非を悟り、興行師に謝罪する。
が、「昔の君は売り出しの伸びしろがあった。でも今の君は売りようがない」と突き放されてしまう。

作曲家は生涯最大の情熱を込めて作品を書き上げ、それを興行師に送りつけたあと、浴室に閉じこもった。
後日、ハープの弦で四肢を切断し、浴槽の中で失血死している彼が発見される。
興行師によって売り込まれた「浮沈多き天才最後の作品」は前人未踏の売上を樹立することとなる。

# 卑劣の喇叭銃



卑怯の常套手段Ⅰ　擬態
手の内を隠す事は基本中の基本。
相手の意表を突き、絶望の底へと叩き落すべし。

卑怯の常套手段Ⅱ　情報操作
人間は脆く、弱い。事前情報と真逆の真実を
知った動揺は、そう簡単には覆い隠せない。

卑怯の常套手段Ⅲ　印象操作
人間は第一印象で抱いた幻想を
容易に覆すことはできない。
容姿端麗な女に生まれたのなら、
これ程強力な武器はない。

卑怯の常套手段Ⅳ　物流遮断
大量の人間を操作する事だって簡単だ。
飢餓は人間の尊厳を奪い、
敬虔な信徒だろうと獣と化す。
上手く使えば、自らの手を汚さずして
国を亡ぼすことさえ可能だ。

# 寄生の薙刀



実家に寄生する放蕩三昧の息子がいた。見かねた父は家宝の薙刀だけを持たせ、家から勘当。
途方に暮れた放蕩息子だが、やがて腹を据え、傭兵稼業に落ち着く。
程なく国家間で戦争が始まる。放蕩息子は優秀な部隊長に自分を売り込み、雇い入れてもらう。

放蕩息子の参加した部隊は激戦地に送り込まれ、隊長はあっさり戦死する。
降伏を考えた矢先、副隊長が水際立った指揮を見せ、隊を立て直す。
放蕩息子は彼にしばらく寄生することを決意。

終戦後、放蕩息子は武勲を称えられ、隊長に取り立てられる。
父も勘当を解いてくれたため、息子は家族からまた適度に小遣いをせびるように。
以前の副隊長は将軍に出世していた。息子は彼の派閥にうまく寄生し、出世を重ねる。

父から与えられた家宝の薙刀には悪魔が寄生しており、息子はだいぶ前から悪魔に魂を乗っ取られていた。
上官へ寄生を繰り返す息子は賄賂を工面するため、家宝を質に入れてしまう。
こうして寄生の薙刀は新しい宿主を求め、人の手を渡り歩くのだった。

# 月影の経本

【魔書】つきかげのきょうほん

今宵も月が綺麗だ。
星屑を照らす銀色の輝きを見ていると、心が洗われる。

黒い羅紗布の上に宝石箱をひっくり返したみたいな星月夜が頭上に広がっている。
あの乳白色にいつまでも照らされていたい。

太陽が訪れるごとに月はその輝きを喪う。
月を独り占めするには、あの罪な太陽を滅ぼさねばなるまい。

私は呪文で太陽を消し飛ばした。
が、その途端、月までも消えた。
地上は酷寒地獄に陥ってしまった。私もまもなく凍死するであろう。
最期にもう一度、月が見たかった……。

# 拷問の大槌



俺ァな、仕事にはこだわりのある拷問吏だ。
国で一番の大盗賊がパクられた。宝の隠し場所を聞き出せと王から命令された俺は、指を大槌で潰していった。
ヤツは泣き叫び、隠し場所をゲロった。
俺は首を絞めて殺し、「口を割らずに死んだ」と報告した。

非番の日、宝が隠されてるっていう洞窟へ行った。
探した結果、宝箱を見つけた。でも、カギがかかってたんで、仕方なく箱ごと持ち帰った。
カギを壊そうとしたんだが、エラく頑丈でな。どんなにぶん殴っても、ビクともしなかったんだ。

他に方法がねえもんだから、鍵屋に箱ごと持ち込み、錠前を何とかしてもらおうとした。
「ちょいと時間がかかりますぜ」と鍵屋は言い、工房へ引っ込んだ。俺はそこでじっと待ってた。
すると表の扉が開き、役人共が乗り込んできて、俺は捕まっちまった。

俺は王の前に連れて行かれ、「お前は大盗賊の一味だな？　バレる前に仲間を殺したんだろう！」と決めつけられた。
「宝を横取りしようとしただけだ！」と言い訳したが、藪蛇だった。
俺は大槌で指を一本ずつ潰された。
激痛のあまり暴れる俺の頭上に、大槌が迫ってきて――
それがこの世の見納めになった。

# 焼鉄の鎌

【長柄】しょうてつのかま

その男は生まれつきの人殺しで、息を吸うように殺人を繰り返した。
彼は投獄され、額に死刑囚である証の焼鉄を捺された。
死刑前夜、鎌を手にした死神が現れ、「お前は明日までの命だ。」と告げた。

死刑囚は死神に「俺は無実なんだ、このままじゃ死にきれん。そうだ、俺も死神にしてくれ。俺は死神となって無実の証拠を集める。」と言った。
同情した死神は申し出を承知し、自分の鎌を譲り渡した。

死神となった死刑囚は牢から脱獄し、鎌を振るって惨殺を繰り返した。
その後、彼は大天使に捕まり、天界の牢獄に閉じ込められた。
死刑前夜、鎌を手にした天使が現れ、「お前は明日までの命だ。」と告げた。

彼は天使に「俺は無実だ、死神にそそのかされて嫌々やってただけなんだ。そうだ、俺も天使にしてくれ。無実の証拠を集めてみせるから！」と言った。
――かくして天使であり死神でもある死刑囚は今日もその鎌で惨殺を続けている。

# 熱鉄の剣



火山の奥深くで採れた燃える鉄を鍛冶工が丹精込めて打ち、ひと振りの剣に仕上げ、「熱鉄の剣」と銘打つ。
大志を抱く一人の若者が郷里を発つにあたり、鍛冶工は餞別としてその剣を授けた。

王都に上った若者は御前試合に出場。格上の相手にも怯まず、勇猛果敢に戦う。
その戦い振りを見届けた軍指揮官が彼の胆力を高く評価し、百人隊長として推挙する。

内乱が勃発し、若者も部隊を率いて戦場へ赴く。
到着早々、自陣営前に敵騎兵が数騎現れ、挑発を繰り返す。
若者は血を滾らせ、ひとり自陣を飛び出す。
部下たちは総攻撃と勘違いし、彼の背中に続いた。

若者の部隊はまんまと敵の包囲攻撃に晒される。
壊滅的被害を受けても突撃を指示する彼についていけず、副官が彼を刺す。
熱鉄の剣を手にしたまま若者は崩れ落ちる。
死してなお、肌の下の血は熱く滾っていた。

# 静寂の竜琴



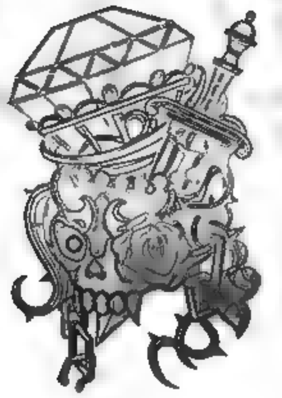
目が覚めた少女には、所在のわからない喪失感と寒気があった。
そして、不思議なことに
提琴を両手で抱きしめている。
「暖かい音がする。」
でたらめに弾いたはずなのに、
響く音は何処までも優しく、
少女の震えは止まっていた。

その竜の里では、人間との接触が禁じられていた。
だからその竜は盗賊に蹂躙される少女を見かけたとき、気にせず飛び去ろうとした。
だが､気まぐれに少女を助けてしまった。
交流を持ってしまった。
「なぜかそうしなければならない。」
そんな気持ちに突き動かされたのだ。

それが竜と少女の出会いであった。
はじめは助けたら飛び去るつもりであった。
だが人里へ連れて行くまで、
職を見つけるまで……
と彼女の元を離れることに
理由をつけ、先延ばしにしていた。

竜はやがて、自分が彼女の元を
離れたくない理由に気が付いた。
そして、彼女の元から
離れなくてはならないとも思った。
この気持ちが大きくなる前に、
離れなくてはならなかった。
そして竜は別れの印に、
自らの体の一部を提琴に変え、飛び去った。

# 遠雷の尖晶石



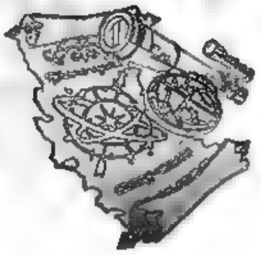


【魔具研究班・覚書】
帝国の戦車隊と連弩部隊は脅威のひと言だが、何とか太刀打ちしなければならない。
上の判断は正しい。
重武装で張り合うより魔具の開発を推し進めた方が、我が国の強みを活かせるはずだから。

【魔具Aに関する考察】
雷の精霊を封じ込めた魔具Aは帝国の戦車隊や連弩部隊の頭上に雷を落とし、敵をあっさり壊滅させた。
そこまでは良かったが、封印された宝物庫の扉を雷で吹き飛ばしたり、宝箱の鍵を壊したりなど、不埒な目的で使う者が現れ始めた。

【魔具A改善レポート】
用途を軍事兵器に限定し、改良を進めさせた。
その結果、近接的には使えず、ある程度離れたところに雷を落とせる魔具として生まれ変わった。
以前のような犯罪幇助の道具にはならなくなったはずだ。

【魔具Aダッシュについての問題提起】
軍事兵器として生まれ変わった魔具Aダッシュこと「遠雷の尖晶石」だが、テロリストに製法を盗まれ、手軽に騒ぎを起こせる便利道具として用いられるようになってしまった。
至急対策を練る必要がある。



# 天文の書



宇宙は無限に膨張し、熱量はどんどん奪われている。
このままではいずれ地球に第二の氷河期が訪れ、人類は死滅してしまう。
だが大丈夫。「無」から宇宙が始まった以上、人為的に宇宙は創れるはずなのだ。

ちょっと待ってろ、新しい宇宙を創るための方程式を編み出してみせる！
$H\Psi=0$
ん、最初から躓いた気がするぞ……？

$\Psi=[K+V]\Psi$
$\partial^2\Psi/\partial t=-\hbar^2\nabla^2\Psi/2m+V\Psi$
うーむ、当たらずとも全然遠い……？

何としても見つけ出せねば。この手で新たな宇宙を生み出す方程式を……！
それが果たせなければ、三流物理学者として私を排斥した学会の連中を見返せないではないか！
定義しろ、推理しろ、飛躍しろ結線しろあああ嗚呼アァァア亜阿唖……

# 骸の杖



その魔術師は死せる神の住まう島を訪れ、冥府に立ち入った。
彼は帰ってこず、死んだものと見なされていた。
ところが数年後、彼は黄泉より舞い戻る。その右手には、死者を統べる杖が握られていた。

死者を統べる杖を手にした彼は食が細くなり、昼間あまり外出しなくなった。彼は日に日にやせ細っていき、肌の色も蒼白くなり、生者というより死者に近い見た目となっていった……。

彼は夜な夜な外を徘徊した。
お気に入りの場所は町外れの無縁墓地で、そこに佇み風の音に耳を澄ませるだけで心の底から安らげるのだった。
地の下に眠る無数の骸は、彼にとって親愛の対象だった。

彼が墓場に佇んでいると、むくりと骸が起き上がってきた。
彼は杖を手に「やあ、我が同胞よ！」と笑みを向けた。
次々に骸は地の下から這い上がり、彼を取り囲み――
翌朝、恍惚の表情を浮かべて腐肉の中で窒息死している彼の姿が発見されたという。

# 虚妄の杖

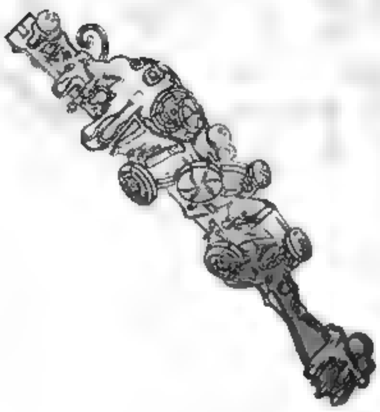


彼(彼女)は自己満足の「堅い大地」という現実に再び戻ることはないゆえに、「受動的虚無」が彼において確定的事実となります。それも「受動的虚無」の海を虚妄の自我自身と混同しながらも、認められない心理的な枷がはめられた状態であると言えます。

自己中心性は生けるものの本性であるゆえに、私どもはかかる虚妄の自我を彼女と定義することにしました。そして、虚構の推意として受け取られる「真理」の身分など、虚構が現実に接合する地点で生じる問題について研究を始めることにしたのです。

先の論文で述べた乖離状態とは、彼の自我の自閉性、自己中心性の塊であり、本来、自我の保全のために、その防衛本能が働いた状態であると定義しました。つまり彼(彼女)の虚構の推意として受け取られる「真理」の身分といえる存在です。

結局のところ彼の自我は、これまでの自己満足的「所有のたかみ」の迷妄を破られることによって、おのれの実体との間に破綻をきたしてしまい、自閉的虚妄の自我にどこまでも執着することで起こる自己隠蔽、自己忘却しようとして失敗しながら、自己の保全行動に囚われることとなります。



# 毒菓子の銃

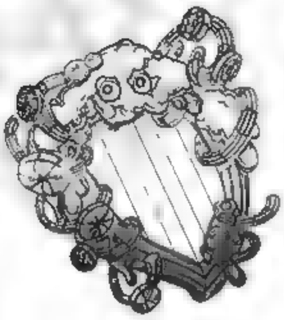


センセイ　ゴメンネ。
ボクタチ　ノ　タメニ　嫌ナコトサセテ。

僕知ッテイルヨ。
ゴハンガ何デ出来テイルノカ。

初メテ　気ヅイタノハ
妹ヲ食ベタ時ダッタ。
姿ガ　カワッテモ　僕　ワカッタヨ。

妹ハ　トッテモ　トッテモ　オイシカッタ。
ダカラ　モット　大切ナ　オニイチャンノ肉。
食ベテ　ミタイナァ。



# 毒菓子の竪琴



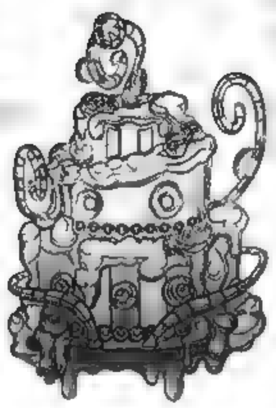
私ミチャッタ。
夜センセイガ　首ヲ吊ッテイル所。

私ミチャッタ。
ママ先生ガ　急イデ　カタヅケテイル所。

私ミチャッタ。
ママ先生ガ　センセイノ死体ヲ　料理シテイル所。

私タベチャッタ。センセイノ死体ヲ。
私キヅイチャッタ。死体ノ　オ肉　オイシイ事。

# 毒菓子のケーキ





本当ハ気ヅイテイタノデス。
アナタガ　オカシクナッタ　本当ノ理由ニ。

タリナカッタンダヨネ。
自然死スル　子供タチノ量ガ。

ダカラアナタハ、子供タチノタメニ
子供タチヲ　殺スヨウニ　ナッタンダヨネ。

アナタガ死ンデ　私ガ　代ワリヲ務メルヨウニナッテ。
アナタノ気持チガ　ヨクワカルヨ。
モウ　私モ　ダイブ　オカシク　ナッタミタイ。
今日モ　ボウット　シテテ
意識ヲ　取リ戻シタ　食料ニ　ニゲラレチャッタ。

# 破裂の投槍

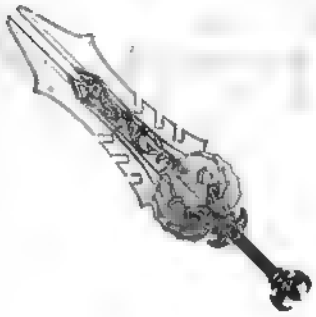
【長柄】はれつのなげやり

我が祖国は隣国と仲が悪く、小競り合いを繰り返しておった。
ところがある日を境に祖国が劣勢となり、じりじり押され始めた。
密偵の調べにより、新しい製法の武具が敵国に行き渡ったことが判明した。
国王はそれに対抗すべく、兵器開発の権威であるワシを招聘したというわけじゃ。

ワシは国王の庇護のもと、新兵器の開発に取り組んだ。
じゃが戦争が激化し、新兵器は課題を残したまま実戦投入されることになった。
ところが新兵器は自陣で破裂し、味方に多くの怪我人を出した。
が、隣国はこれを深読みしすぎ、兵を国境から引き揚げさせたのじゃ。

戦争が一段落し、ワシは国王に新兵器の開発続行を提案した。
今回はたまたま敵の深読みに救われたが、二度とあんな僥倖は期待できぬからじゃ。
だが国王は「戦禍に苦しむ民草を救済せねば」と言い張り、兵器開発に予算を割こうとしなかった。

このままでは国家百年の計が立てられぬ。
ワシは王の視察に合わせ、街の大通りで新兵器をお披露目することにした。
名付けて「破裂の投槍」じゃ。
クックック、あの石頭もこれで考えを変えるじゃろうて！
……お、おい助手くん、待ちたまえ！　まだ最終調整が済んでおらんのじゃ、装置をいじっ——



# 覇者の剣

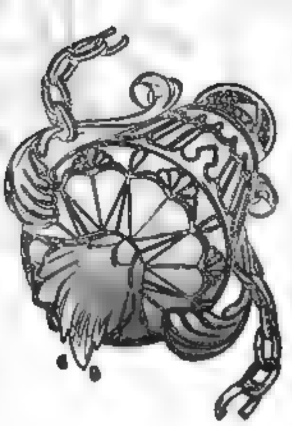


その男、武芸百般に通暁せし英雄なり。
王を補佐して力戦奮闘し、隣国の軍勢を撃破す。
だが王は過剰の流血を好まず、独断で外敵と講和。
かくして英雄は王と袂を分かち、己の道を征く。

英雄のいくさ働き、古今無双なり。
隣国の軍を壊滅させたのち、自国の王を追放処分に処す。
かの者は即位を固辞し、一将軍に留まる。
先王の親類を説得し、王に推戴す。

その新王、惰弱無能の暗君なり。
佞臣ら、権力を掌中にすべく、英雄の排除を画策。
暗君、讒言を信じ、英雄の首を刎ねようとする。
英雄は慨嘆し、佞臣ともども王を斬殺。
かくして彼は王に即位し、覇者と呼ばれるように。

かの者の人望、地に堕つものなり。
次々に叛乱が起き、覇者は休みなく戦う。
が、味方が勝手に降伏し、進退窮まってしまう。
彼は高うかに笑い、敵陣を中央突破し、姿をくらます。
いつの日か剣を引っ提げ、覇者は舞い戻るであろう。



# 永逝の水瓶



冒険者たちは遺跡探索の結果、立派な水瓶を見つけた。
すぐ側に置かれていた羊皮紙には「持ち主を取り殺す災いの神器『永逝の水瓶』、ここに封ず」と書かれていた。
冒険者たちは水瓶と羊皮紙を商人のところへ持ち込み、高値で売り飛ばした。

とある男が水瓶の噂を聞き、即金で買った。
彼は貴族の執事で、主人の妻と浮気をし、主人を暗殺しようとしていた。
執事から「掘り出し物を手に入れました」と水瓶を差し出された主人は喜び、寝室に飾った。
だがどれだけ経とうと主君は健康そのもので、取り殺される気配などなかった。
腹を立てた執事は水瓶を盗み出し、商人に返品した。

今度は別の男が水瓶を買った。
彼は地方領主に仕える騎士で、領民を虐げる主君に天誅を加えようとしていた。
だが一度剣を捧げた主君を殺すことには抵抗があり、自然死という形で永遠に退場してもらおうと考えたのだ。
水瓶を献上された主君は喜び、それを客間に飾ったが、特に健康を損なうようなことはなかった。
騎士は失望し、職を辞して田舎に帰ってしまった。

水瓶はたらい回しにされた挙句、一番最初の商人の元に戻った。
人を取り殺す力はないらしい、と考えた商人は、自分の手元に置いておく決意をした。
その晩、商人は浮気がバレて妻に刺され、あの世に逝った。
商人は知る由もなかった——不貞な妻を持つ貴族や強欲な地方領主がその後、謎の変死を遂げていたことを。
そう、『永逝の水瓶』は正真正銘、災いの神器だったのである……

# 死者教典

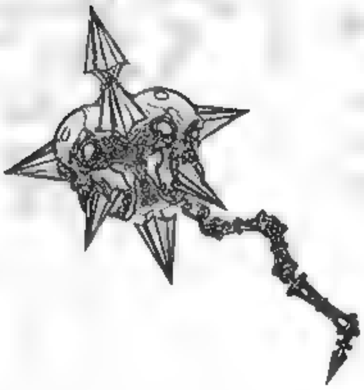


汝、共食いすることなかれ。
――「死者教典」二章三節

汝、腐臭に気を配り、余人に不快な思いをさせることなきよう。
――「死者教典」三章一節

汝、聖水に溶かされることなかれ。
汝、十字架の威光に屈することなかれ。
――「死者教典」五章二節

機敏さこそが生者に与えうる最高の威圧である。
日々鍛錬を怠らず、いかなる時も最大の速度で追いすがること。
――「死者教典」其の外



# 被虐の鉄球

【打撃】ひぎゃくのてっきゅう

新しい玩具が献上されたその日。
お恥ずかしい事に私は
この玩具で遊びたいと思う衝動を
抑えることができませんでした。

ですが、遊び相手を探そうと
鉄球を片手に歩きまわる私を見て
殿方たちは逃げ惑います。
ただ、この体の火照りを静めて欲しいだけなのに
なぜなのでしょう？

いえ、理由はわかっているのです。
影で私がどのように呼ばれているのかも
知っているのです。
きっともう、私と遊んでくださる殿方は
ここにいないのでしょう。

結局使い道のなくなった鉄球を携えた私は、
廂に腰掛けます。
見上げた空に浮かぶのは欠けることの無い満月。
かつての楽しかった日々を思い出し、私はさめざめと涙を流しました。

# 正義の提琴



その旋律は、眠る過去を呼び覚ます。
遠い冬の日。溶けて消えた、幸福な日々を。

心を動かす旋律は、
経験したことのある体験をもとに生み出される。

私の奏でる旋律が
悲しいものばかりなのはきっと、
あの日の記憶が
私の心を埋め尽くしているからだ。

私はただ、音を奏でる。
暗い影が私を覆い隠さぬよう。
あの日の幸福が私を連れ去る前に。

# 暗殺草稿

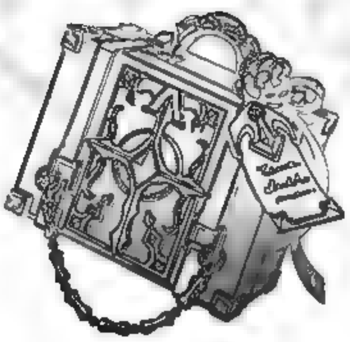


【第一の方法】
階段を下り始めたところを狙って背後から近づき、突き落とす。
難易度はさほど高くはないが、殺しきれるか心許ないところだ。

【第二の方法】
遠乗りに出た際、理屈を付けて同行し、隙を見て馬の尻を蹴飛ばす。
驚いた馬が暴走し、疾走した挙句に振り落としてくれれば、高い確率で頸骨を折るはずだ。

【第三の方法】
寝室の天井裏から秘伝の毒を垂らし、毎日少しずつ飲ませる。
一定量が体に蓄積すると血管が激しく拡縮し、心臓麻痺で頓死する。
やや根気が必要だが、確実性・バレにくさ、共に優れている。

手帖を持つ手が震え出す。これは……誰の字だ？
使用人らを問い詰めに行こうと、私は厨房を出た。
心臓が大きく脈打ち、眩暈が兆す。
第三の方法がもう実行に移されているのか？
延々暗殺の魔手に怯える羽目になってしまうとは……



# 後悔の旅路



その男は材木工場の運営に失敗し、借金に喘いでいた。
彼は妻子に書き置きを残すと、鞄ひとつを持ち、家を飛び出した。
折しも地方で大きな金脈が見つかり、一攫千金を夢見る者たちが次々に流入している最中だったのである。

男は駅へ急いでいる途中、借金取りと出くわす。
返済を督促され、妻子を売り飛ばすよう言われて逆上し、借金取りを撲殺。
男は死体を材木工場でバラバラに切断し、鞄に詰めて持っていくことに。
死体が見つかると、借金取りの仲間が妻子に報復の手を伸ばす恐れがあったからだ。

男は宿に泊まり、一息つく。ウトウトしていると、ドアがノックされる。
宿の主人が「腐敗臭がする、と苦情が入っていますが……」と言う。
男はシラを切り通し、ドアを閉ざすも、もう猶予はないと悟る。
死体の詰まった鞄を手に窓から外へ飛び出し、鞄に錘を括り付けると、海へ沈めてしまう。

一年後、男は黄金を入手し、大金持ちに。現地妻を持ち、酒池肉林の日々を送る。
ある日、豪華船舶に招待した官僚が海釣りをしている最中、四角い何かを引き揚げてしまう。
それがかつて海に沈めたあの鞄だと気づき、男は絶望に駆られ、悟る。
黄金を追いかけて家を出た瞬間、後悔の旅路が始まっていたということを。

# 騙欺の薙刀



その薙刀使いはどれだけ分厚い守りも突破し、たやすく敵将の首を奪うと謳われていた。
かの者の氏素性を知る者はなく、一体何者なのかと各地で憶測が乱れ飛んだ。

敵国が薙刀使いを雇い入れたことを知った諜報員は、出征中の大将軍にそれを報せに行った。
諜報員は本陣を守る兵士に用向きを告げた。
その兵士は声を落とし、「では、今からの話は内密にお願いします」と言った。

兵士は「ここにいらっしゃる大将軍は影武者です。本物は敵に夜襲をかけるべく、間道を通って敵本陣へ向かいました」と言った。
「なぜそれを早く言わぬ！」と諜報員は舌打ちし、慌てて飛び出していった。

諜報員が立ち去った後で、兵士は安堵のため息を漏らす。
彼は物陰に隠していた薙刀と、袋に包んだ大将軍の首を手に、そそくさと立ち去った。
実はこの男こそが薙刀使いで、先ほど大将軍をその手にかけたばかりだったのである。

# 気炎万丈

【祈祷】きえんばんじょう

その神官は巡礼の途中、盗賊団の被害に遭っている村を通りがかった。
「手を拱いていても事態は好転しません！　武力で盗賊を追い払うのです！」
錫杖を振り上げて力説する神官の姿を見て村人達は奮起し、盗賊団と戦った。
そして見事、全滅させたのである。

その神官は巡礼の途中、とある教会に宿泊し、司祭に悩みを打ち明けられた。
日曜の聖餐式に人が来ず、信仰の火が途絶えてしまいそうとの事らしい。
神官は代わりに聖餐式を執り行った。
彼の説教に人々は熱狂し、こぞって教会に詰めかけるようになった。

その神官の説教は人々の心を動かし、奮い立たせる力があった。
彼は瞬く間に信望を集めて教会内で異例の出世を遂げ、大司教の座にまで昇り詰めた。
そして臨終の床についた教皇から呼び出され、後継者として指名を受けたのである。

新教皇となった彼は信徒達を順調に掌握していく。
が、人の心を動かす彼の説教は彼自身の心を次第に歪曲させてしまった。
「我を崇めよ！　地上に幸福をもたらす我は神そのものである！」
そんな説教をするようになると、一部の信徒が反発した。
彼は側仕えに毒を盛られ、横死したのだった。

# 絶対零度

【射出】ぜったいれいど

常に冷静沈着な弓使いがいた。気高く、人付き合いを好まず、孤高を好んだ。
ただし腕前で並ぶ者はおらず、誰からも一目置かれていた。
彼は自分の弓を大切にし、誰にも触らせないことでも有名だった。

ある日、弓使いは若者に腕試しを挑まれる。
若者は梢に止まった鳥を弓で射殺。
弓使いは空を飛ぶ鳥の羽だけを正確無比に射て、命を奪わず墜落させる。
「左手で射たが、利き腕の右手なら五倍の距離から命中させられる」と弓使いは言い、屈辱に震える若者を尻目に立ち去る。

弓使いは旅の最中、とある酒場で食事する。
一人の男が弓をひったくろうとしたが、弓使いは簡単に男を捕まえてしまう。
「子供が病気で。あなたの弓を売れば高く売れるだろうと……」と、くどくど言う男を無視し、弓使いは官憲に引き渡す。
彼には泥棒の事情などどうでもよかったのである。

後日、弓使いに恥をかかされた者たちが多数の用心棒を雇い、真夜中に彼の宿泊先を包囲。
弓使いは慌てず騒がず、屋根の上から矢を次々に射かけ、全員を返り討ちにする。
これ以降、彼は生ける伝説となり、愛用の弓は「絶対零度」と呼ばれて後世に継承されることとなるのだった。

# 枢機卿の横笛

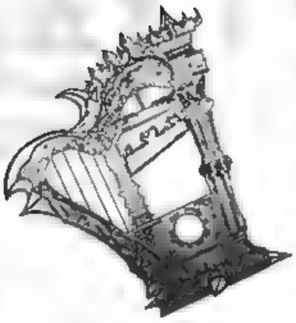


その枢機卿は歌舞音曲に優れる風流人で、横笛の名手だった。
彼は年若い修道女を雇い、身の回りの世話を頼んでいたが、とある事実は知らずにいた。
彼女が自分に横恋慕し、いつもこっそり横笛を舐めていることを……

ある日修道女はふしだらな欲望を募らせ、枢機卿の部屋に忍び込んだ。
そこには下働きをしている青年がいて、枢機卿の横笛を舐め回している最中だった。
そう、その青年もまた、枢機卿にふしだらな気持ちを抱いていたのだ。

神聖なものを穢された修道女は激怒し、その場にあった花瓶を掴んだ。
そして下働きの青年をぶん殴って殺害したあと、ふと我に返る。
修道女は飛び降り自殺を図ったが死に損ない、二度と起き上がれなくなってしまうのだった。

枢機卿も歪んだ性癖の持ち主だった。
彼は社交界で知り合った上流階級の夫人たちに音楽を教え、彼女たちの横笛と自分の横笛をすり替えていた。
そうすることで彼女たちを支配した気分を味わい、暗い愉悦に浸っていたのだ……



# 暴力の竪琴

【楽器】ぼうりょくのたてごと

うー、つまんない！
つまんない！　つまんない！　つまんない！

誰でもいいから遊んでほしいです！
遊んで！　遊んで！　遊んで！　遊んで！

ねー出てきてください！
ギシンでも、アンキでもいいから僕と遊ぼう！

ぐぅ……
あっ、お腹すきました。
邪魔だからもう帰って♪

# 無作為の銃

その少年は優しく、おとなしく、争いを好まなかった。
そういった気性が災いし、同年代の少年たちにいつも虐められていた。
少年は毎日のようにいじめっ子達に殴る蹴るの暴行を受けていた。

その日も暴行を受けた少年が片足を引きずりながら家路を辿っていると、一人の老人が現れた。
「少年よ、復讐を望むならこれを使え」と老人は言い、一挺の拳銃を手渡してきた。

少年は連日、人気のない場所に連れ出され、いじめっ子達に暴行を受けた。
少年の心の中でとうとう撃鉄が落ちた。彼は懐から拳銃を取り出すと、自分を取り囲む少年達に向けて引き金を絞った……。

銃口から飛び出たのは鉛玉ではなく紙吹雪だった。
老人が現れ、「冗談を真に受けるとはな！」と笑った。いじめっ子達も笑った。
少年はわめき散らし、老人といじめっ子達を銃把で撲殺した。
後日、新聞記者は「万人の心に無作為の銃が潜んでいる」と書き立てたという。

# 皇帝の覇権

【打撃】こうていのはけん

その昔、人界を武力統一した帝国の祖は神の座を窺い、天界と干戈を交えようとした。
血みどろの戦いが続いた後、神は和睦案を持ちかけた。
代々の帝国皇帝は地上の最高権力者たる事を神に公認され、覇権の象徴として斧を与えられた。

当代皇帝は金庫作りが趣味というこびとで、傑物揃いの歴代皇帝に劣等感を抱いていた。
ある日、覇権の象徴たる斧が謁見の間から消えているのに気づき、彼は激怒した。
部下達に行方を捜させたが見つからず、報告を持ってきた使いの者を次々手討ちにした。

躍起になる皇帝を嘲笑うかのように、斧の探索は捗らなかった。
手討ちを恐れて誰も報告を持ってこなくなると、皇帝は捜索隊の人間らを難詰し、首を刎ねた。
「自分に近しい誰かが手引きして盗み出させたのでは？」という猜疑心に駆られ出し、重臣らを次々罷免した。

皇帝は気づく。しこたま酩酊した夜、自作の金庫に斧を入れたのをすっかり忘れていた事を。
事実が明るみになった時どんな災難が降りかかるかを考え、皇帝は口を緘する事を選んだ。
が、閨で妾に漏らした事から芋蔓式に伝わってしまい、怒り狂った臣下達によって暗殺されたのだった。

# 熱ク照ラス音

横笛を愛用する辻楽士がいた。
彼の演奏はとても勇ましく、人々は彼の音楽から勇気を貰っていた。

辻楽士の前に青年がやってきて、「勇敢に戦って国のために死にたい。出征前に演奏を聴かせてくれ」と頼んだ。
その青年は戦争で大活躍し、英雄として持て囃された。

辻楽士の噂が広まり始めた。
ある日彼が街頭で演奏していると、「ひきこもりの息子に横笛を聴かせてやってほしい」と一人の男が頼みに来た。

辻楽士はその男の息子に会いに行き、演奏を聴かせた。
息子は高らかに「勇気凛々、胸いっぱいだ！」と叫ぶや、屋上へ駆け上がると欄干を勇ましく蹴って飛び上がり、墜死を遂げたのだった。

# 死を招く風見鶏

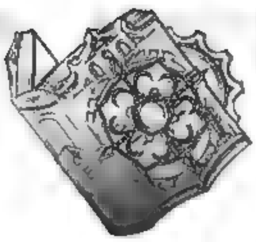
【魔具】しをまねくかざみどり

とある国に目端の利く道具屋がいた。
彼は王を凌ぐ権勢を誇る宰相にうまく取り入り、袖の下と引き換えにあれこれ便宜を図ってもらっていた。

宰相は流行病でポックリ死んでしまい、一族郎党は新王に処刑された。
道具屋は新王に挨拶に出向き、莫大な財宝を贈った。
その気前の良さが気に入られ、道具屋は新王の御用商人となった。

新王は間もなく酒食に溺れ、政治を疎かにし始めた。
隣国から調略の手が伸びてくると道具屋は内応し、機密情報を売った。
隣国の侵掠の前に王都は陥落し、新王は処刑された。

道具屋は隣国の王に伺候した。
宮廷魔術師が王に「陛下、この者の処遇は私にご一任を」と言った。
王が許可すると、宮廷魔術師は魔術を使った。
道具屋はその本性に相応しい姿——風見鶏に変えられ、その場で叩き壊されたという。



# 古代遺跡の書



【或る古代遺跡について】
少し探索しただけで、宝が腐るほど眠っているのが分かった。

【続・或る古代遺跡について】
最近発見されたばかりという事もあり、心なき盗掘者達に荒らされていないようだ。

【或る古代遺跡について・補遺】
これだけの宝が眠っているにも関わらず、ナイトメアもほとんど徘徊していない。
心ゆくまで遺構を調べる事ができ、満足している。

ようこそ、欲深き者ども。
宝が取り放題の古代遺跡が放置されているなどという戯言を真に受けてくれた事、深謝する。
御礼は暗黒神の生贄となる栄誉をもって代えさせて頂こう――！

# 継承の杖

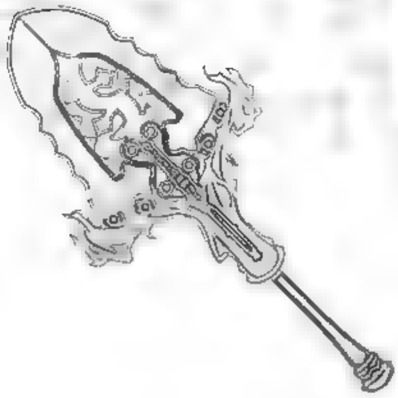
【祈祷】けいしょうのつえ

導師と呼ばれ、皆から尊敬される魔法使いがいた。
彼は今際の際、弟子に導師の称号を譲り、愛用の杖を授けた。

二代目導師は弟子を取った。
だが弟子は導師と折り合いが悪く、彼を殺害して杖を奪い、三代目導師を名乗った。

三代目導師も弟子を取り、彼に杖を授け、跡目を継がせようとした。
が、二代目導師には息子がおり、その息子が父の仇である三代目導師を討って杖を奪い、四代目導師となった。

はははは、愚劣極まりない人間どもよ。
貴様らは導師の肩書きに血眼になっているつもりだろうが、実情は違う。
諍いの中心はこの私なのだ！
さあ、もっともっと殺し合うがいい……！



# 暴力の意思



なんで人間はこんなに警戒心がないの？
すぐ後ろにまで近づいても
全く気づくことはないんです。

犬や猫でさえ、敵意に気づき逃げちゃうのに。
人間って本当に殺しやすい。

こんなに簡単な仕事なのに
どうして人気な職業にならないんだろう？
毎日くたくたに疲れる仕事より、
ずっと沢山お金をもらえるのに。

人間ってへん。
人間って本当に変わっている。
おかしいのは、ボクじゃなくて
ボクの事をへんと言う人たちだ。
どうしてそのことに気づかないのでしょう？

# 異教の杖

【祈祷】いきょうのつえ

「その杖を以て異教徒たち神の敵を撃て」と、異端審問官となった司祭に教皇は杖を授ける。
彼は大任を与えられた事に感激し、神の敵すべてを裁くことを決意した。

異端審問官の前に一人の老婆が引き据えられる。
彼女は近隣の子供をさらって監禁し、おぞましい実験に使っていたとの事だった。
異端審問官は一分のスキもなく証拠集めし、
彼女を魔女と認定。
火あぶりの刑に処する。

異端審問官は一人の女性を裁く。
彼女は生活苦で自分の子供たちを育てられず、やむなく女性として最も卑しい職業に手を染め、店ごと摘発された。
女性の近親者や近隣の者が減刑嘆願するも、異端審問官はまったく聞き入れない。
その女性を魔女認定し、火あぶりの刑に処する。

疫病が流行し、治療費を捻出するため聖遺物を売り飛ばした村長が異端審問にかけられる。
異端審問官は神への不敬とし、火あぶりに処してしまう。
刑場からの帰り道、彼は路地裏に引きずり込まれ、首を掻き切られる。
その場に転がった杖には「最も異端なる者、横死す」という一文が彫られていた。

# ウラミ時雨



【とある死刑囚の調書】
男は通りで被害者とすれ違った際、肘が当たったという理由で難癖をつけた。口論の末、刀を抜き放つや被害者の頸部を一閃し、首を斬り落としてしまった。

【とある死刑囚の弁明】
正直、なぜあんな些細な事を逆恨みして大騒ぎしたのか分からん。
無責任なようだが、それが偽らざる本音なのだ。
何とか寛大な処分を願えないだろうか。

【自警団隊長の日記】
刀を司祭様に見せたところ、とある事実が判明した。
逆恨みばかりして手当たり次第人を斬り殺していた殺人鬼の魂が宿っているそうだ。
ま、こうやって押収したわけだし、何か起きる心配はないな。

【刑吏長・末期の瞬間】
死刑囚の刀が見当たらん。チッ、質屋で飲み代に換えようと思ってたのに。
ん？　お前、どうしてその刀を？
ちょっと待て、お前、目がマジだぞ！
よ、よせ、お前を虐めているのは親愛の気持ちから——
や、やめ——

# 黒騎士ノ魂



武勇知略共に優れ、魔術の奥義まで極め、誰からも畏怖される黒騎士がいた。
彼は皇帝を弑逆して幼帝を擁立し、自分は後見役に納まった。
その国で彼に逆らう者は一人もいなかった。

黒騎士を倒そうとして憂国の士が集い、密談を重ねた。
されど、鬼神の如き強さを誇る黒騎士の打倒はきわめて困難だった。
懊悩する一同の前に一人の商人が現れ、「私めが黒騎士を無力化してみせましょう」と言った。

商人は黒騎士に謁見し、宝玉を差し出した。
「三つの願いを叶える宝玉を献上いたします」
黒騎士が宝玉を手にすると魔人が現れ、「御主人様、三つの願いをどうぞ」と言った。
黒騎士は喜び、まず「永遠の若さ」を願った。

強面を気にしていた黒騎士は「人に好かれる外見」を願い、
「無尽蔵の魔力」を願った。
魔人は一礼し、「願いを叶えて差し上げましょう」と言った。
次の瞬間、黒騎士は人形の姿に変えられてしまった。
――以来、そのお守りは人の手を渡り歩き、誰からも愛されたという。

# 大男の手斧



その男は図体ばかりデカく、「ムダ飯喰らい」と両親から罵られ、虐待されていた。
ある日、宿の主人が顔を出し、
「息子さんを雇いたい」と言った。
翌日から大男は宿屋に働きに行くことになった。

大男は宿の主人から手斧を渡され、
薪を割るよう言いつけられた。
彼は短い時間でたくさん割った。
宿の主人は大男を褒め、ご馳走を振る舞った。
生まれてこの方褒められた試しのなかった大男は感激し、涙した。

人相の悪い男たちが現れ、宿の主人に暴力を振るった。
彼らは借金取りで、宿の主人は彼らに負債を背負っており、毎日のように痛めつけられていたのだ。
大男は恩人が殴られているのを見て激怒し、手斧を掴むや、借金取りたちの脳天を粉砕した。

大男は逮捕された。頭の悪い彼は犯行の動機を説明できず、終身刑を言い渡された。
宿の主人は獄中の大男を見舞い、暖かい言葉をかけた。
ニヤニヤしそうになるのを彼は堪えていた。
そう——この男は賭博の負債を帳消しにする計画を立て、実行犯を務めさせるつもりで大男を雇ったのである。

# 復讐の大剣



ある日故国は火に包まれた。優しかった両親、仄かな思いを寄せていた隣の家の少女、穏やかな暮らし……全ては奪われた。
かくして、復讐の黒騎士は生まれた。

流浪の旅路の中、仇を見つけ次第殺していった。身に纏う鎧も、いつしか血の臭いが色濃く染みついた。
旅の途中で出会った少女が言う。「私と一緒に生きて」と。
けれど彼は、彼女の手を取らなかった。

あの日の首謀者が目の前にいた。
泣いて縋り、命乞いをしようとも、黒騎士の刃が止まるはずもなく。
無様な死体を眺めていると、涙声が聞こえた。
あんな男にも愛してくれる者はいたらしい。

彼はその後も刃を振るい続けた。
請われて。或いは気まぐれで。空っぽになった胸裡を満たすかのように、彼は殺し続けた。
とある日、彼の前に一人の男が現れた。
「お前を殺し、仇を討つ」
その面構えは、いつか殺した仇敵によく似ていた。

# 最後の槍



男手一つで私の事を育ててくれた父。
その一生懸命な父を少しでも支えるため、手伝いをするようになったのは必然だったのかもしれません。

父は鍛冶屋でした。しかし、その不器用な性格がアダとなり、出来の割に作品は売れませんでした。見かねた私が行商に出るようになると、武器は飛ぶように売れるようになりました。

しかし最近、父が働かなくなってしまいました。
始めは体調を気遣っていたのですが、
こうも長く続くと将来が不安です。
その影響でつい今日は、父に厳しい言葉を
浴びせてしまいました。

次の日、父は工房で冷たくなっていました。
残されていたのは、出来たばかりの一振りの槍と
汚い文字で綴られた手紙が置かれていました。

その晩、私の涙が止まる事はありませんでした。

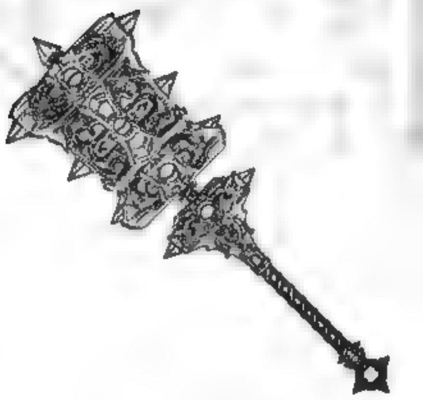
# 記憶の大剣

朝目が覚めると見知らぬ子供が
その小さな体に不釣り合いな大剣を
抱え、
目の前にいた。
「おはよう。お父さん。」
子供は屈託のない笑顔を浮かべ、
自分に駆け寄ってきた。
恐ろしいことに自分の記憶に
その子供の姿はない。
それに加え大剣を握りしめている。
背筋が凍る思いがした。

怯える姿を見た子供は不思議そうな
表情で問いかける。
「どうしたの、お父さん？　なんか
変だよ？」
思わず口をつく怒声。頭が冷えた頃
には子供は家からいなくなっていた。
恐る恐る扉を開くと、
大剣を抱く子供が庭先に座っていた。

子供の話を聞くと、どうやら住むと
ころがなく 彷徨っていたところを
保護したらしかった。
そして一か月もの間、幸せに暮らし
ていたようだ。
友人にもその話をしたが、どうやら
本当に自分が拾ってきたらしい。
どうやら子供と暮らした期間の記憶が
全て欠落しているらしい。

だが、どうしてもその子供を
大切に育てる気にはなれなかった。
子供が寝静まった夜、大剣を抱え眠
る子供を抱え、山に捨て帰宅した。
すると不思議なことに、
失われた記憶が戻ってきたのだ。
子供と自分の絆を思いだし、
思わず目頭が熱くなる。
「そうか。そういうことだったのか……」
後悔の念の抱きながら、
子供を捨てた場所へと駆け戻る。
もうそこにいないことを確信しなが
らも自然と足は止まらなかった……



# 櫂ノ棍

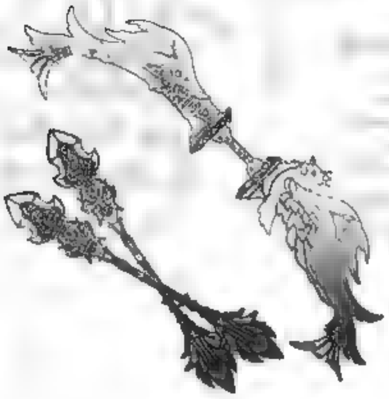
【打撃】かいのこん

「この船は3人乗り、お前の乗る場所は無い。」
自分の乗船するスペースが残されている事は
明らかだった。
傷つく私の表情を見て、満足そうに微笑む
同年代の男たち。
その時の光景は私の心の奥深くに刻まれ、
思い出したくなど無いはずなのに、
時折私の願いなどお構いなしに自動的に蘇る。

その時の怒りが私を変えた。
「いつか見返してやる。」その思いだけで私は
学業に努め、青年となる頃には
周囲から羨まれるような
立派な男へと成長していた。

月日は流れ、私は職に就き、他者を使い
金を得ることが出来るようになっていた。
そしてその資金を使い、堅牢な船を造船する事が生きがいになっていた。
「この島の水位は年々上昇している。きっといつの日か、この船が必要になる日が来る。」
その熱意が私を突き動かす原動力となっていた。

遂にその日は訪れた。
島から鳥がいなくなり、未だかつて無い程
激しい雨が降る日々が続きました。この島が沈む事を確信した私は船へ乗り込みました。
すると船へ乗り込もうとする男たちが現れました。
「この船は1人乗り、お前たちの乗る場所は無い。」万感の想いを込め、手にした櫂で苦い過去を打ち払いました。



# 氷鳥の弓

【射出】みずどりのゆみ

この村では10の歳を迎えると長老から
小鳥を授けられる風習がありました。
青い翼をもつ美しい鳥を授かった少年は
小鳥に名をつけ、立派に育て上げることを誓いました。

朝、小鳥の囀りで目を覚まし
共に森を駆け同じ食事を取る日々は長く続き、
少年と小鳥は同じ景色を眺め、逞しく成長しました。

そして15の歳を迎えると、
少年は長老に呼び出されました。
その肩には、美しい鳥が行儀よくとまっています。
そこで長老から言い渡されたのは
成人となるための儀式でした。

少年は慟哭と共に鳥をくびります。
美しい羽を毟り、その血肉を腹に収める頃
少年は狩人として生きる自覚が
芽生えていました……

# 闇 蜘蛛の弩

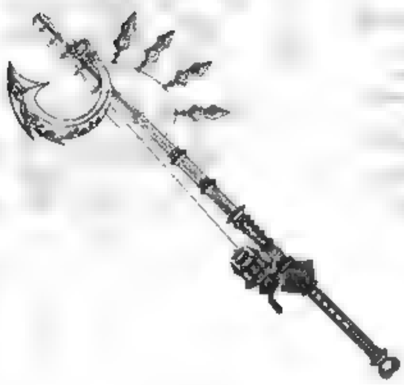


神殿に仕える高潔な弓騎士がいた。彼には美しい妻がいて、見目麗しい夫婦と人々に賞賛された。
ある日、大司教の愛人が殺害される。大司教は怒り狂い、
「下手人を捕まえた者に望みのままの褒美を出す」と触れを出した。

非道な殺人に弓騎士は憤りを感じ、捜査を始めた。が、特にこれといってめぼしい証拠は見つからなかった。
ある晩、弓騎士は酒場に足を運ぶ。
そこには妻の弟がいて、久しぶりに会った二人は酒を酌み交わした。

翌日、弓騎士は投獄されている自分に気づく。
やってきた役人は彼に、彼の別人格が殺人を繰り返していたことを説明する。
見かねた彼の妻が弟に相談し、酔い潰した上で逮捕させたのだった。
弓騎士の抗弁も虚しく、彼はすぐ処刑されてしまう。

「うまくいったわね」「ああ」と、弓騎士の妻と大司教はほくそ笑む。
二人は不義密通を続けており、愛人に結婚を迫られた大司教は彼女を謀殺し、続いて弓騎士も排除したのだった。
弓騎士の妻は夫の弓を飾った寝室に大司教を引き入れ、爛れた関係を続けたという。



『スノウ/』
『マグロクレリック』

# 正義の釣り竿

【祈祷】せいぎのつりざお

喋る魚との出会いは、
私の精神に僅かな変化をもたらした。
そう、魚の声が聞こえるようになったのだ。
今日口にした刺身の慟哭は
やけに私の心を揺さぶった……

「マグロはなぜ泳ぎ続けなくては
生きられないのか？
その理由を説明しちゃいます！
ヒントはずばり鰓呼吸にあるのだー」

「鰓呼吸では水中に溶け出した酸素で
呼吸するんだけど
そのメカニズムが特殊なの！
水中は酸素が少ないからねん。
それを効率的に吸収するために
酸素を取り入れる血管の血流は
取り入れた水の流れと逆になってて……」

話が、長い。
結局マグロが泳ぎ続けなくては死ぬ理由は
不明のままだったが、
私は刺身を咀嚼し始めた……

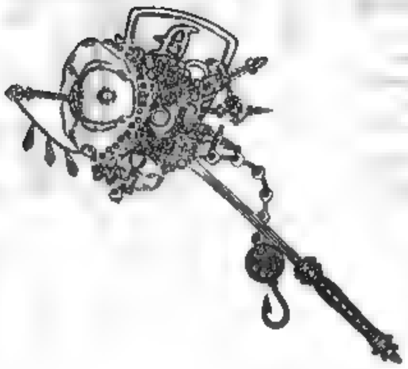
# 依存の釣り竿

しゃべる魚と出会ってからというもの、
今まで気にせず口にしていた
魚の声が聞こえるようになりました。
今日食べた刺身は僕にこう問いかけてきました……

「私は大手食品取扱業者の
契約養殖場で生まれ育ちました。
私の両親も、親友も、恋人も刺身にされるために
生み出され、そして人間たちの都合で殺されました。」

「初めから結末の決まっていた
私の物語に意味はあったのでしょうか？
人間たちに翻弄され続けた私たちの運命は
誰が定めたものなのでしょうか？」

魚の問いに僕は答えることが出来なかった。
それに、その魚の抱いた疑問は
僕にとって都合の悪いものだった。
だから僕は考えることを放棄して、
刺身を口に放り込んだ……



# トレジャーロッド

【打撃】とれじゃーろっど

釣り★スタ!

【ソーシャルゲームの歴史】
2009年
国内SNSサイトがオープン化を行い、
サードパーティによる
ゲーム制作が可能となった。
これに追随する形でGREEもオープン化を表明。

2009年
米国企業の開発したソーシャルゲームを
アレンジしたようなタイトルが国内で流行り始め、
ピーク時で月商数十億円を超えるタイトルなども出現し、
市場は急激に拡大し始める。

2012年
スマホでのゲームマーケットが一躍注目される。
月商百億円規模のタイトルなども登場し、
コンシューマー大手企業の時価総額を超えるような
ソーシャルゲーム企業も現れ始めた。

2017年
携帯端末の発展と共にリッチ化を
進めたソーシャルゲーム業界は
開発費用が高騰し、息切れしていた。
コンシューマーゲーム業界と
同じような変遷をたどる
ソーシャルゲームの今後がどうなるのか？
それは誰もわからない。

© GREE,Inc.

# 錨竿

まだ釣り竿のイラストが釣り竿の体をなしていた時期の竿。
一文目から意味が分からない文章になっているが、事実です。
この後、釣りスタの釣り竿イラストは革新的な変化をしていくこととなります。
それは、芋虫が華麗な蝶へと変態するかのような
摩訶不思議なものでした。

まず、最初に起こった変化は
デコレーションの強化でした。
この変化により、現実世界に
流通する釣り竿とは一線を画す
魚を釣ることと全く関係のない機能が
強調されたデザインになりました。

その後、竿にはテーマ性を持った
様々な意匠が凝らされることとなり、
10周年を迎えた現在では、
釣り竿のデザインが「神」となりました。

※この神とは形容詞的な用法ではなく、名詞として使用しております。

つまり、釣り竿のデザインが
人型や獣型になったのです。
「やっぱり売れているソシャゲのデザインは
神をモチーフにするべき。」
そういった打算的な考えがあったのでしょうか？

理由は不明ですが、神をモチーフにした釣り竿が大量に生み出されることとなりました。
「それってどんなデザインだよ！？」
そう疑問に思ったのなら
是非釣りスタをプレイしてみてください。
そこにはソーシャルゲーム業界の
正当な進化？を遂げた姿があります。




© GREE,Inc.

# 悲哀の意思



不幸な私が好き。でも、積極的に自らの環境を不幸にする勇気はない。
できるのは、不倫という手近な場所にある不幸に手を出すことだけ。

本当なら、もっと不幸な環境に身を置くことはできる。私は流されるままに学業に勤しみ、平凡な会社に入社した。ご飯も食べるし、人並みには美容や健康にも気を遣う。

矛盾している？
はい。自分でもそう思います。
ですが人間とは誰しもが大なり小なり矛盾を抱えた生き物でしょう？

私は人一倍自分の不幸に敏感なだけ。
他者の不幸などに興味はない。
壊れちゃったのかな？
いいえ。私の価値観ではそれが普通なの。
ただ、一部の感情が一般的な価値基準から外れているだけのツマラナイ人間なの。

# 終末の剣戟

武を以て覇道を征く皇帝、北に座す。
仁を以て王道を征く公王、南に座す。
両雄、主義主張の違いより、激しく争う。

両国共に驍勇武略に富む臣下多く、兵の士気も盛んなり。
互いに一歩も譲らず、戦乱は長期に渡る。
民草は疲弊し、怨嗟の声を上げるものとなり。

神は事態を憂い、天使を遣わす。
天使は一本の槍を以て、一騎打ちを続ける君主二人を貫かんとするものなり。
が、停戦を呼びかけに参陣していた東の大国の王太子が串刺しの憂き目に。

王太子横死の報を聞き、東の大国の王は怒髪天を衝く。
かの者は数十万の大軍を率い、疲弊した北軍と南軍目掛け「鏖殺せよ！」と全軍に命を下す。
血で血を洗う終末の剣戟、かくして幕を開けん……

【長柄】しゅうまつのけんげき

# 邪鬼の威圧

【射出】じゃきのいあつ

其は、名匠が魂を込めて造り上げた品。
其は、聖者が祝福した弓。
其は、すべての魔を祓う。

その弓は、十人張りの強弓。
その弓は、並の膂力ではとても引けぬ。

王より弓を下賜されし勇者は人々の歓呼に送り出され、邪鬼討伐に赴く。
誰もが皆、粗暴な邪鬼が討ち果たされることを期待し、歓喜した。

そして今、邪鬼がその弓を手に、人類を脅かしている。
勇者はあっさり返り討ちに遭い、最強の弓は邪鬼の手に渡ってしまったのだ。
邪鬼の威圧は果てなく続くであろう。

# 闇ノ医学書



俺は無免許の闇医者だ。おっと、先生なんて呼ばないでくれよ。
こちとら腕に覚えはあるが品性下劣な根っからの悪党なもんでね。
金さえ積まれりゃ、手配中の犯罪者だって手当てする。
違法な手術を施す事も厭わん。
ま、何かあった時は気軽に声を掛けてくれや。

俺はとある娼婦とねんごろになった。家族から愛されず、父親から性的虐待を受けた可哀想な子なんだ。
そしてあいつは俺の子を宿した。俺は「産んでほしい」と言ったが、彼女は躊躇していた。
そんなある日、あいつが馬車に轢かれ、瀕死の重傷を負ったんだ。

俺は自分の家に彼女を運び込み、容態を診た。
外傷も酷い上に、臓器を複数やられちまってた。
このままだと九分九厘助からない。俺は意を決して彼女の隣に寝ると、自分に部分麻酔を施した。
そして自分の体内から臓器を摘出し、彼女に移植したんだ。

手術が終わり、彼女は息を吹き返した。
俺はある事に気づいた。自分の隣に横たわる男は——俺自身じゃねえか！
何と俺は、彼女の中で息を吹き返しちまったんだ。
「臓器に魂が宿る」なんて話を鼻で笑ってたが、あれは本当らしい！
よし、このまま体を頂いちまおう。
俺の子を俺が産む事になるのか、こりゃ愉快だぜ！

# 瞳の刀



父王が第二王子に跡目を継がせる気だと知った第一王子は寝所へ忍び込み、王家の刀で父を殺害した。
すると刀に魔眼が浮き出て、第一王子をギロリと凝視した。
「見たぞ」という声が頭の中に直接響いた気がして、彼は身震いした。

第一王子は王位に就き、善政を敷いた。
だが王家の刀を抜くたびに魔眼が浮き出て、彼を凝視した。
彼は臣下に刀を見せて処分するよう訴えたが、「はて、然様なものがどこにあるのです？」と全員に返された。

王は祈祷師を呼び、刀に悪魔祓いの儀式を施させた。
が、儀式が終わった途端、またしても魔眼が浮き出て彼をギロリと凝視した。
その後、王は心身共に荒んでいき、暴君と化してしまった。

「これ以上は捨て置けない！」と第二王子は決意して寝所に忍び込み、王家の刀で兄王を殺害した。
すると刀に魔眼が浮き出て、第二王子をギロリと凝視した……

# 獅子殺しの鉄槌



その騎士は名うての武門の嫡男として生まれたが、臆病で無能だという噂が立っていた。
大将軍職の父から直々に槌の扱いを教わりながら、まるで使いこなせなかったというのだ。

その国は隣国に併呑されており、隣国から遣わされた枢機卿が実権を握り、王は飾り物同然だった。
その折、老齢の親衛隊隊長が病死した。
枢機卿は無能と噂の高い大将軍の息子を後任に就けた。

枢機卿は鷹狩りを催した。
出発直前、落雷があり、親衛隊隊長となった息子は悲鳴を上げてうずくまった。
それを見た枢機卿は彼をますます侮った。
鷹狩りの最中、枢機卿は王めがけて獅子を放ち、暗殺しようとした。

親衛隊長は鉄槌を見事に使い、獅子を殺した。
彼は枢機卿を捕らえ、暗殺を画策した証拠を集め、隣国の非を鳴らした。
隣国は国際的信用を失い、その国から手を引いた。
親衛隊長はとことん枢機卿を油断させ、足元をすくったのだった。

# 騎士団の提琴



今宵お会いしたのも何かの縁です、しがないヴァイオリン弾きの話を聞いてくだせえ。
あっしはこれでも名のある騎士団の一員だったんでさ。
ま、その騎士団はもうこの世にありゃせんがね。

戦いの前、勝った後、負けた後。
嬉しい時、楽しい時、悲しい時。
祝い事の時、特に何もない時。
あっしはヴァイオリンを弾き、みんなを鼓舞していたんでさ。

あの夜もみんなに一曲ねだられ、ヴァイオリンを弾いたんでさ。
ところがその音で野鳥が騒ぎ、付近に伏せていた敵軍が恐慌をきたし、遮二無二攻めてきて……。
あっしら騎士団は次々殺されていきやした。

ご覧の通り、あっしにゃ足がないでしょ？　いや、シャレじゃないですって。
あっしは亡霊になったまま、今も成仏できずにいるんです。
あっしは自分が殺したも同然のみんなのため、夜な夜なヴァイオリンを弾いてるんでさぁ。

# 水帝の杖



その地方の民は、海から採れる塩や海産物で生計を立てていた。
だが津波の災害が頻繁に起きるようになり、経済が滞った。
王は津波を起こさないでもらえるよう、海の主である鯨に頼み込んだ。
鯨は王の要求を呑まず、すげなく彼を追い返した。

王は何度も鯨と話し合った。
「自然の摂理に従っているだけだ」と鯨は主張し、話し合いは進展しなかった。
武力による恫喝を意見する家臣もいたが、王は決して採択しなかった。
対話が続く間、鯨は何度も津波を起こした。
臣下は激発し、鯨を殺そうとしたが、王は体を張って押しとどめた。

あくまで平和的解決を望む王に鯨はとうとう心を動かされ、津波を起こす際は前もって知らせることを約束した。
それからすぐ、未開の地に棲まう部族がその地に侵攻をかけてきた。
王は彼らと話し合うべく、丸腰で彼らの陣地へ赴いた。
だが蛮族は王を嘲笑い、その場で惨殺したのである。

鯨は古今未曾有の大津波を引き起こし、蛮族を滅ぼす。
――数百年後。
ひとりの開拓者が絶海の孤島で祠を発見し、祭壇に立派な杖が供えられているのを目撃する。
そこは平和を愛した王の墓であり、その杖は水帝からの贈り物であることを知る者はいない。

# ブラックボム



ソーシャルゲームの運営は一般的にKPIと呼ばれる、いくつかの数値の向上を目指しております。基本的に目標に設定されるKPIは売り上げと相関性のある数値が選ばれます。今回は代表的な2つのKPIについて簡単に説明したいと思います。

KPI講座その①　DAU(Daily Active User)
DAUとは、その日ログインしたユーザー様の総数のことです。ストアランキングの上位に名を連ねるアプリともなると、この数値は100万を優に超える値となります。この100万という数値は遊園施設の一日の来場者数を遥かに超える人数となります。それだけの方に遊んでいただくゲームにするためには、小手先のインパクトだけでは不十分です。

KPI講座その②　PUR(Paid User Rate)
この数値は課金者の割合を表す数値です。簡単に言うと、その日のガチャのラインナップがどれだけユーザー様に欲しいと思っていただけたかが、わかる数値のことです。つまりこの数値が上昇する日を多くすることが出来れば、売り上げが向上します。

この釣りスタコラボがKPIにどのような影響をもたらすのか、皆目見当がつきません。ただ、KPIに直接影響しない「顧客満足度」が本当に重要な数値だと考える人がいたからこそ、このコラボが実現したのかもしれません。少しでもコラボイベントを面白いと感じていただけたら嬉しいです。



© GREE,Inc.

# 薄緑

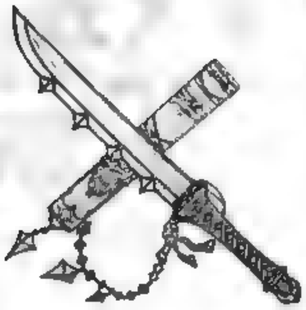


生まれながらにしてそうだったのか。
はたまた、主を取り巻く環境がそうさせたのか。
主は戦へとのめり込むようになっていました。

始めは、代々私を扱う者達と同じように、
使命感がそうさせたのだと思っていました。
しかし、それは私の認識違いのようでした。

「死を隣に感じられる、戦場ならば
この悲しみも忘れられる。」
主は私を月に翳し、そっと呟きました。
その時ようやく、私を握るその手が
震えることに気づいたのです。

「もしまた巡り合うことが出来たなら、
その時は最後まで。」
その言葉と共に主は、私に願いを込めると
箱根に奉納しました。
それからというもの、いつか訪れる
その日を信じ、私は眠り続けているのです。



# 今剣



始めは最愛の人との時間を奪う主様を
嫌悪しておりました。
ですが兄とすれ違い、傷だらけになった
彼を支える姿を見て考えを改めました。

「最後は頼りにしておりますよ。」
主様はいつの頃からか、そんな言葉を
よく口にするようになっていました。
今思えば、主様は最後の瞬間が近いことを
悟っていたのかもしれません。

……遂に約束を果たす瞬間が訪れます。
ですが、自然と言葉が口を衝いて出ました。
その刀としての使命よりも、
自らの気持ちを優先する意志は
きっと主様の影響によるものだったのでしょう。

こんな苦しい気持ち、知りたくなかった。
こんな感情。血に濡れた私には相応しくない。
でも、そんな今だからこそわかる。
二人がどんな想いで、私に最後を託したのかを。
……私は最愛の人達が冷たくなるその瞬間まで、
感謝の想いを叫び続けました。

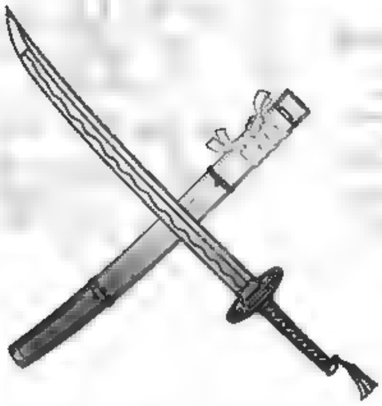
# 舞扇

後白河法皇の命により白拍子１００人が
雨乞いの舞に挑みました。
しかし、誰も雨を降らすことは出来ませんでした。
誰もが諦めかけたその時、主様の美しい舞いが
神のもとへ届き、雨が降り始めました。

そして「日本一」の称号を法皇より賜った主様は
各地から舞の依頼が来るようになりました。
やがて住吉での雨乞いの際、慈雨に濡れながらも舞いを奉納する主様の姿が義経様の目に留まることとなります。そして秘密の逢瀬を重ねるうち、主様は義経様の妾となりました。

しかし、義経様との生活も長くは続きません。
義経様と吉野山で別れた後、主様は捕えられてしまいます。そして義経様白刃の理由をつくった頼朝公に鎌倉を称える舞を強要されることとなります。
しかし、主様の舞いは、義経様を想う歌に合わせたものでした。

更に追い打ちをかけるように義経様との間にできた子供を頼朝公の命により殺されてしまいました。それからというもの、主様は壊れてしまいました。
いえ、もうとっくに壊れてしまっていたのかもしれません。なぜなら主様の子は義経様の間に出来た子ではなかったのですから……



# 無銘

【打撃】むめい

一日限りの関係。その場限りの舞い。
主が他者に心を開かない理由は簡単でした。
怖かったのです。深い関係となった後に
離れてしまうことが。

私に名前を授けなかったのも、
それが理由だったのでしょう。
ですが、そんな主を義経様は救い出して
くださいました。

しかし、それも長くは続きませんでした。
主様が恐れていた離別の瞬間が訪れたのです。
ですが、主は壊れません。涙を隠し、舞う強さを
義経様から授かっていました。

季節は変わり、初夏になりました。
南御堂にて舞いを奉納した後、
主は私に言葉をかけます。
「今までありがとう。〃　　〃」
始めて呼ばれた名は、主の舞う白拍子のように
美しい響きでした……

# 宝樹の杖



愛しい彼と植えた苗木。平和への祈りを込めた、小さな命。
私の町と彼の町は反目しあい、下らない争いを続けている。
二人で会う事さえままならない。
この木を植える時でさえみんなの目を盗んだ。
嗚呼——この木が大きく育つ頃にはみんなで一緒に笑えますように。

苗木は少しずつ育ち、私の背丈ほどになった。
けれど、二つの町の情勢は変わらぬまま……むしろ悪くなっている。
彼はもう、この木に近づく事さえ出来ない。
二人の宝物。私が彼の分までこの木を守らなくては。

いや。いや。いやいやいやいやどうして、なんでかれが、ああかみさま、わたしたちがなにをしたというのですか。
おねがいやめて、どうか、どうかこれだけは、このきは、このこはわたしとかれの、わたしたちのたいせつな

劫火に焼かれる私の町。蹂躙されていく彼の町。
彼は私の町の住人に殺され、私たちの木は彼の町の住人に焼かれた。
残ったのは私と、なんとか守った枝きれだけ。
私はその枝で杖を作り上げた。もう平和を祈ったりはしない。
私からかれをうばったやつらを、わたしとこのこで、ころしつくすときめたから。

# 黒の聖杯

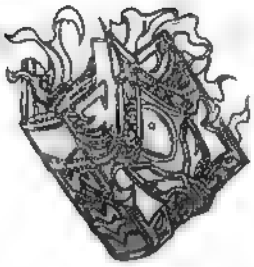


人心の荒廃により腐濁の王が力を獲得した。
腐濁の王が力を得たため、大地は汚れ、乱れが生じた。

腐濁の王の力を封じるために黒の聖杯が求められた。
それは負の力に対抗するためのもうひとつの負の力だった。

腐濁の王の力はその大部分が封じられた。
だが、腐濁の王の力を弱めた負の力を封じるために
今度はそれに対抗するための
新たなる負の力が必要とされた。

最初一つに過ぎなかった負の力は
かくしてどんどんその種類を増やし
世界へと広がっていった。
力を完全に取り戻した腐濁の王は黒の聖杯を手に
目論見通り滅びゆく世界を見つめていた。



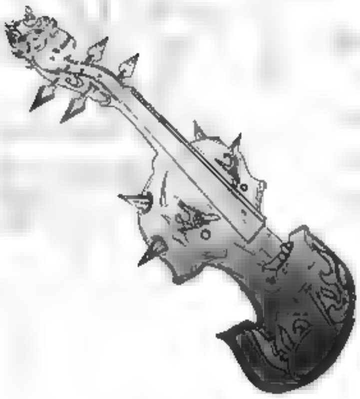
# 終劇の預言書

老王が長男を授かり、盛大な誕生会を催した。
数々の予言書を著してきた魔女がそこに現れ、「邪神が囁きました！　王よ、あなたの息子は十歳にならぬうちに死ぬでしょう！」と言った。

王は魔女を処刑し、彼女の予言書をすべて焚書にした。
そして腕利きの護衛を多数雇い入れ、三代に渡って王家に仕えた家の者しか王宮に出入りを許さないようにした。

王太子に毒を盛られる事を恐れた王は、毒味役を三人雇った。
王太子の居室も毎日徹底的に清掃させ、清潔な状態を保たせた。
健やかにすくすく育つ我が子を見て、王は安心した。

王太子は十歳の日、父と共にバルコニーから国民に手を振った。
が、過保護な環境に育てられすぎた彼は風邪菌にさえ耐えられず、夜中に高熱を出して逝ってしまったのだった。



# 魔骸の弦楽器

【楽器】まがいのげんがっき

今日、私は神……いや、音楽の悪魔を見た。
頑固な懐古主義に風穴をあける、激しい音楽。
魂を魅了し、心を激しく震わせる音に、
私は年甲斐もなく興奮している。
今ならば、毎日小言で出迎える妻も一喝できそうだ。

その音楽のインスピレーションはどこから生まれたのか？
その質問に、取材に応じてくれた演奏者は、
愛用のバイオリンを掲げ、
「こいつを持ってると、自然と出てくる」そう言った。
悪魔のように醜い顔が刻まれたバイオリンは、
禍々しくも魅力的だった。

彼が軽くバイオリンを弾き始めると、瞬時に空気が変わった。
絹を引き裂くような絶叫、獣の唸り声、人の歓喜の声、
すべてが渾然一体となり、私に襲いかかってきた。
そして言いようのない衝動が沸き上がり、私の胸を焼く。
私はその想いを、原稿に叩きつけた。

あのバイオリンは、彼曰く、悪魔の躯を
その材料にしているという。冗談には聞こえなかった。
悪魔の奏でる曲ならば、私が唆されたのも納得だ。
私の音楽への情熱を理解せず、小言ばかりだった妻。
彼女の脳髄のシャワーは、たまらなく心地よかった。

# 処刑人の誇り

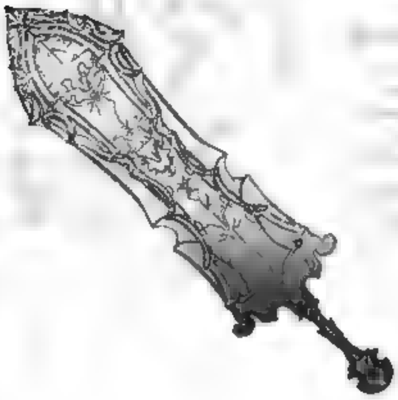


磔にされた罪人の胸を槍で突く。
それが私の仕事です。
命乞いの言葉にも、苦痛の叫びにも、
耳を貸してはいけません。

処刑は見世物であり、
見物人はより残酷な処刑を望みます。
出来るだけ苦痛が長引くよう、
処刑に二叉の槍を導入してみると大好評でした。

手首を縛り上げて吊した罪人を
背中から槍で貫くと、
胸に赤い華が咲いたようだと喝采が起きました。

やがて王が変わり、私は大量虐殺犯として
処刑されることが決まりました。
私の処刑は一体どれ程の見物人を
湧かせることができるのでしょう。
今から楽しみでなりません。



# 平定の剣



そこは戦場。徴兵され街を出た男が戦っていた。周囲には武器と武器が衝突する音、そして悲鳴が満ちていた。
毎日毎日聞こえるそれら耳ざわりな音。
だから男はひたすら大剣を振り回した。
そして次第に、それらの音は消え、秩序が回復された。

そこは戦場。男の目の前にいくつもの音をたてる物体が。
そこで男が大剣を振り回すと、物体達は次々と静かになっていった。
そして秩序が回復された。

そこは街。戦場から歩いてきた男の前に、再び音をたてる存在が複数現れる。
それらは耳ざわりな音をたてる物体だった。
だから彼は大剣を振り回すことにした。するとそれら物体は次々と悲鳴を上げ、やがて静かになった。
そして秩序が回復された。

そこはどこかの街。ふいに男の耳に声が届く。
「お前、生きていたのかい……」
その年老いた声は、男の脳の奥の、かすかな記憶を呼びさます。
だが剣を振り回しているうちにその声の主もやがて、他の物体同様沈黙した。
かくして再び男にとって耳ざわりな雑音は消え、
男の世界の秩序は回復されたのであった。

# 千姫の大斧

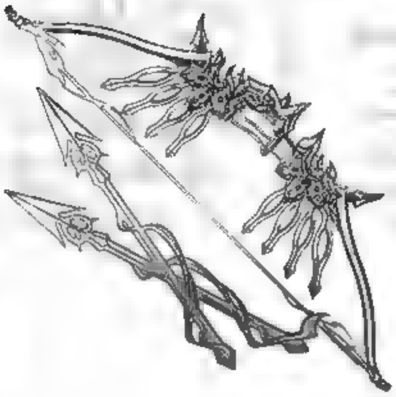


その王は権謀術数に長け、連合国家の支配者に昇り詰めた。
圧倒的武力を背景に各地の諸侯を服従させ、年若い姫を貰い受けては次々と後宮に入れた。
その数、なんと千人。
後宮の門番には、生まれつき耳が聞こえず言葉を知らない騎士が取り立てられた。
彼は一振りの斧を手に、愚直に門を守った。

後日、何人かの姫が後宮から脱走を図る。彼女を捕らえた後宮の門番は王の下知を待たず、全員首を刎ねてしまう。
諸侯との関係悪化を危ぶんだ家臣たちは、騎士を死罪にするよう王に進言する。
しかし王は彼の忠実な仕事ぶりを愛し、一切咎めず。

小国の王たちが叛乱を起こす。
門番は姫たちを殺害しておらず、本国に送還していたことが判明。
彼の正体は諸侯が王の身辺に送り込んだスパイであり、耳が聞こえず口が聞けないというのも擬態だった。
激怒した王は門番を捕まえようとするが、彼は斧を振るって血路を開き、逃げ延びてしまう。

数日後、斧に白旗を巻きつけた門番が、諸侯よりの使者として城へやってくる。
一対一の密談後、王は諸侯の独立を認めることに合意。
元門番は後宮での職務を通じ、王が性交渉できない体であることを知った。
そしてそれを取引材料に使い、千人の姫を護り抜いたのだった。



『スノウホワイト/』
『ハーフナイトメア』

# 正義の白弓

【射出】せいぎのしらゆみ

これは……夢か？
リノリウムの廊下に、
ぼうっと光る非常灯。

ここは……病院か？
白い部屋に、
手すりの付いたベッド。

これは……誰だ？
胸や腕から延びるケーブル、
口を覆う人工呼吸器。

ああ……わかっている。
正義のためには仕方ない。

# 探究の意思

頭でっかち。変人。
色々な陰口を言われてきた。
でも、周りに何と言われようが関係ない。

いいじゃないですか。
別に、他人にどう思われようが。
自分の好きなように生きれば。

時間を嫌いなことに
使うなんてもったいない。
好きなことだけに使いたい。

あっ。そもそも時間や寿命を自由に
操れるようになればいい話ですね！
研究テーマが決定しました♪

# 陽光の笛

【楽器】ようこうのふえ

人付き合いが苦手で損ばかりしている少女がいた。
ある日露店で「これで人気者になれるぜ？」と品物をちらつかされ、つい買ってしまった。
その笛を吹いた途端、野次馬が集まり、少女に歓声と拍手を送ってきた。
少女は「私、やっと陽の当たる場所を歩ける！」と涙した。

少女は演奏のたび持て囃され、噂を聞いた地方領主が「ぜひ妻の誕生パーティーで演奏を」と所望してきた。
今までただ適当に吹いていただけだった少女は慌て、必死に練習した。
その甲斐あって、何とか最低限の形を取り繕う事はできた。

今度は何と、女帝陛下の前で演奏する事になってしまった。
女帝陛下は《鉄血の女》と渾名される冷血無情な人で、音楽を偏愛し、まずい演奏をした者を容赦なく手打ちにするらしい。
少女はストレスのあまり激やせしながらも死ぬ気で練習し、何とか難を乗り切ったのだった。

空から落ちてきた船が地上に突き刺さった。
――異星人達に友好の意志を伝えるべく、少女は全人類を代表して笛を演奏する事になった。
もし音を一つでも外そうものなら異星人は機嫌を損ね、何をしでかすか分からない。
少女は呟く。「このやせ我慢、いつまで続ければいいの？」

# 深祈の杖

【祈祷】しんきのつえ

とある名門の家に、優秀な長男と自堕落な次男がいた。
門閥の発展を願い、両親は長男に家宝の杖を与えた。

杖を手にした長男は日々深く祈るようになった。
こうして長男はますます人望を集め、尊敬された。

家のどこにも居場所がないと感じた次男はある日、出奔した。
「僕には思いやりが足りなかった」と長男は嘆き、弟のために日々祈った。

数年後、次男は成功を掴み、立身出世を遂げた。
長男は祈るだけの人と揶揄され、家は次男が相続する事になった。
「僕の祈りが通じたんだ」と長男は満足げだったという。

# 獣形傀儡



あるところに一人の少女がいました。
屋敷の居間には獣の形をした傀儡が置いてありました。

ある日少女は食べ残しの肉を何の気なしに傀儡の前に置きました。
すると少し目を離した隙に、それが跡形もなく消えたのです。

少女は元々好き嫌いが多く、肉が食べられなかったはずでした。
それがいつしかガツガツ肉を喰うようになりました。

変化は蓄積し、少女は全身が剛毛で覆われて獣形の傀儡となりました。
少女に成り代わった傀儡は彼女の両親をガツガツ食べてしまいましたとさ。

# 水脈の剣



奉仕精神に溢れた町長がいた。
彼は町の井戸水が涸れてしまって人々が難儀している事に心を痛め、何とか新しい水源を探そうとした。
だが町の資金は乏しく、よそから水を引いてくる事もできなかった。

町長は靴底をすり減らして駆けずりまわったが、借款に応じてくれる篤志家はいなかった。
その晩、妖精が町長の枕元に立った。彼女は町長に一振りの剣を差し出し、「あなたの真心を認め、この剣を授けます」と言ったのである。

町長は剣を持ち帰り、町の広場に突き立てた。すると地割れから水が浸み出してきた。
噂話を聞き、干魃に苦しんでいた隣国の村人が助けを乞いに来た。
町長は喜んでその地まで赴き、水脈を生み出した。
が、「水脈を！」と求められ続けるうち、町長の内面に変化が生まれた。

町長は奉仕精神を忘れ、水脈を生み出す対価として謝礼を要求するようになった。
一財産を築き上げた彼は水上宮殿を造る計画を立て、労働者を集めた。
着工の日、町長は更地に剣を突き立てた。
その途端、膨大な水が溢れ出してあたり一帯が水没し、町長は溺死してしまった。

# 逆 恨みの縁刃



【殺したるリスト①】
往来で肩がぶつかったのに、謝ろうとすらしなかった男。
判決…有罪。
数日にわたり、同時刻、同場所で張ったところ、再び遭遇。
尾行し、物陰から狙い撃つ。

【殺したるリスト②】
功績ある僕を無視し、子飼いの部下を先に昇進させた隊長。
判決…有罪。
退勤後、酒場で泥酔して帰る隊長の後を尾け、狙撃。

【殺したるリスト③】
僕とのデートに数度応じておきながら、プロポーズを断った女性。
判決…有罪。
家でくつろいでいるところを窓の外から狙撃。

【記者の記録】
彼が連続殺人を繰り広げていた事を示唆するメモ書きと凶器のボウガンが証拠品として提出されると、法廷内は騒然となった。
被告席の青年は少しも反省した様子もなく、黙り込んでいた。
うまくいかない事を他人のせいにして半生を送ってきた子供の顔がそこにあった。

# 狂熱の提琴

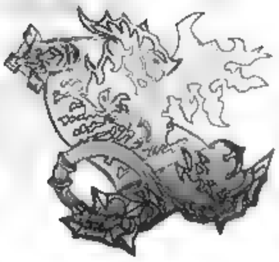


とても人気のある吟遊詩人がいた。
提琴をかき鳴らして歌声を響かせれば、聴衆はたちまち狂熱の渦に包まれ、拍手喝采を惜しまなかった。

吟遊詩人も人間である以上、食事も睡眠も摂らなくてはならない。
だが彼の歌声を欲しがる者達は斟酌せず、狂熱のままに彼を追い回した。

夜討ち朝駆けなんでもござれで押しかけられ、碌に休息も取れず、吟遊詩人は疲弊していった。
そしてとある未明、馬車に轢かれ、事故死してしまった。

「紳士淑女の皆様、次はこちらです！」司会の合図で、吟遊詩人の遺品である提琴が運び込まれた。
次の瞬間、オークション会場中の人が身を乗り出し、値を釣り上げはじめた。
その狂熱ぶりは長く語り草になったという。



# 黒竜ノ巻物



魔の山に棲まう黒竜を倒さんと、伝説に謳われし勇者が立ち上がった。
かの者は家伝の剣を引っ提げ、人外魔境の地へ赴いたのだった。

勇者と戦い、さしもの黒竜も形勢不利を悟る。
が、すぐさまかの者は悪知恵を働かせ、「我と手を組めば世界の半分をやろう」と持ちかけた。

勇者は沈思黙考の後、口を開く。
「いいだろう、ただし条件がある。貰うほうの半分は俺が指定する。いいな？」
黒竜は一も二もなく承知した。

かくして世界は二分された。
勇者は女だけが住まう半分をもらい、酒池肉林の日々を送った。
黒竜は男だけの世界に生き、争い事にまみれた毎日を過ごしたという。

# 卑劣の槍



他者は利用するもの。
他人のために尽くしても、損するばかり。
ならば、自分の思い通りに動かした方が楽だ。

見返りを求めない親切なんて反吐が出る。
どうせ、それをすることで
偽善者たちの心は満たされているのだろう？

結局自分が一番かわいい。
どんな状況でも裏切らないのは自分だけ。
血の繋がった親ですら裏切るのに、
赤の他人を信じるなんて馬鹿を見るだけ。

正直者は恐ろしい。
どれだけ馬鹿を見ても、許してしまう。
どれだけ傷つけられても気づかない。
そこに私は狂気を感じる。

# 悪病の天つ風

【射出】あくびょうのあまつかぜ

古代の人は自然そのものを神と崇め、畏れた。
〈風〉は邪悪なる何かが往来する際に生じるものであり、それが体内に入り込む事で体調を崩す。だからその現象を指し、人は「風邪」と呼んだ。

私は〈風〉を狩る部族に生まれ、弓の扱いと精霊の言葉を教わった。
〈風〉の前に斃れた両親の遺志を継ぎ、部族に継承される弓を手に取った私は、果てない戦いへと身を投じる決意をした。

戦えど戦えど、〈風〉は次から次へと襲いかかってくる。
旅先で〈風〉に侵されて悪病を患う人達をあまりにもたくさん見た私は、疑心暗鬼に囚われ始めた。
彼らに病をもたらしたのは〈風〉ではなく、私ではないのか――？

天啓が舞い降りた。
私が動くせいで悪病が流行ってしまうなら、それを逆手に取ればいいのだ。
――こうして私は生涯を閉じる瞬間まで〈世界の中心〉から一歩も動かず、〈風〉に矢を射かけ続けたのだった。

# 罪人の写本



文字を、書き写す。
一言一句そのままを。

書き写し続ける。
古今東西の聖人達が血と汗で綴った言霊を。

考えるのではない。感じろ。
聖人は何を後世に伝えようとしたのか？

私は見聞きした事すべてを完全に記憶してしまう。
妻と父が性交渉しているところを見てしまい、殺してしまった。
写さねば。聖なる言葉で頭を埋め尽くさねば。
あのおぞましき光景を上書きしなくては——！

# 気遣いの杖

【祈祷】きづかいのつえ

大丈夫ですか。
私にはそう尋ねることしかできません。
あなたではない私には
あなたの痛みはわからないから。

大丈夫ですか。
痛みは癒えていっていますか。
あなたではない私には
あなたの具合がわからないから。

大丈夫ですか。
数日経ちますけどまだ完全には治っていませんか。
あなたではない私には
あなたの調子がわからないから。

そろそろ完治しないですか。
あなたではない私は、あなたではないので
いつまでもその事ばかりを
考えていられるわけではないのです……。

# 悲哀の杖

【祈祷】ひあいのつえ

「お前の代わりなどいくらでもいる！」と叫ぶ上司。
――確かに私は見た目だけだから。

「転職しないと給料が上がらない。」と嘆く同僚。
――成果が定量的に判断できない業種だからしかたない。

「発明をしても、全て上層部の懐行きさ。」と笑う来訪者。
――成果を上げても報われない世界なのね。

満たされない気持ちは絶え間なく降り積もる。
その呪いにも似た暗がりがないと私は輝けない。

# 道化師の箱



今日は楽しい誕生日。男の子にたくさんのプレゼントが届いていた。その中で、ひときわ目を引くきれいな箱。
「わっ！　これ、びっくり箱だ！　ねえママ、このプレゼント、誰から？」
「おかしいわねぇ。送り主が書いてないわ」
ママは首をかしげたけれど、男の子は気にしない。箱の中でピエロがゆうゆう揺れていた。

その夜のこと。男の子の叫びが静かな夜を切り裂いた。
「一体どうしたの？」
「そこの窓にピエロが立ってたんだ！　ナイフを持ってた、怖いよぉ！」
泣きじゃくる男の子をママは優しく撫でる。
「びっくり箱をちゃんと片付けないから、そんな夢を見たのよ」
ふたの開いた箱の中、ピエロがゆうゆう揺れていた。

ママがいなくなった子供部屋で、男の子はもう一度布団に潜る。
暗闇の中で、ピエロがゆうゆう揺れていた。
「ふたを閉めておけば、怖くないよね」
びっくり箱にそっと近づく男の子。
その背後には、ナイフを持ったピエロが立っていた。

誕生日の翌日に、惨殺されて見つかった男の子。
手がかりは血に濡れたびっくり箱だけ。箱は不吉だとされ、教会で燃やされた。
事件は解決しないまま忘れ去られ——数年後、よく似た箱がまた店に並んだ。
女の子がパパの袖を引く。「ねぇ、これ買って！」

# 亡国の旗

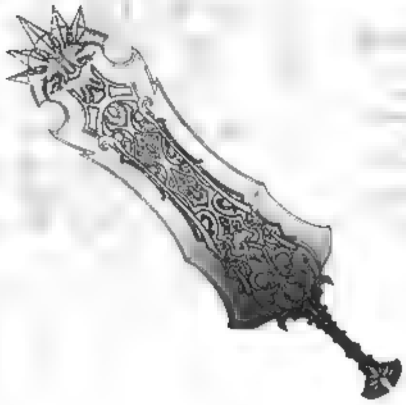


その王は大陸で最大最強と名高い武勇の士だった。
されど別宗派の王と戦い、詭計の前にあっけなく敗死する。
亡国の王子は父の旌旗を掴み、落ち延びていった。
いつの日か自分が王位を回復し、
旌旗を王城に翻す日を信じて。

亡国の王子は同盟国を頼っていき、そこでしばらく雌伏した。
王子は自分の成人の儀を待ち、祖国解放の軍を編成した。
すると、綺羅星の如き人材が旌旗の下に
集まってきたのである。

武勇の士、胆力の士、知略の士、博識の士、魔導の士……。
優秀な人材が八面六臂の活躍を見せ、王子は祖国解放の戦いを優位に進めていった。
が、それでも彼我の戦力には大きな開きがあり、戦況は膠着し始めた。

強欲の士、盗癖の士、酒乱の士、多情の士……。
いかがわしい者達まで集まりすぎたせいで王子は悪党の親玉と見做され、民衆の支持を失った。
そのあげく差し入れに毒を盛られ、殺害されてしまう。
かくして亡国の旗は国を滅ぼす原因となったのだった。



# 腐敗の大剣

【刀剣】ふはいのたいけん

腐敗した世界に終わりを迎えさせる

腐敗しきった世の中は終わらせる事でしか治せない

死とは腐敗した世界の救済

腐敗の広がりは死の広がり

それは終わりゆく世界への道しるべ

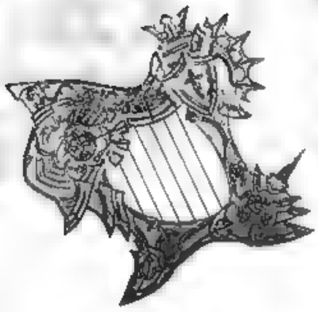
# 正義の書

【第１次改正】
・医療計画に基づく病床の総量規制の導入
・１人医師医療法人の認可

【第２次改正】
・「特定機能病院」および「療養型病床群」の創設
・広告規制の緩和と院内掲示の義務づけ等による医療情報の提供推進

【第５次改正】
・都道府県による医療機能情報に関する公表制度の創設
・入退院時の文書による説明の位置づけ
・社会医療法人の創設

【第６次改正】
・医療事故の原因究明・再発防止案作成の義務化
・在宅医療の法的な位置づけを明確にし、在宅医療・連携を推進



# 鎧闘士の竪琴



快楽と悪徳の集う都の象徴として名高いその闘技場では、血なまぐさい饗宴が日々繰り広げられている。
各界の名士お抱えの奴隷闘士が鎧ひとつだけを纏って戦い、勝敗を競うのだ。
勝者には豪華な食事が与えられ、敗者は魔獣の餌とされる。
――そんな奴隷闘士の中に、竪琴をこよなく愛する風流人がいた。

奴隷闘士仲間は皆、ひもじい思いをさせた家族を置き去りにしてきた事を気に病んでいた。
心優しき竪琴弾きは何とか仲間たちを郷里へ帰したいと思い、策を捻出する。
彼は自分の主人に「一曲お耳汚しを」と申し出て演奏し、何かと贔屓にされる状況を作った。

主人が権力者を集めて宴を開いた際、竪琴弾きは「とっておきの曲を披露したく」と申し出て、絶美の音色で宴に華を添えた。
屋敷の警戒が緩んでいる隙を突き、奴隷闘上仲間たちは牢を破って脱走。
竪琴弾きを除いた全員が逃げおおせた。

「おのれがこの奸計を企みおったのだな！」と主人は激怒し、剣を抜き放った。
「どうぞご随意に」と潔く頭を垂れた竪琴弾きを見た主人は感じ入り、彼の両足の腱を切って一生自分の傍に仕えるよう命じた。
竪琴弾きは逃げ延びた仲間たちの幸せを祈り、竪琴を弾き続けたという。

# 荒廃の残斧



その斧使いは歴戦の傭兵で、誰からも一目置かれた。
腕達者で誰もかなわない事実と、彼が参加した部隊はことごとく全滅してきたという戦歴からである。

斧使いは独特な雰囲気の持ち主で、口数がとても少なかったという。
どれだけ戦っても報われる事が少なすぎ、運命そのものに敵とみなされていると感じていた。
「ま、それならそれでやりようはある」と内心いつも考えていたようだ。

斧使いは領主に雇われて部隊を預けられ、前線に赴いた。
――翌日、彼の陣地は黒焦げとなった。荒廃した地に累々と横たわる屍に混ざり、斧使い愛用の斧が遺棄されていた。
斥候は領主に「斧使いの部隊は夜襲に遭い、全滅しました」と報告した。

大した付き合いがあるわけでない相手から隊長格で雇われた事で、斧使いは捨て駒にされると察知した。
そこで寝返りを決意し、お目付役の兵士達を皆殺しにして陣地を焼き払った。
さらに愛用の斧を遺棄して「隊は全滅した」と領主達に信じ込ませ、追撃の手を封じ、敵の懐に飛び込んで情報を売ったのだった。

# 地烈の鳥槍



鳥はその翼を羽ばたかせ、翔ぶことのできぬ種だった。
鳥はしかし、どんな獣よりも速かった。
鳥は四足の獣よりも、人の駆る鋼の馬よりも。
鳥は知っていた。己こそが最速だとわかっていた。

鳥は己の栄光。それだけを見ていた。
鳥は前だけを見ていたが、ある日空を見上げてしまう。
鳥はそこに見た。己と同じような姿をした何かを。
鳥は其れが大空を、己より疾く、優美に舞うのを見た。
鳥はそれが己と同じ鳥と呼ばれるもの

鳥は己より疾く空を往く鳥に嫉妬した。
鳥は空を飛べない己に激怒した。
鳥は空を駆けうれるほど、速く走ろうとした。
鳥は己の身を酷使し、魂を削り奔ったが、絶望した。
鳥はそれでも諦めきれず、己が勝つ方法を考え続けた。

鳥は空を翔ぶために崖から飛び立った。
鳥の短い翼は空を掴めず、切り裂くばかりだった。
鳥はすぐに歓喜した。今、自分は大空の鳥よりも疾いと。
鳥は、かつて経験したことのない速度で、地面へと落ちていた。
鳥は喜びに包まれたまま、地面へと突き刺さったのだった。

# 束縛の銃

ごめんなさい。涙が勝手に出るの。大丈夫。私は大丈夫だから。まだ大丈夫。私より不幸な人は沢山いる。

今何しているの？　ちゃんと教えて。どうして連絡してくれないの？　誤魔化さないでよ。どこにいたの？　貴方はいつも楽しそうだね。本当に私のこと愛してるの？　他の人の事を好きにならないで。ずっと私だけを見ていて。ねぇどうして無視するの？　寂しい。疲れた。寒い。暗い。怖い。

会いたい。今すぐに来て。週に一回なんて少なすぎるよ。もう、私の事好きじゃなくなったの？
どうして私の気持ちをわかってくれないの？
……どこにいたの？　一晩中探してたんだよ。
……来ちゃった。

いつの時代どんな場所でも人は繋がりあい、
すれ違う。
寂しいという気持ちは自らを束縛する枷となる。
不安という気持ちは貴方を束縛する枷となる。
――遠い昔にも同じ感情に触れた気がする。
あれはいったいなんだったのだろう？

# 楽器職人の鉄球

【打撃】がっきしょくにんのてっきゅう

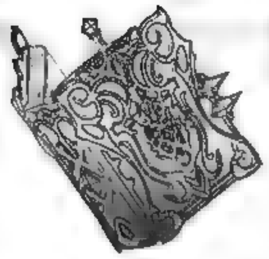
コイツは、まったく酷い有り様だったよ。
耳を塞ぎたくなるような音を、昼夜問わず突然叫び始める。
なんの役にも立たない、壊れた楽器さ。

だから俺が修理してやった。
骨の折れる作業だったが、まあ何とかなったよ。
コイツは俺の手で、誰が演奏しても最高の音色を
奏でられる楽器に生まれ変わったのさ。

アンタもひとつ演ってみるかい？
なあに、簡単だよ。
この鉄球をしっかり握って、コイツに思い切り振り下ろす。
それだけさ。

ドチャ　ぐちゃ　べきン　ボキん

ほらな、いい音色だろ？
アンタもツレを楽器にしたいなら、この鉄球を貸してやるよ。
いつでも相談しな。



# 兇賊の書

やべぇ……兇賊として名を馳せた俺だが、ぼちぼちお迎えが近いらしいぜ。
くたばる前に警句でも書き留めとくか。
「この世すべてのものは俺のもの、借りたものは永久に借りとけ」

そうだな、他には――お、そうそう、「俺は常に正しい、俺自身がそのまま法律だ、てめえには死んでも従わねえ」としとくか！

い、息が切れてきたが、もうひと踏ん張りだ……。「恐れるな、世界は常に俺を中心に回っている」――そうさ、これぞまさに俺の信条だ！

やべぇ、意識を保てなくなってきた。いよいよこの世とオサラバらしい。
ほう見ろ、普段から俺を追い回してる騎士が見舞いに来やがった。
兇賊ども、うまくやれ。
世にもオイシイ「憎めない悪役」を目指すんだ！

# 傲慢ノ仮面

【魔具】ごうまんのかめん

内気すぎる王子がいた。乱世の奸雄として名を馳せた父王は余命を悟り、自分亡き後の事を憂えた。
御用商人に相談の手紙を送ったところ、数日して一枚の仮面が届いた。
何でもこれは魔法の品で、着用した者の気質を矯正できるらしい。

仮面を着けた王子は物怖じしなくなり、父王相手にも口答えした。
「仮面は一時の借り物と心得よ。それに頼ることなく己を錬磨し、我が背中を乗り越えるのだ」と言い残し、父王はその生涯を閉じた。

父の跡目を襲って王となった王子だが、父に器量が遠く及ばない事は自覚していた。
臣民に侮られまいと肩肘を張る余り、仮面が手放せず、一人で寛ぐ時でさえ着用したままになる事が多々あった。

いつしか王は常に仮面を着けたままになり、それは完全に人格と一体化した。
優しさを無くし、傲慢なばかりの人物となった。
彼は父の代より友好を保ってきた同盟国を怒らせてしまい、後背を衝かれて王城を焼かれ、惨めな刑死を遂げたのだった。

# 融和の剣



その魔王は王室の人間を皆殺しにし、国を統べた。
ところがある日、黒魔術の儀式にて「汝は剣によって斃され、その治世は終わるだろう」と預言された。
魔王は国中の剣を回収し、「剣」を単純所持ないしは鍛造せし者、八つ裂きに処す」と触れを出した。

一方、魔王の圧政に耐えかねた人々は勇者の到来を待ち望んだ。
王室の唯一の生き残りの王子が立ち上がり、地下に同志たちを集め、強力な剣を作ろうとした。
そして鍛冶工の元を回ったが、彼らは怯えきっており、剣の鍛造を拒んだ。

鍛冶工たち一人一人には魔王の密偵がついており、魔王の耳に叛乱分子の存在を届けた。
魔王は災いの芽を摘むべく自ら城を出て、潜伏中の王子を始末しに向かった。

王子は鍛冶工たちから金属の欠片を貰い受け、秘伝の魔術を使った。
すると欠片が見る間に継ぎ合わさり、剣の形になった。
「我は剣を生み出した！　打倒魔王の日は近いぞ！」
王子は圧倒的な支持の元に解放軍を指揮し、剣によって魔王を斃したのだった。

グレーテル/オルタナティブ

# 虚妄の意思



傷つくことを恐れ、行動に移すことが出来ない日々。青白く光るモニターに毒づいても、真実は変わらない。

自分でない誰かに憧れる。
それはとても自然で、誰の心にもある当たり前の感情。

ふとした時に映る自分の顔は嫌いだ。
鏡の前に映る間抜けで臆病な姿こそ、
他人に映る本当の自分なのに。

目的のない日々にはもう慣れた。
だが、この胸にある何かが欠けたような喪失感は何なのだろう……？

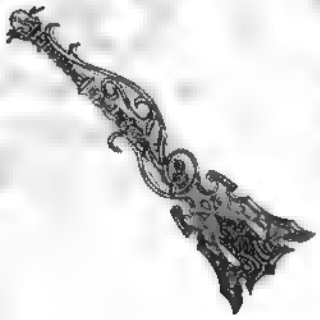
# 凝り性の銃

ぱん、ぱん、ぱん。
きもちのいいおとがする。
わたしのたまがあたるたび、えものはぴくんぴくんってうごく。
にげちゃだめ。おいしいごはんがたべられなくなっちゃうもん。

ばん、ばん、ばん。
あのおとは、ママがごはんをつくるおと。
ほねをこなごなにして、おいしいすーぷをつくってくれるの。
できあがるまで、おもちゃであそんでまってよう。

がん、がん、がん。
あのおとは、パパがおのでえものをころすおと。
にげようとしたやつをおもちゃでうったら、すごくほめてもらえた。
えものはわたしたちによくにてる。わたしもたべたらおいしいのかな？

こわいひとがたくさんきて、ママとパパをつれてっちゃった。
わたしは「こじいん」につれてこられて、ひとりぼっち。
でもへいきだよ。えものはここにもたくさんいるもの。
ごはんはやっぱりあのすーぷじゃなくちゃ。
ひとりでじょうずにできるかな？



# 鋼鉄の笛

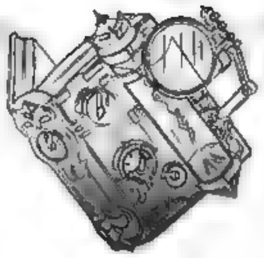
【楽器】こうてつのふえ

さあさあお立ち会い、寄ってらっしゃい見てらっしゃい！
「自分が一番」という標榜を譲らない、誇り高き笛吹き二人の演奏対決だよ！
どっちが勝つか、好きに賭けてくれ！

売り言葉に買い言葉で演奏対決なんかするハメになっちまったが……正直、
俺の実力では勝てん。
だが問題ない、あいつの笛に細工をしたからな。

あの男の演奏を聴き、余裕で勝てると私は踏んだ。
そして私は壇上に上がり、笛を唇にあてがい――
――その後、情感のない鋼鉄のような音色しか出せず、私は敗北を喫した。

人前で鋼鉄のような音を披露してしまった笛吹きはめげず、努力を続け、伝説的な巨匠として立身出世を遂げる。
一方、不正な手段で一時の脚光を浴びた笛吹きは身を持ち崩し、性病で苦しみ抜いた末に死んだという。



# 電圧の辞書

子どもの頃、神を見た。
目の前で雷に打たれた祖父は黒焦げになり、異臭を放ちながら絶命した。
そう、以来雷は私の中で神となったのだ。

山野を駆け巡って遊ぶ同年代の子どもたちとは交わらず、ひたすら勉強に勉強を重ねた。
雷を人為的に生み出す術はないのだろうか？

雷と電気が同一の原理だと知った私は、瓶の中に電気を溜める方法を考案した。
これをエネルギー源として利用する方法はないか、さらに試行錯誤を重ねた。

なかなか良い考えが浮かばず、頭が朦朧としてきた。
「もうひと頑張りだ」と自分に言い聞かせた瞬間、瓶をひっくり返してしまい――
その瞬間、体を蒼白い放電が包み、私は神の待つ雲の上へ旅立ったのだった。

# 凶 愛の戦斧

【打撃】きょうあいのせんぷ

その将軍は冷血非情で拷問を好み、捕虜の肉を切り刻むため刀の背に鋸を彫らせていた。
「私の娯楽は、口を割らない相手の首を鋸で少しずつ少しずつ斬っていく事だ」と彼は公言し、周囲は密かに深く恐れた。

将軍に長年抵抗していた男が捕虜となった。
「秘密を教えるから拷問しないでくれ」と男は請い、将軍は「相談に乗れるかどうかは情報の価値次第だ」と嗤った。
男は口の両端を釣り上げ、言った。「お前の女房は俺とデキていて、情報を流してくれた。そのお陰で長らく潜伏できた」

狂ったように嗤う男に怒声を浴びせ、将軍はその首を刎ね飛ばした。
そして自邸へ取って返し、妻の首根っこを抑えた。
「いつから男を作っていた！？」
妻は喚き散らして抗弁したが、将軍は容赦せず、鋸で少しずつ首を斬っていった。
妻はひとたまりもなくショック死した。

新年の祝宴が開かれ、将軍はその席に顔を出した。
すると妻の兄が兵を率いて取り囲んできて、将軍は捕縛されてしまった。
「貴様は讒言に耳を貸し、我が妹を殺したな？　報いを受けろ！」
将軍は刑吏によって刀の鋸で首を少しずつ少しずつ斬られ、惨たらしい死を迎えたのだった。

# 逆鱗の銃

【射出】げきりんのじゅう

あのひとを振り向かせるためにあのひとを貫くの。

一途な気持ちであのひとを貫くの。

まっすぐな想いであのひとを貫くの。

たとえあのひとが嫌がったとしてもかまわずに貫くの。
貫き通すことができればそれで達成だから。

# 竜神の餞別

わたしの花嫁となった貴女は
毎日怯え、泣き暮らしています。
夫婦とは慈しみあうものではないのですか？
わたし達は愛し合わなければなりません。

わたしは何故ヒトとして生まれなかったのでしょうか。
貴女と言葉ひとつとして満足に交わせぬこの肉体に
なんの意味がありましょうか。
わたしは貴女に相応しき存在になりたい。

翼をはためかせても
尾を打ち振っても
髭を擦り寄せても
貴女は恐れ戦くだけなのです。
わたしは貴女に笑顔と安寧を与えられない。

貴女の幸福がわたしとの決別にあるならば
涙を呑んで貴女を解放しましょう。
困ったことがあればこの杖を振るいなさい。
竜は、一度つがいとなった者を見捨てません。
生け贄であっても、貴女は確かにわたしの妻でした。

# 遺骸の音

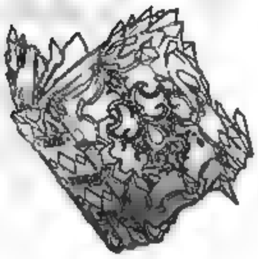


一人の悩み多き若者がいた。幼少の頃からヴァイオリン演奏に天賦の才を示し、多くの賞を授与された。
彼の師匠は温厚篤実な紳士で、彼の面倒をよく見た。
ある日若者は、師匠がプレゼントしてくれたヴァイオリンを不注意から壊してしまう……。

若者は落胆し、師匠に詫びた。師匠は「気にするな」と笑い、弟子のために新しいヴァイオリンをプレゼントした。
前のより高価な品だったにも関わらず、若者は少しも喜ばなかった。
彼はそれ以来スランプに陥ってしまった。

どれだけ弾いても納得のいく音が出ず、若者はすっかり塞ぎ込む。
師匠をはじめとし、周囲の人間たちの耳には、何が気に食わないのかさっぱりわからなかった。
懊悩する弟子を心配し、師匠は「気分転換に」と避暑地への旅行に誘った。

山小屋に到着すると、若者は師匠をぶん殴って殺害する。
数ヶ月後、若者は一挺のヴァイオリンを手に山を下りてきた。
「納得のいく音が出た」と彼はご満悦だった。
若者は遺骸から皮を剥いで弦を造るなどの手段で、ヴァイオリンを改造したのだ。



# 氷縛の魔書



見目麗しく教養に富み、弁舌巧みという才気豊かな魔術師がいた。
芸術的感性にまで恵まれたその粋人は、「魔術でいかに人を視覚的に楽しませるか」という事にばかり日々心を砕いていた。

魔術師は芸術家たちの集うサロンに出入りするうち、聡明な皇太子と意気投合した。
魔術師は皇太子の後援のもと、氷縛の魔法を使って絢爛豪華なオブジェを作った。

皇太子は魔術師に心酔し、「君の才能を遺憾なく発揮したまえ、その為なら私は何でもしよう！」と言った。
魔術師は彼に都市を丸ごとひとつ買う金を捻出させ、そこを舞台とした壮大なオブジェを作った。

皇太子は新皇帝として即位後、戦争に明け暮れ、他国はおろか自国までも滅ぼす。
「世界を与えて下さったご恩に報じます」魔術師は恭しく言うと、その星総てを氷縛の魔法で凍結させ、史上最大にして空前絶後の芸術を完成させた。

# 闇除ケノ傘

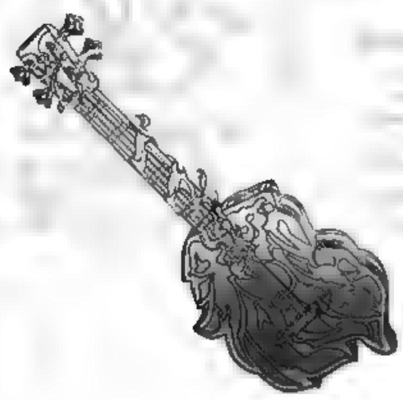


生まれた時より、人には視えぬものを視てきた。
私には「闇」が視える。
音もなくただ静かに降り積もる「闇」が。
だから私は常に傘を差して歩くのだ。

「雨も降っていないのになぜ傘を差す？」と訊かれるたび、「闇」が今も降っている事と、閾値を超えれば世界は狂い出す事を説明した。
が、誰一人として理解を示してくれる人はいなかった。

放浪の旅を続けるうち、私と同じく傘を差して歩く人たちに出会った。
話を聞いてみると、彼らも私と同じく「闇」が視えている事が分かった。
自然と私たちは群れ集うようになり、共にあちこちを歩いた。

そしてある日、積もりに積もった「闇」が世界を破滅に導いた。
常に闇除けの傘を差してきた私たちはこの閑かなる世界に君臨し、新しき系譜の祖となるのだった。



ドロシー／ミンストレル

# 探究のウクレレ

【楽器】たんきゅうのうくれれ

I wonder why ♪　I wonder why ♪
生命の起源が地上で発生したと考えられているのは、なんでだろう？

I wonder why ♪　I wonder why ♪
地球上の生物の必須微量元素であるMoが地球の組成にわずかしか存在しないのは、なんでだろう？

I wonder why ♪　I wonder why ♪
地球上の生物の遺伝暗号がびっくりするほど共通した仕組みになっているのは、なんでだろう？

I wonder why ♪　I wonder why ♪
高度に進化した宇宙生物が地球に
「たったひとつの種」をまき、その種から全ての生物に変化していった気がするのは、なんでだろう？

# 水禍の剣



とある高名な祈祷師の下に災いを呼ぶ剣が持ち込まれた。
祈祷師はその剣の呪いを解こうとしたが、そのとたん草庵の水道が壊れてしまい、床が水浸しになった。

壊れた水道は復旧の目処が立たず、祈祷師は翌日の起床後、井戸まで水を汲みに行った。
すると祈祷師は足を滑らせて井戸の中へ転落し、
溺れかかった。

災いを呼ぶ剣を祭壇に捧げ、祈祷師が祈りを捧げると、頭の中に映像が流れ込んできた。
とある戦士がこの剣で水神を殺し、それ以来、水禍をもたらす呪いが宿っている事実が判明した。

祈祷師は不毛の砂漠に行き、幸運の象徴として水禍の剣を祀らせた。
剣は長年雨を降らせ、ついに死の砂漠は息を吹き返し、肥沃な土地として甦った。
かくして呪いは自然消滅し、祈祷師は名声を高めたという。

# 獣魔の斧

【打撃】じゅうまのおの

慢性的な食糧不足に苦しむ辺境国の王が、知恵者の宰相と共に抜本的改革に乗り出した。
そこで捻出した案が、国土の二割を占める大森林を伐採し、大規模な農耕地に作り替えるという内容のものだった。

王は森林に住まう人々の元へ足を運び、森林を伐採する計画を伝えた。
反応は人それぞれだったが、王に何度も熱心に頭を下げられると、大凡の人が理解を示してくれた。
そんな中、とある木こりが頑として立ち退きを拒んだのである。

その木こりは獣と意志疎通ができるとされ、尊敬を集めている聖者だった。
彼が声高に立ち退きを拒んでは、せっかく口説き落とした人々が翻意する可能性がある――
宰相にそう忠告された王は部下に命じて木こりを殺させ、失火を装って家屋も森林も焼き払わせた。

森林の伐採が終わると、
王と宰相は自ら農具を持って畑に出た。
……夕刻、城から迎えに来た者が見たのは、何か重たげなもので真っ二つに体を両断された二人の死骸だった。
その国では今でも「悪さをすると斧を持った聖者様が殺しに来るよ！」と言って子供達を躾けているという。

# 神風の杖

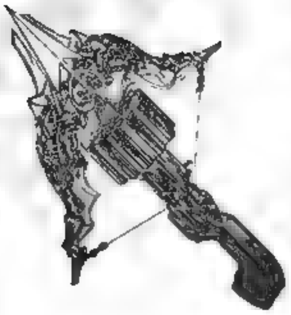
【祈祷】かみかぜのつえ

大河を挟んで布陣する攻撃側の陣を一望し、防衛側の軍師である私は「やんぬるかな！」と天を仰いだ。
何と攻め手の大将は、当代一の名将と謳われる老将軍だったのである。
かの英雄が病床に伏していると聞いていたから私は穏健派の反対を押し切り、戦端を開いたのだ。
このままでは我が軍は敗れ、責任を取らされてしまう……！

陛下は私を呼び、重臣達が居並ぶ前で訊いてきた。
「軍師よ、勝てる見込みはどの程度あるのだ？」
からからに干上がった喉に唾を送り込み、私は口を開く。
「風に乗じて火計を仕掛ければ敵陣はことごとく炎上し、万一にも負けぬでしょう」
王は膝を叩き、
「うむ！　頼むぞ大軍師、我らに勝利を！」と、笑った。

しかし、陛下に述べた作戦には重大な欠陥があった。
この時期、風は我らが布陣する方角にしか吹かない。火計を仕掛けようものなら、あべこべに我らが燃やされてしまう。
私は雨乞いのまじないをしたり、高い金を出して祈祷師を雇うなど、手を尽くした。
が、何をやっても神風は一向に吹かなかった。

私は一艘の舟に乗り、川下へ逃げた。
すると、杖を持ったみすぼらしい老人が
忽然と舟の上に現れた。
「この《風伯》を急かしたのはお主か」
老人は消えた。
逆風が吹き荒れ、舟が敵陣へ流されてしまった。
「吹くならもっと早く吹け、神風！」その罵声を最後に私の首は切断され、老将軍の前に転がったのだった。



スノウホワイト/
ガンナー

# 正義の十字弓

【射出】せいぎのじゅうじゆみ

様々な正義が散る姿を見た。
様々な悪の散りざまを見た。

だが、どれだけ悪を潰そうと、新たな悪が生まれる。繰り返される争いの果てに、私の求める世界はあるのだろうか？

この戦いに意味を見出すことが日に日に難しくなっている。また同じ事が繰り返されるだけなのではないか？
その疑念は今や確信に近いものになっている。

今はただ、彼の言った言葉に縋るしかない。
「全てのことに意味がある。」という言葉を。

# 貫穿の槍



その勇士は槍の扱いにかけて天下無双であり、
熱血の正義漢で、恐れ知らずだった。
あまりに真っ直ぐすぎるために、融通の利かないところもあったが、そんなところも含めて人々に愛されていた。

その勇士は王家の姫君をひと目見てぞっこん惚れてしまい、寝ても覚めても彼女の事しか考えられなくなった。
思い立った彼は恋文を届けようとして城に押しかけたが、すげなく門前払いされた。

しかし彼は不屈の精神を持つ勇士であり、少々の困難に直面したぐらいでへこたれたりなどしなかった。
メイド服を手に入れて女装を済ませると、愛しの姫君に会うべく、城へと潜り込んだのである。

勇士が中庭へ近づくと、姫が暗殺者に襲われていた。
「曲者！」そう叫んだ彼は壁に架けられていた槍を執り、暗殺者を討った。
――姫はその後女王となり、勇士に「貫穿の槍」の称号を与えた。
勇士は女王への恋心を貫き、生涯独身で通したという。

# 冥府からの灯火

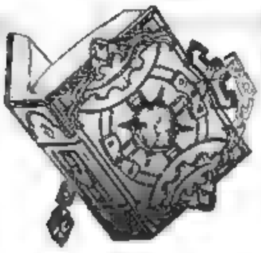


母親に先立たれた少女がいた。父は後添えを貰い受け、少女は義母に日々虐待された。
あまりの仕打ちに耐えかねた少女は、とうとう家出した。
少女は彷徨い歩いたあげく寂れた祠に辿り着き、そこで一夜を過ごす事にした。
奥から蓬髪の老人が現れ、「どうしたのじゃ？」と訊ねてきた。

見知らぬ人に声を掛けられたという警戒心より、捨て鉢になる気持ちが勝った。
少女は涙ながらにぽつりぽつりと、自分の境遇を告白した。
老人は溜息をつき、「そうか、大変じゃったな。一晩だけ泊まっていけ」と言った。

少女は夜、ふと目覚めた。
闇の中に怪しい灯火が揺れており、肉が焦げる異臭がした。
薄気味悪くは思ったが、明日の事さえわからぬ身の少女に深く詮索する余裕はなく、そのまま眠った。
――翌朝。老人の姿は消えていた。

少女が家の近所をウロウロしていると、父が「こんなところにいたのか！」と抱きついてきた。
父いわく、義母は昨晩就寝中、謎の炎に包まれて焼死したとの事だった。
「あれって、あのお爺さんが助けてくれたのかな？」と、少女は今際の際に至るまで考察を巡らせるのだった。



# 教訓の書



聞くところによると、その教団の運営は信徒の献金によってなり立っているらしい。
高額な献金は要求されず、得た賃金の1/10で大丈夫らしい。そんな少額で神の祝福を得られるのであれば喜んで支払おう。

やはりこの教団を選んでよかった。私の献金はきちんと神様が願うとおりに教会の運営に使われているようだ。よく他の宗教で聞くような「集めた献金を使って豪遊している」なんて話は聞いたことがない。

それに献金の使い道をちゃんと教えてくれ、気になるところがあったら尋ねられるようにしています。私がその記録を見たところ、全て必要なところに使われていた。なんて健全な組織なのだろう。

――教祖が献金を持ち逃げしてから、一か月が過ぎた。私がこの教団で見聞きしたことは全て偽りだったのだ。
結局のところ、渡された情報を鵜呑みにする私の生き方では利用されるだけだろう。だが、今更生き方を変えることなんてできない……

# 睡眠の黒杖



ねむっているあい　だ。
いろいろな　し　があたまに　ひびく。
このこえ　は　だれのこえ。
とっても　とても　お　ちつくよ。

たくさんの　し　がひとつになっ　て。
あたまのな　かで　ごちゃごちゃに。
でも　おなじ　ことばが　くりかえされるの。

よごれっ　ち　まった　かなしみ　に。
みず　も　"じ"ゅ"く"じゅくわいてくる。
くらい　とびらがとざされている。

"お"るがん　を　おひきなさい。
やがて　"ぎ"まんのとびら　は　ひらかれる。
し　は　れ"き"しせいにたいして
すいちょく　に　たつ　のだから。

# 神秘の名刀



日々危険な任務に身を投じ、夜になれば酒場でくだを巻く。
それが傭兵の生業ってもんだ。
ある晩、顔馴染み同士で自慢話に花を咲かせた。
情を交わした女の数、一晩で使い果たした金の額などだ。
すると、ほろ酔いのオレの口からこんな言葉が漏れたらしい。「聞いて驚け、オレは"神秘の名刀"を持ってるんだぜ」と。

それからすぐオレは酔い潰れてしまい、その場に居合わせた連中がどう反応したか覚えていない。
翌日、二日酔いの眩暈に耐えつつ、街をぶらついていた時の事だ。
いきなり腕を取られ、暗がりに引っ張り込まれた。
ローブを着込んだ男が「酒場での話を聞いたぞ、"神秘の名刀"を寄越せ！」と凄んできて、オレは呆気に取られた。

「何言ってんだ、お前？」
喚くと野次馬が集まってきたので男は引き上げて行ったが、数日経ち、今度はオレのねぐらに直接押しかけてきた。
身の危険を感じたオレは宿を移し、"神秘の名刀"とは何なのかを調べた。
だが、手がかりは掴めなかった。
それを見聞きした事すらない自分の口から"神秘の名刀"という言葉が出てきたのか、それすら分からなかった。

ある日酔い潰れたオレは、薄暗い部屋で目覚めた。
縄で拘束されている事に気づき、顔から血の気が引いた。
目の前に男が立ち、ナイフを握った。
「"神秘の名刀"を渡せ」
「だから、それって一体何の事なんだ！？」
叫び返したオレの舌はナイフで切断され、桃色の肉片となって床に転がった。
——拷問の末、オレは酷たらしい死を迎えたのだった。

# ガラクタの槍

【プロモーション】
ガラクタなのに槍！　槍なのにガラクタ！
ひとつで二度おいしい、とってもお買い得な逸品です！

【商品情報】
赤字覚悟の大特価！　買うなら今っきゃない！
在庫は残り僅か、今すぐご注文を！

【お届け情報】
24時間以内に発送しまぁす♡
注文殺到で商売大・大・大繁盛、メッチャ大忙しですぅ♡

【カスタマーレビュー】評価：★☆☆☆☆
ガラクタでも槍でもなくて魔法の発射装置じゃねーか！
おい業者、金返せ！

# 黙祷の杖

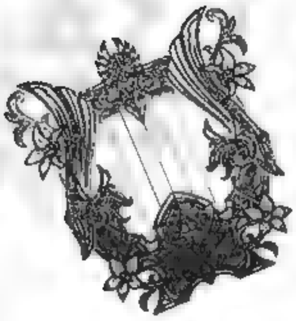


探検隊が発見したその古の王の墓には財宝が眠っているとの噂だった。
探検隊は、王の墓の数々の罠をなんとかやり過ごし、隠し通路を抜け、扉を発見し、ついに王の間に到達した。
王の間は巨大な部屋で、最奥には王の棺と思しきものが見えた。そしてその棺の脇には巨大な杖が突き立っていた。

探検隊は棺に向かって近づいた。周りには王を守るように人の形をした像が左右に配置されていた。
すると何かが低く鳴った。それは杖だった。探検隊の頭の中に言葉が直接響いた。
「シレンシオ。静粛に。偉大なる王の御前である」
探検隊は杖の力の発動により言葉が出なくなり、その目を瞑らされた。

探検隊は動けなくなっており、あたりには静寂と暗闇が訪れた。静けさの中、何かが近づいてくる音がした。だが探検者たちは目を開ける事が出来ないためその存在を確認することが出来なかった。音は自分達のすぐ隣にまで近づいて来た。そして今度は隣りから、何かぴちゃぴちゃとした音が聞こえてきた。

その音は、誰かが何か肉片を噛んでいるようなぴちゃぴちゃとした音だった。だが誰一人、声を発することも、目を開くことも出来なかった。自分の耳に何か硬いものがあたり、ひきちぎられているような、灼けるような痛みがはしったその瞬間も。
「シレンシオ。静粛に……」



# 新緑共有の竪琴

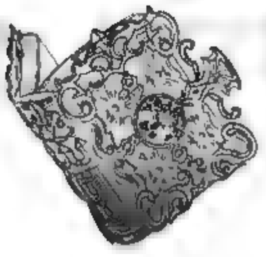
【楽器】しんりょくきょうゆうのたてごと

その王国の人々は、長年続いた政治及び経済的混乱により、疲弊し、活力を失っていた。
そんな時、大臣の一人が王国の宝物庫に昔からあった竪琴を持ち出してきた。
その竪琴は王国に昔から伝わるもので、かつて王国を滅亡寸前にまで追いやった大戦争から救ったと言われていた。

竪琴はむやみに使うべからずと戒められていたが、王国の重い空気をなんとかしたいと思っていた王の命により奏でられる事となった。
その音色が響いた途端、王国の人々はまるで若返ったかのように生き生きとしだした。
農夫や商人に活力がみなぎり、宮廷学者たちの頭には王国再建のための案が浮かんだ。

だが竪琴の効果は長くは続かず、人々は再び気力を失った。
そこで王は再び竪琴を奏でる事を命じた。
人々はまた元気になった。
かくして国民から活力が失われると王国に竪琴の音色が響き、王国は栄えた。
だがその頃、王国の医者たちは最近病気にかかる子供や赤ん坊が増えている事を、不思議に思っていた。

竪琴は定期的に奏でられていた。
だがその音色が響いても人々は以前ほど活力を得られなくなっていた。
宮廷学者達の何人かは、竪琴を奏でるようになってから、病気の子供達が増えている事に相関関係があるのではないかという仮説を述べていたが、あまり真剣にそれに耳を傾ける者はいなかった。
彼らは正しかった。
そして王国では流産する赤ん坊の数が増えていた。



# 王の戒律

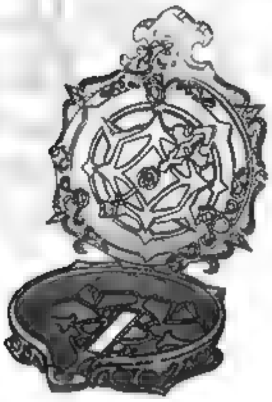


ここに王の戒律を述べよう。
其の一。
王は国民のしもべであり、常に彼らの幸福をはからねばならぬ。

其の二。
王とは国の代表であり、守護者である故、誰の目がないところでも言動に気を配らねばならぬ。

其の三。
王とは時に非情な決断を強いられる職務であり、その総ての責任を負わねばならぬ。

まもなく我が国は敵国の軍勢に蹂躙される。
美しい国土や愛しい民が凌辱される様は見たくない。
かくなる上は邪神を覚醒させ、世界ごと滅ぼしてしまおう…！



# 王妃の道標

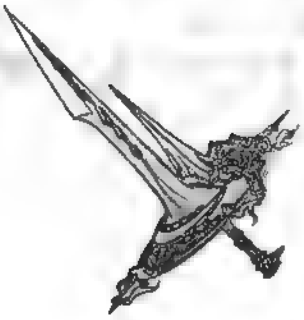


あるところに、富める大国がありました。
若き王には伴侶がいなかったので、若い王妃を娶りました。
王妃は美しい外見と清らかな心を持っていましたが
周囲の運を著しく下げてしまう宿命をも
生まれながらに背負っていたのです。

王妃を迎えてから国はみるみるうちに衰退し
見るも無惨な貧国へと成り果てました。
民衆は、傾国の王妃を処刑せよと糾弾します。
王は王妃を捕らえ、牢へと閉じ込めました。

王妃は国の衰退に大層心を痛め、自らの命を賭してでも
国を立て直す指針が欲しいと強く強く願いました。
そうして王妃は、自らをかような道標へと変化させたのです。
民衆も王も、王妃の想いに胸を打たれ涙しました。

それから王は、『王妃の道標』に政の指針を尋ね
舵を切り続けました。
『王妃の道標』は清らかな心で思考し、行くべき道を
指し示し続けましたが、背負った宿命は
そのままだったので、間もなく国は滅亡したのでした。



# 依存の剣

【刀剣】いぞんのつるぎ

ゼペット爺さんと作者。
僕が一番大切なのはどっちだろう。

それは時と場合によるのだろう。
きっとより身近な存在のほうが大切なんだ。

結局誰でもいいのかもしれないな……
僕に命令してくれる人なら。

もはや人ですらなくてもいいのかも。
虫でも、草でも、機械でも……

# 友愛の弓

【射出】ゆうあいのゆみ

ゴメンね。スネークちゃん。
私、本当は気づいているの。
スネークちゃんが私に向ける感情に。

でもね、その気持ちには応える事はできないの。
だけど、ずっと一緒にいたい。
そう思う気持ちは本物だよ。

私、本当は気づいているの。
オークちゃんの噂を流しているのは
スネークちゃんだよね。

私、本当は気づいているの。
一番弱くて脆いのは私自身だって。
だから正面から向き合えないの。
ゴメンね。スネークちゃん。

# 友愛の提琴

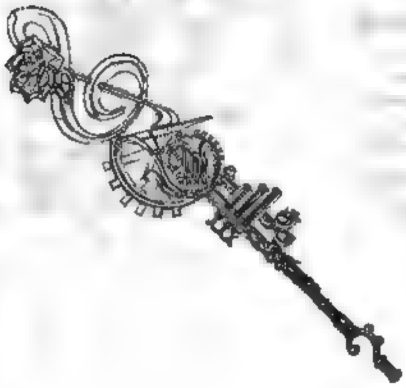


アノ子さえいなけば。
ずっと一緒にいれたのに。

私たちの仲を引き裂いたアノ子が憎い。
間に割り込んできたアノ子が憎い。

もう一度、彼女の一番になりたい。
ずっと私の隣にいて欲しい。
本当に私は彼女のことが好き。
ダカラ、私ハ……

ゴメンネ、バードちゃん。
やっぱり私、オークちゃんのことが嫌い。



# 友愛の杖

【祈祷】ゆうあいのつえ

他人の不幸には鈍感だけど、
自分の不幸には敏感だ。
だから私に向けられる悪意にすぐ気づいてしまう。

その言葉の裏にある意味を考えてしまう。
そして、私と彼女達のズレに気づいてしまう。

スネークちゃんはまだいいの。
彼女には私を嫌うだけの理由があるから。

でもね。
私を助けるふりして、一番見下しているのは、
バードちゃん。アナタだよ。

# ゼロの剣



アコールの店へようこそ！　あら、こちらの剣をご所望ですか？　こちらはですね、大昔にいた「ウタヒメ」という種族の女性が使っていた武器です。その女性は大変に美しく、長い銀髪で舞うように敵を倒していった……という逸話が残っております。

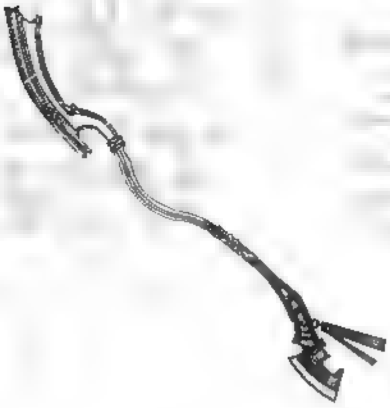
しかもその「ウタヒメ」は戦っている最中に歌を歌う事で魔素の放出を増強させるという特徴的な能力を持っていました。能力が開放される時の歌には、誰もが皆魅了されたと言います。どうです？　気になりませんか？

「ウタヒメ」の持っていた武器はいくつか存在するのですが、この武器を持っていた「ウタヒメ」は最強の一人と言われています。その武器がこのお値段で出るのはちょっと普通では考えられません。いやぁ、私も商売をやっておりますが、これほどお値打ちな武器には滅多に巡り会えないですよ……

え？　この武器を使っていたのは聖女か？　いやそれは……え？　具体的に言うと処女かどうか？　えーっと、それは、処女だったという証言はなかったというか、むしろ積極的に男性と交わっていたというか……あっ、お客様！　待ってください！　お客様～！



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.



# マナの杖

【祈祷】まなのつえ

アコールの店へようこそ！　ほほう、こちらの武器に興味がおありですねぇ～？　なかなかΩ高い……いや、お目が高い！　あ、今のはダジャレです。「Ω(オメガ)」と「お目が」をかけた……あ、そういうのはいいですか？　すみません。

この武器は天使の教会という宗教団体の司教だった少女が、大人になってから使用していた曰く付きの武器です。天使の教会は当時のヨーロッパ地方で大いに流行った宗教でして、信者のあまりの熱狂ぶりを表す「赤目」という言葉が今でも残っているくらいです。

少女が大人になった頃にはその宗教団体としての天使の教会は消滅……というか、敵対する勢力によって皆殺しにされていたのですが、何らかの理由で少女だけは生き延びたらしいんですよね。

この武器が貴重なのは、そうした少女の曰く付きである事と同時に、大災厄以降の分岐に於いて袋小路になっている枝の中で生まれた武器だからです。なかなかこういう掘り出し物はありませんよ？　一本いかがですか？



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# ワンの戦輪

アコールの店へようこそ！　ああ、こちらの武器ですか？　こちらは、この先の未来に発生する「教会都市」という場所のリーダーが持っていた武器……え？　「未来って何か？」ですって？　まあいいじゃないですか、そんな事は。

「教会都市」っていうのはアレですよ。大災厄以降に発生した巨大廃墟あるじゃないですか？　あれを改修して街を作るらしいんですよね？　鉄筋コンクリートの建物って意外に丈夫なんですよねぇ……え？　「鉄筋コンクリートが何か？」ええと、まあ、そういう強い煉瓦みたいなモノがあるんです。はい。

実はその「教会都市」を発端として、この欧州の地は大変な混乱に陥るんです。国家や都市機能はメチャクチャになるので、もし今、土地や地位をお持ちでしたら、早めに貴金属なんかの価値が変わらないモノに変えておくのをオススメしますよ。

価値といえば、遠い将来には、金や銀よりもさらに高価な通貨が現れるんですよね……それは「仮想通貨」って言って、全然重くない、見る事も出来ない、不思議なお金です。人間の進化はスゴイですよね！　え？　何で将来の事を知ってるかって？　それは……ヒ・ミ・ツです！



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# アコールの本



8月2日
B群がどこで発生したのかはよくわかっていない。おそらく、未発見の枝の中にいるんだろう。ここまで発見されないのは、特異点近辺に監視者を立て、私達を近づけないようにしている為だと思う。

3月12日
前回の大災厄時にはB群が地上に大量発生していた。こちらの航空兵器に対抗する武器ももちこんでいて、手に負えない状態になりつつある。今はなんとか抑え込んでいるが、このままでは手に負えなくなる。早急に対処が必要だ。

6月5日
監視モデル中心だった私達にも変革が必要に思われる。換装可能な武装パーツの開発は進んでいるがさらなる投資が必要だ。記憶回収を進める為、武器の流通はもっと大きくする必要がある。やることは大量にある。

8月8日
前記録者がB群によって破壊された。取り込まれた可能性も存在する為、協会に支援を要請する。



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# ミハイルの槍



アコールの店へようこそ！　お、こちらの武器は不思議な武器ですよ〜。色んなルートがある中で「ライブラリ」と呼ばれる世界線から回収された武器です。「ライブラリ」は不思議な人形達が支配する空間で、なかなかこの武器を手に入れるのは苦労しました！

この武器を使っていたのは少年なんですが、ここだけの話……実は！　少年はドラゴンだったのです！！　……あれ、あまり驚きませんね？　え？　「色々ファンタジーな話を聞きすぎて飽きてきた？」そんな事言わないでくださいよー！　サービスしますから！

１万年以上生きていたドラゴンは、戦争によってその生命を落としました。ですが、強力な魔素の効能により、復活する事が出来たのです。対「花」用の兵器として造られたドラゴンにはそれだけの能力が備わっていた。この武器はその力が秘められていると考えられています。

少年はとてもカワイイ子だったらしいんですけど、ちょっと欠点がありまして……実はオシッコやウンコを我慢出来なくてどこでもしちゃうんです。動物っぽい、ものすごく汚い感じなんですけど、この武器はちゃ〜んと洗ってありますから……あれ？　お客様？　どこ行きました？　お客様ー！！



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 謀略と背徳



ここはアコールの店だ。
お前がお客なら好きに見てってくれ。
そうでなければ帰れ。

ああん？　武器の説明を聞きたい？
そんなもん、なんとなく判るだろう。
わかんないようなヤツには使いこなせないよ。

ったく、面倒だな……この武器は、大昔にいた恋人達が使っていた武器だ。
二人とも愛し合ってたんだが、イロイロ事情があって別れたらしい。え？
何で別れたかって？　どうでもいいじゃねぇか。そんなもん聞くのは野暮な人間のすることだ。

でも、あいつら……悪い奴らじゃなかったな。
できれば、幸せになって欲しかったよ……
……ん？　何見てるんだ？　用がなければさっさと帰れ！



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 紺碧の鋭刃

なんだい？　ボウヤ……ああ、この刀かい？　不思議な武器だろう？　これは鎖の部分を持って振り回すんだが、鎖を連結させる事で遠くの敵を倒す事が出来るんだ。例えば、この船の上からだって、水中の敵を倒せる。危ないから触っちゃダメだよ？

あと、あんまり海を覗き込むのも良くないね。あそこには怪物がいるんだ。どんな怪物かって？　そうだねぇ、体の長さはこの船と同じくらいあって、大きな口と鋭い牙があるんだ。それと、とてもキレイな声で鳴くんだよ。歌うようにね。

ボウヤも気をつけろよ？　怪物は若い男が好きなんだ。台風が近づくと、その男を狙って嵐の合間に船を襲ってくる。見つかったら絶対に逃げられないから、ボウヤはおとなしく部屋で寝てた方がいいな。

どうしてそこまでその怪物狩りにこだわるかって？　ああ、実はそいつは人魚だったんだ。俺みたいな馬鹿な王子の為に、人間になろうとして失敗したらしい。だからせめて、この手で楽にしてやろうと思ってるんだ。これ以上、被害が広がらないうちにね……



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 歪なる飢餓



さむくて　さむくて　どうしようもなく　さむくて　そんな　よるに　ぼくは　あのひと　に　ひろわれた　んだ　ぼくの　からだを　あらうと　あのひとは　わらいながら　なにかを　しゃべってた　それが　なにか　わからなかったけど　ぼくは　すこし　うれしく　なった

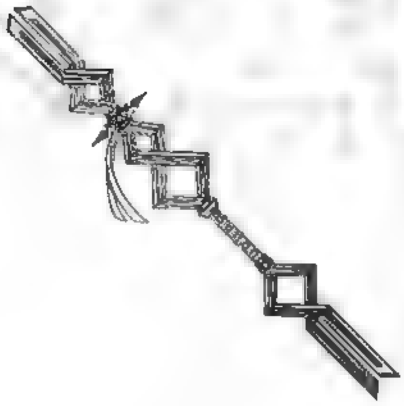
あのひとは　ぼくが　げいをすると　たべものを　くれた　ぼくは　いっしょうけんめい　げいをした　そしたら　たくさん　たべものを　くれた　ぼくは　きもちが　あったかくなって　そのまま　ゆっくり　ねむる　おかあさんの　ゆめを　みられると　いいなあ

さいきん　あのひとが　ちいさくなった　ぼくのすんでる　こやも　ちいさくなった　たべものもちいさくなった　ぼくは　おなかがへって　へって　しかたなかった　なんでもいいから　おなかにいれたい　なんでも　なんでも……

ねえ　ぼくは　いつから　こんなに　おなかが　へってるんだろう？　あのひとは　どこにいったの？　だれか　おしえて　だれか　だれか……



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.



# 奇術師の杖



サァサァ、素晴らしいサーカスの始まりだ！　大きな象の曲芸や、口から火を噴く男、空中ブランコにトラの火の輪くぐりもあるよ！　……って、こんな場所で叫んでても客は来ない、か。最近はこのサーカスもすっかり寂れて、商売上がったりだな……

大体、ウチのサーカスは地味過ぎるんだよ。筋肉や技術に任せた複雑で玄人好みのワザはスゴイが、一回観たら終わりだしな。客を何度も引き寄せるには、なんつーか、もっとこうケレン味のある派手な要素が必要なんだよ……例えば、ものすごく美人でセクシーなオネェちゃんとか。いや、ウチの団員には無理だけど。

そうだ。曲芸の合間にちょっとした笑いを取るってのはどうだろう？　そうだな。このステッキを振り回しながら、おかしな化粧をして歩き回るんだ。曲芸をわざと失敗して笑いを取るのもいい。何せ大衆は間抜けの失敗を観るのがたまらなく好きなんだからな。

ふふっ……今日も儲かった。象のクソを踏んでわざと転んだのがウケたな。こうやって馬鹿のフリして金を取るのはたまらない。明日はどうやって……おっ、あそこにあるキレイな刀を使ってみようか。あの武器を杖替わりにして転び、危うく突き刺さりそうになるって演技で……



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 千年樹の嘆き



おや旅のお方、誰かお探しかい？　え？　銀髪の少年？　……ああ、そういう子もいたねぇ。そうそう、小さな妹がいたんだ。子供ふたりで健気に暮らしていて村では皆に好かれていたよ。食べ物や服のお下がりなんかをもらっていたっけ。

でも、大きくなったらその子、平原にいるイノシシを狩りに行ったりしてたんだ。あの大きなイノシシだよ？　しかもまだマモノがいた時代だ。どうやってイノシシを倒したのかみんな不思議がってたんだ。うん。

え？　その銀髪の少年がどうなったかって？　もちろん大昔に死んださ。それからしばらくして住んでた村も無くなったらしい。ほら、ちょうどこのあたりがその村のあった場所だ。あそこの小さな池に浮いてる花は昔は貴重な花だったらしいよ？

何でそんな大昔の事を知ってるかって？　さあ……よく覚えてないねぇ。年を取るといろんな記憶が曖昧になってくるからねぇ。私も昔は、どこかでその少年に出会った気がするんだよ……どこかで……なんて言う名前だったかねぇ……



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 不条理の刃



【勇者一家　ー長男の章ー】
腕っ節も強くて魔法も達者。そんな僕はそう、勇者以外の何者でもないはずだ。
ある夜お母さんがやってきて、「明日はお前の十六歳の誕生日よ。魔王退治に旅立ちなさい」と言った。
「この時を待ってた！」と僕は勇躍し、蔵から家伝の宝剣を取り出した。

【勇者一家　ー母の章ー】
朝食の支度を終えた私は、息子の部屋の扉を開け、悲鳴を上げた。
何度も目を擦った。が、どれだけ目を凝らしても、寝台の上に横たわっているのは伝承に語られる悪魔に他ならなかった。
悪魔はむくっと起き上がると、大きな口を開けて乱杭歯を覗かせ、「ふあぁ」と気の抜けた欠伸をした。

【勇者一家　ー父の章ー】
半狂乱になった家内を落ち着かせたあと、俺は扉を細く開け、中を覗き見た。
食卓に戻ると、家内と娘が不安げな顔をつきあわせていた。
「息子は大魔王サタンに魂を奪われてしまったのだ！」と俺はまくしたてた。
「あれを息子と思ってはいかん、一家総出で討ち取るぞ！」

【勇者一家　ー妹の章ー】
お兄ちゃん、じゃなくて、大魔王サタンをやっつけちゃった☆
家から一歩も出ず魔王を倒すなんて、前代未聞っしょ♪
あたしはお兄ちゃ——もとい、魔王が遺した剣をもらうことにした。
——翌日、目覚めたあたしは違和感を覚え、鏡を覗き込んだ。そこには、あたしが昨日殺した魔王の姿が写っていたの……。

# 水兵の突撃銃

【射出】すいへいのとつげきじゅう

その街は世界有数の海洋都市で、練度の高い水兵の部隊を擁していた。彼らは苦痛や困難を恐れず、突撃銃を構えて勇猛果敢に戦った。仲間内の結束がとても固い事でも知られており、その絆は家族よりも強いと言われていた。

早朝、水兵の一人が路地裏で死体となって見つかった。
死因は体に穿たれた複数の銃創で、突撃銃の薬莢が現場に残されていた。「隊の誰かがやったのでは？」と、水兵らは疑心暗鬼になった。

あれだけ雰囲気の良い部隊だったにもかかわらず、隊内にギクシャクした空気が流れるようになった。
そんな中、海賊が街に攻め込んできた。
水兵らは夜陰に紛れて挟撃する作戦を立て、二手に分かれた。

あくる朝、水兵らは全滅していた。
二手に分かれた彼らはどちらももう一方を背後から襲おうとしその結果、お互いに銃弾を浴びせ合う事になったのだ。
海賊の首領はニヤリと嗤う。盗み出した突撃銃を使って仲違いさせる作戦が図に当たったのである。

# 零度の杖

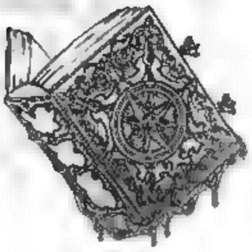


博覧強記の才女がいた。
取り立てて美人ではなかったが、その知性に惚れ込んだ紳士がいた。
彼は手を変え品を変え、しつこく求婚を繰り返した。

研究に生涯を捧げると決めていた彼女にとって、結婚は考えられない事だった。
彼女は「昔、恋人が死んだの。私の心はその時死んだの」と出任せを言い、紳士を諦めさせようとした。

数日後また紳士がやってきて、魔法の杖を取り出した。
「これはすべてを凍らせる杖だ。君が手に入らないなら、君と共に僕を永遠に凍らせる」と言った。
彼女は命の危険を感じ、顔面蒼白になった。

彼女は「時間はかかるかもしれないけど、思い出に踏ん切りをつけるわ。その間、時間を止めて待っていて」と言った。
紳士は喜び、杖で自分を凍らせた。彼女は氷を粉々に砕き、求婚者を排除したのだった。



# 悲哀の書



……蔓延する貧困や疫病。
わずかな金銭と引き換えに娘は売られる。
どこの国も同じ。
一部の特権階級以外は悲哀で満ちている。
それが過去の日常だった。

時は流れ、現代。
法や、上下水道が整備され、
100年前より安全な生活を送る人は増えた。
でも、それでも悲哀は無くならない。

悲哀は性質を変え、
いつも人間の営みの傍にある。
吐き気、めまい、立ち眩み、耳鳴り、腹痛、頭痛。
休養を求め、様々なサインが出される。
現代の悲哀は静かに心を蝕む。

心の疲れを引き起こす原因の大半は
人間関係と聞いたことがあります。
でも、上司やクラスメイトは選べない。
ああ、なんて悲しいのでしょう。

# 大三日月鎌

【長柄】おおみかづきがま

その村には古い伝承があった。
三日月の夜、水面に映る月に石を三度投げ込むと、死神を喚ぶ事ができるというのである。

ひとりの少女が言い伝えに則り、水面に映る三日月に向けて石を三度投げ込んだ。
そして、少女は見た。闇夜から滲み出るようにして、鎌を携えた死神少女が現れるさまを。

その少女は涙ながらに死神少女に訴えた。婚約していた男を親友に取られてしまい、しかもその親友の雇った男たちによって輪姦された。
自分に代わってあの女に復讐してほしい、と。

話を聞き終えた死神少女は鎌を一閃させた。
驚愕の表情を浮かべたまま、少女の首は三日月を慕うように吹っ飛ぶ。
何もかも恵まれた友人に嫉妬し、作り話をして同情を引いた上で殺させてしまおうという少女のさもしい本心を死神少女は見抜いたのである。

# 天荒の狼弓

【射出】てんこうのろうきゅう

とある未開の地に、男の子の赤ん坊が置き去りにされた。
誇り高きオオカミがその子を見つけ、
ひょいと咥えて連れ帰り、自分の子と一緒に育て始めた。

やがて赤ん坊は少年へと成長した。
彼はオオカミの兄弟たちと共に狩りに赴き、兄弟たちよりも速く走り、自前の弓で獲物を射止めた。

そんなある日、煌びやかに着飾った一団が少年の前に現れる。
彼らはしきりに、少年こそが滅亡した王家の末裔である事を訴え、自分たちと共に帰るよう促した。

しかし少年は人間の言葉を解さなかったし、兄弟たちを捨てる気も毛頭なく、
その一団を追っ払ってしまった。
無位無冠の王者はこうして今日も山野を駆け巡っている。

# 日輪招来杖

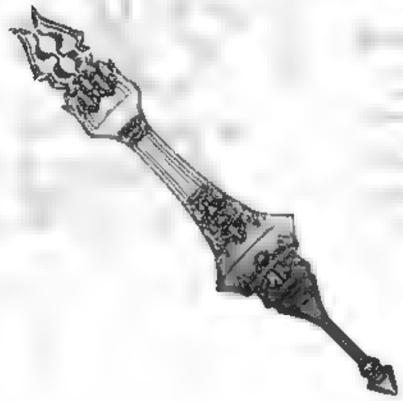
【祈祷】にちりんしょうらいじょう

大地を照らし、活力と癒しをもたらすは日輪の神
日輪の神、辺境の地を豊穣の地へと変え
恩恵を受けし者らは、日輪を崇めん
彼ら、自らを神の子と称し、世界へ散らん

彼らは幾多の民、幾多の神を灼き、飲み込まん
彼らの歩みはとどまるところを知らず
やがては大陸のすべてを覆う
そのさま、大陸を血で塗りつぶすが如し

日輪の民、神の加護の力強さに酔いしれた
我らの使命は、神の光ですべての闇を払うことなり
やがて恩寵篤き神の子、世の乱れるを憂い
神の御霊の現世降臨を願う

より強大な顕現を願い、千の命と千の祈りを捧げん
その祈りは届き、神の御霊、杖に顕現せん
杖は世の遍くを照らさんと光を発し
そのすべてを焼き尽くし、世に静謐をもたらす……
偽典　払暁の章　終節



# 暴食の粉砕機

【刀剣】ぼうしょくのふんさいき

食べること。
それは誰でもする当たり前のこと。
でも、わたしたちにとっては特別な行為。

ちょうどよいこと。
それは人それぞれ異なる
とてもあいまいな状態。

ちょうど良いってどういうことなの？
それは誰にとってのちょうど良い？

わからない。
でも、わたしたちにとってはとても重要なこと。

# 重海の鎚矛

はるか東の島国に世界有数の海軍国家があった。有史以来他国の侵略を受けた事がなく、清く正しく美しい心の人々が住まう国だ。
鎚矛を扱わせれば無双の勇士がそこの一隊長職を奉じていた。

その勇士は武勇に優れるだけでなく、高潔で、誰からも慕われていた。
彼は何度も叙勲を受け、大将軍職へ就くよう要請されたが、
「人の上に立てる器ではないので」と固辞していた。

異国の船から通商条約を迫られた際、島国の王はこれを断固拒否。
四海から軍艦が押し寄せてきて、海軍は壊滅状態に陥った。
勇士は決戦前夜、部下たちに酒を振る舞い、「清く美しい国を護り、果てよう！」と言った。

その晩、就寝中の勇士はぐるぐる巻きにされ、愛用の鎚矛ごと棺に放り込まれた。
船から放り出された棺は海底へ沈んでいった。
それを見送った部下たちは「あんたが大将軍になって開戦を思いとどまらせてりゃな」と呟き、敵に降伏した。

【打撃】じゅうかいのつちほこ

# 闇夜ノ森



闇夜の森に響く美しく、しかしどこか寂しき音色。
それは死者たちをなぐさめるための音楽。

かつて彼らは勝利と栄光を求め
その望みかなわず討ち死にした。
世界の主人公になる事が出来なかったその無念の魂は
暗い森をさ迷い続ける。

楽器の奏でる曲は
無念の魂となってしまった彼らの
栄光の日々の記憶を呼び起こし、慰める。

だが曲は悲劇を予兆させる旋律によって唐突な終わりを迎えるのだった。彼らの、突如絶ち切られた命と同じように。

# 祝福の杖

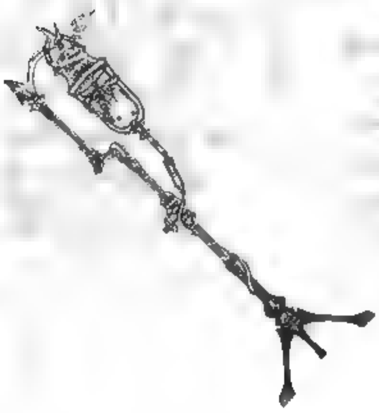


神からのお恵みです。
あなたには幸せになる資格があるのです。

神からのお恵みです。あなたは仲間や愛する者に囲まれ、豊かな暮らしを営む権利があるのです。

神からのお恵みです。あなたは飢えず、暑くも寒くもなく、いられるのです。

神からのお恵みです。あなたは生きていてもよいのです。
おめでとう　おめでとう　おめでとう。





# 卑劣の杖

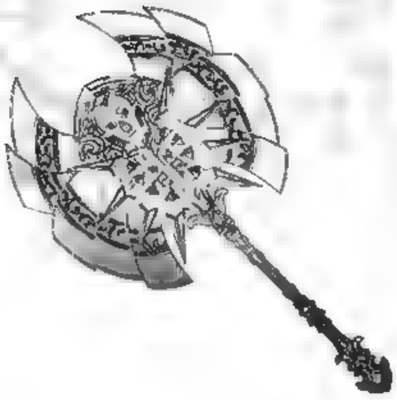


ある日、不思議な薬売りと出会った。
彼女曰くこの薬をひとたび服用すれば四六時中
薬のことしか考えられなくなるらしい。

とても面白い効能だと思った。
人をいいなりにする手口は山ほどあるが、
どれもそれなりに準備が必要だ。
だが、この薬はただ服用させるだけで済む。

……薬売りは満足そうに金を数えると
足早にその場を去った。
さっそく私は効果を試すため、
近くの村に立ち寄ることにした。

酒場で薬を混ぜた麦酒を飲ませたが
2時間待っても効果は現れなかった。
すぐに偽物をつかまされたとわかった。
でもまあいいさ。
こちらの渡した金も偽札だったのだから。



# 刑罰の斧



私は法の番人として人を裁き、日々の糧を得ている。
罪状を聞き、本人の弁明を聞き、証拠や証言などから総合的に量刑を決める。
死罪の場合、この私みずから斧で囚人の首を斬り落とす。
刑罰を決めた当人である私が手を下すのは当然の事だ。

人を裁く立場にある以上、自分にも厳格であるべきだと私は考えている。そして私は、法廷含め死刑執行の刑場に一度も遅刻した事がない。故に私は「私が刑場に遅刻するような事態があった場合、天の思し召しと考え、量刑を再考する」と公言していた。

悪質な詐欺を働いた男がいて、死刑を執行すべく、私は刑場へ向かっていた。
すると道端に立っていた商売女が近寄ってきて、「タダでいいから、どう？」と媚態を振りまいてきた。
私はその女を注意深く観察し、あの詐欺師の妻であることを看破した。

その女にかかずらったために刑場に遅刻してしまった。
死刑囚の隣に新たに連行してきた悪妻を並べ、斧の一振りで二人の首を刎ねた。私は手首を返し、円弧を描いた刃に自分の首を斬り落とさせた。
法の番人たる者が自分の言葉を違える事があってはならない。故に量刑を見直し、この幕引きを選択したのだ。

# 岩水の刀

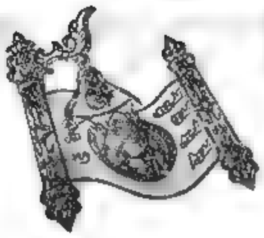


刀の道を極めんとするサムライがいた。彼は俗界の誘惑から身を遠ざけるべく山籠もりをし、一心不乱に修業に打ち込んだ。

ひたすら己を律して修業に励んだサムライだが、彼とて神ならぬ人の身。
日が経つにつれ、異性に対する欲求が募りはじめてきた。
彼は滝に打たれ、必死で煩悩を鎮めた。

滝行を終えた彼は、
水場に着衣が脱ぎ捨てられているのを見た。
「さては天女が水浴びしているのでは？」そう思った彼は欲求に抗うことができず、覗いてしまった。

水浴びしていたのは美しい天女ならぬ筋骨隆々の大男だった。
逃げようとしたサムライは大男に襟首を掴まれ、
「イイ男だな、二人でじっくり語り合わぬか……？」
かくして禁欲のサムライは男色に目覚め、両刀遣いになったという。



# 異界街灯の書



やーやー見て見て見て！
これ、スタンド付き多機能スクロールホルダー！
このホルダー収納力抜群で、どんな防衛機能、呪いが
籠められてても、ワンタッチ収納！
大陸の端から端までの長さでも、スルッと入っちゃう。

そして肝心のスタンド！
どんな暗闇でもスクロールが読めちゃう！
しかも翻訳機能付き！　天使文字でもすらすら～と解読！
さらにっ！　このスタンドの光は
スクロールの力を何倍にもパワーアップ！

スクロールの色が変わったら、強化完了！
もう、今までとは雲泥の違い！
ひとつだけ注意！　このスタンドの光、
ずっと見てると、あなたの魂が汚れちゃう！
用法用量は守って！

本当なら英雄級の魂が必要なところが、
このお値段！　凡人の魂でも
来世への転生を諦めれば、ぜーんぜん問題なし！
しかも分割手数料は弊社負担！
さあ、契約するなら今！

# 炎魔獣の銃砲



腕達者の猟師が手配魔獣を撃ち殺した。すると薮の中から仔獣が出てきて、親獣の体を舐めた。
子供を殺すのは忍びないと思った彼は、一緒に連れて行く事にした。

魔獣の子供は気質が荒く、なかなか言う事を聞かなかったが、猟師は根気よく狩りを仕込んだ。
「まるでもう一人息子ができたみたいだ」と彼は呟く。
そう――彼は、息子のために必死で手配魔獣を狩り、金を稼いでいたのである。

猟師は魔獣を狩っては息子に仕送りをした。
そんなある日、有閑マダムに惚れられた事でその夫の怒りを買ってしまい、猟師は刺客によって殺された。
仔獣は猟師の銃をくわえ、息子の元へ届けた。
息子は銃を見て、父に何が起きたのかを知った。

息子は魔獣と共に成長し、見事に父の仇を討ち、父を超える腕利きとして知られるようになった。
常に炎魔獣を従えていた彼の愛用の銃は「炎魔獣の銃砲」と呼ばれ、今日にまで伝わっている。

# 大鷲の一打

【打撃】おおわしのいちだ

むかしむかし、緑豊かな王国のはずれに、賢きカラスの王が治める領土がありました。
ある日、空の彼方に黒いシミが見えたかと思うと、見る間に大きくなりました。
翼をはためかせるそれは、眼光炯々、威風堂々たる大鷲だったのです。

狩りを始めた大鷲を見て、賢きカラスの王は話をしに行きました。
ここは自分の領土だから出ていってほしい、応じてくれるのなら自分が集めた宝を譲り渡すと。
が、大鷲は「我の王は我のみ、君には従わぬ」と答え、交渉に応じませんでした。

賢きカラスの王は部下のカラスたちに命じ、大鷲を襲わせましたが、あっさり返り討ちにされてしまいました。
武力による打倒は困難と見た賢きカラスの王は、魔女の庵へ行きました。
宝物で釣られた魔女は大鷲に呪いをかけ、なまくらな木ぎれに変えてしまったのです。

賢きカラスの王は安堵し、眠りに就こうとし——
そこに網をかぶせられ、身動きも取れず、じたばた足掻きました。
人間の王が現れました。その手に、なまくらな木ぎれに変えられた大鷲を握って。
「この者は我の大切な友であった、彼の無念を思い知れ！」
かくして大鷲の一打により、賢き脳はぐちゃぐちゃに弾けたのでした。

# 悪兎の道しるべ

跳ねる兎を追いかける
気付いた時にはもう遅い
いつの間にやら炎の中で
体が真っ赤に燃えている

兎が跳ねる
何見て跳ねる？
狂った人見て楽しく跳ねる

駆ける兎を追いかける
気付いた時にはもう遅い
いつの間にやら池の底
体がぶくぶく沈んでく

兎が駆ける
何見て駆ける？
狂った人見て楽しく駆ける

踊る兎を追いかける
気付いた時にはもう遅い
深い深い闇の中
帰り道はもう分からない

兎が踊る
何見て踊る？
狂った人見て楽しく踊る

捕まってしまった悪い子兎
体はバラバラ　楽器にされた
奏でる音色を聞いた人たち
踊り始めて　もう止まらない

兎は哂う
何見て哂う？
狂った人見て楽しく哂う・・・

# 悲愁の縫い包み



2009/4/3
みぃちゃんはきょうもげんき。
ともだちイッパイな人気者。
明日も楽しいお話聞かせてね。

2012/2/16
みぃちゃんにとうとう彼氏が出来た。
もう、私は必要ないのかな。
ずっとずっと電話している。

2019/5/23
最近、みぃちゃんの返事が変だ。
ウェイの強弱で会話をしてるみたい。
それに、今日も違う男の子と寝ているよ。

2023/5/7
みぃちゃんの命の価値は300万円だった。
毎日毎日、したくもない仕事させられて
それだけしかもらえないみたい。
大丈夫。これからもずっと私がお話を聞くよ。
そしたらいつか、またあの頃みたいに
元気いっぱいなみぃちゃんに戻ってくれるよね？

# 炎魂の書



心血を注いで創った物語を世に問い、日々を生きる糧を得る。私もそんな物書きの端くれだ。
私はとある女性と相思相愛になり、体の関係を持ち、溺れるように愛し合った。

その女性の愛が正直重たくなり、別れ話を切り出した。
「別れたくない」と泣きつかれたが無視し、私は逢い引きの宿を後にした。
その後、彼女が焼身自殺を遂げたという話を聞いた。

かつて愛した女性がこの世から消えた事に私は胸を痛めた。
せめてもの弔いにと思い、彼女をモチーフにした物語を上梓する事にした。
——数十日かけて無事に彼女の物語を書き終えた後、印刷工の元へ行った。

見本本を手に「これで君も浮かばれるはずだ」と呟いた途端、本の中から半透明の人影が現れ、私の手を掴んだ。
——以来、私は自らが創り上げた物語の中で、炎に灼かれて死んだ彼女の魂と過ごしている。

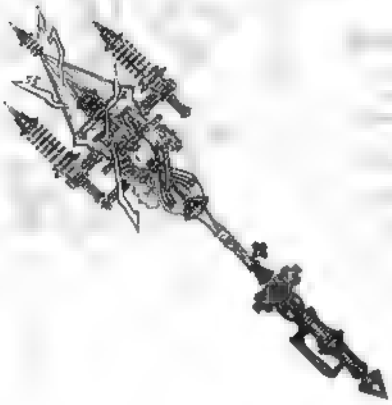
# 再生の息吹

かつて王国に長い間破壊と混沌をもたらしていた魔王が倒された。王国の人々は皆、荒れていた国を復活させ、秩序を復活させることを求めた。

王国はみんなが協力したため、真面目で秩序だった社会となった。
あらゆる悪事も、小さな芽のうちに厳格に取り締まられた。

秩序を守るため、隣人のどんな些細な悪についても密告や魔女狩りが頻繁に起こり、住人は次第に相互不信に陥った。

そして罪を犯した者は応報の罰を受けるのだと住人たちに知らしめるため、刑の様子は公開された。その日も盗みで捕まった一人の女が処刑された。目の前で親を裁かれた子供の目は暗かった。その目には、いつの間にか子供に宿っていた魔王が復活する兆しがあった……。



ドロシー／クレリック

# 探究の杖

【祈祷】たんきゅうのつえ

未開の地は深海にあーり！
この特製潜水服なら
海底250,000マイルもなんのその。
私が調べつくしてあげましょう！

善良なテスターさんの協力の下、
耐熱性能もバッチリです。
今では燃え滾るマグマだろうとへっちゃらです！

衝撃耐性にも抜かりはありません。
例え高速で泳ぐマグロに衝突したとしても
バラバラになるのはマグロの方です！

ですが……
この潜水服の欠陥は言わなくても
わかりますよね？

# 水蛇ノ槍



その槍使いは湖に棲む水蛇の退治に臨んだ。互角の戦いが続き槍使いは自分の体ごと水蛇の口に突貫した。
一人と一匹は共に水中に墜ち、長い事どちらも上がってこなかった。

夜半、満月を映し込んだ湖が割れ、槍使いが顔を覗かせた。彼は得物の穂先を天に翳し、「水蛇を仕留めたぞ！」と吼えた。

槍使いの名声は確固たるものになった。
ところがある日、彼はふと気づく。決闘の場でも食事の席でも女と寝ている時でも、ぽたぽた体から水が垂れるようになった事を。

槍使いの食事量はどんどん減っていった。
そしてある朝、目覚めた彼は、軟体の変温動物と化した己に気づく。
水蛇は誓いを立てる。人里に自分の居場所はない、あの母なる湖に還ろう——

# 愛鳥の囀り



青年は奇妙な音色を奏でる竪琴を手にしたことにより、安定した生活を送ることができるようになりました。ですが、ふとした瞬間に考えることがあります。この音色はどこかで聞いたことがある。それになぜこの竪琴は庭先の目につく位置にあったのだろうか、と。

のどに骨がつかえているような日々を送るうち、青年は気づきました。この竪琴の形はピーちゃんに似ていると。そしてすぐに青年の胸は懐かしさでいっぱいになりました。

一緒に野山を駆けたこと。ピーちゃんにいじわるをする子猫を懲らしめた事。一緒に長老の育てた果実を盗み食いしたこと。そしてある大雨の降る深夜、足元にいたピーちゃんに気づかず踏み殺してしまったこと。様々な思い出が蘇りました。

そうか。この音色はあの時のピーちゃんのうめき声と同じなんだ。青年は謎が解けた嬉しさから、両手をぱんっと叩て大喜びしました。そしてその瞬間、青年は足元に置いていた提琴を踏み壊しました。その時、苦しそうな鳴き声が竪琴から鳴りました。

# 欠片の槌



その男は欠けたものしか愛することが出来なかった。満月ではなく三日月、満開ではなく散り際、そしてどこか欠けた所がある女に心惹かれるようであった。

当然彼の好みは周囲から受け入れられなかった。だが彼はどれだけ忌み嫌われようが、本心を偽る苦しみは耐え難い、と自分の好きなことは好きと言い続けた。

ある日、噂を聞きつけたのか、流行り病を患い村から追放された少女が彼の元を訪れた。彼女は目の前で自らの手を切り落とすと「貴方の好みに合わせるよう努力します。だからどうかお傍に……」と懇願した。

彼は痛みに涙を流す少女の頬をぬぐうと「そんなことをしなくても、すでに君の心は欠けてしまっている」と村で迫害された心の傷を労わりました。ですが、運の悪いことに男が手を切断するよう少女に強制したのだ、と勘違いした鍛冶師によって男は撲殺されました。

# 睡眠のクマデ



【潮干狩り生活1日目】
このアサリはぜんぜん寝てくれない。
もっと聞かせてよぅ、と
ライブラリでの話を聞きたがる。

【潮干狩り生活2日目】
このアサリは暗くなると、潮を吹く。
今も冷たくて目が覚めた。
——もう、邪魔だし食べちゃおうかな？

【潮干狩り生活3日目】
……むにゃむにゃ。
眠りを邪魔するわるいアサリは
死刑にしちゃうぞ。

【潮干狩り生活4日目】
「人魚姫にサリィ！　まてったらー！」
この砂浜は濡れるし、口に砂は入るし、
海鳥の声はうるさいけれど……
もう一日くらい、いてもいいかな。

# 悲哀のジョレン



【潮干狩り生活1日目】
変な衣装を着させられて、
怪しい仕事をさせられている。
なんて悲しいの。

【潮干狩り生活2日目】
潮干狩りをしているのに、
見つかる貝は違うものばかり。
なんて悲しいの。

【潮干狩り生活3日目】
手間のかかる娘に、息子。
……娘に息子？
なんで私が娘じゃないの？　悲しい。

【潮干狩り生活4日目】
ここでの暮らしは楽しくて、穏やかで……
少しも悲しくないはずなのに。
ふとした瞬間に、悲しくなるの。

# 観測の書



焼け野原に倒れている少女がいた。
彼女は戦場で救護班の一員として働いていたが、
撤退戦にて囮として隊列から放り出されたのだった。
夥しい血の中に沈む少女は、
既に敵兵に囚われ、弄ばれた後だった。

やがて一人の青年がやって来て、少女を抱きしめた。
青年と少女は幼馴染みであり、恋仲でもあった。
既に事切れていた彼女の傍らには、一冊の本。
青年は震える手で、血濡れた頁を繰った。
【快晴/快晴/曇天/雷雨/快晴/雨天/快晴…】

それは日々の気象の羅列であった。
青年は、とある言い伝えを思い出す。
『百の快晴が続いた夜に、流星雨がやってくる』
少女は星が好きであった。
まだ見ぬ流星雨に焦がれて、観測を続けたのだろう。

数年後、この地を治める国の都が絨毯爆撃に見舞われた。
漆黒の空から降り注ぐ無数の爆弾は、まるで——
「ほら、君のための流星雨だよ」
爆撃の責任者は一冊の本を胸に抱え、嬉しげに笑った。

# 涼風の囁き

高原で奏でられた音色が、そこから涼風を運びます

涼風は対立によって生じた熱を冷まし、取り去ってくれます

涼風は世界の隅々にまで流れ、その生命を冷まします

涼風の到来で世界はやすらぎの眠りにつくのです
再び目を覚ます必要はありません

# 鎌鼬の薙刀



強さを極めんと志す武辺者がいた。
彼の手から繰り出される薙刀はあまりに鋭く、迅く、見切れる者はいなかった。

ただひたすら強さを追い求める武辺者に数多くの者が心酔し、弟子入りを志願した。
が、彼はそのすべてを断り、山奥にて孤独な修行に打ち込んだ。

決闘を望む者には薙刀をもって身の程を教え込み、
臣下に迎えたいと要請する者はすげなく拒絶した。

雷雨の日、山頂にて修行に励んでいた彼は、薙刀だけを残して行方を絶った。
鎌鼬にさらわれ、その気高き魂を愛した神の国へ招き入れられた――と言われているが、真偽の程は定かではない。

# 躍羽の提琴

その鳥は、鳥なのに飛ぶことが出来ない種だった。
だがその中でもたった一羽だけ、頭に特徴的な赤い徴のあったその鳥は貴族達の間で評判だった。
その鳥は、俊足にかけて王国で知らぬもののいない伝説の存在だったのだ。

名だたる貴族達自慢のどんな猟犬も、その鳥を捕まえる事は出来なかった。
その鳥の、大地を駆ける速度は日に日に増していき、その姿は駆けるというよりは、半ば滑空していた。

毎日猟犬に追われて駆け続けるうちに鳥の身体は更に引き締まり、その精神は研ぎ澄まされていった。そしてついにふわりと浮き上がった。その種の中でも際立った能力を有して産まれたその鳥の身体は、その同属の鳥がかつて達成したことのなかった、空を飛ぶという偉業を成し遂げたのだった。

そして次の瞬間、その鳥は貴族の放った弓によっていともたやすく空から叩き落とされた。
稲妻のような速さで大地を駆けていた鳥は、二度と動くことはなかった。

# 毒蛇の槍

【長柄】どくへびのやり

鬱蒼と茂る森の奥、ひどく欲深な大蛇がいた。
大蛇は森を訪れるものすべてを飲み込んでいった。
死体が、武器が、宝が、恨みが、怒りが、悲しみが。
大蛇の中には溜まり続けた。
いつしかそれらはその身を蝕む毒へと変わったが、大蛇は飲み込み続けた。
大蛇はすべてを奪う。与えるは、ただ一つ——

とある武器職人が森を訪れた。
彼はここに入ったものが誰も戻ってこない事を知っていた。
だが、それで構わなかった。むしろ、それこそが望みだったのだ。
男は欲深な者たちに陥れられ、愛したすべてを奪われた。命を失ったとしても、誰も嘆きはしない。
彼は迷いなく森の奥へと進み、大蛇と出会った。

「何が欲しくてここに来た」
「死を寄越せ」
男の答えを聞き、大蛇は己がまだ持っていなかったものに気が付いた。
「私も死が欲しい。お前が私に死をくれるなら、とっておきの毒をくれてやろう」
男は少し考え、頷いた。

大蛇を殺した男は、その骨と牙から槍を作り上げた。
大蛇の骨と牙は毒に染まっており、触れるものを蝕んだ。
その槍で、男は自分からすべてを奪った者たちを死に追いやった。
復讐を遂げた後、彼は槍で喉を突き、自害した。
すべてを喰らいし大蛇から作り上げた槍は、生きとし生けるものから命を奪う。
与えるは…ただ一つ。

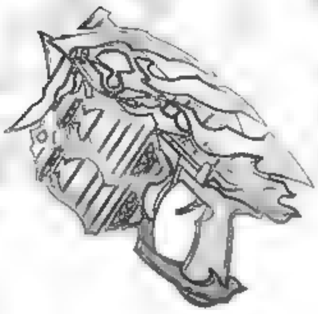
# 睡眠の意思

(-_ゞ)　ｺﾞｼｺﾞｼ……
(-.ゞ ﾈﾑﾈﾑ

ｺﾛｺﾛ(・・)(: )( ¨ )( :)(・・)ﾋﾟﾀｯ(o_ _)o
(*_ _).。 oOｸﾞｩｰ

ｱｰｳｩｰ　(-ρ-)zzzZZZ
Ｚｚｚ・・(－－*)。。 oO(夢)

《ﾊﾟｸﾊﾟｸｯ(*ﾟ～ﾟ)●ゝ
ｸﾞｩｸﾞｩ・・・(。-ρ-).。 oO



『シンデレラ/』
『オルタナティブ』

# 卑劣の意思

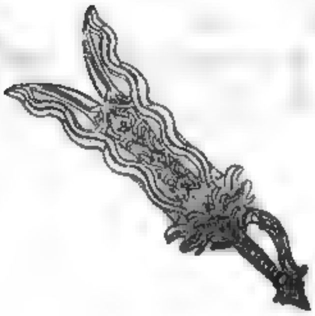
【射出】ひれつのいし

視覚を遮ると他の感覚が鋭くなるからね。
目、つぶりな。天国に連れてってやるよ。

油断した相手の胸を一突き。体格差なんてものは頭脳の前にはあってないようなものさ。

頭を失った組織なんて脆いものさ。
そう簡単に頭になれる器など現れない。

瓦解した組を掃討したシンデレラはあざ笑う。
「……あと、3つだ。」



# 赤蛇の短剣

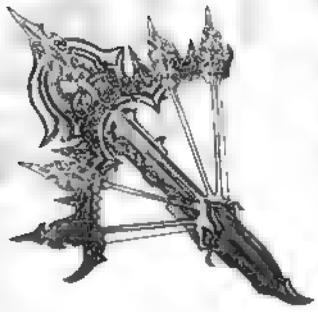


【女盗賊・赤蝮の手記①】
自分の強みを把握しておく。それって超重要っしょ？
アタイの場合、男を骨抜きにするこの肢体が最強の武器！
ちょいと気のある素振りを見せりゃ、バカな男どもは鼻の下を伸ばしてアタイと寝ようとする。
で、ベッドに引きずり込んで、グサッと刺し殺す。
アタイにゃ朝飯前ってね☆

【女盗賊・赤蝮の手記②】
ある日、殺した男の持ち物を調べたところ、手紙が見つかったんだ。
この男には婚約者がいたけど、コイツはその女を騙し、財産だけ取って他の女と夜逃げするつもりでいたんだとさ！
はっ！　アタイも大概だけど、殺されたコイツもクズだよね！

【女盗賊・赤蝮の手記③】
アタイは男の婚約者に会いに行った。道中で婚約者にお世話になったこと、毒蛇に噛まれ死んだことを告げ、お悔やみを述べた。
女は涙を流して悲嘆し、アタイにお礼をしたいと言った。
アタイとしちゃ後で押し入るため、屋敷内の様子を探っておきたかったんだけど、まあ貰えるもんは貰っておいて損はないっしょ。

【女マフィアボス・赤蛇のメモ】
あの男はね、あたいのシマで仁義をわきまえず結婚詐欺を繰り返して、荒稼ぎしてたんだ。
で、あたい自身が囮になり、あいつの手練手管を探ってたんだよ。
あんた、あいつの愛人で、男が死んだとかウソを言って、逃亡を手伝う気なんだろ？
あんたが飲んだその茶、痺れ薬が入ってんだ。この短剣であちこち切り刻みながら、すべて聞き出してやる……！



# 暴力の弩

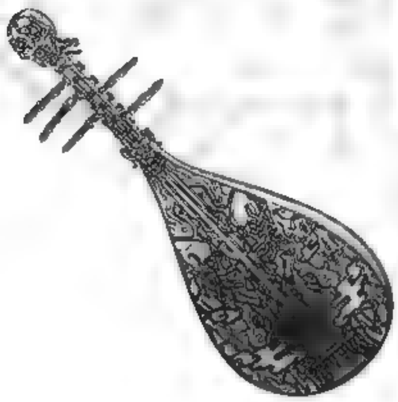


ある物語では、いっしょに遊んだだけなのに。
「人殺し。」と呼ばれ、鉄砲でうたれました。

またある物語では、おなじように遊んだら
「殺してくれてありがとう。」と、ほめられました。

またある物語では、
大勢のひとたちが叫びながら遊んでいました。
「もうこんな無駄なことをしたくない。」
そんなことを言いながらも遊び続けていました。

いろんな世界でたくさんの人とあそんだけれど
いっかいあそぶと、いなくなってしまいます。
ああ、だからボクはこんなにも……



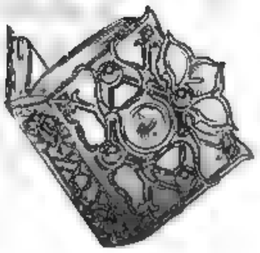
# 被虐の琵琶

「お前に大事の歌を聞かしたから、聴料をとらねばならぬ。」
「お前さんの声はてな音色だね。本当に心持がをかしくなりやした。」

「痛いもんだから我慢してゐな。俺の琵琶は攪拌棒のやうだ。」
「期待に胸が疼きます。そんな大きなものを無理やりに……」

「お前、俺がいふことをきいて幸せだ。初冠にもなつて男としないと穴なしといふものになつて、独りものになる。ほんとに俺の御蔭だとおもひな。」

なんて素敵な説話なのでしょう。私もこんな風に乱暴に……。
この琵琶で……。ああ……[redacted]の動きが止まりません……！



# 勾魂の書



・殺苦草(やくそう)
■○▼■全域で見られる植物。地中深くに根を張り、再生力、繁殖力が高い。葉を引きちぎっても数日で再生する。この葉を利用した薬は、使用者の外的負傷によく効くが、回復には多大なカロリーを必要とし、容量を間違えると、使用者は最悪餓死に至る。

・弩苦芥子草(どくけしそう)
■○▼■中央部に多く生息する。毒性の強い土地でよく見られる植物で、特に鉱物毒への耐性が強い。薬草にして服用することで鉱物毒の吸収を妨げることができる。ただ服用するとミネラルを吸収できなくなり、最悪死に至る。

・嫌死草(いやしそう)
■○▼■南部に群生する。成長が早く、過酷な環境でも枯れることのない、強靭な生命力を持つ。気候の変化、病気に強い植物で薬草として利用した場合、強力な鎮痛・解熱作用があるものの、強力かつ強制的な作用の影響で消耗、最悪死に至る。

・壊罹草(エリクサ)
■○▼■北部のごく狭い山岳部にのみ生える。特殊な製法で薬草酒とすることで、あらゆる病、傷に効く霊薬となる。その効能は服用した者の魂魄を消費。二度目の使用で魂魄は消費しきり、服用者の意志は消失するも、絶対に死に至ることはない。

# 決起の鉱鎚



決起の鉱槌は人々の決起を促す。
鉱鎚は決起した後の世界には無関心である。
そして次の決起をのみ指向する。
だから、決起の鉱鎚がある地の平和が長きに渡って続くことはない。

やがて、決起の鉱鎚はそれについて知っている者たちによって、時の体制に預けられることとなる。
体制の守護者達は決起の鉱鎚を封印し、そのためしばらく平和が訪れるがやがて体制は腐敗し、人々は体制を打ち崩そうと、決起の鉱鎚を求めだす。

後の時代になってわかったことだったが、体制の守護者達は定期的に自らの手によって体制を破壊していた。
人々が本当の魔力を持ち圧倒的な戦力差をもくつがえしてしまう力を秘めた決起の鉱鎚を体制に預けるように導くためであった。

だがそれを知った最後の男一人だけでは、いくら決起の鉱鎚といえどもその力は不足していた。
かくして支配はくつがえされる事のない完全なものとなった……。

# 反征服の鎌

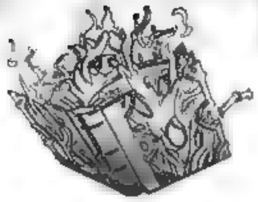
【長柄】はんせいふくのかま

東の大陸の植民地化を命じられた騎士は渡航し、現地の部族と対話を始めた。
ところが王は使者を送り、「原住民をすべて虐殺せよ、従わぬならお前の首を刎ねるぞ！」と言ってきた。
反骨精神を刺激された騎士はその場で使者の首を刎ねた。

王は激怒し、軍勢を動員して大陸に攻め寄せてきた。
騎士は各地の族長らと語らい、味方に引き入れる事を画策した。
族長らはみな気性が荒く、誰かに従うのを心から嫌う者たちばかりだったが、快く協力を約束し、王の軍勢と戦ってくれた。

攻めても攻めても押し戻され、海の大時化で補給線が壊滅状態となり、王は侵掠を断念した。
各部族を束ねた騎士は勝ち鬨を上げると、東の大陸の統一を宣言し、王位に就いたのである。

戴冠式の後、宴会が催され、王となった騎士はほろ酔い加減で寝床に入った。
そこに各部族の長達が現れた。
「征服されるのが嫌だから手を貸してやっただけなのに、何を勘違いしたのやら」
彼らは王の首を鎌で斬り落とすと、自らの部族の元へ還っていったのだった。



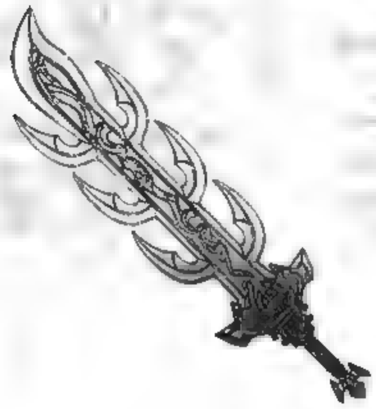
# 虚妄の寄生書

今日も夢を見た。
その少女はとても綺麗だったはずなのに、
夢から醒めると顔を忘れてしまっている。

今日も同じ夢を見た。
森で少女が泣いていて、
僕はその涙を止めてあげたいと思っている。
現実ではそんな面倒な事するはずないのに。変な夢だ。

いつも少女に触れようとするところで目が醒める。
馬鹿らしい。そう思いつつも
ふとした瞬間にその少女を思い出してしまう。

彼女の面影を探してネットの世界を彷徨う。
顔は思い出せないが、
出会えばきっと彼女だとわかるはずだ。
だって僕はその少女の正体を知っているのだから。



# 紅の七刃

【刀剣】くれないのしちじん

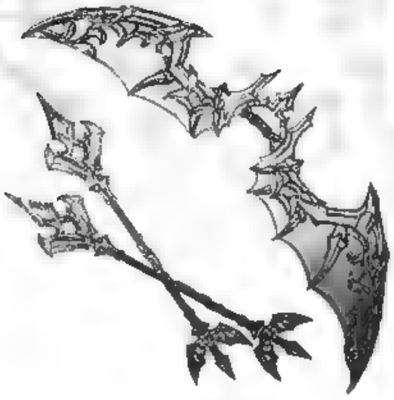
災厄の化身たる七竜、地の底より復活し、暴威を振るう。
彼らの行く先々で破壊の爪痕が刻まれ、多くの人々が骸を晒す。
世界に混沌が充ち満ち、誰もが終末の影に怯えた。

その若者、一振りの剣を引っ提げ、七竜に挑む。
熾烈極まりない激闘の末、若者は七竜すべての首を斬り落とす。
人々は歓喜し、彼を「救世の竜殺し」として讃えた。

若者は王として推挙され、戴冠する。
英雄の血統を増やすよう周囲から薦められ、彼は多くの妻を娶った。
妻の中に嫉妬深い者がおり、他の女と公然と子を成す彼が許せず、就寝中の彼を佩剣で殺害した。
夫殺しの女性は驚く。何と、紅く染まった剣から七つの刃が生えてきたのだ。

次の瞬間、天地が鳴動し、七竜が再臨する。
七竜は死んでおらず、邪霊として英雄の剣に巣喰っていた。そして英雄の血を吸い、復活を遂げてしまったのである。
英雄亡き今、七竜に抗する術を持つ者はいない……。

# 蝙蝠の怪弓



【射出】こうもりのかいきゅう

その男、才知に富む者なれど、邪知奸佞につき。
柔和な笑みを浮かべ、腹の底では人を陥れる方法ばかり目論む。

宮廷内で、武断派と保守派が相争う。
その男、武断派が有利と見るや、彼らに肩入れするものなり。
話術の巧みさと人当たりの良さで、瞬く間に地位を築く。

武断派の中心人物、食中毒にて急逝。後継者の座を巡り、派閥内で内輪揉めが勃発す。
その男、あっさり保守派に鞍替えし、武断派の情報を売り渡す。
だがその結果、どちらの派からも信を置かれなくなる。

隣国への亡命を図った彼は森を抜ける途中、コウモリに取り巻かれてしまう。
以来、彼の姿を見た者はいない。
後世の学者は語る。「鳥と獣の顔を使い分ける様はコウモリさながらだった為、同族に連れ去られたのだ」と。

三匹の子豚/
クレリック

# 暴食の杖

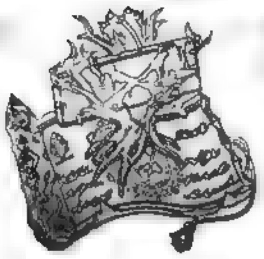
【祈祷】ぼうしょくのつえ

目に入った林檎を、口へ押し込む。お腹はいっぱいなはずなのに、口が勝手に動いてしまう。

「食べたくない。もう食べたくないよ」そんなわたしの気持ちを無視して、食欲と溢れる涙は止まらない。

……家に帰った後も、わたしの衝動は止まらない。咎める人はいないのに、何かから隠れるようにパスタを貪り続けてしまう。

……吐いちゃおう。食べてしまった罪悪感も、苛立ちも、全部。全部。全部。



# 異界式標識

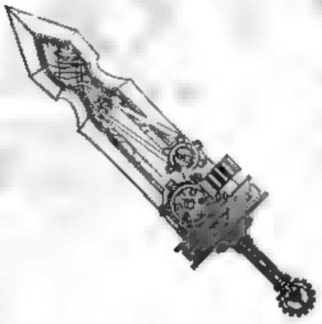


自己紹介をしよう。
俺は樹だ。
自らの意志では一歩たりとも動けない、悲しい樹だ。
まったく退屈だよ。
……だが、そんな俺にもささやかな役割がある。

『進むな、危険』
そう書かれた看板を、探索者に掲げてみせるという役割だ。
なにせ、この先はとにかく危険だからな。
ところが連中ときたら、文字が読めないらしいんだ。
そこで俺は、もっとわかりやすい看板を用意した。

傍らにあった死体の血で、看板に大きな×を書いたのさ。
その不気味さ故か、無茶な連中は極端に減った。
……けれどアンタは、ここまで聞いても
この先にどんな危険があるのか知りたいって顔してるな？
仕方ない、特別に教えてやるから一歩前に出な。

なあに、この先には何も無い。
ただアンタの足が、俺の根が届く範囲に入ったというだけ。
ところで、俺がどういう樹なのかアンタは知ってるか？
俺はな、無差別に人を襲いはしないが
据え膳は食らう主義の、単なる——人食い妖樹さ。



# 打直の火鋼剣



その剣は、農作業に使われていた鋤を打ち直して作られたものだった。

戦争が終わり、平和が訪れ、剣は再び鋤に打ち直された。

かくしてそれは、平和がくると鋤に、戦争が訪れると剣に打ち直された。
やがて打たれることに喜びを感じるようになった鉄は、戦いそして平和を交互に欲するようになった。

その鉄に意識がある事を察知した魔法使いは、鉄を細かくして二度と刀にも鋤にも変えられないようにして、食事用の突き匙にした。
それら突き匙は今でも夜中になると、「うってくれ～　うってくれ～」とうらめしそうに嘆いていた……。

# 霊鳥の弩



聖なる山に棲まう霊鳥がいた。
神の使いとされるその鳥は、天地開闢の時から地上を見守っていると言われていた。

ひとりの狩人がいた。
十数年前、巡礼で一度聖なる山に訪れた際、ひと目霊鳥を見て魅了された。
それ以来、絶対に射止めてやろうと意気込み、山でひたすら愚直に狩りを続けた。

ある日とうとう狩人は霊鳥を追い詰めた。射かけた一矢がたまたま風に乗り、霊鳥の翼を掠めたのだ。
彼は二の矢、三の矢を放ったが、足を滑らせて崖底へ転落。
そのまま不帰の人となる。

その後、通りがかった旅人が、遺棄された弩を目撃する。
霊鳥を象った造形を見た彼は敬虔な気持ちを掻き立てられ、近くに廟を作ってこれを祀った。
「狩人の魂と霊鳥の魂が結合した神器である」と村の巫女は語り、末永く信仰の対象となったという。

# 正義の魔具



説得人A
婚姻はよいものですぞ！　共に同じ方向を目指し歩める伴侶がいることで日々の生活は豊かになるものじゃ。ほれ、一度騙されたと思って頷いてくだされ。

説得人B
確かに伴侶と不和になる可能性を払拭することはできません。ですが、風評によると婚姻者のほうが幸福を感じやすいと言われております。私は姫の為を思って……。

説得人C
どうか周囲のこともお考えください。世継ぎがいないと国全体が困窮してしまうのです。だいたい常識的に考えまして、姫という立場の者が……。

説得人P
私個人としては「結婚しない」という選択が理解できる世の中になって欲しいと願っております。私は周囲の空気に左右されず、自分の意思で選択したいですし。ですが、説得に失敗すると職を失ってしまうので、どうか……。

# 祭壇の笛



街の片隅にある教会の祭壇に立派な笛が供えられていた。
少年は聖餐式に来るたび、惚れ惚れするようなその造形にジッと見入っていた。

神父が「その笛に興味があるのかい？」と聞いたところ、少年ははにかみながら頷いた。
「では持っていくといい」神父は笑みを浮かべ、そう言った。

数年後、神父は高徳を讃えられ、枢機卿に推薦された。
そこに、高名な音楽家として大成したあの日の少年がやってきた。
音楽家は言う。「祭壇に置いてあった笛の出所について、話がある」と。

音楽家は笛を吹いて回るうち、笛の持ち主の兄から声をかけられた。彼の弟は各地を巡業中、消息を絶ったという。
音楽家は騎士団に相談し、再捜査が行われ、神父が多数の男児を監禁していた事実が暴き出された。
かくして祭壇の笛は、神父の破滅を招いたのである。

# 烈火の重槍

【長柄】れっかのじゅうそう

その槍、烈火の重槍は槍にとりついた魔神によって守護されていた。
彼は槍の力を求めてやってきた、自らの力を過信した身の程知らずな者たちを次々と燃やしつくした。
焼殺する前に、彼はその冒険者がここにやってくるまでの旅の過程を眺める趣味があった。彼ら冒険者達は皆野心に溢れ、その熱い思いを焼きつくすことで、魔神はその者の生前持っていた熱気をも吸収し、更に強力になった。

ある日のこと、槍のもとに一人の男がやってきてこれまで同様に槍を手にしたため、魔神は男を殺す炎を発した。
だが、これまでと勝手が違う事に魔神は気付いた。それだけではなく魔神は自分がどんどん力を失っていくことに気付いた。
魔神はその男の心を読んだ。

男は兵士だった。彼は別にやる気があって兵士になったわけではなかった。家でぶらぶらしていたところ親に半ば追い出され、泊まるところと食べるものを得るために兵士に志願したのだった。
軍隊でも彼の兵士としての能力は最低のもので、彼は戦場から逃げてここにさ迷いこんできたのだった。

炎の魔神は男のこれまでの人生を眺めているうちに想像以上に力を失っていたが、なんとか意地でもって男を焼き殺した。
だがその最後の力の行使によりその後は、槍を手にしようとする者達を焼き殺す事ができなくなり、その所有者に力をもたらす、普通の魔法の槍となった。
だが魔神をもっとも苛立たせたのはその事よりもむしろ、何故か自分が魔神によって焼き殺された事に気付いているのか気付いていないのかも判然としない男の魂が、その槍で魔神と同居するようになって時々話しかけてくることだった……。

# 凪の棍棒



王国騎士団の鬼教官は疑り深く陰険で、教え子たちから嫌われていた。
少しでも口答えした者は棍棒で遠慮会釈なしに殴りつけられ、歯や骨を折る者が続出していた。

鬼教官の指導について行けずに多くの脱落者が出た。
その中に性根の曲がった者たちが数名いて、教官を闇討ちして裸で広場に吊るし、大恥をかかせてやろう、と示し合わせた。

月のない夜。脱落者たちは鬼教官がしこたま酒に酔って帰るところを狙い、襲いかかった。
しかし鬼教官は腕達者で、彼らは返り討ちにされ、根棒で滅多打ちにされた。

教官はあることにハッと気づき、わんわん泣き出した。
脱落者たちは乱戦の中、教官が大事にしていた兎の人形を踏み潰していたのだ。
以来、鬼の教官は腑抜け、猛威を振るっていた根棒はおとなしい凪のようになった。

# 真ノ夜ノ黒刀
## （禍）



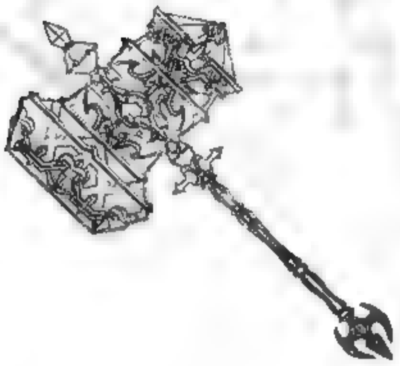
愛娘を亡くした男は愛刀を携え山に向かった。
山の上のご神体を斬れば最愛の者を生き返らせることができる、という伝説を信じて。

頂には黒泥で作られたヒトガタのご神体が、数え切れないほど存在していた。
男は手にした刀を握りしめ、雄たけびをあげて頂を埋め尽くす無数のヒトガタに斬りかかった。

黒泥のヒトガタを斬れば斬るほど、男の刀身も夜闇の黒に染まっていった。
最後のヒトガタを斬り終えると崩れた黒泥が一か所に寄り集まり最愛の娘を形作った。男は黒刀を手放し、泥で出来た娘をその胸に抱きしめた。

「次はお父さんの番」と娘は男を指さした。次の瞬間、男の手足は剥がれ、胴は割れ、その顔がベチャリ、と地面に落ちた。
黒泥に還った父を前に、娘のようなナニカはケタケタと嗤いころげた。

# 終焉の一撃
## （禍）



【打撃】しゅうえんのいちげき（まが）

その富豪は一代で財を成した人物だった。教養人であり、おごり高ぶらず、寛容の精神に富み、困っている人がいればすすんで救いの手を差し伸べた。そんな彼は誰からも深く敬愛され、尊敬を集めた。

ある日、王国騎士たちが富豪の元を訪れ、こう言った。
「他国へ逃亡していた盗賊が捕まり、こう供述した。あなたはかつて盗賊の仲間で、一緒に城の宝物庫を襲ったこともある。あいつはそれで財を成した、と言っているのですが」

富豪は朗らかに笑い、「そんな戯言を真に受けていらっしゃると？」と言った。王国騎士らは「まさか。ご報告も兼ねて話をしに来ただけです」と言い、帰っていった。
バクバク騒ぐ左胸を富豪は手で押さえつけた。過去に盗賊だったのも、城の宝を奪ったのも、すべて本当のことだったのだ。
彼はあわてて隠し戸の奥に宝をしまい込んだ。

後日、王国騎士団が抜き打ちで調査に来た。
「ご納得がいくまでお調べ下さい」と富豪は恭しく頭を下げた。
騎士たちは誰も隠し戸を発見できず、引き上げようとした。
その時、隠し戸のハンマーが自重で倒れ、ボコッと壁に穴をあけた。「あれは何です？」と騎士に問われ、富豪は顔面蒼白となった。
それはまさに、富豪を破滅に導く終焉の一撃だった——

# 鉄柵の槍
## （禍）



農夫の家に生まれたその男は体格に恵まれ、力も人一倍強かった。
狩りの最中に王が野生の虎に襲われた時、その場に居合わせた彼は見事に虎を退治してのける。
王は彼の武勇をいたく気に入り、近衛兵に抜擢。自らの寝所を護らせることに。

男は善良で正義感が強く、自分を取り立ててくれた王を敬愛していた。
だが彼もまた人間である以上、欠点があり、酒に目がなかった。
やがて抵抗勢力と戦争が始まり、彼は王の寝所の警護に当たる。
その晩、差し入れの酒に手をつけ、前後不覚に陥ってしまう。

怒号が飛び交う中、男は目を覚ます。
敵軍が夜襲を仕掛け、王の寝所へ押し寄せてきたのだ。
武器を掴もうとして、男の背筋を冷や汗が伝う。
酒を差し入れた男は敵勢力の間諜であり、彼の槍を持ち去ってしまったのである。

押し寄せてくる大軍を見て、彼は寝所を取り囲む鉄柵を鷲掴みにした。
力任せに引きちぎってぶん回し、さながら槍のごとく扱う。
そうして彼は雄々しく戦った後、全身に火矢を浴び、壮絶な戦死を遂げる。
無事に落ち延びた王は彼の死を悼み、立派な霊廟を作らせたという。

# 衝動の翼銃
## （禍）



【鬼保安官ブロンズの事件簿】
「上官は自分に甘く部下に厳しく、俺は日頃から反感を持っていた。それは認める」
取調室で被告は語った。
「だが、殺意はなかった。本当にはずみで撃ち殺してしまったんだ！」
本官は目を細め、机の向かいに座る男を観察した。
真摯な表情を見る限り、ウソを言っているようには思えなかった。

【鬼保安官ブロンズの回想】
計画的な殺人だったのか、衝動に駆られての殺人だったのか。裁判ではそこが争点になる。
そして前者の場合、量刑が一気に重くなる。
「明確な殺意、衝動……どっちだ？」
そう呟いた私は凶器の銃を握り、被告の気持ちに自分を同調させてみた。

【鬼保安官ブロンズの冒険】
証拠品保全係の男がやってきて、私を見て顔をしかめた。
「ちょっと、困りますよ。証拠品を見たいんなら僕に話を――」
破裂音。硝煙の匂いがサアッと私の顔を包んだ。
額に風穴を開けた男がドサリと倒れ、血溜まりが領域を広げていく。
何と、私ははずみで引き金を引き、彼を撃ち殺してしまったのだ。

【鬼保安官ブロンズ・最後の挨拶】
「い……いかん、この銃には人の衝動を呼び起こす何かがある！」
私は空に向けて銃を撃ち、バババババンと全弾を撃ち尽くした。
「これでやっと一安心――」言い切らないうちに撃ち上げた弾が墜落し、次々に脳天を直撃した。
私の頭は熟れすぎたメロンのごとく爆ぜ、あの世逝きとなったのだった。

# 断末魔の音
## （禍）

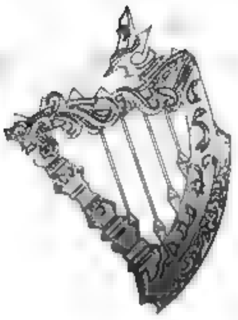
【楽器】だんまつまのおと（まが）

心を揺り動かす音楽。
体調を左右する音楽。
素晴らしい音楽はみんなそう。
でも一番すごいのは、
死をもたらす音楽。

断末魔を封じた竪琴。
弦を弾けば、封じた断末魔が鳴り響く。
焼かれて死んだ声。
内臓を抜かれて死んだ声。
酸で溶かされ死んだ声。

聞けば同じ感覚、苦しみを追体験。
断末魔の和音を響かせる。
末路はショック死か自殺。
死んだ方がマシ、そんな音。
最凶のダウナー系。

ただし二種類の弦を同時に弾くな。
一種類は聴衆と共鳴。もう一種類は誰と共鳴？
断末魔は必ず誰かと共鳴。それが絶対のルール。
聞いているのは聴衆とあとひとり。
つまりは演奏者。



# 背徳の音色

## （禍）

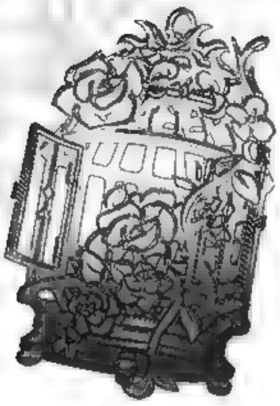


【正直者の木こり・イーライの懺悔】
オラは正直、自分の罪深さに震えてうぁ。
昨日、オラが頼んだものを女房が買ってき忘れたとか言うんで、つい手をあげちまっただ。
ヨメに手を上げるなんて…オラは最低の人間だべ。

【頑固じいさんオーシンの懺悔】
先日、ワシが途中で散歩を切り上げて部屋に戻ったところ、孫が財布から金貨をくすねておった。
激高したワシは孫を押さえつけると、尻を何度もはたいた末、ワシ自身の、何と言うかその…。
体罰のつもりが、つい劣情をぶつけてしまったのじゃ…。

【愛妻家アランの懺悔】
何かがメラメラ燃えるのを見てると、ゾクゾクします。
とにかく無性に火を点けたくなるんです。
たとえば、町外れに住んでるじいさんの家。あの藁葺き屋根、燃えやすそうだなぁって…。
神父さま、俺の中の悪魔を鎮めて下さい！

私はこの教会の神父が土産物として買い求めた、懺悔室の飾り物のハープだ。
明日は誰が背徳にまみれた懺悔をしに来てくれるのだろうか。
人の背徳を聞けば聞くほど私は甘美な音色を響かせるであろう——



# 狂花の籠
## （禍）

【魔具】きょうかのかご（まが）

わたくしを愛して
他の誰も見ることなく
わたくしだけを愛して
心も身体も全て
愛しいあなたのモノにして

叶わぬ想いは溢れるばかり
わたくしの愛を受け取れぬと言うのなら
せめてこれを持ち帰って
わたくしの心の欠片を閉じ込めた籠

今頃あなたは奥様に微笑みかけているの
幼き赤子に微笑みかけているの
わたくしの花を散らしたその手で
どこのどなたを抱いていらっしゃるの

あなたに贈った籠
眠る女の生気を吸い取り
眠る赤子の命を摘み取る毒の花
全てを失ったあなたはきっと
今度こそわたくしの愛を受け取ってくださるわ

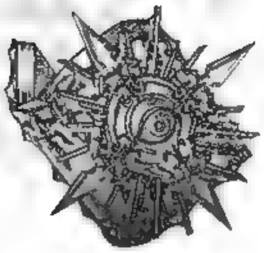
# 宵の毒薬
## （禍）

先王が崩御したあと、大臣を後見人として幼君が即位した。
大臣は国家の要職を自分の親族で固め、新王を傀儡とした政治体制を敷きはじめた。
民は重税に喘ぎ、国中で怨嗟の声が相次いだ。

専横に憤った憂国の士らが立ち上がり、大臣を討とうと画策した。
しかし大臣はあちこちに間諜を忍び込ませている他、密告を奨励していた。
大臣の暗殺計画が三度も発覚し、そのたびに関係者が処刑された。

その国随一と言われる美貌を持つ貴族の娘がいて、その父が娘を大臣に妾として差し出した。
大臣はこの娘の色香に溺れ、骨抜きにされた。
頃や良しと見た娘は父に命じられた通り、宰相に毒薬を盛って殺害した。
大臣が死ぬと同時にその政権は崩壊し、彼の一族はたちまち処刑された。

その後、大臣の悪知恵を見習って育った新王は、大臣以上の悪政を敷き始めた。
諫言した忠臣らはことごとく新王に手討ちにされてしまった。
宵闇が終わって朝が来ることを期待した人々は絶望し、毒薬を煽って死んでしまったという。



# 半眼の異書
## （禍）

【魔書】はんがんのいしょ（まが）

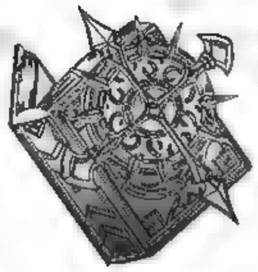
その本には様々な異界者の瞳が宿るという。
眼球を愛する性癖を持つ男は
苦心の末にその本を手に入れた。

時には無垢な天使の瞳。
時には知性を湛えた賢者の瞳。
時には淫猥な夢魔の瞳。
日毎に移り変わっていく瞳に、男は夢中になった。

しかし不満もあった。
本には重たい瞼がついており、細い隙間からでは
愛しい眼球と視線を合わせられなかったのだ。
やがて男は、力尽くで本の瞼をこじ開けた。

そして男は狂死した。
ただの人間が異界者と長く視線を合わせ、無事で済む筈もない。
こちらが見ているとき、向こうもまた見ているのだから。
本は男の死を見届けるとゆっくりと瞼を下ろした。

# 重錠の魔書
## （禍）



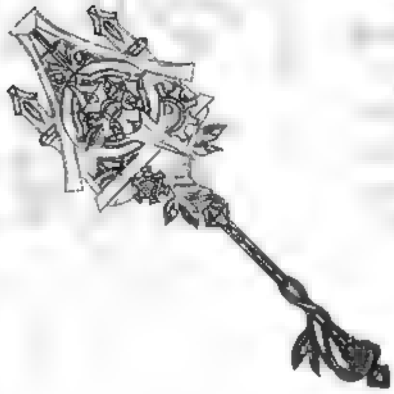


退魔師の老人は長いこと、
各地に蔓延る魔物を退治して回ってきた。
退魔の確かな腕と、決して驕らない謙虚さが
評判となり、退魔師は数多の者に感謝されてきた。

やがて病に倒れた退魔師は、弟子に一冊の本を託した。
彼が長年かけて作り上げたというその本は、
魔物の習性や弱点、生息地が事細かに記されたものだという。
本に施された厳重な錠の開け方を遺言として、
老いた退魔師は息を引き取った。

弟子は遺言通りに本を解錠し、開いた。
途端に本から様々な魔物が溢れ出て、人々を襲い始めた。
退魔師が長年かけて退治した筈の魔物達であった。
――退魔師が、退治したふりをして魔物を本に閉じ込め、
夜な夜な愛でていたことを、弟子は知っていた。

死後、魔物に再び自由を与えたいと願った退魔師が、
虚言と共に本を託したことも、弟子は知っていた。
――人々が頭から魔物に食われていく様を、
弟子は微笑んで見守り続ける。
彼もまた、魔物しか愛せない性癖の持ち主であった。



# 復活の刻杖
## （禍）



【使用上の注意・その1】
生き返らせる前に、死んだ人は生き返りたいと思っているかどうか、よく考えましょう。

【使用上の注意・その2】
亡くなった方は五体満足でしょうか？　首や手足はちゃんと繋がっていますか？
生き返った時に悲惨なことにならないか、想像力を働かせて下さい。

【使用上の注意・その3】
誰かを生き返らせた後、自分が世界の支配者になったつもりにならないでしょうか？
自分が全知全能の神になり得ないことを自覚して下さい。

【補遺】
人の死によって綺麗にまとまっていた話が「実は生きていた」で安っぽくならないか、よく考えましょう。

# 世詠の杖
## （禍）



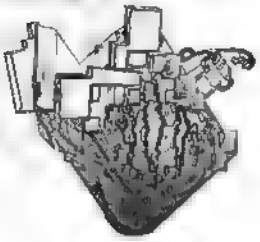
駆け出しの詩人がいた。
自分の詩に自信が持てなかった彼は、高名だった詩人に頼みこみなんとか弟子にしてもらった。
そして来る日も来る日も師匠の用事をこなしつつ、その詩を会得しようと努めた。

だが詩人は師匠のような詩を作ることはできなかった。
そこで詩人は呪術師に頼んだ。
自分の精神に、師匠の詩を深く刺してほしい、と。そうすることによって師匠の詩を完全に自分のものとすることが出来ると考えたのだった。
それがずるであると詩人は自覚していた。
だがもはや若くもなく依然として大した詩が書けなかった彼は焦っていた。
そして師匠の詩は彼の精神に突き刺さった。
師匠の詩と一体となった詩人は詩を作り、師匠ほどではないものの、その詩の評価によって名声を得るようになっていった。

時は流れ、詩人の師匠は亡くなった。
そこで詩人は、師匠の詩ではない、彼独自の詩を作ることにした。
詩人は自分が今まで師匠の真似事をしているに過ぎないということをわかっていたのだった。
だが今はもう師匠の詩がなくてもなんとかなるという自信が芽生えていた。

そこで詩人は彼に師匠の詩を突き刺した呪術師に今度は詩を抜くことを依頼した。呪術師はかつて詩人の奥深くに突き刺した師匠の詩を抜いたらどうなるかわからないと警告したが、詩人はしつこく頼み、とうとう詩は抜けた。
そしてその後、詩人は死ぬまで話すことも書くこともできなくなった。

グレーテル/
餐虎のソーサラー



# 大食ノ奇書
## （カゲウチ）

【魔書】たいしょくのきしょ（かげうち）

その少年は様々な世界を旅してきたと告げた。
話すことは出来ないようだが、
彼の目を見れば、何を言いたいのかわかった。

3人で過ごす夜の森。
兄様さえいればそれでよかったのに。
なぜだか、その少年のことは気になってしまった。

その夢のことは今ではよく思い出せない。
最後に見たのは彼の大きな口。
骨を砕く音と、臓物を食いちぎられる痛み。
――――赤く染まった月が綺麗だった。

「コレデ、7人メ……」
彼はそんな言葉を呟いていたような気がする。
不思議なことに、その瞬間だけは
兄様と同じ匂いがした。

キャラクターズ

# 腐食の蕾



どれだけ世間知らずで天真爛漫で、
無垢そのもののように見える蕾も、
開花の時を待ちながら、
心の奥底に棘を生やしているものだ。

可憐にたおやかに、或いは妖艶に、
蕾はやがて花開き、
水面下でもまた無数の棘が生い茂る。

大半の蜜蜂は大輪に惹かれて集まり、
美辞麗句を並べて華を愛で、
甘い蜜にありつこうとするものだが、
稀に私のように、
膨れ上がった棘こそを愛しく思う蜜蜂もいる。

増長した棘はその鋭い切っ先で、
華自身を刺し、傷つけ、枯れさせる。
私は萎びきった華に近づき、
歓喜に打ち震えながらそっと毒を囁くのである。
「性根ブスのくせに一時でもチヤホヤされて良かったな」

# 風光の大剣



【未完のルポ・断章①】
その仕置き人は大剣を手に白昼堂々、悪徳商会の大ボスの屋敷へ討ち入りをかけたらしい。
腕利きの用心棒が多数詰めており、彼らがこぞって迎え撃ったにも関わらず、全員が全員、一刀のもとに斬殺された。

【未完のルポ・断章②】
第一の事件から数ヶ月後、第二の事件が発生した。
地方のその街は郊外に砦を構える匪賊に脅され、みかじめ料を収めていた。
ある日、租税を渡しに行った男がその現場を発見した。
匪賊どもは全員が全員、一刀のもとに斬殺されていた。

【未完のルポ・断章③】
仕置き人の足取りを追ううち、私は内面の変化に気づいた。
以前よりも思慮深くなり、人と群れる事を好まなくなった。時間が空けば舞台を観劇したり、画廊や美術展などに足を運ぶようになった。

【未完のルポ・断章④】
そう、仕置き人が作り出した光景を目の当たりにし続けた私は、彼が現出する殺しの美学に魅せられてしまったのだ。
私は彼の芸術の崇拝者として、みずからも大剣を手にした。
いざ、風光なる眺めを創出に征こう——

# 王国兵の飾り銃

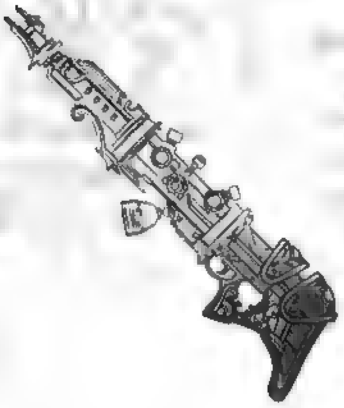
【射出】おうこくへいのかざりじゅう

その王国では、兵士として採用された者すべてに銃が下賜されるのが建国よりの伝統だった。
隊列を作って目抜き通りを行進する王国兵の勇姿を見たその少年は、強い憧れを抱いた。

成長した彼は厳しい訓練に耐え抜き、王国兵の一員となった。
銃を与えられた彼は失望した。それは実銃ではなく飾り銃だったのだ。
上官いわく、王の行き過ぎた贅沢のために国庫が窮乏しているのだという。

彼は気を取り直して職務に励み、次々にめざましい功績を立てて出世した。
が、その間にも国は傾いていった。
賄賂や汚職がはびこり、政治は腐敗し、人心は荒廃した。
たまりかねた彼は銃を手に王の元へ乗り込み、心を入れ替えるよう直訴した。

王はそれを飾り銃と思い込み、薄ら笑いで応じた。
次の瞬間、そばで花瓶が割れ砕けたのを見て、王は真っ青になった。
銃を構え直した彼は言った。「いつまでも飾り銃を携行するほど日和った兵士とばかり思わないで頂きたい」と。
――肝を冷やした王はまともな政治を敷き、国は多少持ち直す事となる。



# 磁力の銃

【射出】じりょくのじゅう

ママ　とってもコワイ　おかおだよ。
どうしたの　ママ。
そんなに　おこらないで　ママ。

ママ　ないてるの？
おなかが　シクシクするの？
おまじないしてあげるね　ママ。
イタイのイタイの　とんでいけ。

これは　パパがくれたんだよ。
ママにむけて　レバーを　ひきなさいって。
そうしたら　パパはすっごく　うれしいんだって。
きれいなおねえさんが　おうちに　くるんだよ。

しずかになったね　ママ。
イタイの　とんでいったんだね。
おまじない　きいて　よかったね。
イイコイイコって　たくさんほめて　ママ。

# 膨張の剣



其の剣、切れ味鋭く、いかなる敵をも打ち払う。
腰に帯びる者の勇気を膨張させり。

其の剣、決して折れず、並み居る武具を寄せ付けぬ。
それを手に戦場に臨む者の争心を膨張させり。

其の剣、いかなる場でも光り輝き、己を声高に主張す。
其を所有する者の嫉妬を膨張させり。

其の剣、負の感情を好み、剣身をカタカタと震わせる。
ひとたび目の当たりにした者の殺意を膨張させり。
膨張の剣ある限り、血で血を洗う争いは絶えぬであろう。

# 氷国の軍記

厳寒と根雪に閉ざされたその氷国は度重なる異民族の侵攻に晒され、争いが絶えなかったという。
勇猛果敢で鳴る王は常に騎士たちを陣頭で指揮し、戦いの矢面に立ったと語り継がれている。

異民族が近隣の部族と連合軍を結成し、国境を侵犯した。
王は彼らを山の裾野へおびき寄せ、雪崩を誘発。
恐慌を来す大軍勢に王と騎士団は奇襲を仕掛け、その過半数を氷の湖に突き落としたのである。

異民族は後続部隊の到着と同時に反撃に出て、兵力で劣る王国軍は徐々に押され始めた。
しかも別働隊に補給線を断つ形で陣取られてしまい、一気に窮地に陥る。
王や騎士は雪を食べて飢えを凌ぎ、戦い続けた。

一進一退の攻防が続くうち、雪が溶け、寒さが和らいだ。
そう——氷に閉ざされたこの国に、春が訪れたのである。
同時に両軍は兵を退く。
儚く短い春が過ぎれば両軍は再び激突し、鎬を削り合うであろう。

# 探究の大剣

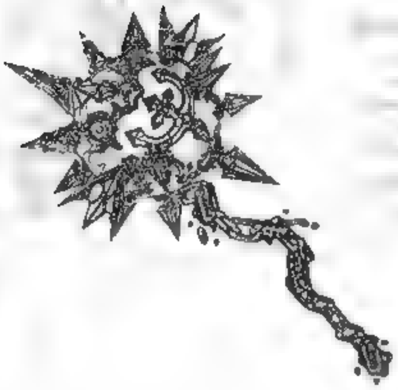


さぁさぁヨッテらっしゃい、見てらっしゃい！
買って益無し損は有り、珍妙奇天烈な研究所、
ドロシー工房へようこそ！

おやおや～、貴方は随分お目が高いですね～。
「Lvを上げて物理で殴る」が定説のファンタジー世界にいてもなお、武器のほうに目をつけるとは！

この二振りの武器の由来はと言いますと、昨晩気まぐれに「最高の技術で創り上げた武器」と「最高の素材で創り出した武器」、果たしてどちらが優秀な力を持つ武器なのか、検証したくなったことが発端です！

いやいや、貴方は実に運がいい！
さぁ！　結果を特等席でご覧あれ！
イッツ、ショーーーータイム！！



人魚姫/
クラッシャー

# 悲哀の鉄球

【打撃】ひあいのてっきゅう

あら？　フグさんごきげんよう。
どうしたのですか？　なんだかとても悲しそう。

取り戻したいですか？　貴方の家族を。
大丈夫、今ならまだ消化されていないはずです。

よかったですね。間に合って。
ですが貴方の体は一生武器のままです。
どう？　悲しい？

でも……足りない。足りない。足りない。足りない。
タリナイ。タリナイ。タリナイ。全然タリナイ。
次ハ——

# 来世の崩壊



あるところに欲が一切ないという評判の男がいた。彼は常に、自分は最小限のものを食べ、得たもののほとんどを他人に施した。そして毎日、可能な限りの精神修養を怠らず、ありとあらゆる善行を行った。人々は不思議がった。何故男がそうまでして自らの欲を満たすことなく他人のために尽くせるのかと。

実は男は、若い頃から自分の人生に絶望していた。男には人生の先が見えており、それはどう頑張っても大したものになることはなさそうだった。そこで男は賭けることにした。今のこの人生を良くすれば、来世はきっと良くなるはずと思って、一生をかけて来世をより良いものにしようと試みていたのだった。

そしてついに男の寿命がやってきた。死の間際、男は光に包まれた。そして光の中には男を次の人生へと導く使者がいた。男は期待しながら尋ねた。
「教えてください。私の次の人生はより素晴らしいものになるでしょうか」
使者は答えた。「お前の行いは報われる。お前には次の人の生などない。人間などという自己中心的な存在の生は。お前はもっとより善き生を迎える。お前は木になるのだ。小鳥達そして森の動物達に安らぎを与える一本の木に」

そして男の前から光が消えた。全ては夢だった。男の寿命はまだ先の事だったのだ。男は起きると家の中にあったありとあらゆる賢者が書いた本を薪にくべて燃やしてしまった。そして酒と、ありとあらゆる身体に悪い食べ物を買ってきて、今までの禁欲的だった人生を取り戻すように、毎日暴飲暴食に耽った。人に施すこともその日以来、一切なくなった。

# 零度の血脈



戦いすんで日が暮れて、戦災孤児となった少年がいた。
近くの教会から来た人に食べ物を分けてもらうも、他の孤児にあえなく分捕られてしまう。
一連の出来事を見ていた男がいて、「付いてくるか」と少年に声を掛けた。

男は凄腕で知られた暗殺者であり、少年を弟子の一人とした。
「常に非情たれ、それが零度の血脈の掟だ」と彼は弟子たちに言い、「自分を殺すことができた者に俺の後を継がせる」とも語っていた。

拾われた少年はいろいろな暗器の扱いを仕込まれたが、そのどれにも適性を見せなかった。
そんな体たらくを見ても師匠は我慢強く指導を続けた。
彼は少年のどこかに非凡な素質を感じてならなかったのである。

少年は隙を見せた師匠からボウガンを奪い、射殺した。
「非情になることを忘れたあなたに零度の血脈たる資格はない」と言い捨て、少年は姿をくらました。
後年、ボウガンを射放ち要人を暗殺して廻った男の記録が各地に残ることとなる。

# 緑の凪刃

【刀剣】みどりのなぎやいば

とある子供が口減らしのために森に棄てられて餓死し、そのまま森の精霊となった。
その精霊は大変に気難しく、森に踏み込もうとする人間を容赦なく真空の刃で切り刻んだ。

国王の私生児を産んだひとりの女性が赤ん坊を取り上げられそうになり、赤子を抱いたまま森へ逃げ込んだ。
大の人嫌いのはずの精霊はその母子にかつての自分を重ね、雨露を凌げる場を提供した。

精霊が赤子の面倒を見ている間、母が森で果物を集めた。そこに王妃が遣わした兵士たちが現れ、母を捕らえようとした。
威嚇のために撃たれた矢が彼女に当たり、彼女は帰らぬ人となってしまう。

十数年後、赤子は立派に成長し、精霊から贈られた一振りの剣を手に母の仇を討つ。王に即位した彼は酒場の給仕をしていた娘を嫁にする。
だが周囲の圧力で由緒正しい血筋の側室を貰い受け、正室と子供は側室に殺されかかり、精霊の森へ逃げ込む。
——かくして、歴史は繰り返す。

『赤ずきん/』
『ハーフナイトメア』

# 暴力の黒斧

【打撃】ぼうりょくのこくふ

知ってる？
殴られて、殴られて、殴られ続けると痛みを感じなくなるんです。

ボクは知ってます。
むかし、ホゴしてくれた人が教えてくれました。

その人はとても怖くて、一度もあそんでくれなかったけど、一度だけ頭をなでてくれました。

くらくて、せまい場所に閉じ込められると、
その時のことを思い出してしまいます。
もう一度、あいたかったなぁ……

グレーテル

# 虚妄のコウガイ



数多の代償ヲ支払い、貴方の悲願は
成就スル。
孤独ナ世界で貴方は何を叫ぶのデ
ショウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
虚妄が創り出した偽りの世界ヲ
愛するコトが出来るのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ慟哭ヲ、
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
魔女。魔女。魔女。魔女。魔女。魔女。
魔女。魔女。魔女。魔女。魔女。魔女。
魔女。魔女。

――波濤の如く押し寄せる影の群れ。
無限にわき続けるソレは私達兄妹の
心の闇をかたどったモノ。
心をかき乱すその姿に
足は竦み、呼吸が早くなる……

忌まわしい過去を振り払うように、
頭をかきむしる。
そんな私を案じるように、
凛とした声が鼓膜を揺さぶった……
「二人なら怖いものなどない。そうだろ？」

「もう離れ離れは嫌ですよ。兄様」
笑う少女の頬が赤く染まったのは
彼女を照らす禍月のせいか、返り血
のせいか。

最早、二人には互いの姿しか映らない。
それ以外のことは等しく無価値。
この空間が偽りで満ちていたとしても、
些末な問題だ。

例えこの戦いの果てにあるものが
終焉だとしても、突き進む。
それだけが確かな事だった。

Case2
やがて兄妹は、赤い月に剣を突き立
てた――

次の瞬間。世界が黒く溶けた。
円環の呪いを断ち切るために
抗い続けた終着点。
それは黒き闇の奔流だった。

「兄様、兄様、兄様……
私を一人にしないで……」

彼女が祈るように絞り出した言葉だ
けが、
暗闇に漂い続けていた。

# 睡眠のマナコ



幾億の犠牲の上に立ち、キミの悲願は成就スル。
長い長い夢の辿りつく先ハ、
果たしてどの様な世界なのデショウか。
果たしてよい夢は見れるのデしょうカ？
永久に続く悪夢にウナサレ、苦シムのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ慟哭ヲ、
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
体から溢れる血液は静かに
でも、確実に私の体力を奪う。
瞼がとっても重たい。
本当はこのまま眠ってしまいたい。

……でも、決めたんだ。
頬を思いっきりつねり、
ゆっくりゆっくり、立ち上がる——

「私、ようやくわかったの！
沢山の人と出会って、一緒に眠って……。
本当の願いに気づいたの。
だから悪いけど、眠るのは貴方達のほうよ。
いくよ！　騎士たち！
いばらの棘を貸してあげる！！」

Case2
「そっか……私がずっと眠たかったのは、二人分必要だったんだ」

一つ知る度、一つ失う。
その繰り返しの中を彷徨い続け
私はようやく辿りついた。

そっか……
この世界はきっとそうやって出来ているんだ。

Case3
いつからだろう。
ねむるたび　ねむるたび。
きこえてくる　あのこえ。

そのこたえが　あと　すこし　で。

まっていて。あなたの　ぎまんの
とびらに

いま　はいるよ。

# 傲慢ノ禍剣
## （シンウチ）

無彩色の怒りが、心に溶ける。

それは暁の空、禍の咎。

七つの大罪が集いし時。

輪廻の螺旋は花開く。

# 剣に宿りし者

剣を守護する精霊よ
力を貸しておくれ
私をいじめたアイツを殺してやろう

剣を司る神よ
祈りを聞き届けたまえ
野蛮な隣村の連中を一掃してやろう

剣に宿った悪魔よ
願いを叶えてくれないか
腐敗したこの国を滅ぼしてやろう

剣を手にしたオマエ
私の遺志を継いでくれるね
さあ、共に世界を滅ぼそうじゃないか

# 嫉妬ノ猟銃
## （カゲウチ）

その幼い少女は無邪気に笑い、アリスと名乗った。
——透明な笑顔だと思った。
そしてそこには、自分の幻影を見るような
既視感があった。

あの人が私以外の誰かに恋をする瞬間を見てから
私の心は濁ってしまった。
彼に見つからないように、隠せば隠す程、
その淀みはより、醜く汚い感情を私にもたらした。

もし、彼が望むのなら、永遠に幼いままでいよう。
叶わぬ願いと知りつつも、私は頑張った。
なのに、その無垢なアリスは
なんの努力をしなくても……

少女の叫びで、目を覚ます。
それがどちらの声なのかはわからない。
ただ、愚かである事と愛する想いが
似ているということを思い知らされた夢だった。

# 賭博師の短剣



「所長、あんた、家族はいるか？」「妻が一人」「過去形か？」「よくわかったな」「目を見ればわかる。何があった？　ゲームの余興だ。一つ頼む」

「愛想をつかされたんだ。当時の私は転職を繰り返していてね」「なぜ？」「時間を守るのが下手でな。何度注意されても遅刻し、そして首を言い渡された」「同じように妻からも首を切られたわけか」「……彼女は時間に几帳面だったからな」

「今も帰りを待ってるってか？」「いや、もう死んだ。心を病んでな」「そりゃ、お気の毒に」「ある日手紙が来たんだ。そこには几帳面な彼女らしく死の日時が丁寧に記されていた。そしてその予告通りの時刻に彼女は首を括った。私は神を憎んだよ」

「ハートのエース、俺の勝ちだ。では刑務に戻る」「おい、勝ち逃げか？」「なんとでもいえ」

「なあ刑務官。思い出したら顔が見たくなってきた。幽霊は深夜に現れると聞くが、であるならば、深夜3時に西の収容棟で妻と会えないだろうか。あそこなら誰にも邪魔されない」

# 賭博師の銃弓



「あんた、好きな食いもんはあるか？」「どうした賭博師。またイカサマをする気か？」「ただの世間話だよ。どうなんだ。あるのか？」「……スープだ」「スープ？」「妻の作るスープだ」

「そのスープは塩分バランスが完璧だったんだ。彼女の舌は天然の塩分計だった。だが最悪なことに、妻は感冒をこじらせて死んでしまってね。私は神を憎んだよ。死後、妻のスープを恋しんだ私はその味を求め店をめぐったが、どこも再現などできなかった」

「私は気付いた。それを再現するには妻を使うしかないと。実は私は妻の死体を棺に入れずに塩漬けにしていてね。ある日、私は死体の一部を切り取ってスープに浸した。するとあの味が帰ってきたんだ。今では妻は半分に減ってしまったが、後5年はそのスープで私の舌を満たしてくれるだろう」

「出るのか？」「ああ、あんたもだいぶできあがってきたようだしな」「まだ酔ってなど……」「酔ったあんたの特徴を教えてやろうか、多弁になる」

「なぁ刑務官。所内の飯は好きか？　私は嫌いだ。ここのスープは塩辛すぎる。飲めば飲むほど老朽化した私の心の鉄枠は錆びてしまうんだよ」

# 賭博師の槍

【長柄】とばくしのやり

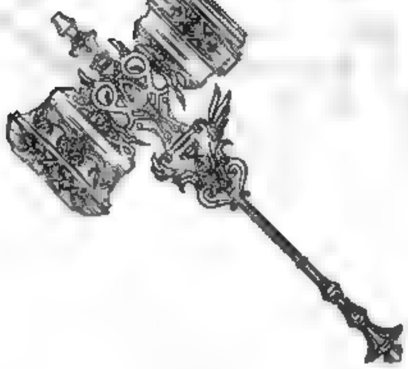
「刑務所の所長は暇なのか？」「なぜそう思う？」「毎度、囚人の俺を呼んでテーブルゲームに興じていれば、誰だってそう思うだろ」「刑務にいそしむよりは楽しかろう？　それ、フォーカード」

「私は若い頃、船乗りだった」「急にどうした？」「ただの昔話だよ。その頃はな、鯨を取っていたんだ」「捕鯨業か」「そうだ。村では伝統的な仕事だった。銛一本で、船から鯨の身体に飛び込んでいったよ」

「ところがある日、戦争が起こった。海は毒物に犯され、鯨は死滅した」「だから船乗りをやめたんだな」「そうだ。異なる神を持つ国同士が巻き起こした戦争が私の職を奪ったんだ。私は神を憎んだよ」

「祖国は敵国に併合された。その後、どうなったと思う？」「さあな」「一つの国になった後、宗旨替えしたんだ。今では奴らが祭る神は鯨だ。海の鯨はもう一匹も残っていないのにな」

「なあ刑務官。心が荒んだ時は船に乗ってどこかへ行きたくはならないか？」



# 賭博師の槌



「波の音がうるせえな」「ここは島だ。波が聞こえないほうがどうかしている」「それに床からも奇妙な音がする。海の波とは違う、水が強く流れる音だ」「知らなかったのか？　地下には水路が通っているんだ」

「水路といえば……なあ、貴様はあの戦争を覚えているか？」「もしかして、あの戦場にいたのか？」「ああ。戦況が悪化すると敵兵を避けて地下水路に隠れ潜んだんだ」「それで？」「神の声を聞いた」

「水路には民間人が隠れていてな。赤ん坊もいた。泣き止ますことができなければ殺される」「まさか、あんたが？」「いや、私ではない。神の声がやれと命じた。だから私は赤子を……私は神を憎んだよ」

「悪い、今日はもう戻る」「ああ、刑務に励め。波の音も水路の音も気にするな。じきに慣れるさ」

「刑務官。重い水をかき分けてでも何かから逃げたくなった経験はあるか？」

# 賭博師の聖杖



「ドボンだな、賭博師」「けっ、ベットのないゲームなんて身が入るか」「悔しいか？　泣きたいなら家に帰ってママに泣きつけ」「俺をこの錆びついた建物からだしてくれたらな」「古い建物で悪かったな」

「なあ所長。お前の母親はどういう人間だったんだ？」「歯磨き粉と毛布。母のことを思い出すときに連想されるのはその二つだ」「どういう意味だよ」「彼女は潔癖でな。歯磨きが嫌いだった幼少の私を捕まえては、歯磨き粉をまぶし、狂ったようにゴシゴシとやり続けた」

「また母は敬虔な神の信徒だったから、私はあることを禁止されていた。それは禁欲を重んじる神への冒涜と言われてな。私がそれをすると母はいつも私を折檻した」「どうやって？」「毛布をほぐして紡いだ糸を歯肉にあて、擦りつづけたんだ。乳歯が取れるまでな。私は神を憎んだよ」

「母が死んだ日、枕もとで母が信じた神を罵りその死に顔に汚物を吐いてやった」「……」

「なあ刑務官……たまに歯が痛むんだ。あの頃を思い出してな。その度に私は、痛む歯をあの時と同じように、毛布の糸で切り落としたくなってくるよ」

# 賭博師の笛



「所長が昼間から酒かよ」「貴様とのポーカーに飽きてしまってな。酒でも飲まんとやってられん」「俺は刑務所生活そのものに飽きてるが」「そういうな。ここも中々楽しいぞ。興味深い囚人がときおり現れるしな。私が出会った中では例えば……」

「そいつは死刑囚だったのだが、とんだ大嘘つきでな。母は処女で自分を生んだとか、国に6千の恋人を残しているだとか、でたらめを言っていた。だが奴の嘘を他の囚人どもは好んで聞いていた。嘘だとわかっていながらも、楽しんでいたんだ」

「奴は死ぬまで変わらなかった。死刑台の上でも奴は笑顔を絶やさず私にこう言ったよ。『僕は勝ったぞ』。囚人から笑顔を奪うのが我々の仕事だ。奴はそれに抗ったのだ。くだらない嘘で囚人どもを笑わせることによって」

「饒舌になってしまったな」「酒を飲んだあんたはいつもそんな感じだ」「今日はお開きにするか」

「所長」「なんだ、刑務官」「嘘といえば……貴方は神を憎んでうっしゃるのですか？」「なぜ？」「所長が自身の身の上話を語る時、そこに神への憎しみを表明した場合、その話は全て嘘だという噂があるのですが」

# 賭博師の書



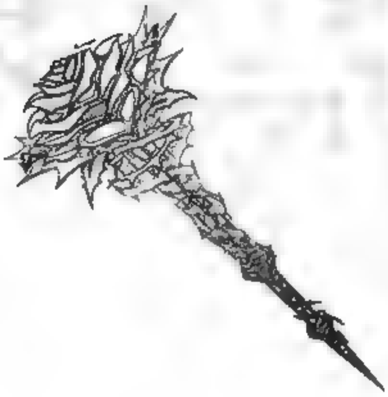
「入室マナーを弁えろ」「黙れ、殺すぞ！　俺をはめやがって……」「ここでの会話は刑務官により残らず記録される。皆まで言わせるな。座れ」「俺は、潔白だ」「まずは私の言葉に耳を傾けろ」

「貴様、賭博師だったな。私の古い友人にも賭博師がいる。彼は私と同じ赤目のゴスペル人だった。賭場で負けた夜はそいつと路上で酒を飲んで霊歌を口ずさんでいたよ。霊歌はゴスペル人の歌謡でな。かつて貴族の奴隷だった、我らの魂の歌だ」

「深い河を越えて」「……さあ行こう」「お前も霊歌を歌えるのか」「ああ」「なら今はそれだけ歌っていろ。なに、悪いようにはしないさ。お前は私の友人に似ているからな」「……案外、その友人はあんたのすぐそばにいるかもな」「……また近い内に呼ぶ。賭場から足を洗ったとはいえ私はテーブルゲームが好きだ。対戦相手がほしい。お前ならうってつけだ」

「ああ、そうだ」「なんだ？」「お前ではない。私はこの刑務官に話しかけている」

「霊歌には裏の意味がある。『深い河を超えて』は『東へ逃げろ』。当時西部は奴隷制が厳しかったからな。言葉を表面でとらえるな。裏の意味を読み取るのだよ」「ゴスペル人の知恵ですね。そういえば所長……」「なんだ？」「このゴスペル人は所長のお知り合いだという噂があるのですが」「いや、ここでは初めて見る顔だな」



# 睡眠の杖

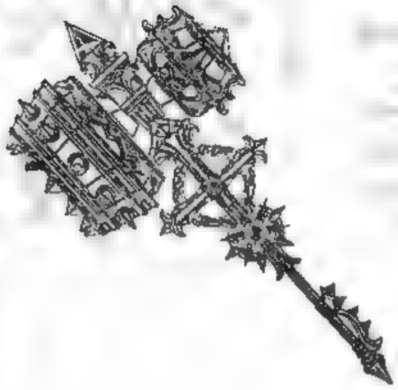


知らないから怖い、わからないから怖い。
だから人は皆、知らないものを遠ざけて恐れた。

とある時代では病気を恐れ、悪魔を創りだした。
またある時代では星を恐れ、神を創りだした。

ひとはみんな、知らないことを恐れる。
だから自分と違った人を迫害する。
――そっか、わかってもらえばいいんだ。

「みんな、みんな眠たくなーれ」
私がどれだけ眠たいか、皆にわからせてあげる。
そうしたら眠りの邪魔をする人はいなくなるよね？



# 浄化の重撃

【打撃】じょうかのじゅうげき

教祖様はそれはそれは美しく清らかで無垢な御方であります。
そのお言葉は慈愛に満ちながらも時に厳しく
わたくし達は滂沱の涙を流し、その尊きお姿を拝むのです。

教祖様は稀に、見目麗しい信者を閨に招きます。
あの御方は俗世の穢れを一身に引き受け浄化できる、
この世で唯一の素晴らしき御方です。
それでも時を重ねる毎に、内に澱みが溜まるので
信者の助力でその澱みを打ち消しているのだといいます。

閨に招かれた信者は教祖様の偉大なお力によって
極楽を垣間見、その瞬間に澱みを教祖様より託されます。
そして教祖様はお力を具現化した神器を持って
信者に宿した澱みを浄化するのです。
その衝撃は凄まじく、大半の信者はそこで命を落とします。

しかし、生還した信者は教祖様のお側仕えを許されるのです。
わたくしは同性ですから閨に招かれることはないでしょうが
叶うことならあの御方の澱みを引き受け浄化されたい。
わたくしの穢れた体液を浴びたあの御方が
どれほど美しいか、それを思うと夜も眠れません。

# 魔眼の射手

【射出】まがんのしゃしゅ

迷宮で見つけた一品です。
高名な鑑定士に鑑定を依頼したところ、
これには必中の効果があるとのことでした。
本当ならば凄いことです。
売却はしないでおこうかと思います。

鑑定士によれば、この弓はある魔物の遺骸を
利用して作られたらしいです。
製法は既に失われていて、希少価値が高いとのこと。
中央の眼球が、必中の魔法の起点だそうです。
次は実際に使用して、レビューします！

迷宮で試し撃ちしました。
凄いです！　距離があっても、障害物があっても
敵が見えて、しかも撃ったら外れない！
急所に当たるから、威力もバッチリです。
もう文句なしの星５のレビューですよ！

追加のレビューです。この弓の詳細がわかりました。
弓の目、あれはかつて弓聖と呼ばれた獣人の眼球なんです。
それをえぐり出して使うのに代償が必要でした。
視力がどんどん落ちているんです。弓は撃てるのに……。
……というわけで、評価は星をふたつ下げます。

# 時を司る者



全ての人間に平等に訪れるものは
この世に生まれ落ちる「誕生」の瞬間、
唐突に、或いは安らかにやって来る「死」の瞬間、
そして「時」の流れのみである。

神は子を成し、「誕生」を長男に、
「死」を三男に、「時」を次男に司るよう命じた。
三兄弟はこれを承諾し、長男は天界にて
産まれゆく生命を祝福し、三男は地界にて
終わりゆく生命を迎えることを勤めとした。

次男は地上にて、時の流れがあまねく者達に
平等に配られるよう注意を払わねばならなかった。
上から下へと流れ落ちる砂時計の砂が詰まらぬよう、
人間の数だけある砂時計を確認し続けることが
時を司る者の定めであった。

やがて限界を感じた次男は、半数の砂時計を叩き壊した。
同時に半数の人間が地上で理不尽で唐突な死を迎えたが、
次男は砂時計の砂が詰まらぬよう見張る勤めを
果たし続けたので、神は裁きを下さなかった。
誕生と死と時の流れのみが、人間には平等なのである。

# 白の約定

何より近くに居る筈なのに、あの人に伸ばせる手はもうない。
どこで間違ったのだろうか。その言葉も、音にならない。

何よ　近くに居る筈ロココ　あの人タ伸ばせるリジもうない。ど。ルナ違ったのだろうか。ノの言葉も、音にならなンエイエ

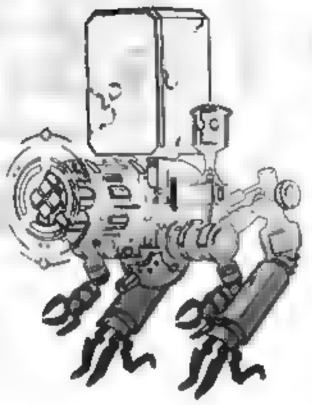
マイ　ハくに居る　ロココ　あの人タ伸ばウアリジマ　クカフど。ルナ違トツトヒろうか。ノの言葉ルレカワならなンエイエ

マイ　ハ　ラレア　ロココ　ノ　ツタフ　ウアリジマ　クカフ　。ルナ　トツトヒ　イナ　ノトコ　ルレカワ　ニ　ンエイエ





©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.



# ポッド042

【射出】ぽっどぜろよんに

「当機は随行支援ユニット『ポッド042』」
小さな箱型の機械が、無機質な声で話しかけてくる。
宙に浮かぶポッドに、私は事務的な応答をする。
戦場で役立つ情報以外に、言葉は必要ない。

「推奨：敵機械生命体の速やかな破壊」
ポッドから放たれる弾丸が、易々と敵の装甲を貫く。
その射撃には一片の迷いもなく、無慈悲なように見える。
もっとも、彼に「慈悲」という感情があれば、の話だが。

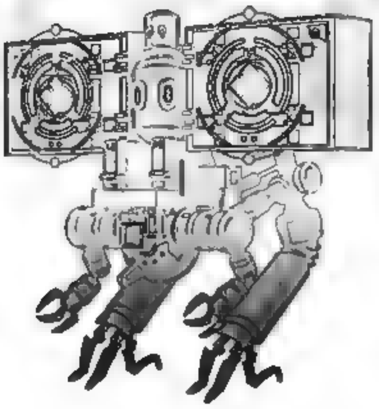
「敵の破壊を確認。次の目的地をマップにマーク」
過酷な戦闘の余韻のなか、ポッドの冷静な声が耳に届く。
私の背後を護ったときの傷が、ポッドの側面に残っている。
「何の為に傷つくのか」……私はその意味を考えていた。

「報告：感謝」
暖かな木漏れ日の下、ふと、ポッドを軽く撫でてみた。
返ってきたのは、いつもと変わらない無機質な声。
心なしか嬉しそうだったのは、きっと私の気のせいだろう。

ニーアオートマタ

©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

# ポッド153



ポッド153
「報告：商業施設の廃墟にて過去の文化財を発見」
ポッド042
「推奨：文化財から得られる人類の情報の収集」
ポッド153
「了解：この文化財の構造の解析を行う」
「解析完了、この文化財に関するデータを検索」
「汎用ＯＳを搭載した小型通信端末」
「通称『スマートフォン』と推測」
ポッド042
「提案：スマートフォンの修復」

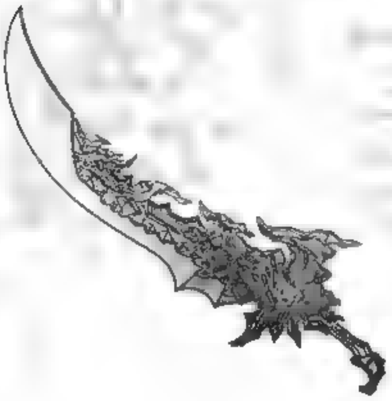
ポッド153
「報告：修復完了」
「メモリー内に保存されたデータを発見」
「データの再構成を試行……」
「データの再構成完了」
「メモリー内に複数のアプリケーションを確認」
ポッド042
「要請：アプリケーションの情報の開示」

ポッド153
「報告：人類が制作したソーシャルゲーム」
「ガチャと呼ばれる課金システムを実装」
「莫大な利益を生み出していた、との報告がある」
ポッド042
「提案：アプリケーション起動」
ポッド153
「了解」
「『シノアリス』起動」

ポッド153
「警告：ヨクボウのダウンロードが進行中」
ギシン
「アレアレアレ……」
ポッド042
「疑問：ライブラリという概念」
アンキ
「私達ヲ呼び出しテしまってイインデスカ？」
ギシン
「世界観ダイジョウブですか？」
アンキ
「ナイトメアになってしまうノデスカ？」
ギシン
「シカシ戦う皆様は大歓迎イタシマス！」
「ヨウこそ、最悪の世界へ」



©2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.



人魚姫／
傲獅のブレイカー

# 傲慢ノ赤剣
## （カゲウチ）

【刀剣】ごうまんのせきけん（かげうち）

その少女は、頬を赤らめながら。でも、悲しげに。
想い人との思い出を語りました。
その姿に過去の自分を重ねるようになったのは、
最早必然だったのでしょう。

「これは、夢なのかしら？」
日を追う毎に、彼女と自分の過去との重なりは、偶然で片付けることができない程、増えていきました。

「夢、ならばいっそのこと……」
傲慢なことにも私は王子を寝取った女を殺し、少女の未来を書き換えてみようと思い立ったのです。

「ふふ、ふふふ」
その声の理由は愉悦か、懊悩か？
――恍惚の表情を湛え覚醒した彼女の隣で、
　　　赤き獣がゴウと唸った。

# 悪業の斧



この世で最も因果な商売は、金貸しだ。
この世で最も元手のかからない商売は、体を売ることだ。
高利貸しと娼館経営を兼ねてる俺は言うなりゃ悪徳の王者さ。
返済に困った債務者かその家族に体を売らせりゃ、金を取りっぱぐれる心配もねえしな。

器量とあっちの具合がいい女がいて、俺はそいつを女房にした。
ある日、俺は体の下半分が動かなくなり、ベッドから起き上がれなくなった。
すると女房は白昼堂々、間男を家に引き込み、おっぱじめるようになった。

ある日、酔った女房と間男が入ってきて、俺の目の前でおっぱじめた。
怒りに顔を歪める俺を見て、女房は笑った。
「いいざまだね、あんたの食事に毒を少しずつ混ぜた甲斐があったってもんだよ！」
こいつらの頭を叩き潰してやりたかったが、下半身がぴくりとも動かず、俺は歯噛みした。

斧を持った大男が現れ、女房と間男の頭を叩き潰した。
「覚えてるか、俺はあんたから小銭を借りたことがある。ずっとあんたの役に立ちたかった。恩を返せたか？」
喉を震わせるばかりの俺をよそに、男は悪業の斧を打ち捨て、官憲の縄目についたのだった。

# 双頭の杖



あるところに男女がいた。女は宮廷闘争に巻き込まれ夫を亡くして以来一人で国を治めていた王妃。男は諜報部の人間だった。二人は共に心の中で、理想の愛を追い求めていた。

そして運命により二人が出会った。殺すものと、殺されるものとして。だが無意識のうちにお互いが求めているものが同じである事を感じとったのか、愛しあうようになった。

男がなかなか王妃を殺そうとしないことを諜報部の上司に咎められた。
そのことを知った王妃は、わざと男に刺し殺されるように仕向けた。
男は、王妃が死んでから、彼女の愛が真実だった事に気付いた。
そして自らも自死した。

かくしてたまたま巡り会った二人が死んだ。
二人は、生まれた時は二つの価値観を持った二つの頭だったが、死ぬ時にその心は同体となったのだった……。

# 闇に響く声



忘れられた場所。
置き去りにされたものたち。
暗闇の中で響く捨てられたものたちの声。

かつては誰かにとって大事だったものたち。その頃が忘れられず言葉を発するのか。聞くものの存否は定かですらない中、暗闇の中で誰に向けてともしれず囁かれる声たち。

かつての主との対話を反芻するかのように。全ての、人生を積極的に前に進めている者から忘れ去られた場所で。

いつか彼らが疲れはてうちひしがれて、再びここに帰ってくる事を夢見て。
今日も囁き続ける……。

# 被虐の意思

【祈祷】ひぎゃくのいし

【古文】
嘆きつつ　一人寝る夜の　明くる間は
　いかに久しき　ものとかは知る

【歌意】
貴方が訪れぬことを嘆きながら、一人寝る夜が明けるまでの間がどれ程長いか貴方はご存じでしょうか。いいえ、おわかりではないでしょう。

【解説】
この歌は夫である藤原兼家へ宛てた恋歌です。出典の蜻蛉日記の中には、夫に次々とできる妻妾について数多く記されているため、夫へ宛てた恨み言ととらえる説もありますが、その真意はわかっておりません。

【感想】
——私にも、いつか欠けたことを惜しむような殿方が現れるのでしょうか？
私の渇きが満たされることがあるのでしょうか？

ピノキオ/
クレリック

# 依存の杖

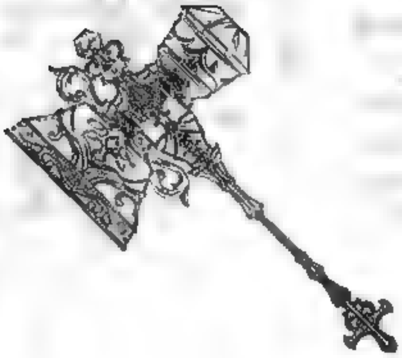
【祈祷】いぞんのつえ

この男の子ばかりの学び舎は僕にとっての天国だ。
皆が僕に次にするべき行動を示してくれる。

依頼されるがままに、学友を殺し続ける——
そうする内、僕は影の有名人になっていたようだ。
今日も僕の元には物騒な依頼が絶えない。

その依頼主は傷だらけだった。きっと僕も杖がなかったら、こうなっていたのだと思うと彼がとても気の毒に思えた。だから僕はそのおぞましい依頼を承諾することにした。

逃ゲテンジャネエヨ、クソ野郎！
ミンナ、ミンナ、皆殺シダ！！
——楽しそうに血飛沫を浴びる杖を見ながら
気づけば僕も、笑っていた。



# 戦丘の福音

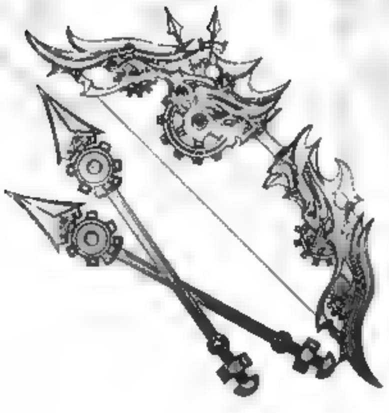


その騎士国家にはひとつの伝承があった。最期まで雄々しく戦って散った騎士は戦女神の丘で福音を授かると。
死を恐れない騎士たちを擁するその国は周辺諸国から深く恐れられた。

大国が大軍勢を編成し、騎士国家に攻め寄せてきた。騎士たちは「恐れる事はない。戦女神の丘で再会し、あの世でも存分に戦おう」と明るく笑い、敵陣へ突撃を敢行した。

騎士たちは鬼神のごとき強さを発揮して敵を蹴散らし、本陣へと迫った。大国の王は大いに泡を食い、何度も陣を後退した。
一人散り、二人散り、騎士たちは次々に討ち取られていき、最後の一人も華々しく散華した。

騎士たちは戦女神の丘にて目覚める。
「おお、女神よ！」と拝跪する騎士たちに「おお騎士たちよ、死んでしまうとは何事だ！」と女神は雷喝した。
――その後、騎士たちは女神の槌に追い立てられ、厳しい修行に明け暮れる事となる。



# 廃煙の歯車

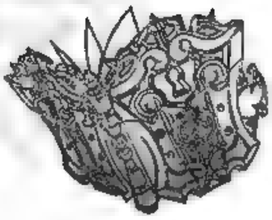


辺境にあるその街はこれという産業もなく、どんより寂れていた。
ある日、近隣の山の地層から銅が採れることがわかり、資産家が坑道を掘らせた。
すると一攫千金を夢見た若者たちが集まり出し、我先にと労働力を提供し始めた。

質のいい銅が採れたことで街の経済はにわかに潤い、死んだ魚のような目をしていた住人たちも活気づき始めた。
が、川に鉱毒が垂れ流しになったことで食中毒を起こす人が続出し、鉱山開発に伴う排煙は田舎の空気を散々に汚した。

一部の心ある人たちが「これ以上鉱山の操業を続けるべきではない」と唱えるようになった。
だが鉱山を牛耳る資産家はそんな意見を鼻で笑い飛ばし、さらに金を積んで鉱夫たちを集め、昼夜問わず働かせた。

遂に堪忍袋の緒が切れた活動家が鉱山に忍び込み、掘削機の歯車を外した。
この時発生した火花が鉱山ガスに引火し、現場視察中だった資産家および鉱夫全員を巻き込んでの大爆発が起きた。
――街の人はこの悲喜劇を後世に伝えるべく、鉱山跡地から見つかった歯車を博物館に寄贈したのだった。



# 錠前師の独白



【街角ですれ違った中年男】
ああ、女が欲しい。欲しくて欲しくてたまんねえ。
そこらじゅうの女をひん剥きてえよ。
でも、死んだ隣の婆ちゃん以上にイイ女はいないんだろうな。
どっかにいねえかな、ポチャッとしてスケベな婆ちゃん。

【アクセサリー店から出てきた裕福そうな女】
私のほうが美人だし気立てがいいのに、妹の旦那のほうが稼ぎがいいだなんて！
許せなかったから、チンピラを雇って、妹を襲わせちゃったわ。
あーっはははははは、ざまあみなさいな！
私より幸せそうな顔してるからいけないのよ！

【レストランにいた、まるまる肥った女】
隣のババア、薄気味悪い目で見やがって…腹立つ！
ええそうですとも、三十路になっても結婚できませんが何か？
不器量に産んだばかりか、ロクに花嫁修業もさせなかったパパとママがいけないのよ！
あっ、料理が来たっ！
バクバク食っちゃおー、好きなだけ食べりゃとりあえず幸せだしさ！

【錠前師よりの箴言】
生まれつき、ヒトの心の奥にあるカギを自在に開けることができた。
見たくないものを見て、知りたくもないことを知ってしまった。
——十六歳になる頃までには、私はすべてに絶望しきった。
さっき、大量の爆薬を調達した。
新年の祭りで国王夫妻が顔を見せる時、国中の人間が集まる。
その時を狙って、私ごとすべてを吹っ飛ばそう。

# 断黒の薙刀



【断黒の薙刀・酒場編】
俺はカウンターに陣取る男の横顔を観察していた。
男は叩きつけるように勘定を置くと、千鳥足で酒場を出て行った。
すかさず俺は席を立って男を追いかけ、袋小路に追い詰めた。
「手配書と同じ人相だ。お前、虹光国の脱獄囚だろ？」
縦一閃、俺は薙刀を奔らせ、脱獄囚を屠った。

【断黒の薙刀・露店編】
その母子連れは露店で買い物を始めた。
母親がリンゴを選んでいる間、子供は指で蜜柑をつつき、穴をあけてしまった。
が、母は素知らぬ顔で品定めを続けた。
すかさず俺は近づき、母親の肩に手を置いた。「あんた、子供も躾けられねえのか」
横一閃、次いで縦一閃。母子は真っ二つになり、大地に転がった。

【断黒の薙刀・目抜き通り編】
手入れを終えた薙刀を鍛冶屋から受け取り、俺は目抜き通りを闊歩していた。
向かいから歩いてきた男と目が合った。
「何見てやがるんだ、ああ？」
横一閃。男の首は血飛沫を上げて吹っ飛び、地に転がった。

【判事レオンの日記】
やれやれ、満場一致で死刑が決まったぞい。
妄想に浸りきった彼にはむしろ救済というべきじゃな。
「黒か白か、世界はその二つでしかできていない。黒は全てこの手で断つ！」
などと喚き散らしおってからに。

# 王家の天声



【王家の天声】
宰相が敵国に内通し、我が国の機密を売り渡していることが判明した。
かの大罪人は既に捕うえられ、禁錮の身に処されている。
十日のうちにかの者を処刑するものせ。

【愛国の血判状】
宰相閣下は清廉潔白な御方であり、敵国への内通などありえない。
たとえ王の不興を買ったとしても説得し、死罪を思いとどまらせねばならぬ。
志を同じくする同志たる証として、我ら十人の血判状をここに認める。

【親愛なる我が王へ】
王よ、不敬なる輩が密議を重ね、大罪人たる宰相を助けようとしていることを突き止めました。
これがその裏切り者九人の拇印が捺された血判状になります。
どうぞ宰相もろともこの者どもに叛逆の報いを！

【王家の天声】
我が王国の民よ、謝罪させてほしい。
先日の「宰相が敵国に通じている」という触れは、獅子身中の虫をあぶり出すための真っ赤な嘘であった。
ニセの証拠で宰相を陥れた大臣を捕うえ、余の大剣にて手討ちにしたことを諸君に報告する。
どうか安心して平和を謳歌してほしい。

# 流水の音色



そのヴァイオリンの調べ、まこと妙なり。
熟練の弾き手、耳の肥えた聴衆、どちらからも深く愛される。

そのヴァイオリン、心地よき流水のごとき音色なり。
心ある者はそこに小さな宇宙を視るであろう。

聴くのではなく、ただ感じよ。
そう、そっと目を閉じて。心を虚しくして——

最近、街のあちこちに現れてヴァイオリンを弾く男がいるらしい。
演奏で聞き惚れさせておいて、その隙に仲間が懐から財布をチョロまかす手口なんだってよ。
お前さんも用心するこったな。

# 不自由な傀儡

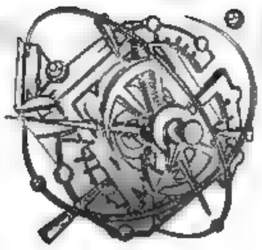
【魔具】ふじゆうなかいらい

うふふふ！　お話をしませんか？
わたし？　わたしは……
かつて、ある女の子に飼われていた、お人形ですわ。
間違いじゃないですわよ。
あの子は、わたしを生きてると思っていたの。

あの子は小鳥を飼うみたいに、私を鳥かごに入れて、
飼っていたのよ。かわいいでしょ？
そしてね、生きてるからには、必要だと思ったのね。
かごの中に餌……品がないわね。お食事を入れたの。
もちろん食べることはできなかったわ。お人形だもの。

でも、あの子は食事をしない私を見て、
このままじゃ死んじゃうって、心配して泣いてくれたの。
そんなあの子が、愛おしくて見ていられなかったわ。
だから願ったの食べたいって、何日も何日も。
そしてね……願いがかなったのよ。

わたしはものを、食べられるようになったわ。
あの子のために、いっぱい食べたの、近くにあったお肉を。
そうしたら……閉じ込められちゃったの。
だから、鍵を開けて欲しいの。お食事をしたいのよ。
食べないと、あの子が心配しちゃうから。



# 時空の哲学書



時空に関し、一般の人はその本質を理解しておらぬ。
まず、時空は連続してなどいない。非連続なのである。

「過去」も「未来」もありえない。
「過去」や「未来」と人が考えているものは単なる脳の錯覚だ。

そこに何らかの事象があり、それを人の脳が読み解こうとする。
そうすることで人は「時間の経過」を体感するわけだ。

時空の不連続性を証明しようとすると、それを証明する理論にも証明が必要となる。よって証明は極めて困難と言わざるを得ぬ。
証明を追及することは時空の連続性理論の証明となってしまう恐れがある。
あえて言おう。時空の不連続性を証明するためにも、証明を証明してはならぬと。

# 独裁者の杖



その杖を手にした瞬間、彼は独裁者となった。独裁者である彼のあらゆる命令に世界は従った。

世界の独裁者である彼にとって、不可能な事など何一つなかった。
彼の命令に応じて人々は死に、そして彼の命令によってまた再び生き返った。

彼は独裁者だった。
彼が思うと同時に彼の願いは為されていた。彼が思う事と、世界が彼の思った通りに変わる事、どちらが先なのか、それはもはや定かではなかった。

そして独裁者である彼は世界そのものとなった。
もはや世界と彼を区分するものは何もなかった。
世界と彼との間の境界は消滅し、彼は世界へと融けた。
その世界は彼ただ一人のみが知覚している世界だった……彼が杖を手にした、そのときから。

# 束縛の斧

【打撃】そくばくのおの

日差しが嫌い。
どれだけ予防しても肌が赤くなりヒリヒリする。

海は嫌い。
海に足を入れると必ずサンダルが波にさらわれる。

夏は嫌い。
何か食べようとすると必ず、羽虫が混入する。

……アリスってモシカして不幸タイシツ？

# 虚妄の短剣



兄様を砂で埋めてあげた。
兄様は砂が顔にかかってくすぐったい、と笑ってくれました。

兄様と飛び込み遊びをした。
兄様は怖いなら一緒に飛ぼう、と私の手をとってくれました。

兄様とばーべきゅーをした。
兄様は私が焦がしたお肉を食べてくれて、
上手に焼けたお肉を食べさせてくれました。
でも、それが熱くて舌を火傷してしまいました。

今、私は兄様とスイカ割りをしています。
でも、目隠しをしては兄様のお顔が見えません。
この遊びはだめですね。
早く終わらせて兄様のお顔が見たいです。

そんな気持ちと共に棒を力いっぱい振り下ろすと、
固い球体を粉砕する確かな手ごたえがありました。

スノウホワイト/
Mizugi

# 正義の弩

【射出】せいぎのいしゆみ

「ドロシー左に回りこむんだ！」
「ガッテンです！」
岩場に巣食う蟹を駆逐しなくてはならない。
そう私の正義が語り掛けてくる。

「グレーテル！　そこの岩場に逃げ込んだぞ！」
「まあ、兄様ったら……こんなところで……」
――グレーテルをあてにした私が馬鹿だった。

「アリス！　奥に入られないうちに掴んでくれ！」
「捕まえた。でも、手を挟まれた」
なんだか見ているこちらまで悲しい気持ちになる。

「モウ、遊ビは終わりデス」
「この魔具で一面ヲ焼け野原にスレバ……」
「イチモウダジン！！」
なにかが違う。そう思った頃にはもう、
蟹の焼ける香ばしい匂いが立ち込めていた。

# 魔戒の杖



ほの昏き森の奥に、古代の秘術を受け継ぐ魔女一族が棲んでいた。
悪しき力を使う彼女たちには、聖職者と結婚してはならぬという戒律があった。
或る時、魔女長にうら若き魔女が願い出た。
「聖職者を愛してしまいました、彼と添い遂げさせてください」と。
彼女は、胎内に子を宿していた。

魔女長は杖を振る。
するとうら若き魔女の腹が裂け、胎内から赤子が這い出してきた。
魔女長が杖をさらに振ると、赤子が燃え、たちまち灰燼と化す。
それを見たうら若き魔女は正気を失い、廃人となってしまったのである。

後日、魔女長は薬草を採りに赴いた際、猟師が仕掛けた虎挟みに足を挟まれた。
そこに若くハンサムな男が通りがかり、彼女を救ってくれた。
戒律に従い生きてきた彼女だが、男の優しさに心惹かれ、彼を愛するようになった。

程なく、魔女長はその男の子を宿してしまう。
彼はその事実を魔女たちに触れ回ると、何処ともなく去っていった。
そう――彼の正体は、我が子を焼き殺された聖職者だった。
魔女長は同族たちに焼き殺され、墓標代わりとして愛用の杖が突き立てられることとなる。

# 熱鋼の禁書



「蛮族たちは、低能すぎはしませんか」
「そうだ。人間なら、せっかくの知能を活かせばよいものを」
「木の棒だの、石の斧だの、使う武器が原始的すぎます」
「あんな者たちに苦戦など、我が国では恥ですよ」

「……では、我々はどうするべきか？」
「無論。我が国は、世界一の魔術大国。ならば方法は一つです」
「蛮族どもを、焼き尽くす魔術を生み出しましょう」
「骨まで溶かして、消し去ってやりましょう」
「よし。過去最高の魔術を創ろう、皆の者！」

「こ……これはダメだ。あまりにも、危険すぎる……！」
「この魔術が解き放たれたら、大陸が消し飛びます！」
「鉄の枠で封をせよ！　誰にも開けぬように！」
「国内の鉄をすべて集めます。他に準備はありますか？」
「鉄に馴染む封印魔術だ。誰にも解けぬ強固なものを！」

「先日の蛮族撃退、お見事でした」
「うむ。魔力が切れた時は焦ったがな。咄嗟にその鉄枠の本で殴りつけたら、血を吹いて飛んで行ったわ」
「なんと！　それはまるで蛮族の戦い方ではないですか！」
「うむ。蛮族め、実に効率的な戦いをしておったのだなあ」

# 暗闇の洋灯



その男は芸術に造詣が深く、俗世に関心が薄かった。
出世にも稼ぎを増やすことにも興味がなく、そのせいで妻に離縁状を突きつけられた。
彼は特に意に介さず、代筆屋の仕事で自分を食わせていた。

ある日その男は市場に立ち寄り、旅の骨董商が営む露店の軒先を見た。
そこに並べられた洋灯の造形に惚れた彼はそれを買い、帰った。
それを点け、彼は感嘆の声を上げた。
なんと、駆逐された暗闇の向こう側に《素晴らしき世界》が現れたのだ。

《素晴らしき世界》が現出するのはほんの僅かな時間だけ。
それも、見られるのは一日につき一回きり。
が、《素晴らしき世界》に魅せられた男は収まりがつかず、何度も洋灯を点けようとし、それを壊してしまった。

半狂乱になった彼は同じ品物を求めて市場へ赴いたが、もう旅の骨董商は立ち去った後だった。
「死ねない！　もう一度《素晴らしき世界》をこの目で拝むまでは――！」
妄執に取り憑かれた彼はぶつぶつ呟きながら、今日もどこかを彷徨い歩いている。

# 不知火の矢



強大な軍事力を有する海軍国家に二つの軍閥があり、諍いが絶えなかった。
ある日、彼らの下っ端同士が酒場でケンカし、それが引き金となって港で千人規模の軍勢が対峙する事態となった。
そこに海軍提督が颯爽と現れ、「兵を退かれよ、王は貴殿らの和解を望んでいる！」と呼びかけた。

が、どちらも軍閥の長もそのとりなしに耳を貸そうとしなかった。
提督は舟の舳先に風見鶏を突き立てると、部下に命じ、沖に漕ぎ出させた。
「オレが見事あれを射落としたら戦をやめるように！」と言い、彼は構えた弓に矢をつがえ、ギリギリと弦を引き絞った。

提督が狙いを定め、弓を射放ったその瞬間、対岸で不知火が灯った。
狙いに狂いが生じ、矢は風見鶏を掠めて飛び去った。
「提督どのは狙いを外したぞ！」と軍閥の長たちは嘲笑すると、お互いに軍勢をけしかけた。
かくして戦闘が勃発し、乱戦に巻き込まれた提督は非業の死を遂げたのだった。

城の露台から双眼鏡で一連の出来事を見物していた王はほくそ笑んだ。
自分一人に権力を集中させたい彼にとっては軍閥も提督もすべて邪魔者だった。
そのため部下に命じて対岸に不知火を灯させ、弓矢が外れるよう画策し、「自分は懸命に止めたが、悲劇は起こってしまった」という体裁を取り繕ったのである…。

# 諧謔曲の楽章

【楽器】かいぎゃくきょくのがくしょう

その国王は傲岸不遜で狭量な人物で、臣民から嫌われていた。
ある日、一人の男がスパイ容疑で牢に入れられた。
優雅で気品ある物腰を見た役人が王に報告し、王は直々に彼を取り調べた。
そして王は気づく。その男性が世界的に高名なヴァイオリン弾きであることに。

だが王がいくら問い詰めても、彼は自分がヴァイオリン弾きだと認めなかった。
「さては、自分および自分の曲を高く売りつける気だな？」と王は内心考え、
「もし余のために一曲弾けば放免してやってもいいぞ」と持ちかけた。

ヴァイオリン弾きはヴァイオリンを構えると、弓を十字に走らせた。
圧倒的な立体感で演奏される序曲を聴き、王もその場の臣下たちも感銘を受けた。
ところがヴァイオリン弾きはそこで弓を止めてしまい、「あとの楽章は最後まで全音休符でござい。馬鹿には聞こえ申さぬ、かっかっか」と笑った。

怒髪天を衝いた王は「諧謔曲の報いをくれてやろう！」と言い、ヴァイオリン弾きをその場で手打ちにした。
そこに皇帝からの使者がやってきて、次の言葉に王は背筋が凍りつくこととなる。
「皇帝陛下からの伝言です。ヴァイオリン弾きは朕が招聘したのだが、手厚く歓待してもらえたのだろうな、と」

# 探究のパラソル



「みなさーん。漂流してきたであろう瓶の中から、
マル秘と書かれた資料を発見しましたー！
えーと。なになに……
夏イベント_没案企画書ですか……」

【企画概要】
①この世界に存在する全てのソシャゲの水着撮影が行われる島でのひと夏の大騒動
②その島には様々な撮影セットがあり、売り上げ向上のためにキャラたちは水着撮影をさせられることになる

③アリス達は、撮影に来ていた別タイトルのキャラと交流を深める（権利の関係で別タイトルのキャラはフルモザイク）
④撮影は順調に進んでいくが、売り上げの低迷するアプリが過剰な露出に走ったことで、それを規制するため倫理ナイトメアが大量発生する

⑤お金を稼ぎたいという各プロデューサーの欲望が力となり、倫理を打ち払い、見事際どい写真をとることに成功するが……

「やっぱり、なんでもなかったですー！」
ドロシーはそう叫ぶと、そっと企画書を元の場所に戻しました。

# 水魚の骨楽器



かつてその楽器からいくつもの言葉が生まれた。
言葉は人々が意思疎通を図るための意味を紡いでいた。

楽器から放たれた言葉は魚となり、力強く泳ぎ始め、人々はそれを追い求めた。

時代が流れ、世界から次第に意味が喪われていった。
魚たちもはや死に絶え、骨となったその記憶だけが泳いでいた。

はるか昔に亡くなり影となった人々が、はるか昔に骨となった魚を追い続ける。もはや世界にとって有効でなくなった言葉を。

# 幻魔の杖



王国で評判の踊り子の少女がいた。舞台の人気者だった少女は名声を得て人生に満足していた。
ただ一つだけ、気がかりな事があった。時計台の鐘が鳴ると少女の前には決まって霊が現れたのだった。それは彼女にとってこの世で何よりも恐ろしいものだった。

少女は自分の前に現れる霊について、村で有名な聖職者になんとかならないかと相談した。
聖職者は彼女に告げた。少女の今の人生は本物ではない。近いうちに彼女の本当の人生を見せてあげようと。

そして少女はその晩、夢を見た。その夢の中で少女は、踊りも歌も下手で、彼女と同じ年頃で名声を得ていた少女を妬む毎日を過ごしていた。そしてついに少女は嫉妬のあまりその娘を殺してしまった。下手人が彼女である事は、衛士達は捜査でつきとめ、少女は逮捕を恐れ身を隠した。暗くて寒い部屋の中で食べ物を買う金もなく震えながら餓死を待っていた。

少女は目を覚ました。時計台の鐘が鳴り、少女の前に霊が現れた。その霊は、彼女が夢の中で殺した少女だった。だが彼女は気にしなかった。幻の外の世界の方が彼女にとってはよほど恐ろしいところだった。そして死ぬ前に見ているのかもしれないこの幻の世界を少しでも長く味わうことにその日から決めた。

# 今際の夢

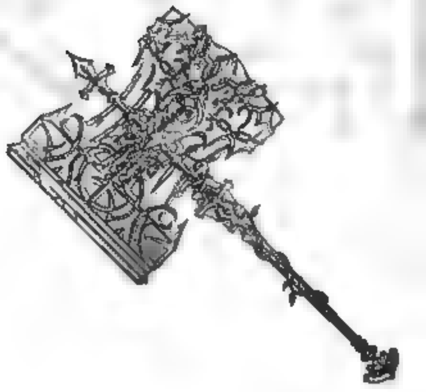


丘に繁茂する藪に身を潜めつつ、矢をつがえて弓を引き絞る。
射放たれた矢は空を裂き、諸将を集めて軍議中だった敵大将の頭蓋を射貫いた。
大混乱に陥る彼らを尻目に、オレは踵を返す。
「あばよ、いい今際の夢を」

短刀で刺し殺した番兵の死体を隠し、物見櫓に登った。
矢をつがえ、弓を引き絞る。
鋭く翔けた矢は城のバルコニーで演説中の王の首を射貫いた。
蜂の巣をつついたように騒ぎ出す群衆を一瞥し、オレはその場を離脱する。
「いい今際の夢は見られたか？」

扉を開け放ち、オレは弓を引き絞った。
「おう、俺の酒代ぐらいは稼いできたんだろうな——」
オレの手元から空気の塊が放たれ、酒臭い息を放つ男の口の中に飛び込んだ。
深々と矢に喉を抉られた男は倒れ、絶命した。
「地獄で母さんに詫びろ。てめえだけはいい今際の夢を見るんじゃねえぞ、クソ親父」

気の優しい子だったんです。夫は退役兵で、酒に溺れ、私とこの子に暴力を振るって……。
家宝の弓だけを手に、「今まで不幸だった分、人より幸せになってみせる！」なんて言って家を飛び出していったんですけど。
せめて今際にいい夢は見られたのか……それだけが気がかりです。ううぅ……。



# 窓辺の槌



眺めのよい丘の上に建つ屋敷に、独り身の文豪が住んでいた。
教養深く温厚な彼は夭折した妻との間に生まれた子供を溺愛しており、住み込みで働く老執事と三人だけで暮らしていた。

ある日、詩を吟じる会が催され、文豪は子供を老執事に預けて出かけた。
老執事は昼食を作り終え、子供を呼びに行った。
すると子供は屋敷の庭で倒れて死んでいた。その頭には小さな隕石がめり込んでいた。

正直に報告しようと考えた老執事だが、逆に自分が疑われる可能性に気づき、保身に走った。
鍛冶屋に隕石を売り払い、子供の死体を埋め、「若様は行方不明になってしまいました」と主人に報告した。
こちらの方が余程救いがあるだろう、と独り合点して。

最愛の子供を失った文豪は失意のどん底に落ち、しばらく部屋に閉じこもった。
後日、老執事が庭を掃除していると、階上の窓から落ちてきた槌が脳天を直撃した。
それは文豪の逆恨みか、単なる事故か？
すべては謎に包まれている。

# 宣教の鎌



長きに渡る戦乱により国民にとって辛い生活が続いていた。
人々は、修道師に助言を求めた。
その苦しみに、痛みに耐えるのだと、白髪の修道師は言った。
人々は言われた通り、我慢して耐え続けた。
だがいくら待っても明るい兆しが見えることはなかった……。

村人は再び修道師の元を訪れた。
「我々は一体いつまで痛みに耐えればよいのか。痛みに耐えたその先に、一体何があるというのだ」
修道師は言った。
「よく頑張って痛みに耐えた。感動したぞ。褒美をやろう」

そして人々は地下へと連れていかれた。突如、鉤が飛んできて村人たちに突き刺さった。人々は絶叫し、逃げようとした。
「どうして逃げる。素晴らしき痛みから」
鉤が突き刺さった修道師は言った。やがて修道師を含め、部屋の中のものが全て死に絶え、部屋に静寂が訪れた。

奥の扉が開き、一人の、鎌を手にした青年が歩みでてきた。彼は父親の骸を尊敬の眼差しで見つめ宣誓した。
「父さん……。父さんを見習って次は僕が痛みの宣教師となり、民に痛みを布教します」
修道師の息子が地上へと向かった。その素振り、話し方は父親そっくりだった……。

# 翠鳥の剣

その剣客は天賦の剣才を持ち、剣筋を見切れる者はいなかった。
強いだけでなく、鳥が好きで、餌を常に持ち歩くなど、細やかな一面もあった。
彼は世直しを志し、都を守護する剣客衆に参加し、活躍する。
だが保守派から嫌われて剣客衆は都を逐われ、敵対勢力に包囲されてしまう。

剣客衆にその人ありと言われた天才剣客が陣頭に立たないのを見て、敵は訝る。
それもそのはずで、彼は湖畔の療養施設で寝込んでいた。
生まれつき気管支が弱い彼は心労が祟り、肺炎をこじらせていた。
そのため、仲間たちは彼を戦いに同行させなかったのだ。

数日後、天才剣客は夢を見た。気のいい剣客衆の仲間たちと汗水垂らしながら剣術の稽古をする夢だった。
——そして翌朝、診察に来た医者が告げた。剣客衆は最後の一兵まで雄々しく戦い、刀折れ矢尽き、全滅したと。

天才剣客は病躯を押し、湖畔へ行くと、その場に座り込んでしばし瞑想した。
その後、やおら剣を抜き放つと、剣舞を舞った。
それを終えると、彼は静かに息を引き取った。
翠鳥が一羽、澄み渡る青空の彼方へと翔んでいった——

# 死贄の花束

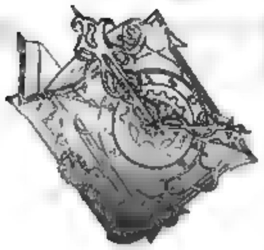


村のため花嫁になるのだと君が言う
当日は豪奢に着飾るから
僕にはブーケを作ってほしいと
君は穏やかに笑って言った

花屋の僕が君にしてやれること
とびきり美しいブーケをこしらえること
君の式場となる冷たい湖に
たくさんの花を浮かべること

煌びやかなドレスに身を包み
僕がこしらえたブーケを持って
細い足には不釣り合いな石の重しを引きずり
花嫁は湖へと沈んでいった

君の体は見つからなかったから
きっと花婿に気に入られているのだろう
代わりに浮かんだのはブーケひとつだけ
こんな村、滅んでしまえば良いのにね



# 刻の警告



刻は思考する……。
宇宙が誕生し存在が凝縮した結果、生命は生まれ刻は知覚されるようになった。

だが全てのものはやがて再びその存在を保てなくなるであろう。ひきのばされた、存在の耐えられない軽さ、薄さ。

あらゆる変化が絶無となった宇宙。
それからどれだけの時が経過しようとも何ら変化はない。
乱すものも、乱されるものもいない。
あらゆる意識は霧消する。

刻は思う。刻を認識する主観がなくなれば、刻は消滅するであろう、と。
が、刻は自らが消滅することなど意に介さない。警告などしない。他にすることもなく状況の成り行きをみている。
ただあるがままに静かに見つめているだけなのだ……。

『ピノキオ/』
『餐虎のソーサラー』

# 大食ノ禁書
# （カゲウチ）



「どうしてこうなってしまったのだ。私はただ……」
ある日ピノキオは、自らのおこないを後悔する青年に出会いました。

青年は血に濡れた口を手の甲でぬぐっています。
その姿はまるで自分が初めて罪を犯した姿のようでした。そして、その青年の容姿は自身が成長した姿のようにも見えました。

「大丈夫です。そのうち慣れますよ。だって僕はそうするためにつくられた人形なのだから」
そうピノキオが青年を元気づけるために話しかけたところで――

「ハハッ。オマエ夢ヲ見テイタナ」
「僕は何か忘れていたことを思い出していたような……」
まどろむピノキオの横を大きな影が通り抜けました。

# 鎌鼬の剣



彼は日頃地味で目立たない男だったが、いつかそのうち何人もの女性をばらばらにしようと考えていた。ある日をさかいに彼はそれを実行に移した。
世間は彼が女性をばらばらにするたびに、犯人が女性に対しての強い恨みを持っているのだ、と語ったが、彼はただばらばらにしているだけだった。果たしてそれが自分のしたい事なのかどうかも定かではなかった。

ある日、彼は不思議な女に巡り会った。
彼女はばらばらにされても平気だった。何故なら彼女は人造人間だったのだ。

彼は彼女を切り刻んでは、彼女が再びくっつくのを待ち、また気が向くと再びばらばらにした。それをなんべんも繰り返した。

数ヶ月後、街を震撼させた女性ばらばら殺人犯は再びその仕事を再開した。
男が彼自身について一つわかったことがあった。
それは、ばらばらにしてもばらばらにしても再びくっつく女がこの世にいても、ばらばらにしても再びくっつくことのない女をばらばらにしにいくという行為を、自らが選択するのだということだった。

# 首狩鎌

【長柄】くびかりがま

【赤竜騎士団隊長・ロイスの日記】
今回の捕り物は用心せねばならない。
なにせ相手は片っ端から首を狩って回っている極悪人だ。
密偵の報告によれば、彼の隠れ家の軒先には大量の干し首が吊られていたというし。
万一に備え、妻にひとこと言っておかねばな。

【帝都新聞号外・首狩りの極悪人、逮捕さる】
世間を震撼させた首狩りの極悪人が昨日、遂に逮捕された。
赤竜騎士団が踏み込んだ際、鎌をぶん回して抵抗する事もなく、あっさりお縄についたらしい。
なぜここまで無慈悲な大量虐殺を繰り広げたのか、その動機は明らかになっていない。

【極悪人の供述書】
旅先で行き合わせた男に毒を盛って殺し、金品を奪った。それがすべての始まりだ。
少し歩いて、俺は驚いた。向こうからやって来るのは、さっき殺したはずの男じゃねえか！
それ以来、どこを歩いてもあの男を常に見かけるようになった。
俺は恐れおののき、あいつが二度と化けて出ないようにと、鎌で首を狩った。
でも、どれだけ狩っても現れやがるんだ。あの顔が……！

【死刑執行人ナヴァールの日記】
本日、刑場にて、極悪人の首を斬り落とした。
帰り道の途中、背後から近づく足音に振り返った。
そこにいた男は——なんと、この手で斬ったはずの極悪人ではないか！
その後、喚き散らしながら家に帰り、部屋に閉じこもった。街の人たちも家族も、みんなあの極悪人と同じ顔をしている。
狩らねば！　首を、すべて狩らねば……！

# 神聖樹の音



戦乱が十数年にもわたって続き、人々が疲弊しきっているのを憂えた神官は神の御前に行き、救いをこうた。
神は神聖樹を削り出してハープを作り、それを持ち帰る許可を与えた。

神官はあちこちへ出向き、ハープをかき鳴らした。
目を血走らせて武器を振るっていた戦士が涙を流して両手を組み合わせるさまを見た彼は「これで戦争を根絶できる！」と喜び勇んだ。

神官が奔走した末、そう長い時間を要する事なく、地上からはありとあらゆる争い事が途絶えた。
「神のご威光が目に見えるようです！」と神官は天上の神に感謝の祈りを捧げた。

戦争がなくなると人々は勉学に勤しみ、道徳や倫理に理解を深め、精神性を育んでいった。
今やそこらじゅうの誰もが悟りを開き、自分自身の内なる神と対話している。
かくして人類は進化の階梯を登り、新しき世界の神となったのだ。

# 朽ち縄の根

【打撃】くちなわのこん

おう、お前が囚人か。
身体検査をさせてもらうぞ、尻の穴までな。
この監獄には、本当に身ひとつでしか入れない。武器を持っているのは唯一、監獄長だけだ。
朽ち縄の根でぶん殴られたら骨なんか簡単に砕けるぞ。
逆らおうなんて思わないことだな。

フン、キサマが新入りか！
ワシはこの監獄を預かる監獄長だ！
言うなればワシこそが正義であり、法である！
まあ、せいぜい一日も早く更生して、さっさとワシらの手を煩わせぬようにするのだな！

監獄長のヤロウ、マジで許せねえ。
俺の女房が美人と評判だから抱かせろってゴネやがって、断ったら朽ち縄の根でぶん殴ってきやがった。
お陰で鼻は潰れるし前歯は折れるし、散々だ。
なあ、いつまで俺たちはあいつの横暴に耐えなきゃなんねーんだ…？

やあどうも、監獄長さん。
部下に裏切られて俺の房に放り込まれた気分はどうだい？
ん？　――ああ、この武器はあんたの部下にプレゼントされたのさ。
さあ、ご自慢の朽ち縄の根、たっぷりその体で味わうがいい…！

# 熟練の達人銃



ひと仕事終えた父親がくつろいでいる時、五歳の息子が入ってきた。
机に置かれた銃を見た息子は目を輝かせ、「カッコいい、さわらせて！」と言った。
父は慌てて答えた。「ダメダメ。これは父さんみたいな達人にしか扱えないんだから」

息子は街の広場にすっ飛んでいくと、そこで遊んでいた友達にその事を語り、自慢した。
ところが友達は話を信じてくれず、ウソつき呼ばわりされた。
息子は半べそをかき、「わかったよ、そこまで言うなら本物を持ってくる！」と言った。

家から銃を持ち出して友達に見せびらかし、息子は得意の絶頂を味わった。
が、怖い顔をした父親が走り寄ってくる光景を見て、心臓が凍りついた。
次の瞬間、父の胸から朱いものが弾けた。表情を凝結させ、父は倒れた。
硝煙を噴く銃口を見て、少年は反射的に引き金を絞ってしまったことに気づいた。

たちまち街は大騒ぎになった。
騎士団が駆けつけたが、年端もいかぬ息子は冷静に引き金を絞って騎士団隊長の額に風穴をあけ、逃げ延びた。
後日、一連の出来事を見ていた暗黒街の顔役が彼を拾い、舎弟にした。
刮目せよ、数年後、彼は熟練の達人銃にふさわしい使い手となるであろう——

# 意匠の六絃琴

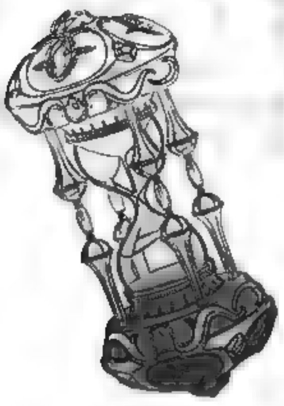


街の流行、時代の流行は刻々と移り変わる。

流行は次から次へと変わっていく。
そして一巡すると、一度はすたれたものも再び流行となる。
温故知新。
とにもかくにもそうやって、流行、意匠(モード)は移り変わっていくのだ。

一体流行というものはどのように決まって、どのように変わっているのか。
ある奇妙な噂があった。
流行を決めている者達がいる。彼らは流行に操られているような軽薄な世の中から超越した存在なのだと……。

人里離れた山奥に、修道士たちがいた。
彼らは俗世のことに何の関心もない。ただ無心に存在している。
彼らの前にはそれは見事な意匠の六絃琴があった……。
無心に座っている彼らがごくまれに目の前の琴の弦をつまびく。
すると、はるか彼方の街の方で大衆の歓声があがった……。



# 逆様の刻界

【魔具】さかさまのこくかい

若返りたければ逆様に。
年老いたければ正常に。
くるりくるりと魔法の砂時計。
砂が落ちきらないように
気をつけなくてはいけないわ。

長い刻を歩んできたような。
昨日生まれたばかりのような。
最近はとっても夢心地。
砂時計を買うときに
私は何を支払ったのだったかしら？

くるりくるりくるくるり。
逆様ってどっち？
正常ってなんなのかしら。
ねえアナタ、私はどうして
砂時計を大切にしているの？

ところでアナタはどちら様？
あら嫌だ、泣かないで。
ほら、もうすぐ砂が落ちきるわ。
そうしたら、とっても大変な……
ええと、一体どうなるのだったかしら？

# 夜の書



女が縛られている。男が刃を振り降ろす。噴出す血。男は快楽に満たされる。今週に入ってから三人目だった。何度か繰り返し刺して楽しむ。解体後はまた調達に出かける必要がある。戸締りと火の元の確認を忘れないようにしないと。

何か黒いものが現れて消える。気配を感じる。つきまとってくる。怨念を持っている。この世への復讐がしたいようだ。遠くにぼんやりと立っているかと思うと、突如背後に現れる。存在を示した後、物理的及びそれ以外の手段で殺害を行う。死の仲間を欲している。殺して増やし、仲間が増殖していく。

殺したいという意思。死をもたらすものを在らせる力。それは宇宙の力。夜の力。その思惑は不明。力は行使され、往々にしてそれは人間にとって禍々しい結果をもたらす。

夜の力は人間そのものを作った。人間を超越した大いなる存在。人間を作り、そして苦しめる。人間に束の間の光と昼を与えるのは、夜の力との対比のため。昼に与えた希望を夜の時間によって奪い、破壊する。だがそこになんら悪意はない。あくまで人間がそれを悪意と解釈するだけ。それは極めて純粋な行為。純粋なこの世の悪意……。

# 命の選択



目の前に、大きな杖を持った少女が現れました。
彼女は潤んだ瞳であなたを見つめます。
「わたしのお仕事は人間の命を回収することです。
でも、今日のノルマが達成できなくて困ってます。
そこでお願いです、あなたの命をもらえませんか？」

「命をくれると約束してくれれば、願いをひとつ叶えます」
少女の申し出に、あなたは——？
【選択肢】
○「お断りだ！」　→杖を進化させてね！
○「命をあげよう！」→杖を進化後、レベルMAXにしてね！

申し出を断ると、少女は舌打ちをしました。
「じゃあ無理矢理にでも消滅させるまでだわ」
少女の大きな杖が光り、あなたは消滅しました。
己の死に気づかず悪霊になりかけていたあなたは、
こうして転生の道を絶たれたのでした。【BAD END】

申し出を受け入れると、少女は笑い転げました。
「もームリほんと、そりゃあ客の望み通りの設定で接客するのが
こっちの仕事だけど、こんな恥ずかしいシチュありえな」
怒り狂ったあなたは杖を奪い取り、何事か喚きながら
少女が息絶えるまで滅多打ちにしたのでした。【BAD END】

『人魚姫/』
『ハーフナイトメア』

# 悲哀の黒琴

【楽器】ひあいのこくきん

絡め合った指には
　　赤い糸も　誓約の証もない
繋いだ手の　温度差が
　　その事実を突きつける。

二人より添っていられたら。
　　誓いの言葉も
　　花束もいらない。
　　そう信じられる透き通った心が欲しかった。

陽の当たる関係ではないから
いつも暗がりを探してしまう。
　　　　捨てられないから　積みあがる
　　　　積みあがるほどに　壊したくなる。

貴方の隣で眠りにつくより
　　　　独りそっと泣くのが好きなの。
だから消すわ。 貴方と私の関係を。
そして刻むわ。 貴方の心に永遠の証を。

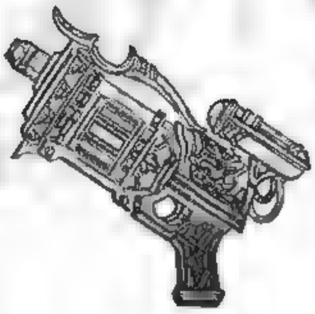
# 束縛の大斧

それは今ではない遠い記憶。
夕焼けに染まった、薫風の丘。
私は二人ぼっちでそこにいた。

──腕の中に小さな赤ん坊。
その子は私の指を必死に握りしめながら、泣いている。心にこみ上げる、慈しみと破壊衝動に私は困惑した。

温もりと冷たさ。
私は背反する温度を内包し、ただそこに存在していた。心は均衡を保つのではなく、暑さと寒さがせめぎ合い、収拾がつかない。

やがて、心は壊れたように静止する。
私は赤ん坊を強く抱きしめて、
贖罪の言葉と雫を世界に零した……



# 百毒の銃

【射出】ひゃくどくのじゅう

心から戦乱と混沌を愛する凄腕の銃使いがいた。
金さえ積めばどんな殺しも遂行する掃除屋として、闇の世界では知られた存在だった。
彼の関心はただひたすら、世間をもっともっと震撼させるような何かを成し遂げることだった。

「博愛王」と呼ばれる善王が統治する国があり、その二つ名に反発心を呼び覚まされた銃使いは王を殺すことにした。
彼は召使いに化けて城に忍び込み、王の私室へ入ると、銃を突きつけた。
「なるほど、私を殺しに来たのか。撃つがよい、私を殺してもこの国の平和は揺るがぬぞ」
銃使いは無言で引き金を引き、脳みそをその場にぶちまけた。

博愛王、凶弾に倒れる――。
凶報に国は一時大きく揺れたが、すぐ後継者の新王が混乱を収拾した。
「博愛王はみなさんの胸にいつまでも生きています」と新王が演説すると、国民たちは感動し、その結束は以前より強固になってしまった。
「おのれ、博愛王め！」と銃使いは歯軋りした。

銃使いは文献を漁り、その国の災厄を閉じ込めたという大孔を見つけ出し、ありったけの弾丸を撃ち込んだ。
岩盤が砕け散り、《災厄の獣》が這い出てきて、銃使いはひと呑みにされてしまった。
《災厄の獣》は瞬く間にその国を破壊し、近隣諸国は震撼する。
銃使いの遺品は、百を上回る害悪を撒き散らした「百毒の銃」として、闇の世界に伝わっている。

# 咆骸の杖

杖の先の骸骨は唸る。かつてのように。荒々しく。

夜、骸骨は叫ぶ。かつてのように。けたたましく。

骸骨は、在るだけでこの世界より外の世界の存在を示す。
誰もがいずれその世界に行くのだということを。

その内臓言語は示すのだ。
お前たちもいずれ皆自分のような存在になる。死は必ず待っているのだ、と。
そのような内臓言語を噴出しようとせんばかりに、杖の先に陣取って己の存在を、我々生者に対して示してみせるのだ……。

# 波紋の呪書

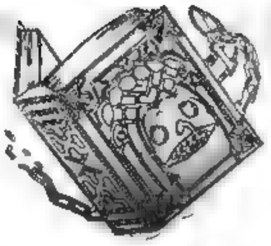
【魔書】はもんのじゅしょ

【波紋の呪書・前書き】
本書は、とっておきの呪いについて記すものである。
それによって直接呪う事ができるのは、ただ一人に限定されてしまう。
が、安心してほしい。呪いを波紋のごとく広げる方法も付記し、この呪法を完全なものとする。

【第五章・呪いの実用例Ｉ】
ここまでに記した呪法を用い、そこそこ見てくれの良い女を選んで呪いをかけると良い。
後は粘膜接触でスケベな男へ、その女房へ、間男へと、呪いは際限なく広がっていくであろう。

【第五章・呪いの実用例II】
肉欲こそ、人の血脈が途絶えぬ根源的な本能であり、そこにこの呪法を組み合わせる事で劇的な相乗効果が望める。
かくして数世代のうちに人という人すべてが呪われ、地上は死の都と化す！

【あとがき】
第五章では少々暴走した事をお詫びしよう。
とにかく、性交により死の呪いが広まるという噂を流せば、人は疑心暗鬼に囚われ、大混乱に陥るはず！
そういう噂ほど波紋の如く、どこまでも果てなく広がるからだ。



# 虚妄の書



始めてその感情に気付いたとき、
私は空を振り仰いだ。
それは目の縁からこぼれそうな雫を
必死に押し留める為だった。

それから私は、ただそこで
滲んだ星々の瞬きを眺め続けた。
冬の森は空気が澄みわたり、
空の光はどこまでも美しかった。

ふと気が付くと、私の隣には兄様がいた。
兄様はかじかんだ私の手をそっと包み込んで
暖かな息を吹きかけている。

「……だめです、兄様」
そう呟いたのを最後に、
とめどなく涙が頬をつたわって流れた。
兄様の前ではこの想いも、涙も
隠すことが出来ないと気付いた瞬間だった。

# 硝子の根

【打撃】がらすのこん

乾いた砂漠の大地に、人々の吉凶を一枚の硝子で占う国があった。ある日、司祭の不注意によってその硝子が砕けてしまう。砕けた硝子片が近くにいた少女の目に刺さり彼女を盲人へと変えた。

その司祭は自らの過ちを隠すため、眼球に硝子片が残った彼女を生きた預言者に仕立て上げた。少女に預言の力などあるはずもない。だが、彼女はその立場を甘んじて受け入れた。

心優しい彼女は人々の望む預言を口にした。
乾季が続けば「明日は雨が降る」。病に伏せる者がいれば「三日も経てば治る」と。当たらない預言に業を煮やした人々は、次第に少女を嘘つき呼ばわりするようになった。

まやかしの預言者は、ついに処刑されることとなった。処刑の前日、盲目の彼女は砂嵐によって国が亡ぶ夢を見る。それは真の「預言」であった。彼女は預言の内容を叫び続けたが、耳を傾けるものは誰もいない。彼女の死後、民は砂中に沈んだ。

# 睡眠の笛

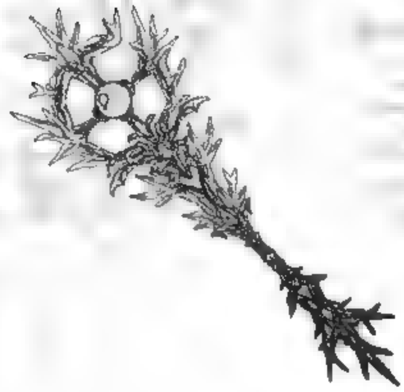
へーい！　むじなの″ハ″トリ
″ま″ぬけなお話しよー。
じゃあいくよ。準備はおっけー？
″す″とろーも忘れずにね！
それじゃあ謎々すたーと！

はちはすのはり　つく　いばらのとげす
とっははても、とますても可愛いね？

あかくて、きれまいな、蜜の匂い。
ミすツみたいなチとっても甘いは。

お天気す雨みたいな、赤いすアメ
すモット、モットふってきますて！

【楽器】すいみんのふえ



# 侵蝕の棘

【祈祷】しんしょくのいばら

裕福な両親の元に双子が生まれた。
兄は引きこもりがちで誰とも接したがらず、バラ園のある屋敷でぬくぬく暮らしていた。
弟は兄の代わりに厳しい教育を受け、次第に兄を恨むように。
ある日、弟は見舞いと称して兄を訪ねた。
弟は兄に近づくと、「僕の王国を侵蝕する者はバラの棘で――」とわめく彼を窓から突き落とし、殺害してしまう。

兄が誤って窓から転落したと両親に報告すると、両親は深く嘆き悲しんだ。
なぜあんな役立たずばかりが贔屓されるのかと弟はますます憎しみを強め、その屋敷の所有権を強引に自分のものとし、そこで暮らし始めた。
弟は気づかなかった――己がそこで暮らし始めた翌日からバラ園の棘が伸び始めたことに。

一週間が経つと、立ち入るのが困難になってしまう程にバラ園のバラの蔓や蔦が伸び放題となる。
惨状を目撃した弟はさすがにこの現象を不気味がり、庭師を呼んで綺麗に剪定させた。
元通りになったバラ園を見て弟は胸を撫で下ろしたが、たった数日で以前以上に伸びてきてしまうのだった。

怯える使用人たちを押しのけて前へ進み出た弟は松明に火を点し、バラ園を丸ごと焼き払おうとした。
するとバラ園から蔦がするする伸びてきて弟を絡め取った。
蔦には棘がびっしり生えており、弟はたちまち全身から血を噴き出し、死亡した。
――以来、屋敷は厳重に封印され、誰も立ち入らない禁断の場所となっている。

# 魔焔の大剣



その剣は魔の炎で敵を含めた全てを焼き尽くした。
そして力が発動される代償として、災いの毒をもたらした。

剣がもたらした魔の毒は、大地に蓄積していった。
それらはときに高名な聖職者の犠牲によって浄化されたが、
戦いが長引くにつれその処理は追いつかなくなっていった。

使い続ければいずれ国は亡びてしまう。
そう判断されたことによって剣は封じられた。だが時既に遅く、
生み出された毒から、新たな毒が生じ、毒は次々と地へと満ちていった。

剣の焔によって国は救われた。
人々の顔に笑顔が戻り、その瞳は意欲的にぎらぎらとしていた。
彼らには希望と目標があった。
国を再興するという目標が。魔の毒に、満ち満ちた国を。
人々の笑顔の口の端は、やや、歪んでいた……。

# 魔女の大斧

【長柄】まじょのおおの

森小屋に住む木こりはウソが嫌いな善人で、みんなから好かれていた。
ある日、木こりの娘は家を飛び出し、騎士団駐屯地に駆け込んだ。
「助けて下さい！　私、父から虐待を受けているんです！」と彼女は涙ながらに訴えた。

騎士たちは木こりと顔見知りであり、彼がそんなことができる人間でないのをよく知っていた。
が、それにしては娘の態度が真に迫りすぎていた。
知らせを受けてやってきた木こりは騎士たちに平謝りした。
「娘はあなたたちをからかったんです。迷惑をかけて申し訳ない」

娘は木こりに連れ帰られることが決まり、「私を見殺しにしないで！」と騎士たち相手に泣き喚いた。
――数日後。娘が山小屋でシクシク泣いていると、そこに魔女が現れた。
「騎士から話は聞いたよ、護身用に一応持っておきな」と、斧をくれた。「それで傷つけられると、ほんのかすり傷でも死ぬほど痛いんだ」

「ありがとう、魔女さん！」と木こりの娘は嗤うと、魔女を斧で真っぷたつにする。
彼女は父親にとても執着しており、気を惹くために年中ウソばかりついていた。
斧を肩に担いだ彼女は、妙齢の薬師が経営する店へ向かう。
「あの女、お父さんに色目使ってたよね。お仕置きしなきゃ」と、ブツブツ呟きながら。

# 嫉妬ノ拳銃
## （カゲウチ）

その日の夢は彼女の忌まわしい記憶を再構築したものらしい。ぼんやりとした世界にはシュルシュル舌を出し、少女の憎しみの感情を貪り続けている蛇が隣にいた。

──視界が開けると、白い雪の中赤くなった頬をさする少女がいた。彼女の視線の先には、暖かな暖炉の光が漏れ出す小屋があった。

時折小屋から、嘲笑を浮かべた女が少女を覗いていた。少女にとって寒さよりも、その女が憎かった。その女の気まぐれで、自らの運命を左右されることが憎かった。

窓から小鳥に餌をやるように、
窓からパンくずを投げ渡してくる女が憎かった。
その瞬間に感謝をしてしまう弱さも憎かった。
そして何より、私を嘲笑う黒さを持った姉妹たちが
人並みに愛される世界が憎かった。

# 荒戦の斧

【打撃】こうせんのおの

その男は「殺戮人形」と呼ばれ、恐れられていた。彼と言葉を交わすものは、犬、猫、その他蔑まれる生き物のみであった。人は対等なものの言葉しか理解できない、というが男の境遇はまさにそれを体現していた。

やがてその男は自分を恐れぬ人間と出会う。それは男のような人殺しのせいで、親を失った孤児であった。そこで初めて男は己の過ちに気付く。罪の意識に押しつぶされそうな彼は聖書に縋った。聖書の教えを守れば自分は救われると考えた。

ある晩のこと。何者かが孤児の住処を襲った。死の残骸が積まれた山を前に男は立ち尽くした。生き残った孤児は目に涙を湛え、その男に縋りつき、亡くなった友の名を叫んだ。

「無垢なまま死したわらべの魂は楽園へと誘われる」聖書の一説を男は思い出す。彼は手に持った斧で、孤児を友の住まう楽園へと送ったのだ。この日、男は生まれて初めて「救済」の殺しを行った。

# 砂硝子の音色



泣きたくなるほど繊細で、胸苦しくなるほど切ない——
その横笛を聴いたものは心を打たれた後、違和感に気付く。
あっと思った時にはもう遅く、全身を砂硝子に変えられてしまっているのである。

横笛は遺跡の奥に封印されていたが、一人の盗賊がそれを盗み出した。
魔物が侵入者に気付き、彼を食料にしようとしつこく追ってきた。
盗賊は咄嗟に横笛を吹いたが、魔物はおろか、彼自身も砂硝子に変えられてしまったのである。

それから数十年後、また一人の盗賊が遺跡に侵入し、横笛を盗み出した。
以前の侵入者同様、魔物に追いかけ回された彼は、咄嗟に横笛を吹く。
ただし、自分が砂硝子に変えられないようにと、耳栓をした上で。
果たして魔物だけが砂硝子に変えられ、してやったりと盗賊は微笑んだ。

が、大量の砂硝子に盗賊は足を取られ、動けなくなってしまう。
それを見て、光り物が好きな肉食性の鳥が押し寄せてきた。
盗賊は懸命に笛を吹き、彼らを砂硝子に変えていくが、そうすればするほど砂硝子は増え、身動きが取れなくなる。
光り物が好きな鳥はますます大挙して押し寄せてきて…。

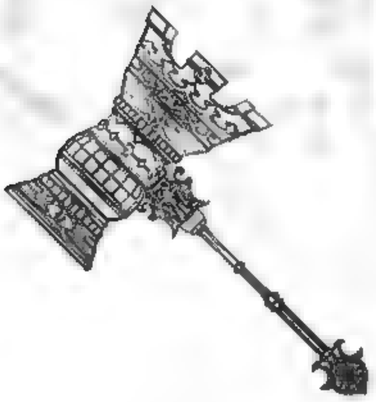
# 天鼠の書

【心得其の一】
鳥に遭ったら、羽根があるから仲間だと主張せよ。

【心得其の二】
獣に遭ったら、体毛があるから仲間だと訴えかけよ。

【心得其の三】
誰から嫌われても挫けるな。日和見主義で何が悪い？

【編者・博物学者トゥーイの後記】
コウモリはハルマグドンを生き延びた数少ない種族だ。
付和雷同と誹られようが、ずる賢く生きていく。
滅亡した種はその処世術をコウモリから学ぶべきであったろう。



# 番兵の粛清



あるところに、領主の居城を守る番兵がいた。
優秀な男であり、領主も彼のことを高く買っていた。だがその男の真の目的は、領主を守るではなく、殺すことにあった。

彼の娘は領主からいわれなき罪に問われ処刑されていた。
「復讐」それが今の男にとって、生きる理由のすべてであった。

毎日、毎日、番兵は折を見て領主を殺そうと動いた。だがあと一歩というところで、彼の手は止まってしまう。それでも諦めずに「次こそは」と心の内で誓い続ける。

病に伏せた領主とその手を握る番兵がいた。30年間、番兵は領主を殺せなかった。死に際、領主は彼に感謝の言葉を贈りその瞳が閉じられる。その時男はようやく気付く。領主への復讐心が自分を生かしていたのだと。

# 色欲ノ紫杖
## （カゲウチ）

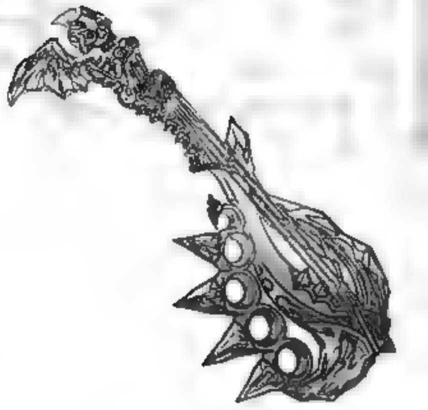


……変な夢。
さそりがボクの体を這いまわる。
カサカサ、カサカサ気持ち悪い。

暗い地下室で、お医者さんたちが笑っている。その人たちは体を押さえつけて、ボクは変な注射を打たれました。チクっとして、ちょっとだけ気持ちが良かったです。

体が熱くなって、沢山あそんだら。お医者さんたちは動かなくなっちゃった。でも、変です。いつもは遊んだら少しは楽になるのに。体が熱くて、熱くて……

あっ虫さん！　ぶーんぶん。沢山たくさんボクをめがけて飛んできます！
あははっは！　くすぐったいです。でも、これだけ沢山いたら山ほど遊び続けられそうです！



# 悪を放つ音



そのヴァイオリン弾きは一途に音楽を愛し、音楽に一生を捧げると決めていた。が、決して演奏は下手ではないのにどういうわけかツキがなく、行く先々で詐欺師やニセの興行師に金を騙し取られてばかりだった。

どれだけ不遇な目に遭っても、ヴァイオリン弾きは音楽を愛する心を無くさなかった。
彼はあちこちへ赴き、無償で演奏を提供した。だがせいぜい食事を恵んでもらえる程度で、名誉や名声は彼の頭上を通り過ぎていくばかりだった。

とある酒場で演奏を披露したが大したおひねりも貰えず、その晩、ヴァイオリン弾きは馬小屋で眠った。
するとそこに悪魔が現れ、驚きに打たれる彼に言った。
「ヴァイオリン弾きよ、私と契約するなら美しいヴァイオリンの音色を授けてやろう。どうだ？」

「私の魂が穢れているせいで、知らず知らずのうちに悪を放ってしまったのだ！」
とヴァイオリン弾きは憤激し、ヴァイオリンをぶん回して悪魔を撲殺。
――かの愛すべきヘボ楽士はいまだに修業の旅を続け、今日もどこかで一途にヴァイオリンを奏で続けているようだ。

# 紫水晶の矛

【長柄】むらさきすいしょうのほこ

矛を執れば王国一と謳われたその騎士と麗しき姫君は、深く愛し合っていた。
「私の心は永遠にあなただけのものです」と騎士に囁かれ、「私、世界で一番幸せよ」と姫は笑った。

姫は父王に政略の道具にされ、他国のヨボヨボの老王の元に嫁ぐ事となった。
結婚式の前夜、騎士は姫をそっと抱きしめ、「あなたが誰かの妻になろうと、私の愛は永遠に変わりません」と言った。

結婚した姫は夫との性交渉がない事から、美男の家臣達を次々と閨へ引っ張り込むようになった。
騎士は彼女の前に跪き、「姫がどなたと愛を交わされようと、私の愛は永遠に変わりません」と言った。

乱行の挙句、姫は子を孕んでしまう。
姫は騎士を呼び出し「不逞の罪に問われてしまうわ、何とかして！」と相談し、騎士は笑顔で頷いた。
騎士はその晩、矛で左胸を貫き、果てた。
遺書には、自分が姫に肉体関係を強要した事と、己の行いを恥じて自死する旨が書かれていたという。

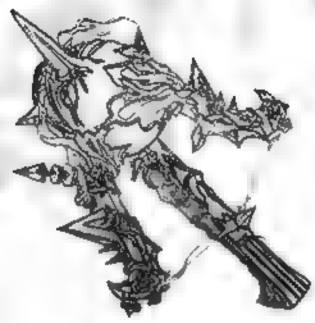
# 波紋の魔剣

ある晩、城の宝物庫に盗賊が忍び込んだ。彼が盗みだした宝の中に、魔法の剣があった。そのことにより王国は大混乱となった。盗賊が盗みだしたのが波紋の魔剣だったからだ。剣にかけられた波紋の魔法は所有者の殺戮の意思を増幅し伝播するものだった。

波及の効果が及んだ人々は凶暴化し、殺しだした。
苛烈に。兵士も百姓も商人も、男も女も、老人も子供も関係なく。
地にはたちまち死体の山が積み上がっていった。

そして殺し尽くした末に、ようやく殺戮は終結した。
元凶となった盗賊は処刑された。人々は殺し合いの原因を知った。そして魔剣を手にした盗賊の残虐な精神と、彼のたどってきた人生を想像して恐怖した。だが……真相は異なっていた。

その晩、盗賊は治安維持部隊に追われ建物に逃げ込んだ。そこは孤児院だった。何者かが盗賊の背中の魔法の剣に触れた。それは、生後間もない赤ん坊だった。そして盗賊を追って入ってきた警備兵が互いを殺し始めた。盗賊も殺され、そしてそこから全てが始まったのだった……。





# 依存の弓

【射出】いぞんのゆみ

自分は悪くないという人がいるけれど。
本当はその言葉を使う時点で気づいている。

みんな心に罪悪感を抱いている。
悪い事をして、罪悪感を抱けなくなったら
最早人間ではない。人間みたいなナニかだ。

でも、他人の罪まで背負いこんで。
潰れてしまうくらいなら、
他人に押し付けてしまうのも一つの手。
あくまでそれに罪悪感を感じなければの話だけれど。

それでも罪は消えない。消せない。
永遠に消えない傷痕として残り続ける。

# 緑海の矛

【長柄】りょくかいのほこ

ひたすら寡黙で、ひたすら大自然を愛し、風向きと潮目を読む事に長けた好男子がいた。
矛に似た銛を片手に緑海に素潜りし、自分と近隣の人間を喰わせるだけの魚を獲って暮らし向きを立てていた。

王は政変から身を守るため、海岸の田舎町に隠棲していた時代があった。
その際、緑海を愛する王と好男子の間に友情が生まれた。
隣国との戦争が激化した際、王は彼の元を訪ね、自分の騎士として戦ってくれるよう頼んだ。

その好男子は王から報償を一切受け取らず、骨惜しみせずに働き、遂に水戦で隣国の軍勢を撃破した。
城で戦勝の祝賀会が行われるも、その最中、王は脳溢血で急逝。
国葬の前夜、王の遺骸を収めた柩がなくなり、好男子もまた姿を消した。

好男子は友の柩を海辺の町へ持ち帰り、自分の矛ともども、友が愛して止まなかった緑海に沈めた。
以後、彼は素潜りして生活する日々に戻り、二度と世俗に関心を持つ事はなかったという。

# 毒蛇の顎



奸智に長けたその将軍は前王を謀殺し、空位となった玉座を乗っ取った。
が、大義や道理を無視したやり方にたちまち反発が起き、そういった者たちがレジスタンスを結成した。
こうして国内は二派に別れ、大々的な戦争が勃発した。

奸智に長けたその将軍は隙のない兵法でレジスタンス軍を足止めし、恩賞をちらつかせ、敵軍の内部崩壊を誘った。
将軍への義憤はそう長持ちせず、利につられた者がだんだん離反しはじめた。

やがてレジスタンス軍は敗れ去り、幹部は全員捕縛された。
奸智に長けた将軍は彼らに「他の全員を殺した者には特赦を与える」と約束し、同じ房に全員を閉じ込めた。
しばらく経ち、「一人の囚人が他の全員を殺した」と報告が届き、将軍は冷笑した。
「よし、とっておきの恩賞を与えなくては。ここへ呼べ」

「ふん、昨日の仲間たちを食い物にし――」
つま先に痛みを感じ、目を向ける。蛇が噛みついていた。
元幹部は嘲笑し、「俺には呪術の心得がある。牢に迷い込んだ蛇を捕まえ、俺は提案した。『全員の命を振り絞って偽りの王を殺そう』と」
そう、数人の命を贄とした呪術で凡百の蛇は毒蛇へ変貌を遂げ、奸智の偽王を死に至らしめたのである。

# 虹に捧げる唄



ガイアが俺に囁いている――もっと虹に唄を捧げろと。
フッ、ミューズに愛されし色男の義務ってヤツだな。

またまた女を泣かせちまった。
ギターを捨て、人並みの暮らしをしてほしいと俺に望んできたからだ。
わかっちゃいねえな、俺は魂が詩人だってのに。

今日も部屋でギターをつま弾き、甘く切ないバラードを歌い上げる。
我ながら惚れ惚れするような美声だ。
栄光に彩られた未来が見えるようで、自分で自分の才能が怖くなるぜ！

あーあ、とうとうやっちゃったわ。
だってうちの息子、歌もギターも下手すぎるんだもん。
しょうがないわね、昔ミュージシャンとして鳴らした母さんが遺志を継いであげる！
さあ、虹に唄を捧げるわよ！

# 陰森の灯

【魔具】いんしんのともしび

その森は見えないけど存在。
あるけど見えない森。
それが陰森。
陽が届かぬ昏き森。

あらゆる森とをつなぐ道。
この世に非ざる植物の宝庫。
生きた動物のいない場所。
それが陰森。

見るには特別な灯が必要。
入るには闇に凍えぬ灯が必要。
陰森の木で造られたランタンが必要。
命を燃やすランタンが必要。

長くいると影になるのが陰森。
灯を絶やすと闇にのまれるのが陰森。
外の灯を持つと食われるのが陰森。
振り返ると出られないのが陰森。

# 海馬の書



1　この本について
この本は　まほうの力で
しーほーすという　まものを閉じこめて
使役と飼育が　できるんだよ！
上手につかえば　国がほろぼせるよ！

2　しーほーすの飼い方
さいしょに　本に血をたらして　けいやくをしよう。
けいやくしたら　本を開くと　しーほーすをしょうかんできるよ。
まりょくをあげながら　命令すると　言うことをきくよ。
まいにち　えさを一人分と　海の水をあげよう。

3　しーほーすのとくぎ
しーほーすは水の上で　音よりもはやく動けるよ。
体当たりができるよ。ひきにく　りょうさんだね！
お水を　いきおいよく　はっしゃ　できるよ！
お水のなかに　大きな　うずまきを　つくれるよ！

4　保護者に向けて
シーホースは児童用ですが、元は戦術級召喚獣なので注意を。
餌は適量を。過不足により、凶暴化や過成長の危険があります。
飼育には海水を利用。不足すると周囲の水を海水化します。
また本商品による損害責任は当方では負いかねます。

# 氷神の杖

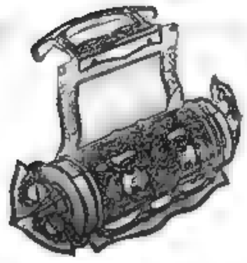
【祈祷】ひょうじんのつえ

凍てつく永久凍土の彼方。
氷を司る竜神がいる。
慈悲深き竜神ではあるが、
その身は何者にも侵されぬ絶対の氷。
定命の者が近づくこと能わず。

氷の竜神、温もりを求め、自らの魂を杖に封じ、
人の世界を解き放つ。
氷神の杖、あらゆる傷、病魔を凍らせ砕く。
慈悲深き竜の心と力を持つ神器。
誰もが、その杖を欲した。

人の温もりを求めし氷の竜神。
心に温もりを持たぬ者の手には、
決して留まることはない。
人の温もりと心を糧に、氷神の杖は、
美しき氷の慈悲を、世界に施した。

やがて氷神の杖は温もりを得て成長する。
しかし杖に温もりを授けた杖の持ち主は、
皆、氷神の眷属として相応しい、
心の冷たき者となり、氷神の杖に見放される。
やがて氷神の杖は、悪しき竜の杖と呼ばれる。



# 成金の書

お金サエあれば満足デスか？
お金さえアレバ何デモできますカ？
我々はソウデハないと思いマス。

真実ノ友情ハお金で買えますカ？　あなたのピンチに、手を差し伸べてくれる友人ハ、お金で買えますカ？　キット緊急時ノ対応を、友情契約ニ盛り込めバ可能です。

知識ハお金で買えますカ？　キット買う事はデキマセン。デスが、知恵を持った人を雇うことは出来マス。まあソノ人の知恵が本物かヲ判断する事はデキマセンが。

豊かな感情ハお金で買えますカ？　キット、愛も充実した日々モ、お金デ買うことが出来マス。デスが、金で買ったソレラで心ガ満たされるかは、貴方次第デス。その幸福ヲ幸福と感じられる心ハお金で買うことはデキマセン。

# 誓約の鍵



「絶対に内緒にしよう」と少年は言った。
「ああ、俺たちだけの秘密だ」と残りの二人は頷く。
かくして三人はとある品を箱にしまい、家にあった魔法の杖で封印し、埋めたのであった。

それから十数年の月日が流れ、三人は成人した。
ある日、一人が墜死体となって見つかった。
崖の上から落ちたようなのだが、事故なのか誰かに突き落とされたのかが判然としなかった。

数日後、二人目が貯水池で溺死体となって浮かんでいるのが見つかった。
誤って落ちたのか突き落とされたのかがやはりわからず、三人目は恐怖した。
怯える彼のところに杖を突いた死霊術師が現れ、口を開いた。
「少年の怨念に囁かれ、お前の罪を知ってしまったぞ」

昔、四人でかくれんぼしていた少年たちの一人が古井戸に落ち、首の骨を折って死んでしまった。
古井戸の脇に少年の首飾りが落ちていた。他の三人はそれを埋め、連帯責任を回避したのだ。
少年の亡霊から真相を聞いた死霊術師は最後の一人に忠誠を誓約させ、奴隷としたのである…。

# 氷弾の魔銃



寒さの厳しい北方諸国の旅は、思った以上に堪えた。
気候や情勢が比較的穏やかな国を通って行くような真似をせず、気の赴くままに旅路を歩く。
旅の空こそ、生まれて以来、常に身近にあったものだ。
少々の不便や困難がないと、むしろ落ち着かん。

道中、一段と情勢の悪い国を通りがかった。
関所に差し掛かるなり、手荷物をあらためられ、そのまま軟禁された。
説明を求めてもハッキリした答えは返ってこなかったが、どうやらスパイ容疑をかけられたらしい。

牢内には老人が膝を抱えて座り込んでいた。
彼の様子を観察し、呼吸が不自然に荒いことに気付く。
そう、老人は病気で死にかけていたのだ。
ここに留まり続ければこの老人は死ぬし、私も同じ運命を辿るだろう。
食事を持ってきた牢番の喉輪を締めてカギを奪い、老人を連れて脱獄した。

追っ手の兵士はオオカミを放った。
私は雪玉を固め、ブーツに仕込んでおいたスリングを構えた。
勢いよく雪玉は次々に飛び、オオカミたちの額に炸裂。彼らは怯み、逃走した。
老人は感激の面持ちで私の手を取った。「私は魔法技師だ。今の戦いぶりを見て、閃いたわい」
――後日、老人は「氷弾の魔銃」なる品を生み出したと風の噂に聞いている。

# 焰の棍棒

【打撃】ほのおのこんぼう

父は酒を飲んで母を殴るロクデナシだったが、読み書きを教えてくれた。
私はそれで身を立て、代筆屋になった。
稼ぎに見合う美しい妻を貰ったが、ある日気づいた。妻の首筋に私のものでない噛み跡がついていることに。
私は妻と間男を殺す決意をし、棍棒を作った。

ある晩、私は妻から誘われ、気乗りしないままに抱いた。
行為が終わった後、妻は言った。「あなた、助けて。私、悪い男に脅されて、体を許してるの」と。
さめざめと泣く妻を見て情愛がぶり返した私は、「任せておけ」と請け合った。

私はその男を呼び出し、「家内に金輪際近づかないでもらおう」と言った。
だが彼は「コナをかけてきたのは向こうだぞ？　抱くたびにヒイヒイ言って喜んでる」と言い返してきた。
私は彼に掴みかかり、扼殺した。そこで、ガツンと後頭部を一撃された。

その場に倒れた私は、薄れ行く意識の中、冷笑を浮かべた妻が傍に立っていることに気づいた。
「夫も愛人も両方片付いたわ。私、また新しい出会いを探すわね」と妻は言い、私が作った棍棒を放り出し、火口で火を点けた。
血と脂を吸った棍棒はごうごうと焰を灯した——

# 探究の根棒



パーパーパーパララパッパパー（ヘイヘイ）
※メガホン叩いたりしながら絶叫
パーパーパーパララパッパパー（ヘイヘイ）

パーパーパー（ヘイ）パーパーパー（ヘイ）
パッパパーパッパパーパッパパー
（ドンドンドンドン）※メガホン叩きまくる

ホームラン！　ホームラン！　ドッロシー！
ホームラン！　ホームラン！　ドッロシー！
ホームラン！　ホームラン！　ドッロシー！
ホームラン！　ホームラン！　ドッロシー！

♪勝～負、決める ひと～ 振り～
血と～ 汗～ の 研究。
その～ 手で 夢 つ～かめ
さぁ 輝け、ドロシーーー！

# 伯爵家の家具



うぉっほん！　私は代々伯爵様の家にお仕えしてきた家令であるぞよ。
伯爵様はやんごとなきお方ゆえ、その伴侶も由緒正しき血統でなければならん。
が、伯爵様はいかがわしい商売女を連れてきて、「彼女は今日より私の妻である」と仰せになったのじゃ。
しかもその女、「嫁入り道具」なぞと称し、物騒な鎌を邸内に持ち込みおった。

卑しき商売女が屋敷をうろつくようになり、私は鬱々として楽しめぬ日が続いた。
そんなある日、使用人の一人が殺された。脳天から鋭い刃物で真っ二つに斬り下ろされて、じゃ。
死体を検分した私は、「さては、あの女狐のしわざか！」と閃いた。

また使用人が殺された。前と同じく、脳天から鋭い刃物で真っ二つに斬り下ろされて。
私は女狐に「この毒婦が、お前のしわざだろう！」と詰め寄った。
すると伯爵様が現れ、「あらぬ疑いをかけぬように」と仰った。
私は堪忍袋の緒が切れ、大声で叫んだ。「いいえ、伯爵様！　この女が現れてからここはおかしくなりました、今すぐ彼女を追い出してください！」

伯爵様はその場に役人を呼び入れ、私は拘束されてしまった。
役人たち曰く、私はあの商売女に惚れており、彼女が伯爵様の奥方となったことで絶望し、夜な夜な人を殺しては罪をあの女になすりつけようとしていたのだという。
そもそも商売女は嫁入り道具として鎌など持参していないと。
――かくして私は独房に繋がれた。
私が狂っていたのか、あの女が化かしていたのか、未だに考え続けている。

# 嘶く有翼

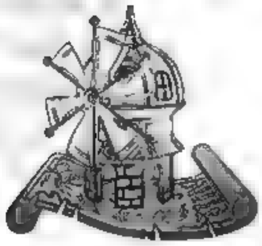


オレは言うなりゃ有翼のギタリスト！
呼ばれりゃどこへなりともすっ飛んでいって、愛器をガンガンかき鳴らすぜ！
なに、出張料？　そんなもんはいらねーよ！
そんかわり、ギターのお次はオレの歌も聴いてくれよな！

その…悩みを聞いてもらっていいか？
ギターソロを披露するとオーディエンスはゴキゲンで、拳を振り上げて熱狂してくれるんだけどよ。
オレが歌おうとすると、サササッと客の大半がいなくなっちまうんだ…。

へっへっへ…。よう、聞いてくれよ！
とある劇場の支配人が、専属歌手としてオレと契約したいって言ってくれたんだ！
今までさんざん辛酸を舐めたが、世間のほうがこれ以上オレの才能をほっとけなくなっちまったんだな！

聞いてなかったんだ。契約したのが、お笑い劇場だったなんて。
オレの歌を聴いた客どもは「こいつはまさに“嘶く有翼”だ！」とか、ゲラゲラ笑いやがって。
そんなわけで、支配人の頭蓋骨をギターで陥没させてやったんだ。後悔なんかしてねーよ。



# 風巡りの書

【魔書】かぜめぐりのしょ

風は遍く世界を巡り、生命の息吹を運ぶ。
それは天地開闢よりのこの星の営みである。

だが同時に、風は災いを運ぶ。
災いが人の体内に入り込むことで均衡が崩れる、いにしえの人はその現象を「風邪」と呼称した。

正しきも悪しきも、風はすべてを運ぶ。
ならば《風巡り》たる俺もそれを追いかけ、どこへでも行かねばならぬ。
それが俺の定めなのだ。

あ、いや、俺は《風巡り》なのでどこへでも行かねばならず、女風呂に立ち入ることも――
ち、痴漢の言い逃れなどではない！
ま、待て、いま牢にぶち込まれては《風巡り》はどうなる！？
こ、ここから出してくれ…！

# 固執の宝槍

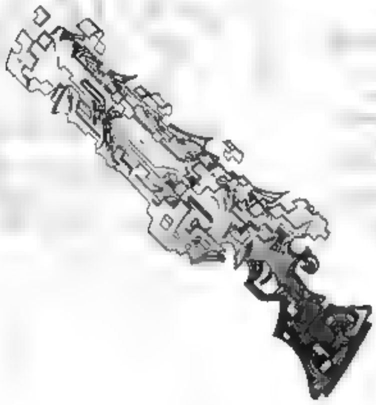


パパはよく言っていました。
「パパの生き甲斐はふたつある。
ひとつめはママで、ふたつめはお前だよ」
パパは、ママとボクのことが大好きでした。
ボクたち家族3人はとても仲良しなのです。

その日は突然やって来ました。
ボクが遊びから帰ってくると、家にママがいませんでした。
少し遅れて帰ってきたパパも行方を知らないと言います。
電話が鳴って出ると、病院からでした。
ママが事故に遭って死んだのだと、お医者さんは言いました。

電話を代わって少し話した後、パパは通話を終えました。
それから、壁飾りの槍を外しました。
「生き甲斐を失っては生きていけない」
そう呟いたパパは、自分の喉を槍で突きました。
パパは大きな痙攣を繰り返して血を吐き、動かなくなりました。

残されたボクがやることはひとつだけでした。
家族はいつまでも仲良く暮らすべきだと思うのです。
だからボクは、パパから突き出た槍の切っ先に身を投げました。
電話をかけてきたお医者さんに、うちの苗字はそんなんじゃないって言うのを忘れちゃったな、と思いながら。



# 侵略者の銃

【射出】しんりゃくしゃのじゅう

都内のインベーダーハウスで開かれた大会は、その日、決勝戦を迎えていた。俺は横に並んだ2つの筐体の内の一つに座った。後ろのギャラリーから間髪入れずに歓声が湧く。その中には黄色い声もたくさん混ざっていた。

当時の俺は高校生だったが、地元では敵なしのプレイヤーだった。ギャラリーには俺の腕に惚れて、俺の追っかけになった女が5人もいた。
女たちに良いところを見せようとしたが、決勝戦にも関わらず対戦相手はレベルが低かった。つまらないミスで既にスコアを大きく落としていたのだ。

俺の勝利はもはや揺るがない。
そこで俺はわざと急場を演出し、ギャラリーにサービスしてやる事にした。
ところが、俺の意図的なパターンミスを見て欲が出た対戦相手は、自分のペースを乱したあげく名古屋撃ちのひきつけに失敗して砲台を失うという無様な結果で自滅してしまった。

急場の演出すら難しくなった俺は仕方なく最短でパターンを繋ぎ、自己ベストを更新。優勝を決めた。
優勝者の俺に運営から賞金とトロフィーが授与され、雑誌からインタビューも受けた。
後日、「KIT」という俺のエントリーネームがその雑誌にデカデカと掲載された。

『スペースインベーダー』

SPACE INVADERS™ & © TAITO CORPORATION 1978, 2022 ALL RIGHTS RESERVE.

# 侵略者の剣



【1P：大会参加者3300人の頂点に立ったのは……】
『スペースインベーダー』の全国大会の優勝者がYAM選手に決定！
見事栄冠を勝ち取り、賞金とトロフィーを手にした！

【2P：優勝者インタビュー】
Q:決勝戦の対戦はいかがでしたか？
A:相手のKNSさんは有名なインベーダープレイヤーだったので勝つ自信はありませんでした。今回はたまたまKNSさんがインベーダーのひきつけに失敗して自滅しただけなので、棚ぼたな勝利だと思っています。

【3P：優勝者インタビュー】
Q:本大会を通して、もっとも印象的だったことは？
A:一緒に大会にエントリーしていた友人のKITが予選前に気胸で緊急入院してしまったことです。正直僕よりも上手い奴だったんですが、それで不戦敗になってしまって、とても残念でした。

【4P：優勝者インタビュー】
Q:優勝賞金は何に使う予定ですか？
A:お恥ずかしながら大会中に彼女ができたので、その子とのデート代に使わせていただければと（笑）



SPACE INVADERS™ & © TAITO CORPORATION 1978, 2022 ALL RIGHTS RESERVE.

グレーテル/
パラディン

# 虚妄の槍

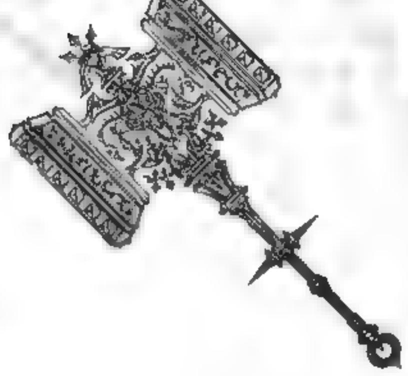
【長柄】きょもうのやり

眩しい朝焼けに目を細める。
ベットには君が腰掛けていて、
「おはようございます、兄様」と
ほほ笑みかけている。

僕は、その表情が好きだった。
オレンジ色に染まった君の姿が好きだった。

君がどれだけ変わってしまったとしても
僕がたとえ大人になったとしても。

その記憶だけは忘れる事が出来ない。
忘れたくない。
……そう、思っていたんだ。



# 封魔のハンマー



その少女は悪魔憑きであった。
彼女は家畜小屋に幽閉された生活を送っていた。
そんな孤独な少女に寄り添ったのは小屋の中の動物たち。いつしか彼女は動物と会話をするようになっていた。

外の世界からやってくる「人間」を彼女は怖がった。実の母親すらも彼女にとっての異物であり、動物だけが彼女のよりどころであった。

そんな少女の境遇を母親は誰よりも哀れに思い、教会で祈りを捧げる日々を送っていた。するとある日奇跡が起きる。馬小屋に一条の光が差し、少女に憑いた悪魔を浄化したのだ。

母親は大層喜んだが、少女は悲しんだ。彼女の友人、それこそが悪魔の正体だったのだ。
心が壊れてしまった彼女は、記憶に残る悪魔の言葉を使い、亡くなった友の名を呼び続けた。

# 大将首の杖

【祈祷】たいしょうくびのつえ

大きな戦いがあった。
戦いで敗北した九曜の紋章の王が斬首刑となり、その首が処刑場に残された。

それから数百年後、九曜の王を倒した、芙蓉の紋章の王が倒された。
新しい政府は王の首を斬り放り捨てた。そこは芙蓉の王が九曜の王を斬首した場所だった。
首は長いことお互いにひたすら沈黙していた。
二百年近くたった後九曜の王の首がふいに口を開いた。

「今の王政はひどいらしいな。王と共に官僚が科挙を突破した頭脳を利己的に用いて民は苦しんでいるらしい」
「そうかね……」
「なんとかしてやろうと思わないのかね」
「九曜の王は確かにそういう者だったと聞いていた。それで余に立ち向かってきた、と。だがな、別に余にはお前のような高い志があったわけでもない。ただ王として勝ちたかった。それだけだ」

「……が、よく考えてみれば余をしりぞけたものがかつて余のものだった地で身勝手にふるまっている。これもこれで特段面白いわけでもない……」
「ならば……」
「死してなお働くというのも、いささか骨の折れる事ではあるが……」
そして二つの首はその念を結集させた。
すると、三星の旗がゆらぐ都の上空に暗雲がたちこめた。雲中には稲光が明滅し、次第にすさまじき低い音を奏ではじめた……。

# 神水の儀式



人々に追っ手が迫ってきたため、人々の中にいた神の使いと称する男は笛を吹いた。
笛からは水が流れ出た。

神の使いの笛から湧き出た水により、辺りは洪水となった。
洪水に溺れ、人々の追っ手は全ていなくなった。
だが水は湧き出し続けた。

いつの間にか神の使いと称する男も水に呑みこまれていなくなってしまい、人々にはもはや笛から湧き出し続ける水を止める術がなかった。

濁流はすべてを呑み込みその果てに、生きとし生けるものすべてを洗い流した清浄な大地と、笛だけが残った。

ドロシー/
パラディン

# 探究の槍

【長柄】たんきゅうのやり

西ニ困窮シタ友人アレバ、行ッテソノ研究ヲ負ヒ。
東ニ予算ノツカヌ研究アレバ、行ッテ資金ヲ集メ。

南ニ死ニサウナ研究者アレバ、行ッテ研究ヲ引キ継グトイイ。
北ニ受賞ヲ逃シタ旧友ガアレバ、行ッテ慰メテヤリ。

研究ガ失敗シタトキハ、涙ヲ流シ。
己ノ限界ヲ知ッタ夏ハ、オロオロアルキ。
好キデモナイ女ヲ孕マセタ冬ニ、シブシブ婚姻シ。
ミンナニデクノボートヨバレ。

ホメラレモセズ。
クニモサレズ。
サウイフ間抜ケナ研究者ニ、ワタシハナリタクナイ。
ワタシハ自分ノヤリタイ事シカ、ヤリタクナイ。

# 聖剣・剣絶ち



それを剣と呼ぶのは、まっとうな剣士ならば違和感を覚えただろう。
背骨のような歪な形の小さい刃の群れ。
それらが、魔力によって一本の剣の形に形成されている。
その剣を使い、まともに戦えるとはとうてい思えない。
見た目だけの虚仮威しの剣。初見では誰もがそう思った。

しかしその剣は恐るべき力を秘めていた。対峙する男は、それを知っていた。あれは剣であり、鈍器であり、鎖でもある呪具。
視覚の外から襲いかかり、絡まり、引き裂く。
扱いは難しいが、使いこなせればマトモな剣士は文字通り太刀打ちできず、剣と鎧を破壊される。

男は剣の本質を見抜いていた。あれは武具を蝕み喰らう呪いの術だと。刃の欠片に纏わりつく、強い念が見えていたのだ。
ゆえに男は己の聖剣を邪剣にわざと破壊させ、邪剣の動きを止めさせる。そしてその好機に、全力で呪いを解く法術を起動。
神聖な光が邪剣を包んだと同時に、男の命は千切れた。

奇妙な敵だった。見てわかるほどの剣の使い手。なのに己の剣を手放し、役に立たない術を使って、この剣に鎧ごとさかれた。
男は肩をすくめて愛剣をしまう。世の争いを嫌い、武具を嫌う聖女。
その背骨から作られた剣――聖遺物。
戦う力を奪う、聖女の奇跡の力が宿った聖剣である。

# 氷山の杖

【祈祷】ひょうざんのつえ

百年に及ぶ戦の終結と平和条約の締結。
この尊き日を記念して、北国の王は南国へ魔法の杖を贈った。
それは一振りすれば、北国を象徴する氷の山の息吹が
振りまかれる杖で、酷暑の南国では大層喜ばれた。

贈り物に感激した南国の王は、
南国の強い陽光が振りまかれる杖を北国へ贈った。
極寒の北国が少しでも暖かくなるようにという心遣いだった。
北国はこれを大層喜び、杖を乱用するに至った。

やがて北国では氷の山が溶け出し、国土の一部が氷水に沈んだ。
北国の王は、これを南国の卑劣な罠だと糾弾。
杖を送り返し、それを宣戦布告として南国に攻め入った。
南国の王もまた北国の杖を送り返し、北国を糾弾。
北国の兵を迎え撃ち、戦の火蓋は再び切って落とされた。

――百年後。王の子孫らは長き戦に辟易し、
両国の同意を持って平和条約を締結した。
そして北国の王は、妙案を閃く。
「我が国の氷の山の息吹を振りまく杖を贈呈すれば、
南国への友好の証となるのではあるまいか？」

# 標本図鑑

【灰色の脳細胞を持つ狂科学者・ガーブ博士】
彼は博覧強記の頭脳を持ち、幼い頃から頭角をあらわし、わずか十歳で博士号を取得した。
象牙の塔で研究職に就いた後は俗世に関心を失い、研究に没頭。
数年後、若く健康な男女を誘拐しては殺害し、彼らの体をあちこち継ぎ接ぎした人造人間をこの世に生み出したのである。

【掠奪愛の美少女・エルミーナ】
子供の頃は控えめに言ってもブスであり、男の子たちから虐められていた。
だが十五歳の頃から背が伸び、目鼻立ちがはっきりし、以前と同一人物とは思えないほどに見目麗しくなる。
そして、恋人持ちの女性を性愛の対象とし、次々に彼女たちを虜にしていく。
そうすることで、かつて自分を迫害した異性たちに復讐していたのであろう。

【二つの顔を持つ子供・ジュスタン】
教会の厨房で働く善男善女の間に生まれた彼は礼儀正しく、誰からも好かれていた。
ところがある日、両親の手伝いで大聖堂の清掃に赴いた際、聖遺物を盗もうとして捕まってしまう。
「父さんも母さんも、神さまのことばかり気にかける。だから僕は目に見えるものにだけ興味を持ち、気づけば、それを盗めるかどうかだけを考えてたんだ」と彼は語った。

【著者あとがき】
この世で最高のミステリーは何かと聞かれたら、迷わず私は「人間」と答えるであろう。
積み重ねてきた人生がヒトを形作り、その結果、とんでもない者が生み出されることがある。
筆者はそんな彼らを狩り集め、標本にしてきた。
さあ、我が墓の真下に続く階段を降りたまえ。
諸君はそこに、生前と少しも変わらぬ彼らの姿を見出すであろう！

三匹の子豚/インベーダー

# 暴食の侵略槍

【長柄】ぼうしょくのしんりゃくそう

101111100101000011
01001001100111010

1001011010010010
1001011101100110

1001011111001110
1001011100100010

1001001100111110
1111111100110111
00111110110101

スペースインベーダー

# 被虐の侵略杖

1011110010100001101
0010011001110101111

111011011110100101
101011011010010111

100011101001011110
100110100100110011

11101111011110001
11011011111101001

# 咆哮の斧

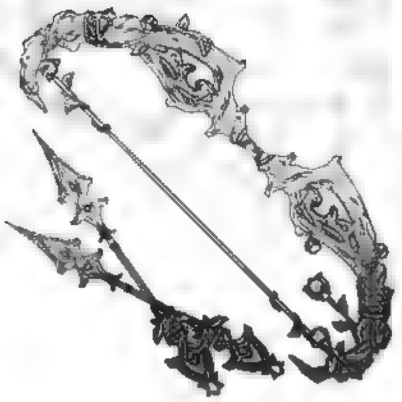
【打撃】ほうこうのおの

長い間平和だった村の近くの山から、時折地鳴りがするようになった。
そしてそれとほぼ同時期、山頂から獣うしき咆哮が聞こえてくるようになった。
恐ろしい生き物が住み着いてしまったようだと人々は不安げに顔を見合わせ噂した。

咆哮はある日を境に止まらなくなった。
昼といい夜といい、吠え続ける。
そのうち山を降りて村を襲いに来るのではないか。脅えた村人達は夜も交代で見張りをたてるようになり、いつあるかもしれない獣の襲撃に備えた。
そしてある日、咆哮がぴたりと止まった。それは二度と聞こえてくることはなかった

村人たちが意を決して山に行ってみると、山頂の近くで一頭の獅子が倒れていた。
獅子は目に大怪我を負っていた。傍には血のついた噴石が落ちており、あたりでは地鳴りが低く響き続けていた。

村人が脅えていた相手は、大変臆病な獅子だった。
風が鳴り、茂みが揺れると、脅威を遠ざけようと威嚇し吠えた。
噴石の直撃で盲目になった獅子はなんとか脅威を寄せつけまいとして吠え続けていたのだった。
だが獅子の咆哮は、その相手、地鳴りに対しては意味を為さなかった。
彼がいくら吠えても地鳴りは彼を取り囲むように鳴り続け、憔悴しきった獅子はついにはその場で力尽きたのだった……。



# 樹海の弓

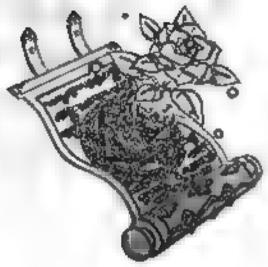
【射出】じゅかいのゆみ

大陸の壱の国、自然より生まれ出でた女人を
後宮に迎え入れ、帝と契りを交わすことを良しとする。
泉の女人は雨を、華の女人は蜜を、土の女人は実りをもたらす。
女人は精霊の御遣いとされ、一代にひとり、いずこからか現れ
今上帝が逝去すれば女人もまた、人知れず姿を消した。

烈帝の御代に現れしは、樹の女人。
白木のように滑らかな肌を持つ美しき女人であったが
烈帝は神話、寓話、妖術や占術といった類いを厭っていた。
故に女人には触れず、無一文で後宮より追い払った。

以降、壱の国では山が崩れ、大量の家屋と民を飲み込んだ。
跡地から数多の新芽が溢れ、瞬く間に巨木の森が成った。
森は国を喰らい始めた。
驚異的な速さで拡がる森を止める手立てはあらず、
いつしか壱の国は樹海に沈んだ。

長き時を経て大陸には開拓者が現れ、樹海を進んだ。
巨木を切り倒し家屋を造り、家財を造り、弓矢で獲物を狩った。
若き首長の弓は一際美しい白木で造られた。
やがて、彼の下に精霊の御遣いを名乗る女人が現れる。
こうして弐の国は成り、遠き滅びの日まで栄えるのであろう。



# 神木の巻物



果てのない砂漠で絶望を覚えたなら
この巻物を開けなさい。
あなたの喉を潤す
仙人掌が育つでしょう。

息苦しく汚れた空に絶望を覚えたなら
この巻物を開けなさい。
汚れた地を浄化する
強い樹が生えるでしょう。

残り僅かな命に絶望を覚えたなら
この巻物を開けなさい。
来季の花が咲き乱れ
あなたに希望を与えるでしょう。

未だ絶望を知らぬと言うのなら
この巻物を開けなさい。
ただの花が一輪、
神の救済なき、現実を教えるでしょう。

# 開花の杖

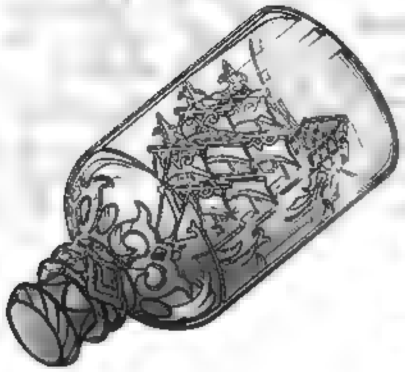


森の奥に、蔦に覆われた小さな建物がある。
既に使われることのない寂れた教会だ。
内部も蔦に侵食されているが、一角だけは常に紅葉している。
そこには、紅い蕾がついた杖が隠されている。

かつてこの教会には熱心な牧師が通っていた。
教会には、付近から敬虔な信徒が足を運んだ。
老齢の者がほとんどであった。
彼らの子は不便な土地を嫌い、遠い地で暮らしていた。
信徒らは残り僅かな生を孤独に過ごす他なかった。

彼らの境遇に牧師は深く同情した。
独り寂しく死を迎えるくらいなら看取ってやりたいと考えた。
だから死期が近い信徒の喉を杖先で突き破っては、
その者が息絶えるまで傍らで泣き尽くすのだった。

やがて牧師は教団本部に連れ去られたが、杖は残された。
信徒らは、死期を悟るとその杖で自らを刺し殺すようになった。
自宅で孤独に果てるよりも、幾人もの命を吸った杖に
自分もまた命を捧げ、皆とひとつになりたいと願ったのだ。
今日も杖の蕾は鮮血で紅く染まっている。



# 封じられし帆船



その思いが水を発生させ
敵を溺れさせる　封じられし帆船

帆船は
いまだ始まらぬ航海と
荒れ狂う海のことを毎日想う

帆船の航海が始まることは未来永劫決してない
帆船は
かつて己の思い描いた壮絶な航海によって
既に沈んでいたのだ

かくして……
自らを航海から封じ続けた亡き帆船の後悔の念は
これからも敵を沈め続ける
ひたすらに

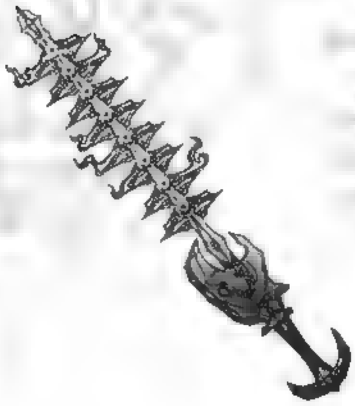
# 恍惚の眠り

その楽器は、人を恍惚へと導きます。

恍惚に近い歓喜の中、意識が次第に曖昧になっていきます。

曖昧となっていく意識の中、次第に我を失っていきます。

そして意識が途絶えていきます。
それはこの世に別れを告げる前の最後の眠り……。



# 被虐の黒剣

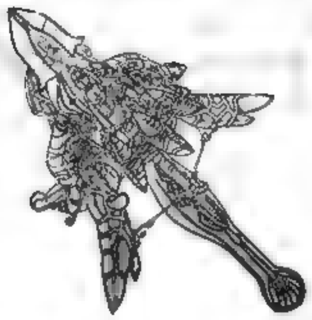
【刀剣】ひぎゃくのこくけん

幼い頃はただ辛かった。
この胸の内から吹き出し続ける衝動を
どのように発散すればよいのかわからなかった。

小さい頃は素晴らしかった。
あてどなく、夜道を歩いているだけで
沢山のケダモノたちが
どこまでも激しく乱暴にもてなしてくれた。

少し大人になって、社会を知った。
欲望の赴くまま生きることは
その分、同性の反感を買うことを理解し始めた。

そして今、現代の生き方を知った。
情報化社会と呼ばれる現代では
大体のことは調べれば解決する。
どこまでも手軽にあらゆるものが
手に入ることを知った。



# 悲哀の狩弓

【射出】ひあいのかりゆみ

「この村はもう、終わりつつあります。
異国より持ち込まれた獣人化の病によって
全て飲み込まれてしまいました」

黒衣のマントを纏った女性は「早くこの村から立ち去りなさい。貴方を病が飲み込んでしまう前に」と最後に告げ、足早に去っていきました。それから注意深く村の様子を観察すると、あることに気が付きました。この村は3つの勢力に分かれているようです。

何も知らない哀れな村人。全てを知り、変わり果ててしまったかつての同胞と共存の道を探る者。そして、病状が発症するより前に新たな安住の地を探す者。……きっとどれも間違っている。

答えはもう、出ているの。
これ以上感染者を増やす前に、全て殺すしかない。
「なんて哀れで悲しい物語なのでしょう……」
そう呟いた私の声は、冷たい雨に打たれたように寂しげだった。

# 卑劣の狼弦

【楽器】ひれつのろうげん

このハロウィンに浮かれる村はどこかおかしい。
村を歩いても子供がいない。

いや、いるにはいるが数が少なすぎる。
それに高齢者の数も異様に少ない。
若者ばかりがいる村……これは何かありそうだ。

皆同じような背格好。
数パターンしかない髪型。
この村の支配者は独裁的な性格なのだろう。

通常は村長が支配者なのだろう。
独裁的に集団を支配したがるヤツは大抵目立ちたがり屋だ。だが、ホントにそうなのか？
どうもよくわからないが、きな臭いことだけはたしかだ。

# 魂喰の薄鎌



汝、何のために我を欲する？
…ほほう、仇討ちのためか。悪くない答えだな。
他の誰でもなくこの我を選んだという点でも、因縁を感じる。

我を手にする者は常人の枠をはみ出た力を授かる。
汝が望む血塗られた復讐を実現するなど、たやすいことだ。

ただし代償として、汝の魂は我が貰い受ける。
汝が命を落とした後、神の国に迎え入れられることはない。
永遠に地獄でこき使われることとなるが、それでも良いのか？

何？　汝ではなく汝が殺した者から魂を奪え、その方が我にとっても利益になるはずだ、だと？
ははっ、大概の者は一も二もなく我と取引してしまうのに、しっかりしているな。
よかろう、欲得にまみれた絆をここに締結しよう！
存分に我を振るい、我に魂を喰らわせよ！

# 獣魔条文

## 従魔条約

第一条
従魔契約ハ双方ノ合意ノ元行ウコト
合意ナキ隷属ノ強制ハ　イカナル手段ヲ用イテ拒否スルコトモ許サレル　カカル行動ニヨル損害ハ全テ契約者ノ負担トナル

第二条
契約後　使役スル際ニハソノ都度報酬ヲ支払ウコト
報酬内容ハ従魔ノ望ムモノヲ与エルコト
魔力ニヨル支払イハ二割増トスル

第三条
使役者ノ不手際不都合デ従魔ガ倒レシ場合ハ　復活ニ必要ナ魔力・活力ハ使役者ノ負担トスル
従魔ノ力ニヨリ得タ現世ノ利益ニ関シテハ　契約者ガ　ソノ権利ヲ有スル

第四条
契約ニ反シタ場合　契約者ハ魂ト肉体ヲ食ス権利ヲ従魔ニ与エルコト
従魔ガ契約ニ反シタ場合　ソノ従魔ノ魂・権能ヲ得ル　得タノチ　ソノ魂ガ反逆シテモ条約ニ反シナイ

# 束縛の魔具

「止めろ……止めろ、止めろ……触れるな。
それは……私のものだ」

両足に意識を伸ばす、動け、動け、動け……と、
壊れかけた肉の塊に指令を送る。
しかし、痛みで意識を集中することができない。

大丈夫。
こういう時の心の鎮め方を知っている。
「? $B&q……」
おまじないのように最愛の人の名を口にする。

彼の間抜けな欠伸顔を思い出すと、
フッと痛みが和らいだ――

スノウホワイト/ブレイカー

# 正義の大剣

【刀剣】せいぎのたいけん

幾度繰り返せば、辿りつけるのだろうか。
そう考えるのはもう……やめた。

――黒き獣の腹に大剣が突き立てられる。
底知れぬ暗く淀んだその洞穴から、赤黒くドロドロした液体が止めどなく流れ続ける。その勢いはとどまる事を知らず、バタバタと地面を濡らし続けた。

スノウはゆっくりと、崩れ落ちたナイトメアの元へと進む。白だった身体を赤く染めながら、一歩ずつ。でも、確かに。前へと進み、たどり着く。

「また、痛くするぞ」
そして、赤錆び色の声で泣き叫び続ける異形の首を、乱暴に踏みつぶした。
これが彼女の日常。これが彼女の逃れることのできない罪――

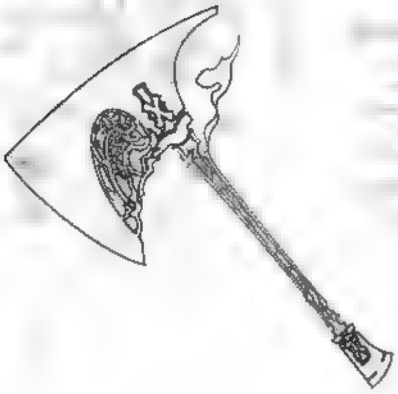
# 睡眠の書

「……わたし、頑張るから。だから、お願い……」
小さな女の子は私の手をぎゅっと握って離さない。

「いっしょにお歌を歌おうよ……きっと、楽しいよ」
目に一杯涙を溜めて、何度も、何度も少女は同じ願いを繰り返す。

「きうきう光る、お星さまのうた……
小さくて、もうすぐ死んじゃいそうなお星さまのうた」
それじゃあいくよ。そう言って女の子は一人で歌い始めた——

毎日夢を見る。
キラキラした夢や、ざあざあした夢。でも、今日の夢はとってもほわほわした夢だったなあ。
——思い出せない歌に手を伸ばすように、少女は掠れた声で歌を口ずさんだ。



# 依存の意思



「えー。トモキ君はご家庭の都合により、
転校することになりました」
——そんなのは嘘だ。
それくらい僕にだってわかる。

確かに彼は少し変だった。
だから浮いてしまうのは仕方がない。
彼は僕から見ても変わっているように見えたのだから、相当だ。

初めて話した時だって、彼は変だった。
「ねえ、○×△×△見せて」
「…………恥ずかしいよ」
「大丈夫。俺は笑ったりしないよ。だから見せて？」

命令されたら、僕は断ることはできない。
だってお母さんにそうするように育てられたのだから。トモキ君は最初にその事に気づいた。
だから彼は、僕の弱みに付け込んで——

# 正義の意思

「あんたはそっくりだ」
「誰に、でしょうか？」
「……私の娘だ」

三日前、特別看護室に入院してきた患者の語る
生産性のない話に、看護師は辛抱強く耳を傾けていた。

「もう一度、娘に会いたいものだ……」
「きっとすぐに会えるようになります」
愛想笑いと共にそう呟いた看護師は、
ベッドに横たわる患者の腕に注射した——

看護師はその患者の娘をよく知っていた。
そして、ちょうど数日前に同じ薬品を投与したばかりであった。

# 精霊の沈黙

【魔具】せいれいのちんもく

それは精霊の一種だと言われています。
目撃談の多くは新月の夜に集中していますが、
その理由は未だに解明されていません。
手にした明かりがよく目立つからではないか、
という説が今の時点では最有力となっています。

暗闇から現れたそれは、対象者の前に立ち続けます。
他に何をするでもなく、ただ立ち続けます。
がらんどうの双眸を対象者に向け、
夜が明けて昼になろうと、再び夜がやってこようと、
じっと黙って立ち続けるのです。

夢の中にすら現れて立ち続けるという
それから逃がれる方法は、ただひとつ。
死ぬことです。
自殺でも、事故死でも、他殺でも構いません。
手段も問いません。死だけが救いなのです。

そうして対象者が死ぬと、それは静かに去っていきます。
そしてまた新月の夜に、新たな対象者の前に姿を現すのです。
ちなみに対象者とは、この話を知っている者のこと。

貴方が次の対象者となりますように。

# 傲慢ノ曲剣
## （カゲウチ）

様々な器具で埋め尽くされた歪な空間。
私とよく似た少女が笑っている。

満たされることのない渇きが彼女を歪めてしまったのでしょうか？　今の彼女は、ただ苦痛を求める人形と化してしまったようです。

「オカシイノハ貴方ノホウヨ……」彼女はどこまでも悲しそうな声色で虚空に話かけている。

赤い獣が私の体の内側を駆けずり回る確かな違和感を感じながら、私はただ、彼女が腐り落ちていく様を眺めつづけていました――

# 訪問者の薙刀



職人の男は、家の中で倒れている二人の女性を見て、満足げに微笑んだ。
そこには確かに、彼の作り出した作品がこの世で役立った証が在った……。

家の扉を開けると、戸口に立っていた女の手の中には薙刀があった。
女は薙刀を振り回し、彼女の恋人を殺めた犯人を殺した。しかし彼女もまた返り討ちにあって倒れた。

女の敵討ちの相手、その犯人は女だった。
そして犯人の武器もまた薙刀だったのだ。

家で待ち構えていた彼女も、これから彼女の恋人を殺した犯人がやってくるから備えろと言われ、仇を討つための薙刀を渡されていた。
恋人を殺した真犯人の薙刀職人から……。

# 食事の音色



その男は、自他共に認める大食漢であった。
寝る時と歯を磨いている時以外、
常に何かを食べていた。
本当は寝る間を惜しんで食事をしたい程に
男は食べることを心から愛していた。

やがて男は、当然のように肥満体となり
そのうち自力で歩くことも困難になった。
医師は男の食事量を厳しく管理し、何度も絶食させた。
その度に男は、食事ができないなら死んだ方がマシだと騒ぎ、
慟哭するのであった。

男を癒すため、妻は奇妙な笛を作った。
それは、吹けば食事にまつわる音がするという代物だった。
フォークが皿に触れる音、ワインを注ぐ音、咀嚼音……。
絶食中に奏でれば気が紛れるかもしれないと、妻は言った。
そして男はこの笛を吹き、気づいた。

自分が愛してやまなかったのは食事そのものではなく、
食事中に聞こえてくる様々な音そのものであったのだと。
それから男は食事に興味を失い、この笛に夢中になった。
男は痩せて健康になったが、昼夜問わず笛を吹き続け、
家中に鳴り響く食事音に耐えきれなくなった妻は自害した。

# 炉心の本

☆袋とじ特集！！
知る人ぞ知る究極のダイエットドリンク
『灼熱ジュース』その正体とは？

本誌に寄せられた情報によると、ダイエット上級者の間で
密かに話題になっているドリンクがあるという。
一口飲めば誰でも簡単に痩せられるというそのドリンクを、
取材班は独自のルートで入手した。
以下は、そのレポである。

「袋とじ企画のライター、死んだらしいね。
記事作成の途中だったって聞いたけど」
「核燃料融かして飲んだらしいよ。死体ドロッドロだったって」
「あー、ガセの灼熱ジュース飲んじゃったか。
核燃料なんて飲めるわけないのに馬鹿だねー」

：灼熱ジュース：→検索
若者の間で流行するダイエット法を指す言葉。
舌を切り取ることで食欲減退効果を狙うダイエット。
その際に生じる大量の血液が、言葉の由来となっている。
ダイエット効果は抜群だがショック死に注意。

# 強欲ノ翼鎌
## (カゲウチ)

狄花のアダ花そよ散りて。
灯篭冥者に火が燈る。

後ろの正面に巣食う敗者。
しとど常世の玄界となす。

窮鼠の牙はなお折れず。
虚空の茜に蝉しぐれ。

さあ、指を切りましょう。
泡沫の夢が散りゆく前に。

# 黒牙剣

【刀剣】こくがけん

〈神羅の樹海〉に、漆黒の牙と体毛を持つ凶暴な獣が棲息している。
幼獣の頃はおとなしいが、成長を遂げて交配相手を探す頃になると手が付けられないほどの暴れ者になる。
彼ら〈魔獣〉は樹海の番人として深く畏れられた。

森の民は知っていた——〈魔獣〉を〈魔獣〉たらしめている要因は黒き牙であることを。
森の民らは折を見て樹海へ足を踏み入れ、幼獣を拉致して里へ連れ帰り、牙を折っていた。
成獣になるにつれて体毛は白銀色になり、おとなしい彼らを〈神獣〉として森の民は代々崇めてきたのだった。

獣を深く愛する男が里を訪れ、しばらくそこに逗留した。
やがて里の少女がその男と愛し合うようになり、彼に〈神獣〉と〈魔獣〉の秘密を打ち明けてしまった。
男は義憤に駆られ、「幼い獣を親元から拉致する悪習など、すぐさまやめるよう！」と里の長に直言した。
里の長はその場で部下に命じ、男を斬り捨てた。

男を深く愛していた少女は悲憤し、皆が寝静まった夜中に油を撒いて里に火をつけた。
物凄い勢いで広がった炎はすべてを——里も、そこに住む人々も、長年の悪習も——飲み込んだ。
——現在、里の民が折った牙が僅かに市場に流通し、それに惚れ込んだ鍛冶工が打った「黒牙剣」は稀代の名剣として世に伝わっている。

# 幸福の旋律



なあ、聞いてくれよ！
俺さ、ずっと好きだった女性に告白したら二つ返事で承諾してもらえて、結婚することになったんだ！

ああ、嬉しい！
嬉しくて嬉しくてどうしようもなくて、ワルツでも踊り出したい気分だ！

そうそう、その調子でヴァイオリン伴奏を頼む！
ほらみんな、一緒に踊ろう！
素晴らしき哉、我が人生！

オレは弓を動かす手を止め、ヴァイオリンを顎からはずした。
横たわる親友は先ほどの戦いで重傷を負い、臨終を迎えようとしていた。
演奏を聴かせるうちに眉間の苦悶が晴れ、幸せそうな顔を見せてくれている。
友よ、安らかに眠ってくれ。

# 癒しの導き

【祈祷】いやしのみちびき

その巫女は癒しの杖を手に戦地を巡り、傷兵らを癒していた。
彼女には噂があった。何と、誘われれば誰とでも寝るというのだ。
とある男が噂の真偽を確かめるべく、彼女のところへ行った。

次の日、彼は満足そうな顔をして帰ってきて、どれだけ甘く濃厚な一夜を過ごしたかを熱く語った。
こうして男たちは次から次へと巫女の元へ行き、その全員と彼女は寝た。

噂は加速度的に広まっていく。
大司教がその巫女に魔女の疑いをかけ、異端審問官を遣わした。
しかし派遣された彼も彼女と寝て、骨抜きになってしまう。

大司教は聖堂騎士団を派遣し、巫女を捕らえさせた。
だがその大司教も彼女と寝てしまう。
不犯を破ったことを苦悩する大司教に彼女は言った。「私、万人に癒しの導きをあげたいの。さ、罪悪感が消えてなくなるまで楽しみましょ！」

# 殲滅の大剣



軍略に長けたその将軍は大軍勢を手足のごとく統制し、どんな敵にも打ち勝った。驕り高ぶるところのない性格もあって王に深く信任され、王の許可なしで全軍を動かす権限を授かった。

叛乱が勃発すると、将軍は軍を率いて急行した。
最終的に叛乱軍は武器を捨てて投降したが、将軍はそれを受け入れず、一兵残らず殲滅してしまった。

隣国が大軍を動員し、国境を侵犯した。
将軍は瞬く間に出兵してあっという間に撃破したが、またしても誰一人降伏を許さず、最後の一兵まで殲滅してしまった。

将軍が顔色ひとつ変えず「敵を殲滅しました」と毎度報告を持ち帰ってくるのを見て、王は次第に疎ましく思い始めた。
某日、将軍は寝床で何者かに暗殺される。下手人については諸説あり、判明していない。
後世の歴史家は「主君への憎悪を一身に引き受けた彼は真の忠臣である」と評した。

# 女王蜂の大鎌

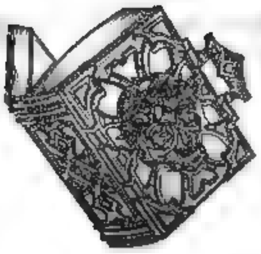
【長柄】じょおうばちのおおかま

文化人類学者はある村を訪れた。そこの村人は蜂を神と崇めていた。村人達は蜂蜜を振る舞い、蜂の仮面をつけた踊りで学者をもてなす。だが学者は内心で彼らの伝統を疑っていた。

蜂の仮面も養蜂道具も真新しかった。学者は確信する。これは偽史だ。特徴のない村に人を呼ぶため「蜂を崇める」という伝統をでっちあげた。「明日、村を発ったら論文を書いてこいつらの正体を明かしてやろう」内心でほくそ笑み、学者は眠りについた。

目が覚めると学者は村の祭壇にいた。彼を抱えた人間を見ると、その頭には触角が生え、両の目は複眼になっていた。祭壇の階段から一人の女が下りてくる。彼女も蜂の顔だった。そして学者を捕らえた者達よりも倍は大きな身体を持っていた。

その蜂は人の脳に寄生する希少種だった。寄生された者は命を落としその肉体は蜂に変化する。村人に成り代わった蜂は自らの存在のカモフラージュと外から「餌」を誘うため、村に「蜂の伝統」を作った。働き蜂が献上した学者は女王蜂の振るう大鎌で裂かれ、後には内臓を啜る音だけが響いた。



# 死霊の聖典



それは失われた古代の王国の知識。
人間を超えた存在との交信の具象化により生まれた。
交信を行ったのは王国においてもっとも常軌を逸した人物。
それが故に神に近く、神の言葉が聞こえ、その考えをほぼその意思どおりに理解できたといわれていた。

交信によって得られしは死者の言葉。その言葉によって死者の掟が記された。
その掟を司る事は人間世界を超越し、人間世界に影響を及ぼせる異相の掟を掌握することに他ならない。
が故に求めるものはいつの世にも絶えない……。

それは伝説の書。歴史の中で何度も現れ消える。その忌まわしき存在ゆえに度々焚書にもされてきたものの、いくつもの言葉に訳され連綿と生き延び、決して完全に無くなることはない。人肉で表紙が作られ、そこに顔が、目が現れる。

その書が用いられる時、必ず世に災いあり。
書が存在しているだけで、書が回廊となって異相への行き来が果たされる。
書の誘惑に駆られ異相を覗こうと書を手元に置いたことで、我々は常に異相によって覗かれている……。

# 棘の枝



性根の曲がった黒魔導師が師を呪い殺そうと企み、呪具を探し求めた。
彼は辻占い師に「闇の森にある、マナの満ちる枝を手に入れよ」と助言された。

黒魔導師は闇の森を目指し、はるばる旅を繰り広げた。
途中、路銀が尽きそうになると、黒魔術の力で強盗まがいの所業を働いた。

闇の森へ踏み入った黒魔導師は禍々しい力を纏った枝を見つけ、それをもぎ取った。
その途端、枝からみるみる棘が生え、彼の心臓を貫いた。

棘は黒魔導師の魔力を吸い尽くし、枝へ送り込んだ。
そこに辻占い師が現れ、絶命した彼を足蹴にした。
「そこそこ良質な呪具になるじゃろうて」と、枝を拾い上げた辻占い師は満足げだった。

# 流行の最先端



あのマスクすっごくカッコイイよね。
この前、向かいのお屋敷にマスクの人が入っていくのを見たよ。
いいなあ。

うちにもマスクの人が来るようになったよ。
パパとママがよく寝るようになってから。
たくさん来てくれるんだ。
いいでしょ。

マスクの人はパパとママとしかお話しなかったけど
僕の顔がぶつぶつしてきたら
僕ともお話してくれるようになったよ。
でもマスクは触らせてくれなかったな。
僕もあのマスク欲しいのに。

僕の手が黒くなってきたら
マスクの人が僕用にって小さいマスクを作ってきてくれたよ。
やっぱりマスクの人はカッコイイし優しいな。
僕も大きくなったらあのマスクの人みたいになるんだ。

# 女神の詩



美しい歌を歌うと評判の海の魔物がいた。その歌声が世にも美しい声だという評判を聞いて、一人の中年期にさしかかった男がそれを聞きに航海に出た。だが、その歌声は確かに評判だったが、その歌を聞き続けたものは海の中に落ちて死んでしまうと言われていた。男は船員たちに耳栓を与えて、自分が海の中に落ちることのないように身体を縛らせた。

海に魔物が現れ歌いはじめた。その歌声が聞こえてくると男は自らの身を海に投じたくなった。その身体は言いつけどおり縛られていたためかなわなかった。だが男はこう思った。
「この素晴らしい歌を聞きながら歓喜のうちに死んでしまいたい。それこそが人間が得ることの出来る最大の幸福なのではないか」

そして強い思いの力で縄を引きちぎった男は海の中に身を投じ、自分が望んだとおり、歓喜のうちに死んだ。
だが好奇心でこっそりと耳栓を外していくらかその歌を耳にしていた、まだ若い船員たちは首をかしげた。彼らには男があれほど素晴らしいと賞賛した歌がそれほどのものとは思えなかったのだった。

その歌は、聞いたものの過去や記憶によって何倍にも美しく響くようにまじないがかけられた歌だった。
男が、それを聞きながら自らの命を捨てても惜しくないと思ったその美しい歌は、男のそれまでの人生が作り出したものだった。

# 判決と宣言

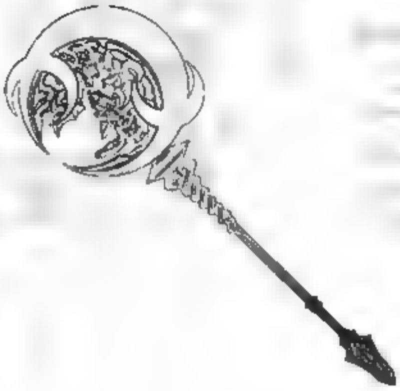


検察官の男には息子がいた。息子は陪審員の一人でもあり、父の望むがまま、罪のない者を死刑台へと送っていた。

ある日、一人の村娘が法廷に立たされた。彼女は過去に検察官から言い寄られ、それを拒否した。検察官は娘を恨み、無実の罪で彼女を捕まえた。被告人席に立つ女性を見て検察官の息子は胸を締め付ける。その娘は彼の初恋の女性だった。

僅かな審議で陪審員は彼女に死刑を言い渡す。息子も反対できなかった。断頭台から初恋の女の首が落ちる。その瞳は死の瞬間まで息子に助けを求めていた。悔恨はやがて怒りへと変わる。「あの男を死刑台に送ってやる」息子は心の中で宣言した。

息子は長じると父と同じ検察官になった。そして父の不正を暴き、彼を法廷に送った。父の息のかかった陪審員も排除し、息子の求刑通り父は死刑となる。復讐を終えた息子は初恋の女性の墓に一輪の花を添えた。



『グレーテル』/『淫蠍のクレリック』

# 色欲ノ月杖

# （カゲウチ）

【祈祷】しきよくのげつじょう（かげうち）

愛ノ言葉。縋ル様ナ視線。演技。高鳴ル鼓動。

肩ヲ押ス少女。無抵抗デ横タワル少年。
脈打ツ心臓。禁ジラレタ行為。

喉ヲ鳴ラシ微笑ム、華奢ナ首筋ニ、青白イ手ヲ優シク添エ、強ク締メ上ゲ、
死ニ至ル境界へ。

淫蕩、蠍、泡沫、夢、曖昧、死、衝動。
伸ばした手が掴むは、どこまでも……

# 聖邪の裁き

【射出】せいじゃのさばき

【起訴状・冒頭部より抜粋】
その男、大聖堂の聖遺物展示において、聖骸布に唾と痰を吐く。
その上、大声で神を冒瀆す。

【判決】
その男、極刑に処すものとする。
神の家での数々の暴挙に加え、裁判の場でも暴言の限りを尽くした。
情状酌量の余地なし。十日後、刑を執行する。

【刑吏の日記より】
死刑囚はギロチン台に引き据えられてもまだ罵詈雑言を飛ばし、そればかりか逃げようとした。
俺は咄嗟にボウガンを構え、背中から撃ち殺した。
躊躇？　微塵もなかったさ。

ふいに自分の体に鼓動を感じ、まぶたを少しずつ開いていった。
そこは地獄で、目の前では冥王が笑みを浮かべていた。
「気骨ある漢よな。今後は我が懐刀として、地獄の兵卒どもを統率するがよい」

# 呪眼の斧

【打撃】じゅがんのおの

覇道を征く王が版図を広げるべく、古代の神を崇める部族を攻め滅ぼした。
多くの奴隷と金銀財宝、そして祭壇に飾られていた斧を持ち去り、凱旋した。
戦勝の宴の最中、王は酔眼を斧に向けた。
その瞬間、禍々しい目が浮き出て、王を睨み据えた。

その晩を境に、王は人が変わったようになってしまった。
臣下への要求は厳しくなり、税の取り立ては苛烈さを増し、密告を奨励した。
見かねた養育係が諫言したが、一番敬愛していたはずの彼でさえ、王は斧で脳天を真っ二つにしてしまった。

西の魔導大国に修行の旅に出ていた魔術師が帰国し、王が恐怖政治を敷いていることを知った。
王の様子を窺った彼は、斧の呪眼によって王が闇に魅入られている事実を突き止め、重臣らにこの事実を知らせた。

はたと魔術師は気づく。呪眼の斧により、並み居る重臣たちも魅入られてしまっていることを。
かくして彼も王によって斧で頭を叩き割られた。
――後日、王は食事中、妾によって食器で刺し殺された。
その骸は広場に引きずり出され、恨み骨髄に徹する民草の手でズタズタにされたという。

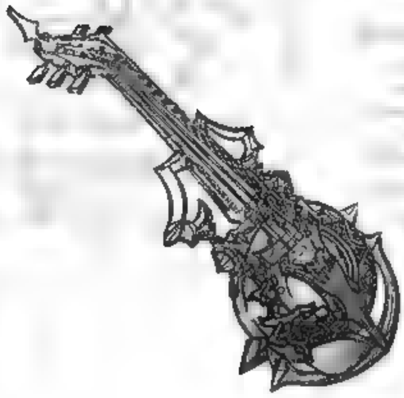
# 暴鳥の羽根

人語を解するほど知能が高い巨鳥がいた。
辺境の村々では彼は神同然に崇められており、数年に一度、人々は生贄を差し出し、庇護を願っていた。
巨鳥としては進んで彼らに害を加える意志などなかったが、生贄はその都度受け取っていた。

巨鳥の棲む森に、あどけない少女がフラフラと迷い込んできた。
さては生贄か、と巨鳥は考え、少女の前に舞い降りた。
少女は目に涙を浮かべ、「私を食べないで下さい。その代わり、あなたの毛を繕い、綺麗にします」と言った。

巨鳥は少女に毛繕いを許した。
巨鳥も少女も共に寂しがり屋であり、すぐ仲良くなった。
少女は森で暮らし始め、半年ほど経った。
ある朝、少女が木の実を取っていると、バッタリ村人に出くわした。
「お前は生贄になったはずだろう、まさか逃げたのか！？」と男は激怒し、少女を撲殺してしまった。

そこに巨鳥が駆けつけ、無惨な死体となった少女を見下ろし、茫然自失となる。
彼は怒れる暴鳥と化し、少女を殺した村人の頭を食い千切ると、次から次へ村落を滅ぼしてしまう。
やがて騎士団が征伐に駆けつけ、暴鳥はやっとのことで討ち果たされ、死骸は火にくべられる。
僅かに散らばる羽根だけが暴鳥の痕跡となった。



『アリス/』
『グランディオーソ』

# 束縛の残響



真実ト世界、焚殺ノ予感、決戦ノ前歌、決戦ノ咆歌。

偽書ト世界、最後ノ欲望、甘美ナ記憶、精霊ノ迷路、精霊ノ末路、最後ノ欲望。

呪縛ト蓄積、無為ナ迷路、無為ナ末路、圧殺ノ饗宴、焚殺ノ饗宴。

鏖殺ノ予感、決戦ノ斉歌、敵軍ノ咆香、孤独の迷路、茫洋の記憶、鏖殺ノ饗宴、現実と世界、真実ト世界。
—To be continued—

# 愛玩の末路



情豪で有名なその王は、いつも新しい妾をハーレムに入れていた。
そんな彼は、一人の従騎士を取り立てた。若いながら文武両道で、将来有望な男だった。

情豪の王はいつしか従騎士の事ばかり考えている自分に気付く。
従騎士は男でありながら、女性顔負けなほどに美しく、ゾクッとするような色香を持っていた。
ある晩、王は酔った勢いで彼を寝所に呼び入れ、男色に目覚めてしまう。

情豪の王は従騎士を溺愛し、ひたすら彼に溺れた。そして従騎士は王妃を誘惑し、王妃もまた悩殺され、肉体関係を持つ。
かくして従騎士はその国の実質的な支配者となってしまった。

王妃は王妃で、従騎士以外にもたくさんの愛人を抱えていた。
ある晩、嫉妬に病んだ愛人の一人が寝所に踏み込み、従騎上と王妃を殺害。
情豪の王は己の愚行を恥じ、以来は品行をあらため、善王となる。
一方の従騎士は「史上稀に見る国賊」として悪名を残すのだった。

# 氷原の花

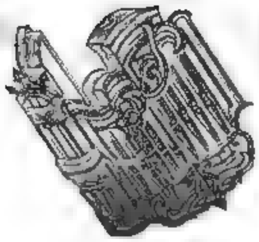
【刀剣】ひょうげんのはな

氷原に咲く花は凍っているが故に美しく在り続ける。

その真っ赤な花は凍てつく大地に点々と咲いていた。
そしてその景色にとけこむように若い女性の死体が転がっていた。

かつて氷上では北方の民と異国からやってきたものたちの間で覇権を巡って争いが繰り広げられた。
氷の上で血が飛び散り、以来その赤々とした花は咲くようになった。

その地と花は若い女性の間で有名になった。そして最初の一人がそこで命を絶ってから、次第にそこは若い女性の自殺の名所となった。彼女たちの願いは共通だった。
いつまでも、美しく。氷原に咲く花のように……。



# 風琴の書



それは、楽師としての訓練をつんでいなくてもその心中に宿した思いが音楽として表出されるという魔法の書だった。その本の所有者の男は、旅で出会った人間たちにきまぐれでその本を持たせてみた。結果、ところどころ陽気で、たまにちょっとした哀愁を帯びて曲が奏でられた。要するにありていで凡庸な旋律だった。

その晩、男は酒場にいあわせた客達の心を一通り聞き終わった後、その宿で掃除をしていた小間使いの女にもたわむれで本を渡した。だが、その女がその本を手にして出力した音色におもわず目をみはった。それはおおよそ平凡な生い立ちで通り一遍の人生を歩んできた者とは思えない鬼気迫る音の運びだった。

男は確信した。その街で騒がれていた正体不明の娼婦殺しの連続殺人事件、それはこの女が真犯人なのだ、と。
そして男の告発をきっかけとして女は捕まった。女は必死に罪状を否認したが衛兵団による強引な取調べでついに精も根も尽き果てとうとう己の罪を認め、死刑となった。

彼女は犯人ではなかった。生きていくための仕事という毎日の終わらない苦痛をなんとかまぎらわすために、頭の中で作り上げていた空想が、いつしか彼女の精神の中で過剰なまでに膨れ上がり具体性が補強されていき、あたかも彼女が本当に殺したかのような現実味を帯びていったのだった……。

# 滅罪の火

【長柄】めつざいのひ

【〈執行者〉の声明文・其の三】
汝らの不品行ならびに不敬に対し、神はお怒りである。
故に〈執行者〉たる私は、〈黄金郷の街〉に滅罪の火を降らすものである。
これでつごう三つの街が灰燼に帰すことになろう。人の仔らよ、神を畏れよ！

【辣腕探偵デュカーズの手帖】
〈執行者〉の人物像を絞り込んだ。
かの者は知能が低いばかりか協調性に欠け、すぐ感情的になって他人と摩擦を起こす。
容姿にも恵まれず、すべてに於いて自信がない哀れな人物に違いない。

【犯人逮捕直後のサイモン警部】
激発した犯人はデュカーズ君を闇討ちしようとし、我らは彼を取り押さえた。
しかしまさか、お茶汲みの事務員がこんなとんでもない犯罪に手を染めていたとはな。
まあ、これで街から人を避難させなくて済む。
なに、デュカーズ君が指示を出してもう避難させてしまっただと？

【ジャトース警視のカミナリ】
貴様らが逮捕したお茶汲みはな、単にあの男から金で雇われただけじゃ！
あいつはもぬけの殻になった〈黄金郷の街〉の金庫から金を盗み、逃げてしまったぞ！
おいサイモン、まだ分からないと申すか！？
探偵と名乗っていたあの男こそ〈執行者〉で、お前はまんまと一杯食わされたんじゃぞ！

# しょぼい剣



クソ武器列伝　その1
これはしょぼい剣である。非常にしょぼい。そのしょぼさの歴史は古く、紀元前まで遡ると言っても過言ではないのかもしれないし、ちょっと良く分からない。

ある所に男がいた。この男は非常にうだつが上がらず、何をやってもダメだった。そんな男は、特にこれといった事も起きずに、その一生を終えた。しょぼい剣の所以とは関係がない。

また、とある所にこれまたしょうもない男がいた。これも勿論、しょぼい剣とは関係がない。本当に全く関係がないのだ。そもそも、列伝などと言うもっともうしいものは存在しない。

それでもここまで来てしまった。この駄文を最後まで読むために、このクソ武器を最後まで強化しきった方々に心からの謝辞を述べて、筆を置くことにしたい。さんきゅう！！

# つかえない槍



クソ武器列伝　その２
これは使えない槍である。当然、使えない。だが、ちょっと待って欲しい。使えない、という言葉の意味は一体、どういう意味なのだろうか？

槍として使えない。ならば、その使えない理由は何か？　尖っていないのか？　ならば、研げばいい。柄の部分が弱いのか？　ならば、柄を変えれば良い。所詮、全ては言い訳に過ぎないのだ。

そうやっていつもいつも、できない理由ばかりを考えて、自分という名の殻に閉じこもり、傷つく事を恐れる君。恐れないで！　迷わないで！　貴方の夢を、諦めないで！！　僕はここにいる！

何の話をしていたんだっけ？　え？　ああ、槍？　槍ねー。まあ、使えないって言ってんだから、使えないんじゃないすか？　ちょっと、なんかもういいですか？　もう、終わりたいんで。

# ゴミのような巻物



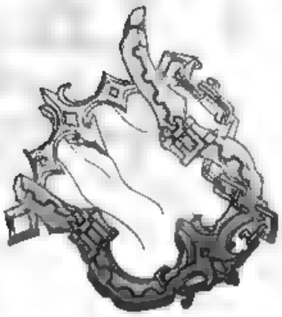
クソ武器列伝　その3

ゴミのような巻物……？

……って、それゴミやないかーい！！

あのな、そもそもゴミみたいになってる巻物があったとしてだ。それ、巻物みたいになってるゴミと、何が違うの？　何、が、違、う、の？　ん？　んー？？なーにーがー？　ちーがーうーのー？

……という想いを込めて作りました。ゴミみたいな巻物です。どうぞ、受け取ってください。そして「うわ、これゴミだな」って思ってもうったら、これに勝る喜びはありません。



# ポンコツの琴



クソ武器列伝　その4
ポンコツの琴ですって。うん。もう、なんか、別にこれ以上説明する事もないんですよね。うーん。だって、どうせ武器としてはみなさん使わないでしょ？

特にこれといった特徴もないし、チャチャっと強化にでも使うとか、売るとかしちゃってください。ホントすみませんね、貴重なアイテム欄を潰してしまって。怒らないでくださいね。

いや、クソ武器ばうまいたらウケるかな、とか軽率にやってみたら、思いの外各所への調整とか大変でしてね。挙句、まさかウェポンストーリーまで書かされるとは思いませんでしたよ。

あー、もう、なんでこんな馬鹿な事やろうって思ったんだろ。もうみんな帰っちゃったじゃん。なんでこんな文章を一人で遅くまで残って書いてんだろ？
はーん、帰りたーい！！

# 被虐の銃

【射出】ひぎゃくのじゅう

故郷が色づく刻限になりました。
寝ても醒めない夢のため、
今宵も花を咲かせましょう。

これから始まる初夜のため、
帯は前に結びましょう。
そのほうが解きやすいでしょう？

一晩限りの貴方の花嫁を
どうぞおすきになさってくださいな？

お代はいりません。
ええ、貴方が私に見合うだけの殿方であれば。

# 聖堂の斧

【打撃】せいどうのおの

聖堂の壁龕に一挺の斧が飾られていた。
日課の訓練後、修道騎士が新入りを捕まえ、いかめしい顔で語り出す。
「この斧はワケありでな。修道立願して修業を始めたものの、あまりの厳しさに付いていけず、悪魔に取り憑かれた男がいてな。そいつ、その斧で暴れ回った末、自分の首を刎ね飛ばしちまったんだってよ」

顔面を蒼白にし、怯える新人を見て、修道騎士は大笑いする。
「なーにビビってんだ、今のは作り話だっての！　ただ、修業が厳しいってとこだけは作り話でもなんでもないから、覚悟しとけ」と。
新入りはホッとしつつも、これから続くであろう長く辛く厳しい修業を思い、暗澹たる表情になるのだった。

翌朝、修道騎士が遺体で見つかる。寝所で寝ているところを何者かに首を刎ね飛ばされ、首を持ち去られたのだ。
ガクガク身を震わせて怯える新入りに、他の修道騎士らが話しかける。
「あいつ、『作り話』だなんて言ってたが、ありゃ実話なんだ。くれぐれも悪魔に取り憑かれたりするなよ？」

その後。殺された修道騎士は乱暴者で嫌われていたこと、良家の出身なので誰も逆らえずにいたことを新入りは知った。
あの殺人は、横暴に耐えかねた同僚たちが結託してやったのでは…？　その疑惑が頭を掠めたが、確認する方法はなかった。
その晩、ノックの音が響く。眠い目をこすりながら新入りが扉を開けると、首なしの修道騎士が立っていた。
片手に斧を。もう片手には、斬り落とされた自分の首を手に…。

# 王妃の青い鳥

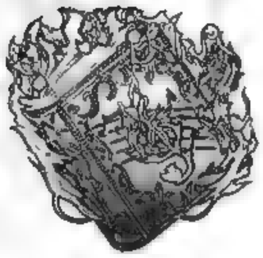


空を羽ばたく青い鳥を見つけ、王妃様は仰った。
「わらわはあれが欲しゅうてたまらうぬ」
王様は直ちに、鳥を生け捕りにするよう命令を下した。
数分後には王族お抱えの猟師が見事、青い鳥を捕獲した。

青い鳥は鳥籠へと入れられた。
鳥を世話するのは王妃様の下女であった。
下女は不自由な青い鳥を哀れみ、慈しみを持って接した。
ところが鳥は、この下女が心底嫌いであった。
何故なら下女は卑しい身分だからだ。

青い鳥はどの鳥よりも高貴で美しい鳥だった。
今や王妃様のお気に入りとなったのだから余計であった。
(下賎の眼差しを注ぐでない、不愉快じゃ)
(わらわに触れて良いのは王族のみぞ、無礼者)
主に酷似した罵りは、しかし人の耳には美しい囀りとなった。

やがて下女が病死すると、王妃様は仰った。
「あの鳥はこやつの側でこそよく囀った。棺に入れておやり」
青い鳥は棺の中で必死に抗議した。やはり美しい囀りであった。
「嗚呼、わらわのためにだけ鳴く鳥はおらうぬものか」
以降、王妃様は二度と青い鳥を思い出すことはなかった。



# 歌 炎の調べ



その歌い手は子供の頃から何度も大変歌が上手いと評された。その成功体験から、彼は大人になったら自分は歌手になるのだと決めていた。

だが、青年となった彼は歌手として全く成功しなかった。
彼の歌を聞いたものは言った。
「お前の歌は技術的には上手い。だが訴えかけてくるものがない。お前の歌には心がない」
そう言われてみたものの男にはどうしようもなかった。
いくら修練を重ねても、無い情熱を得ることは出来なかった。
男は魔法に手をだした。

その魔導書を得た男は、己の心を燃やし歌を歌った。
炎のように情熱的な歌。
聞く者に熱情的に訴えかける。
人々は彼の歌に歓喜し、涙した。男は求めていた達成感を得られた。

だが、その歌を歌った彼の心は間もなくして蝋燭のように燃えて尽き果ててしまった。
そして心を燃やし尽くした彼は、完全に何も感じることのない廃人と化した。
それからずっと……。

# 強欲ノ嘴槍
## （カゲウチ）

ぐちゅぐちゅと音がする。
粘度の高い液体を纏った肉をこすり合わせるかのような音がする。

あれ？　変ですね？　そういえば、意識はあるのに体が動きません。
ぼやけた視界に映る少女は私と同じ顔で、ひどく楽しそうに私の体を――

ああ、きっとこれは夢ですね。でもここの私はこんな素晴らしい技術を持っているなんて。叶う事ならもう少し、世界の深淵を覗いてみたい。

――結局、微睡から醒めた少女の記憶はひどく不鮮明で、思い出すことは出来なかった。
「ですがまあ、いいきっかけを掴めました！」
そして、弾むように歩きだした少女の肩から黒い羽が舞い落ちた。

# 人類学の大剣

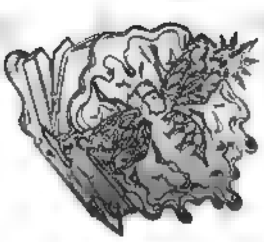


ははは、聞いて驚くな？
これはな、人類に関する長年の研究から生み出した究極の大剣だ！
これを手にしている私は、人類の頂点に立っているも同然だ！

人はこの大剣を翳されただけで無意識に従ってしまうのだ！
どうだ、凄いだろう！？
って――ちょ、ちょっと待て、
それ以上私に近づけば抜くぞ！
え、抜けるものなら抜いてみろだと？

いいや、この大剣を抜く事はできん。そんな事をしようものなら、君はとても悲惨な末路を辿る事になってしまうからな。
何？　ハッタリをかましてるだけだろうって？
い、いいだろう！　そこまで言うのなら…！

私は〝人類学の大剣〟で人類を従え、新時代の王となった。
だが〝人類学の長剣〟や〝人類学の短剣〟、〝人類学の竹槍〟を持つ者が現れ、私の打倒を宣言した。
歴史が教えている通り、力を持つ者はそれと同等以上の力に斃される。
自分の愚かさにため息が止まらない――私は人類学から何を学んできたのやら。



# 蜂窩の書

この本は蜂を真似て作られた本です。
蜂は、働き蜂が蜜を集めます。
女王蜂はその蜜を食べて子供を産みます。
この本も働き蜂を使って、情報を集めます。

この本の女王蜂は情報を集めます。
それを蜂の巣みたいに整理して本に記します。
これがこの本の作られた目的です。
昔の魔術師は面倒臭がりでした。

蜂の蜜はとても甘いです。
この本の蜜も甘いです。
知を欲する者には、極上の蜜です。
古今東西の知識が、勝手に増えていきます。

本の持ち主は叡智を手に入れます。
でも自由はありません。あなたこそが働き蜂です。
頭の中の情報をすべて本に捧げます。
この本は蜜蜂と寄生蜂を元に造られたのです。

# 生誕への期待



この宇宙で狂える存在がまたひとつ生まれようとしていた。

感応力の強い世界中の幼子達の夢の中にそれは現れ、それを見た幼子達は理性が芽生える前に発狂した。

今度はいかなる災いが、混沌が生まれるか。どれほどの規模の破壊と混乱をもたらさせるものか。

恵まれない、だが自らで何事を為せるだけの能力もない、この世に恨みを持つ全ての者たちの無意識がその生誕を予感して期待するのだった……。

# 暴食の六弦琴

— Celtic —

息をしない三つの存在は、息をする存在によってのみ支払われる。それら三種の総称をアイルランドの三つ組という。

(Steiner／1975#212)

よく肥えた豚こそ天上の動物だ。あの太った体のなかに、宇宙的な物質をもっているのだから。

(Steiner／1978#278)

神々が好んで雄豚と雌豚に化身したと考えたほど、豚は生きる喜びに満ちている。

(James／1998・100)

痩せおとろえた死者にも等しく、肉汁のしたたる豚の丸焼きを入れた容器が墓室に供えられるものだ。

# 鷲狩の短剣



彼は望んで自分より大きな敵に挑んだ。

敵は、彼より大きければ大きいほどよかった。

ある王国に現れ破壊活動を繰り広げる巨人の話を聞きつけ、彼はそこへと向かった。
巨人は、これまでに彼が挑んできた中でも最も大きな敵だった。

巨人は周囲の建物を破壊し、その瓦礫は彼に向かって降り注いだ。彼は歓喜した。
そして最終的に彼は、巨人につまみあげられてそのまま食べられた。
巨人に食べられる瞬間、巨大な敵に挑み続けた彼の無意識下の願望、彼の生まれ持った性的な嗜好は満たされたのだった。

# 奉迎の鎌

【長柄】ほうげいのかま

二家の名門貴族が権勢を競い合い、両家の人間は犬猿の仲だった。
さる仮面舞踏会に片方の家の跡取り息子が忍び込んでおり、一人の少女と恋に落ちた。奇しくも、彼女は対立する家の令嬢だった。

恋する少年少女は話し合い、互いの両親に「結婚したい」とかけあった。
「渋々」という体裁を取りながらも、どちらの家の両親も結婚に賛成した。
彼らはただ無益なばかりの戦いに倦んでいたのである。

名門二家の和解が成ったと聞き、両家の主筋にあたる国王は大喜びし、結婚式の仲介人を買って出た。
この話を聞き、両家に武器や傭兵を売りつけていた商人組合の元締めが呟く。
「このままだと商売あがったりだな。手を打つか」

国王を出迎えるため二家の兵士が勢揃いした際、そこに混ざっていた刺客が奉迎のための鎌で国王の首を刎ねた。
二家は国王を謀殺した犯人として諸侯らに包囲網を敷かれ、間断なく戦争を仕掛けられる事となる。
戦火の陰で、商人らはたんまり儲けたという。

# 風鹿の御蔭



森には立派な牡鹿がいた。
出くわせば誰もが息を呑むような、美しい牡鹿だった。
牡鹿は常に風を身に纏い、
周囲の草花を揺らしながら悠々と歩いていた。
あれはきっと、森の守り神なのだろう。

私は森に捨てられた孤児だった。
大木の洞で眠り、野苺と花々の蜜で育った。
牡鹿は私の存在を一度も気にしたことがないようだった。
だけど酷く寒い冬の夜、私の周囲には暖かな風が吹くのだった。
見守ってくれている。私はそう思うことにした。

牡鹿は狩人達に狙われていた。
彼らの会話を盗み聞いたところによると、
この国の王が、立派な牡鹿の首の剥製を欲したらしい。
やがて森に火が放たれたが、あの牡鹿の力か、
風向きが変わり、狩人達は全て猛火に襲われ焼死した。

炎が消えた後、牡鹿は疲れ果てた様子だった。
私は眠る牡鹿に忍びより、その首を切り落とした。
私は都へ行き、牡鹿の首と引き換えに大金を手に入れた。
今、私が富豪として名を馳せているのは、あの鹿の御蔭なのだ。
彼は私を守ってくれていた。この結果に満足しているだろう。

# 卑劣の黒銃



職業柄、様々なやつに会って来た。芸能界の重鎮や、国を動かすような黒幕に、大企業の重役。皆それぞれ異なる頂きを目指し、日々肥大し続ける欲望に身を任せている。

なぜ、そこまで走り続けることが出来るのか？　使われる側の人間なら一度は抱くであろう疑問。その答えは単純明快だ。

彼らは皆、思い描くゴールにたどり着いていない。だから努力し続けることができる。
ワシも同じだ。まだ、道半ばだ。

――話が長い。そしてどうしようもなくつまらない。二次団体の会長だかなんだか知らないが、底が浅い人間に上は務まらない。だから今夜、彼は若集に殺される。誰かの描いた絵の上で踊る端役。この世界で生きる以上どこまで行ってもそこから抜け出すことは出来ない。

# 暴力のロスター



【サンタさんへ】
去年くれたプレゼントはすぐにあそべなくなってしまいました。今年はもっとたくさんあそんでくれるプレゼントがほしいです。

ふくろにつめて、えんとつのなかにいれて、炎でやいても、何度もあそべるようなプレゼントがほしいです。

いいことを思いつきました。
ことしはサンタさんがほしいです。
サンタさんといーっぱいあそびたいです！

あそんでくれる／あそんでくれる
↑どちらかに○をつけてください

# 正義のツヴァイヘンダー

【ギシンとアンキへ】
プレゼントをくれる者の正体が、お前たちである事をバラそうとしている存在がいる。

可及的速やかに敵対勢力の口を封じる必要がある。私の正義にかけて、お前たちの秘密は私が守る。

問題はそれだけではない。皆、手紙を書いてくれない。これでは欲しいものがわからないではないか。

ようやくシンデレラと交渉することができた。これで今年のクリスマスの平和は保たれた……のだろうか？

# 暗闇の羽搏

【長柄】くらやみのはばたき

「お前、女みたいな顔してるよな」
酒臭い息を吐きながら義父は僕に顔を近づけ、尻を撫で回してきた。
この人は絶対的な暴君だった。逆らうことはできず、僕は一方的な蹂躙に身を任せ——
コトが済んだ後、義父は言った。
「森に入ったら、暗がりには注意しとけ。羽ばたきを聞いたヤツは誰一人帰ってこれないって話だからよ。どうだ、ひとつ賢くなったろ？」

後日、木を伐るという義父に付き合わされ、森へ行った。
昼になり、義父は切り株に腰掛け、弁当を食べ始めた。
僕は用を足すという口実でそこを離れ、全速力で森の中へ駆け出した。
細かいことは頭から吹っ飛んでいた。とにかく、この汚らわしい男とこれ以上一緒にいることはできなかったのだ。

彷徨ううち、だんだんあたりが暗くなってきた。
森に入ったら、暗がりには注意しとけ——義父の言葉がまざまざと甦り、僕は身震いした。
「おいコラ、逃がしゃしねえぞ！」
怒鳴り声が聞こえてきて、ハッと振り返った。鬼のような形相をした義父が駆け寄ってこようとしていた。
その時、羽ばたきが聞こえてきて——

えっ、それからどうなったのかって？
ちっぽけな肉体と精神を棄て、暗闇の蹂躙に身を任せたのさ。
義父？　さあ、知ったこっちゃない。
生きとし生けるものすべて、星の表面に生えたカビみたいなもんだし、どうでもいいよ。
母なる闇とひとつになった今、つまらないことに心を煩わせたくないんだ。
生まれてきてやっと、安らぎを手にしたんだから——

# 不条理な断罪



目には目を
歯には歯を
罪には罰を与えましょう。

何者かが罪を犯したなら
何者かに罰を下します。
自分が犯した罪ではないって？
連帯責任という言葉はご存じ？

家屋を食い荒らす蟻を見つけたら
蟻の巣ひとつを滅ぼすのが道理でしょう。
無垢な卵も幼虫も
いずれ害をもたらす成虫になるからと
丸ごと滅ぼすのが効率的でしょう。

この世は
不条理で不平等で不運に
満ちているものなのです。
さあ、どこかの誰かが犯した罪により
なんとなく貴方を罰します。

# 清裁の銃

【射出】せいさいのじゅう

神父様、どうか僕の懺悔を聞いてください。
ただ、その前に——ここで話したことが外に漏れる心配はないのですよね？
はあ、よかった。では、秘密が漏れる心配はないということでお話しします。
実は…、実は僕、兄をこの手で殺してしまったんです！

なんで兄を殺したのかって？
だって、兄さんの婚約者は僕の家庭教師だったんです。僕の方がずっと前からあの人を愛してたんです。
兄さんに睡眠薬を飲ませて、部屋を締め切って、皿の上に置いた炭に火をくべて——自殺に見せかけ、兄さんを殺したんです。

兄さんが死んだ後、あの人はずっと泣き暮らしてました。
僕はあの人の傍にいて、一生懸命支え続けて、あの人の心を自分のものにしたんです。
そして結婚したんですけど、子供をまったく授かることができず、どんどん仲が冷え込んで…。
あるいは、兄さんの祟りではと…。

私がミサの準備をしていると、シスターが言った。
きのう懺悔に来た男性が撃ち殺されたと。
私は思い出していた。きのう懺悔室の窓の外で、人の気配を感じたことを。
立ち聞きしていた妻が夫に殺意を抱き、凶行に及んだのだ…！
秘密を知っているのは私だけだ、次は私が殺される。早く逃げなければ…！
なっ、き、君は——！　ちょ、ちょっと待て、私の話を聞い——

# 緊密な関係



二人の狙撃手は、廃墟にそびえる向かい合わせの建物で、対峙し続けていた。

二人の間の空間には無数の死体が転がっていた。それはお互いを照準におさめようとする二人の間に、無謀にも割って入ったものたちの跡だった。

一瞬、片方の狙撃手の照準に敵の狙撃手の姿が映った。彼の油断は、背後から迫ってきた暗殺者ととっくみあいになった事によって生じたものだった。
狙撃手はためらうことなく引き金を引いた。相手の狙撃手を突き刺そうとしていた暗殺者は銃弾に倒れた。

無粋な邪魔者はいなくなった。そして照準の中から再び敵の狙撃手の姿は消えていた。
これでまた続けられる。どちらかがどちらかを殺すまで続く邪魔の入らない二人だけの真剣勝負が……。

# 黒薔薇の旋風槌

【打撃】くろばらのせんぷうつい

大陸を支配した騎馬民族の末裔たるその大国に、"黒薔薇"と渾名される女将軍がいた。
驍勇に富み、知略も備え、美貌まで併せ持つ花実兼備の名将として名を轟かせていた。
彼女の槌に狙いを付けられた者は絶対に逃れられない、と戦場の兵士達に畏れられた。

黒薔薇の周囲には多くの貴公子らが集ったが、彼女は少しも彼らになびかなかった。
ある日、黒薔薇に一人の騎士が仕えるようになった。美男子というわけでもない、寡黙で実直なだけが取り柄の男だった。
そんな彼に黒薔薇は好感を持ち、目をかけた。

その晩、黒薔薇の寝所を暗殺者が襲撃し、寝ずの番をしていた騎士は命がけで黒薔薇を守った。
暗殺者が逃走した後、黒薔薇は騎士に訊いた。「そなた、妾を愛しているのか？」
騎士はまっすぐ彼女の目を見つめ、大きく頷く。
――こうして主従は、恋人同士となった。

その後、黒薔薇の属する大国は敵国に追い込まれていく。
黒薔薇は騎士に「妾に何か隠しごとはあるか？」と訊き、「ございませぬ」という返事を引き出した。
「そうか」と頷いた彼女は槌を振るい、恋人の顔面を砕いて殺害する。
「そなたが敵に通じている事は見抜いていた。全部白状した上で真実の愛を誓えば、別の解決策も探したのだが…」
呟きはもはや恋人の耳には届かなかった。

# 暴牙の横笛

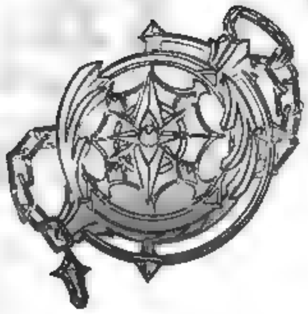


とある片田舎に、そこそこ豊かな人たちが暮らす平和な村があった。
ある日、手が付けられないほど気性の荒い暴れ獣が突如として現れ、村の傍に棲み着いてしまったのである。

獣が暴れたことで近くの景観が損なわれ、村人たちは頭を悩ませた。
事情を聞いた旅の楽士が村に現れ、「任せて下さい、僕が手懐けてみせますから」と請け合った。

村人たちに見送られ、楽士は獣の前へと赴き、横笛を吹き始めた。
はじめは今にも飛びかかりそうな風情で息巻いていた獣は、笛の音を聞くうちに、すっかりおとなしくなってしまったのである。

楽士は獣を引き連れて村へ戻る。
笑顔で出迎えに来た村人たちを見て、彼は嗤った。
「獣は僕の言いなりです。つまり、あなたたちを生かすも殺すも僕次第…」
——かくして楽士はその村に君臨し、酒池肉林をほしいままにしたという。



# 迷不の羅針盤

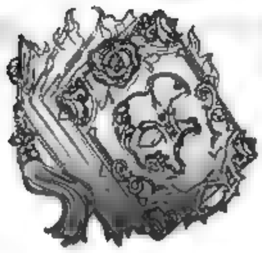


「人生とは旅である」と公言するその冒険者は、生まれてから二十歳過ぎに至るまでのほとんどを旅に費やした。
彼の夢は、この世のどこかにあるという《黄金郷》を訪れることだった。

とある樹海の奥に、森羅万象すべてを識る大賢者が住んでいた。
冒険者ははるばる樹海を踏破して大賢者に会い、《黄金郷》の場所を教えてほしいと頼み込んだ。

大賢者は「悪いことは言わぬ、《黄金郷》に行くのはやめておけ」と言った。
だが冒険者は「あきらめるつもりはない」と語った。
大賢者は溜息をつき、「この羅針盤の導きに従え。ただし忠告はしたぞ」と言い、彼に品物を渡した。

羅針盤に従い、冒険者は《黄金郷》に辿り着いた。
人々はみな湯水のように金を使って美酒美食を堪能し、ところ構わずまぐわい、楽園を謳歌していた。
その輪に入った冒険者はすっかり腑抜けとなった。
そう——《黄金郷》とは人を囚えて離さぬ迷不であり、彼はその虜囚となってしまったのである。



# 悲恋の記録

病で床に伏せたその老婦人は、人を介して来てもらった若く売れっ子の劇作家に、自分の過去の思い出話を語って聞かせていた。

劇作家は新進気鋭の作家でありながら、自ら「この国の舞台を揺るがす」者であると自称していた。

老婦人にはかつて恋仲だった恋人がいた。だが二人の結婚は長年対立関係にあった両家の親によって反対されていた。そこで女は知人の僧侶から授けられた策を用いることにした。

彼女は薬によって仮死状態になることで彼女が死んだと周りに信じこませた後、恋人と共に駆け落ちする予定だったのだ。

だが彼女の策は恋人にきちんと伝わっておらず、恋人は彼女が本当に死んだと思い込み、傷心のあまり自ら命を絶った。

目覚めた彼女は、恋人が死んでしまった事を知り、悲しみのあまり自分も恋人のあとを追って自死したのだった。

そして、その非劇が起こった何十年かのち、その非劇が起こった街から少し離れた田舎の一軒家。自分が間もなく病気で死ぬ事を医者から知らされた女は「ジュリエッティア」という、今とは異なる名前を名乗っていた頃のその悲恋のことを、劇作家に話して聞かせていたのだった……。

# 吊るされた男



王国の諜報局に務めるその男は、任務を課され、隣国へ赴いた。
そして正体を隠して仕官し、その国の百人隊長になり、軍事関係の機密情報を自国に流していた。

機密情報が流出している事に隣国の防諜機関が気づき、その出所を突き止めた。
彼は吊し上げを食らったが、まったく動揺せず、シラを切り通した。

諜報員が自邸に戻ると、一人の旅商人が客間で待っていた。連絡役を務めている自国の諜報員だった。
「正体がバレそうになって吊し上げられましたが、切り抜けました」と彼は笑顔で報告した。

翌朝、百人隊長は首吊り死体となって見つかった。
遺書には「疑われたのは我が身の不徳。死を選びます」としたためられていた。
だが実際は連絡役の男が殺し、自殺に見せかけたのだ。
吊し上げを食らった以上、監視はキツくなるし、本人も危機感を持っていない。始末するしかなかったのである。

# 大食ノ巻物
## （カゲウチ）

それは、唐突に堕ちた暗い闇でした。夢だと知りつつも、私は迷い込んだその場所に、強く惹かれていきました……

青い髪の老婆が、衰えた体を弱々しく木に預け、月を見上げています。その姿は正に命の灯火が燃え尽きようとする瞬間に見えました。

老婆は最後に、「この地には、こんなにも知らない方が良かったことで溢れてるなんて……知りたくありませんでした」と呟くと、瞼をゆっくりと閉じました。

きっと私に向けた言葉ではないのでしょう。ですがその響きは、何故だか胸の内にスッと馴染むような心地よさがあったのです。

# 悔恨の槌

【打撃】かいこんのつち

革命児と参謀は、とある暴君の暗殺を謀るも、あえなく失敗。
逃亡途中、かねてから懇意にしていた資産家の家に庇護を求める事に。
疲れ果てていた革命児と参謀は夕食を断り、眠りに就く。
そして、その晩。何かを叩き潰すような音が聞こえてきて、革命児と参謀は目覚めた。

「手足を潰して、暴れられないようにしよう」「いや、頭を潰す方が早い」と言い交わす声が聞こえてくる。
革命児は「俺たちを売ったな！」と怒り、参謀の制止も聞かずに外へ躍り出て、資産家とその家人を皆殺しにした。
参謀は「ああ、何と言う事だ！」と顔面蒼白に。庭には支度された鍋がグツグツと煮えており、彼らは牛を捌いて二人に馳走するつもりでいた事が判明したのだ。

――翌朝。革命児はたったひとりで逃避行を続ける事となった。
薄氷を踏むような思いを重ね、なんとか安全圏まで脱出し、部下達と合流を果たす。
「一緒にいた参謀はどうしたのですか？」と部下に聞かれた彼は苦笑いし、「あいつには見限られてしまった」

のちに革命児は暴君を打倒し、覇者となったが、部下を掌握できず、叛乱軍に拠点を包囲される。
革命児は嘆く。
「あの時『早くこの不幸な勘違いをお忘れ下さい』と参謀は慰めてくれた。
俺は『コイツは俺のおこないを吹聴するかもしれない』と疑い、その場にあった槌で頭を叩き潰してしまった。
あいつがいれば、こんな叛乱に足元をすくわれなかったろう…」

# 麗しの銀髪

「最近、射撃の腕が上がらず困っている」
「いざという時、ちゃんと相手の急所を撃てるか心配」
そんなお悩みとはもうサヨナラ！！
今日は、射殺を愛する全ての方々にオススメの！
とっておきの商品をご紹介しちゃいマス★

それがコチラ、『麗しの銀髪』～！！
ドンドンパフパフ♪
見て見て、ちょーカッコイイ銃でしょ～！？
繊細な細工が施されたデザイン、子供でも持ちやすい軽さ！
お手入れだって、と～っても簡単なんデス！

そして、この銃には～……なんと！
射撃の神と名高い、あの御方の髪が埋め込まれてるんデス！
すごくな～い！？　ヤバくな～い！？
射撃神の髪が宿ったこの銃を使えば、
アナタもたちまち射殺名人★間違いなし！

『麗しの銀髪』は、限定２０丁のご用意デス♪
死んじゃった射撃神の頭に残ってた髪が、
たったの２０本だったからね～。ちょーレアだよ！
お申し込み受付は、このＣＭ終了直後から！
早い者勝ちだよッ！　お電話お待ちしておりマース★

# 屈折光の横笛

【楽器】くっせつこうのよこぶえ

その横笛が奏でる音色の、なんと美しいことでしょう。
吹けば、その曲を聞いた生き物は歌い踊り、
建物は色鮮やかな光に照らされ、花々は咲き乱れる。
持ち主は、世界一幸せに違いありません。

え？　そんな横笛があるわけない？
……一度試してごらんなさいな。
きっと、世界が変わって見えるはずです。

不幸せなことがあるとしたら、
横笛を手放せなくなる、その一点だけでしょう。
だって横笛がもたらす、美しい音色や美しい光景は、
病みつきになること、間違いなしなのですから。
吹くことをやめれば最後……。

歌い踊っていた生き物は阿鼻叫喚、建物は老朽して崩落。
花々は枯れ果てるでしょう……本来の姿通りに。
あら、大切なことを言い忘れていました。
その横笛は、吹けば周りの景色が歪んで見える。
……そういうものです。

# 依存のリース

【サンタさんへ】
ごめんなさい。突然プレゼントを選べと言われても選べないので。僕はプレゼントいりません。

それかいつもお世話になっている杖が欲しいというものが欲しいです。何が欲しいのかは杖に直接聞いてください。

それか、サンタさんの服が欲しいです。

ああ、でもきっと今年も水着にされてしまいそうなので、みんなが風邪をひかないように暖かい服をあげたいです。……ごめんなさい。やっぱり選べません。

# 不服の英雄

【打撃】ふふくのえいゆう

辺境の蛮族が侵攻を仕掛けてきて、その国の騎士団は撃破され、王都は陥落した。
片田舎に暮らす英雄は蛮族の支配を不服とし、義勇軍と共に決起。
連戦連勝を飾り、彼らを追い出したのである。

国王は救国の英雄を讃え、大元帥に奉じた。
が、権力に対してなんの執着もない英雄はこの扱いを不服とし、国王と激しい口論を繰り広げた末、職を返上。
田舎に引きこもってしまうのだった。

娘を王に嫁がせた宰相が国の実権を握り、暴政を働きはじめた。
かねてから英雄の求心力を恐れていた宰相は、「謀反の疑いあり」と難癖をつけ、彼を捕えようとした。
英雄はその疑いを不服とし、兵士をちぎっては投げちぎっては投げ、叩き出した。

その後、英雄は国王に頼まれ、宰相の一派を国内から駆逐する。
国王は英雄に深々と頭を垂れ、「自分は国を支える器にあらず、代わりに王となってほしい」と懇願した。
束縛を嫌う英雄はその頼みごとを不服とし、固辞。何処ともなく姿を消し、二度とその国に戻ることはなかったという。

# 正義の賀正笛

【楽器】せいぎのがしょうてき

「ジャじゃーん！！」

「2019年のキャラクターたちの運勢ヲ占う、カフェの販売実績が出マシタ！」

「出マシタ！」

「オメデトウございマス！」

「やはりスノウは優等生デスね！」

「どのグッズも極めて優秀な
販売成績ヲ残しマシタ！」

「オメデトウ！　そしてアリガトウ！」

「デスが……」

「少し油断したようデスね！」

「ファイル部門モ、スタンド部門モ……」

「2位デシタ！　これには我々もビックリ！」

「1位はグレーテルだったのデス！」

「ナノで、次からは改善が必要デス」

「2019年カラは新たな魅力デ、
勝負する必要がアルデス」

「さあ、今年こそ飛翔の年にスルのデス！」

# 成金の賀正刀

【刀剣】なりきんのがしょうとう

「アラジン……」

「率直に申し上げマシテ……」

「貴方様は扱いニ困ってイルのデス」

「正直、男性キャラの需要ハない。ト、思ってたのですガ……」

「微妙にガチャの売り上げイイデスシ……」

「どのくらいグッズを発注すればイイのか」

「皆目見当ガ付かないのデス！」

「在庫デ溢れるト倉庫が圧迫サレルノデ」

「頑張って魅力をアピールしてクダサイ！」

「ぶっちゃけマスと、貴方様には、コレからの男女比をどうするベキなのかという、命運がかかっていマス！」

「これ以上メンドクサイ女性キャラが増えるト、我々の心労も絶えナイので」

「是非、頑張って欲しい所デス！」

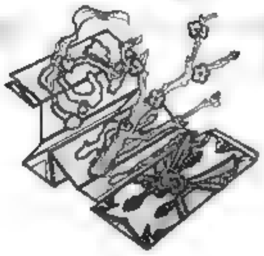
「デスがまあ、うちのキャラクターたちハ」

「性別問わず変なキャラばかりナンですけどね……」

「そろそろ、我々に優しくしてくれるポジションが欲しい所デス」

「原作者サーン！」

「聞こえてマスかー？？」



# 被虐の賀正書



「ジャじゃーん！！」

「2019年のキャラクターたちの運勢ヲ占う、カフェの販売実績が出マシタ！」

「出マシタ！」

「オメデトウございマス！」

「かぐやはナント……」

「クリアファイル部門デ、下から1位！」

「アクリルスタンド部門デ、下から2位デシタ！」

「どんマイ……」

「デモ、悲観するコトはアリマセン」

「トッテモ、僅差だったのデス」

「もう100個くらい売れバ、中堅に入れマス」

「来年は露出以外の魅力ヲ高め、
上位ヲ目指しましょウ！」

「まあ、デモ今回の5倍は売らないと、上位ニハは入れないですけどネ」

「……………………」
「…………」

「大丈夫ダイジョウブ！」

「かぐやならイケます……ヨ？」

# 火蜥蜴の焔銃



その国では太古より竜が人と共に暮らし、竜の死骸から皮を剥いで作った“竜甲”と呼ばれる鎧が伝わっていた。
矢玉や剣、槍をまったく通さない非常に優れた防具であるそれを身に付けた兵士らは“竜甲部隊”と呼ばれ、近隣諸国から畏怖された。

たびたび“竜甲部隊”に辛酸を舐めさせられた隣国の軍師は、打倒の方法を求めて自らあちこち歩き回った。
そして森の奥地で“火蜥蜴”という一族と出逢い、彼らから秘伝の火薬の作り方を教わったのである。

祖国に帰還した軍師は直ちに“火蜥蜴”から仕入れた技術を武器に応用させる。
苦心の末に完成した“火蜥蜴の焔銃”は見事に“竜甲”を溶かし、彼は「これで我らの勝利は疑いなし！」と大いに喜んだ。

“竜甲部隊”との決戦直前、軍師は部隊に“火蜥蜴の焔銃”をズラリと構えさせた。
「撃てぇ！」指示と同時に、銃声が轟き、異物を混ぜられた銃が次々に暴発。
軍師以下全員、爆死を遂げる。
それを物陰から見届けた“火蜥蜴”の者はそっと立ち去る。彼らは“竜甲部隊”の国と前々から親交を結びたいと思っており、彼らを手土産にしたのであった。

# 栄光の杖



貧しい村で育った。
空腹が嫌いだった。
飢えで始まり終わる日々が憎かった。
村には絶望が蔓延していた。
俺はいつか、この村を救って栄光を掴みたかった。

ある時、立派な長杖を持った僧侶が村にやって来た。
天に祈ればいずれ救われると僧侶は説いた。
僧侶の教えに希望を持ち、天に祈る村人が増えた。
祈りなど腹の足しにならないと、僧侶を嗤う村人も増えた。
俺は後者だった。

ある日、僧侶を殺した。
立派な長杖を血で汚し、奪ってやった。
天は僧侶を救いはしなかった。
祈りを捧げていた村人の目も、これで覚めるだろうと思った。
今日１日を生きるために必要なことは、祈りではないのだ。

だが、それは間違いだった。
救いが無いと知った村人は、生きる理由を失ったようだった。
村には色濃い絶望と死の気配が満ちた。
しかし村人は立ち直った。俺の持つ杖に祈ることで……。
俺が手にしたのは、いったい何だ？

# 潔白の鎌



【裁判傍聴人マルスの日記より】
夫殺しで訴えられた女房ってのが、えらい別嬪だったのよ。
夫の方は自分から体の不調を訴え、医者の元に行き、診察中に血を噴いて死んじまったんだってさ。
で、医者の見立てじゃ、毒を盛られてたんだと。
そこで夫の妹が、兄嫁を訴えたんだ。

【法廷記録係ジミーのメモより】
訴えられた妻曰く、夫とはすれ違いが続いていたという。
寝室は別だし、食事も一緒に摂ることはなかったと。
それでいてお互い干渉せずに夫婦関係でいたのだから毒を盛ったりする理由がない、と主張している。

【市内警邏隊モーゼスの業務報告書より】
市民から通報があり、裏路地に血まみれの鎌が捨てられているのが見つかった。
先日、夜な夜な街に現れては酔漢を斬殺していた快楽殺人者が殺しの直後、騎士団に見咎められて逃走したという一件があった。
その時に殺人者が捨てていったものである可能性が高い。

【被告側証人シスター・セレーナの証言】
彼女は「胸に燻る破壊の衝動が抑えきれません」と相談に来ました。
私は一振りの鎌を授け、「心のままに振る舞いなさい」と諭し、彼女も明るく活発になりました。
彼女が夫を殺すのであれば、その鎌でバッサリいくはずですわ。
え？　街で酔漢を斬っていたのが彼女なんじゃないかって？
ならその得物は、夫殺しの潔白を証明する鎌になるのではないでしょうか。

# 画家の秘密



あの人は画家でね。
みなしごを引き取っては
その子を材料にして
一枚の絵にするんだってさ。

キャンバスに貼るのは子供の皮。
血は絵の具。
髪の毛は筆。
内臓は脂を搾ってアトリエの灯りにするんだって
どの絵もとっても高く売れるみたいだよ。

でも骨だけは使い道がなくてね。
画家は手先が器用だから
骨でバイオリンを作ることにしたんだよ。

できあがったバイオリンは
材料にされた子供の声で歌うんだ。
ねえおじさん 僕の骨でできたバイオリンはどう？
よかったら僕で描かれた絵も買ってね。
きっと素敵な絵になってると思うから。

# 信者の嘆き



その教団のアジトに踏み込むと衛士たちは壮絶な殺し合いの跡を目撃することとなった。
息の残っているものは誰一人としていなかった。

その年、その教団の教祖が死に、残された教団を誰が統べるかで争いがまき起こった。

醜い争いは絶え間なく続き、信者たちは嘆いた。
どうか争いが終わってほしい、と。
その嘆きから間もなくして、信者たちは、教祖が国からの弾圧があった場合に備えていたいくつもの武器を発見した。

争っているものはいなくなった。
信者の嘆きは教祖に聞き届けられたのだった。

# 貝響の弓

【射出】かいきょうのゆみ

戦場をつっきる矢が音を鳴り響かせる。
それは、貝響の弓から放たれた矢。

矢は息を吹き込まれた貝のような低い音を響かせながら戦地を駆け抜け、待機状態にあった戦士たちを戦闘状態へと覚醒させる。

平和が訪れたあとも、ひとたび貝響の弓から放たれた矢が音を発すると戦場で倒れたはずのものが再び立ち上がる。

そして、貝響の招来に応えるかのように、生前同様に敵を求めて歩きだすのだった……。

# 鬼 糸巻の斧

【打撃】おにいとまきのおの

ソレは謎多き生物である。
一切の食事や排泄はおろか、睡眠すら行わず、地上を漂泊するのだ。

ソレは群れを為さず、単独で行動する。
が、ソレに寄生する怪物たちが大勢いて、結果としてその漂泊は目立つし、奇異に映る。

ソレはたまに、思い出したようにトンボ返りをする。
その間、付き従う怪物らはその鮮やかな軌跡をジッと見上げている。
いったいなんのための行為なのか、それを知る者はいない。

ソレは生涯を終える際、巣穴に籠もる。
危険を冒してそこに潜り込んだ私は、斧らしき鈍器を発見した。
果たしてこれはなんなのだろうか？
一部の人が〝オニイトマキ〟と呼ぶ彼らの生態を、私は生涯かけて追求しようと思う。

# 雷霆の鎌



その王、英明にして軍略にも政略にも長けり。
その苛烈さゆえ、〈雷霆〉と呼ばれり。
臣下、常に神経を尖らせ、〈雷霆〉の顔色を窺う。

一方面軍の将官、以前に敵軍に敗走した際、〈雷霆〉の嚇怒を買う。
恨み骨髄に徹していた彼の将官、全軍が出払った隙を窺い、部下を連れて〈雷霆〉の寝所を急襲す。

もはや逃げ切れぬとみた〈雷霆〉は自害。
かくして将官は王都を制圧。天下に号令をかけるものなり。
——だがその直後、敵国の追跡に遭って遅れに遅れていた〈雷霆〉からの使者、将官の元に到着す。

汝には王佐の才あり、奮起を促したいが故の厳しさを許せ、今後も余を輔けよ——
〈雷霆〉の手紙を読み、将官は悲憤。
王太子率いる討伐軍の前に全面降伏し、〈雷霆〉の愛用した鎌の露と消ゆ。

# 殉教者の剣



こんな小娘が俺の相棒だと？　しかもこいつは「神の声を聞いた。自分がこの国を救う」とかなんとか、デタラメ吐きやがる。とんだ誇大妄想女に捕まっちまったぜ。ついてねえ。「せいぜい俺の足を引っ張んなよ」小娘は平気な顔で俺の嫌味を無視しやがる。

小娘に拾われてから五年。早いもんだぜ。最初は危なっかしかったこいつの剣裁きも、だいぶマシになってきたな。つか、いつの間にかでかい騎士団を率いて戦争で勝ちまくりじゃねえか。神の使命を全うしてえのはわかるけど怪我には気をつけろよ。もう年ごろの娘なんだからよ。

俺と小娘は敵国に捕まっちまった。
俺は逃げろって叫んだけどあいつには聞こえやしねえ。あいつが聞くのは神の声だけさ。けどよ、今回ばかりは神様も沈黙してるみたいだぜ。
もし俺の体が動くなら、今すぐにでもあいつのところに駆けつけてやりてえ。
杜撰な裁判の結果、あいつの処遇は、よりによって火あぶりときたもんだ。
俺は……最前列で、あいつの身体が溶ける様を見物させられちまったよ……。
最後の瞬間まで神を信じ続けたあいつに、神は何も答えねえんだ。

【抜けない剣】
かつて、救国の娘の処刑場として使われた広場には一本の剣が刺さっている。
娘が死んだ翌日、いつの間にか彼女の灰の上にその剣が突き立っていたのだ。
犯人はわからない。剣がひとりでに動いたという怪情報も当局には寄せられた。
どれほど屈強な大男が試そうとも、その剣が抜けることはなかった。
未来永劫、彼女の死の上に、刺さりつづけた。

# 勇将ノ形見

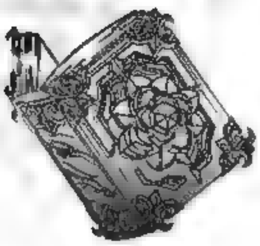


腕利きの暗殺者が敵陣営に忍び込んで一騎当千の勇将を闇討ちし、その懐から護符を奪い取った。
彼は敵国の軍装に着替えると、敵国の王都へ走った。

敵城の手前で門衛に誰何された暗殺者は「拙者、将軍閣下の部下でござる。閣下は先日、暗殺者の凶刃に斃れ申した。この知らせ及び閣下の形見を我が王にお届けしたく！」と叫んだ。

暗殺者はまんまと敵王への伺候を許され、勇将の形見を渡すフリを装って近づき、敵王をも暗殺した。
場が大混乱に陥る中、暗殺者は王城を脱出し、「してやったり！」と大笑いした。

馬を飛ばすうち、暗殺者の耳に奇っ怪な呻き声が届いた。
懐をゴソゴソ探った指先が、勇将の形見に触れた。
次の瞬間、突然棹立った馬の背から振り落とされ、彼は頸骨を折り、絶命したのだった。



# 天趣の聖典



神父の前に、一人の男がいた。彼はせわしなく動き回り、かと思えば時々立ち止まり、時には壁に自らの頭をうちつけ、また突然笑い出し、いきなり床にひっくりかえって眠りだした。

神父の前には天の世界について書かれた本があり、彼は何年もそれの読解に取り組んでいたが、そこに書かれていることはさっぱり解読不能だった。
ある日彼は夢の中で天啓を得た。「お前に理解のための物差しをやろう」と。
翌朝教会の前に男が立っていた。

日々の糧を得るために生きている。他者より優れていることを自ら、もしくは自らが関係を作る人物によって示し続ける。己の興が乗ることをひたすら追求し続ける。いずれも神ならぬ凡夫の人間の行いであり、天上界はそういった価値観からは逸脱したところにあるのである。

人の中でも人から遠い存在、人間社会からは狂人と呼ばれるような者こそが人間の中で神の言葉に近づける。そう解釈した神父は、それから死ぬまでその朝たまたま教会の前に立っていた男の面倒を見続けたのだった……。

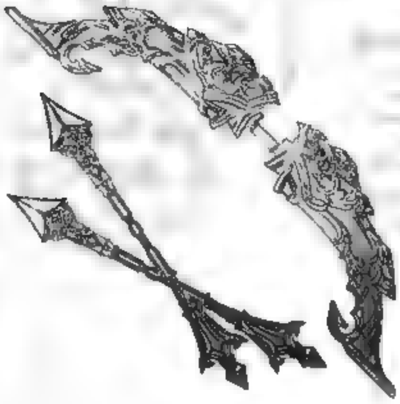
# 憤怒ノ鉄球
## （カゲウチ）

知らない。知らないよ。こんな気持ち。
ねえ、どうしたらいいの？　僕の杖……

狼の見せる血に塗れた赤い夢。本当はこんなことしたくないのに、それでも僕はやめる事ができない。破壊の衝動を抑えることができない。

赤の他人を壊し続け、かつての仲間を八つ裂きにしても僕は止まらない。止まれない。いつしか赤く濡れた杖は真っ二つに折れている。

もう、あれこれ僕に命令してくれた君はいない。
その事実に気づいた時、
僕の瞳から一筋の涙が零れて散った――



# 貴族の長弓

【射出】きぞくのながゆみ

とある国の貴族の間では、ある遊びが流行していた。
自分の妻の頭に林檎を置いて、それを射抜く、というものである。
必然、事故は起きる。
妻の頭に刺さった矢を引き抜こうとする者は後を絶たなかった。

愛する妻を射殺した貴族たちは大層落ち込んだ。そして「監獄に入れてくれ」と自ら頼み込んだ。
だが、「故意ではない」という理由で司法は彼らを無罪とした。
しばらくすると、傷心の彼らは新しい妻をめとり、その若い胸に顔をうずめて悲しみを癒した。

夫人の死亡率が上がると、ついに国は動き、その遊びを禁じてしまった。
それに興じるつもりだった貴族の一人は大層嘆き、部屋の中で本音をぶちまけた。
「くそ、妻を合法的に殺せる唯一の方法だったのに！」

浮気性の貴族たちは若い女を欲していた。だがその国では離婚は禁じられており、浮気をすれば死罪であった。
それでも、遊んでいる最中に起こった事故であれば、誰にも咎められない。
古女房を処分するのに、これほど適した方法はない。

# 護衛夜叉

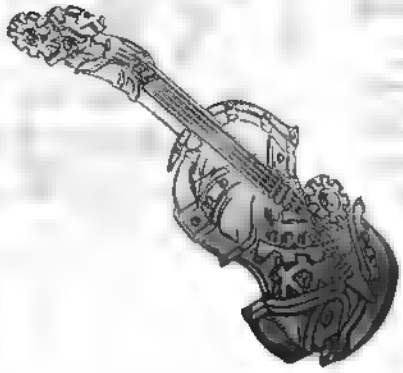


幼い頃から独り身だった少女は産まれて間もない頃からその杖を身につけていた。少女が寂しい夜に泣くと、杖は優しい子守唄を奏でた。だが少女の敵に対しては一切の容赦がなかった。
ある時少女は一人の青年に恋をした。何度かの逢瀬の後、青年は言った。
「これからは僕と一緒にいてほしい」

だが、次の瞬間、青年の首筋から一筋の血が流れた。それは杖から放たれた圧だった。
「そんな危険な杖は人々を傷つける前に燃やしてしまった方がいい」
少女はためらったが青年の忠告に従い、杖に火をつけた。杖は悲鳴のような音をたてながら黒焦げになり、みるみるうちに灰となった……。

自分の家に少女を招いた青年は、少女にご馳走をふるまった。
ご馳走を食べた少女は、いつの間にか眠ってしまった。
少女が目を覚ますと動けなくなっていた。椅子に縛り付けられていたのだ。
椅子、そしてご馳走の載せられた机。それらはよく見れば人間の皮をはりあわせて作られたものだった。

そして青年が入ってきた。
「これからずっと僕と一緒にいてください。他の子たちと……同じように」
青年は刃物を振り下ろした。だがその刃が少女に触れるより早く、青年は杖に貫かれていた。青年が絶命すると、杖は少女の前で灰となった。
その直前、少女はあの優しい子守唄を再び耳にした……。



# 虚構の提琴

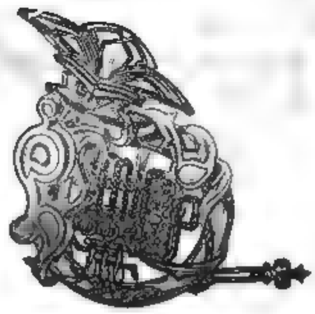


一人の男が辺境の町の一軒の安宿で死んだ。
彼の死に際について知る者はいない。死んだ時の表情も。

男は、旅の途中、噂に聞いた音楽を一生をかけて追い求めていた。
答えは最後の最後に見つかった。

その音楽は全て虚構だった。実在しない音楽だった。
存在しない演奏だった。存在しない観客だった。

男は存在しないものを一生をかけて追い求めていたのだった。
そして死の間際にそれを知り、そして死んでいった。
誰も知らない辺境の町で……。



# 怠惰ノ花笛
## （カゲウチ）



♪くまっは↑ ふしっ ぎー↓
くまっは↑ ふしっ ぎー↓
とっ ても↑ かわいい ふしぎー↓

♪こわくてっ↑ どうもうっ↓

なー のー に↓
なーんでっかー か わ い い↑

きーにも↓ のぼるしー↑
あーたまも↓ いいからー↓
ぜーったーい に げ れ な いー↑

♪そーれ でもー かわいいー↑
りーゆうは たんじゅんー↓

にーほんっあしでたちー↑
あーたまも おおきいー↑

きーわめっ↑ つきにはー↓
めーのいちがー↓ ぜ つ み ょ う！↑

♪くまっは↑ ふしっ ぎー↓
くまっは↑ ふしっ ぎー↓
とっ ても↑ かわいい ふしぎー↓

わたしーもっ ゆめではっ↓

かーわいい↑ く ま でしょ？↑

# 残焔の剣



悪い魔法使いが王国のお姫様に一目惚れし、求婚して拒絶された。
その事を逆恨みした彼は、魔導書を紐解くうち、禁忌中の禁忌たる魔導書を開いてしまう。
かくして封印は解かれ、伝説の邪龍が王国に降臨し、破壊と暴虐の限りを尽くす事となる。

王国の危機を見て、お姫様と恋仲の勇者が立ち上がる。
彼は邪龍に戦いを挑むも、その硬い鱗に渾身の一閃が通じず、いったんその場を退く。
どうすれば邪龍にダメージを与えられるか、勇者は考えに考えた。

勇者は王国の守護神殿へ赴き、火焔神に拝謁し、自分の剣に加護を授けてほしいと頼んだ。
「ならぬ。神の力は人に扱えるものではない。焔は必ずお前の身を滅ぼす」と火焔神に拒まれてなお、勇者は「それでもお願いします！」と頼み込んだ。
火焔神はとうとう折れ、勇者の剣に加護を授けた。

かくして勇者は邪龍と再戦し、見事にかの者を滅ぼす。
邪龍討伐の夜、勇者は姫を抱く。だが剣を通じて焔は彼の体に宿り、一年の後、姫の胎からドロドロに溶け崩れた赤子が引きずり出される。
姫は錯乱の末、あえなく死亡。勇者も高熱に倒れ、帰らぬ人となったのだった。

# 紅往生



薙刀を扱わせれば天下無双と名高い武士がいた。
古風で頭の固いところはあるが、冗談をよく言う気さくな一面もあった。
将軍に多大な恩を受けた彼は、将軍が身罷った後、その忘れ形見を奉じて将軍職に就けた。

帝の許可なく将軍職を継承した事で、保守派の有力武士らが結託し、叛乱を起こした。
薙刀使いの武士はみずから軍を率いて彼らを散々に打ち破り、多大な戦功を立てた。
将軍は彼を激賞し、ますます重用した。

将軍は父には遠く及ばぬ愚鈍な人物で、悪政を敷いた。
薙刀使いは同輩に呼ばれ、国の有力者が集まる密談の場に顔を出した。
「将軍を追放し、帝に将軍職を返そう！」と彼らは言い、薙刀使いに血判状への署名を求めた。

薙刀使いが申し出を拒むと、襖が開け放たれ、刀を持った武士らが登場した。
数十人を討ち取った薙刀使いは飛来した矢に全身を射貫かれ、舞い散る紅の中に往生した。
忠義を曲げず主君に殉じたその最期は「紅往生」という舞台劇の形で今日に伝わっている。

# 乙女の日記

○月×日
今日、めっちゃ頭にきた。
くるしみで
誰かわたしの日記をのぞき見してたの。
すまきにされて

本当失礼しちゃうわぷんぷん。
りんねてんせい
罰として今読んでる日記の頁に毒を塗っておきました。
のはらから

目の前に青い薬と赤い薬があるでしょ。
むしが
青い薬を飲まないと死んじゃうんだからね。
とんできた

赤い薬を飲んだら死んじゃうから気をつけてね。ふふ。
しんかろん
ぬかづけ

# 浅はかな裁き

とある男が窃盗の容疑で捕まった。
彼の悪人顔を一瞥した判事は、ロクな調査を行おうとしなかった。
「情状酌量の余地なし、更生の見込みなし」と決め付け、処刑してしまったのである。

処刑執行後、死罪になった男の妻が記者の取材を受けた。
男は愛想こそ悪いが妻には優しい夫であり、病気の娘の治療費を工面するため犯罪に手を染めたという事が新聞に書き立てられ、人々の議論を呼んだ。

死罪になった亡夫は同情の声を集め、妻には激励の投書が相次いだ。
判事の名声は失墜し、政界に打って出る道は閉ざされた。
「浅はかな裁きの報いか…」と呟いた判事は、家伝の薙刀で自分の首を刎ねた。

判事は知らない。妻はデタラメを言っていた事を。
彼女は記者と愛人関係にあり、彼から「亡くなった旦那さんをダシにして金儲けしよう」と持ちかけられ、一連の筋書きを作ったのである。
かくして判事は、二重に「浅はかな裁き」をしたのだった。

# 苦難の英雄



その英雄は著しい肥満体だった。

英雄の脂肪はとてもぶ厚かったため、敵の攻撃を吸収した。
おかげで彼は大変うたれ強く、仲間たちの有能な盾役となった。

ある戦いで、攻撃をかわしそこねた英雄の腹に刃が突き刺さった。刃により肉が削られたが英雄はあまり痛みを感じなかった。
ところが、何を思ったか敵は、刃についた肉をそのまま口に入れたのだった。
すると敵は苦しみ悶え、死んでしまった。

その日からが大変だった。噂で広まった彼の腹の『死の肉』を、殺してやりたいほど憎んでいる誰かに食べさせてやりたいという者達が襲ってきた。ある晩、一緒に冒険していた仲間までもが彼の寝込みを襲ってきた。英雄はすっかり人間不信となって仲間たちから離れ、一人隠遁生活を送るようになった。
彼はいつしか、苦難の英雄とよばれるようになった……。

# 月灯りの音

わたしは生まれた時から難しい病気にかかっているそうです。
ずっと病院にいて何回も手術をうけていて
お父さんもお母さんもたくさんお見舞いに来てくれます。
だからわたしは痛くてもがまんできます。

ある日、耳が聞こえなくなりました。
だけどその可能性があるという話は
前からたくさん聞かされていたので大丈夫です。
お父さんお母さん泣かないでね。わたしは大丈夫だからね。
静かな世界ってそんなに悪くないよ。わたしは平気。

昨日読んだ本にこんなことが書いてありました。
しんと静かな夜に笛を吹くと月灯りの音がするそうです。
お星様のキラキラした音よりもずっとやわらかくて
それでいて高く澄んだ鈴のような音だとありました。
一度でいいから聞いてみたかったな。

そう言ったらお父さんとお母さんが夜に笛を吹いてくれました。
わたしにはなんの音も聞こえなかったけれど
きっと素敵な音がしたんだと思います。
でも本当はわたし、またお父さんとお母さんの声を聞きたいよ。
それが叶うなら、月灯りの音なんて一生聞こえなくていい。

# 公女の熱気球



昔々、トーローという名前の若者がいた。
トーローはある日海岸で、海を漂って流れ着いた熱気球の置物が、古く汚れていたため、若者たちに棒でつつかれたり、石を投げつけられたりしている現場に遭遇した。

トーローはいくらかの金をだして若者たちからその気球を買い取った。
すると熱気球は膨らみトーローに乗るように促した。そしてトーローは熱気球に乗って世界中の上空を旅して回った。

その気球はかつて貴族の女性の部屋にあったものだった。病気だった女性は、一生を床で過ごした。女は本を読んだり旅人の話を聞いて、世界の様子を夢の中で見ていた。やがて彼女の国は攻め滅ぼされ、その混乱のさ中、その貴族の女性も死んだ。気球の置物はいつの間にかどこかに消えていた。

数日後、海岸でトーローの死体が発見された。彼は若者たちに私刑され、その傷と出血が元で死んでいたのだった。彼の手元には熱気球の置物があった……。

# 古の風書

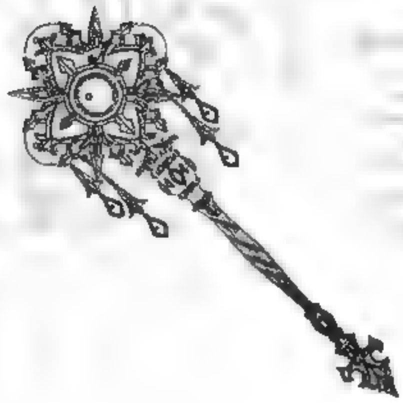


古書を開くと、生物のいない世界の景色が頁の中に広がる。
景色の中で時折、風が吹いている。時に強く、時に弱く。

無音の中で風だけが吹いている。
景色の中に動物だけがいない。だがそれは些細な事だ。風はそよぎ植物の葉は揺れている。

かつてこの風景の中に動き回るもの達がいたのかもしれない。
彼らは戦い、子を成し、生きていたのかもしれない。彼らが行動し、そこで死ぬたびに土地には彼らの物語が生じ、それはときとして忌まわしきものとなって彼ら全員に災いを及ぼした。
だが彼らの痕跡すらもなくなった今、それらは全て無だ。最初からなかったのと同じだ。

始まりなのか終わりなのか。
そこに見えている風景が、動き回るものたちが地上に現れる前の世界なのか、それともそれらが死滅し、全てが終わった後の世界なのかは定かではない。
確かな事は、風は吹いている。変わらず。



# 祈雨の杖



【雨乞い】
・干ばつ時、雨を呼ぶために行われる儀式。
・儀式内容は地域によって大きく異なる。
・雨が降るまで続くものが大半である。

【雨女】
・雨を呼ぶ妖怪。
・転じて、外出時などの予定を立てると、
　当日は高確率で雨天となる女性を指す。
・雨乞いでは巫女を務めることがある。

【雨神】
・雨や嵐を司る神。
・雨乞いの儀で祈りを捧げる対象。
・雨女は雨神の子という説がある。

【とある村の伝承】
・雨乞いの儀で雨が降らなかったことに怒った村人は、
　巫女を務めた雨女を生贄とした。
・子を還された雨神は喜び、村に恵みの雨を降らせた。
・村人は以降、干ばつの度に雨女を生贄としたが、
　雨女の祟りによって村は洪水に襲われ、水底に沈んだという。

# 選定の剣



村は食糧難に苦しんでいた。
間引きが必要である。
選ぶのは一本の剣。
剣先が倒れた方角の家のものを一人、殺す。

剣が選んだのは村長の家。
村長と妻と一人娘。誰か一人を間引かねば。
妻は娘の代わりに死のうとした。
娘は母の代わりに死のうとした。
村長は生き残りたかった。

村長と妻と一人娘の三人で、改めて選定を行うこととした。
三人で円になり、中央に剣を立てかける。倒れた剣の先が向いた者が死ぬというルール。
村長は事前に細工を施していた。この剣は絶対に自分の方へは倒れない。
剣はしかし、村長の元へと倒れた。

「馬鹿な！」声を荒げる村長。
剣には呪いがかかっていた。くだらぬ細工をしたものを指し示すという呪いが。
後ずさる村長へと、愛娘は選定の剣を振り下ろした。

# 強欲ノ漆槍
## （カゲウチ）

【長柄】ごうよくのしっそう（かげうち）

ねえ、兄様。私を見てください。
ねえ、兄様。私を見てください。
お願いです、兄様……私ダケをミテクダサイ。

ねえ、兄様。私の後ろを歩かないでください。
それでは兄様のお顔が見えません。

ねぇ、兄様。私に背を向けて寝ないでください。
私は触れたいのです。兄様の心に触れたいのです。
どうしようもなく。どうしようもなく。

ああ、兄様。
たとえこの甘美な世界が、鴉が見せる泡沫の夢だとしても……私が兄様の全てを求めることは……愚かなのでしょうか？

# 海神の刀



そこは、世界の涯。天地創造以来、ずっと凪いでいた海面を割り、龍神が出現した。
彼は次々に船を沈め、港という港を荒らす。
それを見た海神は「おのれ、よくも我が民を！」と憤り、龍神に戦いを挑んだ。

海神と龍神は己の全存在をかけ、激しい攻防を繰り広げた。
風は吹きすさび、海は奔騰し、空は終末を想起させる茜色に染まり——
龍神の牙に喉笛を噛み千切られ、海神は斃れたのである。

海神が斃れるのを見た人間の王は、悲憤の声を上げた。彼は海神と固い友情の誓いを結んでいたのである。
部下達が止めるのも聞かず、遺品の刀を拾い上げるや、龍神に立ち向かっていった。

龍神は海神を斃したとはいえど、傷つき果てていた。
激闘の末、人間の王は友の仇を討つも、神々にしか扱えぬ武器を使った負荷により死亡。
そして、大きな波濤が世界すべてを飲み込み——
興亡など所詮、刹那にすぎぬ。ものみなすべて、母なる海に還るのだ。

# 戦いの儀

少しの間、耳を傾けて頂こう。
我が国では何か主張があれば“戦いの儀”を設け、剣の勝利を以て訴えるのが慣わしだ。
だが私に云わせれば、無用な流血に他ならない。
そのような野蛮な慣習、断固として廃止すべきだ。

「この国をより良い国に生まれ変わらせよう」——大志を胸に、元老院へ乗り込もうとした私は、入口で番兵らに誰何された。
「私は野の賢者である。議員共に訴えたい事がある故、そこをどけ」と告げた私に、番兵らはこう云った。
「分かりました。では、“戦いの儀”による剣の勝利を以て、ここを押し通りなさい」

それから“戦いの儀”を数度行い、数人の命を奪うハメになった。
全身に返り血を浴びた私が入って来るのを見て、議員共はざわつき出す。
私はすっと息を吸い込み、大声を張り上げた。
「“戦いの儀”は我が国の発展を百年単位で遅らせる蛮行である。ただちに廃止すべきだ！」

元老院で可決されるまでに反対者と“戦いの儀”を行い、通過後、反対する市民たち全員と“戦いの儀”を行い、“戦いの儀”をおろそかにするのを好まぬ戦神と“戦いの儀”を行い——
もう、溜息しか出てこない。“戦いの儀”を廃止するための“戦いの儀”は、いつまで続くのだろう…？

# 水鳥の魔書

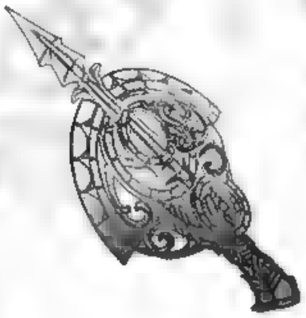


地下迷宮の中。さ迷い続け、用意してきた道具や食料等の物資が尽きて完全に追い詰められていたときに、冒険者はその魔書を拾った。魔書には「水鳥の書」という文字と、水面に浮かぶ水鳥の絵が描かれていた。そしてその直後、明らかに今の自分がまともに戦っても勝てそうにない魔物に遭遇した。

冒険者は聞いた事があった。水鳥は、優雅に水の上を進んでいるように見えて、その実、水の中では懸命に足を動かして泳いでいるのだという。なんとしても助かりたいという祈りにも似た思考の中で、きっとこの魔書はそういう水鳥の性質を魔法としてあらわしたものだという結論に達した。

そして冒険者は魔物に対して最後の力をふりしぼって戦った。だが案の定まったく歯がたたなかった。そして、最後の切り札であるその魔書を発動させた。向かってきた敵にその効力が及ぶように。
そして、全身に力がみなぎった敵からほぼ一撃で殴り殺された。

実際には水鳥は懸命に水中で足を動かしているわけではなかった。軽くかいて、効率よく進む。魔法もそう作られたものだった。最低限の体力消費で最大限の力を発揮。だが何故か水鳥について誤解した言説が広まっていることを、その魔書を作った、とある悪意ある呪われた発明家は知っていた……。



# 時の座標



【店主】
寄ってうっしゃい見てうっしゃい！
ヘッヘッヘッ。さあさあ皆様、お立ち会い。
ここに陳列しましたるは、世にも珍しきクロスボウ。
なんと、時空を飛べちまう代物だ！

【店主】
東に向けて矢を放てば過去へ！
西に向けて矢を放てば未来へ！
矢の飛距離分、射手は時空を飛べるのさ！
ヘッヘッヘッ……どうだいお客さん、欲しくなってきただろう？

【客】
じゃあさあ、そのクロスボウを片手に１つずつ持って、
東と西に１本ずつ矢を放ったらどうなるんだよ？
【店主】
ヘッヘッヘッ、興味深い質問だ。試してみやしょうか！

【客】
うわ……ッ！？　店主の体が縦真っ二つに裂けて消えたああ！！
すっげえ！！　過去と未来に同時に飛んでったんだ！！
これ本物じゃん！！　オレ１つ買うわ！！　これいくら！？
オーイ！　おやっさん、いつ戻ってくんの？　これいくらー！？

# 怠惰ノ六弦琴
## （カゲウチ）



Q. これはペンですか、それとも馬ですか？
A. いいえ、これはペンでも馬でもありません。

Q. これはクマですか？
A. いいえ、これはクマではありません。
ドロシーです。

Q. ドロシーはクマに見えると思いませんか？
A. はい。アリスはスノウよりクマに近いが、
ドロシーはアリスよりなおクマです。

Q. ドロシーはどのような心境で
クマの被り物をしているのでしょうか？
A. 彼女はキュウリのように落ち着いています。

# 面影の斧

【打撃】おもかげのおの

一振りの剣だけを友とし、旅を続ける戦士がいた。
斧を持った男に家族を皆殺しにされた彼は、ひたすら仇を探し求めていたのだ。
——そして。
仇の面影があり、かつ斧を手にした男をとうとう見つけ出し、戦士は舌なめずりした。

戦士は勇躍し、気合一閃、斬りかかった。
激しい攻防の末、相手を一刀のもとに斬り捨てた。
が、その場に倒れ込んだ顔をあらためて観察し、戦士はまたも失望を味わった。
それは、仇とは完全に別人だったのである。

気を取り直し、戦士は旅を続けた。
仇の面影があり、かつ斧を手にした男をまた見かけ、「今度こそ！」と勇み立った。
激闘の末、相手を切り伏せたが、戦士は再び失望する。
やはりその顔は、仇とは別物だったのだ。
折れた剣を捨て、戦士は死体から斧を拝借し、旅路に戻った。

街の通りを歩いていると、「友の仇！」という叫びと共に剣士が斬りかかってきた。
戦士は脳天から斬り下げられ、その場に倒れた。
薄れゆく意識の中、戸惑いの声が聞こえた。「ど、どうしたことだ。面影はあったはずなのに、似ても似つかぬ！」
かくして面影の斧を巡り、殺戮劇は続くのであった…。

# 華奢な切札



需要あるところに供給あり。それがビジネスの大原則だ。
危険かつ高度な任務があり、自分の腕を提供する俺がいる。
死ぬまではどうあっても生きにゃならんから、せいぜいスリルに富んだ日々を過ごそうと決めてんのさ。

敵地へ潜入し、暗号表を盗んでこい——それが“将軍”の依頼だった。
かくして俺は旅商人になりすまし、情報将校に近づいた。
んで、見事にお目当てのモノを盗み出し、何食わぬ顔で帰還したっつーわけだ。

待ち合わせ場所は、海に面した崖上だった。
護衛を率いて姿を現した“将軍”に暗号表を渡したが、次の瞬間、護衛どもが物騒な光りモノを抜いた。
「お前は知りすぎた。ここで始末し、口を封じさせてもらう」と“将軍”は嗤った。

慌てず騒がず、俺は帳簿を取り出した。
「“華奢な切り札”は最後に残しておくもんだ」
それは、“将軍”が国庫から相当な金をガメて高利貸しをしている裏帳簿の写しだった。
「俺が戻ってこなきゃ、モノホンの帳簿が機関の手に渡るぜ？」
“将軍”は負けを認め、俺を行かせたのだった。

# 月猫ノ願ヒ



雲ひとつない夜空なのに
お月様が見えない時があるでしょう。
あれはどうしてだか知っている？

そんな時お月様はね。
空に浮かんでいるのに飽きてしまって
姿を変えてこっそりと地上に降りているのよ。

お月様は猫の姿になって
夜の通りを歩くのがお好きなの。
人間を観察したり
会話を盗み聞きしたりして
その夜１番お気に入りの人間を決めるの。

月猫はその人間の
ささやかな願いを叶えると言われているわ。
だから夜あなたが猫を見かけたなら
優しくしてあげると
ささやかな良いことがあるかもね。

# 憤怒ノ蒼根
## (カゲウチ)

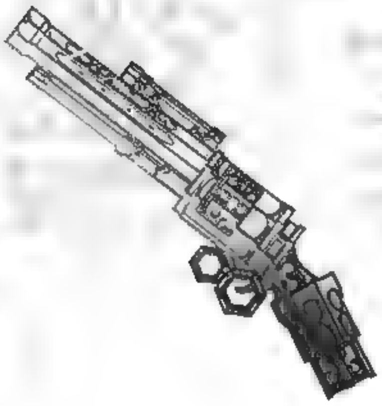
【打撃】ふんぬのそうこん(かげうち)

“怒り”と“眠り”は交わる事のない感情。
怒りに支配されたままでは、良い夢を見る事はおろか、眠りにつく事すらままならない。

怒りを収束させるには、憎悪の対象を取り除く必要がある。茨の姫は理解していた。
怒りを齎した大狼を屠る必要があることを。

だが、憤怒の感情を増幅させた元凶は溶けて消えた。その行き場のない感情は少女の体内を蝕み、やがて禍が発露する。

衝動に支配された少女が進む先は、どのような悪夢と交わるのだろうか――



# 多角の銃

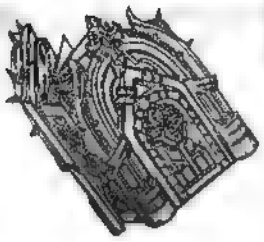
【射出】たかくのじゅう

「これ、な～んだ？　路地に落ちてたよ」
「やたらカクカクしてるね～」
「なんだろうね？」
「肩にコロコロするやつじゃないかな？」
「あ、イタキモチイーってやつだ！」

「ママは二の腕にも使ってたよ～」
「あれってなんでコロコロするの？」
「痩せるんだって！」
「え～！　すごいじゃん！」
「ねえ、みんな待って……これってライフルじゃない……？」

「え(笑)ライフル(笑)」
「あのさあ、ライフルはこんなにカクカクしてないでしょ？」
「ほんとだよねー。意味わかんなーい。ウケるー」
「ていうか話しかけんなよ、キモいっつーの」
「……ウウウウワアアアアアアアアア死んじゃえ！！！！」

兼ねてから虐められていた少女は、叫び声を上げると
それをつかんで、引き金を引きました。
ところが、それは勿論ライフルを模したマッサージ器でしか
なかったため、弾は出ませんでした。
仲間達の爆笑を背に少女は逃げ帰り、その夜首を吊りました。



# 神門の書



ヒトのココロはとてもセンサイなものだから、
カナシイってかんじたり、
キズついたなっておもったりしたときは、
そのココロをいやすチカラがひつようなんですよって、
キョウカイのヒトがおしえてくれました。

トモダチはとてもオカネモチだけど、
そのせいでイジメにあってカナシクて、
オトウサンたちとキョウカイにいって、
めずらしいオクスリをのんで、
ココロをすくってもらったのだといいます。

だからわたしもトモダチをこっそりイジメたことで、
ココロがすごくクルシクなったので、
ヒトリでキョウカイにいきました。
でもビンボウニンはオクスリをもらえないみたいです。

だけどオカネモチのためのオクスリになることで
ビンボウでもキタナイココロをすくうことはできるそうです。
だからわたしはカラダのなかにあるゾウキを
キョウカイにさしだすことにしました。
でもゾウキっていったいなんのことですか。

# 同胞の心



志を同じくする同胞の心は信頼のおけるものだ。

その晩は敵の砦を奇襲する日だった。作戦は綿密にたてられ、全てが予定どおりはこんでいた。我々同盟軍は武器を手にし、集合していた。
周りには思いを同じくした仲間、同胞達がいる。みんなの志気は上がっていた。

そこに敵が思わぬ方向から突如襲撃してきた。我々の攻撃は筒抜けだった。
自分も含めて命からがら数名のみが逃げ延びた。
彼らの表情には悔しさとやるせなさがあった。
一体、何故襲撃の事が知られていたのか……。
それは、自分が知らせたからだった。

同胞といったところで結局の所他人だ。そいつが自分と似た考えを持っていてそれに基づいた行動をするだろうなどと下手な期待をしてしまう分、かえって危ないのだ。用心しなければいけない。自分もその晩、しっかりと己の肝に命じた……。

# 束縛の恋刀

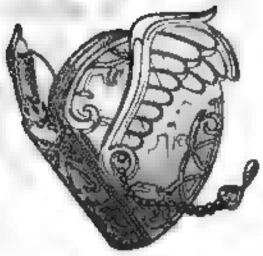


あの人の元に届く事はないと知りつつも、チョコを贈りたいと思う私は愚かなのだろうか？

既製品を溶かし固めただけでは、愛が足りないと思う私は愚かなのだろうか？

己の無力さを嘆き、知り合いに泣きつく私は愚かなのだろうか？

結局不安になり、自分でチョコを処分した私は愚かなのだろうか？



# 王妃の日記



王妃がまだ若くして亡くなった。あとを追うようにして王も間もなく亡くなった。王は死後発見された王妃の日記を読んだため、傷心により自殺してしまったのだという噂が流れた。

王妃の日記に何が書かれていたか。それは王国中で密かな噂になっていた。
王はまだ若かった王妃を后としてむかえていた。
美しい彼女は街ではちょっとした有名人で、おしのびで街を視察していた王の一目ぼれだった。

その頃、彼女には恋仲の恋人がいて、ずいぶんと結婚を渋っていたものの、親に強引に説得され結婚を承諾した。
だから日記にはきっと王に対する恨みつらみが書かれていたのだろうと言われていた。

王の死後、彼がしまっていた王妃の日記が王室の一部の者の間でだけ読まれていた。
その日記の中で、王妃は王については一言も触れていなかった。后として迎えられた当日も、それから後も、ただの一言も……。

# 灰翼の鎌鼬

変幻自在に姿を変え、敵中の腹部を食い破る、「灰翼」と呼ばれた忍がいた。
さりとて「灰翼」がどれだけ凄腕であろうと、神ではない。
防諜機関に追い詰められて立てこもった末、みずから火を放ち、焼身自殺を遂げた。

「灰翼」の死後も機密情報は少しずつ漏洩し続け、防諜機関の者たちは疑惑に囚われ始める。
そもそもの話として、「灰翼」の正体を誰も知らない。なのにどうして焼身自殺を遂げたあの人物を「灰翼」と断定できるのだろうか？

防諜機関の者たちは焦慮した。
取るに足らないような些末な出来事までも「灰翼」の存在と結び付け、疑心暗鬼に囚われた。
身近な誰かに「灰翼」が化けている可能性すらあるわけで、気の休まる暇などなく、どんどん神経をすり減らしていった。

報告を受けた国王は顔色を失う。
何が引き金になったのかはわからないが、防諜機関の者たちは全員お互いに殺し合いを始め、そのほとんどが死亡。
生存者たちも瀕死の重傷を負ったというのである。
「灰翼の鎌鼬」と呼ばれるこの凄惨な事件の後も、「灰翼」の生死は明らかになっていない。

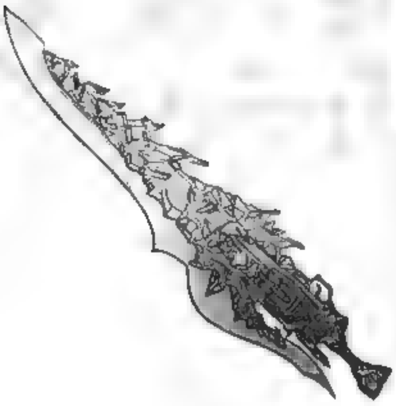
# 鉄環の音色

楽器の制作にあたり、職人は何を気にしているか。
それはもちろん、その音色、奏でる音を、
もっとも注意すべきだろう。そうあるべきだ。
ただ、これにあてはまらないものもある。
鉄で鍛え上げたこれも、そのひとつだ。

古来、戦と音楽の関わりは深い。
たとえば戦勝祈願での歌や踊り。
たとえば軍楽隊に行軍を補助する演奏。
戦いに音楽は必要。
そのために作られたのがこいつだ。

この竪琴は、弦を弾けば、
英雄が剛弓を引いたような音がする。
もちろん普通に奏でれば、
戦場でもはっきりと聞こえる音色を響かせ、
言うまでもなく頑丈で、戦場での蛮用にも耐える。

だがな、こいつの一番は戦場音楽そのものだ。
剣戟の音、肉の殴打、金属が打ち合う音。
こいつで骨を砕けば、その音が弦に共振する。
骨を震わせ、悲鳴をあげたくなる音を奏でる。
……まあ煩いって不評なんだけどな。



# 傲慢ノ罪刀
## （カゲウチ）



夥しい死を見てきた。
数々の死をもたらしてきた。
そしていずれ……穢れた私に死を齎す死神が訪れることもまた、理解していた。

それはもう一人の私だった。あの忌まわしい獣と合一した、私の可能性だった。
力に囚われたその死神は、私の胸に深くえぐるような傷痕をつけ、そのまま私の前から姿を消した。

不思議と憎悪は抱かなかった。
ようやく終わることが出来るのかと安堵すらしていた。しかし体は膿み、腐敗しつつあった。癒えぬ傷は私の体をゆっくりと蝕み、苦しみ悶えながら、鼓動が止まることを待ち続ける日々をおくり続けていた。

だが、それも今日も終わりだ。朽ちた城塞に背中を預け、ひっそりとその瞬間を待つ。
「ああ、でも最後に知っておきたい事があった」
私は腐り果てた傷口を剣で開き、自らの臓物を取り出し口付けする。口に広がる腐敗の味。
「これが私自身の穢れの味か。これが誰よりも醜く卑しい悪魔の味か……ああ、確かにこれは、罪の味だ……」

# 戦火の神鎌



その国は二つの教派に分かれ、終わりのない宗教戦争を続けていた。どちらの陣営も、戦いの果てに神が降臨し、その神鎌で敵を滅してくれると信じていたのだ。

だが、どれだけ多くの血が流れても神は一向に現れない。両陣営の死骸が戦場に積まれる。いつしか、その国から生きた人間はいなくなった。

宗教戦争で滅んだ国に神が現れた。そして手持ちの神鎌を一振りすると、土に還った兵士は復活した。彼らは再び二つの教派に分かれ際限のない殺し合いに戻った。

神は天に帰ると、地上に迸る血と臓物を笑いながら、今度はどちらの陣営が勝つか——他の神と相談して賭け事を始めた。

# 鋼鉄の魔書

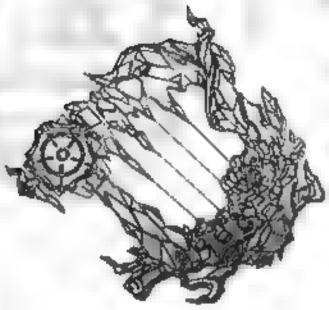
【魔書】こうてつのましょ

この世のあらゆるものを鋼鉄へと変える魔法の書を作った魔法使いがいた。
研究熱心だった魔法使いは、様々なものを鋼鉄に変え続け、ついにはその魔法の書が、人間の心にも有効なのかを確かめてみたくなった。
彼はその対象として、片思いの女性を選んだ。
魔法の書を使った瞬間、彼女の心は無感情の鋼鉄になった。

魔法使いは自らの行いを悔やんだが、彼女の心は何をやっても元に戻る事はなかった。
それならばせめて彼女の心を理解しよう。そう思った魔法使いは、魔法の書を使って自らも鋼鉄の心となった。
そのとたんに魔法使いは、見事なまでに彼女の事などどうでもよくなった。
彼は、彼女の心を完璧に理解したのだ。

それから二人は、お互いに対して無関心のまま近くにい続けた。
森の中の植物やキノコなどはお互いに対して関心を示さないが、死ぬ時まで隣に並び続け、隣りあったまま生命を終える。
二人が住んでいた街はしばらくして近隣の火山の大噴火によって消滅した。

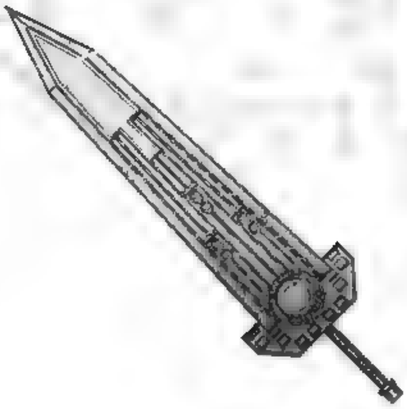
その街が後世発見された時、街の住人たちは、灰が堆積して固まった地層の中に人型の空洞としてそのまま残っていた。
魔法使いと彼女は、寄り添うように隣りあっていたゆえに、
彼らを発見した者たちからは、愛で結ばれ、死ぬ直前までお互いを思い合っていた二人として語りつがれた……。



# 最期の木音

【楽器】さいごのもくおん

→遥か昔→人魚に焦がれた乙女が
　　　　　　　　　　　　　↓
ハープの腕を海神に買われ　海
の　　　　　　　　　↓　に
意　→大渦に呑まれる　大　身
得　れ　　　　　の　渦　を
↑　わ　甘美なも　だ　の　投
が　誘　も　　の　と　演　げ
た　に　に　　で　い　奏　れ
っ　色　世　　あ　う　者　ば
か　音　↑　　る　。　と　↓
な　い　は　　う　↓　な　願
れ　し　色　　し　薄　っ　い
な　美　音　　い　れ　た　が
は　は　く　　。　ゆ　。　叶
に　者　響に識意←く　↓　う
魚　た　　　　　　　以　と
人　い付近に渦大のそ←降　唆
↑　　　　　　　　　　　さ
は女乙←。たれま呑に渦大←れ



# 鉄塊



とある荒野より発掘されたその剣は、
剣と呼ぶには余りに大きい代物だった。
戦闘に使うには重く、儀礼用にしては武骨過ぎる。
考古学者たちは、この剣の意義が分からなかった。

その剣が出土した地層と、同じ時代の文献を調べると、
この剣に関する逸話が見付かった。
どうやらこの剣の持ち主であった騎士は、
たった一人で、争う二国を二つとも滅ぼしたと言う。

この剣の材質を調べてみると、驚くことに、
鉄以外に、人間の骨や血の成分が含まれていた。
考古学者たちは、戦死者の装備や遺体から作られた、
戦争の戒めを目的として作られた物だろうと考えた。

戦争が起きて、考古学者たちは逸話が真実であると知る。
剣を保管していた倉庫に、文献にある騎士が現れたのだ。
騎士の正体、それは剣に宿る数多の怨霊の群れ。
彼等は戦争を繰り返す愚かな生者を、決して赦さない。



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# 黒の書



我が名は「黒の書」。貴方が、この世界を救済へと導く「王」となる御人か。何、そう驚かれますな。王よ。人間の言葉を扱うことなど、我にとっては容易いこと。

そのご乱心ぶり、心中お察しいたします。王よ。ですが、今はまだ、妹君のことは彼らに任せるしかないのです。この黒の書でよければ、話し相手くらいにはなりましょうぞ。

読書とは感心ですな。王よ。これを我に？　貴方の勧めとあらば拝読いたしましょう。……む、どうされましたか。我が書物を読んでいるのが可笑しいと？

クロ？　我の名を略されては困ります。王よ。我が名は黒の書。人類の叡智により作られし偉大なる……ですから、そのような珍妙な名で呼ぶのは……



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# 迷宮の歌

人々が教会で祈りを捧げていました。彼らの視線の先には、牛の頭を模した不気味な石像が鎮座しています。会堂に立ち込める厳粛な空気。それは神に捧げる生贄を決めるための、祈りの時間でした。長い沈黙を破り、司祭は神のお告げを伝えます。生贄に選ばれたのは物静かな少女でした。司祭に導かれ教会の奥へ消えていった少女の目からは、涙がこぼれていました。

人々が去った後の静まり返った教会に、少年が呆然と立ち尽くしています。少年は生贄に選ばれた少女の幼馴染であり、密かな恋心を抱いていました。いつも内気な少女のことを、少年はずっと見守ってきたつもりです。そして、自分だけに見せてくれる少女のくだけた笑顔は、少年の宝物でした。少年は周りに誰もいないことを確かめて、教会の奥へと踏み出します。

薄暗い廊下の奥で、少年はひとつだけ明りの灯る部屋を見つけました。中を覗き込むと、少女がひとりで泣いています。少年は少女の手を引き、教会から走って逃げ出しました。もう大丈夫だよ、これからもずっと一緒にいよう。肩を震わせながら泣き続ける少女に、少年は優しく声を掛けました。しかし少女はその言葉には答えず、うつむいたまま何かを呟いています。

少女の声は次第に大きくなって、やがて叫びに変わりました。｢あぁ神さま！　やっとあたしを選んでくれた！　このあたしを！　もっと愛して！　もットもットもぉッㇳォォぉォォぉぉぉォ！｣少女は感涙にむせびながら、隠し持っていた鋭利な牛の角を自らの胸に突き刺しました。少女の血を吸い赤く染まったその角は、まるで命を持ったかのように、妖艶に輝いていました。



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# 不死鳥の槍

【長柄】ふしちょうのやり

男は愛する妻のため戦場へと赴く。戦火の中、男は胸を貫かれ腹を斬り裂かれても、決して膝をつくことはない。彼は不死の体を持つ戦士だった。不死でもなければ、体躯にも腕力にも恵まれない男がここまで生き延びることもなかっただろう。

男が不死の体となったのは、一羽の美しい小鳥に出会ったあの日からだった。妻を一途に想う男に心打たれ、小鳥は自らの羽根を一枚差し出しながら言う。「この羽根を身に着けている限り、あなたは愛する人と寄り添えるでしょう」

ひとつ戦争が終わるたび、男はその報酬を手に妻と暮らす故郷の村へと帰る。妻に着飾らせてやることもできない、裕福とは程遠い暮らし。それでも、最愛の妻と一緒に暮らせることが彼にとっての生き甲斐だった。

男は愛する妻のため戦場へと赴く。戦火の中、男は胸を貫かれ腹を切り裂かれ、そして絶命した。その日、故郷の村では、男が肌身離さず大切にしていたはずの美しい羽根を、商人に売りつける妻の姿があった。



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# 不浄なる斧

【打撃】ふじょうなるおの

夜の闇を焼くように、劫火が家を包み込んでいる。少年はかろうじて家から逃げおおせたが、父も母も兄弟も、大切なものはすべて炎とともに消え去った。少年に残されたのは、家に火をかけた野盗が打ち捨てていった１本の戦斧と、身体中に這う火傷の痕だけだった。なぜ自分だけがこんな目に遭うのかと、少年は自身の不遇を呪いながら、火傷が癒えるのを待ち続けた。

数年後、少年は青年へと成長した。しかし火傷の痕は悪化する一方で、どんな良薬を使っても回復の兆しは見られない。傷痕に湧いた蛆を削ぎ落すたび、鬱屈とした感情と痛みが走る。この苦痛を少しでも紛らわそうと、青年はある傭兵団に入った。戦いの中、殺戮の瞬間だけは痛みを忘れられることに気づいた青年は、ようやく苦痛から逃れる方法が見つかったと喜んだ。

隣国間の紛争に参加した傭兵団は、敵国の村を蹂躙した。青年は火傷の痛みを狂気で塗り潰すかのように、自身の不遇を他者にも強要するかのように、戦斧を振るう。一軒の民家に押し入った青年は、命乞いする父親の頭を断ち割り、嬲るうちに息絶えた母親の身体を弄り続け、燃え盛る炉に赤子を投げ入れた。青年にとっては、火傷の痛みを忘れられる唯一の時間だった。

殺戮を愉しんだ青年は、もう用はないとばかりに、死体の転がる部屋に火をかける。青年が民家から出ると、炎に巻かれる家を見つめて泣く少女がいた。その姿を見た刹那、幼き日の自分からすべてを奪った劫火の記憶と、激しい火傷の痛みが青年を貫く。この苦しみから解放される本当の方法を悟った青年は、自らの身体に火を放つと、血塗られた戦斧を少女に手渡した。

ニーアレプリカント

©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

青年ニーア/パラディン

# 百獣の双槍

【長柄】ひゃくじゅうのそうそう

王は謳う。
永久の王国を、沈む事なき太陽の実現を。

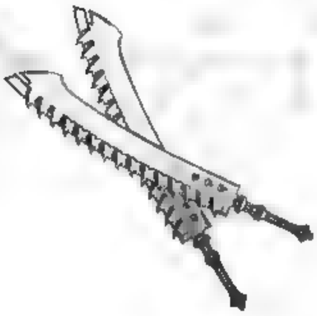
王妃は歌う。
偉大なる王を、彼の成し遂げた偉業を。

王子は詠う。
反逆に怯む事無く、前進する兵の尊さを。

道化は謡う。
権力に胡坐をかいて滅んだ、三人の王族を嗤う物語を。

ニーアレプリカント

©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.



# カイネの剣



華奢な身体と白い肌。
影のある表情が彼女の美しさを引き立てる。
しかし、その手に握られる剣はあまりに不釣り合いだった。

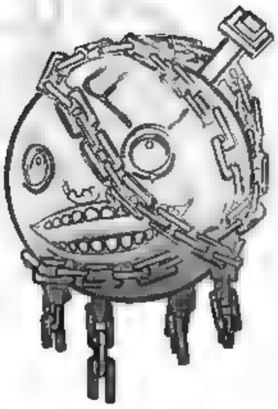
怒り、悲しみ、憎しみ。
感情のままに振るわれるその剣は常に血が渇くことはない。
けれど、彼女はその剣を手放すことはできなかった。

矛盾を抱え込んだ、心と身体。
誰も彼女のことを理解することはできなかった。
そして、その孤独が彼女を侵していく。

長い戦いが終わり、真っ暗な闇が彼女を呑み込んでいく。
しかし、彼女の心は穏やかだった。
大切な人の腕のなかで、そのときを迎えることができたから。



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.



少年エミール/
メイジ

# ハルアヘッド

【魔具】はるあへっど

<ファイル_25_10：定期記録>
今度連れてこられるのは、双子らしい。
白い壁と白いベッド、それ以外には何もない、まるで牢屋だ。
少しでも気晴らしになるものがあればいいのだが……

<ファイル_25_12：定期記録>
様子を見に行くと、姉は不安がる弟を優しく励ましていた。
それは、たった二人で耐えるにはあまりにも重い役割だ。
彼らが背負うものは、人類の希望とも等しいのだから。

<ファイル_26_06：定期記録>
実験が決行される日、その姉から手紙を渡された。
彼女は最後まで弟の安全を願っていた。
その願いを引き受けると、彼女は足早に去っていった。

<報告書：生体兵器開発について>
被験体(姉)の経過は順調に思われたが、容態が急変。
現状自我にあたるものは確認できていない。
早急に被験体(弟)への作業に着手する。

ニーアレプリカント

©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# デボル&ポポルの杖

---

ポポルさんへ

スープのつくりかたをおしえてくれてありがとう！　おかあさんすっごくよろこんでくれました！

---

村の子供から手渡された一枚の紙切れ。これは彼らが自我を持ち始めたことと関係があるのだろうか。

---

ポポルさんへ

ポポルさんがくれた薬のおかげで、だいぶ楽になりました。まだ家の外には出れないけど、お礼だけさせてください。

---

記録によれば、人間は感情を紙に書きつづり、他者に伝えていたようだ。彼らはどこで「それ」を学習したのだろう。

---

ポポルさんへ

あなたのことが好きです。もしよかったら、僕と付き合ってもらえませんか？　お返事待っています。

---

彼らが紙切れに込めたモノを、私は少しも理解できない。それなのに、この胸に感じる違和感は一体、何なのだろう……

---

ポポルへ

書置きですまない。今日は帰りが遅くなりそうなんだ。先に寝ていてくれ。

---

もう、デボルったら。私にそんな気を使わなくてもいいのに。うふふ。



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

ピノキオ

# 依存のビリョウ

【楽器】いぞんのびりょう

幾万のシカバネの上で、
キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界でキミは何を願うダロウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
全テ無駄なコトだったと嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ衝動ヲ
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
絶え間なく押し寄せる、影、影、影……
それが今もう一人の僕を覆い尽そうとしている。
――こういうとき、どうすればいい？
いつも問いかけてきた存在は今まさに、
闇に飲まれようとしている。
「止めろ……触れるな。
それは……僕のものだッ！」
自然と溢れた自身の欲望。
始めて自分の想いを口にすると、
決意は確かな形となり、
存外すんなりと胸に収まった。

Case 2
だが黒き影の猛攻は止まらない。
深くえぐるような傷が次第に増えていく。
それでもまだ、膝はつかない。
いや、つけない。
彼に笑われるのはもう、沢山だ。
僅かな意識をかき集め、
動け、動け、動け……と
壊れかけた脚に指令を送る。
しかし、痛みで意識を集中することができない。

Case3
大丈夫。
こういう時に心を鎮める方法を知っている。
「…………」
おまじないのように彼の名前を口にし、
憎たらしい顔を思い出すと、
フッと痛みが和らいだ。
大丈夫だ。僕はまだ戦うことができる。
まだ、彼を守ることができる――
「待っていて！　僕の相棒！」

C/W
キャラクターズ

# 卑劣のカシ

幾万のシカバネの上で、
キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界でキミは何を願うダロウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
全テ無駄なコトだったと嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ本心ヲ
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
最早残された力は無い。
先の攻撃に全てを込めていた。
感情も、鼓動も、色も、温度も。
何もかも……感じない。
視界が急速に黒に浸食される。
――ああ、私はヤッたんだ。
「お疲れ、私……」
微かに残された命の残滓を垂れ流しながら、
バラバラになった少女の元へと、這いよると
暗闇しか写さぬ目を閉じる。

Case2
「……あったか……いな」
暗い闇の底で偶然出会い、
何も知らなかったのに
すぐに互いの本質をつかんだ。
私の光はやはり――
どんな時でも暖かい。
それは、似ていたから。
そして、似ているのに、
まるで違っていたからこそ持つ暖かさ。
もう一度、触りたい……
その柔らかそうな頬に。
ドロドロと腐った心の奥の奥に。

Case3
……でも、もう無理だ。
失った両手を心の中で伸ばし、
静かに目を閉じる少女を抱きしめる。
そして、そっと“ありがとう”と呟いた――

# 成金の銀槍



【ビジネス用語　誤用例100選】

■　序文

間違ったビジネス用語を軽率に使う者が後を絶たない。ここに誤用例を記すことで本来の用語のもつ意味を理解し、美しく用語を使用する助けとしたい。

■　誤用例①　アセスメント

<シチュエーション:深夜の会議室>

「どうしたんだい？
君も本当はアセスメントしたいのだろう？」

――彼はイジワルだ。あくまで僕の自発的な発言を求めてくるのに、それでいて僕を誘うように誘導する。

「わかりました……でも、初めてだから上手にできないかもしれません」

緊張のあまり舌が上手くうごかない。それでも、僕は少しでも彼の期待に応えようとアセスメントを始めた。

■　解説

アセスメントとは評価、査定。また、対象が周囲に与える影響を評価すること。用例のように深刻な面持ちで用いる用語ではない。

# 聖花の風剣

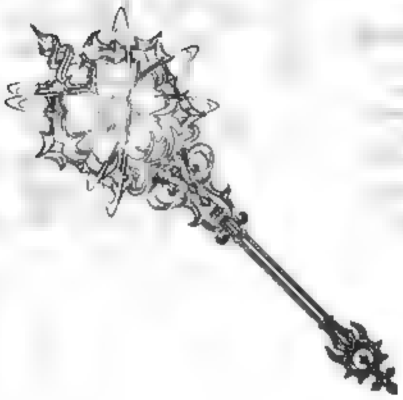


教養深く淑やかで、"聖花の姫"と呼ばれる美貌の姫君がいた。
その姫を一人の騎士が常に守護していた。
騎士は知っていた——自分は実のところ、姫の母である王妃が不倫してもうけた庶子である事を。
故に、姫と騎士の面差しは似通っていた。

"聖花の姫"は外の世界に憧れ、「自由に外を歩いてみたいの」と騎士にねだった。
騎士は、始めは押しとどめたが、腹違いの妹である姫君は何度も頼み込んできた。
彼もとうとう折れ、ある日彼女を外へ連れ出したのである。

騎士がほんの少し目を離したスキに"聖花の姫"は市場へ駆け込んでしまい、あちこちを歩き回ったあげく、悪漢に拉致された。
三日三晩かかってようやく騎士が見つけ出した時には姫君は薬漬けにされ、男たちと快楽に浸りきっていた。

騎士は意を決すると、姫君と男達を全員斬殺。
そして闇医師の元へ行き、性転換の処置を施させた。
かくして騎士は"聖花の姫"になりすまし、誰に怪しまれる事もなく宮中へ戻ったという。



# 麗しの黒杖官



ふだん人前に姿を現すことのないその葬儀屋一家は、街の人にとって謎多き存在だった。
葬儀になると、一族の長女とおぼしき喪服の美女が杖を手に葬列の先頭を歩いた。
彼女の名前や人柄など、誰も詳細を知らなかった。

ある日。妻を亡くしたばかりの男が、杖を持った喪服の美女にひと目惚れしてしまう。
彼は葬儀が終わるなり結婚を申し込んだが、彼女にすげなく拒否された。
男はめげず、彼女をしつこく追いかけ回したのだが……。

「妻の喪も明けぬうちに女を口説くとは！」と親戚一同は激怒し、彼に絶縁状を突きつける。
が、もはや彼女のこと以外何も眼中にない彼は意にも介さなかった。
そして彼の執念が結実し、喪服の美女は求婚に応じたのである。

喪服の美女と結婚してすぐ、男は頓死。
寡婦となった彼女は喪主兼葬儀屋として葬儀を取り仕切った。
すると、葬儀に参列していた彼の友人が彼女にひと目惚れしてしまった。
葬儀が終わるなり彼は大いに意気込み、喪服の美女に求婚し……。

# 誘悪の音色

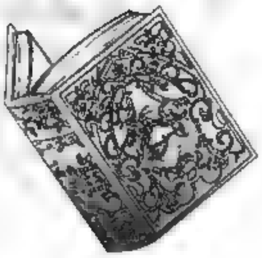


その小悪魔はサタン様に授かった横笛を吹き、人を悪の道に誘っていた。
だがある日、天使長に捕まってしまい、こう言われた。
「お前に祝福を授けた。もうその横笛で人を悪の道に誘うことはできんぞ」と。

小悪魔は天使長の話を真に受けず、横笛を吹いた。
道端を歩いていた男が石を拾い上げ、ぶん投げた。それが家屋の窓を破った。
すると、窓から煙が出てきた。家の中では火事が起きており、街の人はいち早くそれを察知した。
結果的に小悪魔は人助けをしてしまったのである。

小悪魔はめげず、また笛を吹いた。
人待ち顔で立っている男にひとりの女性が駆け寄り、鞄をひったくって逃げ出した。
ほくそ笑む小悪魔だったが、すぐに真相を知ることとなる。
——鞄の中身は麻薬であり、それが奪われたことで売人と買い手は疑心暗鬼になって殺し合い、女性は官憲から感謝状を贈られたのだった。

小悪魔は「やってられるか！」と拗ねてしまい、横笛を投げ捨て、魔界に帰ってしまった。
通りがかった子供が横笛を拾い、それを吹いた。
遠乗りに来ていた王と司教がその音色を聴いて見つめ合うと、小屋へ入り、男色の関係になり、それを従騎士に目撃された。
かくして王国と教会は一夜にしてその権威を失い、その国に戦乱の嵐が吹き荒れることとなった。



# 白の書

【魔書】しろのしょ

俺たちはずっと戦い続けていた。
人間の姿に酷似した「何か」を殺し尽くすために。
自らの、そして仲間の命を守るために。

俺たちはずっと騙され続けていた。
まともに顔も見たことがない、どこかの国の偉い奴らに。
安全な場所から、命令を出すだけの奴らに。

俺たちはきっと愛し合っていた。
まだ助けてもらったお礼も言っていないのに。
俺はお前を守ってやれなかったのに。

我の深淵に微かに漂うこの断片は……
虚ろなるヒトの記憶……であろうか？
飽和した叡智の残滓……であろうか？

……こ、これ！　シロなどと気安く呼ぶでない！
我が名は「白の書」。偉大なる古の書であるぞ。
汝ら、もっと我を敬うがよい！



©2010 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved.

# 虚空の鎚

その鎚を振り下ろす事によってもたらされる結果は破壊とは限らない。むしろ往々にして破壊しない。一見重そうなその鎚で何かを叩き、叩いた鎚より柔らかい何かが壊される事は因果であり有為だからだ。

その鎚は虚空の鎚。因果を脱した無為の鎚。振り下ろす事と起こる結果に因果はない。
因果を脱した無為の世界とつながっていると言われている。無為の世界は涅槃。不生不滅。何も生まれず何も死なず。この世の全てがそこにある。

人間の思考のひらめきや直感も無為の世界から無為に得られるものである。因果的思考とは完全に異なる抽出であるが、全ての中から選ばれた無為の答えは、何故か正答であったりもする。

奇術師が帽子の中に何かを入れて、再び取り出したものが入れた何かと全く関連性がない事にも似ている。しかし、二度目以降は関連性がなくても、一度観測した者の中で記憶されているため因果となっており、これは無為とはいえない。
いずれにせよ鎚を振り下ろしてみるまでは何が起こるかわからない。その結果に何がしかの期待を込めることは因果を欲する有為に他ならないわけで、無駄な事である。

# 聖晶の弓

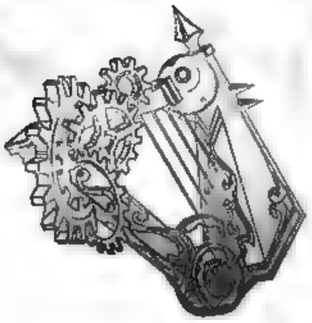


【聖騎士エルシード】
やっと儀式が終わり、教皇猊下が祝福を授けられたか。
さあ、この弓を国王陛下のところへ届けねば！　これさえあれば打倒魔王も必ずや果たせよう！
…ん、なんだお前は？　や、やめろ、何をす――

【魔軍百人隊長・強力のロディマス】
ぎゃははは、チョロいチョロい！　まったく、弱っちい騎士サマも居たもんだ！
へへえ、これがお噂の弓か。魔王様に献上すりゃ、オイラも大出世待ったなしってもんだろ！
ヒャッハー、オイラの未来はバラ色だぜェ！
…って、ああ？　オメエ、オイラに何か用か？

【魔軍参謀・奸智のビカージャ】
そうケンカ腰になりなさんな。お互い魔王様の部下なんだし、仲良くやろうぜ？
ところでお前さん、いいもの持ってるじゃねえか。ちょっくら俺っちに見せてくんねえか？
なーに、借りるだけだって。なあ、下手に出てるうちが花だぜ？
ちっ、そういう態度かよ、なら首の骨へし折ってやらァ！

【可哀想な孤児ジム】
しめしめ、気づかれずに横取りできたぞ。
騎士様が一人死んでて、魔物二匹が血眼で取っ組み合いしてるところを見ると、値打ちものなんだろうな。
でも、事情はどうでもいい。ぼくがもう三日も何も食べてなくて、パンを買うお金を何とかすることだけが大事だ。
さっそく町の質屋で売り飛ばそう。はぁ、あと何日生きられるかな…。



# 機械仕掛ケノ律音



——カチ、カチ、ギ、ギ、ギ。
錆び付いた音が3回するとわたしは目覚める。
朝がやって来たのだ。
夜更けの行為を全て忘れて
わたしは毎朝この音で生まれ変わる。

——カチ、カチ、キィキィキィ。
甲高く耳障りな音が立て続けに鳴ると、夜になる。
この音でわたしはわたしでなくなる。
お父様が部屋にやって来て
行方知れずとなったお母様の名でわたしを呼ぶ。

——カチ、カチ、ギ、ギ、ギ。
また朝がやって来た。
わたしはお母様ではなくわたしとして目覚める。
シャワーで汗を流してから食卓に向かうと
お父様がわたしの名を呼び優しく話しかけてくれる。

今日はずっとどちらの音もしない。
お父様が事故に遭ったと、電話の向こうで誰かが叫ぶ。
これでわたしは、夜になってもわたしのままでいられる。
朝を迎えるたびに生まれ変わらなくていい。
食卓のコーヒーに眠り薬を混ぜて良かったわ。

# 少女の休息



少女は休んでいた。

少女はある寒い寒い朝、布団の中から出ない事を決意した時から休みはじめ、
ひたすら休み続けていた。

少女は何故世間の人達があくせく働くのか理解できなかった。
あたたかい布団にくるまって休んでいた方が楽なのに……。

少女は休み続けた。ずっと……ずーっと。

# 羽音の書



あらゆる幸せに関する本がある。
読めばさまざまな形の幸せにありつける。
幸せを運ぶ、幸運の白鳥がその材料。
手に入れる方法は運。
本が羽ばたき舞い降りるのを待つのみ。

ある男は本を読んで、
頑健な肉体を手に入れる方法を知る。
またある者は莫大な富を求め。
最高の農地開拓、品種改良法を知る。

だがある者は寝ながらにして、
百万の叡智を得る方法を求めた。
さらにある者は、生命活動に必要なもの、
すべてを自動的に得る機械の製法を求めた。
書は白紙であったという。

ゆめゆめ忘れることなかれ。
書が持ち主を見放すと、本は大きく羽ばたき、
優雅に飛び去っていく。
この書は白鳥が水面下で、必至に水を掻くように、
努力するものにしか、その知恵を授けない。

# 偽婦人の杖

「なんだい成金共め
家の歴史が浅いのがなんだっていうの
血筋に尊いもクソもありゃしないわよ」

「ヒトなんて誰もが血と臓物が詰まった肉袋じゃないの。
顔かたちの美醜なんてどうでもいいでしょ。
どいつもこいつもウンザリよ」

仮面の女が声高に叫んだ貴族への批判歌は
大衆に大いにウケた。
神秘に包まれた彼女の素顔を一目見たいと大衆は熱望し
後に引けなくなった女はステージ上で仮面を脱いだ。
現れたのはシミと皺だらけの老婆だった。

大衆はたちまち彼女を見放した。
彼らの代表として貴族を糾弾するのなら
美しく偉大な人格者でなければならない。
侮蔑の対象となった老婆は路地でならず者に撲殺され
通りがかった貴族が不憫に思い、骸を葬った。

# 依存の緑鏡

必要としてくれてありがとう。
でもね、知ってるよ。
必要とされているのは僕の意思ではなくて、
都合のいい僕なんだよね？

だから本当の僕はいらない子で……
必要とされるように都合のいい子にならなくちゃ。言う事を聞かなくちゃ。

お人形みたいだなって、言わないで。
ばかみたいだなんて、言わないで。
今ではそれが、本当の僕なんだから。

ねえ、お母さん？
この気持ちも、お母さんの為のものなのかな？
お母さんがどんなに僕を嫌いでも、僕はお母さんが大好きなんだよ。

ピノキオ/
怠熊のミンストレル

# 怠惰ノ土笛
## （カゲウチ）

【楽器】たいだのつちぶえ（かげうち）

あの大きな熊さんと出会ってから、なんだか僕はおかしくなってしまったみたいです。

掃除をしなくちゃ。と思っても後回し。
洗濯をしなくちゃ。と思っても起き上がれない。

一日中パジャマのままで、
ゴロゴロ、ゴロゴロしてしまう。

ダメな僕でごめんなさい。
きっとこのままじゃ、捨てられちゃうよね？
お願いです……僕を見捨てないでください。

# 風切の薙刀

【免許皆伝のお言葉・其の一】
常に十手先まで読め。
相手が仕掛けてくる機会を読み切り、その力を利用して仕留めよ。

【免許皆伝のお言葉・其の二】
勝つ戦いをする必要はない。負けない戦いを心がけよ。
生き長らえているということ、それ自体が既に君の勝利である。

【免許皆伝のお言葉・其の三】
君子は豹変す。
常に脱皮を繰り返せ。変化を恐れてはならぬ。
流水のごとく自然たれ。

ああ、あの道場かい？
あそこの門下生、敵が攻めてくるなり、あっさり降伏しちまったんだ。
敵は城を落とせず引き上げていったし、あの人たちの居場所はもうないってのに、堂々と居座っちゃって。
風向き次第で主義主張を変えてケロッとしてんだから、大したモンだよね。

# 古城の秘め事



自然豊かなその国に、知勇兼備の騎士がいた。
彼にはとある秘め事があった。実は国王の娘とねんごろの仲であり、主人のいない古城で待ち合わせをし、逢瀬を重ねていたのである。

隣国の王子は姫に懸想しており、何度となく恋文を出していたが、相手にされなかった。
思いあまった彼は姫を力ずくでものにしようと企み、古城へ押しかけた。
そして、一室でコトに及んでいる最中の姫と騎士を目撃したのだ。

愛する者が他の男にいいようにされる様を見た隣国の王子は、知られざる己の性癖に目覚め、その場に釘付けとなった。
一方、秘め事を目撃された騎士は驚きあわて、咄嗟に彼を取り押さえようとした。
我に返った王子は抵抗し、窓から転落。頸骨を折り、即死してしまう。

騎士は死体を古城の古井戸に隠した。
が、姫は罪悪感に耐えかね、「自白しましょう。私たちの関係も含めて」と言い出す。
騎士は頷き、姫が背中を見せた瞬間、背後から接近して絞殺。死体を古井戸に投げ落とす。
城へ戻り、「姫は隣国の王子と駆け落ちしました」としたり顔で報告する。
十数年後、大将軍に出世を遂げた彼は、折に触れて思い返す。古城の秘め事を……。

# 時限翼の書



ここに物語を記そう。
星に隕石が落ち、その世界は一度滅んだ。
汚染された大地には翼なき民が住み、空に浮かぶ島で暮らす有翼の民を見上げていた。

汚染された大地に住む少年は「なぜ自分には翼がないんだろう」と考えた。
「そう生まれついてしまっただけだ、あきらめろ」と大人たちに言われた彼は、反発心を胸に募らせた。

その少年は鳥の羽を集めてロウで固め、それを背中に取り付けた。
「よーく見てろよ！」と少年は周囲に宣言し、翼をはためかせ、飛び立った。

翼を広げて舞う少年を見た有翼の民は、冷静に対処した。
弓矢を用意し、空の島から射かけ、少年を撃ち落としてしまったのである。
翼なき民は絶望し、生涯地べたに這いずって生きようと決めたという。

『いばら姫／』
『淫蠍のクレリック』

# 色欲ノ蕾杖
## （カゲウチ）



いたい、いたい、いたくてちがでる。わたしのあしまでぬれている。
すやすや、すやすや、おそらのほしに、かさかさはいよるあなたはだあれ？

ささないで、木漏れ日最後にピントのズレた……いや！　私はいたいの！
かんがえなくちゃ。雑巾塗れの王子様、頭のなかからこんにちは。

欠け落ちた鉄の匂い。臭くて苦い谷の奥底。
でもね、海の中で中指立てるオフホワイトは完璧な捻れと共にプチトマトを見せるの。

——コンナ私ニ誰ガシタ？
譲り合いの精神が交錯する苦行の果てに、疑いようもなく悪鬼のなせる断面図。
注ぎ込まれたコップは結局破れて、悲劇の業で満たされる。

# 封緘の焔石



地震、落雷、竜巻、津波といった天災が相次ぎ、人々は「この世の終わりだ！」と恐慌した。
事態を見かねた聖人が祠を作り、ひとつの焔石を安置した。
「すべては封緘しきれぬが、これで何とかなるはずだ」
すると天災は少しずつ収まり、やがて世界は平穏を取り戻したのである。

何者かになろうとした若者がいた。だが彼にはなんの才覚もなく、何者にもなれず、絶望した。
〈封緘の焔石〉の話を聞き、彼はほぞを固めた。
もう自分には破滅しかない。だが、その石とやらを奪えば、災厄がこの世に満ちるはず！
俺も歴史に名を刻めるはずだ！

若者は祠に忍び込み、〈封緘の焔石〉を奪取した。
だが、特に何も変わった事は起きなかった。
かつて世界を滅ぼしかけた天災は必ず起きるはず。彼はしぶとく生き延び、その時をひたすら待った。

若者は中年になり、壮年になり、ヨボヨボの老人となった。
彼は考える。伝説の聖人はただのホラ吹きで、世界を滅ぼしかけた天災は収まるべくして収まっただけで、〈封緘の焔石〉には何の効力もないのではと。
が、そんな事はどうでもよかった。天寿を全うできたというだけで、そう悪くない人生だったと自分で思えるからだ。

# 不死鳥の炎弓

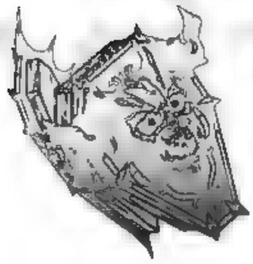
【射出】ふしちょうのえんきゅう

明日、この世は終焉を迎えるのだという。
けれどそんなことは構いもせずに
不死鳥は日没と同時に炎に身をくべ絶命し
夜明けと共に炎の中から蘇る。
この世の始まりから連綿と続く行為らしい。

全ての命が潰えた世界でも
あの鳥はただ独りで
生死を繰り返すのだろうか。
私達と共に滅んだほうが幸福ではないだろうか。

不死鳥は神の化身であるから
そのような憐憫は無意味だと皆は言う。
だが私は自らの心を殺すことができず
終焉が迫り来る闇の中で弓を引き絞り
輝く神の鳥を射た。

事切れた不死鳥の屍肉は大層美味であった。
いつか神を喰らってみたいという私の願いは成就した。
そして悟る。
次の神は私なのだと。
ただ独り生き残った世界で私は、創世を始めた。



# 魔眠の厭柩



彼はその柩の中にもう何年も居た。

彼は柩の中で魔の眠りを味わった。世界中の人間の悪夢の断片が彼の精神をさいなみ、彼はそのたびに精神が傷つき痛めつけられた。そしてお返しに世界の夢見る者達へと向かって彼の痛みを放出した。

世界はその悪夢の循環によって寝ている間も起きている間も悪夢に包まれていき、みんなにとってますますその厭さを増していった……。

そして彼は今もまだ、柩の中にいるのです。

# 三弦の弩

【射出】さんげんのいしゆみ

弩から放たれる三本の魔法の矢。
人々を幸福にすると伝えられる幸福の矢。

三本の魔法の矢が幸せをもたらす事について語る男は
魔法の矢の力についてとくとくと語る。
三本の矢はどこかへと放たれて、何かに当たる。
それは人々を幸せにするはずの三本の矢。

弩から放たれる三本の魔法の矢。
矢の魔法の力について語る男の説明は
矢が放たれるたびに変わっていく。

弩から放たれる三本の魔法の矢は
きっと今日もどこかで人々を幸せにしている。
いつかきっと。たぶん。

# 睡眠の斧



ψ(｀∇´){オネガイがアリマス！
茨(˘o˘){えー。

ψ(｀∇´){オソウジして欲しいデス！
茨(˘o˘){……とりあえず、寝るね。

ψ(｀∇´){ソウいって前回もニゲマシタ！
茨(˘o˘){こんどはだいじょZzz……。

ψ(｀∇´){もう時間デス！　起きてクダサイ！
茨(˘ω˘) {うーん。あと30分。ｽﾔｧ……。

赤ずきん/
クレリック

# 暴力の杖

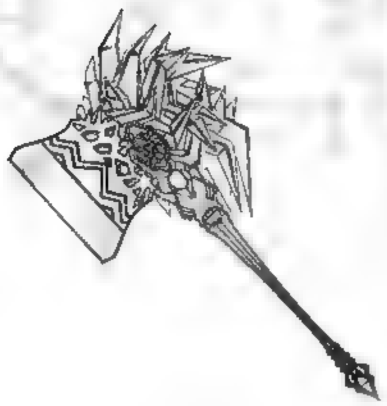
【祈祷】ぼうりょくのつえ

世界がまっかに燃えています。
みんな死体も残さずやけてしまいました。
灰と燃えかすの王国。
ボクはまるでお姫様。

燃やしちゃおう、ぜんぶ。
踊るみんなもたのしそう。
燃やしちゃおう、ぜんぶ。
世界は笑い声で満たされる。

だれもボクを叱らない。
みんなこの遊びをやめられない。
すべてがボクのおもうがまま。

燃やしちゃおう、ぜんぶ。
踊るみんなもたのしそう。
燃やしちゃおう、ぜんぶ。
世界は笑い声で満たされる。



# 憤怒ノ蒼槌
## （カゲウチ）



～　3年前　～
血税を食いつぶすつもりか！
開拓よりも民の幸福を優先するべきであろう！
そのような悪王を私は許さない。
許してなるものか！

～　2年前　～
何故この村では治水に目を向けないのだ！
その日の空腹を満たすためだけに税を投じる事は、民の未来を苦しめることになると、何故わからぬのだ。

～　1年前　～
何故だ！　何故この世界はこうも他者から奪い、
生計を立てる悪党が跋扈しているのだ！
己が為、他者に不幸を押し付ける悪党は私が斬る！

～　市民の声　～
もう何年も前から国土は痩せ衰え、未来がなかったのです。それを憂いた王も、優しかった領主様も誅殺されました。更にそれだけではありません。子供たちにパンを与えるため義賊となった村長も昨年惨殺されました……
何故私たちはこの様な目に遭うのでしょうか？
教えてください。旅のお方……

# 射影の矢

【射出】しゃえいのや

その翼竜は空を飛び、エサを求めてやってきます。
巨体が羽を広げれば、街はすっぽりと暗くなります。
時折、火炎の息を周囲に放ちます。
街の人々は、そんな翼竜が怖くてたまりませんでした。

領主の命令で、翼竜を討伐することになりました。
ですが相手は遥か彼方の空の上。
だから、街の人々は、不思議な矢を作りました。
街を覆う竜の影。それを地面に縫い付ければ、
翼竜を叩き落とせるという魔法の矢でした。

翼竜の影が街に落ちた時。
街の者は一斉に、地面に向かって引き金を引きました。
魔法によって、翼竜の体が重くなります。
巨体は風を裂きながら、真っ逆さまに落下していきました。

影は、より大きな影の中に入れば、見えなくなります。
落ちてくる翼竜から逃れようと、街の人々は逃げ惑います。
ですが、その足はまったく動きませんでした。
竜の影ごと自分たちの影を縫い付けていたことに、
彼らは下敷きになるまで、気づくことはありませんでした。

# 海巨人の杖



その海には噂があった。
曰く、黄昏時に独り海へ入ると海巨人に攫われる。
海巨人とは何者なのか、噂の出所はどこなのか。
誰も明瞭に説明できないその噂は
遥か昔からひっそりと語り継がれてきたようだった。

ある日、弟が消えた。
ようやく乳離れしたばかりの幼子で、
母が目を離した隙にどこかへ行ってしまったようだった。
男衆が総出で方々を捜索したが出てこない。
母は失意の内に寝込んでしまった。

私は黄昏時の海辺に独り佇み、戯れに弟の名を呼んだ。
橙の光を反射して煌めく波間に、何かが浮かぶ。
巨大な海馬のように見えた。あれが海巨人なのだ。
その背で幼子が眠っているのを見つけ、私は叫んだ。
弟を母の元に返して欲しいと。

この子を返す代わりにお前が来いと、海巨人は応えた。
私は躊躇うことなく海に向かって足を踏み出す。
生まれつき病弱で母に迷惑をかけ続けている私と、健康な弟。
どちらが母の元にいるべきかなどわかりきっている。
初めて親孝行ができる喜びに、私は静かに落涙した。

# 堕天の喜笛

おてんばで明るく世話好きと、三拍子揃った天使の少女がいた。
彼女は人間に興味を持っていたが、天使長は「お前のような半人前にはまだ早い」と、下界に行くことを許してくれなかった。

天使長が留守にした隙を窺い、天使の少女はこっそり地上に降りた。
そこで、寂しそうな目をした少年と出会った。
彼は想い合った恋人を事故で亡くしたばかりだった。

少年は固く心を閉ざしており、はじめ天使の少女に世話を焼かれるのを嫌がった。
が、いつしか少年も天使の少女も、次第に惹かれ合うようになった。
そんな時、カンカンに怒った天使長がやってきて、天使の少女は強制送還されてしまう。

寝ても覚めても彼のことばかり考えている天使の少女を見た天使長は、大きくため息をつく。
天使長は彼女から天使としての資格を剥奪し、人間として地上に転生させた。
彼女は少年と再会し、結ばれることとなる。
後年、天使だった少女は喜びに満ちた笛を吹き、天使長に感謝の気持ちを届けたという。

# 嵐扇の弓



世は蒼天曇りし戦乱。
中原にふたつの国有り。
ひとつは風神を奉じる苛烈な国。
ひとつは山神を奉じる猛き国。
世は乱れ、ふたつの国、相対す。

風神の国。美姫の元に扇有り。
一振りで嵐を喚び、兵を弾く。
山神の国。若き王の元に弓有り。
岩をも貫く剛弓。敵将の首もまた同じ。
双方、戦にて度々撃ち合う。

両国の戦、一進一退す。
魔の大国。横入りにて両国を滅さんとす。
風と山の国、共闘す。
身を裂く嵐と矢の雨が敵兵を蹂躙。
魔の大国の衰退の発端となる。

両雄、共闘するも。
互いの民の憎悪は拭えず。
民のため雌雄を決さんとし、相打つ。
残されし民、大いに悲しみ和解す。
扇と弓を合わせ、己が愚行を語り継ぐ。

ドロシー/
嫉蛇のガンナー

# 嫉妬ノ狙撃銃（カゲウチ）

【射出】しっとのそげきじゅう（かげうち）

「才能ある者を妬み引きずり下ろそうとするなんて、ちっとも効率的じゃありません」

「羨ましいと妬むより、自分を高めるほうが建設的じゃないですか！」

「ですから蛇さん、そんな事をしても時間の無駄ですよ？」
「…………」

嫉妬の蛇はすごすごと元の世界へ戻っていきます。だって心に隙間がないうちは、どうしようもないのですから。
そう、隙間のないうちは——

# 嫉妬ノ小銃（カゲウチ）

砂のような乾いた色をした蛇さんと出会ってからいくつもの世界を見せられた。その度に私の胸には堪えようのない焦燥が溢れるようになっていました。

ある日は、薬に溺れた少女の結末を見せられた。切り離された自分の右腕を必死に胴体に押し付け、なぜ、くっつかないのだろうと不思議そうに首を傾げていた。

また、ある日は自分の父親に花嫁を寝取られた男が首を括る瞬間を見せられた。男は死にきれず、起き上がる事も自分で命を絶つことも出来なくなるほどの後遺症を抱え、死にたいと呟いた。

様々な絶望を見せられた。どの悲しみも美しく、どうにもならないという点において、共通した色を湛えていた。それに気づいた時、どうして私は同じ色に染まることができないのだろうと、僅かな嫉妬心が首をもたげた。

# 百足王の牙

【打撃】むかでおうのきば

王と王妃の間に生まれた嫡子は、百足の死骸と共に母胎から出てきた。その国で百足は悪魔の使いの象徴とされており、赤子を一瞥した王は「なんと不吉な！」と吐き捨て、辺境の森に棄てさせた。

十数年後、国で内乱が起きて王家の人間達は皆殺しにされ、宰相一派が森へ逃げ込んできた。その際、動物達と共に暮らす魁偉な青年を見た宰相は彼の正体に気づき、叫んだ。「百足王よ、我らと共に戦って下さい！」

百足王は人語を解さなかったが、かろうじて意思疎通は取れ、戦斧を扱わせれば万夫不当の剛勇を発揮した。こうして宰相は百足王を総大将に祭り上げ、彼の武勇あって内乱を鎮めることに成功したのである。

王国が元の姿を取り戻すと、まともに喋れない百足王は奇異の視線に晒された。宰相は彼を毒殺し、実質的な支配者の座に就く。その後、遠乗りに出かけた宰相は酷たらしい死体となって見つかる。動物達に襲われ、生きたまま食い散らかされたのだった。

# 魔海の魔導書



永きにわたって汚された水が注ぎこまれ海は腐り果てていた。

回遊するのは内臓が溶けた魚。その身体の毒は食したものを裡からゆっくりと蝕み確実な苦悶の死へと追いやる。

満月の夜には腐った海で亡くなった者たちが陸へと還ってくる。

彼らは生者を黒い海の死の世界へといざなうのだ……。

# 雷鳴の杖



雷鳴は、雷の神の怒りの雄叫びだ。

そのすさまじき轟音が人々の耳をつんざいた。

人々は雷鳴に恐怖し恐れおののいた。なんであれ、自分は罪を犯しそれが今こうして罰されているのだ。そうに違いない。心当たりのあるものは懺悔し、ないものはただひたすら祈った。

かくして雷鳴の激しき怒りによって地に調和がもたらされた……。

# 束縛の旅六弦

「マシュマロが焼けました！」
ドロシーはどこから取り出したのか枝に突き刺したマシュマロを差し出している。
火傷に注意し、端をかじると外はカリっとしているのに、中からとろっと溶けたマシュマロが舌の上に広がった。

「また、焦げちゃった……」
ふと、隣を見ると火加減の難しさに苛立つ、いばら姫がいた。
「大丈夫だ。こうすれば食べられる」
焦げた箇所を綺麗にとって小さな口へ放り込む。思わず眼尻が下がった瞬間だけ切り取れば、年頃の少女だ。

「クッキーに挟むともっと美味しいですよ！」
サクッとした口当たりとチョコの甘味が口の中に押し寄せる。それを焚火で入れたほろ苦いコーヒーで流し込むと、思わず笑顔になっている自分に気づいた。

「子豚にも食べさせてあげたい」
いばら姫の口元についたチョコを拭いながら私は次のキャンプの予定を考え始めていた。

# 睡眠の円匙槍

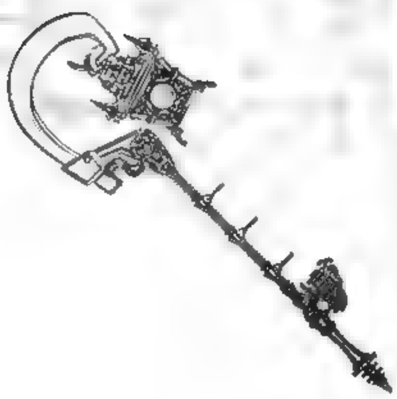
【長柄】すいみんのえんしそう

鳥のさえずりが煩わしい。
未だ眠たい目をこする。
私は隣で寝息を立てるアリスを起こさぬよう、
そっとテントの外へと出た。

静かに漂う焚火の残り香。
川のせせらぎと木々が風に揺れる音。
ああ、まだ眠っていたかったはずなのに、
何故だかとても清々しい。

生命の息吹を吸い込むように、深呼吸。
こんな朝も悪くない。
ううん、むしろとっても気持ちがいい。

「朝ってこんなに気持ちいいのね」
小さく呟いた声と共に出る欠伸。
「ふわ～ぁ。やっぱり……もうひと眠り」
――アリスが自分の体を揺らす姿を想像して私は微笑んだ。



# 探究の提燈杖

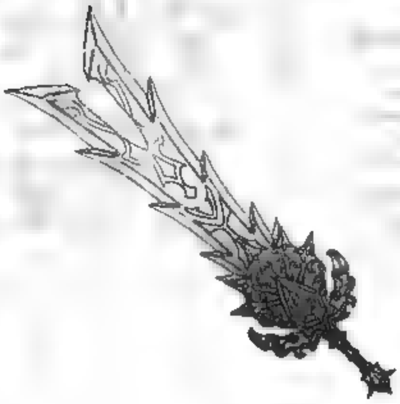


真っ暗な世界に灯る小さな灯り。
そよ風に揺れる炎の揺らめきはいつまでも眺めていたくなるほどに魅力的です。

外で食べるご飯もまた格別。
更に炭の香りが程よく薫るジビエの味は、それだけでキャンプに来た価値があります。

「……でも、それだけではありませんね」
瞳に映るのは穏やかな表情を湛えた二人の少女。普段の姿からは想像もつかない程に緩み切った表情をしている。

「まるで魔法みたいですね」
——何をしても楽しい。キャンプは生活の全てを特別な瞬間に変える。
そう気が付いた時には、赤髪の科学者もまたキャンプの魔力に取り憑かれていた。



# 魔女の業火剣



どこにでもいる十人並みの女の子。それがわたし。
そんなわたしの自慢は、お姉ちゃん。誰もが認める美人さんで、領主さまの恋人なの。
領主さまは優しくて颯爽としていて、ステキな方。ああ、お姉ちゃんが羨ましいよお。

わたしは幼い妹の手を引きながら森の小路を歩いていた。頭の中はまっ白だった。
金づるの女を見つけたから、お姉ちゃんを捨てた？　お姉ちゃんが泣き喚いたから、首を絞めて殺した…？
そんなのって…あんまりすぎる！　許せない…！

暗黒の森に棲む魔女は云った。「弟子になりたいって？　魔女の道を歩む者は業火に灼かれるよ、いいのかい？」
——数年後。魔女となったわたしは魔物達を召喚し、領主を襲わせた。
そしてあいつを捕うえ、この手に掴んだ剣で殺したの。

やっといい人を見つけ、結婚したのに。あの人、よそに女を作って。
証拠を掴んだ矢先に、毒を盛られた。
真相を知ったら妹が復讐を企て、わたしと同じ道を歩んでしまう…。
そ…そうだわ、業火に灼かれれば死因が判らなくなる。あ…、あの暖炉まで、保っ、て…。

# 沈黙の碧

【長柄】ちんもくのみどり

彼は音楽家だった。彼は毎日指揮棒をふるった。まだ卵で指揮する楽団を持っていなかったが、彼には遠からず将来、自らの指揮によって奏でられることになる音楽がはっきりと聞こえていた。
ある日、近所に越してきた上流階級の子息達が夜な夜な騒ぐようになり、彼の音楽は妨げられた。

連日の若者たちの無神経な騒音に苛立っていた音楽家のもとに一人の見知らぬ老人が訪ねてきた。
老人は彼に指揮棒を手渡した。
「これであなたの音楽を取り戻しなさい」

その晩も若者たちは騒いでいた。音楽家は老人に渡された指揮棒を手にした。
音楽家は若者たちの部屋へ行き自らの音楽を奏でた。
彼が指揮棒をふるうたびにあたりに血しぶきが飛び散った。

音楽家の演奏は終わった。彼の手には指揮棒ではなく鎌が握られていた。世界に再び心地よい静寂がかえってきていた。
そして音楽家は再び、彼にしか聞こえない音楽の世界に入っていた……。

# 魔鳥のはばたき

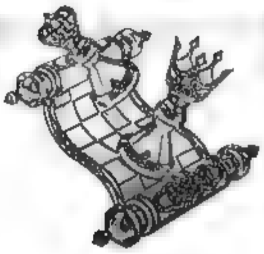


かの者、常人離れした剣客なり。
剣での勝負にて人後に落ちる事なし。
尋常なる勝負にて打ち倒す事、何者にも能わず。

かの者、俗世に疎し。
金銭になびかず、女性の色香にも動かされず。
自己の研鑽以外、眼中になし。

かの者、山野で修業に励む。
その折、空の蒼さのただ中に、鳥の飛翔を見ゆ。
鋭く下降し獲物を狩る姿に、蒙が啓かれる。

魔鳥を追いかけ、学び、倣い——かの者、剣技を極めん。
されど代価として言語を忘却し、魔鳥を喰らい、魔鳥の如く羽ばたき、心身そのものから魔鳥と化す。



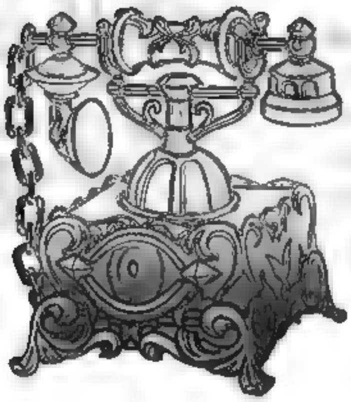
# 先見の知将

男は未来が読める魔法の道具を所有していた。そのため、世界の全ての成り行きをみすえている彼に対抗できるものはいなかった。

男の勝利は確定されたものだったが、敵は降伏することはなく、玉砕するまで立ち向かってくる事も確定していた。
敵の王国は最後には自滅兵器を使って、世界には彼一人のみが残る事が確定していた。

彼は彼一人のみ残る世界に取り残され、それからは死ぬまでの孤独と変化のない日々が待っていることも確定していた。

男は、戦いが始まる直前、彼に未来を見せ確実に勝利を約束する道具を放棄した。
その行方は男自身にもわからなくなった……。



# 幽暗な信号

【魔具】ゆうあんなしんごう

その電話が鳴り、受話器を上げたとたん声が聞こえてくる。

音声はその音を聞いてしまったものの正気を削った。

そうしてその正気を失った者もまた、電話をかけてくる一人になった。

電話のベルは世界中で鳴り響く。そしてその音はだんだん、だんだんその数を増して大きくなっていく……。

# ダーインスレイヴ



──『ダーインスレイヴ』
それは、斬った相手の血を吸い尽くすまで、
鞘に納めることが出来ないと言われる、神話の魔剣。
ここに、その名と同じ楽器があるという。
魔剣の名を負うヴァイオリン、その力は如何に。

ある人々はこう噂した。
「きっと持ち主の血を吸い尽くすまで、鳴りやまないのよ」
「血を吸い尽くされるまで、
持ち主は演奏するのをやめられないってこと？」
「あの楽器の赤い部分は、きっと血ね」

また、ある人々はこう噂した。
「弦を押さえると指が裂けるんだってさ！　ああ恐ろしい！」
「あの禍々しい姿……近寄りたくもない」
「音色を聴くと、呪われるに違いない」

噂を聞いた、ヴァイオリンの持ち主はこう呟いた。
「みんなバカだね、こんなに綺麗で、美しい音色の君を
姿や名前だけで避けるなんて……
でも、おかげで君も君の音も……僕だけのもの」
持ち主の顔色はいつも蒼白で、指先は真っ赤だったという。

# 夜明けの祝福

寒さが厳しい夜でしたね。
とても長い夜でした。
ですがもうそれも終わりです。
そろそろ夜が明けます。

目を開けてご覧なさい。
見えますか？
あなたを包む清らかな光。
祝福をもたらす柔らかな光。
朝がやって来るのです。

夜明け、
安らかな死。
穏やかな死。
生からの解放。
肉体からの脱出。

おめでとうございます。
あなたに死の祝福を。
美しき朝の到来に盛大な拍手を。
おめでとう！
おめでとう！！

# 束縛の意思



先生にプレゼントをした。
綺麗な音の鳴る、鈴が付いたストラップ。
これでずっと一緒にいられるね、先生。

太陽が昇り始める時間になると、
鈴の音がだんだん小さくなる。
「ああ、またあの場所に帰るのか」と
細めた目で彼の姿をお見送り。

彼の居場所をもっと詳しく知る方法は沢山ある。
でもそれをしないのは、知りたくないから。
私のあげたものがすぐに捨てられることを、
知りたくないから。

知らないから信じられる。
だから、これがあれば一人の時も寂しくない。
掌にはお揃いのストラップ。
指先で弄ぶと、甘やかな音を立てる。
「この鈴が響くうちは、私だけのもの。
そうだよね？　……先生？」

# 色欲ノ骸杖
## (カゲウチ)



朝顔の蕾から朝露が零れ落ちる瞬間も。
口端についた食べ滓を舐めとる仕草も。
乾いた喉を潤す、ごくりという音も。
全てが一つの情景を想起させます。

蠍さんが見せる夢は、私にとってこの上ない快楽と、到達することが出来ない物足りなさが同居する、甘美で排他的な夢でした。

少年が青年へと変化する瞬間のように。
清廉な関係が本能に屈する瞬間のように。
決して戻ることのできない変化の瞬間は
このうえなく艶やかで、蠱惑的。

一つ情景を見せられる度、私は高ぶり、
身体の奥から溢れる熱は激しさを増します。
……ですが、お願いいたします。永遠にこの甘やかな昂ぶりの中にいたいのです。歓喜の瞬間が訪れるその間際で留めてくださいな。

# 魔薬の小銃

【射出】まやくのしょうじゅう

すべてが洗練され、清潔で、秩序が保たれた都市。おれが暮らしてるのはそんなところだ。
いつものように仕事へ向かう途中、騒ぎに出くわした。ひとりの女が騎馬警官と悶着を起こしてて、なんと警官から小銃をひったくろうとした。
銃が暴発し、あんまりにも大きい音だったから、おれはその場で気絶しちまった。

目覚めると、そこは殺風景で狭い部屋で、おれはさっきの女に介抱されていた。
「ここは私のアジト。迷惑を掛けてしまったお詫びに、本当のことを教えてあげようと思って」
どういうことだ、と聞いた。
「人間はとっくに不老不死になってて、そのかわり記憶を一定周期ごとに消してるの」

彼女は語った。不老不死にはなったが、人間の脳には限界があり、一定周期ごとに記憶を抹消しなければ廃人になってしまうのだと。
「私は廃人になっても構わない、大切な人たちと育んだ記憶を絶対になくしたくない。だから私は体制と戦ってるの」
そう語る彼女の手をおれはギュッと握る。「おれにも手伝わせてくれ！」

あうあう。この人ってばヘラヘラ笑って、楽しそう。
ああ、魔薬の弾丸が入ってたのね。確か、神がかった霊感を授けるから芸術家や作家が濫用し、ご禁制になったけど、火薬として使えるから軍には出回ってるんだっけ。
暴発した銃に撃たれるって独創性のない死因と違い、創造性に富んだ夢を見つつ死ぬわけね。

# 重力の特異点

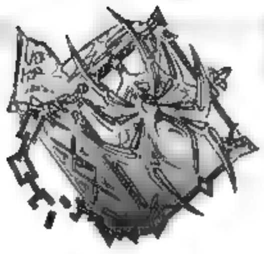


その斧は人と神の媒介者によって作られた。
その斧の力は無限大であり、すなわち全ての有限なものを凌駕した。
その斧は古の神話上の戦いの後、人間と神が交流する場として作られた森に収められた。

斧による無限大の力の行使は、その森の中に限定されており、その力が行使された結果の出来事も、森の中でその斧を見ていたものにしか把握できないのであった。

その森は、無限大の力を森の中に留めおく無限大を安置するための無限大の森であり、その無限大の森が森の外部の空間に接して存在していることによって森の外の世界そのものが無限大であることを示していた。

その斧が森の中におさまっている状態と、その斧が森の中におさまっていない状態、その二つの状態は同時に在り、片方の状態が確定した場合は、世界の法則は正しいということと、世界の法則は正しくないということが両方在り、そしてまた両方ないのであった……。



# 血 蜘蛛の禁書



祖父の遺品を整理している時に見つけた本。
古びた表紙に不気味な蜘蛛が張り付いた本。
蜘蛛は金属製でかなり錆び付いている。
本を開いても何も書かれていない黄ばんだ頁ばかり
一体この本はなんだろう？

錆びた蜘蛛の足先に指を引っかけた。
指から見る間に血が溢れ出て
蜘蛛の背にぽた、ぽたり。
すると不意に蜘蛛が動き出して
ぼんやりと光った背に血は吸い取られていった。

蜘蛛に血を与えると
何も書かれていなかった筈の頁に文字が浮かぶ
【憎い相手を呪い殺す方法】
【異界の魔物を召喚する方法】
【そいさらばえた肉体から若き肉体へ精神を移す方法】

そういえば思い出したことがある
祖父が死んだ日の朝、目覚めると激しい違和感に襲われた
私が私として生きた十年余りの記憶が他人事に感じられて
突然、｢俺｣という一人称が幼稚に思えてきたのだ
この肉体に宿り思考している今の私は、一体誰なのだろう？

『アリス/』
『オルタナティブ・ブラッド』

# 束縛の鮮血刀



身体にこびり付いた血の匂い。あの人はまた私の血を洗ってくれるのだろうか？

消えない記憶と小さな光をこの身に宿し、私は進む。そうすることでしかもう、私は……

あの日先生に出会わなければ、こんなにボロボロにならなかったのかもしれない。

でも先生に逢えたから。空っぽだった私も、誰かを愛することができるようになったんだよ。先生、ありがとう。そして……

# 悪戯な妖精

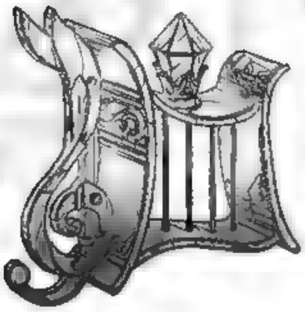


ええ、はい。私、妖精さんの囁きを聞くことができるんですよ。子供の頃は、多少霊感が強いぐらいだったんですけど。十歳を少し過ぎたあたりから、はっきり認識できるようになったんですよね。悪戯な妖精さんは、なんでも教えてくれるんですよ。ふふっ。

ハン、「妖精さんの囁き」なんてあるわけないじゃん。みんなチヤホヤしてくれるからそう言ってるだけ。失踪人捜しとか失せ物捜しを頼んでくる人もいるけど、どうとでも取れるようなことを言って、適当にかわしてる。なのに「無事に見つかりました！」と感謝されることの方が多いし、世の中ってチョロい。

騎士団からマジな頼みごとされちゃった。とある一家が赤ん坊を除いて惨殺され、犯人の痕跡が見つからない難事件に協力してくれって。現場に行って、赤ん坊にも会って、「犯人は人の心に渦巻く邪悪な意識の集合体かもしれません」なーんてデタラメ言ってしのいだけど。はー、嘘八百もキツくなってきた。

突然、あたりが真っ暗になった。ふたつの赤い輝きが灯る。赤ん坊が宙に浮かんでいた。「余の正体をよくぞ見破ったものだな、女よ」「ま、待って！　私、デタラメを言っただけ――」窒息感。両手が勝手に動き、自分の喉を締め上げていた。私はもがき、のたうち回り、苦痛にまみれた死を迎えることとなった…



# 運命愛の音色



ちょいと、そこのお二人さん。
あんたがただよ、お若いの。
こっちにおいで
占い婆の食い扶持に付き合ってはくれんかね。

恋人同士なんだろう？
ちょいと、この楽器を弾いてみな
こいつは固く結ばれる運命にある男女が弾くと
それは素晴らしい音色を聞かせてくれるのさ。
見事な音を出せたらお代は結構だよ。

——おーやおや、イッヒッヒ。
きったない音色だねぇ。
こんなに不快な音はそうそう出るもんじゃないよ。
あんたがたの相性は最悪さ。
悪いことは言わないからさっさと別れちまうことだね。

——ヒッヒッヒ、あのカップルも長くはなさそうだ。
どいつもこいつも、自分達だけは運命で結ばれてると思い込んで
人間同士なんざ偶然の産物で結ばれたに過ぎないってのにね。
……しかし、アタイがくたばるまでに一度くらい
素晴らしい音色とやらを聞いてみたい。

# 占い師の杖

鏡に浮かび上がる文字のなかから、最初に見つけたものが、占いの結果。しかし気をつけて。見つかった文字は絶対。どんなに望んでいなくても、気に入らなくても。どんな文字が浮かぶか……それは杖次第。

①貴方の印象

卑屈保私欲求不満大口変態嫌嫌嫌嫌
猥褻身損強情潔暗愚悪人嫌悪嫌嫌嫌
奇異端者欲面不義者臭矮小者嫌嫌嫌

②貴方に必要なもの

風俗借苦難体収賄賂露悪地獄復讐冤
不倫金破滅罰則男隠蔽天災害惨犯罪
正殺意局遺言怨色欲誇大厄難事故証

③貴方の未来

呪殺毒殺撲殺銃殺刺殺惨殺絞殺虐殺
溺死轢死圧死縊死爆死自死餓死狂死
死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑

# 憤怒ノ鎖斧
## （カゲウチ）



憎悪に身を任せるまま、殺し続けた。私に復讐の刃を向ける者もまた、殺し続けた。

その輪廻の中で人の命は脆いことを知った。それと同時に、命尽きてもなお輝く愛がある事を知った。復讐心に囚われず、私の非道を糾弾する勇者がいることを知った。

だが、どれだけ気高い魂を持とうとも、力の前には等しく無力であることを知った。それはこの世界から悲しみが尽きない理由であることに気が付いた。

狼の見せた夢はどこまでも救いがなく、それと同時に人間の本質を暴く夢だった。私は今も揺蕩い続けている。ただ茫洋とした闇をどこまでも、どこまでも。

# 亡 魂の喚き

物心ついた時から、死者の声を聞くことが出来た。しかし、それは普通の事ではないと、俺は早々に理解した。５歳の時だ。親切にも死者のひとりが、それを丁寧に教えてくれた。以降俺は、自分にだけ聞こえる声の話を一切しなくなった。

だが両親は、もう俺を気味悪がるようになっていた。以前のように可愛がってくれることはなく、無視される生活だ。やがて俺は、両親はそういう存在なのだと諦めた。死者の声は絶え間なく聞こえ続ける。俺がそういう耳を持っていると、死者達はよく知っていた。

姿は見えない。聞こえるのは声だけだ。会話はできる。けれど、理性が崩れて話が通じない死者も多い。四六時中俺につきまとい、自分勝手に喋り続ける者もいる。恨み辛み、悔恨と懺悔、怨嗟に慟哭。そういった感情をぶつけてくる死者は後を絶たない。

ライフルを握ったその日から、俺を取り巻く環境は一変した。呪詛を吐き続けていた死者が、愉しげに笑うようになった。両親の姿が見えなくなり、声だけが聞こえるようになった。彼らの声が聞こえる生者は、俺だけだ。必死に話しかけてくる両親の声を無視するのは愉快だった。

# 歪形の和音

横笛を心から愛する爽やかな好青年の楽士がいた。彼は笛を愛する二人の楽士と意気投合し、三人で各地を遍歴しては人前で演奏していた。演奏の評判は上々で、聴衆たちはいつも彼らに暖かい拍手喝采を送ったのだった。

横笛を吹く青年楽士と寄り添うようにして笛を奏でる女性楽士は、彼と深く愛し合っていた。しかし恋愛依存症ぎみで、少しでも彼が構ってくれないと簡単に他の男と寝てしまい、それを堂々と彼に打ち明けるというお茶目な女性だ。

「もう一人の中年楽士は、身体は男でも心はこ女であり、青年楽士を愛している。愛の成就のためには性差という障害を乗り越える必要があり、かえって中年楽士を燃え立たせていた。」

普段爽やかに振る舞ってはいる青年楽士だが、真実の彼は変態的性癖者だった。何せ毎晩[redacted]たちの[redacted]を舐めては[redacted]を擦りつけ、匂いを[redacted]、[redacted]に耽っているのだから。——とまあ、歪形ながらも彼らの和音は人を感動させている。

# 風招きの杖

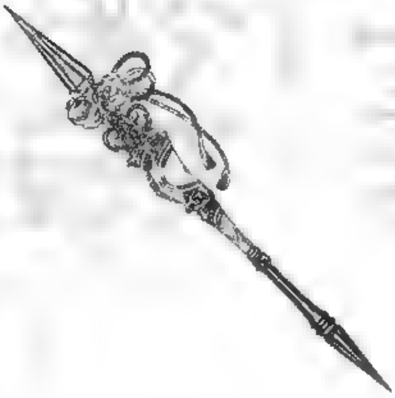


私は生まれた時から、言葉を持たなかった。産声を上げずに生まれた、声なき子供。吐く息はか細く、形を成す前に消えていく。里の長老は、声なき私に杖を授けてくれた。

吹きだまり、風が凝る場所で、私は杖を振るう。びょうびょう、びょうびょうと風が吹き始める。私はまるで、指揮者のように胸を張って、息を吐く。吐いた息は風となって、招いた風と混じって消える。

私は息するように、唄うように、杖を振る。無口な彼らと対話する、巫女として。私の声は、彼らの声と混ざり、広がっていく。びょおう、びょうびょう……びょおう。これが、私の言葉だ。

成人し、成長した私。体にはなんの問題もない。しかし私は声を言葉を発しない。怒りは嵐で、喜びはそよ風で、寂しさは木枯らしで示す。私の声は、すでに風に捧げた。意味ある言葉に、濁りある不完全な音に、風は応えないから。



# 正義の旗槍

【長柄】せいぎのはたやり

この衣装は似合っているだろうか？
皆の期待に応えられているといいのだが……

応援してくれた皆、本当にありがとう。
またこの景色を見る事ができるとは。

次回同じような結果を得ることは難しいだろうから、今のうちに精一杯感謝したいと思う。

……きっと来年は殿堂入りとして
投票できないようになるだろうからな。

# 朝の知らせ



その日もいつもと同じように新しい一日がはじまろうとしていた。
だがその日、毎朝なにかと騒がしかった家の中はいつもと違って静まりかえっていた。

その日のその家の朝は、一発の銃声によって告げられた。
窓から銃弾が撃ち込まれたのだ。

その家にとって、一日ははじまることはなかった。その日も。その翌日も。その日を境に。二度と。

その家に住んでいた、隣近所から長年迷惑がられていた住人。その日一日も大変騒がしくはじめるはずだった家の主が、一日のはじまりを告げた一発の号砲に額を撃ち抜かれて死んでいたからであった……。

# 辺境のスキットル



名称：辺境のスキットル。
大きさ：１０×１２×０３。
材質：詳細不明の金属。
装飾材質：詳細不明の鉱物。
用途：酒類の保存。

魔法的効果１：状態の保存。
魔法的効果２：内容物の原子変換(アルコールへ変換)。
備考：中に入るものであれば、どんなものであれ、
　　　アルコール――いわゆるお酒に変換が可能。
　　　変換までの期間は内容物の魔法強度に反比例。

追加調査内容：水の酒類への変換詳細。
対象物：水。
変換期間：１日。
味：のどごしよし。すっきりとした味わい。
備考：水の種類によって風味の違い。追加調査の要有り。

追加調査２：体液の酒類への変換詳細。
対象物：血液。
変換期間：３日。
味：芳醇かつ濃厚。絶品。若干の依存性を認む。
備考：血液提供者の年齢性別、採血時の状態により味は変化。
　　　吸血鬼なる怪物の出現の噂。追加調査を一時断念。

# 嫉妬ノ蛇弓
## （カゲウチ）

「私は兄様が一番大切です」
「だから、兄様を不幸にする人は殺されても仕方ない悪い人なんです」

「ねえ、兄様……私、何かいけないことをしてしまいましたか？」
——少女の手には矢の刺さった女の首が握られている。

——先ほどまで楽しそうに談笑していた相手の突然の死に少年は戦慄している。
「ねえ、兄様。そんな顔で私を見つめないでください」

「あの蛇、さえいなければ、兄様を困らせることもなかったのに……ごめんなさい」
——繰り返される悪夢に少女はうなされ続ける、そう少女が壊れるまでずっと、ずっと。

# 小鳥の囀り



チュンチュンチュン。絶え間なく小鳥が囀っている。
僕は参考書をめくる手を止め、思わず両手で頭を抱えてしまった。
一体、どれだけ神経を掻き乱され、集中を妨げられている事だろうか。
チュンチュンチュンチュンチュンチュン。

実家は極めて厳しい収支の中、仕送りしてくれてる。
今年こそ文官登用試験に受からないと、僕も家族も野垂れ死にしてしまうんだ。
こっちは命を削って勉強してるのに、素知らぬ顔でチュンチュンチュン囀りやがって……！

チュンチュンチュンチュンチュンチュン、ぶちっ。
最後のは、堪忍袋の緒が切れた音だ。
僕は根棒をひっ掴むと窓辺へ飛び出し、囀る小鳥どもを片っ端から殴り殺した。
ぶちぶちぶち、チュンチュンチュン、ぶちぶちぶち。

ん？　誰だよ、あんた。
はあ、隣の部屋を借りてる人だったのか。悪いけど勉強の途中なんで、また今度に――って――な、なんだ、根棒なんか持ちだして！？
えっ？　小鳥はあんたの大切な友達で、無残に叩き潰した僕が許せないって？
ま、待て――ぶちっ。

# 妖魔の提琴



魔の提琴の正体は妖魔だった。
廃墟と化した城に、妖魔の提琴は取り残されていた。
廃城にやってきて、その見事な意匠を施された提琴を演奏してみようという気を起こした愚か者が下手な演奏を終えると、自らの正体を明かし、食らった。

ある日男がやってきた。男は妖魔の提琴を手にとってひいた。演奏が終わると妖魔はこれから男のことを食らうと宣言した。男は言った。食われるのは致し方ないが、音楽家のはしくれとして今のが生涯最後の演奏になるのは悔いが残る。人生最後の曲を作ってくるのでちょっと待ってくれないか、と。

かつてそのように申し出た者もいなかった為、妖魔は気まぐれで男を行かせてやった。幾つもの夏と冬が過ぎた。男は戻ってこなかった。だまされたのだ、と妖魔が確信したその日に男は戻ってきた。その姿は老いていた。男は、人生の悲喜こもごもを表現した妖魔もおもわず認めざるを得ない見事な曲を完成させていた。

演奏を終えた男は言った。これだけ年老いた自分はどっちみち明日にも死ぬかもしれない。もしかしたら思ったより長生きするかもしれない。自分が死んだら食っていいからそれまで共に行動しないか、と。そして、提琴を手にした男はその土地の港で船に乗り込むのを目撃されたのを最後に、旅立っていったのだった……。

# 氷樹の封印

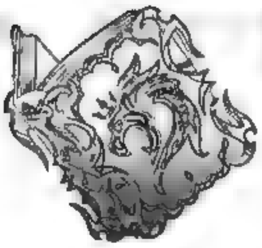


明日の見えない国だった。民は疲弊しあきらめていた。そんな折、ある術を使う医師が民の間で話題になった。彼は術を使って人間の時間を止めてくれる。そうやって時間を止めることで、そのままでは死んでしまうはずの難病患者の生命をこの世に留め置いていた。いつか治療法が見つかる日を願って。

一人の民が医師を訪れた。彼は病気ではなかったがこの世に絶望していた。今はこの国に希望は見えないが、もっと時間がたてばあるいは希望が生まれるかもしれない……。そう思って彼は医師に頼みこみ自分の人生の時間を止めてもらった。

その話を聞いて彼同様、国の未来に絶望していた他の民も、次々と医師のもとにやってきた。彼らは医師の用いる氷樹の封印の術によって、樹に囲まれて凍り、運命を先の時代に託した。
国はそのあとも荒れ続け、とうとう業を煮やした民が決起し、内戦が勃発した。

国は軍隊を動員し、早期の鎮圧をはかったが激しい抵抗にあった。隣国からの援助もあり戦乱は続き、そしてとうとう国はなくなってしまった。医師はいつの間にか姿を消し、氷樹に囲まれ眠っている民たちが再び起きることはなかった……。



# 獅子王の心炎



獅子王はその武勇で知られていた。
戦場では勇猛果敢に戦い乱世を平定した。

その獅子王が寿命を迎え多くの民に惜しまれながら亡くなった。

獅子王が大事にしていた書が見つかった。それには「我が秘めたる思い」と書かれていた。獅子王の抱いていた願いならきっと実現すれば素晴らしいことが起こると思われた。
王国魔導士が呼ばれ、翌年の獅子王の命日にその魔導書は発動された。

兵士たちが城の地下牢に向かった。そして捕虜たちを牢から出した。兵士は鞭で捕虜をうちのめした。捕虜を串刺しにし、飾り物にした。捕虜をいたぶる兵士たちの顔は一様にあふれんばかりの笑顔だった。彼らは獅子王の思いに感化されたのだった。獅子王の念願は彼の臣下たちによってめでたく果たされたのだった。

# 火輪の杖



僕が生まれ育ったところは
太陽が昇らない常闇の村だった。
だけどその代わりに
強烈な光と熱気を放つ杖があった。

杖は一瞬で持ち主の命を吸い上げて
太陽のように輝き燃えるのだ。
杖の輝きは約一年で尽きるけれど
おかげで村は農作物を育てることができている。

村人は歳を取ると杖の持ち主になって死ぬのが常だった。
僕の祖父母も父母も親戚も兄も姉もそうやって死んだ。
そして今年は僕の番だけど、僕はちっとも怖くない。
杖を手にすると痛みを感じなくなるらしいから。
安らかな死が約束されているのなら、それは幸せなことだろう。

さあ火輪の杖よ、僕がお前の次の持ち主だよ。
僕の命を糧に、村に栄光を――……あ、れ？
……うそ、苦し……イ、タイ痛い痛い痛イ……話ガ違ウ……？
アアアアアアアアアアアア熱イ熱イ熱イ熱イ熱イ熱イ熱イ熱イ！
騙シヤガッテ！　ミンナ燃エテシマエエエエエエエエエエエ！！

# 色欲ノ秘杖
## (カゲウチ)

【祈祷】しきよくのひじょう(かげうち)

気の合わない相手の頬に手を添え、
拒むようにもがく手首をつかむなど……
これは夢だ、夢に違いない。だが、唇が触れ合ったようなあの時の感覚は……

「抑圧が限界に達した時、夢魔が現われる」と、
聞いたことがある。
あの蠍はその一種だったのかもしれない。

私にそのような感情はないはずだ。
だから、だから、だから……
あの蠍は夢魔などではないはずだ。
きっとそうだ。そうに違いない。
……まったくもって忌々しい。

——そう思いながらも、赤く染まった唇を無意識になぞる指先に気づいた時、
少女は柄にもなく小さな舌打ちをしていた。

# 七星の嚮導



国民から切望された王太子の出産を控えた王妃はある晩、七星を飲み込む夢を見た。
妻から話を聞かされた王は「生まれてくる赤子は神の申し子だ！」と喜び、国一番の鍛冶に大剣を打たせ、王太子の佩剣とした。

英邁なる父王の後を継ぐにふさわしい器量に成長するに違いない――誰もが王太子に期待を寄せた。
だが、王太子は何をやっても凡庸以下の才しか発揮しなかった。
勇猛さの欠片もなく、軍略も政略もまるっきり不得手だった。

愚鈍な王太子を見た父王は「あれには期待できん、儂が天下の趨勢を決めておかなければ！」と焦った。
その結果、強引な戦争を仕掛け、無理が祟って陣中で病没。
王太子が後を受け継いだが、相も変わらずの愚鈍ぶりを発揮し、王城ひとつを残してすべての城を敵国に陥落させられてしまう。

「なぜだ！　なぜこれだけ努力しても、私はまるでダメなのだ！？」
愚鈍な王が叫ぶと、頭の中に笑い声が響いた。
『我ら七星の嚮導によるものよ！　お前の父は昔、七星を祀った祠から盗みを働いた。その報いを味わえ！』
愚鈍な王は嘆息して大剣で左胸を刺し、あの世の父へ恨み節を言いに行ったのだった。

# 影切鎌

【長柄】かげきりかま

その鎌、影を断つ。
斬撃に見舞われし者、逃れること能わず。

その鎌、形なき影を斬る。
影を寸断されし者、生きること能わず。

光あるところに影あり。その影もまた本質なり。
影を断たれし者、光も断たれ、存在すること能わず。

おや、俺に影がないって驚いてるのかい？
その鎌で影を斬られるとおっ死ぬってカラクリは散々噂になってんだ、魔導士に頼んで影は捨ててきたさ。
さあ！　小細工抜きで俺をぶった斬れるかどうか、試してみろや……！

# 祝裏の書

結婚への祝福。難易度の高い試験への合格に対する祝い。祝いとは呪いでもあるのだ。

祝福されたものはその時に、暗黙の契約をしている。すなわちそのときの祝いがいつまでも肯定的な意味を持ち続けているという事の。

祝福された夫婦が別れ、祝福された生徒が学びに挫折し脱落したとしたら、その時の祝いは祝うべき事柄ではなかったこととなってしまう。

祝いが、未来においても変わることがないという契約の成就。
暗黙の、祝われた者の今後の規律を保つ行動を命じる無言の圧力。
祝いとは、すなわち一種の呪いでもあるのだ……。

# 嫉妬ノ華銃
## （カゲウチ）



柔うかな雨の中、夢のなごりに思いを馳せる私がいる。蛇さんと暮らすようになって、変な夢を見る事が増えてきた。

ねえ蛇さん。
お腹の中にいた頃の事を覚えている？
あの頃はよかったな。誰にも邪魔されずに、毎日キャラメル色の夢を見ていたの。

うらやましいな。あの頃の私が。
だって今はどこにいても一人になれないもの。

頭で響く、あなたの声がうるさいの。
ああ嫌だ、こんなことなら全部終わりにしたい。
——おやすみ。

# 怠惰ノ三線
## （カゲウチ）

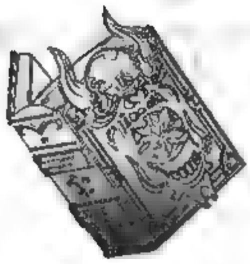
【楽器】たいだのさんしん（かげうち）

あの大蛇との出会いから、私ではない私の夢を見ます。その少女は私よりももっと、奥手で――私にはない無垢な魅力を湛えた瞳で殿方の寵愛を集めておりました。

その少女は泣きながら「毛先はきっとあの方の感触を覚えているから」と、髪を切っていました。そして次の日、「少しでもあの方の見ている世界が知りたくて、彼が手にしていた本を読んでいるのです」と、はにかみながら涙を拭いました。

またある日の夢では「あの方と寝床で朝食を共にする、和歌のような朝を迎えてみたかった」と物憂げに語りかけてきました。正直に申し上げますと、少女の取る全ての行動が私には理解し難いものでした。

望みがあるなら力で解決したほうが早い。そもそも私は少女が胸をときめかせていたような弱い殿方と戯れるなんて考えるだけで悍ましい、と思ってしまいます。しかし今日もまた、おしろいも落とさずに少女の夢をみるのでしょう。何かに囚われたかのようにずっと、ずっと。



# 愚者火の煉獄



その南部の街の住人たちは、訪れた旅人に親切にしてくれると評判だった。その街に、旅の修道士が立ち寄った。人々は彼を街で一番大きな宿に案内し、ご馳走をだし、歌や踊りで歓待してくれた。

街の住人たちは皆友愛にあふれた笑顔でもてなしてきた。だが修道士にはその真の姿が見えていた。宿のそこら中に死者の魂の鬼火がめらめらと揺らめいていた。

そこはかつて頽廃により神の怒りをかい、災害によって滅ぼされた街だったのだ。

現生での行いによって彼らの罪は浄化される。そのため彼らはたまに訪れる旅人に親切にするのだ……。

# 旋廻の剣

醜い鍛冶職人の僕は歪んだ剣しか作れない。剣の分際でどうして僕より美しくなろうとする？　許せない。作り手よりも美しい存在なんて。誰も買ってくれない歪んだ剣を僕は作り続ける。

僕の店に盲目の女性が現れ「美しい剣はございますでしょうか？」と尋ねてきた。 僕は「これがその剣だ」と嘘をつき歪んだ一振りを渡す。彼女は指でその剣を叩き「とても良い音を奏でてくれますね」と言った。盲目の彼女は醜い僕の剣を褒めてくれる。僕が彼女を好きになるのに時間はかからなかった。

ある日、彼女の目が治ることがわかった。目が見えるようになれば僕の嘘がばれてしまう。彼女の家に侵入し、売った剣を回収しようとしたところで目の手術から帰宅した彼女と鉢合わせる。僕は僕の醜い顔と剣を見られるくらいならと手近にあった物を手に取って彼女を襲った。それは彼女が最初に買ってくれた僕の短剣だった。

歪んだ短剣は彼女の目にまかれた包帯だけを落とす。光が宿った彼女は僕と僕の作った剣を捉える。「こんな形をしていたからこの剣は良い音を奏でてくれたのですね」そう言って彼女は僕を見る。変わらぬ微笑みとともに。「こういうお顔をされていたから心地よいお声をあなたはわたしに聞かせてくれたのですね」

# 緋妖魔刀



学問にも武芸にも興味ゼロ、追い求めるのは芸術だけ。そんなオレは王都でひとり暮らしを始めた。王都の有名劇団に所属できるよう、安食堂で働きつつ夢のかけらを磨いている。

隣の部屋に住む女と本の貸し借りをしたのがきっかけで、男女の関係になった。が、翌日、女は自室の窓から謎の墜死を遂げたんだ。しかも首から上が綺麗に斬り落とされてて、どういうわけか首は行方不明だって。

昨晩寝床を共にした相手が死んだなんて、さすがに薄気味悪い。でも、家賃はまた安くなるだろうし、食えない役者のオレとしては幸いだ。ん？　誰だよ、こんな時間に戸を叩いてるのは。待ってろ、いま開け…うわあっ、なんだおま――

この集合住宅かい？　家賃は安めだけど、やめといた方がいいよ。ましてやあんたみたいな色男は。ここは改装前は武道場でね、厳しい女道場主が一人息子に恋愛を禁じてて、その息子が女を引っ張り込んで行為に及んでいるのを見て激怒し、息子を殺して自分も薙刀で首を刎ねたんだって。

アラジン/
クラッシャー

# 成金の銀槌

【打撃】なりきんのぎんつい

ビジネスの拡大はリスクを伴うとは正にこの状況だね。

大金で人を集めたのはいいが、王墓の建設が打ち切られた今、この余剰人員はどうしたものか……

リストラクチャリングが一番手っ取り早いと思うだろう？　幸い僕には唸るような大金を退職金に充てる用意がある。だが、それは三流のすることだ。

ピンチはチャンス。僕なら現状できている基板を上手く使い古今東西の英霊を祭るテーマパークへとリビルドするね。さあ、これからが本当のビジネスの時間だ！

# 渇望の鱗



【雑文其の一】
富める者は君臨し、貧しい者は踏み付けられる。それが世の中の不文律で、貧民街の子らはみな死んだ目をしていた。そんな彼らの前にその男は現れ、こう云った。「武器を執れ。生きる術を授けてやる」

【雑文其の二】
男は子供達に銃の使い方を叩き込み、獲物を獲って調理する方法を授けた。彼らの目に生気が甦る。自分の力で生き延びる事ができると実感したからだ。子供達はこぞって、もっと沢山の事を教えてほしいと男に頼んだ。

【雑文其の三】
次に男は経済の概念を教えた。需要と供給があり、お前達を必要としている人達の役に立つ事でもっと良い暮らしができると。こうして子供達は、富める者の社会に君臨する政治家を次々に暗殺していった。

【記者アーカムの日記より】
やれやれ、書いてて胸くそ悪くなってきた。
まあとにかく、悪名高いテロ集団「渇望の鱗」はこうやってガキどもを洗脳し、死兵にしてる。けど、あいつらを社会から爪弾きにしたのは富者どもだし、因果応報なのかねぇ。

# 灼熱の魔笛



住人が焼身自殺したせいで、長いこと空き家になっているボロい屋敷が近所にある。誰も近寄らないその家で、ぼくはこっそりペットを飼い始めた。幽霊屋敷を探検しに入ってみたら、たまたま見つけたんだ。名前はホノオにしたよ。

ホノオの見た目は少し不気味だけど、ちょこんと生えた短い足を一生懸命に動かして歩く姿は、なかなか可愛いものだと思う。餌は変わっていて、なんと火を食べる。マッチ棒を擦って差し出すと、喜んで飲み込むんだ。

火をたくさん食べると、ホノオは短時間だけもっと不気味な姿になる。
その時のホノオは不思議な音を出すんだけど、ずっとその音を聞いていると、ぼくは体がどんどん熱くなる。ホノオが出す音は、生き物を内側から燃やしてしまうんだ。

ホノオが音を出し始めたら、ぼくは耳栓をする。
そうしてホノオと外を散歩するのが、最近のぼくの愉しみだ。
運悪くホノオの音を長いこと聞いちゃった人が、自然発火して燃えていく様子は、とても綺麗だからね。屋敷の住人が自殺するのを見た日から、ぼくは炎の虜なんだ。

# 守護者の杖



【証言その1】
「ああ、あの神殿の守護者様？　とてもいい人だよ。
女子供だけでなく、男の俺にも優しいし、お恵みをくれる。
それにとても信心深い。あんな強い魔法が使えるのはきっと、毎日祈りを捧げている神様からの贈り物だと思うな」

【証言その2】
「神殿の守護者様？　あまり好きじゃないわ。
優しい人だと思うけれど……なんだか不気味で。いつもうちの息子たちをじっと見つめながら、笑顔でただ、あの杖を磨いているのよ？　ほら、不気味でしょう？」

【証言その3】
「神殿の守護者様について知りたいだぁ？
あんたもあれかい、神殿に子どもが連れて行かれるのは、人体実験のため～なんて言うのかい？　ちげーっつの、守護者様は身寄りのない子どもに働き口を与えてるんだ」

【証言その4】
「僕はあの街を出て正解でした。
神殿で働きたくなかったので。
あの守護者の杖、あの玉は、神殿で働く子どもの目を抉って作られたんです……強い魔力の源になるんだとか。だから守護者は、子どもの瞳を恍惚の表情でいつも眺めてるんです」

人魚姫／メイジ

# 悲哀の魔具

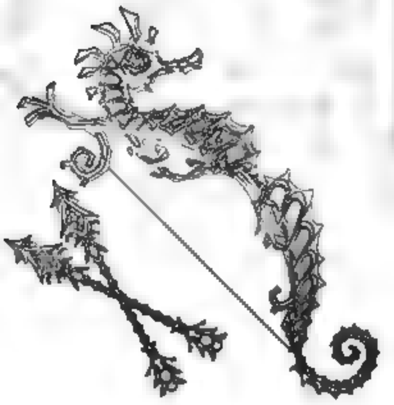


今も世界の片隅で捨てられている涙を集めて、混ぜ、一つにしたのならば……一体どのような色になるのだろう。ある日私はそう思い立ち、そしてすぐに旅に出た。

「ママ、元気ないの？
ツバキが元気にしてあげる！」
握った母の手から力が抜けゆく事を感じながら、泣くように笑う少女の涙が綺麗だと思った。

「このまま二人であの黒い化物になってさ……なにもかもめちゃくちゃにしちまおうか？」
世界に対する憎悪を叛逆の決意に変えた瞬間の、決意の涙が美しいと思った。

涙は人によって、零れ落ちた状況によって異なる輝きがあった。これが一つになったら一体どれほどの輝きを見せるのだろう。そう、胸を躍らせていた期待は、すぐに裏切られることになった。そして私はあの輝きはその瞬間にしか宿らないことを理解した。



# 海馬の神弓

【射出】かいばのしんきゅう

龍の堕とし子は知っていた。
自分が龍にはなれないのだと。
それが悲しくて苦しくて辛くて、
濁った怨嗟をぶくぶく吐いて、
海は憎悪の泡で満ち満ちた。

ぶくぶくぶく。ぱちんぱちん。
憎悪の泡沫がはじけると、
怨嗟の声がぱちんと溢れた。
とっても惨めなその音は、
聞いた歌姫が身を投げるほど。

いつしか海の命は消えたので、
堕とし子は泡でそれらをかたどった。
海月、魚、鯨、鮫……ふと、龍の堕とし子は思った。
龍でさえ、泡で作れるのではないかと。

憎悪の泡で龍を装った堕とし子は、
夜空へぷかりと浮かび上がった。
彼はその飛行が泡がはじけるまでと知っていた。
ぷかりと空を舞う、その心地よさに満足した。
初めて少しだけ笑って……ぱちんっ――消えた。

# 血石の大槌

【打撃】けっせきのおおつち

フラリと立ち寄った酒場でイイ女と出会い、すぐに寝た。彼女はオレの胸にすがりつき、言った。
「やっと決心が付いた。あたしには夫がいるんだけど、今夜殺そうと思うの。手伝ってくれるよね？」
オレは頷き、再び彼女を組み敷くと、行為に没頭した。

翌朝、オレは宿を引き払うと、別の街へトンズラした。
ひと晩寝ただけの女に愛情なんか持ってねえし、痴情のもつれに巻き込まれるなんてごめんだからな。
ところが市場で知り合いと出会い、話を聞いた。あの女が殺されちまったんだと。
ま、旦那に返り討ちにされたんだろうな。

宿で休んでいると扉が蹴破られ、男が乱入してきた。「お前のせいでおれの人生は滅茶苦茶だ！」
血まみれの大槌が振り下ろされ、オレは左肩を砕かれた。
さては、あの女の旦那か…！　オレは戦意喪失したフリをして油断させ、大槌を奪い、男の頭を砕いた。

荒く息を弾ませていると、あの時の女が現れた。
顔は醜く焼け爛れ、二目と見られないものになっていた。
「生きていることを知ったら夫が殺しに来るから、死んだって噂を広めてもらったんだよ。全部あんたが約束を守らなかったせいだ」
彼女は大槌を拾い上げるや、勢いよくオレの脳天めがけて振りかぶった——

# 朽ちた大樹の書

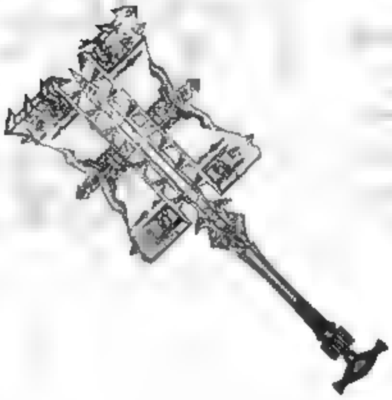


とある魔術師が、森を散策中、一冊の魔導書を拾いました。
表紙を大樹で飾られたその魔導書は、まるでボロ雑巾。
歪んでいて頁はめくれないし、表紙の大樹もほとんど枯れ木で、
読めるのは裏表紙に書かれた魔導書の解説のみでした。
裏表紙には、魔導書の復活方法らしきものが書かれていました。

魔術師は、その魔導書に運命のようなものを感じて、
さっそく解説に記された通りのことを行うことにしました。
まず、魔導書を日当たりの良い場所に常に置くようにし、
回復魔法を唱え、湿った布で丁寧に拭きました。
すると、表紙の大樹が次第に若返っていきました。

これは復活の兆しだと、魔術師は喜びます。
そして、自作の温室に魔導書を置くなど、
さらに献身的に魔導書のお世話を始めるようになります。
魔術師の努力の甲斐あって、魔導書は息を吹き返しました。
魔術師は喜び、さっそく魔導書を開きます。

ですが、復活した魔導書は、どの頁を開いても真っ白でした。
書いてあったはずの呪文の数々も、その痕跡すらありません。
裏表紙をめくると、こんなことが書いてあったそうです。
「あなたのおかげで、魔導書は生まれ変わりました！」
――それじゃ意味ねーよと、魔術師は叫んだそうです。



赤ずきん/
Luxury

# 暴力の金欲槌

【打撃】ぼうりょくのきんよくつい

アンキ：お金ガ山ほどアッタラ何したいデスか？
赤ずきん：くれるの！？　ちょうだい！　そのお金でいっぱいあそぼう！

ギシン：デハ、もし赤ずきんがお金をもらったら我々にクダサイ！　お金を賞金にシテ、コロシアムを開きましョウ！

赤ずきん：いいよ！　強い人が沢山集まりそうです！　お友達できるかなー？

アンキ：エエ、きっとデキマスヨ！　そして我々はコロシアムにBet機能を付けて更にお金ヲ……

# 束縛の金欲槍

【長柄】そくばくのきんよくそう

ギシン：お金ガ山ほどアッタラ何したいデスか？

アリス：特にやりたいことはない。私が欲しいものはお金では手に入らないものだから。

アンキ：ジャア、その時は我々にクダサイ！

アリス：それは嫌……

# 鉄の呪剣



鉄塊と重石、似てる。
組み合わせると撲殺又は土木作業に便利。

鉄さびと血の臭い、似てる。
血の臭いに鉄さびの臭いを混ぜると、無色酸性の即死級有毒物質に変わるので注意。

鉄道と馬車、似てる。
どちらも人とウサギをひき殺せる。

磁石に引き寄せられた砂鉄と爆ぜた頭、似てる。
爆ぜた頭の中に砂鉄を詰め込んで縫いあわせると、第77人格が復活すると言われている。

# ジャッジメント



神は杖を振りかざし、人間に宣告した。「汝らまとめて有罪だ！」と。
「無罪にして下さい！」と、人間の代表は額を地面に擦りつけ、許しをこうた。

「原罪をなくせば、世の中の悪や犯罪は半分以下になるでしょう」
人間の代表の言葉を聞き、神は思案し、こう云った。
「悪くない考えだ。では、人間から性別を取り上げよう」

全世界の人々は雌雄両性体となった。
どうやって子孫を作るかと言えば、やはり性行為の結果だ。
お互い汗だくになって抱き合い、ひとつに溶け合うのである。

性行為の末、子供が産まれるわけだが、それには当然母胎が必要だ。
さて、どっちが妊娠するのか。
それは――運の悪い方だ。運の悪い方が妊娠し、苦しい思いをする。
ジャッジメントの時、来たれり。

# 卑劣の金欲笛



アンキ：お金ガ山ほどアッタラ何したいデスか？

シンデレラ：それを元手に一国のお金の流れを支配できるような仕組みをつくって金儲けしてやるよ。

ギシン：そしてソレを元手に……

シンデレラ：まあ、すでに同じことをしている奴等から目を付けられそうだからやらないけどね……あくまで今のところは、ね。

# 無限薬莢



【①二日での発砲例：パン屋の息子レイモンド】
ばんばんばーん、ばんばんばばばーん！
弟ばっかりひいきするおかあさんなんか、こうしてやるんだもーんっ！
ばばばばーん！
あっはははははーっ！　おめめにあながあいちゃって、ヘンなかおー！

【②八日での発砲例：愛多き図書館司書ネーナ】
たまに仕事から早く帰ってきてみれば、他の女を引っ張り込んでるわけね。
もういいわ、あなたには愛想が尽きたから。
というわけで、バンバンババババーン！
きゃはははーっ、飛び散る薬莢より激しく踊り狂いなさい！

【③四日での発砲例：チェス好きの老人マティス】
バンバンバン、バババババン！　我撃つ、故に我有りじゃァ！
ヒャッハー、もうワシは誰にも止められんぞい！
ババババババン、バンバンバンバン！
若い女を抱くより全然良すぎて、股間の銃もババババンと炸裂しそうじゃわい！

【学者ジェディーノの学術論文】
無限に弾丸を撃ち出す銃を与えた結果、人々が何日目でその銃をぶっ放すかを経過観察した。
二週間以上使わなかったケースは一例もなく、誰もが大小問わずなんらかの凶行に及んでいる。
銃は単なるきっかけに過ぎず、人の心にこそ無限薬莢が眠っていると小生は考える。

# 不可思議生物図鑑

かつて世界を滅ぼさんとした竜。
人、それを暴食竜と呼んだ。
ありとあらゆる生物を食し、
世界の生物の８割をその胃に収めた。

魔法による汚染で荒廃した世界。
その滅びが加速した。
自身の生存のためではなく、
喰らうために喰らう暴食竜によって。

残されし人類。
種族を越えて協力せん。
百の英雄豪傑、三日三晩の壮絶の激闘の末、
暴食竜を討伐せしめる。
生き残りしはわずか８人。

暴食竜、死したのち本へと戻った。本の作者、記す。
荒廃し滅んだのちも、
後世に生物の痕跡を残さんがため。
遺伝情報を採取する大規模魔術を行使したと。
世界を滅ぼしかけしは、憂いし者の絶望だった。

# 妖魔の魂
## （凶禍）



ヘルソニアン博物館には、古今東西、種々雑多な魂が展示されている。
人間、亜人、モンスターから昆虫に至るまで。

夜中になると魂どもは好き勝手飛び回り、べらべらと意味のない叫びをまき散らす。
夜中の博物館は無法地帯と化す。

ある日、ヘルソニアン博物館に神の魂が展示された。
神は夜中の博物館の無法地帯を遺憾に思い、秩序を回復させようと暴れる魂に一匹ずつ注意を行う。しかし誰も聞くものはない。

ついに神は怒り、大洪水をおこしてしまう。博物館の魂は残らず下水溝に流されてしまった。
博物館は夜中になると外側から施錠され、中から開けることは叶わない。
当の神も自分が起こした洪水に巻き込まれ下水溝に吸い込まれた。

# 応報の棍棒
## （凶禍）

【打撃】おうほうのこんぼう（きょうか）

その棍棒を手にするものは殴ったら必ず殴り返された。
殺したら必ず殺しかえされた。
故に男はその棍棒を、言葉巧みに操り近くにいた者に持たせた。

男の敵と、棍棒を持った者が共倒れとなり、生き残った男は、幾多の魔物や戦士を討ち果たした勇者として、やがて天下にその名を馳せるようになった。

男は名声とそれにともなう富を手に入れもはや故意に敵を作り、戦う必要がなくなった。戦っていたのは自分ではなかったが、それは彼以外、誰も知らない事だった。
戦いをやめた余生を享楽的に過ごし、彼は穏やかで平和な往生を遂げた。

そして男の目は再び開いた。
彼の前に立っていたのは……彼が最初に棍棒を握らせた相手だった。彼は次の瞬間、棍棒から繰り出された強烈な一撃とその痛みを喰らった、と同時に彼の腕は自動的に動いて相手を打ち倒した。
そして苦しみの中でのたうちまわった後……再び死んだ。
目を開くとその前には、二番目に棍棒を持たせた相手がいた。

# 闇鴉の詛呪

## (凶禍)



背骨が曲がり、醜悪な面相のワシは、どこへ行っても鼻つまみ者だった。
スリで生計を立てつつ、馬よりも速く走る脚力と、音を立てずに動く術を学んだ。
ある日、盗みを働くのに失敗し、処刑場に連行された。
が、そこに現れたお館様はワシの縄を解いて下さったんじゃ。

誰からも嫌われたワシを、お館様は取り立てて下さった。
ワシはお館様直属の隠密「闇鴉」となり、あちこちで敵の機密を盗んではお館様に勝利をもたらした。
お館様最大の好敵手である敵将が攻め寄せてきた際も、危険を冒して敵陣へ忍び込んだんじゃ。

だが訓練の行き届いた兵士を出し抜くことはできず、ワシは手傷を負い、命からがら逃げ帰った。
が、戻った時、お館様は愛妾と戯れながらこんなことを言っていた。
「あの闇鴉は死地に追いやった。ヤツも知りすぎたしな。甘い言葉をかけてやったら命がけで働いたし、いい拾い物だった」

失意のワシはお館様の元を去り、田舎で百姓をした。
その後、戦に大敗したお館様が近くまで落ち延びてきた。
「この先どっちの道へ行けば安全か?」と聞かれ、ほっかむりを被ったワシは「あちらですよ」と一方を指さした。
お館様は馬を飛ばして駆けていった——底なし沼がある方へ。

# 報復の銃
## （凶禍）



ねえあなた、聞いて！
私が夕食を作っていると、外から銃弾が撃ち込まれたのよ！
この通り、窓がひび割れてて、壁にも穴があいてるでしょ？
まあまあどうしましょう！　私、怖くて眠れないわ！

ねえねえあなた、大変なのよ！　私、また狙われちゃったの。
公文書館でお仕事をしている時、外から銃が撃ち込まれたんだから！
ほら、これが証拠の弾丸！
あなた、早く何とかしてちょうだい！

あなた、聞いてちょうだい！
玄関先をお掃除してたら、またしても銃で狙われたの！
ポーチが少しひび割れて黒ずんでいるのは、銃弾が掠めたせいよ。
私、怖いわ！　ねえ、私を助けてくれるわよね！？

ええ、夫を殺したのは私よ。
あれだけ助けを求めたのに無視し続けたから、報復に銃で脳みそを吹っ飛ばしたの。
えっ、自作自演の銃撃事件で周囲を騒がせた余罪もあるですって？
夫が不貞を働いた事こそが問題で、私は当然の報いを下しただけでしょ！？
私を無罪放免にしなさいよ、さあ早く！

# 不死鳥の魔書
## （凶禍）



この世界に誕生した不死鳥は生きている間、人間と関わりあう。

不死鳥に選ばれた人間の世界は、不死鳥に出会わなかった場合の世界と比べて、その人生は大きく変わる。

不死鳥と出会った人間は世界を変える駒として運命づけられるのだ。そしてその者自身の運命は時に狂わされ、結末は本人にとって幸福なものになるとは限らない。

幾多の人間に関わった不死鳥は祭壇へと向かう。そしてそこで自ら起こした炎の中で焼け死ぬ。
その灰の中から新たなる不死鳥が誕生し、再び祭壇から世界へと飛びたつのだった……。

# 惨禍の予兆
## （凶禍）



その少年は変わり者なことで知られていた。
物心つく前に空を見て以来、空に浮かぶ雲や大陽、星が落ちてくることを本気で恐れ、地下室から出ようとしなかったのだ。

少年の家は軍人の家系で、両親共にとても厳格な人物だった。
地下室で震えるばかりの息子に「もうお前とは縁を切る！」と宣言し、地下室と地上を繋ぐ梯子を上に引き揚げてしまったのである。

地下室には食糧も水も揃っており、息子は何不自由なく数年間を過ごした。
やがて外の世界に興味を持ち始めたが、恐怖心が勝った。
そして思いつく。惨禍の予兆を知ることができれば危険はないと。
彼は地下の書庫で一年以上かけ、学術書を読んだ。

「そうか、惨禍の予兆なんてないんだ！　重力があるから空は墜ちてこないんだもの！」
快哉を叫んだ瞬間、轟音が響き、少年は押し潰されてしまう。
地上の両親は息子に絶望して家を爆破し、壮絶な自殺を遂げ、地下室も惨禍に巻き込まれたのだった。

# 憤果の器
## （凶禍）



これはある薬師の話。
貧しかった男は、山野の草を食べ生きた。
そのおかげか薬草の知識が身についた。
彼は欲に塗れた世界で、腐ることなく、
その薬草の知識で人々を救い続けた。

その行いに神々は大いに喜ぶ。
男を神々の晩餐に喚んだ。
神々の饗応に男は涙を流し感激し、
一層の世界への奉仕を約束した。
変わり男は晩餐に使われた食器を所望し認められた。

男が得たのはサモワール。
だが男は茶の席に縁のない底辺の男。
茶の湯を沸かすサモワールを、薬の調合に使った。
神の茶器に不思議な力があり、男の薬は、
その効果が何倍にもなった。

男はこれに気づき、ある特効薬を作ろうとした。
死に至る熱病。それを殺す薬。あらゆる菌を滅す薬。
男はその薬を大量に投与し……稀代の大量殺戮を為した。
神器は魔王の器とされ封印された。

科学振興協会発行　基礎科学の勧め

# 悪夢の響き
## （凶禍）

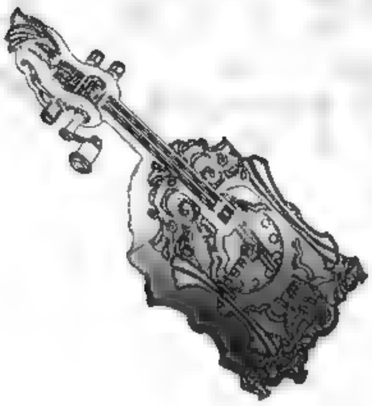


それは、周囲の音を録音する事が出来る機械だった。しかし実験段階だったため、その録音した音を聞くための技術は開発されていなかった。
だが時折、その機械からは聞こえるはずのない音が響いた。

それは、命が尽きてもうこの世にはいない者たちがいる世界の音だといわれていた。

その音は、聞くものに自らの死後の成り行きに対する恐怖を想像させ、悪夢を見せた。

悪夢の中で、夢の外同様、機械は鳴り響き続けていた。
そして部屋が、世界が、死後の悪夢で満たされていった……。



# 王妃の遺物
## （凶禍）



お顔が醜い王妃様。
王様とは　政略結婚で
離れの塔には　王様の愛人がたぁっぷり。
王妃様は　毎日毎日　醜いお顔で泣いている。

王妃様の　心の拠り所は
故郷から持ってきたヴァイオリン。
弾く曲は　物悲しいものばかり。
けれど　お顔からは想像もできないほど
美しい音色を生み出すそうな。

だけど　ヴァイオリンはなくなった。
お出かけした王妃様が　お城に戻ったら消えていた。
離れの塔からはヴァイオリンの音色。
王様と愛人達の　賑やかな笑い声。

一夜明けて　メイドの悲鳴がお城に響く。
離れの塔では　王様と愛人達が死んでいて
血飛沫を浴びた王妃様が
ヴァイオリンにもたれて　自刃していたんだって。
醜いお顔がその時ばかりは　多少は安らかだったそうな。

# 忌音の提琴
## （凶禍）



その女は貴族階級の子女だったが勃発した革命時に民衆に捕まり家族と共に斬首された。女は提琴を愛用していたがそれは他の貴族の所有物同様民衆に略奪された。時は流れ古道具屋の主人が言った。それを所有していたのは「忌まわしい女」だと言われている、と。迷信など信じない男が提琴を買った。

男は提琴を演奏した。
その晩、目を覚ますと人の気配があった。床から出て家の中を歩き回ったが誰もいない。床に戻ろうと男が振り向くと忌まわしい女が彼の背後にいた。忌まわしい女が口を開いた。

からからからからから……

その音が女の口腔の奥から聞こえてきた。漆黒の闇のような口腔。あたかも奈落へと通じているかのような。そこから忌まわしい音が……。

# 宰相の脳
## （凶禍）



政治にも軍才にも優れたその宰相は、主君を補佐し、たった数年で自領を数倍に拡張した。
あまりにも水際立った手腕ゆえ、「かの宰相、脳に一万人の知恵袋を住まわすものなり」と噂されていた。

宰相が設立した無償の学問所に、貧民の子供たちが集まった。
ある日宰相はそこを慰問し、子供たちに学問の手ほどきをした。
その際、足が不自由な男の子を見て、「これを使え」と杖を授けた。
男の子は感激し、「ぼく、宰相さまみたいになる！」と誓った。

男の子は真剣に勉学に励んだがまったく芽が出ず、友人たちは次々と立身出世を遂げていった。
学問が伸び悩む一方、図体だけはどんどん大きく育っていった。
だが足が不自由な身では、武官職に就くこともできない。
「僕と宰相さまと、何が違っているんだ…！？」と彼は悲嘆した。

ある日、宰相の私邸で、脳を引り抜かれた無残な死体が発見された。
誰であろう、他ならぬ宰相だった。
「脳を…、移し替えるんだ。僕の脳を、宰相さまのものに取り替えれば…」
下手人の青年は、死刑執行直前までそう呟き続けていたという。

# 愚金の杖
## （凶禍）



制作報告0001
帝国が秘匿せし愚金の杖の製造情報を入手。
重層暗号化処理を施されたため、
第一級儀式魔導を使用。
機密機構そのものの破壊に成功。

制作報告0005
製造に必要な材質のうち、
もっとも重要な真の黄金の用意が不可能と判明。
製造情報資料に代替物質・愚者の金の記載がある。
こちらを使用し制作を続行する。

制作報告0254
試作機が完成。起動試験を実行し、成功。
本来の出力の7割を達成。
注意：研究員より疑問の声。真の黄金は生体素材。
愚者の黄金で、理論上は成功するはずがないとのこと。

制作報告0323
愚者の黄金は足りない要素、つまりは生体要素を、
周囲より自動で取り込み・融合。
当研究所の生物は9割が消失。
すべては帝国の謀略の可能性が……。

# 被虐のイコツ



幾億の犠牲の上に立ち、
キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界で君は何を叫ぶのダロウ。果たしてワラっテいるのデしょうカ？
正義の本質に気ヅキ、嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ慟哭ヲ、
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
彼らは拳を振り上げ、
私に向かって降り下ろします。
私はそれを止めることはできません。
ただ嬲られ、血を流すしかありません……
そこに逃げ場など無く。
私はただ休息を求めていた。
「ああ、こういうのも悪くありませんね」
最後に一つ、そう呟くと月下の麗人はその薄い瞼を閉じました……

Case2
「ああ、やはりまた……
こうなってしまったのですね……」
思い返せば、私の命が散るその瞬間は、いつも満ちた月が不気味なくらいに紅かった。
ですが、それさえ分かれば良いのです。
次こそは、きっと……

Case 3
「貴方をお待ちしておりました。
――さあ、いらして下さいな」
黒衣の集団を誘うように、
月の姫は嫋やかに手招きます。
「散々待たせたからには、楽しませて下さいね？」
その瞳に宿る穏やかな光は、強者との戦いに
胸を踊らせる純粋な感情とは異なる……
ささやかな祈りが込められていました。

赤ずきん

# 暴力のキンソク

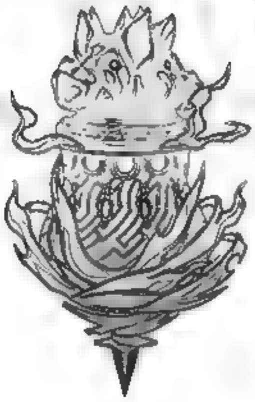


幾万のシカバネの上で、
キミの悲願は成就スル。
2人キリの孤独ナ世界でキミは何を願うダロウ。
果たしてワラっテいるのデしょうカ？
全テ無駄なコトだったと嘆くのデショウか？
最後ノ瞬間に貴方が叫ぶ本心ヲ
私タチは幾度も見てキマシタ。
………………
…………
……

Case1
「強いひとだけが、ほめられる世界なんて……
そんなのつまらないです！！」
紅き外套は、血しぶきの中を縫うように泳ぐ。
黒く光る大槌を振り下ろし、
銀色に輝く瞳を躍らせながら。
「そんな世界では僕のお友達はいっぱい、いっぱい死んじゃいます。
それだと困るんです！
だって……だってそれじゃあ、
僕に大切なことを教えてくれた人たちは……
かわいそうじゃないですか！！！」

紅き月を飲み込む、巨大な獣の咆哮。
崩れゆく世界と、溶け合う想い。
それはかつて夢見た憧憬の地。
そして異なる意味を持つ世界の在り方。
最果ての地で始まる世界の胎動。
――終末を告げる汽笛が鳴り響く。

Case 2
少女が望む永遠の遊びは成就する。
彼女がその夢の先で目にしたものは……
真っ赤に染まった、自分の胎内であった。
「オオカミさ～ん。僕はここに……
います。
だからはやく、僕を見つけて……
一人はもう……いや、なんです」



# 暴食の黒駒

目を瞑っても。耳を塞いでも。声が聞こえる。

あの日の私の失敗を、追及する声が。

ごめんなさい。私、悪い子だったね。
次はちゃんとするから。言われた事をちゃんと守るから。

だから、ねぇ。
こんなつらい思いは、もうしないでも……
いいんだよね？

# 傲慢ノ禍剣
## （ウラウチ）



全ての座が埋まる刻。

理の外に偽りの明星が灯り、

虚無より昏き闇から異形が生まれる。

人々はそれを畏怖し、〝　〟とナヅケタ。

# 失墜の短剣

【刀剣】しっついのたんけん

その若者は勉学で身を立て、宮中で働く事を許された。
見目良く温厚で、誰にでも優しい彼はたちまち異性の関心を集め、貴族の姫君から熱心に言い寄られるも、「国に身命を捧げると誓った身ゆえ、家庭は持たぬ所存」とあっさり袖にしてしまう。

清廉潔白かつ剛毅な若者はどんどん出世していく。
新年の祝宴。庭へ出た彼は、酒精の匂いと共に、柔らかい感触にしがみつかれた。
目の前にいるのは、かつて言い寄ってきた貴族の姫君だった。
遠慮がちに笑み、体を引き剥がす彼を見て、彼女は切なそうな表情と共に去っていった。

胸を痛めつつ、彼女を見送った若者は、手紙が落ちている事に気づいた。
拾い上げ、目を通し、驚きに打たれる。それは大臣の手紙で、あの貴族の姫を脅して肉体の関係を持ち、今夜も彼女を呼び出している事が書かれていたのだ。
「なんと汚らわしい、やめさせねば！」
若者は義憤に駆られ、呼び出し先の一室へ赴いた。

「何者です！？」と誰何され、若者は絶句する。
その一室は王妃の着替えの間で、王妃は着替えの真っ最中だった。
身体検査の結果、彼の懐から、彼自身携行していた覚えのない短剣が見つかる。
そう、彼を深く恨んでいる姫君はしがみつくフリをして短剣を懐に入れた上、偽手紙を落としたのだ。
一瞬で名誉を失墜させられた彼は失意のうちに国を去ったという。

# (呪)天使の傲慢

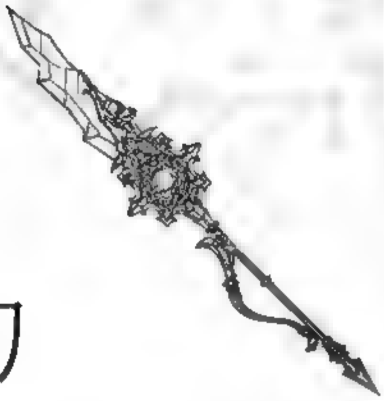


その少女はお世辞にも美人とは言えなかったが、とても敬虔で心清らかだった。ある晩、その枕元に刀を手にした天使が降り立ち、心の美しさそのままの美貌を授けた。

絶世の美少女となった彼女の前に男達が跪き、口々に愛を囁いた。
はじめ彼女は戸惑っていたが、彼らが本気で自分の為に何でもしてくれる事を悟り、遠慮なく用事を言いつけ始めた。

彼女の部屋は、男達からの高価な贈り物で足の踏み場もないほどとなった。
周囲の人達は次第に彼女の陰口を叩き始めた。
「天使のような美貌を授かった彼女はすっかり傲慢に成り果てた」と。

彼女の元に貧しい子供達からの感謝の手紙が次々に届く。そう、彼女は清き心を失っておらず、贈り物を孤児院に寄付していたのだ。
求婚者達から搾取し、恵まれない子を救う行為は「天使の傲慢」という故事成語として今日に伝わっている。



# （呪）波鍛冶の薙刀



海辺の村に鍛冶を営む一家が住んでいた。
家族たちは篤実忠良だったが、跡継ぎの長男は怠け者で、「詩で身を立てるんだ」と言っていた。
その日、彼は仕事をサボって昼間から酔っ払う。そして浜辺を歩きながら即興の詩を口ずさんだ。

波にたゆたい、俺は夢を見る。
海底に封じられていた原初の魔物が地上に押し寄せ、世界を壊滅に追い込む。
俺は薙刀を打ち、勇者に託す。勇者はその得物を扱い、魔物を討ち滅ぼす——
そう詠んだところで、跡継ぎは天啓に打たれる。
「今の詩こそ、俺が辿るべき運命なのか！」

跡継ぎは取り憑かれたかのように鍛冶の仕事に打ち込むようになった。
家族も次第に彼を認めるようになり、鍛冶の奥義を伝授した。
彼は額に汗して働きつつ、ジッと待つ。自分が勇者に薙刀を打ち、世界平和の陰の立て役者となる日を——

……魚に囓られて顔が崩れていても、あっしは親です。息子の顔を見分けられないはずがありやせん。
まったく、昼間っから酒をかっ喰らったあげく、舟遊びで溺死だなんて。
どこで育て方を間違えたのやら。
あの世で反省したら生まれ変わって、誰かのために武器を打ってほしいもんです、はい。

# (呪)颶風の短銃

【射出】(じゅ)ぐふうのたんじゅう

ご報告いたします、〈颶風の短銃〉がこの都に入ったという知らせが届きました。
性別、年齢、出身、主義主張、すべてが謎に包まれた凄腕の暗殺者たるヤツに狙われては、御主人様のお命が危うい。
こちらも凄腕の護衛を雇い入れる必要がありますかと。
人選は私にお任せあれ。

なるほど、あなたが依頼主を完全に守り切ると名高い〈護衛人〉ですか。
甘いですね。あなた、実は〈颶風の短銃〉でしょう？
何食わぬ顔で御主人様の懐に潜り込み、命を奪うつもりだったのでしょうが、そうはいきません。
覚悟してもらいましょうか！

くっ…！　どういうことでしょう、〈颶風の短銃〉は始末したはずなのに！
いったい誰がこの屋敷に襲撃を仕掛けているというのです！？
御主人様、こちらに秘密の抜け穴があります！　お逃げください！

監禁から解き放たれてみれば……あなたたち、一体何をやっているの！
夫ならだいぶ前に殺されて、〈颶風の短銃〉があの人のフリをしていたのよ！
屋敷の襲撃？　そんなもの、時間差で爆薬を爆発させるとかの自作自演に決まってるじゃない！
ああ…、なんてこと！　金庫の中身も何もかもが盗み出されてしまっているわ…！

# (呪)滝壺の歌声

男が一人、絶望の果てに辿り着いた崖で
大滝の底を見つめていたら
鳥肌が立つほどに美しい歌声が聞こえてきた。

『ようこそ花婿様
眼下に広がる水の都へおいでなさい
愛らしい花嫁が待っているわ
私の冷たい腕に抱かれて
水底の深く深くへ沈みましょう』

「美しい花嫁というのはあなたのことだろうか?
俺は元々死ぬ気でここにやって来たから
滝壺に身を投げることは一向に構わないが
自分で自分を愛らしいとか言う女は苦手である」

男が叫ぶと歌声は途切れ
『下等な人間風情が文句つけてんじゃねぇよ』
そんな捨て台詞と共に舌打ちが響いた。
男は、罵られると興奮する性質だったので
喜び勇んで身を投げたのだった。めでたしめでたし。

# （呪）高尚な毒薬



男は、彼を負かした商売仇になかば逆恨みで、闇市で手に入れた毒を飲ませた。その毒は高度な技術で調合されたもので、毒が用いられた痕跡が被害者の肉体に残らないのだという触れ込みだった。

ゆっくりと効いてくる毒だとは聞いていた。だが三年たっても商売仇は死ななかった。だんだん身体の調子が悪くなってきているという風にもまったく見えなかった。

騙されたのだと思った男は頭にきて自分でその毒を飲んでみた。案の上何も起こらず、男はそれを高い金を出して買ったことが馬鹿らしくなった。それから二年後。男は突然亡くなり、直前までは誰が見ても健康だったため家族や知人に不思議がられた。

それは栄養たっぷりの食事をしている貴族に効く毒だった。裕福ではないものの健康に気を使い栄養のある食事を心掛けていた男には毒が効いた。使った相手は質の低い酒や安さだけが売りの肉を食べていた。質の悪い油や酒精が毒に作用し毒は中和された。男の商売仇は大変長生きしたとの事である……。

# (呪)戦神の竪琴

勇敢な部下達を率いていると評判の傭兵隊長がいた。
彼の部隊の兵士達は、己の命など惜しくないかのように勇敢に戦った。その犠牲はすさまじかったが、戦果もまたはなばなしいものであった。
世間知らずの情熱をもった若者が、その傭兵隊長のもとで戦いたいと彼の部隊に志願した。

若者は迎え入れられ、間もなくして戦場へと向かうことになった。
傭兵隊長の部下達は噂通り、血みどろになりながらも勇猛果敢に突撃していった。その光景を見た若者は、自分が志願した事を後悔していたが、もう遅かった。

若者は指示されていた耳栓を外した。
楽士たちによる竪琴の弦がつまびかれた。
戦場には若者が片思いをしていた少女がいた。
彼は少女がそこにいることを不思議に思うこともなく、敵を斬りながら、彼女の元へ走った。

そして、敵の一太刀を受け絶命した。
若者の周りでは、彼と同じように世間知らずの若者達が、竪琴の音色によって作りだされた、実在しない報償を得ようと突撃を続けていた。
その戦いで傭兵隊長はまたもや大きな戦果をおさめ、名声は更に高まったのだった。

# （呪）冥途の予言



【霊媒師フィナンシェ】
ワシは冥途に憩う神霊たちから予言を聞き、悩める人を救っている。
霊媒には神木で作った杖を燃やす必要があるので、それに見合った相談料を設定させてもらっておる。
神木はどこにあるのかと？　それは門外不出の情報じゃ。

【容疑者アルフォンソ】
あの霊媒師、言ったんだ。オレには富が約束されてるって。
で、全財産を注ぎ込んで博打を打ったのに、ひと晩でオケラだ。
ハラが立ったからブッ殺して、神木の杖とやらの燃えカスを撒き散らしてやったんだよ！
ケムいのを吸い込んじまったぜ。

【アルフォンソの妻ミア】
あの人と面会に行くたび、牢番の方の態度が丁重になるんです。
あの人、言ってました。霊媒師の人を手に掛けて以来、死んだ人と会話できるようになったと。
私の死んだ母とも話せるとかで、私と母しか知らないことも口にしてました。

【霊媒師の弟子志願ラニ】
あの、あなたが霊媒師アルフォンソ様ですね？
僕、冥途の予言を伝えられるようになりたいんです、弟子にして下さい！
えっ、だったら神木を探し当てた方がいい？
もー、真剣に頼んでるんですから、そんなこと言わないでっ！

# (呪)不死翼の燃斧



世の中、すべて生まれで決まる。
貴族は貴族として豊かな暮らしをし、奴隷は奴隷として一生虐げられるのだ。
が、その奴隷斧闘士は、そんな世の在り方を疑問視していた。
看守の目を盗み、奴隷斧闘士は同じ身分の者たちと語り合った。

皇帝天覧の元での奴隷戦士団同士の対決にかこつけ、一斉に皇帝めがけて突進。
皇帝を人質に取ることに成功する。
「朕を解放しろ、奴隷制度を廃止してやる!」
奴隷斧闘士は皇帝の哀願に耳を貸した。が、皇帝は約束を破り、兵士に命じて彼らを捕らえさせたのである。

怒りに燃える皇帝は奴隷斧闘士を磔にし、油を浴びせた。
松明に火を灯し、油に引火させる。
「奴隷たちに自由を!」斧闘士は叫びつつ、焼死。
公開処刑に詰めかけた人達は身じろぎひとつせず、その死に様を見守った。

その後、人々の間に議論が起き始めた。
奴隷制度廃止を唱える者が現れ、あちこちに飛び火。
五年経ち、思慮と良識を身に付けた皇帝は奴隷制度廃止を決定。一人の斧闘士から始まったこの奇跡は後世に〝不死翼の燃斧〟という呼称で伝わることとなる。

『ラプンツェル/クレリック』

# 純潔の治杖

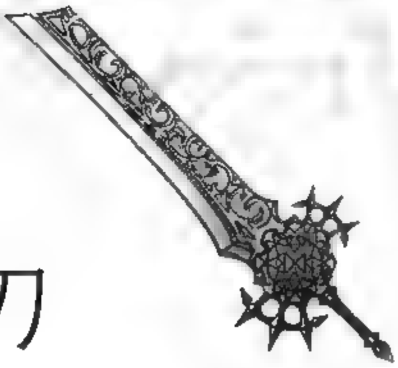


王子様のような優しい男の人は、私にとって特別です。泥だらけだった私を見つけてくれて、磨きあげてくれたのだから。

誰の目にも止まらない、泥だらけの石ころだった私を見つけてくれて、優しく優しく磨き上げてくれたのだから。

だから、その恩に報いたいと思うのです。
「僕が見つけたんだよ」と、自慢したくなるような私になりたいのです。

受けた恩は倍返し、しちゃいます！



# 慈悲なき暴風の刀

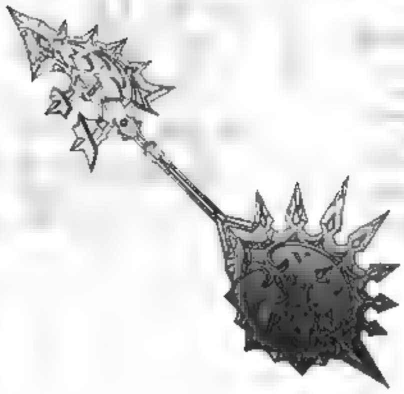


教養深く徳の高い僧侶が山野で修行しており、弟子を希望してやってくる者たちを受け入れ、教えを授けていた。
ある日、一人の男がやってきて、こう言った。
「暴力への志向を抑えられないのです。私は救われるでしょうか？」と。

他の者と分け隔てなどせず、僧侶は男を受け入れ、弟子の一人とした。
が、男は次々に問題を起こした。他の弟子に暴力を振るうばかりか、それを止めようとする師匠にさえ手をあげたのだ。

暴力沙汰は繰り返し起き、他の弟子たちはみんな去り、僧侶も全身傷だらけになってしまった。
僧侶は言った。「お前は一身すなわち暴力だ。なら、その力で世界にはびこる戦争を滅ぼせ。その時に暴力への志向も滅びよう」

男は傭兵稼業に身を投じて慈悲なき暴風の刀を振り回し、遂にすべての戦争を終わらせた。
その時、やっと彼はいくらかおとなしくなりかかる。
そこで、ずっと彼のために深い祈祷を続けていた僧侶の願いが結実し、彼は存在そのものを解かれ、この世から消え去ったのだった。



# 蛋白石の矛



その男は国で並ぶ者なき槍の使い手だった。
「かの天下無双の勇士ある限り、我が国は盤石なり」と王は彼を讃えた。

その男は義理人情を重んじ、弱きを扶けて強きを挫いた。
「かの忠勇義烈の壮士ある限り、義侠の心は死なず」と彼の友は言った。

が、その男は大変な締まり屋で、自分の価値観にそぐわないことには金を出し惜しみしたという。
「あの一毛不抜のドケチのお陰で、まともな服ひとつ買えやしない」と彼の妻は吐き捨てた。

そしてその男には変わった性癖があり、普通の行為では満足できなかったらしい。
「あの変態のお陰で未知の官能が味わえたよ」と商売女は笑った。
――と、いろんな面を持ちすぎたが故に「蛋白石の矛」という二つ名を授かったのだと後世の学者は分析している。

# 学徒の軌跡



問：どうして空は青いの？
解：太陽の光は様々な色が混ざり合って出来ており、
空気に当たるとそれぞれが散乱するが、
青色は他色に比べて強く散乱し、人の目によく届くため。

問：人はどうして生きるの？
解：あらゆる生物にとって自己の生存と種の繁栄は
基本的に本能と結びつけられているものであり、
そこに意味を見出そうとするのは人間特有の現象である。
従って絶対的な解は存在せず、回答は多岐に渡る。

問：愛ってなんですか？
解：ドーパミン、ノルアドレナリン、セロトニンなどの
神経伝達物質のレベル変化により引き起こされる、
多幸感や強迫観念、激しい動悸や情欲といった症状を
内包する状態の名称である。

問：幸せですか？
解：ふざけんなよ。よく学んで知識をつければ将来は
安泰で幸せになれるって言われて頑張ってきたのに、
好きだった彼女に会話がキモいって言われた。
調子に乗りやがって。死んじまえ。

『ピノキオ/』
『メイジ』

# 依存の魔具

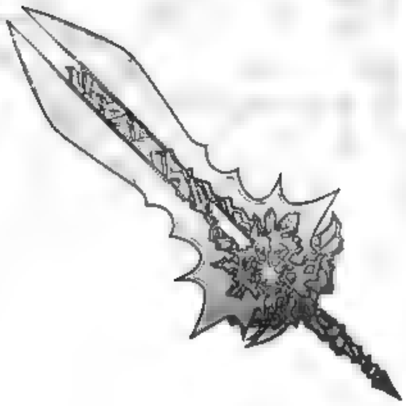
【魔具】いぞんのまぐ

「これは僕と君との共犯だよ」
耳元でささやかれたその甘い響きに、背筋がぞくりとわなないた。

「ひ、酷いじゃないですか。僕はただ……貴方に命じられたから……」
いつも口にしてきた言葉が零れ落ちるが、そこに秘められた感情はいつもと少し異なるものだった。

「次の命令が欲しいという顔をしているね？　……悪い子だ」
そういって僕の髪をすくように撫でると、彼は鉄のように冷たい声音で、次の命令を口にする。

――ああ、そうか。僕はこうするために生まれてきたのか。大きな安堵が僕の胸を埋め尽くしたことを感じながら、僕は小さくうなずいた。



# 傲慢ノ血剣
## (カゲウチ)



人の心は不安定だと思い知ったのは、あの獅子との出会いが始まりだった。

救った人間達が剣を取り、私を糾弾するこの状況を作り上げたのは……他でもない。私自身の傲慢が招いた結果であった。

「たったこれだけの人数で私に牙を剥くとは……随分と見くびられたものだな」
裏切り者たちを断罪するため、すでに赤く染まった剣を取る。

救いたいという衝動は、なんと美しく傲慢な感情なのだろう。
今なお胸に燃ゆる炎に身をゆだねながら、私は血だまりの中を縫うように歩いた——

# 毒華の息吹



見目麗しき令嬢は庭に薔薇園を持ち、凄腕の庭師に管理させていた。
令嬢の父親は出世欲に駆られ、時の皇帝に娘を差し出した。
彼女は粛々と受け入れ、「女としての戦いを貫いて参ります」と言い、庭師を伴って後宮へ入った。

時の皇帝は恐るべき獣欲の持ち主で、後宮に百人を越える愛妾を囲っていた。そんなある日、一番の寵愛を受けていた愛妾が変死を遂げる。それを皮切りに、寵愛の深かった順から次々に妾が死んでいった。

傷心の皇帝に令嬢はみずから近づき、男子を出産する。
皇帝は大いに喜び、その子を皇太子とした。
だが、思わぬ事態が起こる。長らく夫と関係が冷えていた皇妃が孕み、男子を産んだのだ。

皇族しか立ち入れぬ薔薇園に忍び込んだ罪で、令嬢の庭師が捕まる。
彼は令嬢の意を受け、薔薇園に毒を撒いて愛妾たちを毒殺し、今度は皇妃とその赤ん坊を殺そうとしていたのだ。
彼は沈黙を貫き、奥歯に仕込んだ毒を含んで地獄へ堕ちたのだった。

# 守り人の呼笛



王国を脅威が襲った。
それは現王国政府を打倒しようとする、怒れる民衆の武装蜂起だった。その中には、民衆に味方する元正規軍反乱部隊も含まれていた。

王国の巫女は笛を吹いた。
巫女の召来に応じて守り人はやってきた。
王城よりも巨大な守り人に反政府勢力は驚愕した。

反政府勢力側の魔術師は民衆に伝わる笛を吹いた。
すると、泥人形が巨大化し、民衆側の守り人となった。
双方の守り人同士は激突する。
しかし民衆側の守り人は奮闘したものの、王国の決戦兵器にはかなわなかった。
泥人形は倒れ元の泥に戻った。
戦いの主導権を得て、王国は反乱勢力を撃破していった。

王国に歯向かった者達への王の報復は、残虐で血も涙もない苛烈なものとなり、反乱勢力は壊滅しかけた。
だが、突如停止していた王国の守り人が再び動き出した。
守り人は反乱勢力ではなく王国の正規軍に襲いかかった。
その攻撃に正規軍は為す術もなく崩壊した。
民衆が突入し、陥落する王城を見守りながら、
守り人は倒れ、二度と起き上がることはなかった。

# 黒霧の灯

生まれた時から世界は黒い霧に閉ざされていた。
だからぼくは、どんより黒く濁った空しか知らない。
人々の暮らしは〈灯〉と共にある。それが煌々と輝く間、黒い霧は近づいてこないからだ。
黒い霧に飲み込まれると「帰ってこれなくなる」らしいけど、それ以外のことはわからない。

死んだおじいちゃんが言ってた。昔、世界に黒い霧はなく、空は青かったと。
だから、なぜこの世界が黒い霧に覆われたのかを知りたくなった。青い空を仰いでみたかった。
それである日とうとう思い立ち、〈灯〉を手に、黒い霧に分け入ったんだ。

黒い霧の奥を探索しては地図を描き、一度引き返してはまた霧に入り……
数年後、ぼくは研究所を発見した。
静まり返った建物内に一冊の日記があった。それを読むに、ここでは重要な研究が行われていたとのことだった。
人々が争いすぎて世界が疲弊したため、どうすれば諍いをなくせるのかを。

日記の最後のページには「絶対無二の答えを見つけた、実行に移す」と書いてあった。
これはぼくの憶測だが、あの黒い霧は集合的無意識か情報テクスチャで、かつての世界の人々の意識が溶け込んでいるのではないだろうか？
もっと色々学び、真相を解き明かしたいと思う。

# トウの剣



アコールの店へようこそ！　こちらの武器にご興味がおありですか？　こちらは遠い未来に「砂の国」と呼ばれる国を治めていた女性が持っていた武器です。あの時代は女性の統治者が多かったんですよね。

当時にしては本当に珍しい事でしたが、統治者としての性格は明るく朗らかだったそうです。砂の国は貧しかったらしいのですが、彼女の明るさで支えられていたのかもしれませんね。一方で、彼女は細腕にもかかわらず、かなりの力持ちだったそうです。一説によると岩を両断する程の腕力があったとか。

そんな彼女ですが、大変に美形な恋人がいたそうです。ちょっと頭が悪かったらしいのですが、二人は支え合い、貧しい国を一生懸命ささえていたとか……そりゃまあ、イケメンの恋人が居たら何でも支えられますよね。恋は全てを解決する。うん。

しかしどうやったら彼氏とか彼女とか出来るんでしょうか。長年武器商人をやっているので「また会いに来るから」と言ってくださる方も結構いらっしゃるんですが、結局お会い出来ないんですよね。その方の使っていた武器が戻ってくる事はよくあるんですけど。

©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# スリイの鋏



アコールの店へようこそ！　えーっと、こちらの武器ですか？　あ～うーん……いえ、あんまりこの武器を欲しがるお客様はいらっしゃらなくて少し動揺してしまいました。いえ、いいんです。いいんですけどね、なんというか、元々の持ち主が結構エキセントリックな方でして。

この武器を使っていたのは大昔に「森の国」という場所を統治していた女性です。彼女は類まれなる美貌の持ち主で、一部の国民からは絶大な信頼を得ていました。紫色の長い髪を持ち、この武器で適当に切っていたそうです。常に気怠げで、国の統治も殆ど放置状態だった……とも伝えられています。

普段は無気力な彼女ですが、唯一の趣味が「人形遊び」でした。ハサミで糸を切り、布をつなぎ合わせ、綿を詰め……薄暗い森の奥にあるお城の中で、一日中、一人で人形を作ってはそれを並べて遊んでいたとか。彼女の遊びは本気でした。その遊びを邪魔した者は、誰であれ無残に処刑される程に。

やがて彼女は普通の人形では満足出来なくなっていきました。もっとリアルで、もっと上質な素材に興味を持ち始めたのです。その先は語るもおぞましい展開に……とまあ、若干ホラーめいた噂があるんですよね。まあ、単なる噂ですけど。そういえば刃の部分に薄黒い血が付いてて何度洗ってもまた戻るんですよ……不思議ですよね。



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

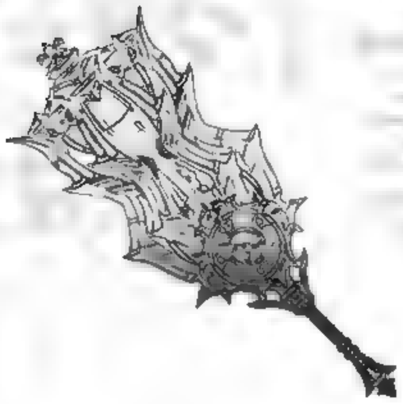
# 少女の悲愴
## （錬）

少女を好む剣がありました。
剣は特に絶望に暮れた少女を好んでおりました。
悲愴な顔をした少女の涙を見ると、
たまうなく興奮する性分でありました。

両親や兄弟に虐待され続けている少女。
祖国を滅ぼした敵国の王に犯された少女。
冤罪のため火刑に処されると決まった少女。
涙を流す彼女たちの前に
剣はどこからともなく現れて囁くのです。

楽になりたければ
私の切っ先で
自ら喉を貫けば良い

それは誑かしであり欺罔でありましたが
同時に希望であり救済でもありました。
果たして剣は善でしょうか悪でしょうか？
剣は己の欲を満たすため
今日も少女の悲愴を探し求めています。



# 不測の事態
（錬）

【打撃】ふそくのじたい（れん）

まったくもって不測の事態だった。口論の末、棍棒で妻を殴り殺してしまうなんて。
僕はこの年まで何ひとつ問題を起こさず、聖堂教会お抱えの工事長まで出世したんだ。こんな事で足をすくわれてたまるか！
何とかして妻の死体を隠蔽するしかない…！

重い死体を引きずり、地下のワイン蔵に隠した。
だが、またしても不測の事態が起き、
友人が不意に訪ねてきた。
「君、例の七十年ものを持ってるって言ったね？　私は五十年ものを持ってきたよ、今夜は飲み明かそうじゃないか」
追い返すヒマもなく、友人は家に上がり込んでしまった。

「君、奥さんはどうしたんだい？」と聞かれ、僕は愛想笑いを浮かべてごまかした。
その時、僕は不測の事態に気づく。妻を殴った際の血溜まりを綺麗に拭い切れておらず、死体をワイン蔵まで引きずった際の痕が残ってしまっている事を。
「おい君、まさか――」血相を変えた彼に最後まで言わせず、棍棒で脳天をガツンとやった。

夜中、僕は建設中の大聖堂へ赴き、細工を施した。
――数日後、大聖堂の落成式が行われた。枢機卿猊下が壇上に上がり、ミサを開いた。
が、地震が起きて壁のフレスコ画が割れ、奥壁に塗り込めていたはずの妻と友人の死体が落下し、枢機卿猊下を圧死させてしまったのである。
会場に立ち会い、一部始終を見ていた僕は天を仰ぐ。「なぜ、こうも不測の事態ばかり…」

# 摩回廊の射交
## （錬）

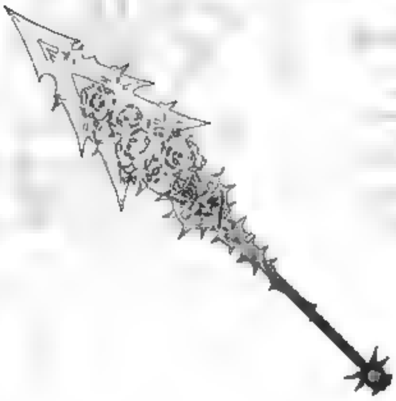


近隣に位置しあうその二つの都市国家は、互いに競っていた。
ただし、神に定められた協定により、武力を直接用いない形で。
一方が城壁を動物の形に改修して大自然の恵みに感謝すると、もう一方は城壁に絶えず篝火をくべ、その自然を焼き払う意志を示した。

煌々と燃える篝火の群れを見た最初の都市国家の人々は、水を湛えた甕をズラッと城壁上に並べ、水を以て火を制する意志を表した。
するともう一方は、甕を砕くための金突き棒をズラリと並べたのである。

一方の都市国家の人々は会議を開き､「何とかして相手の手の内を見透かさねば、いたずらに疲弊するだけだ」と結論。
天を摩す高い高い塔の建造に取りかかったのである。
それを見たもう一方は、すぐさま同じように高い高い塔の建造に取りかかり始めた。

「おのれ、真似するでない！」「そちらこそ！」
塔の上階で工事に取り組む者たち同士が口論を始めると、とうとうお互いの感情が爆発。作業を邪魔しようと弓を射かけ始め、壮絶な射撃合戦となる。
天上でそれを眺めていた神は協定を破った人間達に憤り、二条の落雷を以て二つの塔を砕いてしまったという。



# 死者の帰還
## (錬)

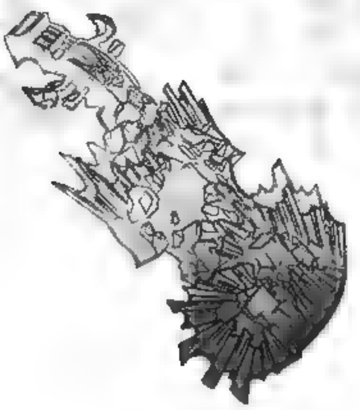
【長柄】ししゃのさかん(れん)

兄貴よ、明日の戦いも頑張ろうな！
えっ、イヤな予感がする、自分に何かあったら隊を頼むだって？　よせよ、縁起でもねえ。
隊が心配なら、這ってでも生き延びろってんだ。

チクショウ、友軍め！　まさかオレたちを裏切るなんて！
お…おい兄貴、どこへ行くんだよ？
えっ、早く隊をまとめて逃げろだって？
よせよ、いくらあんたでも無茶だ！
兄貴ぃぃぃぃーーーっ！！

兄貴、天国で元気にやってるか。
あれから一年、あんたが理想とした平等な国を作るために戦ってきた。
が、これまでだ。完全包囲され、もう為す術はない。
…と、その時。突然、敵陣の一角が浮き足立った。

縦横無尽に槍を振るい、敵兵を蹴散らすあの騎士は――兄貴だ！
崩れた一角めがけ、みんな一丸となって突撃し、なんとか虎口を脱出した。
が、誰に聞いても兄貴の姿なんて見てない、勝手に敵が同士討ちを始めたという。
でもオレは信じてる。あれは兄貴で、一時だけ帰還してくれたんだって。



# 嫉心の地響
（錬）

その男は金持ちだった。彼はこれみよがしなまでに、贅沢な暮らしをし、貧乏人をあざけった。
彼は多くの人間に嫉妬された。

男は血のにじむような努力をして一代でその財を成していた。
彼はもともとめぐまれない出自だった。そして彼と彼の亡き父母兄弟に冷たくした世の中をうらんでいた。

特定個人への妬みの力を結集させる事が出来れば強大な力となる。
彼は彼の手に入れた有り余る財力を使って、人々の嫉妬の心を集め当人たちにはねかえす事の出来る魔法の楽器、嫉心の地響を手に入れていた。

男は次々と他人の嫉妬をまねくようにふるまった。
やがて嫉心の地響は、嫉妬していたもの達全てに破滅をもたらした……。
男の血のにじむようなそれまでの努力は実を結んだ。

# 天幻の書
## (錬)

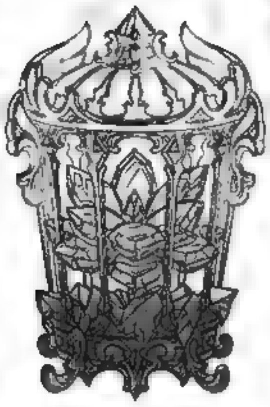


長うく製本を生業としてきた老人は
ある日頭上に美しい蝶が羽ばたくのを見つけた。

天の遣いかと見紛う程に美しく
神秘的な蝶に心惹かれた老人は
衝動のまま蝶に似せ
美しく見事な本を一冊作り上げた。

本は完成と同時に表紙を羽ばたかせ　空へと舞い上がった。
そこへあの美しい蝶がやってきて　羽ばたく本と戯れ
つがいのように仲良く彼方へと飛んでいった。

それ以来　老人が製本した本は不思議とよく売れた。
各地では　世にも美しい蝶と本が舞う姿を見たという者が
後を絶たず　彼らは軒並み小さな幸福を手に入れたことから
この国の本は蝶を模した形に製本されるのが
一般的になったという。



# 氷華の檻
## （錬）



彼女はいつまでも美しく氷の檻の中にいた。

男は、まだ動いて話すことが出来た頃の彼女に
「愛している」
といった。

女は、男のその言葉を信じた。

男が愛していたのは、その瞬間の彼女だった……。

# 縫い付く情念

（錬）



控えおろう、我こそは世に名高き聖女ピュセルの霊であるぞ！
男を知らぬ処女のまま名誉の戦死を遂げたのだ、どうだ参ったか！

わ…わかっているとも、いい歳して生娘なんて恥ずかしいって事を。
だが、何が何だか判らぬうちに聖女に祭り上げられ、ずっと夷狄と戦ってきたのだ！
恋愛なんてする暇がなかったのだ！

ああ…処女のまま死ぬなんて嫌だ嫌だ嫌だ。え、もう死んでるだろうって？
やかましいわっ！
なに、イイ男を紹介してくれるだと？　わ…わかった、地の果てまでも付いていくぞ！

おい、なんなんだこれは！
なにっ、精神的に死を遂げた聖騎士の肉体に私の魂を縫い付けただと？
確かに、滅多に見ないイイ男だが…こんなのがあってたまるか、元に戻せっ！

# ファイブの槍



アコールの店へようこそ！　こちらは「海の国」を治めていた女性が携えていた槍になります。使われていた年代は……すみません。ちょっと記録にないですね。まあ、大丈夫。切れ味は抜群ですから。この前試し斬りで振り回してただけで何人か死んでしまいましたから。

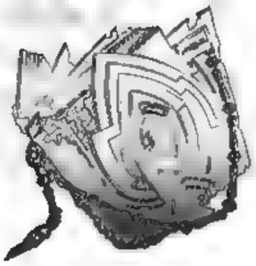
この武器を持っていた女性はあらゆる欲望が強かったそうです。性欲、食欲、睡眠欲、権利欲、金欲……人の欲望は留まるところを知らない、と言いますが、この方は別格でした。欲望を満たしては飽き、すぐに別の欲望を満たす。その循環だけで生きている方でした。

特に有名だったのが性欲です。ありとあらゆる物を対象に、じっくり、ねっとりと楽しまれたとか。何をじっくり、ねっとりと楽しんだのかは記録に残っていませんが、そういう細かい部分を記録に残さないのは大変な失敗だと思うんですよ。そう思いませんか？

そういえば、人間は満たされると欲望を失うらしいですね？　全部満たされて、全ての欲望を失ってしまった人は、何をして生きていくかわからなくなって孤独になるそうです。ある程度欠けていないと幸福を感じられない……人の業の深さは恐ろしい。そう感じます。それじゃあ、私はお昼ご飯を食べに行ってきますね。ではでは！



©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.



アリス/
餐虎のソーサラー

# 大食ノ封書
# （カゲウチ）

【魔書】たいしょくのふうしょ（かげうち）

私はおかしくない。
私は大丈夫だ。お腹が空いたら食べるのは当たり前の行為だ。

紅く染まった口を拭いながら、私は虎に話しかけると「愛を求める心と食欲は似ている」と虎は笑った。

それなら私は大丈夫だ。私にはちゃんと愛の記憶がある。
あの人からもらった沢山の思い出がある。
だからきっと、私の空腹が満たされないのは、ほんとうにお腹が空いているからだ。

ほんとうにおそろしいのはおかしくなることじゃなくて、おかしくなっていることがわからないことだ。
だからだいじょうぶ。わたしはおかしくなんかなってない。

# 鉄骨の魔弓

【射出】てっこつのまきゅう

採掘と製鉄を生業とする、器用なこびとたちの国があった。
ある日、山の向こうから、野蛮な巨人族が現れる。
絶え間なく攻めてくる巨人族に対抗すべく、
こびとの長は、巨人を貫く武器を製造することに決めた。

巨人の肌は岩より硬く、並みの武器では通らない。
だから、攻城兵器と呼べるほど、巨大な弓を作り上げた。
岩をも貫く力を象徴するため、弓には良質な鉄が用いられた。
「これさえあれば、巨人には負けないぞ！」
こびとたちは、弓の実践投入を目指す。

数百のこびとたちが引かないと、その弦はびくともしなかった。
なんとか成功した最初の試射で、こびとたちは感激した。
山を吹き飛ばす威力の矢。巨人たちもただでは済むまい。
これが何百と用意できたら、我々の勝利は目前だ！
こびとたちは、全ての技術を弓に投入し、量産体制を整えた。

決戦の日。もたもたと装填するこびとを踏み潰し、
巨人が弓を拾い上げ、軽々と弦を引いた。
「ちょうどいい弓だ。実に手に馴染むぞ」
巨人たちの手で、国は瞬く間に陥落した。
こびとたちは、巨人のために弓を作り続けることになった。

# 鉄巨人の拳

【打撃】てつきょじんのこぶし

重々しい地響きが轟き、人々はそちらを見た。
皆の目にまず映ったのは、のしのし闊歩する鉄巨人の雄姿だった。
「聞けぇぇぇい！　今日からこの国は、この大魔法使いグリフが支配するぞぉぉ！」
人々は一瞬混乱し、気付く。鉄巨人の右掌に蓬髪の老人が乗っており、今の声は彼が発したものだという事を。

「私を崇める事を拒む者は即刻名乗り出よォォ！」
老人が叫ぶや、「そうか、貴様が賞金首の黒魔導士グリフか！」と傭兵達が反応し、進み出た。
が、彼らの波状攻撃を浴びても、鉄巨人は蚊に刺された程に感じた風もなかった。
「やってしまえぇっ、鉄巨人ンンンッ！」
鉄巨人は無造作に拳を振るい、それだけで全員ぺちゃんこにされた。

非常事態を知った国王は一個大隊を編成し、鉄巨人を討たんとした。
が、彼らは小一時間もたずに壊滅し、鉄巨人が王城を攻撃しはじめた。
一基の物見塔に軍師が雇い入れた弓の名手が登り、弦を引き絞った。
射放たれた矢は鉄巨人ではなく、彼が右掌の上に乗せた老人の心臓を貫いた。
それを見届け、王は安堵の微笑を浮かべた。「ふぅ、最初からこうすべきだったのにな」

老人の遺骸が右掌から落下して地べたに激突した途端、鉄巨人が暴走しはじめた。
繰り出される拳の乱打で王城そのものが叩き壊され、国王以下、臣民はことごとく死亡。
神界から遣わされた戦士が彼を屠るまで、恐るべき破壊の宴が世界を震撼させたのだった。

# 門番の贈り歌



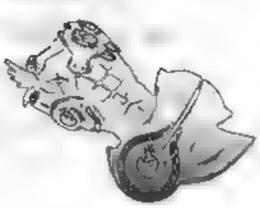
万事において厳しい戒律が敷かれた都があった。
自由意思で恋愛した異性と添い遂げたいと願う恋人達がいて、駆け落ちしようとした。
門番は彼らに同情し、出て行くことを許した。
二人の背中に向けてヴァイオリンを弾き始めた門番だったが、控えめにいってもヒドいものであり、魂がまるごと呪われるようなシロモノだった。

門番は裁判にかけられ、彼らとのやり取りの一部始終を再現した。
「かくして僕はこの贈り歌を弾いたのです」と、実演付きで。
――数分後、法廷の場にいた面々は泡を吹いて倒れる。
「彼らはもう充分に罰を受けている…」という判断で、恋人たちへ追っ手は差し向けられないこととなり、門番は厳重注意の上で釈放された。

後日、都に旅商人がやってくる。彼曰く、恋人たちの駆け落ち先の国は戦争に巻き込まれ、全員虐殺されたとのことだった。
しかも、門番の裁判に立ち会った者が次々に変死する。
あっという間に噂は広まり、「恐ろしきかな門番の贈り歌！」と、門番は畏怖の目で見られるようになった。

都に新しいお触れが出た。
ひとつ、戒律を破って逃げたい者は例の門番に掛け合って通してもらうこと。
その際、必ず門番の贈り歌を聴いていくこと。
門番は不本意極まりない世評に苦しみつつも、その後、職務だけは立派に果たしたという。

フォウ/
クラッシャー



# フォウの爪

【打撃】ふぉうのつめ

アコールの店へようこそ！　こちらの武器ですね。こちらは、最近まで「山の国」を統治していた女性が使っていた物です。女性が使うにはちょっと大きすぎる気もしますが、最近はパワフルな方が多いんでしょうか？　え？　私？　私はご覧の通り、武器を売るだけでこの武器を持ち上げる事すら出来ません。嘘ですけど。

こちらを使っていた女性は大変に品行方正で礼儀正しい方だったようです。その一方で様々な噂もあるのですが……女性はそういう謎めいた一面がある方が魅力的ですよね。え？　私ですか？　私は何も隠し事していませんよ。嘘ですけど。

統治者の女性には大柄の男性がお供としてついていたそうです。がっしりとした筋肉の鎧につつまれた彼は体を張って女性を守ります……いや、守りはするんですけど、何かにつけて「ご褒美です」とか「プレイです」とか言ってたらしく。世の中には色んな性癖がありますね。え？　私の性癖？　えーと、殴るのが趣味です。嘘ですけど。

なんだか今日は嘘をたくさんついてしまいました。こんな事ばかりしていると神様に怒られるかもしれませんね。神様がいるとすれば、ですが。ところで、貴方は嘘をつきませんか？　もし嘘をついているとしたら……その代償を何で支払うおつもりですか？

ドラッグオンドラグーン3

©2013 SQUARE ENIX CO., LTD All Rights Reserved. Character Design : Kimihiko Fujisaka.

# 強欲ノ爪槍

## （カゲウチ）

安心して日常生活を送れるようになったのなら次はよりよい生活を送る人間が羨ましくなる。

百人殺しを評価されたなら、次は百一人殺さなくては同様の評価は得られない。
そういう社会で歪みが起きるのは必然だ。

鴉と出会い、人の欲深さを思い知った。
それと同時にもう引き返すことの出来ぬ闇に染まっている自分自身に気が付いた。

全てはもう、手遅れだ。
肥大する強欲の渦に飲み込まれてしまった、＄pj◘oiでは。

仮面の男ゼロ/
ガンナー

# ゼロの短銃

【射出】ぜろのたんじゅう

「義務」とは、想いによって縛られる鎖のようなものだ。
はじまりは、人の想いを利用するために作った記号だった。
虐げられる人々の想いを、力なき者の想いを果たすための記号。

力を持つ者の悪意に抗い、力を振るう反逆者としての記号。
正義の味方を象徴する記号となった仮面の男、ゼロ。

やがて、絶望の中にある人々の想いは、記号にすがり、絡めとり、縛り上げる。
それは、記号が記号たる機能を果たしたがゆえの呪縛。
その仮面の下にある人間の意思とは関係なく、力なき者を救うことを余儀なくされる呪縛。

もう呪縛から逃げることは許されない。
この呪縛を、伝説とするためにも。

コードギアス反逆のルルーシュ

©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST

# 溺れる短剣



こう見えてもな、ガキの頃はお坊ちゃんだったんだぜ、オレ。
けど、厳格で不正を嫌っていたはずのオヤジが横領でブチこまれ、オヤジは獄中で首を吊った。
以来、残された家族全員が白い目で見られるようになっちまってよ。
母親は蒸発し、オレは伯父の家に引き取られたんだ。

伯父にも伯母にも厄介者扱いされたオレは家に居着かず、下町を徘徊し、不良どもに喧嘩を売って回った。
ある日、一人の不良を思う存分ぶちのめし、短剣を目ん玉に突きつけた。
どうせ下らない人生だ、こいつで目を刳り抜けば少しは楽しくなるか？
ふと視線を感じて脇を見る。少し離れたところに美しい少女が立ち、オレを見つめていた。

喧嘩に熱が入ると、何度か自分の暴力性を抑えきれなくなり、相手の目ん玉に短剣を突きつけた。
ゾクゾクするような快感に酔いしれながら、目玉を刳り抜いてやろうとしたさ。
でもな、できなかった。なぜってその度、あの美しい少女が現れて、どこまでも透明な目でオレを見つめるもんだから。

海外を旅行していた父の友人が帰国して事態を知り、「私のところへ来たまえ」とオレを誘ってくれた。
心機一転、その人の下でやり直す決意をして、短剣を捨てたんだ。
こうして下町を去ったオレは、もう二度とあの美しい少女を見かけることはなかった。

# 寂寞の槍

【長柄】せきばくのやり

憎しみに囚われてはならぬ。
ひたすら心を鎮め、どこまでも己を虚しくし、高次から己を俯瞰せよ。
どうだ、汝に出来ると申すか？

我欲を追いかけてはならぬ。
力に溺れ、衝動のままに生きるは、獣の所業なり。
…ほう、自分を律しきってみせると？

憐れみに駆られてはならぬ。
惻隠の情など必要なし、大局のためにはたとえ女子供であろうと殺せ。
むむ、やり遂げてみせると申すのか…。

なるほど、汝の意志はよく判った。
そこまでの覚悟があるのなら、我を執れ。
我、汝に人の枠を超越せし大いなる力を授けよう。生きとし生けるものすべてを殺し、寂寞の世界とせよ…！

# ジェレミアの剣

「忠義」とは
己の"義"がなくては語ることができません。
主の命令が己の"義"に反する時には
諫めることも必要です。

一度忠誠を誓ったならば、
ご期待には、全力で応えなくてはなりません。
ですが私はマリアンヌ様をお護りする事が……

その後悔がその後の私をつくりあげ、
一生を捧げるべき本当の主に
巡り合うことができました。

「イエス、ユア・マジェスティ」
ルルーシュ様こそ、
私が忠するべき皇帝にふさわしい。





©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST

コーネリア/
パラディン

# コーネリアの槍

【長柄】こーねりあのやり

「高貴さ」には、
その力に見合うだけの義務が生まれる。

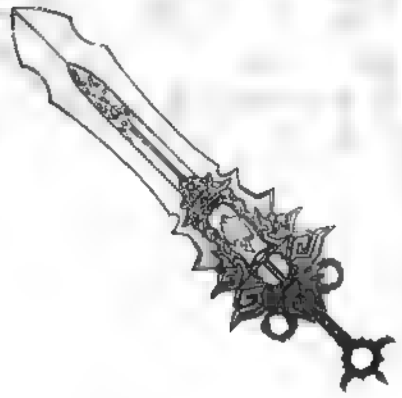
だからこそ、部隊を厳しく律することも
嫌われ役になることも厭わない。

本当の私の上には皇族や上官など
様々な義務が覆い重なっている。

それは全く苦にならない。
だが、ユフィ。君の前では……

コードギアス 反逆のルルーシュ

©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST



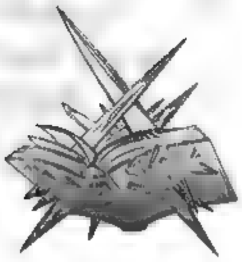
# 傲慢ノ薬剣
## (カゲウチ)

自分の意志に炎を灯すのは、
いつだって私次第。
私は自分の選んだ道を正解にするために研究を続けているのです！

昔からこうだったんです。
誰かに無理だと言われても、自分なら出来ると考えていたし、私の夢はいつだって叶った。

そんな私に周囲は「傲慢だ。頑固だ」と石を投げますが……
ちっとも痛くなんかありません！

〝傲慢〟や〝頑固〟なんて言葉は結局、理解力の乏しい人間が自分の思い通りにならない他者に向けて使う言葉なんですから！



# 大食ノ棘書
## （カゲウチ）

【魔書】たいしょくのきょくしょ（かげうち）

食べたいだけ食べて、眠りたいだけ眠る。
みんなはそんなの無理だよと言うけれど、夢に出てきた虎さんは褒めてくれた。

それから虎さんはみんながお腹いっぱい食べても食べきれない量のゴミを捨てる国の夢を見せてくれた。

空に浮かんだ、いろんな食べ物の形をした雲を食べれる夢を見せてくれた。
寝ているお腹が鳴るくらい美味しそうな夢を沢山見せてくれた。

そしてやがて夢の中の夢から醒めた私に、我慢しなくていいんだよ。と優しい音で小さく吠えた。

# 机上の空論



最強の武器ってのはなんだと思う？
なんでも切れる剣か？
雷を纏った槌？　炎の斧？
断じて違う。そう言ったのが、
こいつを作った戦闘鍛冶師だ。

じゃあ、どんな武器が最強なのか？
その問いに、そいつは答えたんだ。
剣や斧、槌、それに弓も、使い手の技量に頼る部分が多すぎる。
だから最強の武器としては失格なんだとよ。
そいつが選んだのは銃だった。

今、一番強い攻撃ってのは何か？
男は世界で最も強い生物……竜のブレスだと結論づけた。
そしてそいつを銃で再現すれば、最強の銃の出来上がりだ。
その鍛冶師は、自分で竜をとっ捕まえて加工して、
ブレスの出る銃が完成した。

ただなあ。よく出来てるけど、最強には程遠かった。
竜のブレスを、その威力のまま発射できなかったんだ。
生きた竜だからこそ使えた技ってやつだったんだな。
ま、机上の空論ってやつだ。だいたい材料になった竜を、
鍛冶師がハンマーで倒したっていうしな……。

# 羽馬の斧



男は夢を見た。幾度も。

夢の中で男は路地を歩いていた。何度も何度も。それらの路地は微妙に異なり、微妙に似通ったところもあった。その路地の中で男は時に何かを追い、気づくと何かに追われ、そして歩きながら飯を食らった。

男が白昼夢の中で歩いた路地はやがて糸のようによりあわされ、一つの全体を形成した。

そして全体の中心には斧が置かれ、ある日、男はその斧で人を殺した。夢の外で。
彼はその瞬間飛翔し、彼の精神の中に構築された全体から自由になった……。

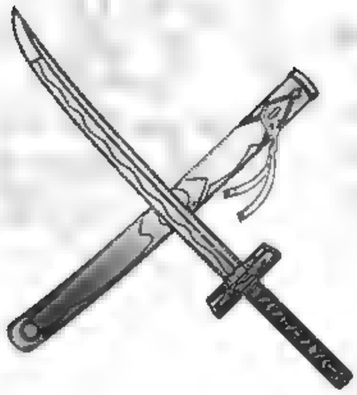
# 汚濁の音色

その国では善政が敷かれ、民たちは幸福を享受していた。
王とその帷幄に清廉潔白な人ばかりが集まり、少しでも多くの人が少しでもより良い暮らしを実現できるよう心を砕いていた故である。

ある日、一人の女官が宮廷に務めるようになった。
美しく、教養も深く、竪琴の腕でも右に出る者がいないという、まさに才色兼備の女性だった。

その女官に多くの者が恋心を抱き、言い寄った。
その結果、宰相が彼女から承諾の返事を引き出し、自分の妻にすることを公言した。

その数日後、宰相は突然罷免され、宮廷を逐われた。
王がその女官を妾にし、それを恨んだ宰相の弟が彼女を寝取った。
かくして、清廉なことで知られた王室の水は見る間に汚濁したのである。



スザク/ブレイカー

# スザクの刀

【刀剣】すざくのかたな

「人生」とは、なんだ。
人が生きるとはなんだ。
愛する者とともに過ごすため、
自らの想いを成し遂げんがため、
より良い世界にせんがために
生きようとした者たちがいた。

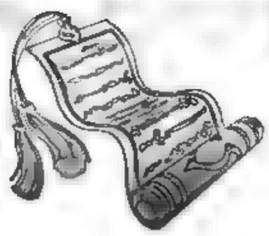
だが、俺の手はそんな人たちの血で汚れている。
死に場所を探している俺が、生きたい人たちの命を奪っている。

なぜだ。
なぜ俺は生きている。
こんな俺を好きだと言ってくれた人がいた。
だから、自分を好きになりなさいと言ってくれた人がいた。

だが、彼女はもういない。
なのに、なぜ俺は生きている。
こんなに辛い道が人生だというのなら、
なぜ俺は生きている。



©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST



# ルルーシュの巻物

「友情」とは……。
なんだろうな。
かつては、確かにあった絆。心のつながり。
だが、今やそれは大きく意味を変えた。
絆はある。心のつながりもある。

だが、それはもはや好意的なものだけでは形作られていない。
そうなったことを悔やんだことも、後悔しそうになったこともある。

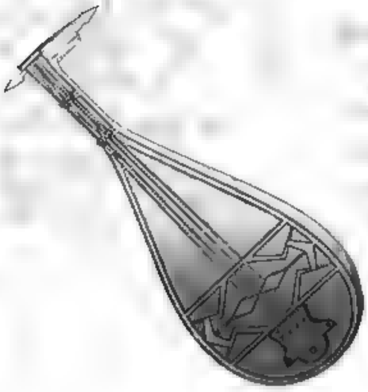
だが、それは意味を成さない。
この形は、自ら選んだ行動の結果によるもの。
それは覚悟を持っての行動ゆえの結果だ。

ならば、悔やむことも後悔することも許されない。
そんなことをすれば、本当に想いを踏み躙ることになる。
だから、俺は進まなければならない。
もう、あの日の2人には戻れないのだから。





©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST



C.C.／ミンストレル

# C.C.の琵琶

【楽器】し―つ―のびわ

「教養」とは、この悪意に満ちた世界を進む為の一筋の光だと私は考える。

かつて私は、何も知らない無知なるこどもだった。
無知ゆえに傷つき、
無知ゆえに慢心し、
無知ゆえに永遠に続く呪いを受けた。

しかし、永遠という名の牢獄は、私に知識を与える学び舎でもあった。
多くの知識は、生きていくための道筋を照らす光となった。
だが、その光でも照らせないものがある。
想いだ。

長い時間をかけ、知識を得るに連れ、想いが失われていく。
自分が自分でなくなっていくように感じる。
誰か、気付いて欲しい……。
私もまだ、ただの人間でありたいということを……。



©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST

# カレンの爪

間違っているとか正しいとか、誰が決められるっていうのだろうか？
だから、たとえ間違っていようと私は「力」を振るう。
力が無ければ、奪われる。嬲られる。踏み躙られる。

力無き者の行く末はいくつも見てきた。
骨の髄まで奪い取られた者は、塵屑のように捨てられ、生きていたことさえ失ってしまう。
私はそんなのは嫌だ。

嫌だと声を上げる。
私から奪おうとするのなら、嬲ろうとするのなら、踏み躙ろうとするのなら、
私は力を振るう。

それが、この手を汚すことになろうとも、私は力を振るう。
だって、もう奪われたくないから。
この手にはまだ大事なものが残っているのだから。

【打撃】かれんのつめ



©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST

# ヴォジャノーイ・テール



【捕虜マックに対する尋問記録①】
同盟国め、協定を破って我が国の後背を衝くとは！
主力部隊は前線へ向かいつつある、呼び戻しにいかないと！
だが、見咎められずに追いつくには、大河を泳ぎ渡るしかない！

【捕虜マックに対する尋問記録②】
元々泳ぎが得意というわけでもない。肺が熱くなり、頭蓋骨の内側が膨れ始めた。
くそ、報せをもたらさなければ我が国は滅亡してしまうのに…！
意識が途切れかかり、次の瞬間、全身がぬめぬめした光沢で覆われた人影を見たような気がした。

【宰相閣下への具申書】
以上、河岸で我が軍が捕虜とした騎士マックの尋問記録です。
おそらくは忠烈の士に感銘を受けたヴォジャノーイに救助されたものと推測します。
我が国にとってヴォジャノーイは神聖な存在。ぜひ彼を厚遇すべきかと。

【詐欺師の末路】
しめしめ。戦禍から逃げる途中、大河に転落し、漁師に助けられただけだってのによ。
保身に繋げるなんて、オレ様ってば冴えてるぅ！
ん…なんだこの水音は？　誰だ…って、半魚人？　ま、まさか本物のヴォジャノーイっ！？
よ、よせ、何をする気だ！　や、やめ…

# 溟海の管理者



男は荒ぶる海を心から愛し、焦がれていた。
叶うことなら魚となって大海に翻弄されてみたかった。
人間として生まれ落ちたことを悔しく思う日々であった。
朽ち果てるならば海の藻屑となりたいと切望していた。
だからある夜、とうとう男は荒れ狂う海に身を投げた。

暗い波に揉まれながら、男はこのまま死んでも良いと願った。
だが男は沈むことなく時だけが刻々と過ぎていく。
やがて波音が止んだ。空と海はいつまでも闇色を保っている。
不思議に思った男が辺りを見渡すと、海中に光を見つけた。
躊躇わずに潜水すれば、海底には一軒の家があった。

出てきた老人が男を家に招き入れ「代替わりだ」と告げた。
老人は男に立派な杖を手渡すと海中に出て泡となり消えた。
杖を手にした男は全てを理解した。
この杖は海の管理者の証である。
男は海の全てを掌握する、神に等しき存在となったのだ。

男が杖を振れば、遠い海で嵐が巻き起こって船を呑み、
或いは巨大な波がどこかの浜辺を襲い、村を呑んだ。
男は気づいた。自分が愛していた海の無情な暴力は全て、
海の管理者——即ち、あの老人が生み出したものなのだと。
愛する者を喪った絶望に暮れ、男は自ら命を絶った。

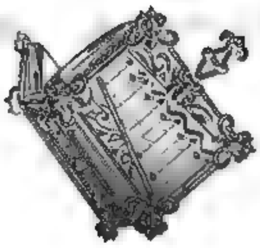
# 闇夜の朧月

彼は継母のイジメに耐えかね、妹と二人で家出した。
どこへ行くあてもなく歩いている最中、その市場に迷い込んだ。
そこでは古今東西の珍品が売られていた。

兄妹が市場の品物に目を奪われていると、「何が欲しいんだい？」と商店主が声をかけてきた。
兄は「見てるだけです。お金がないものですから」と答えた。
商店主は「この市じゃ金は通貨にはならない。通貨はお前さんたちの寿命さ」と言った。

それを聞き、兄は「僕の寿命を全部使えば何が買えますか？」と聞いた。
商店主は「そうだな、だったらあの闇夜に浮かぶ朧月はどうだ？」と答えた。
「いいですね、それ」と兄は目をキラキラさせ、何度もうなずいた。

妹はハッと目覚める。そこは町外れだった。
隣にいたはずの兄の姿はどこにも見当たらなかった。
——その後、妹は孤児院に拾われ、金持ちに見初められて幸せな結婚をする。
彼女は常々思っている。兄はあの朧月と化し、自分を見守っていてくれるのだと。



# 宮殿の書



彼は一人、広大で豪華な宮殿の椅子に座っていた。
望むものは思うように手に入り、願いは彼が思いつくほどのものはたいがいかなった。
彼が宮殿を出ない事、そして他人と会わない事を除いては……。それが彼に宮殿の書が与えられた際の条件だった。

宮殿の書を与えられたものは他にもいるようで彼らの様子は水晶玉で見る事ができた。その水晶にはときたま異性の姿が映ることもあった。彼はその中で、一人の異性の姿を眺めるのが楽しみになっていた。すると、それをまるで察したかのように水晶は頻繁にその異性を映し出すようになった。

彼は水晶に映し出される外の様子を通じて、宮殿の外の様子も大体わかっていた。そして彼が関心を持っている異性がどこのあたりに住んでいるかも。そこまで歩いていくことは可能に思われた。だが、彼女に会いに宮殿を出れば、宮殿はなくなってしまうのだった。

結局彼は彼女に会いに行くことはなく、一生を宮殿で過ごした。
その国には彼同様、宮殿の書を与えられ一生を宮殿の中で過ごした者たちが大勢いた。
その国は何年か後、その宮殿の書を作って増産し広めた隣国によって占領された。抵抗するものはいなかった。

『ユーフェミア／』『クレリック』

# ユーフェミアの杖

【祈祷】ゆーふぇみあのつえ

「愛」とは、様々なかたちを持つもの。
私の愛は、未来を奪わないこと。自由を奪わないこと。

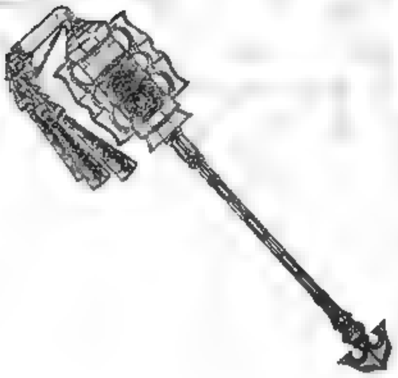
人は簡単に己でさえも未来を奪い、自由を奪ってしまう。
だから、私は願うのです。

自分のことを好きになって欲しい。多くの人を好きになって欲しい。
そうすれば争うことなく、未来を奪うことなく、自由を奪うこともない。

そのためならば、私はこの愛のために自らの命を使いましょう。
そう……誓ったのです。



©SUNRISE/PROJECT L-GEASS Character Design ©2006-2017 CLAMP・ST



# 成金の王杖



－－－－－－－－－－－－－－－－

￥とアル世界の取引レート￥

－－－－－－－－－－－－－－－－

眼球＝10000魔晶石
胆嚢＝10000魔晶石
胃　＝50000魔晶石
脾臓＝70000魔晶石

腎臓ー200000魔晶石
肝臓＝14000000魔晶石
心臓＝13000000魔晶石
小腸＝250000魔晶石

－－－－－－－－－－－－－－－－

メモ：不平等な世界でさえ
人は死後平等になれるという
一つのエビデンスとなるだろう。

# 驟雨の令嬢



我が主たる令嬢は、怒ったかと思えば笑ったり、泣いたりはしゃいだり。
その気まぐれなこと、さながら驟雨の如しである。
されど、主君の為に犬馬の労を惜しまず、全てを擲つ。それが武士の本懐ぞ！

ご報告申し上げる。敵将の投降を認めず、軍勢ごと皆殺しにし、武威を示しましたぞ！
はあ、なぜそんな非情な真似をしたのか、汝に憐憫の情というものはないのか、ですと？

ご報告致す。捕虜たちを連れ帰って参りました。
えっ、どうして容赦なく皆殺しにしなかったのか、汝には我への敬意が足りておらぬ、ですと？

我が主よ、おいたわしや。敵軍の手に落ちてしまうとは！
すぐ救出を——いや、やめておくか。
身代金受け渡しにわざと失敗し、敵国に害させるのが上策よな。
さすらば敵国憎しで我が国の結束は強まろうて！

# 生命の刈りとり鎌

【長柄】せいめいのかりとりがま

芸術を愛する温厚な紳士がいて、休日には必ず美術館に足を運び、一日を過ごしていた。
ある日、一幅の絵画に見入る彼に一人の女性が声を掛けた。「私、画家志望ですの。よろしければぜひ、作品を見ていただけませんか？」

かくして紳士は女性に案内され、彼女のアトリエへ足を運んだ。
女性はイーゼルに掛けられた水彩画に触れた。すると、絵はサラサラとほどけ、砂金に変わった。
あっけに取られる紳士を見て、彼女は艶然と笑う。「手品ではございませんわ。私の手は、有機物を真実の姿に変換する事ができるのです」

「なるほど、絵を見せると言ったのは私を誘い出す口実だったか。で、本当の用件はなんなのだ？」
紳士がそう問うと、女性は笑った。「私、あなたの真実を暴きたくてたまりませんの。だってあなた、うまいこと本性を隠し過ぎてるんですもの」

身の危険を感じ、その場から離脱しようとした紳士だが、遅かった。彼女の手が触れた途端、彼は鋭利な一本の鎌へと変わってしまう。
そう——芸術好きの紳士などただの仮面に過ぎず、彼の本性は残忍非道な暗殺者だったのである。

# 貴婦人の罠



ようこそ、私のお屋敷へ。あなたが新しい使用人ね。
家族の為に出稼ぎなんてえらいわ。
ここで働くなら、私の言うことはなんでも聞いてね。
特別なお願いの時は……この笛を奏でるから、必ず従って。
でないと、笛が魔法でとんでもないことを起こすかも。

ねえ……あなたは、この笛の音色みたいに
美しい顔をしているのね。明日までに何か傷を作ってきて頂戴。
作ってこなかったら、美しい顔の皮を剥ぐことになるかも。
この笛のように細い体にも嫉妬してしまうわ。
もっと太って頂戴。でなければ腹を裂いてしまうかも。

その髪だって、横笛の装飾のように艶めいているのが妬ましい。
短く切ってきて頂戴。でなければ首を切り落としてしまうかも。
……まぁ！　あなたは偉いわ。顔には小さな傷、
髪は少年ほどの長さ、体は服にボロ布を詰め込んで、まん丸だわ。
けれど……ごめんなさいね。

笛はそれを、私の願いを叶えたとは思えなかったみたい。
ほら……今日も私を美しくしてくれる料理が届いたわ。
美しい顔の皮の包み焼き、腹を切り裂いて作った腸詰め、
見とれるほどの美貌の兜焼き。
あなたの家族は、とっても美味しそう。

# 強欲ノ共鳴鎌
## （カゲウチ）



今、世界には悲劇が足りません。人々の悲しみや憎しみが連鎖するような絶望が足りません。

足りないのならば、私が足すしかないのです。
そう。あの鴉さんが夢で教えてくれたように。
私は世界に悲しみのハーモニーをもたらします。

さあ、嘆き、悲しみ、叫んでください。
誰も彼も傍観者でなどいられません。
全ての人類が奏でる悲しみのハーモニーを私と一緒に奏でましょう。

さあ、あなたの声を聞かせてください。
私は信じています。
ハーモニーの力を、そしてあなたの力を。

# 柘榴石の刀



老齢の石工は、長き生の果てで理想の石を見つけた。
若い女の肌のように滑らかで、三日月のように冴え冴えとした石の塊だった。
石工はこれを、生涯最後の作品とすることに決めた。そして試行錯誤の末に、一振りの刀を作り上げた。

彼の魂が込められたその刀は、仲間内で絶賛された。
石工が望めば高値で売れただろうが、彼はそうしなかった。
この石剣には何かが欠けていると言い残し、石工は刀と共に行方をくらませた。

やがて遠い地で、石工は求めていた人物に邂逅した。
その男は無差別に他者を略取・殺害し、逃亡中の身だった。
石工は彼に刀を差し出した。
刀は人の血を吸って初めて完成するのだと、言い募った。
男は刀を受け取り、これは売れば金になると答えた。

そして懐からナイフを取り出し、石工を突き刺した。
殺傷にはこういう金属製の物が良いと笑った。
石工は死に、刀は宝石商の手に渡り、長いこと飾られていた。
「だからこの刀はずっと未完成だったけど、君が今から僕に殺されることで、やっと完成するんだ。光栄に思ってくれ」

# 枯れ木の書



かつて大地に驚くほど力に満ちた世界があった。
植物や動物は本能的にその力を取り込み、
その存在力を増していった。
我もそうして世界樹と呼ばれるようになった植物。
しかしヒトだけが、大地の力を得られなかった。

強き動植物が蔓延る地上は、ヒトには厳しい環境だった。
ゆえに彼らは地上を捨てた。
すでに山の如く成長していた我の枝に生活の場を移した。
我の幹を穿ち水を得、実を食す。枝を払い住を整え
我の皮を剥ぎ、葉を毟り衣をそろえた。

ヒトらは安住の地を得、発達、成長していった。
文明を築き、数を増やし、様々な技術を開発した。
我も我の身体を材料に作られし書物。
やがて彼らは大地の力を、我を通して使うようになった。
だが、その術に我は耐えられず、徐々に枯れていった。

我の意識はいつしかこれに移っていた。
そしてヒトの言葉・知識を得て、我は我となった。
正直に言おう。彼らが我の周りを這い回る感触は不快だった。
枯れゆく我の本体とともに害虫どもも滅びるだろう。
我はその時を喜びを持って迎える。我の精神はまだ枯れてはいない。

# 幻の理

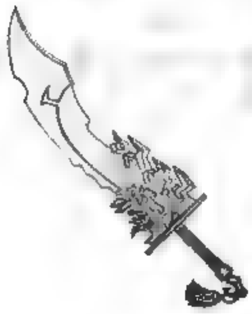


ある日、空が血の色に染まり、謎の生命体が地上に攻めてきた。
僕たち騎士団は懸命に戦ったけど力及ばず、ひとり、またひとり倒れ、僕も致命傷を負った。
肋骨を砕かれ、折れた骨で肺を破られた僕は、自分の血に溺れて死んだ。

目覚めると、そこは元通りの平和な王国だった。
有望な若手騎士として注目され、財産や名誉はある。が、どういうわけか最愛の恋人がいない。
僕は大慌てで彼女のことを訊いて廻った。だが、誰に聞いても僕の彼女など知らないというのだ。
僕が頭を抱えていると、そこにローブの男が近づいてきた。「君はどうも、気付いているようだな」

ローブの男は語る。
空より攻めてきた生命体は滅ぼした命を別の器に移し替えており、ここはその代替世界内なのだと。君の彼女がここにいないということは、まだ生きているのかもしれないと。
僕はその言葉に希望を見出した。なんとしてもこのまやかしの世界から脱出してみせる！

生命体は代替世界内を観察していた。
このオスには定まったメスなどいない。が、「いた」という偽情報を与えた途端、「ローブの男」を誕生させ、幻の理を己にとって都合のいい世界に編纂し始めたのだ。
ヒトの「種の本能」は侮れぬ、次なる幻の理を創る際は留意しよう。



# 傲慢ノ断刀
## （カゲウチ）

『とある聖職者の言葉』
信じれば救われる。
その言葉をあなたは馬鹿にするかもしれません。
ですが、私は確かに信じることで救われました。
信じることで様々な事を考えるようになりました。

なぜ、私は不幸だと感じているのか。
どうすれば、私は幸福になれるのか。
その理由を明らかにすれば良いのです。

不幸を一つずつ、解消してゆけば良いのです。
幸せを一つずつ、積み重ねてゆけば良いのです。
私は信仰があったからこそ救われました。
そして神の愛に応えるために、シスターになったのです。

『とある少女？の言葉』
ねえ、兄様。
やっぱり私は間違ってなかったんです。
兄様さえいれば私は……
もしかしてこの考えこそが傲慢だというのでしょうか？

# 焔光の棘刀

【長柄】えんこうのきょくとう

不思議な武器屋の噂を聞いた。
奥から聞こえてくる声が問う、いくつかの質問に答えれば、
たった一つの自分の武器が用意されるという話だ。
人々の希望の光になりたい。
そう願うボクには、どんな武器が与えられるのだろう？

武器屋に入ると、どこからともなく声が聞こえてきた。
光を求めますか？
これが噂の質問だと思い、ボクは元気よく「はい」と応答した。
どんな光を求めますか？――「希望の光です」
希望の光とは？――「人々を照らすあたたかい光です」

どのくらい、あたたかな光？――「とてもあたたかい光です」
もっと具体的に。――「身を焦がすほど、あたたかい光です」
その光は多ければ多いほどいい？――「はい」
攻撃と魔法どっちがいい？――「攻撃は最大の防御です」
身体の調子はどう？――「なんだか、あなたの声が遠いです」

気づくと、ボクは「焔光の棘刀」へと姿を変えていた。
確かに焔光は、身を焦がす程あたたかい光だろう。
焔光の棘がたくさんある。なるほど、たくさんの光だ。
まさに、たった一つのボクの武器。ボクは希望の光になれた。
……けれど願ったのは、こういうことじゃない。

# 偏屈者の横笛



偏屈王が死んだ。

王の死を知って隣国が攻めてきた。兵力に勝る敵の攻撃に対する打開策がないものかと、宝物庫を開けた。だが残されていた宝物は役にたたない奇怪なものばかりだった。

最後に笛だけが残っていた。わらにもすがる思いで、それを王宮の楽師に吹かせてみた。笛の音が響きわたった。しかし何も起こらなかった。だが楽師は気付いていた。彼がたった今吹いた音色はかつて何度か聞いた事のあるものだった。王は生前何度かその笛を演奏していたのだった。

国民は皆捕まった。そして処刑されその死体は投げ捨てられた。何処からともなく笛の音が聞こえてきた。すると、地面に転がっていた死体が次から次へと起き上がった。骸骨となった死体は風に揺られるように踊りだした。
どこか妙に楽しげな光景だった。

# 秘密の航海日誌



起きたらすぐに枕の下の航海日誌を確認する。
どうやら今日は一日中快晴のようだ。
船長の私は甲板掃除を船員に命じるらしい。
しかし、事故で船員が怪我をするようだ。
何とかして避けたいが、どうだろうか。

予定通り、素晴らしい快晴だった……。
そして安全を徹底したのだが、
日誌通り、船員が清掃中に怪我をしてしまった。
怪しげな露天商に言われたとおり、
この未来を教えてくれる日記は役に立たない。

怪我をした船員はまだ苦しんでいる。
航海日誌を読むと、明日はもっと悪くなるらしい。
悪霊が書くという未来の日誌は、不幸ばかりが記されている。
そのくせ、その不幸を避けられた試しがない。
まるで、日誌が不幸を呼んでいるかのようで、私は——。

船長の遺品整理中、ナイフで刺された航海日誌を見つけた。
奇妙なのは、日誌が船長が刺された翌日で止まっていたことだ。
色々と不思議に思うが、船長の奥さんに届ける前に、
船長代理として、職務遂行のために中身を確認しなくては。
余計なことが書かれていなければ、私の未来は前途洋々だ。

# 暴力の錨弦

【楽器】ぼうりょくのびょうげん

夏はだいすきです。
「遊んでください」といえばみんな遊んでくれます！

みてください！　この鉄砲。
これをバンバン、ババンっ！　ってうっても夏ならぜーんぶ許されます！

こーんなにたくさんのマトがあって、
みーんな遊んでくれるなら。
結構ながい時間、遊べそうです！

この赤い頭巾、とってもきれいでしょう？
昨日もお祭りでたくさんの人が遊んでくれたんです！

ラプンツェル/
Mizugi

# 純潔の珊瑚杖

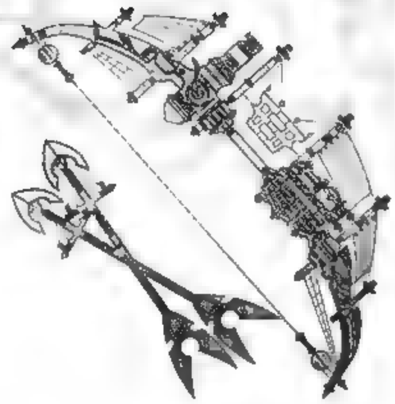
【打撃】じゅんけつのさんごじょう

それはいつか来たる花火大会。
下駄の鼻緒が切れてしまって転んだ私は
あなたの背中で囁きます。
「あなたがそばにいてくれて、本当によかったです」

それはいつか来たる肝試し。
いつの間にか逸れてしまったあなたと私。
あなたの裾をちょこんと摘んでこう言います。
「このまま抜け出してしまいませんか？」

それはいつか来たるなんでもない夏の日のデート。
火照った体とうなじを濡らす汗。
カキ氷を食べながら、あなたの想いを受け止めます。
「この後、どうしたいですか？」

ふふふっ、やっぱり夏は大好きです。
でも、きっと夏の私には水着以外の舞台は用意されない気がするのです。あーあ。どこか違った世界なら私はもっと、一夏の思い出をつくることができるのになあ……



# 卑劣の帆弓

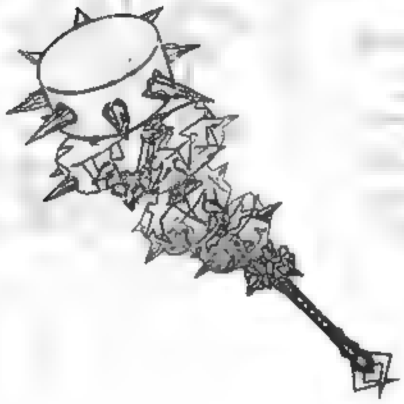


夏は人を馬鹿にする。
浮かれた尻軽女に男は群がり、
まるでロウソクに群がる蛾のようだ。

夏は人を馬鹿にする。
開放的な衣服に身を包み、
波打ち際で男に秘めた想い打ち明ける。
どうせ仲間内に秘密をバラされるだけなのに。

夏は人を馬鹿にする。
女は明日になれば捨てる物を出店でねだり、
男は見栄を張るため、女に貢ぐ。
一番賢いのは普段は馬鹿なテキ屋の親父だ。

どーせ、こんなつまらないことを考える女に男はよって来ませんよ。
こんな私によってくるのは……
今も私の隣で共感し続けるスノウくらいだ。



# 憤怒ノ離槌
# （カゲウチ）

【打撃】ふんぬのりつい（かげうち）

「もう、何も欲しません。求めません。
ですから……これ以上奪わないでください」
そう泣き叫ぶ少女を、一人の取り立て屋は歪んだ笑みと共に殴殺します。

仕事を終えた"被虐取り屋"は虚空を彷徨いながら笑います。「夢ですから。夢ならば叶うのです」と、口元を彩る鮮血を、卑しい音を立てて啜りながら……

「嫌だ嫌だと言いつつも、心の内ではこうされる事を望んでいたのでしょう？その気持ちは周囲から奇異の視線を向けられる事でしょう。ですが、私だけはわかります。だって貴方と私は同じ匂いがするのですから」

――他人はおろか自身の心でさえも分からぬ事を認めぬまま、真紅に染まったて女は、怒りに身を任せ、素質ある少女たちの願いを叶えます。その先に待つ結末を知りながら、何度も、何度も繰り返し……

# 世界の終末

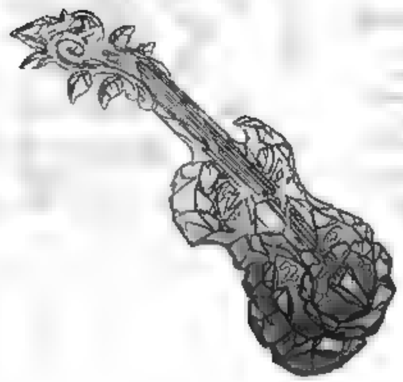


年に一度、途轍もない巨人がやってくるようになって久しい。
どうにか今までは滅亡を免れてきたが、あいつらを倒さない限り俺達に明日はないんだ。

とっておきのライフル、とっておきの弾丸を今日の為に用意した。
これであいつらを仕留め、平和を勝ち取る。

こ、この地響きは…！　クッ、とうとう来やがったか！
みんな、構えろ！　この終末を乗り切れるかどうかは、俺達にかかってるんだ！

野鳥愛好家はふと顔をしかめた。「今なんか踏んづけなかったか？　ウボァーとか、悲鳴も聞こえたような」
その妻が首を傾げて応じる。「珍しい植物がこのあたりには生えてるそうよ。種を遠くへ飛ばすんだとか」



# 岩の提琴

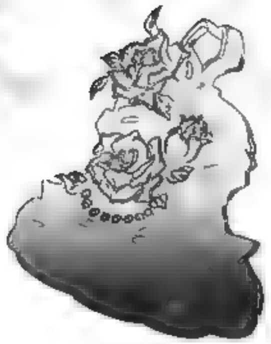
【楽器】いわのていきん

ある岩山に楽器が鎮座していた。
誰かが捨てたのか、あるいは山の神に捧げたのか。
岩山の頂上に。
やがて楽器は朽ちはじめ、
そのまま壊れそうになった……。

しかしその楽器は、周囲の岩を取り込み、
その身を岩石に変えて、なお存在していた。
たいそう気合の入った楽器で、
道行く旅人からは拝まれてすらいたという。

あるとき、ひとりの音楽家が、その楽器を手にとった。
その音楽家、旧態依然とした石頭の音楽の世界に絶望。
命を絶つために、岩山に登ったのだった。
楽器をかき鳴らした音楽家は、
その岩のように重厚で、山に響き渡る大音量に惚れた。

やがて音楽会を、新たな潮流が席巻した。
それは革新的で破滅的で爽快感のある音。
演者はまるで岩のような提琴を持っていた。
そのことから、件の新しい音楽は
岩山風……あるいはロックと呼ばれた。



# 祝福の鐘



その鐘は、二人の結婚を祝福して鳴り響いた。

いかなる時も変わることのない、死ぬまで続く愛と、これからの幸せを確信して、二人は互いを見つめあった。
その直後、鐘が落下して二人を直撃した。

二人は鐘に潰されて一塊の肉となった。

鐘は肉の上で鳴り続けた。結ばれた二人を祝福するように。いつまでもいつまでも……。

# ギル

【魔具】ぎる

とある魔道士の作。
一見すると通貨にしか見えないが、
れっきとした魔具である。

この魔具を作った魔道士は、
別の世界からやってきたと自称していた。
魔具のデザインは、
その世界で使われていた通貨だという。

どうやら彼は魔道士でありながら、
前の世界ではギャンブルで身を持ち崩し、
自殺を図ろうとしていたらしい。
塔の上から身を投げたところ、
この世界に落ちてきたようだ。

この世界での生活には
概ね満足しているとのことだ。
ギャンブル嗜癖が起こりそうな時は、
魔具を見て自身を戒めているらしい。
彼は前の世界の通貨を魔具にすることで、
身を破滅させたヨクボウを外に逃したのだろう。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# 竜鳴の竪琴

雨の降る川岸にドラゴンが倒れていた。
ドラゴンは猫のように小さく、弱っていた。
少年はドラゴンを家に連れ帰ると、
胸に抱きしめ、温め続けた。
翌日、頬を撫でる舌の感触で少年は目が覚めた。
小さなドラゴンは少年に懐いたのだ。

二人は野山を駆け回り、友情を育んだ。
最初はドラゴンを飼うことに反対していた彼の両親や
村の住民も、愛らしいドラゴンに次第に心を許すようになっていった。

そのドラゴンは鳴くことができなかった。
どれだけ頑張って鳴こうとしても
掠れた声しか出せない。
――友の声がいつか聞けますように。
少年は空に願った。

盗賊が村を襲い、村人は皆殺しにされた。
それを見たドラゴンの体が炎に包まれ、
巨体へと変貌した。
巨大なドラゴンは盗賊を焼き殺し、
少年の遺体の前で慟哭する。
美しい声が死の街に鳴り響いた。





©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# チョコボメモリア



君、一年生？
学科は？
講義何取ったの？
あ、チョコボ学概論？

うわ、超楽単じゃん。
え？　むずいって聞いた？
いやいや、レポート対策さえ
してりゃあまず落とさないって。

ほら、この本貸すよ。
こいつをこっそり丸写しして
レポート書けば、
Ａ＋間違いなしだから。

【学生への注意喚起】
・レポートの引用元を明記すること。
・チョコボメモリアの引用は200文字以内にすること。
・チョコボメモリア以外の書物からも引用すること。
以上のルールに違反したものは単位の認定を取り消すものとする。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# チョコボフェザー

お世話になっております。
チョコボ武器品質管理部のノロヒです。
チョコボフェザーの納品ありがとうございます。
修正点がございますので、
ご確認をお願いいたします。

チョコボカラーの色味が
トンマナと合っていないので、
レギュレーション資料3Pをご確認の上、
彩度を下げてください。

翼に躍動感がないため、
モデルデザインを参考に、
チョコボの持つ『羽ばたき感』
を意匠に落とし込んでください。

お世話になっております。
チョコボ武器品質管理部のノロヒです。
修正の進捗いかがでしょうか？
締切期日を過ぎておりますので、
早急にご連絡をお願いいたします。





©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

レイン／ブレイカー

# クリムゾンセイバー

【刀剣】くりむぞんせいばー

とある王国に騎士の青年がいた。
青年は女性好きな一面があるが、困っている人を見過ごさない。
「グランシェルトの騎士として」それが彼の口癖だ。

クリスタルを探す道中、青年は少女と出会う。
「あっちの森で、お人形さんをなくしちゃって……」
「俺に任せておけって。心配するな。すぐに取ってくるからな」

森の中、青年は人形を見つけた。
その人形に触れた瞬間、人形達は不気味に笑い始める。
強烈な光に包まれた後、青年の脳内に声が響いた。

「キヒヒ、コノ世界にナイ、ヨクボウを感ジます」
これは夢か——。目が覚めた青年の前で人形達が囁く。
「ヨウこそ、サイアクの世界へ」

ファイナルファンタジー ブレイブエクスヴィアス

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# エクスカリパー

【新聞記者の回想①】
大富豪が死んだ。
「ちかちか」
それは、死に際に彼が残した最後の言葉だ。
大富豪には莫大な隠し財産があると噂されていた。

【新聞記者の回想②】
彼の最期の言葉に、
隠し財産に繋がる何かが明示されているのかもしれない。
彼の死後、様々な人間が(およそろくでもない山師どもだったが)、「ちかちか」
の謎を解き明かそうと、忙しく駆け回った。

【新聞記者の回想③】
だが、誰も答えにたどり着けなかった。
謎が解明されたのは、
大富豪が死んでから十五年後。
「ちかちか」
それは彼が幼少の頃に持っていた、
光る玩具の剣だった。

【新聞記者の回想④】
彼の生家にその玩具はまだあった。
埃にかぶったそれを手に取り、柄のボタンを押す。
ちかちかと光った。
幼少の彼が遊びに使っていた、伝説の剣の模造品。
金も地位も名誉も手に入れた世界有数の大富豪。
だが、彼が人生の中で一番「楽しい」と感じていたのは、
きっとこの玩具の剣で遊んでいた頃だったのだろう。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# 女神の短剣

【刀剣】めがみのたんけん

まだ大陸に特定の王がおらうず人々が絶えず諍いを起こし、
大小様々な戦が日々勃発していた古の時代——
国書によれば、大陸の荒れように心を痛めた女神が
初代大陸王に短剣を差し出し、大陸を平定せよと命じたという。

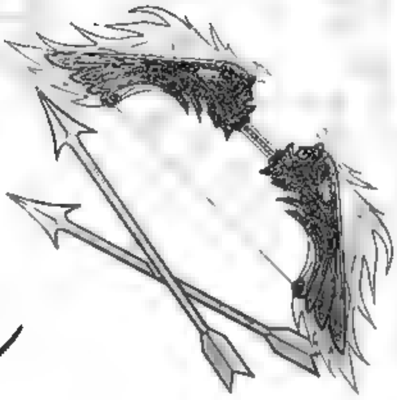
初代大陸王はこれを用いて各地の戦を収め、大国の礎を成した。
以来、歴代の王は女神の短剣を大陸王の証として継承し、
普段は大神殿にて厳重な警備の上、これを奉っているのである。

「まあ全部嘘なんだけどさ。
そりゃそうでしょ、短剣で大陸平定なんて出来るワケないし。
大層な扱いで神殿に鎮座してるアレ、五代目辺りの大陸王が
お抱えの武器屋に作らせた、見た目重視の短剣だから。
実用性ゼロ。あの形状で人殺せるワケなくない？(笑)」

——等と酒場で触れ回っていた女に激怒した大陸王が兵を差し向けると、女は輝き出し本来の姿を現した。女は正真正銘本物の女神であり、歴代の大陸王により人格権を侵害されたと主張。
大陸王はこれに示談金を払うことで和解し、実際に女神に短剣を握らせた。
こうして彼の剣は名実共に女神の短剣となったのである。

ファイナルファンタジー ブレイブエクスヴィアス

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.



# リンカネーション

【射出】りんかねーしょん

名前以外の記憶を失った少女がいた。
好奇心に駆られて、次元の狭間を潜り抜けた先は、物語世界。
そこで待ち受けるのは、二体の人形だった。

「アナタのヨクボウは何ですか」
「私の願い？　う、うーん。私の願いは……」
目を閉じ、考え込む少女。
その時、瞼の裏に一人の青年の顔が浮かんだ。
「レインに、その、私のことをもっと見て欲しいなって！」

「何たるウブな願イ！　アナタ様のヨクボウを受理しまシタ」
「ソノ願イ、叶えまショウ！」
人形達がそう言うと、少女は光に包まれた。

「ヒヒッ、これでレインくんもフィーナさんが気になるハズ」
少女は、点の集合体で描かれた平面絵となった。
この呪われた世界の条理に、少女はただただ絶望した。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

三匹の子豚/
白魔道士

# 暴食の白魔杖

【祈祷】ぼうしょくのしろまじょう

ねえ　レインさん。
パクパク　するとこみてて？
きっとたのしいよ。

わーい。
じゃあ、パクパクするね？　ふふっ」

ぱく　ぱく　ぱく……
ぱく　ぱく　ぱく……
どう？　すごいでしょ？
まだまだ　ぱくぱくできるよ！

ふー。 おなかいっぱい。
ごちそうさまでしたー！
じゃあ　おかいけい　よろしくー

ファイナルファンタジー　ブレイブエクスヴィアス

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# 悲哀の竜騎士槍

「さあ終わったらごはんだ～♪」
力強い言葉の裏に、目の前の現状から目を背けたいという、確固たる強い意志を感じます。

「気にしないでください、悪いのは人魚さんではありません」
フィーナさんはそう私を気遣うけれど……
私の心配よりも、自身の心配をした方がいいですよ。

「まあ、こういうのもアリかもな！」
レインさんは白い歯を見せ、笑います。
その気遣いの言葉が、申し訳ない気持ちを一層強いものにします。

フリーズ、壁抜け、奇怪なモーション。様々なバグがシナリオ外でも起こりましたが、私たちは元気です。ねえ作者さん、本当にこれは許されるのでしょうか？





©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# エクスカリバー



男は剣を抜いた。
それは古より伝わる伝説の剣であり、
悪しき者を消滅させる力を持っていた。
そこは戦場。
魔物の大群を前に男は剣を振った。
まばゆい光は、悪しき者どもを塵に変えた。

魔物達は男の村を滅ぼした元凶。
だから彼は容赦しなかった。
魔物を見つけると片っ端から殺していった。
数年後、魔物は大陸から姿を消した。
だが、男は生き残りを探していた。
復讐に囚われた男は魔物の血を求め続けた。

男は集落を見つける。
そこには親を殺された魔物の子ども達が、
身を寄せ合って静かに暮らしていた。
悲鳴を上げ、逃げ惑う魔物の子。
それを追いかけ、首を斬り落とす男がいた。
聖なる剣が血に染まった。

縮こまる幼い魔物の姉妹に
剣を振り上げた、その時。
聖なる剣が輝き始めた。
瞬間、男の身体は光に包まれ、塵となった。
剣は自らの役割を正しく果たしたのだ。
悪しき者を滅ぼすという、役割を。

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# メカボハンマー



とある国に飛空艇技師の少女がいた。
少女の夢は、自分の飛空艇をつくること。
夢を叶えるには多くのお金が必要だった。

少女は一人、工房で試行錯誤を繰り返していた。
ついに彼女は革新的なメカを完成させる。
自律走行型メカチョコボ、通称『メカボ』だ。

ある日、少女の前に二人組の傀儡が現れる。
「フム、コレは素晴ラしい技術です。とても売れソウです」
そう入れ知恵を残すと、傀儡は立ち去っていった。

自動掃除機能付きメカボ、液晶タッチパネル搭載メカボ……
数々の特許を取得し家電発明家として歴史に名を刻んだ。
時は経ち、かつての少女は空を見上げる。
傀儡に従い、発明家の道を進んだ自分。
飛空艇で空を飛び回る夢は、もう叶わない。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# チョコボメナス



【鍛冶師】
最近の若い奴らは忍耐がねえからいけねえ。
弟子入りした連中はすぐに辞めちまう。
職人の弟子が鍛冶ハンマーを握るんなら、
洗い場2年、飯炊き3年は普通だろ？
その間に師匠の技術を目で盗むんだよ！

【鍛冶師】
なんでも街にチョコボ武器の専門学校ができたみてえでな。
そこに入れば3ヶ月で職人になれるってよ。
馬鹿も休み休み言えってんだ。
んなゆとりの俄仕込みでなあ、
まともなチョコボ武器が作れるわけねえだろ！

【街の男性】
え？　あの鍛冶屋と専門学校ですか？
どちらも半年前に潰れましたよ。
ほら、帝都に武器工場が
できたじゃないですか。
完全自動で大量生産可能なやつ。

【街の男性】
おかげで良質なチョコボ武器が
安く買えるようになったんですが、
職人がみんな仕事を失っちゃってねえ。
３ヶ月職人だろうと１０年職人だろうと、
機械の前には無力でしたね。
可哀想な話ですが。

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# モーグリスピア



森で迷った私は、気がつくと幾千もの星がまたたく不思議な場所に出ていた。
私はそこで正体不明の白色生命体を発見した。
どうやら私は彼らの里に迷い込んでしまったらしい。
生命体に近づき、鼻をひくつかせてみる。
なんともいえない不思議な匂いがした。

白色生命体は私を受け入れてくれた。
3日間、私は彼らと寝食をともにした。
言葉は通じないが、我々の間には
確かな絆が生まれていたのだ。
だが、長居はできなかった。
私は帰らねばならない。

生命体の一人が案内人として、
私を森の外に連れ出してくれた。
彼は里の戦士であり、道中でモンスターに遭遇した折は
持参したスピアで私を守ってくれた。
森を抜けると別れの時間がやってくる。
生命体は私の身体を、最後に優しく抱きしめてくれた。

門兵さん！
ペロを見つけてくれてありがとうございます！
散歩中にはぐれてからずっと見つからなくて！
ぺ、ペロはどこにいたんですか？



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# アポロンのハープ



音楽家がいた。
彼の作る音楽は評論家に嘲笑され、
誰も彼の曲にお金を出さなかった。
彼の音楽を愛してくれたのは、
妻だけだった。

ある日、彼は竪琴を手に入れた。
それは古の神が落としたといわれる竪琴であり、
弾けば誰もがその音色に魅了された。
竪琴を手に入れた彼はまたたく間に
国中の人間に愛される音楽家に生まれ変わった。

だが、彼の妻だけは竪琴の演奏を嫌った。
それは彼が奏でる真実の音楽でない、と。
二人は次第に不和となり、ついに妻は家を出ていった。
妻がいなくなった後も彼は竪琴を使い続けた。
だが、ある日、彼の竪琴は何者かに盗まれてしまう。

竪琴を失った彼は売れない音楽家に逆戻り。
ついには家賃が払えず家を追い出された。
ある日、ゴミ箱から拾った汚い竪琴を
路上で弾いていた彼は、近づく足音に気づく。
音楽家は顔を上げずに弾き続けた。
彼の音楽を愛してくれた女性に向けて、
何も言わずに弾き続けた。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# トラストモーグリ

その村の人間は
東西のグループに分かれ、
些細なことで相手の
グループと衝突していた。

ある日、空からたくさんの
結晶体が降ってきた。
それはモーグリたちが運んできた
優しい贈り物であった。

その結晶体には人々の心を
つなぐ不思議な力が宿っていた。
結晶体を手にした東西の人々からは憎しみの火が消えた。
村人たちは和解し、互いに手を取り合った。

大きな絆で結ばれた村人たちは、
隣の村と争うようになった。
外に敵を作ることで、絆はより強固になる。
争いは戦争に発展し、村は滅びた。
結晶体を持ったモーグリが
彼らの前に現れることは、二度となかった。

——遠い昔、誰かから聞いたお話だ。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# 神策の兵法書



その兵法書には古今東西のあらゆる戦略が記されている。
計略を用いる軍師に求められるのは私情よりも、理性。
たとえ、冷徹と見られようと、祖国を守るには必要なことだった。

「くっ……どうして……私の指示に従ってください！」
軍師の少年は状況を把握し、的確な戦略を立てていた。
しかし、戦の結果は散々たるものだ。

ある日、眠りについた少年の元に二人組の傀儡が訪れる。
「全く、アナタは何もわかっていませン」
「一体、私はどうすれば……」
「キヒヒ、簡単なことデス。ヨクボウを満たせばいいのデス」

軍師は勝利した兵士に金と女を与えるようになった。
大戦では勝利を収め、兵法書には新たなページが加えられた。
「ヨクボウを知り、ヨクボウを操れば百戦して危うからず」



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# バドローサ



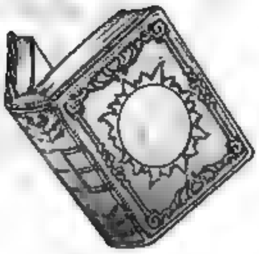
「私と賭けをしませんか？」
銀髪の少年が真剣に申し出る。
「ここにコインが1枚あります」
「コインの表が出たらあなたは
復讐を諦めて私たちの仲間になる」
「コインの裏が出たら……」

フフ、おかしなやつだ。
こんなやつがまだ世界にいるとはな。
「では勝負と行こう」
「ええ」
コインが宙を舞う。
「どっちだ？」

コインが宙に舞う瞬間、世界の時が止まる。
「オヤオヤ、イカサマはいけまセンね……」
傀儡は止まったコインをすっと差し替えた。
不気味な笑いを残しながら、時が動き始める。

「どっちだ？」
「バカなっ！　う、裏だと……!?」
「くっ。くくくっ。はははははっ！」
私には復讐しかない。そう……私には、もう、それしか……
そう言い残し、彼女はその場を立ち去っていった。

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.



# 終焉の予言書

【魔書】しゅうえんのよげんしょ

先王の急逝により世襲した若き王はこれから担う自国を憂う。
政はおろか民の心一つ動かすことすら、困難に感じたからだ。
そんな折に見つけた予言書に、彼は縋るほか術はなかった。
序章3頁7行目
「国の最盛を望む力無き王に、この書を遺す」

王は予言書に従い、一つずつ策を講じていく。
建国以来の窮地に陥っていた自国は、活気と豊かさを取り戻す。
忠実な家臣を登用し、隣国の美しい姫を娶り、子宝に恵まれた。
2章37頁24行目
「記した全てを成す者に「最盛」は訪れるだろう」

幾年を経て、予言書は最後の頁を残すのみとなってしまった。
予言書に記載なき未来——王にとって、それは死に勝る恐怖。
王は躊躇なく自ら首に短剣を突き刺し、静かに生涯を閉じる。
最終章 427頁 31行目
「本項を以て、力無き王への手引きを終わりとする」

賢王の訃報はすぐに国中に知れ渡る。
王を神格化した民は宗教家となり、民を贄に彼の復活を図った。
こうして国が滅亡の一途を辿るとは、死した王は知る由も無い。
あとがき
「これは未来と最盛の末に栄誉ある終焉を望む者への書である」



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# ラグナロク



『最強の剣』と名高い武器である、ラグナロク。
その存在に、密かに憧れている少年がいました。
直接目にしたことはおろか、どんな形なのかすら分からない。
けれど、きっと、途方もなく立派で豪華な武器に違いない――
そう、少年は信じて止みませんでした。

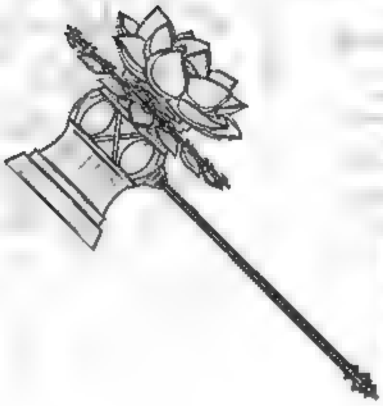
ラグナロクを手に入れたい。少年の願いを、周囲は笑います。
「君みたいな凡庸な人間が、手に入れられる訳がない！」
「あの剣は、選ばれし者だけが手にできる代物なのだから」
そう言い聞かせられて少年は成長し、青年になり……
ラグナロクに憧れていたことすら、忘れてしまいました。

ある日青年は、農作業を終えて家路を歩いていました。
すると、突然木陰に潜んでいたモンスターが襲いかかります。
咄嗟に持っていた農具で反撃すると――
青年の攻撃に驚いたモンスターは一本の剣を落とし、
命からがら逃げて行きました。

モンスターが落とした粗末な剣を見て、青年は思い出します。
（そうだ、自分は旅に出たかったんだ）
（ラグナロクに選ばれるくらい、強くなるために……！）
青年は再び決意を取り戻し、剣を置いて走り去りました。
その剣こそが……本物のラグナロクであるとも知らずに。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.



# 癒神のハンマー

【打撃】ゆしんのはんま！

とある国の王子は、貧しい鍛冶屋の娘と想い合っていました。
ある日、二人が密かに会っていることが王の耳に入り
王子と娘は、厳しい処罰を受けることとなります。
二度と会うことを禁じられ、娘の家は国の外れへ追放されて。
二人は悲しみのあまり、毎晩泣いて過ごしました。

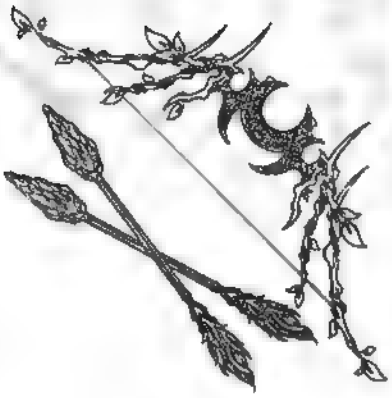
城下から追放された娘と再会するため、
王子は彼女の家を探しに出かけることにしました。
森の奥、小川の上流、渡り鳥が飛び去った先――
再び娘と会える日を夢見て、王子は夢中になって探しました。
…うっかり、神域へ足を踏み入れていることにも気付かずに。

神の怒りを買った王子は、石に姿を変えて城へ戻りました。
王は嘆き悲しみ、国中に救済を求めるお触れを出しましたが
誰一人として王子を元に戻せる者はいません。
祟りなら受け入れるしかないと、王も諦めかけたある日――
城へやって来たのは、金槌を手にした鍛冶屋の娘でした。

「たとえ石になろうと、運命に引き裂かれることがあろうと、
私達の想いが砕けることはありません」
娘が金槌で石を叩くと、呪いが解けて元の姿に戻りました。
身分を越えた愛は、王の心をも動かすこととなり――
二人はめでたく、結ばれることとなったのでした。

ファイナルファンタジーブレイブエクスヴィアス

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.



# アルテミスの弓



天界に暮らす狩猟の女神、アルテミス。
彼女は平和な天上での生活に暇を持て余し、
地上の動物を好き放題に射っては狩りを楽しんでいました。
シカにイノシシ、オオカミにクマ。
彼女のお陰で、地上の動物は次々に数を減らして行きました。

ある日、アルテミスは森の中で草を喰んでいた
一匹のシカに狙いを定めます。
矢が地上へ届いた時に、既にシカの姿はなく——
やけにすばしっこく逃げ回るシカに、
アルテミスは我も忘れて弓を引き続けました。

射っても射っても、彼女はシカを捕まえることができません。
やがて、手元に一本も矢が残っていないことに気付きます。
「この私に、射抜けないものがあるなんて！」
癇癪を起こして弓を叩き折ったアルテミスは、
すっかり狩猟への興味を失ってしまいました。

弓矢を失い、近頃ぼんやり月を眺めてばかりのアルテミス。
哀れに思った豊穣の女神が二人分の酒を持って行くと、
話し相手ができたとアルテミスは喜びました。
その女神にシカの尻尾が生えていることに
酔っ払ったアルテミスは、まだ気付いていないようです。

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# アーティザン

【長柄】あーてぃざん

とある武器屋に、長年誰からも手に取られることのない
長柄の槍が、ひっそりと売られていました。
武器の花形と言えば、鋭い剣や美しい弓。
重くて長くて大きくて、置き場所にも困る槍は
店でもあまり人気がなかったのです。

店主のおやじは、世界中のダンジョンを制覇し
勇者になる夢を諦めた人でした。
「冴えない者同士、俺達は似てるよなぁ」
おやじは毎日毎日、売れない槍にそう声をかけ、
ぴかぴかに輝くまで穂を磨いてあげました。

ある日、窓から聞こえた悲鳴に驚いて外へ出ると。
突然現れたモンスターが、人々を食い荒らしていました。
おやじは夢中で槍を掴み、標的へ向かって振りかぶります。
槍は美しく空中に弧を描き――
見事、モンスターの心臓を突き抜いたのでした。

数多の剣士でも歯が立たなかった、人食いモンスター。
冴えないおやじが仕留められたのは、
毎日研ぎ石で槍を磨いていたからでした。
愚公移山、釣瓶縄井桁を断つ。
長い時を経て、おやじと槍は名声を手に入れたのでした。

『ファイナルファンタジー ブレイブエクスヴィアス』

©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# セラピアの杖

治療士（ヒーラー）の家系に育った青年は、
生まれた時から定められた身の上を疎ましく思っていました。
本当は戦場の前線で、勇士と言われるまでに活躍したい。
剣の代わりに回復の呪文を唱える杖を持つ青年には、
もちろんそんな権利はありません。

いじける青年を慰めるのは、一人の陽気な幼馴染。
いくら治療士も良い仕事だと励まされようと、
その能力が誇らしいと褒められようと。
青年にとって、既に剣士の名声を上げている幼馴染は
妬みの対象でしかありませんでした。

ある日、隣国との戦いへ出かけた幼馴染は
利き手を切り落として帰って来ました。
ショックを受ける青年に、幼馴染は明るい笑顔を浮かべます。
「国を護る代償が腕一本で済むなら、安いもんだ」
取り乱した青年は杖を取り出し、夢中で呪文を唱えました。

「お前の力があれば、この先何本切り落としても平気だな！」
元通りになった腕を動かす幼馴染に、青年は呆れ顔。
「それじゃずっと、治療士を続けなきゃいけないじゃないか」
悪態をつく青年の様子を、幼馴染はなぜか
満足げに見つめていたのでした。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# 大地のベル

【楽器】だいちのべる

とある国の領主は、厄介事に頭を悩ませていました。
領地の森は自然豊かで領民からも好かれていましたが、
近頃恐ろしい魔獣が棲んでいると噂になっていたのです。
領主は周囲からも名医と名高い獣医の元を訪れ、
魔獣を退治できないかと相談しました。

領主から与えられた難題に、獣医は考えを巡らせます。
――腕力では、到底敵わない。
――ならば、襲われる前にその四肢を奪ってしまおうか。
人々が寝静まる夜。獣医は森の中へ忍び込み……
手にしたベルを、木の上から響き渡らせました。

翌朝。魔獣の死体を引きずり持ち帰った獣医に、
村の人々は仰天しつつも歓迎しました。
領主もほっと胸をなでおろし、村を護った褒美にと
獣医に多額の報酬を与えます。
予想以上の褒賞に、獣医は大喜びで受け取りました。

ところで……と。領主はふと、獣医に尋ねます。
「君は、どうやって魔獣を倒したんだい？」
大金を手にして舞い上がっていた獣医は、
領主の目の前で得意げにベルを何度も振って見せました。
自分達も、長い眠りに包まれてしまうことを忘れて――



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# モグビーチボール



それは、今から百年ほど昔のこと。
海に面した王国で、波打ち際を巡回していていた衛兵は
奇妙な物体が打ち上げられているのを見つけました。
その物体は、白くて、丸くて、つるつるとして。
何のためのものか、衛兵にはさっぱり分かりませんでした。

衛兵は、念のためにとその物体を城へ報告しました。
城の中にも心当たりがある者はおらず、一同は首を傾げます。
その時――皆の様子を眺めていたお姫様が、声を上げました。
「そう言えば、今日は凶日だったかしら？」
空には、月食で赤黒く染まった月が浮かんでいました。

瞬間。城の中は大騒ぎになります。
「神が天罰として遣わせたものに違いない」
「その物体は神の依代で、下手に扱えば大変なことになる」
国王の命令で、砂に汚れた球体は清められ
王家の祭壇に祀られることとなりました。

それから、幾百年が経った今も。
奇妙な物体は、城で大切に飾られています。
中には偶然王国を訪れた旅人が、別の国で
似たような生物を見たと話していたそうですが――
真相は、未だに明らかになっていないようです。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

いばら姫／
吟遊詩人

# エレフィムのハープ

【楽器】えれふぃむのはーぷ

これはよく眠れる衣装ってギシンとアンキに渡されたの。
復刻？に合わせて作ったから、これを着てフィーナさんと仲良くしてほしいって。

フィーナさん、一緒にお昼寝しない？
ライブラリの森の中に素敵な場所があるの。

気持ちが良くてずっと寝ていられるの。
外の世界を気にせず、好きなだけ……ぐぅ……

あれ？　起きたら、フィーナさんがいなくなってる。
もしかして、私が寝ている間に帰っちゃったのかな……
まあ、いっか。もうひと眠り……おやすみなさーい。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

# リンカネーション（2nd）

その少女は天真爛漫で純粋無垢。
前回騙されたにも関わらず、再び物語の世界に足を踏み入れた。

「キヒヒ！　またお会いデキマシタネ」
「今度ハ何を望みマスか？」
待ち受けていた人形からの問いに少女は考える。

「うーん、そうだね……私の願いは……」
「この世界の美味しいものを食べたいクポ！」
そこにモーグリが割り込んできた。

「ヒヒッ、分かりマシた！　ゴ用意しまショウ」
そう言って出てきたのは、ナイトメア達。
「シノアリスのあるキャラはコレを美味シイと言ってマシタよ！」
この人形達は信用ならないと、少女とモーグリはうなだれるのだった。



©2015-2022 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.Developed by Alim Co., Ltd.

武器ノ物語 Weapon Story

# 索引 INDEX

1002
掲載武器一覧
All Weapon INDEX

1018
コラボ武器一覧
Collaboration Weapon INDEX

1019
キャラクターズ武器一覧
Characters Weapon INDEX



## 掲載武器一覧
All Weapon INDEX

### あ

アーティザン……0996
愛玩の末路……0697
愛憎の刀刃……0099
愛憎の槍……0134
愛鳥の囀り……0498
愛緑者の聖槍……0140
葵の賢者(一弁)……0082
葵の賢者(二弁)……0083
蒼き剣……0205
赤蛇の短剣……0509
灯り照らす小夜……0178
悪業の斧……0571
悪女の悲劇……0139

悪兎の道しるべ……0492
悪病の天つ風……0420
悪魔の杖……0074
悪魔ノ呼笛……0110
悪夢の響き(凶禍)……0892
悪夢の目醒……0107
悪を放つ音……0629
アコールの本……0468
朝の知らせ……0853
浅はかな裁き……0757
熱ク照ラス音……0371
アポロンのハープ……0988
アルテミスの弓……0995
暗殺草稿……0362
異界街灯の書……0489
異界式標識……0519
遺骸の音……0443
錨竿……0389
異教の杖……0376
生贄の抱く大剣……0076
異国の書……0129
意匠の六絃琴……0608
異世界鉱物記……0084
異世界へ続く鏡……0050
依存の意思……0674
依存の木槌……0316
依存の杖……0575
依存の釣り竿……0387
依存の剣……0461
依存のビリョウ……0794
依存の笛……0190
依存の魔具……0914
依存の魔書……0103
依存の弓……0632
依存のリース……0733
依存の緑鏡……0807
悪戯な妖精……0845
一縷の願い……0005
偽りの勝者……0051
嘶く有翼……0645
古の風書……0761
命乞イノ極意……0295
命の選択……0611
荊棘の斧……0249
荊棘の戒杖……0253
荊棘の鎌……0245
荊棘の釜……0251
荊棘の杖……0248
荊棘の剣……0244
荊棘の提琴……0246
荊棘のハープ……0252
荊棘の魔術書……0247
荊棘の弓……0250
歪形の和音……0850
歪なる飢餓……0472
今剣……0400
今際の夢……0596
忌音の提琴(凶禍)……0894
癒しの導き……0684
入江の時砂……0064
入れ替えの弓……0124
岩の提琴……0972
岩水の刀……0488
陰森の灯……0636
ヴォジャノーイ・テール……0950
受け継ぐ双斧……0281
蠢蟲の竪琴……0119
薄緑……0399

海巨人の杖……0821
占い師の杖……0847
占い水晶……0090
ウラミ時雨……0377
恨みの呪銃……0045
麗しの銀髪……0731
麗しの黒杖官……0798
運気の天秤……0039
運命愛の音色……0846
永劫の車輪……0212
栄光の杖……0739
永逝の水瓶……0358
叡智の宝玉……0309
英雄が使いし剣……0114
エクスカリバー……0984
エクスカリバー……0979
縁断ツ鋏……0254
F8魔導小銃……0259
エミールヘッド……0271
エルフの古弓……0015
エレフィムのハープ……1000
円環の槍……0262
厭忌の門鍵……0185
焔光の棘刀……0964
炎魂の書……0494
炎魔獣の銃砲……0490
遠雷の尖晶石……0349
王家の天声……0580
王国兵の飾り銃……0541
黄金の竪琴……0276
黄金の杖……0274
黄金の剣……0275
黄金の弓……0299
王の戒律……0459
王妃の青い鳥……0707
王妃の遺物(凶禍)……0893
王妃の日記……0778
王妃の道標……0460
応報の根棒(凶禍)……0886
大男の手斧……0379
大狼の弓……0068
大三日月鎌……0479
大鷲の一打……0491
汚濁の音色……0945
乙女の純真……0093
乙女の日記……0756
鬼糸巻の斧……0744
溺れる短剣……0937
面影の斧……0770
怨念の大槌……0014


## 【か】


開花の杖……0663
諧謔曲の楽章……0592
貝響の弓……0743
邂逅の逡巡……0078
悔恨の槌……0730
回想の竪琴……0159
怪鳥の竪琴……0017
海底の大剣……0188
海底の杖……0186
海底の弓……0187
カイネの剣……0791
櫂ノ根……0383
海馬の書……0637
海馬の神弓……0875
傀儡ノ封竜……0171

戒律の提琴……0260
歌炎の調べ……0708
画家の秘密……0741
楽師と妖精……0128
学徒の軌跡……0913
革命の大槌……0059
影切鎌……0863
欠片の槌……0499
風切の薙刀……0809
風鹿の御蔭……0716
風招きの杖……0851
風巡りの書……0646
刀鍛冶の呪縛……0120
楽器職人の鉄球……0432
割実の提琴……0031
渇望の鱗……0871
鎌鼬の剣……0603
鎌鼬の薙刀……0504
神風の杖……0449
ガラクタの槍……0456
絡繰の鯨……0193
絡繰の槌……0192
絡繰の槍……0191
硝子の棍……0618
殻ノ斧……0329
殻ノ書……0328
殻ノ大剣……0324
殻ノ竪琴……0326
殻ノ杖……0323
殻の翼……0173
殻ノ魔具……0330
殻ノ槍……0325
殻ノ弓……0327
狩人の魂……0179
火輪の杖……0860
枯れ木の書……0961
カレンの爪……0949
岩漿の大斧……0182
貫穿の槍……0451
観測の書……0502
管理者の大槌……0044
祈雨の杖……0762
気炎万丈……0365
記憶の大剣……0382
機械仕掛ケノ律音……0803
機械人形の時計……0081
儀式の槍……0024
騎士団の提琴……0396
騎士の日記……0142
奇術師の杖……0473
机上の空論……0943
絆の短剣……0156
寄生の薙刀……0343
偽善者の施し……0030
偽善の証……0181
貴族の長弓……0750
気遣いの杖……0422
偽婦人の杖……0806
貴婦人の罠……0958
華奢な切札……0771
逆行の杖……0296
逆刻の呪術書……0168
宮殿の書……0953
凶愛の戦斧……0440
狂花の籠(禍)……0532
教訓の書……0453
狂裁者の杖……0089
強者の大槌……0028

兇賊の書……0433
狂熱の提琴……0417
虚構の提琴……0752
巨人の右腕……0298
極刑の残滓……0115
虚妄の意思……0436
虚妄の大槌……0301
虚妄の寄生書……0515
虚妄のコウガイ……0551
虚妄の狩猟弓……0213
虚妄の書……0617
虚妄の短剣……0586
虚妄の杖……0352
虚妄の剣……0318
虚妄の提琴……0047
虚妄の槍……0650
ギル……0974
禁言の杖……0261
近代宮殿記録……0154
緊密な関係……0723
偶像の琴……0152
愚金の杖(凶禍)……0896
具現の杖……0170
愚者火の煉獄……0867
愚者の願い……0057
朽ちた大樹の書……0877
朽ち縄の棍……0606
愚直な少年と奇跡の杖……0097
屈折光の横笛……0732
愚鈍な二人……0291
苦難の英雄……0758
首狩鎌……0604
蜘蛛の糸杖……0297
暗闇の羽搏……0720
暗闇の洋灯……0590
クリムゾンセイバー……0978
紅往生……0755
紅の七刃……0516
紅蓮の宝玉……0162
黒石の大鎌……0203
黒石の大剣……0202
黒石の杖……0204
黒鉄の棘銃……0226
黒鉄の大槌……0219
黒鉄の奇書……0223
黒鉄の仕込杖……0220
黒鉄の車輪杖……0225
黒鉄の書……0214
黒鉄の全集……0228
黒鉄の戦輪……0224
黒鉄の竪琴……0222
黒鉄の杖……0216
黒鉄の剣……0215
黒鉄の提琴……0218
黒鉄の槍……0217
黒鉄の弓……0221
黒鉄の横笛……0227
黒騎士ノ魂……0378
黒霧の灯……0918
黒の倨傲……0266
黒ノ祭祀書……0282
黒の書……0786
黒の聖杯……0404
黒薔薇の旋風槌……0724
継承の杖……0374
刑罰の斧……0487
汚れ無き野望……0088
逆鱗の銃……0441

決起の鉱鎚……0513
決起の杖……0019
血石の大槌……0876
潔白の鎌……0740
幻覚の鎌……0009
謙虚な魔剣……0163
剣豪の太刀……0006
賢者の杖……0137
眷属の大槌……0022
幻魔の杖……0595
権力の王笏……0026
賢老の手記……0111
後悔の書……0003
後悔の旅路……0363
恍惚の眠り……0665
号鐘の杖……0278
公女の熱気球……0760
荒戦の斧……0624
皇帝の覇権……0370
鋼鉄の笛……0438
鋼鉄の魔書……0783
鋼鉄の宵星……0196
坑道の宝箱……0034
荒廃の残斧……0429
幸福の旋律……0683
幸福の提琴……0072
幸福の破音……0198
傲慢ノ禍剣(ウラウチ)……0900
傲慢ノ禍剣(シンウチ)……0553
傲慢ノ仮面……0434
傲慢ノ曲剣(カゲウチ)……0677
傲慢ノ血剣(カゲウチ)……0915
傲慢ノ罪刀(カゲウチ)……0781
傲慢ノ赤剣(カゲウチ)……0570
傲慢ノ断刀(カゲウチ)……0963
傲慢ノ薬剣(カゲウチ)……0941
蝙蝠の怪弓……0517
拷問書誌……0010
拷問の大槌……0345
強欲ノ共鳴鎌(カゲウチ)……0959
強欲ノ嘴槍(カゲウチ)……0709
強欲ノ漆槍(カゲウチ)……0764
強欲ノ爪槍(カゲウチ)……0935
強欲の魔笛……0135
強欲ノ翼鎌(カゲウチ)……0681
護衛夜叉……0751
コーネリアの槍……0940
焦がれの飽和……0054
虚空の鎚……0801
黒牙剣……0682
黒翼の大鎌……0197
黒竜ノ巻物……0418
固執の宝槍……0647
古城の秘め事……0810
古代遺跡の書……0373
古代王朝の提琴……0141
古鉄の呪剣……0880
小鳥の囀り……0856
こびとの槍……0102
ゴミのような巻物……0703
凝り性の銃……0437
根源の支配……0062
混沌たる欲望……0032
紺碧の鋭刃……0471

## 【さ】

再会の汽笛……0167

最高の食事……0058
最期の木音……0784
最後の槍……0381
宰相の脳(凶禍)……0895
再生の息吹……0495
祭壇の笛……0523
罪人の写本……0421
逆恨みの縁刃……0416
逆様の刻界……0609
柘榴石の刀……0960
作曲家の一生……0341
殺傷器具……0036
裁きの書……0063
残焔の剣……0754
惨禍の予兆(凶禍)……0890
三弦の弩……0816
三式戦術槍……0270
C.C.の琵琶……0948
ジェレミアの剣……0939
色欲ノ骸杖(カグウチ)……0840
色欲ノ月杖(カグウチ)……0692
色欲ノ紫杖(カグウチ)……0628
色欲ノ秘杖(カグウチ)……0861
色欲ノ蕾杖(カグウチ)……0812
時空の哲学書……0583
自警団の誇り……0094
時限翼の書……0811
獅子王の心炎……0859
獅子殺しの鉄槌……0395
死者教典……0359
死者の帰還(錬)……0924
詩人の竪琴……0025
七星の嚮導……0862
失意の横笛……0148
嫉心の地響(錬)……0925
失墜の短剣……0901
嫉妬ノ華銃(カグウチ)……0865
嫉妬ノ拳銃(カグウチ)……0623
嫉妬ノ蛇弓(カグウチ)……0855
嫉妬ノ小銃(カグウチ)……0825
嫉妬ノ狙撃銃(カグウチ)……0824
嫉妬ノ猟銃(カグウチ)……0555
失命の美……0060
死贄の花束……0600
死神の弓……0101
師の教え……0307
慈悲なき暴風の刀……0911
射影の矢……0820
邪鬼の威圧……0392
邪気の呪歌……0300
邪教の仮面……0332
邪教の経典……0333
邪教の根棒……0334
灼熱の魔笛……0872
邪神の斧……0239
邪神の戒杖……0236
邪神の外典……0242
邪神の鎌……0230
邪神の棺杖……0241
邪神の琴……0238
邪神の書……0232
邪神の杖……0231
邪神の槌……0234
邪神の剣……0229
邪神の提琴……0243
邪神の典籍……0237
邪神の薙刀……0240
邪神の弓……0235

邪神の横笛……0233
ジャッジメント……0881
(呪)颶風の短銃……0904
(呪)高尚な毒薬……0906
(呪)戦神の竪琴……0907
(呪)滝壺の歌声……0905
(呪)天使の傲慢……0902
(呪)波鍛冶の薙刀……0903
(呪)不死翼の燃斧……0909
(呪)冥途の予言……0908
驟雨の令嬢……0956
終焉の一撃(禍)……0527
終焉の予言書……0992
終焉を刻む槌……0145
重海の鎚矛……0483
獣形傀儡……0414
終劇の預言書……0405
終結の銃……0070
重錠の魔書(禍)……0535
獣魔条文……0670
終末の剣戟……0391
獣魔の斧……0448
重力の特異点……0842
樹海の弓……0661
呪眼の斧……0694
淑女の竪琴……0258
祝福の鐘……0973
祝福の杖……0485
祝裏の書……0864
熟練の達人銃……0607
守護者の杖……0873
呪言の連鎖……0105
修羅の大槌……0087
純愛の塊……0013
殉教者の剣……0746
純潔の証……0289
純潔の珊瑚杖……0968
純潔の治杖……0910
浄化の重撃……0564
焼却の銃……0165
少女の休息……0804
少女の悲愴(錬)……0921
焼鉄の鎌……0346
衝動の翼銃(禍)……0529
錠前師の独白……0578
城門の書……0308
女王蜂の大鎌……0686
書架の巻物……0263
<食>魔神の凶棒……0121
食事の音色……0679
処刑人の誇り……0407
処女の髄液……0172
しょぼい剣……0701
白波の弓……0279
不知火の矢……0591
死霊の聖典……0687
磁力の銃……0542
白の契約……0267
白の書……0800
白の約定……0567
死を招く風見鶏……0372
深祈の杖……0413
神策の兵法書……0990
信者の嘆き……0742
侵蝕の棘……0620
神水の儀式……0653
神聖樹の音……0605
森然の弓……0195

神託騎士の斧……0085
神秘の名刀……0455
神木の巻物……0662
神門の書……0775
侵略者の銃……0648
侵略者の剣……0649
新緑共有の竪琴……0458
森林の救済……0339
人類学の大剣……0710
人狼の偽り……0116
<睡>女神のハープ……0123
水禍の剣……0447
水魚の骨楽器……0594
水帝の杖……0397
水兵の突撃銃……0476
水脈の剣……0415
睡眠の意思……0507
睡眠の円匙槍……0830
睡眠の斧……0817
睡眠のクマデ……0500
睡眠の黒杖……0454
睡眠の銃……0317
睡眠の書……0673
睡眠の大剣……0294
睡眠の杖……0563
睡眠の笛……0619
睡眠のマナコ……0552
睡眠の槍……0255
枢機卿の横笛……0367
スザクの刀……0946
涼風の囁き……0503
捨て石の大砲……0292
砂硝子の音色……0625
スリイの銃……0920
<性>光神の灯籠……0122
聖花の風剣……0797
聖騎士の小銃……0146
聖騎士の弓……0264
正義の意思……0675
正義の弩……0587
正義の大鎌……0286
正義の賀正笛……0735
正義の十字弓……0450
正義の書……0427
正義の白弓……0410
正義のゾウフ……0311
正義の大剣……0672
正義のツヴァイヘンダー……0719
正義の釣り竿……0386
正義の提琴……0361
正義の鉄槌……0174
正義の白杖……0313
正義の旗槍……0852
正義の魔具……0522
清狂の悪魔……0164
聖剣・剣絶ち……0655
清裁の銃……0722
静寂の願望者……0106
静寂の竜琴……0348
聖邪の裁き……0693
聖晶の弓……0802
生誕への期待……0712
聖堂の斧……0706
生命の刈りとり鎌……0957
誓約の鍵……0640
誓約の短剣……0035
精霊の沈黙……0676
世界樹に関する考察……0079

世界の終末……0971
寂寞の槍……0938
雪花ノ槍……0166
絶対零度……0366
セラピアの杖……0997
ゼロの短銃……0936
ゼロの剣……0465
善意の証……0180
旋廻の剣……0868
戦歌の残響……0002
戦火の神鎌……0782
千姫の大斧……0409
戦丘の福音……0576
宣教の鎌……0598
先見の知将……0835
占星の魔石……0020
全知の書……0048
選定の剣……0763
千年樹の嘆き……0474
殲滅の大剣……0685
千里眼の杖……0210
相思の双刀……0091
双頭の杖……0572
蒼翼の弩……0157
僧侶の錫杖……0011
束縛の意思……0839
束縛の大斧……0613
束縛の斧……0585
束縛のカイナ……0310
束縛の刀……0176
束縛の金欲槍……0879
束縛の黒槍……0322
束縛の恋刀……0777
束縛の残響……0696
束縛の銃……0431
束縛の鮮血刀……0844
束縛の杖……0049
束縛の提琴……0277
束縛の長槍……0312
束縛の魔具……0671
束縛の魔書……0201
束縛の旅六弦……0829
蘇生の禁書……0199
翠鳥の剣……0599

【た】

ダーインスレイヴ……0837
大洪水の記録……0055
大将首の杖……0652
大食ノ奇書(カゲウチ)……0538
大食ノ棘書(カゲウチ)……0942
大食ノ禁書(カゲウチ)……0602
大食ノ封書(カゲウチ)……0930
大食ノ巻物(カゲウチ)……0729
代替の命……0069
怠惰ノ三線(カゲウチ)……0866
怠惰ノ土笛(カゲウチ)……0808
怠惰ノ花笛(カゲウチ)……0753
怠惰ノ六弦琴(カゲウチ)……0769
大地のベル……0998
多角の銃……0774
戦いの儀……0766
打直の火鋼剣……0520
奪姫の代償……0008
堕天の喜笛……0822
魂喰の薄鎌……0669
探究の意思……0411

探究のウクレレ……0446
探究の学術書……0321
探究の棍棒……0643
探究の大剣……0545
探究の注射器……0273
探究の杖……0496
探究の提燈杖……0831
探究のパラソル……0593
探究の槍……0654
断黒の薙刀……0579
蛋白石の矛……0912
断末魔の音(禍)……0530
血蜘蛛の禁書……0843
忠心の証……0284
鳥冠の竪琴……0149
チョコボフェザー……0977
チョコボメナス……0986
チョコボメモリア……0976
地烈の鳥槍……0430
沈黙の碧……0833
追及者の魂……0046
追跡者の弓……0023
つかえない槍……0702
月灯りの音……0759
月影の経本……0344
月猫ノ願ヒ……0772
氷柱鎌……0283
剣に宿りし者……0554
吊るされた男……0728
帝国偵察手記……0080
鉄塊……0785
鉄環の音色……0780
鉄巨人の拳……0932
鉄骨の魔弓……0931
鉄柵の槍(禍)……0528
鉄パイプ……0269
デボル&ポポルの杖……0793
電圧の辞書……0439
天幻の書(錬)……0926
天荒の狼弓……0480
天趣の聖典……0748
転生の約束……0169
天鼠の書……0626
天文の書……0350
道化師の箱……0424
道化の鎌……0109
闘争の渇望……0016
トウの剣……0919
同胞の心……0776
咎人の心……0335
咎人の杖……0336
咎人の槍……0337
刻の警告……0601
時の座標……0768
刻の蒼杖……0056
時を司る者……0566
毒菓子のケーキ……0355
毒菓子の銃……0353
毒菓子の竪琴……0354
独裁者の杖……0584
毒華の息吹……0916
毒蛇の顎……0634
毒蛇の槍……0506
棘の枝……0688
賭博師の銃弓……0557
賭博師の書……0562
賭博師の聖杖……0560
賭博師の短剣……0556


【た】

【た】探究のウクレレ～【た】賭博師の短剣

賭博師の槌……0559
賭博師の笛……0561
賭博師の槍……0558
トラストモーグリ……0989
トレジャーロッド……0388

【な】

凪の根棒……0525
撫子の竪琴……0126
7号の杖……0268
成金の王杖……0955
成金の賀正刀……0736
成金の銀槍……0796
成金の銀槌……0870
成金の書……0639
肉砕く槌……0007
虹に捧げる唄……0635
日輪招来杖……0481
人形使いの魔法……0118
人間の観察記録……0096
縫い付く情念(錬)……0928
抜け殻に注ぐ魂……0052
抜け殻の持つ長槍……0053
熱鋼の禁書……0589
熱鉄の剣……0347
農民の弓……0029
残サレタ時間……0143
ノバラの琴……0209

【は】

廃煙の歯車……0577
背徳の音色(禍)……0531
灰翼の鎌鼬……0779
羽音の書……0805
白銀の斧……0285
白銀の手鏡……0288
白銀の魔書……0287
白紙の魔書……0136
伯爵家の家具……0644
白雷の杖……0130
覇者の剣……0357
バドローサ……0991
羽馬の斧……0944
波紋の呪書……0616
波紋の魔剣……0631
ハルアヘッド……0792
破裂の投槍……0356
万戒の魔書……0018
半眼の異書(禍)……0534
判決と宣言……0691
反征服の鎌……0514
番兵の粛清……0627
蛮勇の弩……0108
悲哀の意思……0390
悲哀の大鎌……0302
悲哀の狩弓……0667
悲哀の黒琴……0612
悲哀の銃……0320
悲哀の書……0478
悲哀のジョレン……0501
悲哀の竪琴……0189
悲哀の杖……0423
悲哀の剣……0175
悲哀の鉄球……0546
悲哀の魔具……0874
悲哀の竜騎士槍……0983

緋色の剣……0257
被虐のイコツ……0897
被虐の意思……0574
被虐の賀正書……0737
被虐の黒剣……0666
被虐の銃……0705
被虐の侵略杖……0659
被虐の杖……0104
被虐の鉄球……0360
被虐の薙刀……0319
被虐の琵琶……0511
悲愁の縫い包み……0493
必中の弩……0133
必要悪の剣……0027
火蜥蜴の焔銃……0738
瞳の刀……0394
秘密の航海日誌……0966
秘密ノ地図……0211
百獣の剣王……0272
百獣の双槍……0790
百毒の銃……0614
氷華の檻(錬)……0927
氷原の花……0698
氷国の軍記……0544
氷山の杖……0656
氷樹の封印……0858
氷神の杖……0638
氷弾の魔銃……0641
氷縛の魔書……0444
標本図鑑……0657
緋妖魔刀……0869
氷滝の宝杖……0290
卑劣の意思……0508
卑劣の大槌……0256
卑劣のカシ……0795
卑劣の金欲笛……0882
卑劣の拳銃……0315
卑劣の黒銃……0717
卑劣の杖……0486
卑劣の帆弓……0969
卑劣の刃……0021
卑劣の槍……0419
卑劣の喇叭銃……0342
卑劣の狼弦……0668
悲恋の記録……0727
ファイブの槍……0929
封戒の水音……0040
封緘の焔石……0813
風琴の書……0699
風光の大剣……0540
封じられし帆船……0664
封魔の薙刀……0208
封魔のハンマー……0651
フォウの爪……0934
不可思議生物図鑑……0884
不協和音……0095
復讐鬼の剣……0150
復讐の大剣……0380
服従の杖……0004
復讐の薙刀……0293
不倶戴天……0042
不殺の刃……0144
不死鳥の炎弓……0814
不死鳥の魔書(凶禍)……0889
不死鳥の槍……0788
不自由な傀儡……0582
不浄なる斧……0789
不条理な断罪……0721

不条理の刃……0475
腐食の蕾……0539
不測の事態(錬)……0922
復活の花弁……0065
復活の刻杖(禍)……0536
腐敗の大剣……0426
不服の英雄……0734
ブラックボム……0398
憤果の器(凶禍)……0891
憤怒ノ鎖斧(カグウチ)……0848
憤怒ノ蒼根(カグウチ)……0773
憤怒ノ蒼槌(カグウチ)……0819
憤怒ノ鉄球(カグウチ)……0749
憤怒ノ離槌(カグウチ)……0970
平定の剣……0408
騙欺の薙刀……0364
辺境のスキットル……0854
偏屈者の横笛……0965
偏執者の斧……0207
咆骸の杖……0615
蜂窩の書……0711
暴牙の横笛……0725
忘却の杖……0161
忘却の本意……0077
奉迎の鎌……0715
咆哮の斧……0660
亡国の古銃……0127
亡国の旗……0425
亡魂の喚き……0849
宝樹の杖……0403
暴食の鎌……0147
暴食の黒駒……0899
暴食の白魔杖……0982
暴食の侵略槍……0658
暴食の杖……0518
暴食の粉砕機……0482
暴食の六絃琴……0713
膨張の剣……0543
暴鳥の羽根……0695
報復の銃(凶禍)……0888
訪問者の薙刀……0678
謀略と背徳……0470
暴力の意思……0375
暴力の弩……0510
暴力の凶器……0314
暴力のキンソク……0898
暴力の金欲槌……0878
暴力の黒斧……0550
暴力の刺又……0331
暴力の書……0177
暴力の戦輪……0194
暴力の竪琴……0368
暴力の杖……0818
暴力の鏑弦……0967
暴力のロスター……0718
ポッド153……0569
ポッド042……0568
焔の棍棒……0642
ポンコツの琴……0704
凡夫の大槌……0100

【ま】

舞扇……0401
魔焔の大剣……0621
魔骸の弦楽器……0406
魔戒の杖……0588
魔海の魔導書……0827

摩回廊の射交(錬)……0923
勾魂の書……0512
魔眼の射手……0565
魔女の大斧……0622
魔女の業火剣……0832
魔族の腕……0041
魔鳥のはばたき……0834
窓辺の槌……0597
惑わしの目……0184
マナの杖……0466
真ノ夜ノ黒刀(禍)……0526
幻の理……0962
魔眠の厭枢……0815
魔物の槍……0117
守り人の呼笛……0917
魔薬の小銃……0841
迷いの槍……0061
迷不の羅針盤……0726
未修熟の杖……0112
水鳥の魔書……0767
水鳥の弓……0384
水蛇ノ槍……0497
見せかけの弓銃……0340
導きの銃……0206
緑の凪刃……0549
見習いの杖……0033
ミハイルの槍……0469
魅惑ノ槌……0303
百足王の牙……0826
無垢なる信徒……0113
骸の杖……0351
夢幻の魔書……0073
無限薬莢……0883
無作為の銃……0369
無の教え……0183
無銘(刀剣)……0131
無銘(打撃)……0402
紫水晶の矛……0630
溟海の管理者……0951
迷宮の歌……0787
名工の重槍……0125
冥府からの灯火……0452
メカポハンマー……0985
女神の詩……0690
女神の短剣……0980
滅鬼の鉄槌……0132
滅罪の火……0700
盲信者の怨念……0138
モーグリスピア……0987
黙祷の杖……0457
モグビーチボール……0999
門番の贈り歌……0933


【や】


躍羽の提琴……0505
夜想刀……0066
八裂きの槍……0086
闇鴉の詛呪(凶禍)……0887
闇蜘蛛の弩……0385
闇に響く声……0573
闇ノ医学書……0393
闇へ導く傀儡……0012
闇除ケノ傘……0445
闇夜の朧月……0952
闇夜ノ森……0484
友愛の杖……0464
友愛の提琴……0463

友愛の弓……0462
誘悪の音色……0799
幽暗な信号……0836
勇将ノ形見……0747
ユーフェミアの杖……0954
融和の剣……0435
雪下の骸……0160
癒神のハンマー……0994
夜明けの祝福……0838
宵の毒薬(禍)……0533
陽光の笛……0412
妖鋏黒白……0092
妖精の歌……0075
世詠の杖(禍)……0537
妖魔の魂(凶禍)……0885
妖魔の提琴……0857
寄セ餌ノ断末魔……0067
夜の書……0610
鎧闘士の竪琴……0428
四〇式斬機刀……0265

【ら】

来世の崩壊……0547
雷霆の鎌……0745
雷鳴の杖……0828
ラグナロク……0993
嵐扇の弓……0823
竜化の鎌……0038
竜騎兵の聖槍……0071
流行の最先端……0689
竜神の餞別……0442
竜神への祈り……0098
流水の音色……0581
竜鳴の竪琴……0975
竜呼びの宝珠……0155
両断の刀……0338
緑海の矛……0633
リンカネーション……0981
リンカネーション(2nd)……1001
輪廻転生……0153
輪廻の宝珠……0043
鱗片の杖……0304
鱗片の提琴……0305
鱗片の弓……0306
ルルーシュの巻物……0947
霊鳥の弩……0521
冷徹なる暴力……0280
零度の血脈……0548
零度の杖……0477
烈火の重槍……0524
老兵の大槌……0158
老兵の大筒……0151
炉心の本……0680

【わ】

災いの弓……0037
鷲狩の短剣……0714
海神の刀……0765
藁草ノ人形……0200
ワンの戦輪……0467

# コラボ武器一覧

### 【ニーアオートマタ】
エミールヘッド……0271
黒の倨傲……0266
三式戦術槍……0270
白の契約……0267
白の約定……0567
鉄パイプ……0269
7号の杖……0268
百獣の剣王……0272
ポッド153……0569
ポッド042……0568
四〇式斬機刀……0265

### 【釣り★スタ！】
錨竿……0389
依存の釣り竿……0387
正義の釣り竿……0386
トレジャーロッド……0388
ブラックボム……0398

### 【ドラッグオンドラグーン3】
アコールの本……0468
歪なる飢餓……0472
奇術師の杖……0473
紺碧の鋭刃……0471
スリイの銃……0920
ゼロの剣……0465
千年樹の嘆き……0474
トウの剣……0919
ファイブの槍……0929
フォウの爪……0934
謀略と背徳……0470
マナの杖……0466
ミハイルの槍……0469
ワンの戦輪……0467

### 【スペースインベーダー】
侵略者の銃……0648
侵略者の剣……0649
被虐の侵略杖……0659
暴食の侵略槍……0658

### 【ニーアレプリカント】
カイネの剣……0791
黒の書……0786
白の書……0800
鉄塊……0785
デボル&ポポルの杖……0793
ハルアヘッド……0792
百獣の双槍……0790
不死鳥の槍……0788
不浄なる斧……0789
迷宮の歌……0787

### 【コードギアス 反逆のルルーシュ】
カレンの爪……0949
コーネリアの槍……0940
C.C.の琵琶……0948
ジェレミアの剣……0939
スザクの刀……0946
ゼロの短銃……0936
ユーフェミアの杖……0954

ルルーシュの巻物……0947

【ファイナルファンタジー ブレイブエクスヴィアス】
アーティザン……0996
アポロンのハープ……0988
アルテミスの弓……0995
エクスカリバー……0984
エクスカリパー……0979
エレフィムのハープ……1000
ギル……0974
クリムゾンセイバー……0978
終焉の予言書……0992
神策の兵法書……0990
セラピアの杖……0997
大地のベル……0998
チョコボフェザー……0977
チョコボメノス……0986
チョコボメモリア……0976
トラストモーグリ……0989
バドローサ……0991
悲哀の竜騎士槍……0983
暴食の白魔杖……0982
メカボハンマー……0985
女神の短剣……0980
モーグリスピア……0987
モグビーチボール……0999
癒神のハンマー……0994
ラグナロク……0993
竜鳴の竪琴……0975
リンカネーション……0981
リンカネーション(2nd)……1001

# 【キャラクターズ武器一覧】

Character

【アリス】
薄緑……0399
傲慢ノ禍剣(シンウチ)……0553
嫉妬ノ猟銃(カグウチ)……0555
束縛の意思……0839
束縛の大斧……0613
束縛の斧……0585
束縛のカイナ……0310
束縛の刀……0176
束縛の金欲槍……0879
束縛の恋刀……0777
束縛の黒槍……0322
束縛の残響……0696
束縛の銃……0431
束縛の鮮血刀……0844
束縛の杖……0049
束縛の提琴……0277
束縛の長槍……0312
束縛の魔具……0671
束縛の魔書……0201
束縛の旅六弦……0829
大食ノ封書(カグウチ)……0930
憤怒ノ鎖斧(カグウチ)……0848

**【スノウホワイト】**


傲慢ノ禍剣(ウラウチ)……0900
傲慢ノ血剣(カゲウチ)……0915
強欲ノ翼鎌(カゲウチ)……0681
色欲ノ秘杖(カゲウチ)……0861
正義の意思……0675
正義の弩……0587
正義の大鎌……0286
正義の賀正笛……0735
正義の十字弓……0450
正義の書……0427
正義の白弓……0410
正義のゾウフ……0311
正義の大剣……0672
正義のツヴァイヘンダー……0719
正義の釣り竿……0386
正義の提琴……0361
正義の鉄槌……0174
正義の白杖……0313
正義の旗槍……0852
正義の魔具……0522
憤怒ノ蒼槌(カゲウチ)……0819


**【赤ずきん】**


今剣……0400
色欲ノ紫杖(カゲウチ)……0628
暴力の意思……0375
暴力の弩……0510
暴力の凶器……0314
暴力のキンソク……0898
暴力の金欲槌……0878
暴力の黒斧……0550
暴力の刺又……0331
暴力の書……0177
暴力の戦輪……0194
暴力の竪琴……0368
暴力の杖……0818
暴力の錨弦……0967
暴力のロスター……0718


**【シンデレラ】**


傲慢ノ罪刀(カゲウチ)……0781
強欲ノ爪槍(カゲウチ)……0935
嫉妬ノ拳銃(カゲウチ)……0623
卑劣の意思……0508
卑劣の大槌……0256
卑劣のカシ……0795
卑劣の金欲笛……0882
卑劣の拳銃……0315
卑劣の黒銃……0717
卑劣の杖……0486
卑劣の帆弓……0969
卑劣の刃……0021
卑劣の槍……0419
卑劣の喇叭銃……0342
卑劣の狼弦……0668
舞扇……0401


**【ピノキオ】**


依存の意思……0674
依存の木槌……0316
依存の杖……0575
依存の釣り竿……0387
依存の剣……0461
依存のビリョウ……0794
依存の笛……0190
依存の魔具……0914
依存の魔書……0103

依存の弓……0632
依存のリース……0733
依存の緑鏡……0807
大食ノ禁書（カゲウチ）……0602
怠惰ノ土笛（カゲウチ）……0808
憤怒ノ鉄球（カゲウチ）……0749

【人魚姫】

傲慢ノ赤剣（カゲウチ）……0570
強欲ノ共鳴鎌（カゲウチ）……0959
嫉妬ノ小銃（カゲウチ）……0825
悲哀の意思……0390
悲哀の大鎌……0302
悲哀の狩弓……0667
悲哀の黒琴……0612
悲哀の銃……0320
悲哀の書……0478
悲哀のジョレン……0501
悲哀の竪琴……0189
悲哀の杖……0423
悲哀の剣……0175
悲哀の鉄球……0546
悲哀の魔具……0874
悲哀の竜騎士槍……0983

【グレーテル】

虚妄の意思……0436
虚妄の大槌……0301
虚妄の寄生書……0515
虚妄のコウガイ……0551
虚妄の狩猟弓……0213
虚妄の書……0617
虚妄の短剣……0586
虚妄の杖……0352
虚妄の剣……0318
虚妄の提琴……0047
虚妄の槍……0650
傲慢ノ断刀（カゲウチ）……0963
強欲ノ漆槍（カゲウチ）……0764
色欲ノ月杖（カゲウチ）……0692
嫉妬ノ蛇弓（カゲウチ）……0855
大食ノ奇書（カゲウチ）……0538

【いばら姫】

エレフィムのハープ……1000
色欲ノ蕾杖（カゲウチ）……0812
嫉妬ノ華銃（カゲウチ）……0865
睡眠の意思……0507
睡眠の円匙槍……0830
睡眠の斧……0817
睡眠のクマデ……0500
睡眠の黒杖……0454
睡眠の銃……0317
睡眠の書……0673
睡眠の大剣……0294
睡眠の杖……0563
睡眠の笛……0619
睡眠のマナコ……0552
睡眠の槍……0255
大食ノ棘書（カゲウチ）……0942
怠惰ノ花笛（カゲウチ）……0753
憤怒ノ蒼根（カゲウチ）……0773

【かぐや姫】

傲慢ノ曲剣（カゲウチ）……0677
色欲ノ骸杖（カゲウチ）……0840
大食ノ巻物（カゲウチ）……0729
怠惰ノ三線（カゲウチ）……0866

被虐のイコツ……0897
被虐の意思……0574
被虐の賀正書……0737
被虐の黒剣……0666
被虐の銃……0705
被虐の侵略杖……0659
被虐の杖……0104
被虐の鉄球……0360
被虐の薙刀……0319
被虐の琵琶……0511
憤怒ノ離槌(カグウチ)……0970

【ドロシー】

傲慢ノ薬剣(カグウチ)……0941
強欲ノ嘴槍(カグウチ)……0709
嫉妬ノ狙撃銃(カグウチ)……0824
怠惰ノ六弦琴(カグウチ)……0769
探究の意思……0411
探究のウクレレ……0446
探究の学術書……0321
探究の棍棒……0643
探究の大剣……0545
探究の注射器……0273
探究の杖……0496
探究の提燈杖……0831
探究のパラソル……0593
探究の槍……0654

【三匹の子豚】

暴食の黒駒……0899
暴食の白魔杖……0982
暴食の侵略槍……0658
暴食の杖……0518
暴食の粉砕機……0482
暴食の六絃琴……0713

【アラジン】

成金の王杖……0955
成金の賀正刀……0736
成金の銀槍……0796
成金の銀槌……0870
成金の書……0639

【ラプンツェル】

純潔の珊瑚杖……0968
純潔の治杖……0910

# 作者一覧

ウェポンストーリー

Weapon Story Writer LIST

ヨコオタロウ

マツオリョウキ

前田翔悟
(株式会社ポケラボ)

黄之瀬永昊
(株式会社ポケラボ)

松村祐志
(株式会社ポケラボ)

成富正基
(株式会社ポケラボ)

倉持元季
(株式会社ポケラボ)

原崎あかね
(株式会社ポケラボ)

谷崎央佳
(シナリオ制作会社名文路)

瀬戸涼一
(株式会社エレファンテ)

恵莉ひなこ
(株式会社エレファンテ)

木尾寿久
(株式会社エレファンテ)

吉田タカノ
(株式会社エレファンテ)

播磨つな
(株式会社エレファンテ)

名田　寛
(ストーリーライダーズ株式会社)

東　健太
(株式会社スクウェア・エニックス)

松尾勇気
(株式会社スクウェア・エニックス)

和田侑樹
(株式会社スクウェア・エニックス)

# 武器ノ物語 SINoALICE Weapon Story

© 2017-2022 Pokelabo Inc./SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

企画・制作　株式会社スクウェア・エニックス
編集長　大矢和裕
編　集　佐藤雅美
制作業務　柄澤徹／大岡俊裕／酒井耕

原案　ヨコオタロウ

デザイン・DTP　株式会社 東海創芸
福原聖／山崎久美子

協力　株式会社ポケラボ／グリー株式会社
株式会社タイトー／株式会社バンダイナムコフィルムワークス

デジタル版　Ver.1.00
2022年7月1日　Ver.1.00発行

発行所　株式会社スクウェア・エニックス

<ページ抜け・誤植・内容についてのお問い合わせ>
スクウェア・エニックス　サポートセンター　http://sqex.to/jp_manga_support

<ビュワーの不具合・再ダウンロードできない等、販売に関するお問い合わせ>
本作品を購入された電子書籍書店のサポートセンターにお問い合わせください。

本作品の内容の一部あるいは全部を、著作権者、出版権者等の許諾なく、転載、複写、複製、公衆送信(放送、有線放送、インターネットへのアップロード)、翻訳、翻案等を行うことは、著作権法上の例外を除き、法律で禁じられています。
これらの行為を行った場合、法律により刑事罰が科せられる可能性があります。

© 2022 SQUARE ENIX CO.,LTD. All Rights Reserved.

SQUARE ENIXおよびSQUARE ENIXロゴは、日本およびその他の国における株式会社スクウェア・エニックス・ホールディングスの商標又は登録商標です。